

宮戸島の提督と仲間達のお気楽日記

高菜ニーサン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東北の地宮戸島を舞台に織り成すチート駆逐艦電と

やる気のあまりない提督高菜直哉二等陸佐↓一等陸佐↓陸准将補と周囲の仲間たちのお気楽鎮守府運営記（第一期）

中学生提督の笹野愛と仲間たちのお気楽鎮守府運営記（第二期）

■改題しました

旧題「宮戸島のお気楽提督と電」

不定期更新

※感想には必ず目を通し、可能な限りお返事させていただきます。

※整合性の取れない部分は後だし有効で直す場合があります。

※多少の矛盾は大目に見ていただけると幸いです

※更新が遅くても怒らないでください

※拙作中学生提督日記 (<https://syosetu.org/novel/162326/>) とリンクするエピソードもあります。

※アンチ・ヘイトは保険です

目次

はじまり	1
お夕飯	6
いつもの朝	11
お呼び出し〜東京へ〜	16
キズアト	21
自由と責任	26
島の新生活	31
ミニパーティ	37
レッツ！ナイトダンス！	44
給料日のお楽しみ	51
姉弟と親友	57
報道過熱の大砲撃―スーパーノヴァ―	63
サプライズブライダル	71
新生活	79
東京への旅	85
晩餐会、そして……	92
神通の家出	99
サプライズバースデイ	105
双子	111
その名は薄雲	118
季節外れのアイス出張販売	124
獣耳注意報	132
お鍋パーティ	137

幕僚会議	144
海沿いを歩く	151
深海よりの警告く月夜の密会く	157
作戦阻止の攻防	161
健太君と愛ちゃん	167
避難訓練	172
思い出の着任日	179
その名も連装砲ちゃん	184
クリスマス・パーティー	192
大晦日	199
異譚『裏の警務隊』編	
Capture1く結成く	207
Capture2く始末く	218
Season1／2019年編	
アイキャンフライ	223
そうだ、浜松に行こう	231
浜松鎮守府で	239
宮戸島大騒動く逆襲の神谷く	246
旅立ちく新たな提督の前奏曲く	256
圭一の恋物語く激闘編く	266
番長と愉快的仲間たちの東京旅行記①	277
番長と愉快的仲間たちの東京旅行記②	286
岩沼鎮守府の騒動	296
岩沼鎮守府の騒動Ⅱ・幕間狂言	306
岩沼鎮守府の騒動Ⅲ・花梨がやって来た日	312

岩沼鎮守府の騒動Ⅳ・E p i l o g u e	320
査察がやってきた！Ⅰく足立将補の憂鬱く	328
査察がやってきた！Ⅱく足立将補の査察く	333
兄と妹の狂想曲	340
東北警務隊員の憂鬱	348
変わる政治	355
気仙沼鎮守府の平和な(?)一日	360
番外編：夏の海の向日葵	368
南三陸大騒動	375
デスペラン要塞の一日	381
泰子さんの憂鬱	388
師匠襲来	395
真夏の夜の夢	403
実家へくL a b y r i n t h L i b r a r yく	411
球磨、自衛隊やめるってよ	418
番外編：夏の海の向日葵Ⅱく365回目の告白く	427
総理大臣来訪	435
不敗の女神様と導き手	442
メカいなづまちゃん騒動(前編)く宮戸島鎮守府壊滅く	449
メカいなづまちゃん騒動(後編)く宮戸島沖会戦く	457
這い寄る子曰	466
大貫悟伝・序章く新たな鎮守府く	473
番外編：それいけ浜松警備保障	480
知識の蒐集者	488
番外編：フルアーマーアルティメットいなづまちゃんV S デビルメ	

	カいなづまちゃん 南海の大決戦	496
	源一郎とサイン会と作家への道	506
	番外編：それいけ浜松警備保障Ⅱ～新入社員～	513
	番外編：それいけ浜松警備保障Ⅲ～新人研修～	520
	それぞれの進路と秋の空	528
	タイラントハンティング～作戦準備編～	536
	タイラントハンティング～作戦実行編～	542
	圭一の苦悩	550
	熊崎提督がやって来た～岩沼編～	558
	スペシャル「圭一の苦悩と決断～史絵との愛～」	565
	熊崎提督がやって来た～南三陸編～	573
	クリスマスのできごとin土佐①	581
	クリスマスのできごとin土佐②	589
	クリスマスのできごとin土佐③	598
	クリスマスのできごとin土佐④	607
	お引越し&大晦日	615
Extra Season／浦の星鎮守府編		
	邂逅	622
	演習	630
	出撃	647
	決戦	653
	防衛戦	660
	再戦―Side：N―	666
	帰還～未完の大貫悟伝～	673
Season 1／2020年編		

圭一たちの受験勉強	679
受験戦争	684
番外編：明石の真面目な研究	693
INSANEく反逆の硫黄島要塞①く	698
INSANEく反逆の硫黄島要塞②く	705
望の最終決戦！	715
おしまい	721
2nd Season 2020年編	
さいかい	725
浜松警備保障、宮戸島へ	731
土佐鎮守府来訪く忍さんの迷いと葵たちの軌跡く	737
着任！問題児	743
バリフリ！くBarrier free Lifeく	749
国防軍への道	753
薄雲の奮闘記く海賊の脅威く	756
それいけ浜松警備保障！く三隈の結婚生活く	764

Season 1 / 2018年編

はじまり

2011年3月11日、人々から『悪夢の日』ナイトメア・デイと呼ばれるその日がやって来た。

突如世界中の海に、『深海棲艦』と呼ばれる化物バケモノが現れたのだ。

その化物は、何故か日本を集中的に襲い、次々と護衛艦が沈んで行った。

日本はもう終わりか？そう誰もが思ったその時、

艦娘と呼ばれる存在が次々に現れて、深海棲艦と戦い始めた。

海上自衛隊は、その艦娘達かんむすに協力を約束し、全国に鎮守府ちんじゆふと呼ばれる拠点を作り、

陸海空三自衛隊自衛官の中から、艦娘と親和性のある人材。

つまりは、艦娘と共に顕れた妖精さんたちが見える存在を選抜し、「提督」ていとくとして送り込んだ。

その戦争が始まって、もう七年が経過していた。
高菜直哉たかななおや二等陸佐は、この時38歳。防衛大学校を優秀な成績で卒業し、

普通科に配属され、イラク派兵等も経験している自衛官である。

だがこの男、普段のやる気の無さと必要に迫られた時の勤勉さに非常に落差のある男で、上官としても扱い辛い男だった。

たまたま着任していた宮戸島の島民避難計画を策定し、一人の犠牲者も出すことなく宮戸島脱出計画を実行し、

「宮戸島の英雄」と、呼ばれることになってしまった。

二等陸尉から、一等陸尉をそのままスルーして三等陸佐への昇進となった。

そんな英雄だが、この男、普段はやる気が全くなかった。

そんな彼にも、当然ながら適性試験の通達がやって来た。

試験と言っても簡単である。妖精が見えるか見えないか、だけである。

要は簡単である。見えてしまったのだ。

彼の上官は大喜びで、提督として秘書艦・電をパートナーに付け、奪還を果たした嘗ての活躍の地・宮戸島へと送り込んだのである。

傍から聞けばそうなるが、要は厄介払いである。そうして送り込まれて、数年が経っていた。

宮戸島では大歓迎で迎えられた。だが、英雄としてではなく、『街の人気者』としてである。

そう、英雄っぽさが一切皆無だったのだ。

「高菜二佐、今日も出撃して来たのです」

宮戸島鎮守府……といえは聞こえはいいが、艦娘一人に、提督一人、あとは妖精さんという、寂しい施設。

その司令官執務室の、エグゼクティブチェアに凭れ掛かって眠っているのが、高菜二佐である。

「高菜二佐、起きるのです！」

ちやきつと主砲を向けると、危険を感じはつと目を覚ます高菜二佐。

「はっはっは、おかえり」

朗らかに笑う高菜二佐に、電は大きな溜め息を吐いた。

この電、着任時から最強練度の艦装を持って生まれた、所謂バグやチートの類なのである。

あまりにも優秀過ぎるこの秘書艦・電に、一切合財をお任せして居るのである。

そして、優秀過ぎるが故に、彼女に最高の装備を回しているが為に、増員の必要性を感じなくて、今の所艦娘は電一人である。

「うん、今日も無傷で元気で何よりだねえ」

「なのです！」

にこやかに褒めると、電は笑顔に戻る。

周囲を見回すと、妖精さんが報告書を書いたり、大本営に連絡を取ったり、雑務を全てやっている。

高菜二佐がやることは……

電の出撃までで、彼女が出撃してしまうと特に無いのである。他の

提督は、部隊指揮やら資材運用やらで頭を悩ませているが、

そんなものはすべて妖精さんや電にお任せ、暇を見つければ筋トレをやって昼寝をする毎日、なのである。

制服には一応、レンジャーやら冬季遊撃レンジャーやら空挺やらの徽章をつけている為、優秀な男の筈なのだが、

必要に迫られないと、特にやることも無いのである。

そんなタツグが、ずっと続いていた。

周囲は、宮戸島鎮守府を弱小鎮守府と嘲笑っているが、要求される以上の戦果は収めている。

とにかく、この電はトチ狂った性能なのだ。

攻撃は避けるわ、砲撃は当てるわ、魚雷は当てるわ、戦艦ル級程度なら撃沈できるわ、敵艦載機の攻撃すら楽勝で避けてしまう。そして、目的を達成したら速やかに撤退する。

『宮戸島近海域の迎撃』を主任務としている、彼の任務から言えば上出来の部類なのだ。

本人曰く「給料分の働きさえしていればいい、功を焦ると碌な事はない」のである。

寧ろ、調子に乗った大艦隊を従えた提督の方が、功を焦り過ぎて前に出過ぎ、轟沈する艦娘を出してしまうのだ。

轟沈した艦娘を出した鎮守府は、艦娘からの信頼を失う。艦娘とて心のある存在なのだ。

他には、性的暴行を加えたりする輩も、時にはいる。戦果主義で、艦娘を人扱いしない連中もいる。

提督には指揮命令システム命令強制権がある為、艦娘は反抗できないのだ。

そういった連中は、定期的な査察で排除されるが、完全に取り除ける訳ではない。

そういう連中は、ブラック提督だのブラック鎮守府だのと言われている。

高菜二佐は、そういった指揮命令システムを忌み嫌い、電の裁量に任せつつ、楽に確実に勝たせる指示を出すのだ。

それが「楽そうに」出来るのが、彼の戦術・戦略的センスである。

高菜二佐に対する妖精さんの信頼が篤いのは、やるべきことをきちんとやってから、昼寝をするからである。

戦略を立てて、戦術に落とし込み、的確な攻撃指示と撤退条件を定める。

万一の場合は、いつでも連絡するように言い聞かせる。

そして、苦手な書類仕事や大本営の連絡は、事務妖精さんに全部丸投げする。

妖精さん達にはいつも、アイスを買って買収しているのである。

「いつも済まないね」

と謂いながら、アイスを購入しては振る舞っている。

常に、電に『楽に勝たせる』戦略を取り続ける彼を、周囲は給料泥棒と忌み嫌っている。

だが本人は、「これも給料分のうちさ」と、呑気に取り合わない。

「さて。無事帰ってきたご褒美に、アイスを用意してあるよ。今日は抹茶味だよ」

「わあ、有難うなのです！」

そしてこの電も、アイスに釣買収られる一人である。

「戦況はどうだい？」

「毎度毎度、敵を引き連れて撤退して来る間抜け共の尻拭いなのです」

電は、アイスを食べながら溜め息を吐く。

「まったく。どいつもこいつも、面倒事を押し付けなくてももらいたいな。」

電が淹れてくれたコーヒーを飲みながら、こちらも大袈裟なため息を吐く。

「提督だつて寝てるのです」

「いやあ、やることはやってるさ。給料分のことだね。私は給料分以上のことをするのが大嫌いでね？」

「相変わらず、やる気のなさそうなお答えなのです」

「それでも、周囲の艦隊の動きをチェックしながら、作戦計画は立てて

るんだよ?」

形だけジト目で見る電に、肩を竦めて自身を弁護する高菜二佐。

「まあ、楽しんで勝てれば言うこと無いのです」

電は理解している。楽に勝たせるために、情報分析や事前調査をキチンと整えているのは。

「逃げてくる艦隊の提督が『戦果の横取り』だの言っているが、まあ言わせたいやつには言わせておいてよろしい。だったら自分達の艦隊でどうにかすればいいだけ、の話さ」

「なのです」

二人共充分に毒を吐き終えたところで、時計を見ると1750。ヒトナナゴーマル

「さあ、お夕飯おゆはんにしようか、いつもの大衆食堂めしやでいいかい?」

「はいっ」

二人して、宮戸島のいつもの食堂に向かうのだった。

お夕飯

何時もの夕飯時、電と二人でやって来る大衆食堂。

「いらっしやい、直さん」

食堂のおばちゃんが声を掛けると、食堂で飯を食っている島民達が、彼の周りに集まる。

「おっす直さん」

「高菜さん、今日も夫婦で飯かい？」

「夫婦じゃない」のです」

からかいの言葉には、ハモっての反論である。

「それじゃあ、日替わり定食と、ビール。電は？」

「電は唐揚げ定食と烏龍茶なのです」

それぞれが思い思いの注文をすると、おばちゃんは「あいよっ！」と元気良く返事をする。

「直さん、最近の情勢はどうだい？漁に出れそうかい？」

宮戸島の漁師であるおじさんが、心配そうに訊いて来る。

今の所、宮戸島海域での漁が可能な状態にまで、電一人でやってくれているのである。

「いやあ、近海なら出ても問題ないんじゃないかなあ。ただ、周りのアホ共が敵を引き連れて来るから、無理せず、レーダーが反応したらすぐ逃げるんだよ？」

高菜二佐は、制帽を取って頭を掻きながら応える。

「あいよ。若いもんにも言っただけ聞かせてるからよ」

彼等も、立派な防衛隊なのである。

漁に出るついでに深海棲艦を発見すると、直ぐ様宮戸島鎮守府に通報して、電が向かうのだ。

大抵は、周囲の提督が無理をして敵諸共撤退することが多く、その尻拭いの方が多いが……

「そうだ。高菜さん、電ちゃん、今度またお菓子を作って持って来ますからね？」

「いやあ、いつもすみません」

「有難うなのです！」

そう言つて来るのは、鎮守府の近くに一人で住んでいる、おばあちゃんである。

夫は護衛艦の艦長で、深海棲艦との戦いで戦死したのである。

宮戸島脱出作戦の時には、島民の古株として皆を纏め上げ、脱出するのに成功した功労者でもある。

趣味のお菓子作りは、「ボケ防止を兼ねて」と、本人が言いながら、電とおまけで高菜二佐の為に作つて来てくれるのである。

高菜二佐は、街では人気者扱いで、街を歩くだけで、誰彼なく声を掛けられる。

「やあ、直さん」

直さんというのは、彼のニツクネームでもあり、大抵直さんで通つてしまう。

いつもお昼前に、電と妖精達のアイスの買い出しに現れる彼には、島の皆が、信頼と敬意を持って接してくれている。

約1200人の生命を救った英雄らしからぬフランクな態度で接する高菜二佐は、親しみ易い人気者なのだ。

決して、御大層な英雄なんかでは無かった。

夕食が出されると、電と乾杯をしてビールをぐいっと飲む。

「提督は飲み過ぎないでください」

そう、チクリと釘を刺すのを忘れない。

「まあ、そう言わないでくれよ。私だって、労働後の一杯を生き甲斐にしているんだから」

「そういうのは、勤勉に働く人が言つていいセリフなのです」

少し膨れっ面で言う電に、皆がどつと笑う。

「いやあ、私はあの脱出で、勤勉さというものを忘れてしまったんだ。いいじゃないか、主任給料分務、つまりは宮戸島海域の海の安全を守ってるんだから。……安全を乱しているのは、周囲のアホだが」

最後はぼそつと、電から目を逸らして呟く。

「ちげえねえや、高菜二佐が指導してやったらいいんじゃないか？」

「いやあ、それでも相手は先任の二佐殿だからね？私ごときが指導な

んで、恐れ多くてとてもとても」

漁師のおっさんが、耳聴く最後の眩きを聞いて大笑いすると、高菜二佐も苦笑して肩を竦める。

実際、隣接鎮守府の桐山二佐は優秀な戦果を収めているのだ。ただ、ちよつと無理をする事が多いだけなのだ。

その尻拭いをして、戦果を横取りする形になってしまっている宮戸島鎮守府とはソリが悪い。

噂では、ブラックなんじゃないか？と言われていているが、前回の査察では問題は無かつたらしい。

「まあ、私達の主任務は果たしてるんだ。戦果の横取り、と言うならそれでもいいさ」

「なのです」

高菜二佐の言葉に、電も同意する。

食事を終えると、二人して歩いて帰る。

「今日も満腹なのです」

「いやあ、あそこの食堂の料理は絶品だからねえ。毎日通いたいもんだ」

「いつもながらなのですが……お給料大丈夫なのですか？」

ふと尋ねる電に、ぽんと頭を撫でる。

「それなりにお国からお給金を頂いてるからね。電が心配しなくていいよ。いつもいつも、心配させて済まないね？」

「全くなのです。高菜二佐は、電がいなかったら、ただのおじさんなのです」

ふんすと鼻息を荒げて言う電に、肩を竦める高菜二佐。

「全くだ。君がいてくれるから、私も随分楽ができる」

「ふふつ。電と、高菜二佐の準備のおかげなのです」

そう言つて、電はそつと高菜二佐の手に触れると、ギュツと握つた。「ん？どうした？」

「今日は、手を繋ぎたい気分なのです」

「はいはい。かしこまりました、お嬢様」

おどけて見せる高菜二佐に、電もふつと笑う。

争いばかりの日常、この一時だけは争いを忘れる事ができるのだ。
……何事もなければ……

Trrrrrr……

携帯電話が鳴る。はっと顔色を変え、ポケットにある仕事用の携帯電話を取り出すと、

「ハイもしもし、高菜です」

と電話に出る。

『もしもし！今、深海棲艦を見つけた！艦娘隊やっ等はスルーして行きやがった！夜釣り隊は緊急避難してる！イ級だけで、こっちは逃げ切れそうだ』

漁師達からの緊急電話である。

「了解」

大きな溜め息を吐くと、手を繋いだ電に、

「仕事だ。夜警中の筈のあの桐山二佐が、またイ級を無視したらしい。すぐに向かおう」

「またなのですか……全く……」

「二面倒事を押し付けないで欲しいな」のです」

そう、同時に言うのと、二人は顔を見合わせてふふっと笑った。

「とにかく急ごう」

「はい！」

二人は、手を繋いだまま宮戸島鎮守府に戻って行った。

「全く、超過勤務なのです」

「本当だね」

宮戸島鎮守府にやって来た漁船に乗せてもらい、電と共に緊急出撃する。

イ級自体は速やかに駆逐したものの、漁師達の憤りを宥めるのに骨を折った。

憤りの矛先が、決して高菜二佐に向かって来ないのが、唯一の救いである。

宮戸島鎮守府から、歩いてすぐの場所に食堂があるから、すぐに戻

れるものの、

こういうイ級を放置するのは、いい迷惑なのだ。

艦娘にとつては、雑魚で戦果も大したことがない相手でも、漁師達にとつては脅威、死活問題なのだ。

宮戸島鎮守府に帰り着いた二人は、大きな疲労感と共に、一応大本営に報告を入れる。

一応は注意をしてくれるが、守られた試しがない。相手側も、逃げられたと主張して終わってしまう。

「これも給料分の内かな？」

「なのです」

二人で見合わせて軽く笑うと、高菜二佐は妖精さん達に書類仕事を任せ、入浴してさっさと寝てしまう。

電も後からお風呂に入ると、もう既に寝てしまっている、高菜二佐のベッドに潜り込んで眠る。

これで再び、緊急事態がなければ一日はおしまい。翌朝、また電は出撃して行くのだ。

今の所7勤0休。休みは一応日曜日の筈なのだが、まず間違いなく緊急出動があつて、休みなんてものは存在しないのだ。

ある意味ブラックな鎮守府である。

「昼寝くらいしなきゃ、とてもじゃないがやってられないよ」

その鎮守府の責任者は、こうぼやいている。

いつもの朝

ピピピッ………ピピピッ………

枕元の目覚まし時計が寝室に鳴り響く。

この夜は、何事も無く過ぎ去ったようだ。

電は、隣で司令官である高菜二佐が眠っているベッドからモソモソと起き上がり、目を擦る。

パジヤマ姿で、枕元の仕事用携帯の着信を確認する。

着信はなく、メールも特に来ていないようだ。

「ああ、良かった」

——面倒事が起きてなくて。

そう心から思った電は、夜の安眠を守ってくれた艦娘の神に感謝を捧げる。いるかどうかはわからないが。

まだ寝息を立てて眠っている司令官を放っておいて、官舎にあるバスルームでシャワーを浴びるのだ。

官舎と言っても、鎮守府庁舎という名の執務室と応接室の二部屋しかない建物の隣に、取って付けたような1LDKの平屋である。

艦娘を増やす為には、まずこの、官舎と言えるかわからない建物を拡張するか、艦娘寮を新設する必要がある。

二人揃っての結論は、

「今の所、そんな資材も予算も無駄」なのです」
である。

高菜二佐自身増やす気はなく、電も僚艦を迎える気はさらっさらないのだ。

いつも、熱めのシャワーを浴びて身体を覚醒させる。

残っていた眠気も、これで完全に消し飛んで行く。

そして、脱衣場に用意しておいたバスタオルで、身体を隅々まで拭っていく。

それから、何時もの曉型制服に着替え、髪をドライヤーで乾かして寝室に戻ると、高菜二佐が起き上がる。

「おはようございます」

「うん、おはよう」

高菜二佐の格好はジャージである。ジャージを寝間着代わりにしており、眠そうにバスルームへと消えて行く。

電は、高菜二佐がバスルームに入っているのを見計らって、着替えとバスタオルを用意して脱衣場にそつと置く。

それからすぐに、リビングダイニングキッチン^Lに向かうと、朝食用のモーニングコーヒーを用意する。

コーヒーメーカーのミルが、コーヒー豆を挽く音がLDKに響く。そして自動的にお湯を沸かしてドリップしている間に、トースターにパンを二枚セットする。

セットしてから、ダイニングテーブルの椅子に掛けてあるエプロンを着けてキッチンへ向かい、ビールばかり入っている冷蔵庫の中から、隅っこに置いてある卵とベーコンを取り出し、

熱したフライパンにベーコンを敷いて、二つ卵を割り落とす。

そしてフライパンに蓋をすると、マグカップにインスタント卵スープを入れて、ウォーター・サーバーでお湯を注ぎ、ダイニングテーブルに持って行く。

すぐにキッチンに引き返すと、完成した目玉焼きを一つ目ずつに分離して、お皿に盛り付ける。

それをダイニングテーブルに置いて、焼けたトーストを一枚ずつお皿に乗せ、最後にサイフォンにドリップされたコーヒーを淹れるのだ。

高菜二佐が制服でやって来る頃には、トーストと目玉焼き、インスタントの卵スープとコーヒーが食卓に並べられている。

「いつも有難う。では頂こうか？」

「なのです」

その言葉と共に、食事が始まる。

高菜二佐はテレビのリモコンを操作して、テレビを点けると、スポーツニュースを見る。

「昨日も楽楽コンドルズは負けたか……相手がタイタンズなら致し方ないが……最下位にめり込んどるなあ」

「まだ五月末だと言うのに、自力優勝が危ういのです」

高菜二佐は、2004年のプロ野球再編問題で、新規参入した楽楽コンドルズを、創設時から応援しているのだ。

何年か前まではAクラス入りを果たしていたが、最近はてんで勝てていない。

野球をリアルタイムで見える時間があまり無く、あつたとしても緊急出勤等できちんと見れない為、

朝のスポーツニュースが、最初の情報源なのだ。

スポーツニュースが終わると、チャンネルを公共放送に切り替える。

深海棲艦の出現情報を、政府提供の番組でやる時間が、丁度スポーツニュースの後なのだ。

どこどこの海岸で出た等、避難指示や避難勧告等、各地の情報が提示される。

もちろん、司令官執務室に行けば見られる情報ではあるが、朝食中に把握して行くのも日課なのだ。

「東北は割と平和だね。こっから先海水浴が出来るか、は艦娘部隊の頑張り次第、ということだね？」

「なのです」

食事が終わると、二人仲良く出勤する。

ここからが、高菜二佐のお仕事時間である。

司令官コンピュータを確認し、周囲のレーダー情報を確認して、戦術案を立案するのだ。

そして宮戸島海域の艦隊の状況を確認しながら、どこの敵艦隊から対処するか、を考えるのだ。

「では朝礼を開始しようか？」

「はいー」

こうして朝礼を行うのだ。

と言っても、現在の状況をプロジェクター画面に、宮戸島周辺の敵情報を表示させながらだが。

「桐山艦隊は連合を組んでいるから、今日も進軍しそうだね。まあ、ま

た近くの漁場を荒らしてるイ級を退治しながら、桐山艦隊の様子を見ようか？」

「今日は、きちんと普通に撤退して来てくれれば、言うことはないのです」

そう皮肉を言いながら、電は近海エリアの敵のレーダー反応や、漁師達からの情報を元にした敵マップを、頭に叩き込む。

「そうだね。まあ、給料分だけの働きで十分だ。予期せぬことがあったら、きちんと連絡すること。慢心は禁物だ、わかったね？」

「了解なのです」

朝礼が終わると電は出撃して、高菜二佐はアイスを買いに出發ける。

既にこれが、午前中の日課となっている。

そうしてアイスを冷凍庫にしまい終わると、埠頭倉庫に設置してある私物の筋トレセットで、筋トレを始める。

事務妖精さんは今日もアイスを糧に忙しそうに仕事をしているが、妖精さん達からの信頼も篤いので、きちんと鎮守府運営が回っている。

工場妖精さんも、殆ど無傷で帰って来る電のおかげで暇を持て余して、最近筋トレセットのメンテナンスばかりやっている。

その頃電は、桐山艦隊が引き連れて撤退して来て、宮戸島海域に紛れ込んで来た戦艦ル級をボコボコにしている。

「面倒事を押し付けてもらいたくないのです」

等とぼやきながら。

そんな中、呑気な高菜二佐は筋トレを終えると、昼食をコンビニに買いに行ってから執務室で食べ終えて、お昼寝タイムに入る。

「てーとく、しよるいおわりましたー」

事務妖精さんの声でアイスを振る舞うと、妖精さん達が集まり喜んで小さな小さな自前スプーンで、アイスを分け合って食べ始める。

それを見守りながら、エグゼクティブチェアに凭れ掛かって微睡んで行く。

「高菜二佐！起きるのですー！」

と砲口を向けられるまで。

お呼び出し〜東京へ〜

何時も通りの朝、司令官執務室に二人で入って来ると、司令官コンピュータに、新着メールが入っていた。

入っているメールの内容を確認しつつ、コーヒーを飲みながら苦い顔をする高菜二佐。

「コーヒーが濃すぎたのですか？」

慌てて、申し訳なさそうにする電の頭を撫でて首を振る。

「コーヒーは美味しかったよ、有難う。東京への出頭命令が出たよ」

「東京………ですか？」

首を傾げる電に、軽く肩を竦める高菜二佐。

「君も出頭せよ、とのご命令だ。常装の準備をしてくれ。なあに、数日間なら優秀な桐山先輩が、カバーしてくれるだろう」

「余計なことをしなければ、なのですが」

電が皮肉たつぷりに言うのと、高菜二佐は司令官コンピュータで『出頭命令に付き、宮戸島に兵力増援を求む』と、桐山二佐にメールを送り付け、

自らも常装に着替える為、官舎へと戻って行く。

数時間後、業務車三号を運転する高菜二佐に、助手席の電。

高菜二佐の制帽の帽章は、桜が象られた陸上自衛隊の帽章。

右胸に、錨に桜のデザインの部隊章。艦娘本部、即ち大本営の部隊章である。

陸海空と、それぞれ別の艦娘本部用の部隊章が用意されている。

襟には普通科職種徽章、肩には二等陸佐の階級章がそれぞれ付けられており、

左胸には、幾つかの防衛記念章と格闘・冬季レンジャー・空挺・レンジャー・体力一級徽章が付けられており、胸ポケットには射撃徽章が付けられている。

複数もらった防衛記念章には、金銀の桜花が付けられている。

普段は、オリーブドラブの作業服に作業制帽、と言った出で立ちだ

が、ネクタイを締めて収まりの悪い髪を制帽に収めると、真面目な自衛官に見える。

助手席に座っている電も、暁型の制服に金色に輝く優秀艦娘徽章、防衛記念章を幾つか付けている。

戦闘中の制服とはまた違う正装である。普段は階級章と優秀艦娘徽章を襟に縫い付けているタイプなのである。

艦娘にもランクというものがあり、彼女は襟に三等海尉の階級章を付けている。

他の艦娘達が殆ど曹士階級なものもあるが、彼女以上というのは、横須賀鎮守府所属の総秘書艦大和二等海佐以下十数名だけである。

二等海士からスタートして曹を通過し、今や幹部と呼ばれる艦娘の一員である。

それだけの功績もあげて来ているのである。他の艦隊の尻拭いで。そんな彼女等が向かうのは、東京にある統合幕僚監部である。

東京の幕僚監部に到着した高菜二佐達は、とある応接室に通される。

ノックをして、

「どうぞ」

と言う女性の声が聞こえると、扉を開ける。

「高菜直哉二等陸佐、入ります」

「駆逐艦電三等海尉、はいるので…入ります」

一步部屋に入ると、スーツ姿の女性が応接室のソファに座っている。

隣には駆逐艦卯月が座っている。階級は一士である。彼女はあまり表情が無かった。

「高梨宮湊子内親王殿下、ご無沙汰であります」
たかなしのみやそうこ

「な……内親王殿下!? し、失礼しました」

高菜二佐が、背筋を伸ばして敬礼すると、電は目の前の相手に絶句し、慌ててビシッと最敬礼を行う。

そんな電を見て、高梨宮湊子はコロコロと喉を鳴らして笑う。

「余人は居ません。今日は、直哉君にお願いがあつて来て貰ったんで

すよ。学友らしく気楽にしてください」

「高菜二佐と内親王殿下は、ご学友であらせられるのですか？」

電の物言いに、湊子は笑いながら、

「余人はいませんよ、湊子で良いです。ともあれ、お掛けください」

「わかったのです、湊子様」

そう席を勧める、湊子の前には将棋盤が置いてあり、既に駒が並べられている。

「それでは失礼します、湊子様。……お話は一局をしながらと言うことですか？」

「そうなりますね」

コロコロと喉を鳴らしながら笑う、学友である相手に（ああ、面倒事だ）、と思う高菜二佐なのであった。

パチン

将棋は一手一手進んで行く。

「隣の『卯月』ですが、とあるブラック鎮守府から引き上げてきました。直哉くんにお任せしたいのですが？」

「そうは言ってもですね、官舎をどうにかしないことには……差し当たり、ベッドを増やせばなんとかなりませんか？」

その言葉を聞いて、電は卯月に近づいて手を握り、その手を擦っている。

パチン

将棋の一手を指しながら、高菜二佐が口を開いた。

「その鎮守府は、非道かつたのですか？」

「ええ、とても。重巡の子達は性的な対象と看做して、駆逐艦の子達にも暴力を振るっていたそうです。捨て艦戦法の常習で『定期査察』に引っ掛かり、原隊に送り返された後、強制性交と暴行傷害で、警務隊に逮捕されました」

電は、手を擦っていると腕にも痣があることに気付いて、

「失礼するのです」

と言って、制服を捲ってお腹を見る。卯月はすぐに隠すが、痣があるのを確認した。

「……………」

電は、優しく卯月の頭を撫でると、

「電なのです。よろしくなのです」

そう視線を合わせて笑顔を見せる。

「……卯月だぴよん」

暗い声で応える卯月。

パチン

「ところで、何だって私のところに？女性提督なら、他の鎮守府にいでしょうに？」

「確かにそれも考えたのですが、練度も高い直哉くんのところの電ちゃんにお任せするのもいいかな？と思いましたが、東北戦線なら、まだそこまで苛烈ではない、と聞きますよ？」

「まあ確かに。桐山先輩がボーンヘッドを犯して敵を連れて帰って来る事以外は」

その皮肉に、再び駒を動かしながらクスクスと笑う湊子。

「貴方なら、この子を沈めないだろうと確信しています」

「確信なさるのは湊子様のご自由ですが…微力を尽くします」

苦々しい顔をして、卯月を引き受ける返答をすると、湊子は真面目な顔になって二人を見回す。

「今までは、私の手元わたくしに『わがまま』で置いていましたが、いつかは戦場に戻さなくてはなりません。どうか、卯月をお願いします」

そう頭を下げると、電が慌てる。

「お、顔を上げてください。卯月ちゃんは電がきちんと守るのです！」

「まあ、今まで散々『お転婆な貴女』に困らされたことですし、面倒なお願いをされてももう慣れましたよ」

慌てて真面目に答える電と、軽い毒を吐く高菜二佐に、湊子はさも可笑しそうに笑う。

「あら、私の悪戯わたくしの数々は、『優秀な参謀』がいてのものですよ？」
「優秀な参謀……………」

その言葉に、お転婆な内親王殿下の『悪戯の数々』を支えた参謀が

高菜二佐
この男だと気づくと、ジト目になる電。

「ところで、高菜二佐がおやつやアイスを振る舞ったり、毎日外食しても平気な理由が判ったのです」

「ええ、直哉くんの家は貿易会社で、直哉くんは直樹さん、優衣ゆいさんの兄妹を持つ三男坊なんですよ」

電の言葉に、あつさり出自をばらす湊子に、大きな溜め息を吐く高菜二佐。

「その親父に、兄貴は会社を継ぐ、姉さんはどこか良家との縁談が約束されている、だったらお前は自由に生きてみる、と言われて入ったのが防衛大学校でね」

「漸く、口調も戻りましたね?」

楽しそうに笑う湊子に、苦笑いの高菜二佐。将棋盤はいよいよ終局に向かいつつある。

「実家の力は、あまり借りるつもりはないんだけど、姉さんが過保護でね。毎月小遣い銭を送って来る」

「優衣さんは、直哉くん大好きっ子ですからね?」

双子の姉である優衣もまた、湊子の学友なのである。

キズアト

卯月は、某ブラック鎮守府で暴力を受けていた。

「これは酷いのです……」

電は、湊子と高菜二佐が雑談をしながらもう一局始めたところで、卯月を隣室に連れて行き、改めて上着を捲り上げた。

お腹に、何度も殴られた痣が残っており、自己修復力の高い艦娘にここまで痣を残す、ということは、相当のボディブローを食らったのだろう、と推察され、苦い顔をする。

同じ体型の少女に見舞ったら、それこそ死んでしまう。

「卯月、話したくなかったら良いのですが、何をされたのですか？」

「……うーちゃんは悪くないぴよん」

涙ながらにそう訴える卯月に、優しく頭を撫でながら襟元の階級章を見せる。

「卯月は多分、悪くないのです。三尉の電が言うのだから、間違いないのです」

「三尉……すごいぴよん！」

涙を浮かべたまま、目を丸くする卯月に優しくソファアを勧める
と、おずおずと腰掛ける。

電の隣に座ると、卯月はポツリポツリと話し始めた。

「うーちゃんは、止めただけだぴよん。重巡のお姉さん達が、無理やりエッチされたのを……うーちゃんは知らなかったぴよん、ずっと遠征にばかり行かされてたから……優しくしてくれたお姉さん達が……泣いてたぴよん」

卯月は、たまたま遠征が早く終わって戻って来た所に、その『提督』に陵辱されている重巡艦娘の姿を見つけてしまったのだ。慌てて止めに入るも、指揮命令システムで阻まれ、地下営倉に放り込まれたのだ。

「それからうーちゃん、ずっと殴られてたぴよん。許してって言っても提督は許してくれなかったぴよん……それで、気を失うまで殴られ続けられたぴよん。……ハンマーで」

「ハン……!?いくら何でも艦娘でも死ぬのです!やっぱり卯月は悪くないのです!」

ガタツと立ち上がって声を上げると、ビクツと震える卯月。

慌てて腰掛けると、ぎゅっと抱き締める。

「ごめんなさい。電がいけなかったのです」

ゆっくり抱き締める。

「泣きたいなら泣くと良いのです、いくらでも付き合っただけです。どうせあの調子なら、あの二人は数時間は将棋に熱中しているです」

「っ……う……あ……」

「っ!!」

卯月は声を上げて泣き出した。重巡の娘達への助けられなかった謝罪の念を、殴られ続けた恐怖を、そして今助けられた安堵感を全て吐き出した。

卯月は何十分も泣き続けた。

電は、落ち着くまで抱き締めたまま、頭を優しく撫で続ける。

電の制服は、卯月の涙で濡れている。それでも優しく抱き締めたまま頭を撫で続けた。

漸く落ち着いた卯月が顔を上げると、またポツリポツリと話し始める。

「それで、目を覚ましたら重巡のお姉さんが、鍵を開けてくれたびよん。でも、提督に見つかってハンマーで顔を殴られたびよん……うーちゃんは必死で逃げたびよん。逃げて逃げて、でも、提督の部下に捕まったびよん……うーちゃんはまた地下室送りだったびよん……そこで服を脱がされて……」

じわつと涙を浮かべた卯月に、電は、

「もういいのです、これ以上言わなくて良いのです」

そう遮ると、コクリと頷いた。

「もう、ここで死ぬんだ。そう思った時だったびよん……艦娘本部大本営の足立一佐が、定期査察にやって来たびよん。でも『定期査察』って事前に連絡があるのに、連絡とか来なかったびよん」

足立一等陸佐。警務隊一筋の男であり、大本営編成後には警務隊長

として、各鎮守府に査察に入る。

彼の人となりは「ザ・常識人」。堅苦しく、常識が服を着て歩く男に皆、苦手意識を持つ。

だが、常に公平で中立な立場に立ち、規範とルールと言う枠を片手に、常に綱紀肅正を図っている男である。

「……足立一佐達は、連絡不行き届きで、定期査察の連絡を忘れた、と言っていたぴよん……でも、丁度うーちゃんが……その……の時、激おこの足立一佐はその提督の部下を捕まえて、艦娘の皆にも話を聞いたぴよん。それで原隊に送り返す、つて皆連れて行つたんだぴよん……」

その後、原隊に於いてそれぞれ逮捕された、と言うことなのだろう。「重巡のお姉さん達は、新しい提督がやって来て復帰したけど、うーちゃんはその提督も怖くて怖くて、海に出れなくなつたぴよん。そんなうーちゃんを、視察にやって来た殿下がお話を聞いてくださり、『こんなに可愛い娘なら、差し当たり私の傍わたくしに置きます』つて言い出して……」

その型破りな湊子の言葉を聞いた電は、率直な感想として（ああ、類は友を呼ぶんだ）と思った。

「そうだったのですね……それで、今度は高菜二佐のところへ……なるほど」

「電三尉、あの高菜二佐つて人はどんな人ぴよん？怖い人ぴよん？」
そう問われると、暫し間を置いてからふふつと笑い始める電。

キョトンとする卯月に笑みを向けると、電は、

「あつちの音が聞こえない、ということとは防音室なのです。なら、こつちの言葉も聞こえないから、余すところ無くお伝えするのです」

そう前置きしてから、今度は背中をポンポンと叩いて離れて、電が語り出す。

「まずは、怠惰の人なのです。書類は妖精さんに丸投げする、午前はお買い物をして、筋トレをして。午後は、電が帰って来るまでお昼寝三昧の人。或いは、気に入った書物を読み漁っている。今は電子書籍が多くて、タブレット一枚で読めるから場所を取らなくて便利だ、と

言っている電子書籍派の旗印を自称している人」

「ダメ人間だぴよん…」

その言葉に、ポカーンとした顔になる卯月。

「次に、英雄に見えない英雄。宮戸島の人の命を救った英雄だけど、皆英雄とは思わない。親しみ易い街の人気者。ただの人気者のおっさんなのです」

「……………」

その言葉を聞いている卯月に、愛おし気に更に語る。

「最後に、真摯で誠実な紳士。高圧的な力を最も忌み嫌って、指揮命令システムを最初から使わないどころか、勝手に自分の司令官端末から削除までしてしまうほど。一度だけ電が大ピンチに陥った時に、84mm無反動砲（B）を持ってミニガン付きのモーターボートで助けに来てくれた、電にとっても英雄」

「でも、人間に深海棲艦は……………」

「攻撃は効かないのです。……原因は、電の慢心なのです。姫を連れ帰った桐山艦隊の対処に向かった時、周囲の艦隊に助けを呼ばなかったのです。提督に周囲の艦隊と連携して対処しなさい、って言われたのに……さすがの電もピンチになって、慌てて助けに来てくれたのです。ロケットランチャーと機関砲で注意を逸らして、アシストしてくれました。そして時間を稼いで、周囲の艦隊と連携して、姫を沈めることが出来たのです」

その言葉に、卯月は嬉しそうに語る電に問い掛けてみた。

「電三尉は、提督のことが……………」

「うふふ、ひ・み・つなのです。ただ、あの時高菜二佐は、電に絶対的な信頼感を植え付けることになったのです」

「やっぱり提督が大好きだぴよん」

漸く、卯月にも少しだけ笑顔が浮かんだ。

「うふふ。ただ、そういうことに鈍感な高菜二佐は絶対気づかないのです。だから、高菜二佐には秘密なのです。本人が気づくまで」

「了解だぴよん！」

びしっと擬音の付くような敬礼をする卯月に、電は笑みを返すの

だ
っ
た。
。

自由と責任

「高菜二佐、湊子様。卯月は、こちらの鎮守府に来てくれる、と言うことなので」

将棋の駒音が聞こえる部屋。戻って来た二人はそれぞれ、さつきまで座っていたソファに座り直す。

「そうですか、それは良かったです。卯月、宮戸島でも元気にやってくださいね」

「ぴよん、湊子様とお別れは寂しいぴよん」

少し寂しそうな声をするも、湊子は手に持っていた竜王を盤面にパシンと置くと、悲しそうに笑う。

「やはり、わたくし私がいつまでも守ってあげることが出来ません。ごめんなさいね」

「とんでもないぴよん！湊子様は良くしてくださったぴよん」

その言葉に、首をブンブンと振る卯月。

「なら、宮戸島鎮守府でも頑張ってくださいね」

「はいー」

力強く返事をする卯月は、さつきとは違っていた。

きつと電が、彼女の心を解き解してくれたんだろう、と高菜二佐は笑う。

「折角ですから、実家に立ち寄ってはいかがですか？」

「いいや。どうせ今は、兄貴に会社を任せて自宅でのんびり、一人悠々自適に書物に埋もれてるだろうから、いつでも会えるさ」

その、一人暮らしと言う言葉に、首を傾げる電。

「お母様はいらっしゃらないのですか？」

「亡くなったよ、だいぶ前に。ガンだった」

その言葉で、申し訳無きそんな顔をする電に、高菜二佐が頭を撫でる。

「人はいつか死ぬんだ。気にしなくていいよ。さて、我々は御暇させていただくよ。湊子様、ではまた何れ」

「ええ」

そう言つて、制帽を被り直すと立ち上がった。

「さあ、行くよ。卯月もよろしく頼む。改めて、今日から君の上官となつた高菜直哉二等陸佐だ。今日から、指揮命令システムなんて無粋なものとは無縁となつたから、電の言うことを聞いて危ないことはないように。いいね？」

その言葉に、キョトンとした顔になる卯月。

湊子は、その卯月の顔を見ながら楽しそうに、口元に手を当てて笑い始める。

「ふふ、言つたでしょう。彼は変わり者だ、と。艦娘の指揮統率を効率化させる為のシステムを、『あんな無粋な物は要らない』と、勝手に削除する人間ですよ。私も同意見ですが」

「了解だぴよん！びしっ」

立ち上がり、敬礼をした卯月に続き電も立ち上がつて、三人は退室して行く。

廊下を歩いていると、一等陸佐の階級章を付けた、メガネの男が歩いて来る。

「足立一佐！」

卯月が声を掛けると、足立一佐と呼ばれた男、大本営警務隊長の足立昭彦一佐が眉根を潜める。

「駆逐艦卯月一士。上官に声を掛ける時はまず敬礼だ、先日も言つただろう？」

「ごめんなさいぴよん、ビシッ」

「よろしい」

すつと背筋を伸ばして敬礼する卯月に、二人も敬礼する。

「足立一佐、お久しぶりです。遅くなりましたが、一佐昇進おめでとうございます」

「高菜君か、ありがとう。数年前の公金横領事件以来だな？」

「どういうことなのですか？」

事態が飲み込めない電に、高菜二佐が笑いながら口を開く。

「いやあ。提督適性試験を受ける直前に配属になつた、自衛隊施設で

の横領事件の解決にちよつと関わってね」

「全く。君は変わらん。特別捜査官なぞと言う与太話でハツタリを決めて、連隊長を武力制圧する等と、私が証拠を抑えていなければ上官反逆だぞ?」

「その話はいいじゃないですか?記録なしの譴責処分になったんですから」

そんな高菜二佐の態度に、苦々しい顔をして窘める足立一佐に、苦笑いを浮かべる高菜二佐。

「足立一佐、その高菜二佐のところにお世話になるぴよん」

と卯月が報告すると、少し表情が和らぐ足立一佐。少し笑っているようにも見えた。

「そうか。万事型破りな男で苦労すると思うが、彼の鎮守府なら君を任せてもいいだろう。高菜二佐、私は見ての通り何事も型どりの男だ。だが君は、柔軟な発想で自由に組織で動ける人間だ。君のような人材こそ、艦娘の提督には相応しいのかもしれない。私はやり過ぎる提督を撃射し排除する存在だ、判るな?」

「足立一佐、人は自由という刑に処されている、という言葉もあります。提督の自由裁量の意味は分かっているつもりです」

「サルトルか。それを弁えているならよろしい、駆逐艦卯月一士、達者でな」

フツと卯月に笑みを見せると、再び真面目な顔に戻り、背中で手を組み背筋を伸ばして歩いて行く。

それを敬礼で見送ると、高菜二佐はあの人も笑うのか、と笑みが零れる。

「さあ、宮戸島に帰るとしよう」

統合幕僚監部の庁舎から、三人で出た時だった。

「艦娘はんたいい!人道を守れー!」

「戦争はんたいい!軍国主義を許すなー!」

庁舎前では、多数の人間がプラカードを掲げて、デモを行っていた。「やれやれ、またか?さっさと行ってしまおう」

「なのです」

「あれは何をしているぴよん？」

デモ隊を無視して、ポケットに手をつ突っ込んで歩き始める高菜二佐に、あとから従って行く二人。

そして、少し歩いたところで卯月がデモ隊をちらりと振り返って、高菜二佐に訊いた。

「あれはだね。艦娘が人道に反している、或いは軍国主義の復活だから、艦娘制度を撤廃せよ、と主張している、有志の市民の方達だよ」「どゆことぴよん？艦娘がいなくなったら、どうするぴよん？」

納得行かない顔をしている卯月に、高菜二佐は心底不愉快そうに口を開く。

「さあ？連中は、そんなことなんて考えていないだろう。連中が戦地で深海棲艦と殴り合って倒してくるんだったら、喜んでやってもらおう。我々自衛官だって、好きで艦娘に頼っている訳じゃない。できれば、こんな可憐な娘達には争いなんて危ないことはやって欲しくないところだ。だが、深海棲艦は艦娘でなくては倒せない。無論、自衛官でも倒すことが出来ないかは研究中だが、まあ現状で、モアベターな方法が今の方法だと、広報は何度もあらゆる手を尽くして広めているのになあ」

「なら、何でああ言うデモをしているぴよん？」

「何でだろうね？彼等に訊いてみたいものだよ、より完成された対案の一つでもあるのかと。私は、あの手の連中が心底嫌いでね。安全な場所で艦娘が戦うのを崇高な戦いだ、と持て囃す連中も、ああやって、やはり安全なところで対案のない批判だけをする連中も。それが平日の昼間にやることか？やることはもつと沢山あるだろうに。艦娘達がシーレーンをなんとか守ってる現状、経済活動を活発化させるのは民間にしか出来ないというのに、全く碌でもない」

「そう言っちゃったらどうなのですか？」

ブツクサ文句を言い始める二佐に、意地悪そうに声を掛ける電。

「その時は、退職金を片手に論破してやるさ。今のところ、私は自衛官だ。思うのは勝手だが、我々の責務は、ああいうのも含めた国民の生

命と財産を守ることが本分さ」

肩を竦めると立ち止まり、二人を振り返る。二人も立ち止まる。

「それが自衛官という宮仕えの仕事さ。私はなりたくて自衛官になつたんだから、自衛隊の本分は守らねばね。我々が日陰者でいる時が、皆は幸せなのさ。ただ本音としては、文句の一つも言いたい訳さ」

そう言つて、制帽を取つて頭を搔くと、再び駐車場に向かつて歩き出す。

やりたくて自衛官をやっている、と言つておきながら怠惰な一面も見せる矛盾の男。

そんな変わった：変わり者過ぎる上官に、二人の艦娘は顔を見合せて笑つてから、従いて行くのだ。

島の新生活

宮戸島の官舎に帰り着いた電達。

早速、ベッドを果敢速攻で手配しようとしていると、卯月がクインサイズベッドしかないことに気づいて、

「提督達は、いつもどうやって寝てるぴよん？」

と問い掛けると、電が、

「いつもは、電が提督のベッドに潜り込んでいるのです。提督はさつさと寝てしまうので、安全無害なのですよ。卯月も一緒にどうなのです？」

「うーん、それは不味いだろう？この私物のベッドは明け渡して、私がシングルで、何か寝心地の良いベッドを探ささ」

作業帽・作業服に着替えた高菜二佐は、頭を掻きながらタブレット端末で、ベッドのカタログを見ながら考えていると、

「う…うーちゃんも電と提督と一緒にいいぴよん」

少し言い淀んでから、決意をするように言うも、高菜二佐提督は困った顔をする。

「でもね、卯月。君は男性への恐怖が、少なからずあるのではないかな？無理はしなくていいんだよ？」

「ううん。なぜか高菜二佐なら大丈夫、って思えて来たぴよん」

「ふむ…分かったよ。卯月がそこまで言うなら、そうしよう」

そう言って、頭をぽんと撫でると、笑顔になる卯月。

「さて、次は買い物だ」

卯月と二人で、ホームセンターに買い物に行く。

電は、桐山二佐の艦隊がまた戦艦を引き連れて撤退して、宮戸島海域に流れ込んで来たので、緊急出動である。

「全く、面倒事を押し付けられないでもらいたいです」

そう言って、出撃して行った。

最初は、電がいなくていいか卯月に問うたが、大丈夫と言うので、オリブドラフ

O D 色の軽トラックで、宮戸島のホームセンターに向かった。

やっぱり彼は、ここでも人気者である。

「おお、直さん」

「高菜さん、こんにちは」

作業服姿の高菜二佐に声を掛ける、同じく大工の作業服姿のおつきん達に、卯月は高菜二佐の後ろに隠れる。

「やあこんにちは」

高菜二佐もその場から動かず、卯月を守るようににこやかな笑顔で応える。

「こつちの娘は、新しい艦娘ですかい？」

「電ちゃんが嫁なら、こつちの娘は高菜さんの娘みたいな感じだねえ？」

ハツハツハと笑う二人を、ちらりと覗き込むように見る卯月。

「嫁じゃない、つて。すみませんね、彼女はちよつと男性が苦手で、何故か私以外の」

「う……卯月ぴよん」

取り敢えずは自己紹介だけする卯月に、坊主頭のガタイのいい大工の棟梁のおつきさんが、

「おお、自己紹介するとは偉いな。うちの娘も人見知りで、他所様に挨拶しねえのよ」

「棟梁ん所の嬢ちゃんは、父親に似ず可愛くてねえ、あだつ」

その隣のおつきさんに、ゲンコツをくれる棟梁に、びくつと再び高菜二佐の後ろに隠れる卯月。

「お、おおう、ごめんよ。怖がらせる気はなかったんだ」

その卯月に、困った顔をしてオロオロし出す棟梁に、
「いやあ、大丈夫ですよ」

と言っておいてから、卯月の頭にぽんと手を置いて、くるつと向き直りしやがんで目線を合わせる。

涙を浮かべている卯月に、笑顔を向ける。

「あの棟梁は大丈夫。娘を溺愛していて、嫁さんに頭が上がらない、無害なおじさんだから」

「そうそう。おじさん、女の子の涙には一番弱くてなあ。後、カカアにも弱いんだ」

はっはっはと笑いながら言う棟梁に、おずおずと顔を出す卯月。

「高菜二佐が言うなら……ぴよん」

「それじゃあ、おじさん達は失礼するよ。またね嬢ちゃん」

「うん……」

「ああ、棟梁。もしかしたら、今度顔出すかもしれないよ?」

「あいよ、了解だぜ」

大工のおじさん達が去って行く立ち上がり、卯月と手をつなぐ高菜二佐。

卯月の生活用品を、一通り揃えて行く。

パジャマであったり、朝食用の食器であったり。三人になったので、トースターは二度回さないといけないな、と思いつつ、

二段式の、パンが四枚焼けるオーブントースターを見て、腕を組んで考え込む。

「こいつを買ったら、電が怒るか?」

そう。高菜二佐の出自を知らなかった彼女は、無駄な浪費反対派なのだ。

「こんなに沢山、いいの?」

卯月は、今までの鎮守府で出た給料までも、ブラック提督に横領されていた為、無一文なのだ。

今、湊子を通じて、湊子のコネクションとある自衛隊上層部に働き掛けてもらっているが、上はお役所仕事なので、

まあ厳しいだろうと考えて、全部自腹で用意することにしたのだ。

「艦娘の給与は、提督に振り込んでの現金支給と言うのが間違いの元なんだよ。銀行口座を、司令官の同意がないと作れない、今の制度に問題があるんだがなあ」

善良な提督は、お給料日を一つのイベントとして、手渡しの喜びの為に使っているが、悪どい提督はその制度を悪用しているのだ。

大きな溜め息を吐く。そして、お財布のコーナーに向かう。

紳士向けのお財布から子供向けのお財布まで、いろいろ取り揃えられている。

「さあ、好きなものを選びなさい」

「でも、うーちゃんお金持ってないぴよん……」

「今月の給料日は明日だったね？湊子様のもとにいた期間と、できれば横領され続けてた期間の給与を払えないか今、上に相談してもらってるところだ。差し当たり、湊子様から預かってるお小遣いと、私からのお小遣いを加えて20万。入れて置くから、大事に使いなさい。貯金をしたのなら、銀行に連れて行こう。今月の給与から支給しよう」

その言葉に、目をまん丸にして驚く卯月。

「そ、そんなにいいぴよん!?!」

「そんなにも何も、たった一か月分の給料に毛が生えた分だよ。毎月十何万か、給料が入るからね」

「そ、そうだったのかぴよん……」

自分は搾取されていたのか、と気づくと肩を落とす。そんな卯月の頭を撫でる。

「さあ、好きなものを選びなさい」

その言葉に、卯月は可愛いお財布を選んだ。それを見た高菜二佐は、ふふ……と笑った。

その財布は、ブタさんのキャラクターの財布で白と黒のバリエーションが有る。

卯月が選んだのは白だが、実は電が選んだのが黒なのである。

「それでいいならカートに入れなさい。あとはパジャマと、衣料品売り場で服を何着か選ぼうか?」

ここのホームセンターは、『としりま』という洋服屋のチェーン店も店内に入っている、複合店舗なのだ。

服を何着か試着するとそれも買い、自分が休日用のスーツを見ている間に、卯月は自分の下着を選んで持って来る。

沢山の生活用品と、収納ボックスと衣類の入ったカートを、レジへ持って行く。

「ああ、こんにちは高菜二佐。新しい艦娘さんですか?」

レジの若い女性店員は、ニコリと卯月に笑みを向けると、

「卯月だぴよん」

と挨拶する。女性店員は、「ハイ、こんにちは。ようこそ宮戸島へ」
そう言いながら、どンドンレジ登録して行く。

そして金額を告げると、高菜二佐はお尻のポケットにある財布を取り出し、プラチナ白金色のカードを出して女性店員に渡す。

「支払いは一回と回数とりボ、どちらかでよろしかったですか？」

「うん、一回で」

その会話に首を傾げている卯月に、

「クレジットカードは一回で払うか、分けて払うか選べるんですよ」

「そうなのかぴよん」

その女性店員の説明に、また未知の話に目をまん丸くする卯月。

「さあ、こいつを積み込んだら鎮守府に戻ろう。まずは官舎で荷物を下ろして、片付けをしてからお昼にしよう。電は戻って来るかな……？」

そう言いながら、カードとレシートを受け取り財布に仕舞うと、財布をポケットに仕舞う。

そして、商品の袋やシール付きの商品の載せられたカートを転がしながら軽トラックに向かうと、

軽トラックの車両無線からマイクを手に取り、無線を送る。

この無線は、艦娘とのペアリング無線なので、艦娘と近隣の各拠点だけに送受信できる無線なのだ。

「えー、宮戸島高菜二佐より宮戸島電、応答せよ？」

『はい、宮戸島電、どうぞなのですか？』

「現状を報告せよ、どうぞ？」

『鎮守府待機。どうぞなのですか？』

『了解、物資調達完了、昼飯は弁当屋にするけどどうする？糧食調達可否か？どうぞ？』

『二佐に一任いたします、どうぞ？』

「了解。糧食調達後、すぐに戻る」

通信が追わった頃に、卯月が荷物の積み込みを終わらせる。

戦闘中の他の艦娘達にあからさまに言えない為この言い方なのだ
が、艦娘達は大体察するのだ。

このゆるさが、艦娘ならではののである。

「あー、宮戸島の電ちゃんおやつタイムっばい」

「そのようだな。お昼は、コンビニか弁当屋なのだろう」

「提督も、今日は昼飯とおやつ用意してるって言ってたぜ。明日の手料理、何かねえ？」

そんな暢気な会話をしているのは、南三陸鎮守府の夕立、長門、木曾のお気楽トリオ。長門は電と同じ三尉、夕立が曹長、木曾が一曹で、宮戸島鎮守府と同じく、女川鎮守府の桐山二佐被害者の会会員でもある。

ここの提督は、武藤 廉三等陸佐。艦娘を、過剰に大事にすること
で有名な提督である。

大事にし過ぎるせいか、毎日埠頭までお見送りをし、お出迎えをし。ちよつとでも小破すると、オロオロと泣き出すくらいである。

45過ぎの、スキンヘッドにヒゲを蓄えた、太ったいいおっさんで、元々は経理畑で勤務をしていたが、適性試験で前線に引っ張り出された、可愛そうな人でもある。

料理が得意で、給料日には自ら厨房に立って美味しい料理を振る舞う、女子力の高い提督なのだ。

因みに、残念ながら独身である。

銀行に立ち寄って、卯月名義の銀行口座を作って15万円は口座に入れる。数日後、鎮守府にキャッシュカードが届くのだ。

最後に弁当屋に立ち寄り、唐揚げ弁当を三つ購入してから官舎に戻る。

お昼ご飯の後、電と卯月が和気藹々と収納を組み立てたりしているのを、ベッドに腰掛け眺めながら、

そろそろ、官舎の拡張工事を視野に入れるべきか考える、高菜二佐であった。

「高菜二佐も手伝うのです」ぴょん！

「はーはー」

頭を搔いて、その二人の輪に加わる高菜二佐だった。

ミニパーティー

宮戸島鎮守府の高菜直哉二佐は、南三陸鎮守府の武藤 廉提督^{三佐}から電話連絡を受けていた。

「もしもし、お久しぶりです」

昼下がりの鎮守府。電は出撃に出掛け、卯月は海に出る訓練で近海を周回している。

まだ、捨て艦戦法で失われた艦のトラウマで、沖合には出られないのだ。

高菜二佐は微睡んだところで、鳴り響くスマートフォンを取り出して電話に出る。

『いやあ、話は聞いたよ。ブラックのところから来た娘^こを引き取ったとか?』

陽気な声である。

「相変わらず情報が早いですね。あの堅物と同期なだけはありませんね」

『足立一佐から話は聞いたよ。私はね、話を聞いただけで泣いてしまったよ』

いつもながら、涙脆い男である。ボロツボロに泣いて、足立一佐を辟易させたことは想像に難くない。彼は艦娘を異様に溺愛するのだ。溺愛し過ぎて、ちよつとでも傷をつけて帰って来ると心配し、狼狽し、オロオロと涙を浮かべる。

所属艦娘の長門、夕立、木曾のトリオは、提督を泣かせない為に努力に努力を重ね、今では長門が三尉、夕立と木曾が曹で、夕立は三尉昇進目前なのである。

「全く。またボロツボロに泣いて、足立一佐を困らせたんじゃないですか?」

『足立くんには、そんなことでは提督なぞ務まらない、と叱られてしまったよ』

そうは言っても、足立にとっては安心して艦娘を預けられる、査察を最優先で後回しにできる数少ない鎮守府なのだ。

世間的に言えば『ホワイト鎮守府』。

給料は色を付けて渡す。給料日には、パーティーを開いて料理を振る舞う。

「まあ、それだからこそ足立一佐的には安心できるんでしょうね？それがなければ」

『ところでだ、本日はなんだか分かるかね?!』

武藤提督は、嬉しそうに話を切り出す。

「分かっていますよ、給料日でしょう？私は、もう午前中に振込処理をしておしまいですかね」

『何だ、相変わらずドライなやつだな。手渡しで艦娘達が喜ぶ姿と言ったらもう……』

「はいはい。武藤三佐のご意見は、ありがたく賜りますとも。それで、わざわざ連絡したってことは？」

力説する武藤提督の言葉を、溜め息を吐きながら遮ると、本題を引き出そうとする。

『そう、今日は海辺でバーベキューでもしようと思つてね。高菜くんと、電ちゃん、あと、新しく来た卯月ちゃんをご招待したい、と思つてね』

「あー、いいですね。それじゃあ、買い出しも兼ねてお伺いしますよ。肉と野菜と焼きそば辺りを買って行けばいいですかね？」

『うんうん、そうしてくれるとありがたいね。うちの長門も喜ぶから、制服なんかじゃなくておめかししておいで、つて伝えてもらえるかな？無論高菜君もな?』

「了おく解です。ところで、そろそろ二佐に上がるんじゃないですか?」

『いやあ。経理畑の二尉だったのが、あれよあれよと昇進して、目まぐるしくて敵わんわ。そんなことより、艦娘達が安全に帰ってくるほうが大事だよ』

「全くです。それじゃあ1800ヒトハチマルマルにそっちの鎮守府へ」

『うむ』

戻つて来た電と卯月に、着替えるように伝えると、自分も執務室で、

休日用の服に着替える。

ベージュのジャケットとチェックのパンツに黒いカッターシャツ、赤いネクタイに、紺色のベストに着替える。靴も、作業ブーツからスニーカーに履き替える。

「お待たせだぴよん！」

「お待たせなのです！」

卯月は、吊りスカートにボーダーのシャツ。肩からは、二人で買いに行ったお揃いのシヨルダーポーチを掛けていて、靴もスニーカーである。

電は、ダメージドジーンズにTシャツに薄手のフード付きパーカーを、前を開けて着ている。楽楽コンドルズの野球帽を被って、お揃いのシヨルダーポーチを肩から掛けている。靴はシヨートブーツである。

「さあ、行こうか？」

「はいっ!!」

鎮守府の駐車場には、業務車三号と軽トラック、それにセダンタイプのハイブリッド車が停められている。

そのセダンのキーを片手に、三人共乗り込むと、宮戸島で食材を調達して、お菓子も沢山買って、トランクにあるクーラーボックスに大量に詰め詰めにする。

そうしてやって来た南三陸鎮守府。時間はヒトナナゴーマル1750。

埠頭の方から、艦娘達の賑やかな声が聞こえて来る。

そっちの方に、クーラーボックスとレジ袋を持って…もちろん艦娘達も、両手にレジ袋を持っている。

埠頭に向かうと、長門達がバーベキューセットの炭の火を起こしているところだった。

後にはテーブルが並べられていて、料理が多数並べられている。

「おお、高菜くん！」

焼き上がったアップルパイを、ミトンで持ちながら官舎から出て来た、エプロンを付けてノーネクタイのスーツ姿の武藤 廉三佐は、テーブルにアップルパイを置いてから、艦娘達に駆け寄る。

卯月は、そのスキンヘッドという風貌に一瞬怯えるも、電の「大丈夫なのです」と言う言葉に、おずおずと顔を出す。

電の言葉に、お気楽トリオの長門達も、テーブルの方に向かう。

「おお、高菜提督に電。久しぶりだな？」

「長門も三尉昇進おめでとう。夕立は、今度三尉試験だつて？後はキャプテン、相変わらずだね？」

「キャプテンと言うのはよせ」

てしつとツツコミを入れる木曾に、高菜二佐は軽く笑って、

「紹介するね。新しく、宮戸島にやって来た卯月」

「卯月だぴよん」

電の後ろから顔を出したまま、挨拶する卯月。

長門達も事情は知っている為、咎めようとはしない。

「さあ、早速肉を焼こう。料理もいっぱいあるから、どんどん食べなさい」

その言葉に、卯月も表情が笑顔に変わる。

電も、唐揚げがいっぱい盛り付けられているのを見て、ニコニコ顔である。

「電は、武藤提督の唐揚げが一番だと思っているのです！」

そう言つて、卯月の手を引いて連れて行く。

「待った——！一番乗りは夕立っばい！」

それを追い掛けて行く夕立。

その様子を、微笑ましく眺めている、お姉さん艦の長門と木曾。

「さあ、我々も夕飯にしようではないか？」

と言う武藤提督の言葉に、電と卯月が足元に置いて行つたビニール袋を持って向かう一同だった。

「それでは長門、お疲れ様でした」

「うむ。ありがとう、提督」

皆一通りの食事を楽しんだ後、給与授与式が始まる。

「ウチもこういうのあるびよん？」

「ウチはないのです。銀行に振り込まれてるのです」

卯月の質問に、肩を竦める電。

そして高菜二佐に向けられる、卯月の純粋な瞳光線。

「はいはい、わかったよ」

そう言つて、封筒を二人に渡す。

「おおー！」

喜んで、二人が封筒を開けると、中には……給与明細が入っていた。

「……………」

そしてジト目で見上げる二人の艦娘。

「はっはっは。高菜二佐は、相変わらず振込派なんだな？」

武藤提督が艦娘達と共にやって来ると、艦娘達はそれぞれ給与袋を持って、嬉しそうな顔をしている。

「ペーパーレス化ですよ。地球の資源を守ってるだけです」

肩を竦める高菜二佐に、宮戸島の艦娘達が口を揃えて、

「現金支給がいいのです！」ぴよん！」

と言いは始める。

「だあくめ。どうせ、翌日には銀行に入れるんだろ？ダメダメ。第一、その銀行のカードでお買い物も出来るじゃないか？」

そう。所謂デビット機能付きの銀行カードなのだ。小銭いらすずで、残高の範囲でお買い物が出来る。

「現金支給は浪漫なのです。貰ったその日に、遊びに行くのです」

「そうだぴよん！」

「そうだぞー!!」

「そうだったぽい！」

「高菜二佐、諦める」

電と卯月の主張に、南三陸の艦娘達の支援砲撃も入る。

高菜二佐は、ふむっと考えてから、何か悪いことを思い付いた顔を
して、

「わかった。来月は、現金支給にしてあげるよ」

『ばんじゃーい！』

そう言つと、二人どころか全員が万歳三唱して喜ぶのを見て、肩を
竦める高菜二佐。

……翌月。全部千円札、小銭分を全部一円玉にして手渡された給料

を見て、やつぱり振込がいい、と言うことになるとは、思ってもみない二人だった。

しかも卯月は、過去一年分の給与も認められたので、ピン札の千円札の札束の山を手渡されたのだ。

結局、即座に二人共銀行に入金に行ったことは言うまでもない。

本人曰く「現金支給には変わりないだろう?」とのこと。実に大人気ない。

「そろそろ、宴も酣だしお開きに……」

そう言った時、武藤提督の仕事用携帯電話が鳴った。

「もしもし。うん、また桐山二佐が?うん。了解だ」

「どうされましたか?」

真顔になった武藤提督に、声を掛ける高菜二佐。

「うむ。桐山二佐の艦隊が、ル級多数をお持ち帰りして来たようで、南三陸の方に流入して来た」

「それじゃ、電もお貸ししますよ。卯月は……ここで待つてような?」

ぽんと頭を撫でる高菜二佐を、卯月は決意を秘めた顔で見上げる。

「うーちゃんも行くぴょん!」

「む、無理はしたらいかんよ?」

心配そうに声を掛ける武藤提督に、卯月は首を横に振った。

「よし、私達も海に出ましよう。私が指揮を執ります。いいですか、武藤三佐?」

「私も出よう。指揮は任せただぞ?」

念の為に、制服を持って来て正解だった、とすぐに制服に着替え、戦闘モードになる艦娘達。

五隻並び立っている後ろに、モーターボートの操縦桿を握っている武藤提督。

そしてポケットに手をつ突っ込み、片手でボートの手摺りを握んだ高菜二佐が声を上げる。

「よし、長門を旗艦に艦隊連結。全員抜錨、ナイトダンスの始まりだ!」

『おーっ!!』

艦娘達の声が響き渡った。

レッツ！ナイトダンス！

「よし、長門を旗艦に艦隊連結。全員抜錨、ナイトダンス^{夜戦}の始まりだ！
淑女達声を上げろ！」

『おーっ!!』

高菜二佐の掛け声に、艦娘達の声が響き渡った。

逃げて来る夜釣り船が近づいてくる中、太陽は沈み切った。

空は青紫色になり、そして暗くなつて行く。

ル級数隻と、駆逐艦の艦隊が追い掛けて来る。

「卯月、お前は後ろから皆に従って来るだけでいい！出過ぎるな！」

「わかつたぴょん！」

震えが止まらない卯月に、先頭を切つて海を滑っている長門が、ちらつと後ろを見て声を掛ける。

「うーちゃんは、戦場に慣れればいいっぽい」

「いざとなつたら私達が守る」

「敵艦見ゆ！」

続いて声を掛ける、夕立に木曾。

その直後、同じく先頭を長門と並んで滑っている電が、敵艦をはつきりと視認する。

電の超越性能の一つ、夜目^{ナイトアイ}である。

「よし。長門、漁船が最短射程距離に到達したら、主砲発射！当たらないとダメ！」

「どういうことだ？」

「いやあ。相手は、漁船を追い回すのに夢中だ。夜目のいい電が視認しているなら、こっちが最先手を取れる。頼りにしてるよ、
46cm^{超長射程砲撃}三連装砲改を」

「了解だ、主砲斉射!!」

不敵な笑みを浮かべる長門は、そこで進撃を止め主砲を発射する。

放物線を描いた砲弾は、敵の真ん前に着弾する。

ザッポオン！と水飛沫を上げて、深海棲艦達に降り注ぐ。

漁船はこちらまで到達して、船員は陸へ逃げて行く。

相手の動きが止まった段階で、電が夜目で着弾観測をする。

「長門！もうちよつと右で、仰角5度」

「了解した！」

再び腰を落とし、全身に力を込めて主砲を発射する。

「！！！」

砲弾が直撃した駆逐艦^イは、木っ端微塵のミンチと化す。

「次は俺様の出番だぜ！」

マントを翻し前に出ると、木曾は六連装酸素魚雷を、相手にばら撒く。

それと同時に高菜二佐の、

「夕立、突っ込め！」

と言う言葉に、卯月も、

「うーちゃんも突っ込むぴよん!!見てるだけじゃ嫌だぴよん！」

と訴える。身体はガタガタと震えて顔は真っ青だが、決意を持った瞳に、高菜二佐は頷いた。

「やれ！夕立と踊って来い！」

「ぴよん!!」

「電も突っ込むのです！」

「高菜二佐！何を考えている!?卯月ちゃん、駄目だよ!!」

卯月は、高菜二佐の指示に強く頷いて、夕立と手を繋いで敵陣に突っ込んで行く。

電も、それに追従するように突っ込んで行く。

そして、悲鳴を上げるような武藤提督の声。既に泣きそうである。

「最高にステキなパーティーしましょ!!」

「レエエエツツ！ナイトダアアンス！」

「ぶっぶくぶー!!」

ばら撒かれた魚雷で、行動範囲を絞られた敵艦に、駆逐艦トリオが主砲を乱射して行く。

電はアクロバティックに、持っている12.7cm連装砲D型改二で、敵艦に向かって乱射する。

夕立は、華麗にダンスを踊るように、12.7cm連装砲B型改二で、

敵をスナイピングして行く。

ガチガチに震えた卯月も、飛び込もうとした瞬間、戦艦ル級の主砲が目の前にあった。

「!!!」

「あああああつ!!!」

顔を主砲が直撃し、勢い良く後頭部を海面にぶつけて、数回転しながら派手に大転倒する卯月。

「卯月ちゃああああん!!!」

「おいおっさん! 暴れるんじゃない!! うわああつ!」

飛び込んで、救いに行こうとしている武藤提督を、高菜二佐が必死で羽交い締めにする。

そして、二人仲良くモーターボートから投げ出される。

そして、ボートは転覆する。

ぎっぽおおん!!!

「卯月!」

「卯月ちゃん!?!」

「大丈夫! 卯月は立ち上がるのです!」

長門が叫びながら前を見遣り、夕立も悲鳴のような声を上げて後ろを振り向くと、電の信頼に満ちた声と共に、

大破状態の卯月が、ゆっくりと立ち上がった。

「い……痛いぴよん……でも、怖さも一緒に吹っ飛んじゃったぴよん!」

キツと深海棲艦を睨むと、飛び込んで魚雷を放つ。

「!!!」

その魚雷がヴァイタルパートに直撃すると、ル級は海へと沈んで行った。

「うーちゃん、その調子!!一緒にダンスしましよ!!!」

「分かったぴよん!」

転覆したボートにしがみ付いた二人が見たのは、綺麗な月夜に華麗な舞を踊る、五人の姿だった。

「主砲斉射! ル級はどんどん潰してやる!」

長門は、旗艦として後方から超長射程の主砲で、アウトレンジ砲撃して行く。

「俺様の魚雷は、一味違うぜえ」

同じく前に突っ込んで行った木曾も、自慢の雷装でどんどんル級を沈めて行く。

「ソロモンの悪夢、見せてあげる！」

「当たれびよん!!」

真っ赤な瞳の夕立と卯月が、二人で踊りを踊るように、主砲を乱射して行く。

まさに、夕立が卯月をエスコートしているかのような……

最後に、電が華麗なダンスで敵を仕留める。

卯月の仕留め掛けから、狙い撃って叩き潰す。

「綺麗だ……」

「でしよう？卯月は、壁をぶち破ると思っていましたよ」

ボートにしがみ付いたまま、見惚れるようにその様子を見ている武藤提督に、

同じくボートにしがみ付いて、それを見ている高菜二佐。

「そうさ、卯月は——」

——強い子だもんな。

ふっと、笑みを零す高菜二佐だった。

「卯月ちゃん！大丈夫！すぐに緊急入渠させるからね!？」

深海棲艦を全滅させた後、長門に救助されてボートに乗り直したところで、帰って来る駆逐艦トリオと木曾の姿に、既に涙ながらに迎える武藤提督。

二人共びしょ濡れで、一張羅が台無しである。

卯月は、夕立と電に曳航されて、南三陸鎮守府に戻って行く。

それを守るように後ろから木曾と長門、それとモーターボート。

南三陸鎮守府に戻ると、すぐに高速修復材での修復が始まる。

「いやあ、そこまでしてもらわなくても」

と言う高菜二佐の言葉に、

「高菜二佐、今回はうちの管轄で発生したことだから、うちでやらせてくれい」

と言つて聞かなかつたので、ご厚意に甘えることにした。

「へっくしっ!!」

「高菜二佐も着替えるのです」

電が、車に置き忘れていたクリーニングしたばかりの常装を持って来ると、高菜二佐も鎮守府庁舎を借りて着替えて来る。

その間に、武藤提督も作業服に着替える。

卯月が治療して戻つて来ると、

「整れえっ!」

と高菜二佐が号令を発し、埠頭に一列に並ぶ艦娘達。

「艦隊連結解除!今日のMVPは卯月だ!」

『おめでとー!!』

皆の拍手に、照れる卯月。

その様子を満足そうに眺めてから、いつもの態度に戻る。

「さあ皆、運動後のティータイムと行こう」

『おーっ!!』

その日は、夜遅くまで艦娘同士の修好を深めて行つた。

途中からは、本当にナイトダンスパーティーになつていた。

夕立が、自分の部屋からスピーカーカーを持ち出して、流れる音楽の中、華麗に水面で踊る艦娘達を眺めながら、二人語らうおっさん達。

その思い出は卯月にとって、壁を破つたことと共がいい思い出となつた。

もちろん、電達にとつても……

帰り道。

後部座席に、仲良く眠っている卯月と電を乗せて、運転する高菜二佐。

「さて。また明日から、通常営業に戻りますかね?」

そう呟いて、車を宮戸島に向けて走らせるのだった。

翌日。

当然だが、スマートフォンは水没して壊れていた。業務用の携帯電話も。

両方共、データは昨日の朝バックアップを取っているから問題ないとしても、使えなかったら緊急時に支障が出る。

「今度は防水のにするか……財布だけでも車に置いておいて正解だった」

そう呟きながら始末書を用意して、大本営に弁償の申し出と始末書の送信をする、高菜二佐だった。

そして、開店と同時にすぐに携帯ショップに駆け込んだのは言うまでもない。

その頃。

足立一佐は、艦娘提督を統括する大本営幕僚総監のおおぬきやとる大貫悟空将から、呼び出しを受けていた。

「御用でしょうか？大貫空将」

「うむ。昨日の夜、業務用携帯電話が二台壊れた。宮戸島と南三陸だ。誤って海に転落、とある。始末書と弁償申し出があったが、査察の必要性はあるか？」

足立一佐は、武藤・高菜両提督から送信された始末書と、携帯電話弁償の申し出、戦果報告に目を通すと、こめかみを抑えてこう呟いた。「やれやれ、困ったものだ」

そう呟いてから、目の前の上官に向き直る。

「いいえ。戦果報告にて、卯月が大破入渠して。と記載されておりま
す。おそらくは、武藤三佐が助けようとして暴れて、二人仲良く海に
落ちたもの、と推測されます。査察は無用でしょう」

「うむ。ならばよろしい、許可を与える旨通達を出そう。二人には
……そうだな、何れ定期査察の時に説教でもしてやってくれ。話は以
上である」

「はっ。移動時に、早速キツめに説教をいたしましょう。それでは、小

官は査察があるのでこれで」

「うむ、よろしく頼む」

そう言って、幕僚総監の執務室を辞してから、再び呟いた。

「全く、困った連中だ」

と。その時の表情は笑っていたと、通り掛かった事務官の子が言っていたそうなの。

そして高菜と武藤の二人は、それぞれ下ろしたての電話で、査察に向かう途中の足立一佐から説教を喰らうことになるのだが、各々の携帯電話ショップにいる彼等は、知る由もなかった。

給料日のお楽しみ

あのパーティーから、一月弱過ぎた。

梅雨の六月から、暑さ本番の七月になっていた。

その給料日前、高菜二佐は先に届く給与明細を見て、銀行へ赴いて支店長と何やら密談をしていた……

給料日。

電と卯月は定期哨戒が終わり、鎮守府に戻って来た。

執務室には会議用テーブルが設置されていて、

まず、そこに置いてあるジュラルミンケース二つに、電は嫌な予感を覚えた。

「おかえり。給料日だから現金支給をするね。まず明細から渡すよ」

明細を二人に渡していく。

「うっぴよおおおん!?!」

卯月が明細を見て、驚愕の声を上げていた。

「どうしたのです?……!?!」

覗き込んだ、電も固まっていた。

「ああ、今月と過去一年分の給与の支給が決定されてね。現金でつて言うから、現金で持って来たよ」

「あわわ……」

「まずは、電からだね。お疲れ様でした」

ジュラルミンケースの片方を開けると、中身ギツシリのA4の封筒を手渡す。

そのずっしり感に、電は嫌な予感がして封を切ると、中を確認する。

中には千円札の100枚束の小束二つと23枚の千円札、一円玉の50枚の棒金二本と31枚。

「わーい!……嬉しくないのです」

一瞬だけバンザイしてから、ジト目で高菜二佐を見上げる電。

「札束なんてそうそう触れるもんじゃないよ。それより、卯月は大変だね?」

そう言うと、もう一つのジュラルミンケースを開ける。

そして、中身をテーブルに取り出す。

千円札の大束^{1000枚束}が一つに、小束は七つ、バラが36枚。一円玉の棒金四本に、一円玉五枚。

「……こんなにどうするぴよん？お財布に入らないぴよん」

ジト目で、抗議の声を高菜二佐にぶつける卯月。

「労働基準法第二十四条。賃金は、通貨で、直接労働者に、その全額を支払わなければならない、以下略。きちんと満たしてるだろう？」

「次回から、今^振まで^込どおり^方が良いです」

悪戯好きの提督に、溜め息を吐いて降参を宣言すると、三人で銀行に行き、全額を銀行口座に入金するのだった。

さて、銀行で高菜二佐と別れた二人は、

「今日は、夕飯も各自自由で。私は約束があるから、緊急時になったら呼ぶね」

とのお言葉に甘えて、キャッシュカードである程度のお金をおろすと、通帳も記帳する。

「はあ。また優衣さんから、お小遣いが入ってるのです……」

「どうしたぴよん？」

「提督の双子のお姉さんで、電のことを何故か溺愛しまくってて、高菜二佐のことも大好きで、いつも出会うと……」

「電ちゃあああああああああああああああああああああああああ
ん!!!」

という、大きな声を上げて、フォーマルスーツでハイヒールの、茶色のショートボブの長身の女性が突進して来る。

「わわわ!!」

突然の状況に、卯月は電からぱつと離れると、そのまま電は突進してきた女性に抱き上げられて、クルクル回ってダンスするかのよう
に抱き締められている。よくヒールが折れないものである。

しかも、公衆の面前である。

「こうやって抱き締めるのです」

「おー……凄いぴよん」

顔を真っ赤にして抱き締められる電に、キョートーンとしたままの卯月。

「お、新しい子？なんてなんて。優衣姉ちゃんに紹介してよ？」

卯月の存在に気づいた優衣が電に言うど、

「まずは、下ろして欲しいのです」

との抗議に、ごめんごめんと言いながら下ろす。

「優衣さん、新しく宮戸島に配属された、駆逐艦卯月一士」

「よろしくぴよん、ビシッ」

敬礼する卯月に、優衣もおどけて敬礼を返す。

「こちらの背の高い女の人が、高菜二佐の双子のお姉さんで、高菜優衣さん」

「まあ、もうそろそろ高菜じゃなくなるけどね」

「お見合いが決まったんですか？」

「うん、商社系グループ会長の長男とお見合い。確定で結納済み。相手18だから、私となんかじゃもつたいなさ過ぎるくらいのいい相手」

「ところで、何しに宮戸島に来たのですか？」

その問いに、しゃがんで二人に視線を合わせて、

「直哉に、お見合いの報告と、久々に顔も見せたいな、つて。お店でもう一人と待ち合わせで車で拾うから、鎮守府で待ち合わせ？」

そう言うど、ちらつとハザードランプを点滅させて、路上駐車している車を見遣る。

赤い外車で、跳ね馬の 엠ブレムを付けている。

「おー、超高級車感があるっぴよん」

「高級車なのです」

実際、島の皆も珍しそうに見ている。

「それよりも行って、言っただけないと、高菜二佐待ってるのですよ？」

「あ、そうだった。それじゃまたね？あ、卯月ちゃんにお小遣い」

そう言うど、お財布からむんずと20万ほど出して渡す。

「あ、ありがとぴよん」

「来月には、直哉から口座番号聞いて振り込むからね。じゃねー」と、にこやかに去って行った。

「嵐のような人だったぴよん」

「なのです」

お金を、お財布に仕舞いながら電は、

「さて何をするのです?」

「うーちゃん、今までお金使ったこと無いから判らなくて……」

その言葉に、どんなに過酷な状況だったか察した電は、笑顔で卯月の頭を撫でる。

「じゃあ、ゲームをやりに行くのです」

「ゲーム?」

「心のオアシスなのです」

連れて行ったのは、島で唯一のゲームセンターだった。

若い人達が屯たむろしていて、中には電に挨拶する人も。

男の子もいっぱいいるので、卯月はぎゅつと電の袖を?んで離れない。

「まずは、お手軽にUFOキャッチャーをやるのです」

「これはどういうゲームだぴよん?」

「クレーンを操作して、中の景品を取るゲームなのです」

「おー、おもしろそうだぴよん!」

二人は両替機にお金を入れて、100円玉を握り締めると、可愛い人形「ゆとりくま」のぬいぐるみの置いてある機械の前に立つ。

「戦闘開始なのです」

「せ……せんとぅ……かいし……ぴよん?」

いつになく真剣な表情になる電に、首を傾げる卯月。

数十分後、お揃いのゆとりくまの縫いぐるみを抱っこしながら、ゲームセンター内を見て回る。

カーレースやバイクレースのゲームがあったり、所謂音ゲー等もある。

「ちよつとやってみるのです」

音楽が流れて来るタイミングに合わせて、上下左右のフットボタンを押して、ステップして踊るゲーム。

二人まで同時に出来るゲームで、「ダンスステップ革命」と言うゲームだ。

二人用でゲームを始めると、曲を選び始める。

「うーちゃんは簡単のでもいいぴよん」

というので、イージーモードにして、自分はハードモードにする。

そして曲を選ぶと、ステージが始まる。するとギャラリーが集まって来る。

「電ちゃん、やるらしいぞ?」

「おー」

なんて声を掛けてくる。

卯月が必死に矢印にステップをしている間、卯月よりも高密度の矢印を、画面に背を向けて振り付けしながら、まさにダンスしている電。

「おー、すごいぴよん……」

必死にステップをしながら見ている卯月も、踏みながらその姿に見惚れていた。

卯月がダンスステップ革命の常連女性ゲーマーに、隣のダンスステップ革命筐体で教えてもらってる間、電はダブルプレイと言う、左右八枚のフットタイルを使って遊ぶゲームをやり始めている。

結構盛り上がっていて、観客も手拍子を始めたり、歓声を上げている。

電も、途中でギャラリーに向いて、煽ったりもしている。

先月のナイトダンスも凄かったが、今日のダンスは凄い……

卯月はそう思いながら、初めての給料日の楽しみを、満喫しているのだった。

その後、一緒にカメラでモーションをキャプチャーしてダンスするゲームで、

二人可愛くダンスしたり、カードデッキ系ゲームの誘惑を電が止めたりしていた。

「デッキ系ゲームは際限が無くなるのです!地獄の一丁目なのです

！」

「そうだぴよん？」

そして、渋い将棋の全国対戦ゲーム「将棋戦争」で、卯月が強かったりして電を驚かせていた。それもその筈、アマ八段の腕前を持つ、高梨宮湊子の指導を受けているのだ。

「飯島流引き角戦法だぴよん！」

「ひき、かく？」

将棋をさっぱりやらない電にとっては、未知の世界である。

ゲームは級から始まる為、どこかの対戦相手はきつと、「段級詐欺だ！」と思っっているに違いない。

連勝を重ねて、サクサクと級を上げて行く。

そして最後に、二人でプリクラを撮って、お揃いのお財布の内側に貼り付ける。

「今日は楽しかったぴよん！」

「なのです！」

もう空が暗くなったヒトキユウマルマル1900。二人で、近くのエムドバーガーに立ち寄ると、思い思いのメニューを頼む。

電はギガエムドといって、超大盛りバーガー、卯月はビッグエムド。

セットでドリンクを頼む。二人共コーラとポテトだ。

バーガーを頬張りつつ、ポテトを摘まみながら、いろんなゲームの感想を語り合う。

因みに、ゆとりぐま獲得に費やした金額は……二人の中の黒歴史である。

そんなゆとりぐま戦利品は、それぞれの隣に座っている。

姉弟と親友

宮戸島鎮守府の前で、ポケットに両手を突っ込んで、待ち合わせ相手を待っている直哉。

数日前に、折角ならと最新機種を一括で購入したスマートフォンに、メッセージが入って来たのだ。

差出人は高菜優衣。

「今度の給料日、夕飯一緒に食べるから空けといて。ああ、ドレスコードがあるからスーツ着用で」

とのお達しが入って来たのだ。

それには、「了解」と返事を送っておき、南三陸の武藤二佐——この度昇進したのだ——と、

それに桐山二佐に連絡を入れて、その日は数時間不在になる、と連絡する。

その時は、桐山二佐もきちんと進撃を控えてくれる分、ありがたいのだ。

前日も、わざわざ南三陸に逃げてくれる分、有情である。……被害者の会としては自力で倒せよ、と言いたいだろうが。

そして、一張羅のスーツを身に着ける。紺色のスリーピーススーツに白いワイシャツ、紺色のネクタイ、それに革靴である。

スマホを弄りながら待ち合わせ相手を待っていると、赤色の外車^{フェイリ}が目の前に停まる。

左側の窓が開き、優衣が顔を覗かせる。優衣もフォーマルスーツ姿である。

「お待たせ。早速だけど、うーちゃんの口座教えて」

「何だ？ 姉さん、もう卯月に出会ったのか？」

そう言いながらスマホを操作して、メッセンジャーに口座番号を転送すると、反対側に回って助手席のドアを開け、腰掛けてシートベルトを締めて扉を閉める。

「それじゃあ、目的地に行くわね」

との言葉と共に、優衣はアクセルを踏んで車を走らせて行く。

車は一路仙台市街地を抜けて、高台にある洋食レストランに到着する。

何故か、黒塗りの車が多数停まっております、スーツ姿の男達が多数、周囲を警戒している。

皇宮警察官も確認できる為、待っている相手は想像に難くなかった。

「湊子様か？」

「ええ、半年前から約束して、漸くお店を貸切にして、お夕食会を開けることになったのよ。それに、直哉と湊子様に報告しないといけないこともあつてね？」

「何だ？アラフォー女を貰ってくれるところでもできたのか？」

「……うん」

その言葉に、そうかただけ言ってから、先に降りる。

それを見ながら、優衣もエンジンを切って、車から降りる。

宮内庁の侍従が店先で待っております、

「高菜優衣様、直哉様、湊子内親王殿下がお待ちです。どうぞこちらへ」

と案内すると、店内はこの日の為だけに飾られた花や、飾りに囲まれた席に湊子が座って待っている。

彼女は綺麗なドレス姿である。

「内親王殿下、ご無沙汰しております」

「内親王殿下、二等陸佐高菜直哉、参りました」

優衣は頭を下げ、直哉は最敬礼を行う。

侍従は周囲の宮内庁の職員を下がらせると、二人に、

「余人は、店員の者以外下がらせますので、普段どおりで結構でございます」

そう告げてから、案内を店員に引き継いで、他の職員は下がり、侍従のみ残る。

店員が椅子を引くと、二人共席に着く。

既に食前酒——優衣の前にはノンアルコール——と前菜が並べられていて、

フルコースだな、と解った。

「今日はお招きいただきましてありがとうございます、優衣ちゃん」
「漸く、こうやって学友三人の同窓会ができるね？」

湊子のお礼に、優衣がにこりと笑顔を浮かべる。

「卯月はちゃんとやってますか？」

「ん。今では、電と海に出られるようになった。壁を一つ、自分で乗り越えたよ」

「何で、湊子様とうーちゃん知り合いなの？」

その話^に首を傾げる優衣に、湊子は少し困ったような顔をしながら、事のいきさつを触りだけ話す。

「ブラック鎮守府か………そういう悪いのがあるから、提督皆のイメージが下がっちゃうのよ」

ぐつと拳を握り、憤る優衣に直哉も頷く。

「全く、そのとおりだね。艦娘だって心ある人間だ。捨て艦戦法や酷い扱いにするとは——全く度し難い」

「私も大貫総監に掛け合つて、改善をお願いしているところですよ」
わたくし

「民間人としては、艦娘を頼りにするしか無いんだから。兄さんの貿易会社も、私の株投資も、全ては経済活動が成り立たないと意味を成さないもの。頼むわね、直哉、湊子様」

その言葉に、二人が頷く。

歓談と共に食事は進んで行き、この場を用意した優衣がベルを鳴らす度に、店員が次の料理を持って来る。

チリーン

デザート^のソルベが出された頃、

「私、湊子様と直哉に報告しないといけないことがあるの。直樹兄さんやお父さんはもう知ってることなんだけど……私、お見合い結婚することになったよ」

「そう……ですか………それでお相手は………」

「うん、三友グループの会長のお孫さん。今年18歳………その、20も年下の男の子。もちろん政略結婚だけど、お見合いで二人共意気投合しちやって………」

照れながら言うスマホの写真を送信する。若く誠実そうな男子の写真を、二人も自分のスマホで見る。

「株もやってるらしくて、指導してくださいって言われちゃった。後将棋も……やってるから、私の作った詰将棋喜んでやってくれるの。だから……」

「あらあら。小さい頃は直哉と結婚するんだ、と言って、ご両親と直樹さんを困らせておりましたものね？」

ふふつと笑う湊子に、真面目な顔になる優衣。

「今も変わってないよ。でも、家柄もあるし、私は生まれながらに政略結婚が運命付けられていたから、今まで好きなことをさせてもらったけど……これが最後のデート、そう思っここを選んだんだ」

ふつと寂しそうな笑みを浮かべる優衣に、二人は顔を見合わせて何を言って声を掛けようか？置きどころを無くしていると、優衣が、

「大好きな湊子様と直哉に祝福されてお嫁に行けるんだから、私は幸せよ。だから……直哉」

真つ直ぐ見つめると、

「電ちゃんとは結婚しなさいよ。あの娘は、ずっと待ってるのよ」
「……………」

「しかし、私は……」

「良いじゃないですか？貿易会社の三男坊が艦娘と結婚しても、わたくし私は祝福しますよ？」

「お父さん、言った筈よね？直樹兄さんは会社を継いで、私はお見合いをすることが決定付けられる、だから貴方は好きなことをしなさい、と」

その言葉に、言葉に詰まる直哉。

「……………」

「直哉くん、わたくし私は電ちゃんに一度しかお会いしてませんでした、確かに好意を寄せているんじゃないか？と思う節がありました」

その援護射撃に、大きな溜め息を吐く。

「いやあ……怖いんだよ」

その吐露に、キョトンとする優衣と湊子。

「私だって電に好意を寄せているさ。もちろん電の気持ちも。それが上官としてなのか、男としてなのか、判らない時がある」

「……………鈍感」ですね」

ジト目で見る二人に、直哉は困った顔をする。

「そう、鈍感でいるべきだと思った。もちろん向こうから言い出したら、受け入れるつもりだったけど」

「もう、焦れたいですね」

先に口を開いたのは湊子だった。

「お互い待っていたら、何も変わりはありませんよ?」

「そうよ。私だって前に進んだんだから、貴方も進みなさい」

二人の言葉に、ふう、と息を吐いて、

「やれやれ。二人共、私に重過ぎる課題をお与えになる。私としては、一生独身でも良かったんだけどねえ?」

その言葉に、二人は口を閉ざす。

「こうやって三人集まれる機会も少なくなるだろうから言わせてもらうけど、好きだったよ、二人が初恋だった」

「そうね、私もよ」

「私もです」

「解った、私も前に進む決意を決めたよ。今すぐにはないけど。少し心の準備の時間をくれ」

その言葉に、ふふつと笑う二人。

「では、私も前に進まないといけませんね。皇族としての最後のお勤め……………私は、^{わたくし}予てよりお付き合いのある、高菜直樹さんとの婚約をお受けすることに決めました」

にこにここと笑みを浮かべる湊子の顔をばつと見る二人、そして侍従の姿を探す。

侍従は苦い顔をしながら、

「公式発表まで」他言なさらないように」

と、きつく釘を刺す。

「えっ……………えええええっ!?!」

山荘のレストランに、高菜姉弟の驚き声が響き渡ることになった

……
その様子に、長年仕えてきた年老いた侍従は、大きな溜め息を吐いた。

官舎に帰ると、電と卯月は既に寝静まっていた。お揃いのゆとりくまを抱っこして。

それを見て、ふっと笑みを零すと、ブランデーを片手に庁舎に舞い戻る。

庁舎の司令官デスクのエグゼクティブチェアに腰を下ろすと、デスクに隠してあるグラスと青い箱を取り出してから、グラスに半分ほどブランデーを注ぐ。

そして箱を開ける。そこには白金色のペアリング……

艦娘の潜在能力を大幅に伸ばす、ケツコンカッコカリリングである。

「……………」

一気にそれを飲み干す、強いアルコールが喉を灼く。

「とは言ったものの……私はいったいどうしたら良い……?」

その夜は、ボトルのブランデーを空けるまで、自問自答し続けた……

その答えは未だ見つからず、苦悩する男を月明かりが照らし出している。

報道過熱の大砲撃―スーパーノヴァ―

大きなニュースが、世間を駆け巡っていた。

一つは、高菜ホールディングスと三友ホールディングスの経営統合だった。

貿易商船の高菜HDと、商社系の三友HDのまさかの合併である。新社名は三高ホールディングス^{さんこう}。

同族系大企業の筆頭格が、まさかの合併である。両社は新規設立される三高HD傘下になり、全ての子会社がグループ化するのだった。

高菜直樹代表取締役社長が、新会社の代表取締役CEO^{最高経営責任者}となり、三友ホールディングスの三友龍三郎会長は、代表取締役会長となる。

事実上、高菜HDによる三友HDの吸収合併である。

三友龍三郎は、息子夫婦を深海棲艦の攻撃で亡くし、後継者不在となっていた。唯一残された孫龍太郎が、高菜家の長女優衣と正式に婚約したのを切っ掛けに、若き経営者に委ねようと、高菜HD会長の高菜源一郎との直接会談で決断したのだ。

娘が三友家に嫁に行き、代わりに会社が高菜家にやって来たのだ。その高菜CEOに関連して、もう一つ大きなニュースが飛び込んできた。高梨宮湊子内親王が婚約を発表したのだ。こちらのお相手は今、世間を賑わしているやり手の経営者高菜直樹だ、と発表されると、マスコミは一躍超有名人になった高菜直樹の弟であり、且つ御学友だった『宮戸島の英雄』高菜直哉から、何が何でも情報を引き出そうと、宮戸島に集結していた。

そんな取材過熱状態で、高菜二佐はおろか、艦娘達さえも外出出来ない状態が続いていた。特に、卯月が怯えているのだ。

「全く。周辺住民の迷惑を考えて欲しいものだよ」
いつも愛用している食堂のおばちゃん、夕飯を出前に来てくれる。

「確かに、こんな田舎の島にお金を落としてってくれるのは良いけど、一過性でトラブルもあるって言うからねえ」

ダイニングに並べられる、日替わり定食と唐揚げ定食二つ。

「ゲームが出来ないのが痛いのです。今度、威嚇砲撃して良いのですか?」

「男の人達が怖いぴよん……」

結局の所、卯月はまだ知らない男性が苦手なのだ。

ここ数回の交流で、武藤提督や高菜二佐に対しては懐いているが、それ以外の男性となると、大衆食堂やゲームセンターなど行きつけの場所の常連の一部に留まっているのだ。

だが、そのゲームセンターにも行けない状態で、二人のストレスが限界にまで高まっているのだ。

「砲撃をぶち当ててくるのです」

「いやあ、駆逐艦の艦砲だよ?そんな危ないもの向けたら駄目じゃないか?死人が出るよ。いくら何でも、それは殺人罪で刑務所に放り込まれるよ?」

そんな電を宥めながら、ふむと考える。

「まあ、食事でも取ってから、マスコミ対策は考えよう」

夕食を食べながら、テレビを点けると、宮戸島鎮守府の様子が映し出されている。

生放送である。おばちゃんが、報道陣を掻き分けて出て行く姿も見える。

電は無言で食べ続けていたが、がたと立ち上がって、外に走って行った。

「お、おい、電!」

慌てて追い掛けようとする、同じく追い掛ける卯月と高菜二佐が正面衝突する。

「うわっ!!」

「いたいぴよん!」

「ああ、すまない」

その時には遅かった。

沢山の報道陣の前で、電はこう叫んだのだ。

「電も結婚したいのです!!!」

「えっ?」

『えっ?』

高菜二佐も卯月も記者達も、啞然とする。

電の暴走が、全国のお茶の間に放送された瞬間だった……

その頃、南三陸鎮守府隣の官舎では、夕飯を四人で食べ終わったところだった。

テレビを点けていて、宮戸島の様子が映し出されていた。

「しかし、高菜二佐のところも大変だな。広報官とか、出してやれないのか?」

その報道過熱で、出て来られないのを、艦娘拠点通信でぼやいているのを聞いている長門が憤ると、

デザートのりんごパイを持ってきた武藤提督は、困った顔をしながら均等に切り分ける。

「自衛隊の出来事じゃないからねえ。私の方でも警備だけはお願しているんだけど」

そう言っていると、電が決意を秘めた表情で、画面に現れた。

「あれ、電ちゃん出てきたっばい」

「何する気だ?まさか、砲撃で追っ払うとか?」

「いくら何でもそれはないだろう?」

画面を指差す夕立に、まさかと顔を固くしながら、りんごパイを取ろうとする木曾、

そして、余裕綽々でお茶を飲む長門に、その対面に座る武藤提督。

『電も結婚したいのです!!!』

その言葉に、夕立は固まり、木曾は持っていたりんごパイを取り落とし、そして長門は盛大にお茶を嘔いて、武藤提督には熱いお茶が直撃した。

「なんて馬鹿なことをしたんだ!」

急いで飛び出して、二人掛かりで引き摺って電を連れ戻すと、

すぐに、足立二佐から業務用携帯電話に、電話が掛かって来た。

嫌そうな顔をしながら、電話に出る。

「はいもしもし、こちら葬儀屋」

『高菜二佐、今のは何だね?』

声の後ろで、大爆笑している女性の声が二人ほど聞こえる。おそろくは夫人とご令嬢だろう。

「ウケましたかね?」

『妻と娘には大ウケしている。まあ明日、広報官と警備をやるから、頼むからもう何もしてくれな。私の寿命が縮まる』

「そうしてくれることを、私も願ってますよ。テレビのキャスターにも大受けして、何か『艦娘の可愛い悪戯!湊子様ブームに乗った結婚宣言!』とかテロップ出ますよ。いろいろな意味でどうしてくれるんですか?と言いたいですよ」

『まあ確かに、君に言ってもしょうがないな。駆逐艦電三尉に代わりたまえ』

「了解しました」

そう言うと、高菜二佐はにこやかな顔をして、

「電、こわーいこわーい足立のおじさんから電話だよ」

と、業務用携帯を手渡す。

さああつと青くなった電は、電話に出る。

「も、もしもし、電なのです」

『足立一佐である。駆逐艦電三尉、今のはどういうことだ?説明してもらおう』

「あの、ついカツとなって……」

小さくなりながら、部屋の隅で正座をして、電話を受けている。

テレビでは、何故か『艦娘と提督の結婚』にテーマがすり替わり、そういう提督も認められている例もある、と専門家が解説している。

重婚は出来ないが、旗艦と結婚して残りを養子に迎える例もある、と紹介していた。

取り敢えず、マスコミ攻勢を逸らすことは出来たようだ。一瞬だけだが。

『カツとなって、ではない。君達艦娘に、提督を通した自由裁量を持たせている意味を考えたのか?まあ、砲撃を加えるなぞしなだけマシ

だし。君達も不自由な思いをしているだろう、その点はこちらの落程度だから、今回は不問に付すが……』

「威嚇砲撃は、少しは考えたのです」

『何を馬鹿なことを言っている!? だいたい君はだな……』

説教は、二時間続いた。

そんな電を、卯月と高菜二佐はやれやれ、と言った感じの顔をしながら見守っているのだった。

そして南三陸鎮守府では、武藤提督が壁際に追い詰められていた。

「お、おい、お前達、落ち着くんだ」

「結婚できる例がある、と言っていたな?」

「もう年貢の納め時だぜ?」

「長門さんと結婚して、私達を養子にするっぽーい!」

武藤提督は、壁に背を預けていた。もう逃げられない……

そこに長門がドンっと手を付く。

「さあ、結婚するかしないか、はつきりしてもらおう」

「な、長門……」

武藤提督は進退窮まった。後に言う、南三陸壁ドン事件である。

翌日、地方協力本部の本部長が派遣され、鎮守府近くの島民会館で、記者会見を執り行うことになった。

高菜二佐と、宮城地本本部長の宮本一佐と足立一佐が並ぶ、物々しい記者会見である。

冒頭に宮本一佐が起立して、

「宮城地本の宮本一等海佐であります。この記者会見は自衛隊の件ではないのですが、マスコミ取材過熱が激しく、周辺住民に迷惑を及ぼし、また部隊の作戦行動にも支障が出る、と判断したので、開催しました。本日は、高菜直樹氏と湊子内親王殿下の婚約発表及び、高菜・三友合併の件のみ、高菜直哉二等陸佐の湊子内親王殿下の御学友として、また高菜直樹氏の弟としての談話の後、質疑応答を行います。答えられない点、わからない点が多いですがどうかご容赦ください。そ

して、これ以降の宮戸島全域での取材を自粛していただきたく思います」

そう言って着席すると、足立一佐と高菜二佐が起立する。

「大本営警務隊長足立一佐であります。昨晚の駆逐艦電三尉による不適切発言の件では、世間に迷惑をお掛けしたことを、お詫び申し上げます」

そう言って、足立一佐と高菜二佐が頭を下げる。

因みに世間での評価は、九割近くが『可愛らしい』と取ってくれたのが救いである。

取材陣からも、ここでドツと笑いが上がる。

ただ、高菜二佐の退路も絶たれたことは間違いない。

数十秒頭を下げてから、椅子に腰掛ける。

「では、高菜二佐、談話をどうぞ」

宮本一佐に促されると、頭を搔いてから口を開く。

「いやあ…そうですね、今回の件は大変喜ばしいと思っております。兄・直樹もまだまだ未熟なところも多々あると思いますが、私は兄のことを尊敬しております。父が早々隠居をし若くして会社を継承し、この度は日本を代表する大企業のトップに就任して、今まで以上に身が引き締まる思いでしょう。それに加えてこの度の婚約発表、兄はこれから今まで以上に精進しなくてはなりません。高梨宮道仁親王殿下、天皇・皇后両陛下のご期待に背くことなく、日々励むことを私も信じています。また、湊子内親王殿下に於かせられましたは、我が高菜家に降嫁賜りますことは、高菜家を代表いたしましたして、大変光栄に思います。弟として、また殿下の御学友としては、兄と湊子内親王殿下が末永く、仲良く幸せに暮らして行ってもらうことを願うばかりです」

その後、質疑応答が続いて、記者会見が終了し、漸くマスコミは宮戸島を後にした。

因みに、電の結婚したいの一件は、ノーコメントを貰いた。

残された三人は、漸く解放されたのだ。

「いやあ、参りましたよ。何でもっと早く、広報を寄越してくれなかつ

「たんですか?」

「まさかここまで、とは思っていなかったよ」

宮本一佐が、申し訳なさそうにする。

「しかし、彼女のあれは本心ではないのかね?」

足立一佐は鋭く切り込む。

「……分かつてはいるんですけどね。本当に本心か、どのタイミングで言えればいいか、判らなくてですね」

「何だ、だらしない」

「足立一佐はどちらからでしたか?」

高菜二佐が意地悪そうな笑みを浮かべると、コホンと咳払いして応える。

「私も君に似て、そういうことが鈍い方だな。妻の方から言われたよ」
「私の場合は、私の方からでしたな」

宮本一佐も加わる。

その時に電話が鳴った。武藤二佐からだった。

「出て構わんぞ」

その足立一佐の言葉に、スピーカーフォンで出ると、

「今すまないけど、立て込んでいて……」

『いやあ、高菜二佐。今日長門と結婚して、木曾・夕立を養子に迎える手続きをしてきたよ』

「「はい!」」

「いや、足立だが武藤、それはどういうことだ!」

「たまらず、足立一佐が会話に加わる。」

『これは足立君、昨日の放送で長門達に追い詰められて、世間で言う壁ドンをされて結婚を迫られてしまっただけ』

「「……」」

「三人共、顔を見合わせて絶句だ。」

『それで、小ぢんまりと結婚式をやるんだが……私には身寄りや親戚も少ないし』

「いやいやいや。地本の宮本だが、そういうことは地本と相談してくれ! 艦娘のPRに関わることだ!」

今度は、宮本一佐が慌てて会話に入る。

『分かりました、それでは相談させてもらいます』

「わかった。わかったからすぐ行く、待っていてくれ」

そう言うと、宮本一佐は急いで会見場の島民会館を後にした。

「今、宮本一佐が向かった。取り敢えずおめでどう、と言っておこう」

「私からも、おめでどうと言っておくよ。こっちは大変だったよ」

『でしような。生中継してましたから』

「全く、宮戸島の駆逐艦電三尉は、世間の艦娘人気を上げ、一旦は取材の矛先を逸らし、そして同期の結婚もアシストするとは、たまげたな」
『ですな。これで、高菜二佐も逃げられなくなりましたな。はっはっは』

「いや、どうしたものかと思っただね。取り敢えず、結論は武藤二佐の結婚式まで先送りしますよ?」

『ふむ、まあしっかり考えると良い』

その直後、『提督、早く出かけるぞ』と言う長門の声に電話が切れる。

「全く……困ったものだ」

静かな大会議室に、足立一佐のボヤキが響き渡った。

サプライズブライダル

結婚式に当たって、武藤二佐が宮城地^{地方協力本部}本と相談し、和装に拘る彼の為に、「人前式」と言うプランを、ウエディングプランナーが提案した。

神前式は、基本家族のみだが、武藤家には両親はおらず、艦娘側も当然そうなる為、

ならば、和風の式場を借りて、人前式にすればいいのではないかとこの結論に至った。

招待する提督達も、女川・宮戸島・気仙沼等、親しい提督だけを招待した。

この日に当たっては、横須賀鎮守府所属の警備艦隊が東北を守ることになっていて、

艦娘達も全員参加の、賑やかなパーティーとなる。
大本営^{艦娘本部}からは、大貫空将と足立一佐が参加して、

宮城地本からも、宮本一佐が参加する。
小ちんまりと言うことで、軍高官は招待せず、最上位者は大貫空将の参加に留まっている。

その代わり、大貫夫妻が仲人となっている。
駐車場に、車を停めて降りる高菜二佐。
ブランド物の礼服で、髪もかっちり整えている。

後ろから降りて来る、電と卯月も可愛い和服で、夏用のものをレンタルしたのだ。

受付では、宮城地本の人達が受付を担当し、皆順番に記帳を行っている。

「この度はおめでとうございます」

「おめでとうだぴょん」

「おめでとうなのです」

それぞれ、包んだ熨斗袋を受付に手渡すと、それぞれが記帳する。

控室には、既にいろんな艦娘達が会場に集っており、ワイキヤイと会話を楽しんでいる。

和風だったりドレスだったり、真面目な娘は制服を身に着けている。

「お久しぶりです、先輩」

そう声を掛けて来たのは、そばかすが特徴的な、控え目な留め袖の女性。

気仙沼鎮守府の、大村奈々海二等海佐である。

「いやあ、久しぶりだねえ。そっちは最近どうだい？」

「何時も通りです。なかなか北方への開拓が出来ませんね」

こちらの麾下艦娘は、三笠、武蔵、大鳳、加賀、翔鶴、瑞鶴という航空打撃部隊であり、強めの敵をどんどん倒している有望株である。

士官学校の三期後輩で、最上級生の時にシミュレーションで対戦してから、才能を買っていた。

彼女は「逃げる振り」が巧みで、逃げ帰っては急反転して攻撃する等、地形を利用した攻撃が得意なのである。

桐山に並ぶ進軍派だが、もう片方はよく失敗するので、強い方の進軍派と呼ばれている。

「初めまして。電三尉なのです」

「卯月士長だぴょん！びしっ」

二人仲良く敬礼をすると、奈々海も敬礼を返す。そう、卯月は昇進したのだ。漸く。

「私は大村奈々海二等海佐、よろしくね？」

「ところで、留め袖ってことは……」

「ん、既婚者だよ。旦那は今、ドバイで先輩のお兄さんの貿易会社の社員。娘がいてねー、夏海く」

そう声を掛けると、中学生の制服を着たおかつぱの女の子と、艦娘達が出て来る。

「こちら、高菜直哉二佐。こつちが、うちの娘の夏海と、艦娘達」

「初めまして。『宮戸島の英雄』に初めてお目にかかれるとは、光栄です」

その言葉に、苦笑いを浮かべる高菜二佐。

「期待してたものと違って申し訳ないねえ」

「いえいえ、とんでもありません、親しみ易そうで…」

そう言うと、少し照れて大村二佐の横に下がる。

「三笠よ。階級は三尉」

「武蔵だ、同じく三尉」

「大鳳です。曹長です」

「加賀よ、曹長」

「瑞鶴です。一曹です」

「翔鶴です。妹と同じく一曹です」

順番に自己紹介をして来る。

それぞれに、自己紹介と挨拶をすると、電と卯月は艦娘達に連れられ、お菓子のテーブルの方に向かって行く。

すると瘦身の、いかにもエリートだと言った感じの男が声を掛ける。

「やあ、高菜君。久しぶりだね？」

そう、声を掛けて来たのは、自分の一つ先輩の桐山 崇二等空佐である。

「どーも、先輩」

「ご無沙汰してます、二佐」

高菜二佐は緩やかな敬礼で、大村二佐はびしっと敬礼する。

「うむ。高菜くんには、いつも戦果を横取りされて困っているよ」

「そうなんですか？」

経緯を知らない大村に、高菜二佐は軽く肩を竦めると、

「だったら、敵を連れて近海までお戻りにならないことをお勧めしますよ」

と、毒の入った言葉を叩き付ける。

「貴様っ！」

憤った桐山二佐に、すぐに神通が駆け寄る。階級は曹長。

「申し訳ありません」

と謝って、神通が連れて行く。

「まあ、あの唯一の良心がいる限りは、あれより酷いことにはならないだろう」

桐山の背中を見送りながら、そう呟くと、

「まあ、そろそろ始まるから、我々も向かおう」

「そうですね」

広い和室に席が並べられ、人間側と艦娘側に、左右で分けられる。

新婦側が、艦娘達である。

司会席にいる足立一佐が、準備ができた。と連絡を受けると、一呼
吸措きマイクに声を発する。

「本日はお忙しい中、また遠方より武藤 廉さんと戦艦長門さんの結
婚式にご列席いただきまして、誠にありがとうございます。」

只今より、新郎新婦が入場いたします。正面入り口にご注目くださ
い。どうぞ盛大な拍手でお迎えください」

新郎・武藤 廉は白の紋付袴で登場する。恰幅が良いので、紋付袴
もとても似合う。

それに手を添えて、横に並び立っているのは、白無垢に綿帽子姿の
長門である。

しずしずと、二人並び立ち、参列する皆の前を歩いて行き、一番前
の一段高いところまで歩くと、参列客の方を向いて一礼する。

「それではこれより、武藤 廉さんと戦艦長門さんの結婚式を始めさ
せていただきます。」

この結婚式は、新郎新婦の希望により、お二人が日ごろからお世話
になっている皆様の前で結婚を誓う、人前式のスタイルで行います。
本日お集まりいただきました皆様全員が、結婚の証人となる訳です。

どうぞ皆様、お二人の結婚の誓いを、しっかりと見届けてくださ
いますよう、お願いいたします。

申し遅れましたが、私は本日の司会を務めさせていただきます「足
立昭彦」と申します。新郎新婦とは同じ職場の同期です。不慣れな
為、行き届かない点もあるかと思いますが、精一杯務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします」

それから、足立によるプロフィールの紹介が始まる。

そして、結婚するに至った経緯になると、

「……で、過日の生放送の『電も結婚したいのです』と言う発言に触発

され、三人で結婚を迫ったところ、承諾した訳であります」

と言う言葉に、電は顔を真っ赤にして俯き、会場からはどつと笑い声が上がると。

「では次に、新郎新婦より結婚の誓いの言葉を述べさせていただきます。廉さん、長門さんお願いいたします」

その言葉に、ちらつと二人を見ると、最前列の夕立と木曾も立ち上がり、壇上に上がる。

そして四人で、

『私達は、本日ここにご列席いただきました皆様の見守る中、家族となりました。』

これからの人生、いかなる時も生涯変わらぬ愛を約束し、生涯家族として生きて行くことを誓います。そして、家族で海の平和を守り続けて行くことも誓います」

「新郎 武藤 廉」

「新婦 戦艦長門」

「娘 巡洋艦木曾」

「同じく駆逐艦夕立」

「それでは、指輪の交換に入りたいと思います。艦娘のケツコンとは、提督との永遠の絆を願って付けられるもので、深海棲艦の姫を倒すと得られる『霊子の結晶』によって精製されます。艦娘の潜在能力を大幅に引き出し、より強い艦娘になれるように、家族の証として四つ用意してあります」

そう言うと、大貫空将が立ち上がり、リングピローを二つ持って来る。

廉の前で片方を開けると、リングが三つ入っている。

「まずは、新郎から新婦、そして娘達へとリングを贈ります」

その言葉で、廉は長門、木曾、夕立の順に指輪を左薬指に填めていく。

今度は、もう一つのリングピローを三人の艦娘に差し出す。

それを、するつと三人で取ると、三人の手で廉の左薬指に填めていく。

その時、四つの光が輝き、光が収まると白金色プラチナにキラキラ輝き続けている。

「想いがある限り、指輪は輝き続けます。この指輪は、艦娘を統括される大貫空将直々に届けていただきました。ありがとうございます」
「おめでとうございます。皆様、二人の結婚を承認いただけますでしょうか？承認いただけるようであれば、盛大な拍手をお願いいたします」

全員が立ち上がり、盛大な拍手で迎えた。

「それでは、ご参列の皆様の承認を得て、ここにめでたくこの家族の縁が成立となりました。ご結婚おめでとうございます」

一同が、再び拍手の嵐で迎えた。

そして、全員が披露宴の席にやって来て、披露宴が始まる。

席は、鎮守府毎で分かれている為、電と卯月と高菜二佐で一つのテーブルになる。

新郎新婦は、お色直しで一旦引っ込んで、

再び登場すると、今度は儀礼服とウエディングドレス姿である。

木曾と夕立も、それぞれ黒と朱のドレス姿で登場である。

そしてブーケトスが始まるが、長門がマイクを手に取る。

「済まないが、ブーケを渡すのは既に決めている。駆逐艦電、受け取れ」

事前に相談を受けていた、気仙沼鎮守府の加賀が、ブーケに矢を向け放つと、艦載機が一機飛んでブーケを雷装アームでガツチリ？むと、宮戸島鎮守府の席の電に向かって落とされる。

「あ……………」

「……………」

手元にブーケを受け取って驚いている電に、

「頑張れ、後はお前次第だ」

とサムズ・アップする。

すると、艦娘達からは拍手と黄色い声援が上がり、電は狼狽える。

もちろん、高菜二佐も狼狽えているが、卯月も拍手をしている。

全ては、この結婚式に仕組まれた作戦だったのだ。

廉の、せつかくなら披露宴で電と高菜二佐をくっ付けたい、と言う発言から始まったのだ。

気仙沼の加賀、そして宮戸島の卯月にも協力を依頼したサプライズである。

自身の結婚式でプロポーズをさせるとは、なかなか大胆な男である。

そして、さっと式場の人が、電にマイクを手渡す。

スポットライト
照 明も、電と高菜二佐に集まる。

「あえっ、その……………」

「言っちゃえっばいー!!」

一際大きい夕立の言葉に、ゴクリと唾を飲み込む。

「高菜二佐……………直哉、電と……………私と結婚してほしいのです」

その言葉に、全員の歓声上がる。

そして、直哉に渡されるマイク。

「あーいや、困ったな。どうやら、私は包囲されていたようだね。電、君が男としての好き、だと言うなら、喜んで君のプロポーズに応えよう」

「おめでとー!!」

本来の主役、廉の大きな声が会場に響くと、拍手の嵐になる。

その後は、合同披露宴みたいな形になって、大盛り上がりになった。

卯月が、こっそり机から持ち出したケツコンリングを取り出して、蓋を開ける。

「指輪交換だぴよん」

そう言われて皆が見守る中、先に直哉が電の左薬指にケツコンリングを填める。

そして次に電が、ケツコンリングを直哉の左薬指に填める。

そうすると、光り輝いて電の姿が、少し大人びた感じになった。

ほんの少しだが……………

そう。電のチート能力、改三能力が開封された瞬間だった。

その後は、再び武藤家の結婚披露宴に戻り、空母艦娘のミニ航空ショーやら、

いろいろな余興をしながら、楽しい披露宴になった。

その後、直哉と電と卯月は、それぞれの五次会まで参加したが、翌日三人共運転代行で帰り、官舎のリビングでばたんきゅーしているところで、目を覚ますことになる。

「イタタタ……飲み過ぎたかな？」

「飲み過ぎたのです……」

「うー……頭痛い」

そう。艦娘に、飲酒禁止は関係ないのだ。

新生活

あのサプライズ結婚式の翌日、市役所に婚姻届を提出した、卯月に関しては、電の意向で養子に貰うことになった。

卯月と電が、艦娘側二次会辺りで話し合って決めたらしい。

二人の結婚式は、電曰く「あれで十分楽しかった」ということで、やる予定はない。

「という訳で！」

婚姻・養子縁組届を提出し終わって、執務室に戻って腰掛けたところで、卯月が声を上げる。

「ん？」

「どうしたのです？」

首を傾げる電と直哉。

「艦娘寮を作った方が良いと思うびよん！」

「何で？」なのです？」

同時に言う二人に、大きな溜め息を吐く卯月。

「うーちゃんがいると、いろいろ問題があるかもびよん」

「直哉、あるのです？」

「ないな、うーちゃんは何を言いたいんだい？」

みるみるうちに、顔を赤くしていく。

「だから、うーちゃんいると、よっ……夜の生活が……っ」

その言葉に、電の動きが止まる。お顔が耳まで真っ赤である。そしてあまり動じない直哉。

「ああ、そういうことかあ。そうになると、上との相談が要るなあ？」

「そうなんだびよん？」

首を傾げる卯月に、頷く直哉。

「ここは自衛隊の土地で自衛隊のものなんだ。クイーンベッドとか、収納とかは私のだが……」

「いっその事、近くに家を借りれば良いのです。ここは艦娘寮兼休憩所と言うことにすれば」

「ああ、艦娘が増えたら、あの無駄に広い14畳の部屋に二段ベッドを置けばいいか？増える予定はないけど」

「なのです」

実際今は、攻撃の意志が強い艦隊以外は、近海防衛任務で事足りる艦隊しか持っていない。

「それじゃあ、不動産屋に訊いてみるか？」

「お出かけなのですね？」

「わかったぴよん」

三人で仲良く手を繋いで、不動産屋さんに向かう。

小さな不動産屋さんのおばさんは、夫に先立たれ、一人で不動産屋さんを切り盛りしている。

もちろん、大衆食堂の常連さんである。

「やあ、高菜さん。今日はどうしたの？」

「こんにちは。ちよつと、鎮守府から近い家を探しててね」

その言葉に、おばちゃんが笑みを浮かべる。

「あらま。本当に結婚しちゃったんだね？電ちゃん」

「なのです」

「宮戸島全島避難の時に、戸数が半分に減っちゃったからねえ……鎮守府沿いなら大体あるけど……」

そう言いながら、老眼鏡を掛けて大型タブレットを操作する。

今は、こんなところまで電子化時代なのだ。

幾つか候補をプリントアウトしてもらおう。間取り図から何やらが載っているのだ。

古民家が多めだが、そこで見つけたのは、見た目新築に見える家だった。

「この家は、割と新しいね？おばちゃん」

「そうなんだよ。オーナーが全面改築を始めたところで、あの深海棲艦だろ？全面改築をし切ったものの、もうこの家には住みたくないい、って賃貸に出しちゃったんだよ」

「それじゃあ、ほぼ改築したてってことか……」

腕を組んで考える。転勤の可能性を考えると購入はできない。

「この金額なら借りてもいいか。おばちゃん、中を見ることはできるかな?」

「あいよ、それじゃあ行こうかね?」

不動産屋のおばちゃんが立ち上がると、鍵箱を開けて、鍵を持ってくる。

「歩いてすぐだから、歩きでいいよね?」

そう言いながら、三人と共におばちゃんは家に向かって歩き始める。

鎮守府から歩いて三分位のところにあつたその家は、古民家が多いこの島で、一際目立っていた。

「ほー、中もいいですかね?」

直哉が外観の良さと、駐車場がきちんとあるのを見ると、おばちゃんは既に鍵を開けている。

「スリッパ無いけどごめんね。掃除は、定期的に入れてるみたいだけど」

そう言うと、扉を開ける。

二畳くらいの玄関と靴箱、そしてすぐ右側の壁沿いに二階への階段があつて、突き当りに洗面台がある。

「「お邪魔します」ぴよん」なのです」

不動産屋のおばちゃんが先に上がつて、その後には上がると左側にある扉を開ける。

「うわあ広いぴよん!」

かなり広いLDKになっていて、キッチンも新しくなっている。キッチン側から廊下に出ると、

洗面台の先にトイレとお風呂と家事室が、並んで設置されている。

お風呂もタイル張りで、リフォーム直後だ。トイレもウオッシュレット付きの新しいものである。

「わあ、綺麗だぴよん」

「お風呂も広くて、三人で入れるのです」

「「さ、三人?」ぴよん?」

天然発言をかましている電に、啞然とする卯月と直哉。

その様子を見て、不動産屋さんのおばちゃんは、笑いを堪え切れない。

「まあまあ、上も見てって頂戴」

そう言うと、階段を登って行く。

階段下は、全て収納となっていていろいろ入りそうだ。

階段を登って左側、リビングの上にある部屋は十畳ずつで、間に共有ウォークインクローゼットが付いていて、お風呂やら家事室の上部分の場所には、八畳の和室がある。

「ふむ、3LDKか？収納も十分だし、ここで良いか？」

「はいっ!!」

こうして、すぐに不動産屋に戻って契約となる。

家賃はそれなりだが、三人のお給料と合わせれば、生活できるほどのものだ。

結婚と養子縁組により電、卯月にも高菜姓が付けられることになり、同居人欄のサインも高菜 電・高菜卯月で署名する。

「これで、この金額だけ…振り込みましたよ」

おばちゃんが、敷金礼金込みで前家賃等を記した金額を指差す時には、直哉はネットバンキングで振込を終わらせていた。

「早いわね。ちよつと記帳するから、待ってて頂戴」

そう言うと、慌てて通帳を持って銀行へ走って行った。

「お部屋はどういう分け方にするのです？」

「うーん、10畳の一つは寝室だろ？もう一つは卯月の部屋にして……」

「電は多分リビングにいますと思うから、直哉の書斎が良いのです」

「それで良いぴよん。早速テレビゲームも買えるぴよん」

「なのです！」

「それじゃあ、これが終わったら、次は家電屋に行こうかね？」

「はいーい！」

元気良く返事をする頃には、おばちゃんに戻って来る。

「大丈夫。銀行行きながら大家さんに訊いたら、即入居していい、ってさ。契約書は後でうちに送るわね」

「分かりました」

そう言うと、おばちゃんから鍵を三つ受け取る。

それぞれが大事に持つと、次は家電屋に向かう。官舎の物は貸与品なので、持ち出しは出来ないのだ。

「冷蔵庫と洗濯機と、テレビと、あとはオーブンレンジに、炊飯器か……」

家電量販店で呟いていると、電は卯月の手を引いてゲーム機のコーナーに走って行く。

それを見送ると、やれやれと笑いながらポケットに手をつ突っ込んで、冷蔵庫から見て行く……

直哉が、従業員に言われるがままに、ホイホイ即決している間に、電と卯月はゲーム機を見ていた。

「うーちゃんがどーんと出すから、安心するぴよん」

一年分の給料を、纏め払いされた卯月は超強気である。

結局、最新家庭用ゲーム機とゲームソフト数本を、即決で買ってしまったのである。

そして翌日、引っ越しであるが、持ち出せる物がそう多くないので、業務用軽トラックで何往復かすれば事足りる。

電が、残す物と持って行く物を選別して、卯月が積み込んで、直哉が卯月と一緒にトラックで運ぶ、

直哉と卯月が引き返して来て、の繰り返しである。

三人共、溜まりに溜まった代休を取つての一日仕事である。

途中、リビングのソファやテレビ台等もホームセンターで購入して、昼過ぎには買っていた家電の数々が入って来て設置される。

そして、念願のテレビが入って来ると、電は啞然として、卯月はばんじゃーいと騒ぐ。

テレビは、80V型4Kテレビなのである。

「い、いくらしたのですか?」

「カードで買ったから覚えてないよ。ええと……129万……」

「そつ、そんなお金がうちには!」

と言つてから、へなへなつとソファに座り込む。

目の前の男は、お金持ちのボンボンだったのだ。

「大丈夫だよ。給料で払って行けるように分割でローン組んだし、そのくらいの蓄えもある」

「まあいいのです。早速ゲームをするのです」

数分後。

「さっきの言葉取り消し！画面が凄く綺麗なのです！」

「うん、きれいな画面だぴょん！」

仲良くゲームをしている二人を見ながら、この子達をずっと守って行こう、と思うのだった。

その時、電話が鳴る。電話を掛けて来たのは直樹、直哉の兄からだ。

「はい、もしもし」

『突然で済まない、今忙しいか？』

「いいえ？」

『まずは、結婚おめでどうと言っておく』

「お互い様にですね、おめでどうございます」

『それでだが、東京に来れるか？丁度湊子様と優衣、龍太郎君の都合が付きそうなので、今週の日曜メシでもどうかと思ってな。無論、電と卯月も連れてだ』

「了解、二人に伝えておくよ」

『ああ、頼む』

と言って、速やかに電話が切られる。

「どうしたのですか？」

「どうしたぴょん？」

振り向いてた二人の頭を撫でて、

「新しい家族でメシでもどうか？って兄貴から。日曜日だけど、東京に行くぞ？」

「はいっ！」

三人の新生活は、始まったばかりである。

東京への旅

その電話の翌日に、三人分の新幹線の往復チケットが速達書留で送られてきた。しかも、グランクラス車である。

それに、ホテルのスイートルームの宿泊券も。

「やれやれ、これは泊まり掛けになるかな?」

「お泊り出来るのですか?」

二人のその期待する言葉に、直哉は司令官コンピュータで周囲の状況を確認すると、ポケットから電話業務用携帯を取り出す。

電話の先は、大村二佐である。

『はい。もしもし、高菜先輩。どうしました?』

「うん。あのさ、今週の日月、艦娘を半数こっちに回してもらえないかな?」

『ああ、良いですよ。お出掛けですか?』

「うん。ほら、うちの三兄姉弟、揃って結婚だろう?一同に会して食事でも、って」

『ああ、是非行ってください。周辺の掃討なら、武蔵と大鳳で十分でしょう。と・こ・こ・ろ・で』

「うん?」

『もちろん謝礼はありますよね?どういうお酒で引き受けようかなって』

楽しそうな声色の、遠慮のない後輩に、やれやれと肩を竦める。

「ああ……なつちゃんに怒られるよ、飲み過ぎは。二次会前に『飲み過ぎないでください、母さん』って言われてたじゃないか?」

『いつもの事ですよ、腕を組んで『飲み過ぎは身体に毒です』ってさ』『なつちゃんが、艦娘側二次会に行ったのを良いことに飲みまくってたね』

『怖い目付役がないからですよ。結局叱られましたけど。』

そう。大村奈々海二佐は大酒豪で、いわゆるワクなのだ。

いっつも、お酒を飲んでいるのを奈々海の娘夏海に咎められているのだ。

同じく大酒豪の武蔵と共に。家計を握っている夏海には、誰も敵わない。

気仙沼鎮守府最強は、ある意味夏海なのだ。

余談だが、奈々海麾下の艦娘達は、全員養子に迎えている。

つまり夏海は、大村家最強の妹様なのだ。普段のおとなしい様子からは想像がつかないが……

「まあ、了解。コニヤツクを送るよ。今日注文するから、明日明後日には着くと思うよ』

『有難うございませす！いやあ、楽しみだなあ』

嬉しそうな後輩の声を聞くと、頬が緩む。

「それじゃ、頼んだよ」

電話を切ると、二人にOKマークを示す。

「やったあ!!」

二人は「ばんじゃーい」と飛び上がる。

提督の自由裁量でこうやって、周囲の鎮守府に応援を頼み、休暇を取ることも可能なのだ。

特に、この宮戸島鎮守府は桐山の尻拭いで休みが取れず、代休が溜まっている。

そして、提督と家族となっている艦娘には、提督と同行する権利が与えられる。

要するに、卯月を家族に加えた理由の一つでもある。

結婚してから、夜の営みと言うのは、未だに行えていない。

桐山が嫌がらせのように、夜に深海棲艦を連れて、宮戸島海域に放置して行くのだ。

毎回、ムードが高まったところで緊急通信が鳴って、

共有ウォークインクローゼットの中で、聞き耳を立てている卯月と共に向かうのだ。

遠慮はしているものの、電ちゃんの乱れる姿をわくわくしているお年頃。

トラウマも、少しずつ癒えて来ている証拠である。

日曜日。またまた夜勤を終え、仮眠を取ってから三人共起きると、リビングに集合する。

直哉はスリーピーススーツで、二人は艦娘の正装、制服姿である。荷物は、既に宅配便で送っており、手回りのカバンだけでの移動である。

二人は、ホテルに移動したらお揃いのドレスに着替える予定なのだ。

一路仙台駅まで移動してから、新幹線に乗るのだ。

駅の駐車場に車を停めると、都会である仙台の人通りの多さに目を丸くする二人。

卯月はぎゅつと、電の手を握る。

「日曜の東京駅は、もつと人が多いよ」

そう笑って、二人の頭をぽんと撫でると、それぞれの手を繋いで、駅のホームへ向かう。

それぞれ改札できつぷを通すと、新幹線の広いホームに出る。

「さて、お弁当を買おうか？」

それぞれの駅弁を買うと、艦娘達はルンルン気分で新幹線を待つ。新幹線がやって来ると、車内に乗り込む。

高級感溢れる一列3シートで、一番うしろの席だった。

2シートの方を卯月が譲ろうとしたが、

「行きは、うーちゃんと楽しくおしゃべりしながら行きたいのです」と言う電の要望により、直哉が1シートの方に足を組んで座る。

走り始めると、電達はびゅんびゅんと駆け抜けて行く車窓の光景を、目をキラキラさせて見ている。

「速いのですー!」

「いい景色だぴょん!」

それを眺めながら、持って来た缶コーヒーを口にする直哉だった。東京駅に到着した三人を待っていたのは、ものすごい人混みだった。

「ものすごい人なのです!」

「あ……あうう」

卯月の様子が、驚きから怯えに変わっている。

あまりに人が多過ぎて、トラウマが発動し始めている。

「うーちゃん。大丈夫？直哉、うーちゃんをおんぶするのです」
「あいよ」

卯月を背負って足早に、人混みから逃げ出すように駅を後にする三人だった。

取ってあるホテルは、東京駅からすぐのホテルで助かった。

「うーちゃん、大丈夫？」

「うん、大丈夫だぴよん……」

すぐにチェックインを済ませると、お部屋に通される。

リビング付きのスイートで、ベッドルームに向かうともものすごく大きいベッドがある。

今二人で寝ている、クイーンサイズのベッドよりも大きい。

「ベッドが大きいのです」

「広いぴよん」

「これは、キングサイズのベッドだねえ」

「じゃーんぷー！」

ぽふっと、電がダイビングする。ぱんつ丸見えである。

「うーちゃんもするぴよん！」

続いて卯月もダイブする。言わずもがなである。

その様子を、微笑ましげに見ている直哉。

「直哉も来るのです」

両手を広げて待っている、電の真横にダイブする直哉。

両側から、両腕を抱き締める電と卯月。

何だかんだで、卯月も直哉のことは大好きなのだ。

約束の時間は、ヒトハチマルマル1800。今は、まだヒトヨンマルマル1400。

「ちよつと昼寝でもしようか？」

そう言いながら、目を閉じる直哉。

結局、事後処理やら何やらで、直哉はほぼ徹夜なのだ。

寝息が聞こえる直哉越しに、二人目を見合わせる電と卯月。

数分後、仲良く川の字で眠っている三人。

電と卯月は、ぎゅつと直哉を抱き締めていた。

「レデイのお着替えなのです！」

夕方1700ヒトナナマルマルに目を覚ますと、直哉はベッドルームから追い出される。

ベッドルームでは、楽しそうな声が聞こえている。

お揃いで買ったドレスに着替えているのだろう。

そんな中、直哉は別のスリーピース・スーツに着替える。

「お待たせしたのです」

「お待たせだぴよん」

二人手を繋いで、ベッドルームから出て来た。

色違いのお揃いのドレスである。そう言えば、二人して服屋に行っ

てたがこれだったか、と直哉は納得する。

「それじゃあ、行きましようかね、小さなお姫様方」

「はーい！」なのです」

ロビーに降りると、

「電ちやああああああああん!!!」

と声がして、優衣が突進して来る。優衣の姿はまたまたフォーマルスーツである。

卯月と直哉がひよいつと回避すると、抱き締められる電。

そのまま、クルクルつとダンスを踊るように抱き締めている優衣を放っておいて、もう一人のスーツ姿で眼鏡の、まだ少年にも見える青年の方に向かう。

「始めまして、三友龍太郎くんだね？高菜直哉だよ」

「存じてます。初めまして、三友龍太郎です。『宮戸島の英雄』だ、と優衣さんから何度もお伺いしております」

手を差し出すと、両手で握手をする年下の義兄である龍太郎。

「高菜卯月だぴよん。よろしくだぴよん」

「うちの、養子の艦娘。君にとっては義理の姪っ子になるかな？」

「よろしくね、卯月ちゃん」

優しく頭を撫でる。

「ぴよん」

電を抱き締めたまま、優衣も戻って来る。

「姉さんも、いつもどおり通常運転だね。で、今日はどこで食事？」

「皇帝ホテルの鉄板焼きー」

「皇帝ホテルか。まあ、あそこは警備もいいし眺めも良い。しかし兄さん、奮発したな」

「鉄板焼きって何なのですか？」

「お肉とか野菜を、シェフが焼いてくれるところだぴよん。査察の前
の日に前の提督が連れてつてくれたぴよん」

「……………」

その言葉に、言葉を失う二人に龍太郎は、

「件の悪徳提督ですね。そうやって不正に得た金銭の共犯に仕立て上げて、口止めしてたんでしようね？」

「卯月は共犯だぴよん？」

「いいえ、被害者です。でも、査察で後ろめたくて言わせないようにしてたんでしようね？」

そう言うと、卯月の頭を撫でる龍太郎。童顔の優男は、卯月にとっては恐怖ではないようで、大人しく頭を撫でられる。

「はいはい。湿っぽい話は抜き、今日は楽しみましょう。だって、高菜優衣最後の日なんだから」

「何だ、もう籍を入れるのか？」

その問いに、代わりに龍太郎が応える。

「はい。新会社設立の登記日に合わせて入籍をしよう、つてことで」
「そうか、おめでとう。こんな物体だけど、大丈夫だったかな？」

誂うように言うと、頬を膨らませる優衣。

「物体言うなし」

「いえっ、優衣さんは僕にとつてもつたいたくないくらいです。綺麗で、キュートなところがあって、カッコよくて……将棋も上手くて、頭も良くて……………」

顔を真っ赤にしながら、優衣の魅力を語り出す龍太郎に、顔を赤くする優衣。

「もう、龍太郎……」

「はいはい、ご馳走様。それじゃあ、向かおうか。お出迎えに来たんだらう?」

「はい。僕は、未成年なので運転手役です」

そうして、ホテルの前に駐車している車を指す。国産車の大き目の五人乗りセダンである。初心者マーク付きである。

「ではよろしくお願いね」

直哉の声で、車に向かおうとする一同。そこで電が口を開く。

「いい加減に下ろすのです」

「あっ」

ずっと、抱っこされていた電だった。

晩餐会、そして……

優衣の運転で、皇帝ホテルに向かって車を走らせる。
行きは優衣で、帰りは龍太郎である。

龍太郎達も、同じホテルで宿泊しているようだ。
「そう言やさあ、艦娘の義妹持つの初めてだから訊くんだけど、夫婦の
営みってしてるの?」

「!?」

「ぴょん!」

「ゆ、優衣さん!」

その奔放な発言に、顔が真っ赤になる三人。直哉だけは動じてない。
い。

「んー、今のところ忙しくてね、な?電」
「な、なのです」

顔が耳まで真っ赤な電は、何とか応える。

「そう言う、姉さんはどうなんだよ?」

お返しのように問うと、優衣はアハツと笑う。少し照れた表情で、
「婚前交渉は、しない主義なの。こう見えても、しっかりしてるのよ
?」

「……………」

龍太郎くんは、顔が真っ赤である。

「それで、明日から三友邸に住むことになるん?」

「そうそう。あっちのお義母さんとも意気投合しちゃって、明日マン
ション引き払って引っ越し予定よ」

「そっかそっか。手伝いに行けないけど、悪いな」

「良いって良いって」

「龍太郎くんも、こんな物体だけど、よろしく頼むね?」

「はいっ!優衣さんは、僕にはもったいないくらいいい人です!」

その言葉に、「もう…」と優衣まで顔を赤くする。

その車内で、「はっはっは」と、直哉だけ笑っている。

皇帝ホテルの地下駐車場には警備の皇宮警察官が配置されており、

鉄板焼きのフロアにもいるだろうことは、想像できる。

その警察官の見守る中、エレベーターに乗り込んで、鉄板焼きのフロアのボタンを押す。

エレベーターを降りると、オールバックに眼鏡を掛けた、スーツ姿で長身の愛想の無さそうな男と湊子が待っていた。

もちろん、侍従も脇に控えている。

「久しぶりだな。優衣、直哉」

この無愛想な男が、高菜直樹である。成績は優秀で、東大卒。

卒業後高菜ホールディングスに専務として入社、直樹が25の時に父親は第一線を引退、会長に退いたのを機に社長となり、

辣腕を発揮している若き名経営者なのだ。

現在は実家を出て、六本木にあるセレブビルズに居住している、セレブ族なのだ。

「龍太郎も久しぶりだな、こんな物体を貰ってくれて感謝している」

「兄さんまで！」

「い、いえ。優衣さんは、僕にとってはもったいない良い物体です！」

「もう、龍太郎まで」

緊張のあまり、龍太郎にまで物体呼ばわりされると、プクーツと頬を膨らませる優衣。

その様子に、口元に手を当てて笑っている湊子。

「うふふ、直樹さん。あまり優衣ちゃんをいじめては、可愛そうですよ？」

「それもそうだ」

「久しぶりだねえ、兄さん」

「初めましてなのです、直哉さんと結婚した電なのです」

「初めまして、養子の高菜卯月だぴよん」

ペコリと頭を下げる二人に、直樹も少し笑みを浮かべる。

「初めまして、私が直哉の兄の直樹だ。君達艦娘には、常々感謝している。これからも愚弟を支えてやってくれ」

「はいなのです！」

「わかったぴよん！」

愚弟と呼ばれ肩を竦める直哉と、元気良く応える二人に、

「いい嫁と養子を貰ったな」

と、声を掛ける直樹。

龍太郎は、ちよつと斜めになったご機嫌の優衣を、宥めている最中だ。

「さあ、参りましょう」

湊子の声で、一同歩き始める。

東京の景色を一望できる席に通される。

それぞれの前には食前酒が用意されており、龍太郎だけノンアルコールだ。

「それでは、新しい家族に」

直樹がグラスを持つと、

『乾杯』

一同がグラスを上げる。

「これ、お野菜が美味しいのです」

「以前食べたのより、美味しいぴよん」

喜んでいる艦娘達を見ながら、ふつと笑みを零す直哉。

「しかし、兄さんが湊子様とお付き合いらしたとは知らなかったな?」

「これでも苦労した。マスコミに嗅ぎ付けられないように、侍従殿と

計画を立てては参上する日々だったからな。身内にも内緒でな」

「うふふ、お忍びのデートも楽しかったですわ」

ふふふつと笑うと、侍従は苦笑いになる。彼の苦労は、想像するに

余りあるだろう。

「しかし、巨大会社のCEOとは大変じゃないかい?」

最高経営責任者

直哉の問い掛けに、直樹はふうつと溜め息を吐く。

「全く、親父から25で会社を押し付けられた時もそうだが、今度の合併も、親父殿同士の会談によって決まって、私には事後報告だ。全くあの読書家は、気苦労ばかり押し付ける」

その言葉に、龍太郎も苦笑いである。龍太郎も東京大学在学中で、直樹の後輩に当たる。

「僕も、卒業したら三友を任せる、と言われてます。その時は、是非義兄さんの下で働かせてください」

「その言葉だけでも助かる。差し当たり、お転婆な嫁をしつかり躡けてやってくれ」

その言葉にどつと笑う。優衣はぷくーつと頬を膨らませており、その頬を隣の湊子が突つつく。

「もう……………」

その頃には、メインの牛フィレステーキが焼かれている。

美味しそうな匂いに、目をキラキラさせている艦娘達。

「最近の太平洋の状況はどうです？ 兄さん」

「変わらずだな。横須賀の艦娘が、護衛に就いてくれるおかげで、我が社も貿易を続けていられる。有り難いことだ」

「変わりが無いなら良いですね、悪化するよりマシだ」

「だな」

「直哉、お肉が柔らかくて美味しいのです」

「とろける感じだぴよん」

その言葉に、直樹も直哉もふつと笑う。

食事もデザートになったところで、直樹が鞆から熨斗袋を差し出す。

「直哉、龍太郎、少ないが結婚祝いだ」

お互いに、結婚祝いの交換が始まる。

直哉も用意していたし、龍太郎も用意しているのだ。

ありがたく受け取って、鞆にしまう直哉。

「電と卯月も、たまには東京に遊びに来てくれ。今度は六本木で出迎えよう」

「有り難いんですが、卯月は人混みが苦手なんで、車で来ますよ」

「そうだったのか。それは申し訳なかった、すまない」

「いいえ、大丈夫だぴよん。実は……………」

これから家族になる相手に、隠し事は嫌だと思った卯月は、悪徳提督にされたことを、涙を浮かべて打ち明けた。

龍太郎も優衣も悲痛な表情になり、電と直哉は卯月の背中を擦って

いる。

「そうだったのか……全く度し難いことだ。このような小さい娘に、よくそんな事ができるものだ」

感情少なく憤る直樹。それでも弟妹二人は、その悪徳提督に対し、かなり憤ってるのが判る。

「でも大丈夫だぴよん。直哉がいてくれるから、うーちゃん戦えるぴよん」

「強い子だ。卯月も、直哉のことを支えてやってくれ」

「了解だぴよん、びしっ」

涙を拭って敬礼をすると、直樹も笑みを浮かべる。

「今日はごちそうさまでした、高かったんじゃないかい？兄さん」

「このくらいはさせてくれ。兄として、あまり何もしてやれなかったからな」

「それだけでも十分さ、兄さん。これから儀式やらなんやらで忙しいと思うけど」

「私に任せてくれたのだから、やり遂げるさ」

「それでは私はこれで」

兄弟の会話を横で聞いていた湊子が、声を掛ける。

「ああ、また今度顔を出す。発表してしまえば、もう堂々と行けるからな」

とは言え、湊子は公務もある、直樹も会社で忙しい、まだまだ会える時間は短いのだ。

名残惜しそうに、湊子がそつと直樹に抱き付くと、そんな彼女の頭を撫でる直樹。

そして侍従と共に、エレベーターで降りて行くのだ。

「ところで、親父殿達はよかったのかい？」

今更ながらに問うと、直樹はククツと笑った。

「今日は、三兄弟妹の配偶者披露の場だ。親父殿達にはご遠慮願った」

「そう言えば、直哉のお父さんはどんな人なのですか？」

「そうだねえ、一言で言えば読書狂い^{ビブリオマニア}。実家を図書館にする、と言って

三兄弟、皆追い出すくらいだからねえ」

その言葉に、どんな図書館なんだろう？と、ポカーンとしている電と卯月。

「そう考えれば、高菜家でまともなのは私だけだった、と言うことだ」「ひどい！」

直樹の言葉に抗議の声を上げる弟妹に、龍太郎と電と卯月は、笑いを堪えることが出来なかった。

直樹とは皇帝ホテルで別れ——別れ際に、そつと電と卯月に小遣いを渡す直樹。

「繰り返すが、弟を頼む」

との、囁くような言葉と共に……

そして、姉と龍太郎とは、エグゼクティブラウンジで別れると、部屋に戻る三人。

「ふう、満足な食事だったかい？」

「もちろん!!」

とつても嬉しそうに応える二人の頭を撫でる。

「先にお風呂入っておいで」

「一緒に入るのです」ぴよん！」

「えっ……？」

そのまま、お風呂場に連行されて行く直哉だった。

翌朝。眠っている直哉に、目を覚ました電と卯月がそつとキスをした。

「ダイスキなのです」だぴよん」

「ところで、うーちゃん。もう、一度混ぜっちゃったら、別々に寝る必要ないのです」

「あう………」

顔が真っ赤になる卯月。

「トラウマは、克服できたのですか？」

「わかんないぴよん。でも……直哉は優しくしてくれたぴよん」

「ふふっ、これからもよろしくなのです」
「ぴよん」

直哉越しに握手する電と卯月。こうして直哉は、二人の『嫁』を手に入れることになった。

その頃。

大村奈々海に届いたコニヤツクは、先に夏海に発見されて、今のを飲み終わるまで没収されたことは言うまでもない。

神通の家出

「はあ……今日は雨なのです」

軒下に、てるてる坊主が吊り下がっている雨の空。

「うー、お早うだぴよん」

寝惚け眼を擦りながら、寝室から降りてきた卯月。パジャマのままである。

因みに電は、既にお着替え済みである。

「ああ、お早う」

こちらも陸自作業着に身を包んでいる直哉が、ダイニングテーブルに座っている。

「朝ごはんを食べたら、早く着替えるのです」

「ふぁーい」

卯月が着席すると、朝食が始まる。

何時もの、目玉焼き with ベーコンにトーストにスープである。

朝食を終え、それぞれ傘を差して庁舎に向かうと、

庁舎の入り口に、雨に濡れた神通が立っていた。

「「えっ……っ……」」

それは、何時もの些細な言い争いからだった。

慎重論を唱える神通と、後輩である直哉・奈々海や元事務方である廉に、階級に並ばれ焦っている桐山 崇二佐の言い争いである。

僚艦である金剛四姉妹と陸奥はまたか、というような顔をして、それを見ている。

「だから、無理な進軍は駄目なんです！また武藤提督のところにご迷惑を」

「いいや。彼奴等が功を横取りしてるだけだ！引き付けて倒せばいいだけではないか!？」

毎回無理な進撃を命令されて、戦艦に対して軽量の旗艦神通は大破し、撤退を余儀なくされている。

そして、撤退した時の交戦相手を引き連れて、という形になり、宮

戸島や南三陸鎮守府に迷惑を掛けている、という訳なのだ。

「もういい！神通、私の采配に不満なら出て行け！」

いつも、そう言えば神通は折れて来た。我慢して来た。

だが、この日は違っていた。

「分かりました。今までお世話になりました!!」

「待てっ」

その勢いで、庁舎を飛び出して行ってしまった……

「……という訳で、昨日の夜からずっとここに……」

庁舎に神通を入れると、すぐに卯月に着替えのジャージを買って来させ、

今のところ使用用途のない、官舎改め艦娘寮兼休憩室で着替えてもらってから、

艦娘休憩室でコーヒーを出して話を聞いた。

そこで神通の口から出たのが、桐山二佐との言い争いの末に家出をした、という話なのである。

「やれやれ、とうとうキレた訳か？」

「……………はい」

旧寝室の卓袱台に、四人で座って神通の話を聞いていた直哉は、溜め息混じりに神通に言うつと、神通は俯いたまま答えた。

「しかし、あのおっさんも酷いのです」

「そうだぴょん。いっそ、うちの子になっちやえば良いぴょん！」

「えっ?」

「……………という訳なんです」

『それを、私に言われても困るぞ?』

困り果てた直哉は、足立一佐に電話を掛けていた。

「ですよねえ。全く」

『困ったものだ』

二人は同じ言葉を言い、大きな溜め息を吐いた。

「差し当たり、神通は研修出向という扱いで、哨戒をお願いしていま

す」

執務室の窓から、雨の上がった昼下がりの空を見上げながらそう報告すると、足立一佐も、

『差し当たりはそれで良いが、いつまでもそんな勝手は許されん。自由裁量とは言え、自衛隊の秩序の問題だ。艦娘が勝手に所属を変えるなぞ前代未聞だ……いや、一例だけあったか?』

「あれは、皇族のパワープレイですから、例外ですよ」
『全く困ったものだ』

足立一佐の溜め息が、こちらも手に取るように判る。

「こちらから桐山先輩に言っても良いのですが」

『間違いなく言い争いになる、か。了解した。私から言っておこう』

「お願いします」

電話を切った数十分後、ボタンと扉が開いた。

その前に立っていたのは、桐山 崇二佐だった。

「おや、先輩。どうかしましたか?」

「どうかしたかではない! 足立一佐から話を聞いた、神通を出せ!」

「神通なら、今哨戒に行かせてますよ? どこにでも出て行け、って言ったのは先輩なんでしょう?」

「うるさい! 神通を出せ! 勝手なことをして私に恥をかかせてくれおつて!」

「先輩」

その言葉は、氷の刃を帯びたものだった。いつも軽い笑いを帯びている顔が、真顔になった。

「な、何だ……?」

「この際だから言わせてもらいましょう。先輩は、いつもいつも私達に迷惑を掛け、夜中も勝手に出撃させては、尻拭いをさせる」

その、静かな紳士の怒りに、桐山もたじろぐ。

「そ、それは、引き付けて撃滅させているだけで、お前等が勝手に……」

「ならば、イ級を放置している理由を、お聞かせ願おうか?」

「あんな戦果のない魚なぞ」

「ふざけるな!」

立ち上がると、直哉は桐山の胸倉を？んで、壁に押し付けた。

「あんな魚でも、漁民は迷惑するんだ！私達もいい迷惑だ。先輩、私も今まで給料のうちだと思つて来ましたが、忍耐にも限度が！」

そのまま殴ろうと拳を振り上げた時、誰かがその手をぐつと？んだ。

神通だった。

「止めてください、高菜二佐」

入り口を見ると、電が心配そうに見ている。卯月も、電の身体に捕まつて見ている。

「……」

乱暴に振り払うと、桐山は崩れ落ちる。

それに駆け寄る神通。

「提督、大丈夫ですか？」

「……」

ドスツと、乱暴にエグゼクティブチェアに座ると、溜め息を吐く直哉。

そして、神通に支えられて起き上がる桐山に、静かに口を開く。

「先輩、もう一度考え直すべきだ。貴方が一佐に昇進できない理由を、麾下の艦娘が尉官に昇進できない理由を」

「……」

「帰りましょう、提督」

「あ……………ああ……………」

桐山に肩を貸しながら帰る神通は、直哉に軽く一礼して、庁舎を去つて行った。

「何で、あんな乱暴なことをしたのです!？」

「うーちゃん怖かったぴよん！」

嫁達のお説教の始まりである。

「いやあ。三人がレーダーで帰還してた、とは知ってたからね。一芝居打ったのさ。まあ本音だし、一発くらい殴ってもバチは当たらないだろう？」

肩を竦めると、呆れてものが言えず、ジト目で見上げる嫁達。

「わ、解った。解ったから、今日は好きなものにしようか？夕飯は」

「唐揚げ山盛りが良いのです」

「うーちゃんは、ステーキが良いぴょん」

「それじゃあ、武藤レストランに行こうか？」

「ご機嫌斜めで夕飯を要求する嫁達に、肩を竦めながら武藤提督に電話を掛けるのであった。

その日は、武藤ファミリーと直哉で、電と卯月の斜めになったご機嫌を取ることに苦心するのであった。

今回の一番の貧乏くじは、間違いなく武藤ファミリーである。

それから、桐山二佐の無茶な突出は数を減らすようになった。

その代わり……

「また家出なの？」

「はい。崇の物言いには、ほとんど愛想が尽き果てました！」

そう言つて、やつて来た神通。

彼女の左薬指には、白銀色の指輪が輝いている。そして襟には、三尉の階級章が付けられている。

「全く……」

「困ったものだぴょん」

仕方無しに、桐山二佐が折れてお迎えに来るまで、一時的に宮戸島鎮守府に非常勤旗艦の神通が、度々やつて来るのだった。

「全く。夫婦共々、面倒事を押し付けてもらいたくないものだ」なのです

優しく厳しく楽しく、卯月の訓練をしている神通を見ながら、埠頭でその様子を見ている直哉と電は、大きな溜め息を吐いたのだった。

そして、遠くから車の音が聞こえて来て、

「神通！私が悪かった！帰ってきてきてくれえ」

と言う、桐山二佐の声が聞こえてくるまで神通の家出は続くのだった

た。

サプライズバースデー

盛夏も過ぎた、9月28日。直哉は朝早く、

「ちよつと出掛けてくるよ。夕方には帰ってくるから、今日は外食しようか?」

と言い残し、電に司令官代行を任せて、出掛けて行った。

「という訳で、イツツサプライズなのです。毎年直哉は、この日お出かけなので、計画を立て易いのです」

「ふっふっふー」

「ぱちぱちぱち」

サプライズ計画の、立ち上げを宣言する電。

そして、歓声を上げる卯月に、拍手をする神通。

因みに神通、これで四回目の家出中である。早速艦娘寮が稼働している。

今回は大喧嘩らしく、家出五日目を経過している。

副旗艦の金剛がやって来て、「帰っておいでヨ」という言葉も拒否しての、家出である。

「今日は直哉の誕生日なのです!」

「そこでだぴよん」

「サプライズで何かする、って訳ですね?」

神通の言葉に頷く。

「そこで、これを見るのです!」

と、メモ帳を取り出す。

「優衣さんから聞いた、直哉の好物なのです」

「ふむふむ、牛カツに、カレーに、ハンバーグ……意外と庶民的ですね?」

「あと、事前に優衣さんに協力して貰って、フルスペックノートパソコンを買ったぴよん。直哉が最近、パソコンの調子が悪いってぼやいてたぴよん」

「おー、さすがお金持ち。それじゃあ、私達はお料理担当ですね?」

ちゃんと、艦娘寮で自炊している神通。エプロンも三角巾も持って

家出しているのだ。

「きちんとエプロンと……………」

t r r r r ……………

神通がエプロンを取り出したところで、電の胸ポケットに入っている業務用携帯が鳴り響く。イヤーな予感がしつつ、電話に出る。

「はいもしもし、高菜なのです」

『おう、電ちゃんか!? 桐山の野郎、またイ級を放置して行きやがった!』

「りよおくかいなのです」

電話を切ると、電は闇のオーラを身に纏い、

「ちよつと、イ級をしばいて来るのです」

そう言つて、出撃して行つてしまつた。

「もう、崇……………また……………はつ……………そう……………私への当て付けね……………」

「お、落ち着くぴょん! 室内で艤装展開したら、駄目ぴょん!!」

桐山二佐の意図に気づいた、ブチ切れて般若のオーラを醸し出している神通を宥めるのに、必死になっているうーちゃんだつた。

さて、イ級を始末した後、三人で商店街を練り歩く艦娘達。

イ級始末のお礼で、本マグロのトロの部分に分けてもらった。

「これは良い収穫だつたのです」

一切れづつ味見した三人は、ほつぺたを落としそうになつたのだ。きつと直哉も喜ぶだろう、と三人共ホツコリ顔である。

「牛カツは、お肉屋さんですね。挽き肉も、カレーの牛肉も買いましようか?」

神通が材料を買いたメモを読み上げながら、お肉屋さんで買うものを確認する。

「「「こんにちは〜」」」

元気良く挨拶をする三人。

「おお、電ちゃんにうーちゃんに、えと…神通ちゃん、また家出かい?」

「ええ。ちよつと今回は、当分帰りません」

もう四回も家出して、それぞれ数日間自炊してれば、お肉屋さんも名前は覚える。

「そうかいそうかい、それで今日は何を作るんだい？」

「牛カツと、ビーフカレーにハンバーグなのです」

自信満々に言う電に、

「それじゃあ、丁度良い仙台牛入ってるからさ、安くしたげるよ。かーちゃん、どんだけ安くしていい？」

奥の方に声を掛けると、お肉屋さんの奥さんが出て来る。

「あらあら、電ちゃんに卯月ちゃんに神通ちゃん、そうねえ、ある程度ならいいわ」

「「やったー!!」」

三人で万歳三唱をする。

その間にお肉屋さんのご主人が、挽き肉を用意する。もちろん、これもいいお肉だ。

そして最後に、カレー用のブロック肉を用意する。

「はい、このくらいおまけしてこのくらいね？」

電卓を見せると、代表で電がお金を払う。

「はい、いつもありがとうね」

神通が代わりに受け取って、電の持っているエコバッグにしまう。

次に向かうのは、八百屋さんだ。

「「こんにちはー!」」

「おつ、電ちゃんに卯月ちゃんに、確か……神通ちゃん!おじさん覚えたよ」

やっぱり商店街に買い物に来る神通は、八百屋さんにも名前を覚えてられている。

「今日はじゃがいもと、玉ねぎと人参が欲しいのです。後レタスもなのです!」

「あいよ!そうそう、美味しいスイカが入ってるから半分分けてあげるよ!いつもご苦労さま」

そう言って、真ん丸なスイカを大きい包丁で半分に分けて、ビニール袋に入れてくれる。

そして、野菜を受け取って一旦高菜邸に戻る。

まだ昼下がりである。

冷蔵庫に食材を入れると一旦、お昼ご飯にお出掛けである。

お昼前なのでちよつとゲームセンターで遊んでから、エムドバーガーで、お昼を食べる。

「それで、お酒は何にしたらいいでしよう？」

「うーん……確かコンニャクはどうか言ってたぴよん」

「コンニャク……」

うーんと唸った電は、閃いた。

「こういう時は、大村二佐に聞いてみようなのです！」

業務用電話を取り出すと、大村奈々海と言う名前を検索して電話をする。

t r r r r r

『はい、もしもし、先輩？』

「もしもし、電なのです」

『おっ、どうしたの？』

「業務用携帯でごめんなさいなのです。直哉の好きなコンニャクなるお酒を探していて」

『コンニャクな、ブランデーの』

ははっと笑うと、電の顔がカアアツと赤くなる。直哉の後輩の前で、見事な赤っ恥である。

「そ、それなのです。それで、どういうお酒が好きか…直哉にサプライズでやりたくて」

『ははーん、面白そうだねえ。どーれ、私が買って持って来てあげようか？』

「お願いしますのです」

直哉の後輩の申し出を、有り難く受け入れる。

『おーい！武蔵ー、今から半休取っていい？』

その後電話口から、『いいぞ、高菜提督の誕生日だろ？なっちゃん、今学校出るってよ』と言う、武蔵の声が聞こえて来ると、

『そんじゃ、またあとでね。夏海も連れて行くから』

と言う声と共に、電話が切れる。

「それじゃあ、レッツクッキング！」

「おー!!」

電がご飯を研いでいるうちに、神通がジャガイモ人参玉葱お肉と炒めて、

「あつ、ルウがない!」

との神通の言葉に、卯月が近くのコンビニにダツシユする。

その間に電は、玉ねぎを微塵切りにして、お肉をコネコネし始める。ルウを買って来た卯月がご飯をセットしていると、気仙沼からコニヤックを持って、奈々海と夏海がやって来る。

「やつほー!おつ、頑張ってるね」

「私もお手伝いします。母さんは、お部屋の飾り付けをお願いします」
途中で買って来たデコレーショングッズを押し付けると、夏海もエプロンを付けて料理陣営に加わる。それと交代で、卯月が飾り付け班に回る。

日も暮れた頃、デコレーションされたリビング・ダイニングに、ダイニングテーブルにレタスが添えてある仙台牛の牛カツ、それにデミグラスソースたっぷりのハンバーグ、更にお鍋一杯のカレーにポテトサラダ。そして、トロのお刺身に、夏海特製トロの炙り。そしてデザートにはスイカが待っている。

お皿は、途中で奈々海が車を出して、食器屋でお揃いの買い揃えた。

そしてケーキは、流石に手作りのスキルが足りなかったので、街のケーキ屋さんで速攻で作ってもらった。

武藤提督は今、新婚旅行の真っ最中なのだ。

39というろうそくを差して、後は本人が来るだけ……そして車の音が聞こえて来て……

「ただいま」

リビングに入って来た直哉に向かって、

「お誕生日おめでとう!!」

パアンパアン!とクラッカーを発射する。

驚いた顔の直哉は、そこから笑みに変わって行く。

「いやあ、びっくりしたよ。それに、神通はまだ仲直りできてないんだ

ねえ?」

「サプライズなのです!」

「ところで、どこに行ってたびよん?」

その言葉に、ふっと優しく笑う。

「この日は、私達にとって特別な日だね。優衣姉さんと、毎年ランチに行ってるんだ」

「ちよつと妬けるのです」

その電の言葉に、ふふつと笑みを浮かべる。

「同じ時を母さんのお腹の中で過ごした間柄だからね、誕生日ぐらい許してよ」

「ふふつ、許してあげるのです。それじゃあ楽しい誕生日会なのです!」

『おーっ!!』

と、楽しい誕生日会が始まるのだ。

「いやあ、愛する艦娘と、家出艦娘と、後輩とそのお嬢さんに祝ってもらえるとは。今年は幸せな誕生日だ」

その後、サプライズでパソコンのプレゼントをして喜ばれたり、

「母さん、今日は飲み過ぎOK」

と言う、夏海様のご許可でお酒も入って……

誕生日は大いに盛り上がった。

高菜家のクイーンサイズベッドに眠っている電と卯月と、夏海が眠っているのを見守りながら、改めてグラスを片手にしている先輩後輩。

因みに神通は、漸く桐山二佐が土下座と共に迎えに来て、帰って行った。

「先輩、今年もまた長い一年が始まりますね?」

「全くだ。でも今年は、いい年になりそうだよ?」

チンツとグラスを軽く当てると、コニヤックを飲み干す。

「今年も艦娘達を守って行けるかどうか」

「そして、夏海達を守って行けるかどうか」

三人の寝顔を見ながら、先輩と後輩の飲み会は続くのだった。

双子

盛夏も過ぎた、9月28日。直哉は朝早く、

「ちよつと出掛けて来るよ。夕方には帰って来るから、今日は外食しようか？」

そう電に告げると、

「行ってらっしゃいなのです」

という言葉に見送られながら、自分の車に乗って仙台駅に向かい、東京行きの新幹線に乗り込んだ。

普通の指定席の窓際の席で、窓から見える景色を眺めながらふと昔を思い出していた……

それは、「自衛官高菜直哉」誕生のきっかけとなる悲しいエピソード

……

「ねー直哉はさ、大人になったら何をしたい？」

学習院高等科三年の春ぐらいだった。

「んー、俺はまだ決まってるないな。姉さんは？」

「私さあ、お見合いするんだ、今度。もし好きなことが出来たら、恋愛結婚したいな？」

名家の娘らしく、父親同士が決めた縁談。少し寂しそうに言うと直哉も、

「そっかあ……」

少し寂しそうに答える。

小さい頃から、この双子は仲が良かった。

母親を早くに亡くし、小さい頃から共に笑い、共に泣いて……

初等科の頃に、高梨宮湊子という親友と出会い、そして三人は大の仲良しだった。

二人でお転婆な湊子の悪戯計画を練り上げて、時には宮内省のおじさんに叱られては、次の作戦を練り上げる。

三つ年上の直樹は優秀で、孤高な男だった為、我が道を行く兄とは少し疎遠で、同い年の双子はより仲良くなっていた。

そんなある日だった。

優衣は、学校の行き帰り、不審な人影を感じるようになっていた。当時はストーカー規制法なんてない時代、本人も気のせいだろう、と思いつながら登下校をしていた。

次第に、謎の手紙が家に投函されていたり、学校でも誰かの視線を感じていたり……………

「ねえ、直哉……………私、誰かに見られてる」
「えっ？」

不安に思った優衣は、直哉に相談していた。

それからと言うもの、直哉はいつも優衣の側にいる様になった。

それがいけなかった。ストーカーを却って刺激する結果になり、手紙の内容はエスカレートしていた。

心配した湊子も皇宮警察に相談して、一緒に帰るという名目で警備を手配してくれた。

その日は、直哉は先生に呼ばれて学校の手伝いをする日だった。そこで、大きな思い違いが生じていた。

湊子は、優衣が直哉と一緒にだと思って一人で高梨宮邸に帰ってしまい、直哉は優衣が湊子と一緒にだ、と思っていた。

つまり、一人で優衣を帰らせることにしてしまった。

学校の手伝いが終わると、帰ろうかと言った時に、PHSのバイブレーションが響いた。

ポケットから取り出すと、湊子からだった。

「もしもし、湊子様？」

『直哉くん、優衣ちゃんどこに行ったか知りませんか？』

「えっ、家に帰ったけど……………一緒にじゃなかったの？」

『てつきり、直哉くんと一緒だと思って』

「……………優衣が危ない！」

『皇宮警察に動いてもらいますわ！』

直ぐに電話を切ると、家に向かって走って行った。

その途中の裏路地を通りかかった時、何か第六感めいたものを感じて、足を止めた。

足元には、優衣の大事にしている鞆。

拾い上げて裏路地を見ると……

服をビリビリに破かれた、優衣の姿を目にしていた……

「姉さん!!」

走って駆け寄ると、虚ろになった目でぐったりしている優衣。

あちこち乱暴された跡……

「姉さん!!姉さああああん!!!」

そんな優衣を抱き締めて、直哉は叫び声を上げた。

湊子の『お願い』で動いてくれた皇宮警察官が救急車を手配して、病院に担ぎ込まれた。

犯人は、告白の手紙を無視したことでストーカー化した同級生だった。

もちろん、すぐに逮捕される事となった。

結局、その騒動が切っ掛けでお見合いは破談となった。

それからと言うもの、優衣は家から一步も出ない生活を送るようになった。

直哉は自分を責め続けた。責めて責めて自暴自棄になっている時だった。

そんな直哉は、ある時直樹に殴られた。

「自棄になるな。そんなに自分の無力を責めるなら、強い男になれ」

その言葉を切っ掛けに、防衛大学校に進む決意をした。

「姉さん、俺、自衛官になる。それで、姉さんを守る強い男になる」

「……………」

ベッドに潜ったままの姉に語り掛けるように宣言すると、直哉は防衛大学校を優秀な成績で卒業し、自衛官になった。

ああ、また厭な事を思い出してしまった。

直哉は首を振る。ドリンクホルダーに入っている、ぬるくなったコーヒを一気に流し込む。

『次は、東京、東京』

東京駅の改札を潜ると、聞き慣れた声がする。

「やつほー、直哉」

顔を上げると、三友優衣の姿だ。

今日はカジュアルな格好である。直哉もカジュアルスーツである。

「いつつも待たせて済まないね」

「今日は電ちやんたちに、何て言っただけなの？」

「所用——とだけね」

そう言う直哉に、ふうんと答える優衣。

「何時ものイタリアンのお店予約したけど、時間あるよね？カフェでも寄らない？」

「いいねえ」

カフェに向かうと、優衣のいつもの呪文が始まる。

「ホワイトモカフラペチーノのグランデで追加で、キャラメルソース、ヘーゼルナッツシロップ、チョコレートチップ、エキストラホイップの、エスプレッソショット一杯」

「かしこまりました」

「私はラテのヴェンティで」

「かしこまりました」

出来上がった飲み物を受け取ると、窓際のカウンター席に並ぶ。

行き交う人々を眺めながらふつと口を開く。

「龍太郎くんはどうだい？」

「うん、お義母さん共々良くしてくれるよ。こんな私でも良いって言ってくれたんだから。……もう21年経っちゃったね？」

「それで……？」

「……うん、初めてはあげられなかったけど、ちゃんと出来たよ。跡継ぎ頑張つて産まないよね、高齢出産だから」

少し照れながら言う、双子の姉の頭をぽふつと撫でた。

「……頑張ったね」

「……ありがと、そういう直哉はどうなのさ？」

「東京の夜、電と、卯月と」

その言葉に、脇腹をツンツンさせる優衣。

「いやあ、リア充は良いですねえ」

「何だよそれ？」

「このお誕生日にランチも、最初は私を引き摺り出す為だったんだよね？外に」

ふふつと懐かしそうに語る。結局、それ以後登校できずに中退し、後々通信制学校を卒業している。

「姉さんがあまりにも外に出ない、部屋からも出ない、と親父からも言われていたからな」

「そうだったね、あの頃は怖かったんだよ。人が」

「……判るよ」

その後、沈黙が流れる。

「直哉は、大人になったらやりたいこと、覚えてる？」

「ああ。結局、姉さんを守る強い男になる為に自衛官になったね。今は、のんびりやってるよ」

「私も、お見合いだけど、恋愛結婚みたいなものだから、やりたい事できたね」

「あのお見合いが破談になってなかったら、なんて考えてもしようがないけど、奔放に生きられたのは、アレが切っ掛けかもしれない。もしかしたら、嫁ぎ先で苦しんでたかもしれないし」

「たればの話は、きりがないからな」

「……そうね」

「でも、今はやりたい事変わったんじゃない？」

「そうかもしれないね。電と卯月を守っていかなくちやならないからね」

「コーヒーを飲みながら答えると、

「それじゃあ、この誕生日のランチも、今年で最後だね？」

「ん？電には帰ったら説明するし、龍太郎くんは知ってるんだろう？」

そうは言うものの、優衣がこの話をするのは想像できていた。

「だけど、最初に言ったこと覚えてる？」

「……ああ、『お互い次の一歩に進むまでやろう』か」

その言葉を思い返すと、コーヒーを飲み干す直哉。

「それでね、誕生日プレゼント。龍太郎からは許可済み。ペアネックレス」

そう言うのと、ネックレスケースを取り出す。

「あとで、電に許可はもらうよ。なに、許してくれるよ、そこに通すペアリング。霊子結晶製」

お互いに顔を見合わせると、ふふつと笑い出す。

以心伝心、似た者同士なのだ。

ロングピローを取り出すと、お互いリングをネックレスに通して相手に付ける

リングは光り輝いている。

「そろそろランチじゃない？」

「あつそうだった、行こう！」

飲んでいたカップをゴミ箱に捨てると、ネックレスケースをお互い鞆にしまい、優衣が直哉の手を取って歩き出す。

そしてイタリアンレストランで、思い思いの Pasta を注文して、

白ワインで乾杯をする。

「誕生日おめでとう直哉」

「お互いに、優衣」

この時だけは、名前で呼ぶことにしているのだ。

生まれる前からずっと一緒だった、一番近い姉弟。

「慌ただしくてゴメンね」

「わざわざ宮戸島から来てもらってありがとうね。お互い、頑張ろうね」

東京駅でがしつと、握手をして別れる。

「それじゃあね、来年の誕生日は皆でやろうね！」

「そうだね、電と卯月、それに龍太郎くんも一緒に」

そして夕方、家に帰り着くとクラッカーが飛んで来る。

「お誕生日おめでとう!!」

この時、自分はやりたい事が十分できているんだ、と実感していた。こんな幸せな誕生日は、何年ぶりだろうか……？

ふっと、直哉は笑みが零れているのを自覚していた。

あのペアネックレスリングは、電にお許しを貰った。

「姉弟なら許すのです。いちばん大事な場所には、ちゃんと電達のリングを付けているのです」

もちろん、ケツコンリングは卯月にも付けている。東京からの帰り、大本営に立ち寄って申請したのだ。

卯月と二人で、自慢気に見せる姿が愛おしくて、頭を撫でてあげる。

その様子を笑顔で見守っている後輩と、神通と夏海。

今日は楽しいパーティーである。

その名は薄雲

高菜直哉二佐は、東京の大本営に呼び出されていた。

「やれやれ、東京に行くこと多いんだよなあ」

そうぼやきながら業務車三号で、東京の統合幕僚監部内の大本営に向かうのだった。

「高菜二佐入ります」

幕僚監部に到着すると、何時もの会議室で足立一佐が待っていた。

その横には、おかつぱ前髪ぱつつんでツインテール三つ編みにしている、特I型の制服を着た女の子。肌が白く、そして右目が赤で左目が青の金銀妖瞳。ヘテロクロミア

表情は無く、明らかに愛想がなさそうな感じの娘だ、と言う印象を受けた。

「うむ、掛け給え」

「御用とは何でしょう？」

「とある艦娘を引き取ってもらいたい。薄雲、自己紹介をしなさい」

その言葉に、その少女―駆逐艦薄雲が起立して敬礼する。

「駆逐艦薄雲三曹です」

「高菜直哉二佐だ。よろしく頼むよ」

座ったまま敬礼を返すと、足立一佐に向き直る。

「そこで、この娘を引き取ってもらいたい、という理由をお聞かせ願えますか？」

「うむ。この娘は、数ヶ月前の作戦によりMIAとなっていたのだが、つい最近自力で帰還したのだ。その鎮守府というのが、捨て艦を多用するブラック鎮守府で提督は原隊に送り返されており、居場所が無くなった、という訳だ」

「そこで、日頃迷惑を掛ける私達にと？」

半分は冗談で半分は皮肉を言う直哉に、オッホンと咳払いをする。

「そういう訳ではないが、高性能の艦娘の下に配属しておけば安全だろう、という判断だ」

「……了解しました」

この言葉には、裏の意味があった。深海棲艦ではないか？という疑念なのだ。

そこで、電のような艦娘の下に試しに配置してみる、という方針のようだ。

それに気づいた直哉は、足立一佐に顔を向けて頷いた。

「了解しました」

「よろしく頼む」

薄雲を連れて庁舎を出て、車に乗った時だった。

「二佐、大本営は私を、深海棲艦だと疑っているようですね？」

その言葉に、直哉は腰の銃を手にとろうとする。

横を見ると、彼女の右の瞳が赤く光っている。

「……大丈夫ですよ、今のところは。まだ艦娘です。『宮戸島の英雄』」

その言葉で、直哉はやつとこの娘のことを思い出した。大きな溜め息を吐いて、

「……ああ、思い出した。何で忘れてしまっていたんだろうね？宮戸島脱出の時に手伝ってくれた娘か、艦娘だったとは思わなかったよっ。」

「私は、所謂『生まれ筈のない艦娘』です。貴方の所の電と同様の。宮戸島の攻撃を察知して、貴方に教えたのも、その能力」

そう。宮戸島全島脱出は、この少女の「深海棲艦に襲われる」と云う言葉と、情勢を敏感に見抜いた高菜直哉による二人の功績だったのだ。

その後のドサクサで、少女が行方を晦ましていたので、お礼が言うことができなかつたのだ。

「深海棲艦のことを感覚で感じられる。そして、今は半深半娘のような状態になった、ということか？」

「……はい。高菜二佐の仰る通りです。私は轟沈し、深海棲艦化するところでした。ですが気づいたら、私は、私という意識を持ったま

ま再生していました」

「それが赤い瞳という訳か……」

車は発進させずに、車内で大きな溜め息を吐く。

「はい。私の方から高菜二佐の鎮守府を希望したのもあります。きつと大本営は、私を深海棲艦側だと疑っている」

「だろうね……」

「ですが私は、本質的には艦娘です。再び高菜二佐の下で働けるなら、悪いようにはならないと思います。貴方にとっても悪い話ではない」

「……私を脅しているのかい？薄雲」

鋭い目で薄雲を睨むも、薄雲は表情一つ変えない。

「いいえ、期待しています。高菜二佐の下でなら、絶望しなくて済む、と」

「買い被り過ぎだねえ、その根拠は？」

「あるといえませんが、ないといえありません。ですが、確信はしています」

その言葉に、車のエンジンを掛ける。その行動で信頼してくれた、と察した薄雲は、笑みを浮かべる。

「信頼してくださいって、有難うございます」

「まあ、私も変人だからね？」

そう言いながら、車を走らせる。

高速道路に乗っても、会話は続けられていた。

「今、私の艦娘達は全員、家族に迎え入れている。それでやり辛くなるかもしれないが、良いのかい？」

「はい……」

その瞳は、少し残念そうだと、言った色合いを帯びていたが、彼は気づかない。

「なら良い。よろしく頼む」

車は一路、宮戸島に向かって行った。

「おかえりだびよん！」

「お帰りなさいなのです！」

鎮守府の駐車場に止めると、嫁二人がお出迎えする。

「その娘は誰なのですか？」

首を傾げながら電が問うと、再び抑揚のない声で、

「愛人」

そう薄雲が答える。直哉は、

「はっ。」

と唾然になるも、目の前の二人は涙を浮かべ始めている。

「冗談です」

薄雲の言葉に、ほっと胸を撫で下ろす二人。

「冗談になってないじゃないか？ 冗談は、もっとマシなことを言いな
やっ。」

「分かりました」

無表情のまま答える。

「駆逐艦薄雲三曹です、よろしく」

「電なのです、お目々が綺麗なのです」

「青と赤だぴよん。きれいな目だぴよん」

じーっと見つめる二人を、じーっと見つめ返す薄雲。

「まあ、取り敢えず中に入ろうか？」

そう促すと、四人で庁舎の方に入る。

「旗艦の電三尉なのです」

「卯月士長だぴよん」

「改めまして、薄雲です。宜しくお願いします」

「この二人は信頼していいと思うが、話していいか？」

「ご随意に」

直哉の言葉に、薄雲は頷いた。

「実はこの娘、半分深海棲艦なんだ。捨て艦戦法で轟沈しても、生き
残っていた。本人曰く『生まれる筈のない艦娘』」

「電と一緒になのです」

その言葉に、薄雲が小さく頷く。

「でも、直哉が連れて帰って来たってことは、いい子だぴよん。うー
ちゃん信じる」

「なのです」

その言葉に、少し驚きを浮かべた薄雲は、ふふつと笑った。

「笑ったのです」

「そうだぴよん」

「高菜二佐は、相変わらず信頼されているのだな、って安心したところ
です」

「相変わらず?」

「知り合いなのですか?」

二人の言葉に、宮戸島の一件を語り始める薄雲。

「その時、私の言葉を信じてくれたこの人に、絶対的な信頼感を感じました。そして避難の時も、宮戸島の人々から信頼されて、纏め上げて避難できた。私は仕えるなら、高菜二佐の下で仕えたかったので。結局ブラック鎮守府に着任して、捨て駒のように働かされました。『生まれる筈のない艦娘』ですから、それなりに生き残る自信がありました。ある日沈んでしまいました」

再び無表情になり、語り始める薄雲に、二人は悲しそうな顔になる。

「高菜二佐の下でお仕えする為に生きて帰る。その願いが、私を艦娘に留めてくれたのではないかと私は考えます」

「一ついいのですか?」

「はい」

電が口を開くと、薄雲は電の方を向く。

「直哉のことが好き、なのですか?」

「Likeで言えば、『はい』となります。ですがLoveでという意味であれば、分かりません」

「少し顔が赤いぴよん」

それを指摘されると、ハツとする薄雲。

「訂正します。少しだけ。一目惚れ、その程度です」

その回答に、困った顔をする直哉に、ひそひそ話をする電と卯月。
「決めたのです!うちの子になればいいのです」

「そうだぴよん!一緒に養子になるぴよん」

その言葉に、驚きの表情を隠せない薄雲。

「……よろしいのですか？」

「いいのです！」

「もちろんだぴよん！」

その嫁の暴走に、

「ちよつと待つて。薄雲は、それで良いのかい？」

そう訊いてみるも、薄雲は小さくコクリと頷いた。

「それじゃ決まりなのです！」

「よろしくだぴよん!!」

「不束者ですが……」

「どうしてこうなった……？」

直哉は、頭を抱える他なかった。

こうして、三人目の「嫁」が加わった。

季節外れのアイス出張販売

駆逐艦薄雲の朝は早い。

クイーンベッドの一番端っこに眠っている彼女は、起きると衣服を身に着ける。

吹雪型の制服を身に纏うと、階段を降りてリビングにある家の鍵を手に取り、

玄関を出て、鍵を掛けて、早朝哨戒という名目で朝の散歩に出かける。

朝の涼しい空気の中、朝焼け空を眺めながら、漁港の方へと歩いて行く。

いつもどおり漁港に差し掛かる。

「おつ、薄雲ちゃんおはよう！」

「おはようございます。今朝の漁の様子はどうですか？」

漁師の元気な挨拶とは対照的に、抑揚のあまりない声で挨拶する。

「今日は大漁だったぜ！今、サンマの刺し身食ってるけどさ、薄雲ちゃんもどうよ!？」

その言葉に一瞬、猫耳と尻尾が現れたかもしれない。

「是非ご馳走になります」

朝食前の、このおやつ的な食事が楽しみで、来ているのだ。

漁港広場にやってくるのと、漁師達やその奥さん達が、簡易テーブルで酒盛りをしている。

「薄雲ちゃん、おはよう！」

「おはようございます」

次々に挨拶されるのを、ペコリと頭を下げた挨拶をする。

ふと、漁港掲示板に似合わないポップなチラシが目止まる。

アイスクリームの移動販売車が、この町にやって来るのだ。

「アイスの移動販売ですか？」

「そうなのよ。今日この漁港広場でやるから、皆連れて買いにおいでよ。」

「哨戒任務を終えたら、電とぅーちゃんと行きましよう」

そしてそのまま、酒盛りをしている集団に合流するのだ。

少し海の幸を味見させてもらってから、漁師達に別れを告げて、商店街を歩いて鎮守府に向かう。

鎮守府には、神通さんが立っていた。

「またですか？」

「はい、崇つたら酷いんです」

彼女が鎮守府に着任してからでも二回目、通算六回目の家出である。

鎮守府の艦娘寮の鍵を開けると、神通は中に入っていく。

それを見送りながら、鎮守府庁舎の執務室の掃除に入る。

そして簡単な掃除を終えてから、再び鎮守府庁舎の鍵を締めて高菜邸に戻る。

これが、彼女のいつものルーティーンワークなのだ。

家に戻って来ると、美味しそうな匂いがして来る。

「ただいま」

そう言いながらリビングに入ると、トーストとスクランブルエッグにソーセージ、スープがダイニングテーブルに並んでいる。

「お待たせしました。早朝哨戒で報告事項がありますから、食べながらでも」

そう言つて着席すると四人で、

『いただきます』

と、食事が始まるのだ。

「今日、アイスの移動販売車が来るみたいです。あと、神通三尉がまた家出をしました」

「アイス！」

喜ぶ卯月に、

「またなのですか？」

神通の家出に呆れる電。

「やれやれ。彼女は、うちを実家だと思っっているようだ」

肩を竦める直哉に、卯月がパンで直哉をビシッと指す。お行儀が悪い。

「直哉が、『実家だと思つて寛いで良いからね』つて言ったのが悪いびよん」

「いや。だからつて、額面通り受け取る奴がいるか?」

直哉は苦笑いなのだ。

「卯月、お行儀が悪いですよ」

冷静に指摘する薄雲に、

「はぁーい、ごめんなさいだびよん」

ぺろつと舌を出して謝る。

食事が終わつたら、パジャマのままの卯月は着替えに上がつて、薄雲と電で洗い物をしている間に——と言っても、食器洗淨乾燥機付きなので、

予洗いでセットすれば終わりであるが——

卯月が戻つて来たところで、全員出勤である。

神通を交え朝礼を行い、非常勤旗艦の神通の指導の下、哨戒に向かうのである。

直哉はそれを見送ると、読書に耽る。

哨戒任務を終えて帰つて来ると、四人で漁港に向かう。

学校帰りの子ども達が、列を作つてアイスを買って求めている。

「何にしようかなあ♪」

「うーちゃんはトリプルが良いびよん」

「チョコミン党党员としては、チョコミント以外は認めません」

「抹茶が良いですね」

等と口にしてしていると、男の子がトリプルのアイスを貰つて喜んでるところに、

別の男の子三人が、その子の背中を押す。

「わあっ!!」

その男の子は、躓いて転んでしまう。

べしやっ

「あ……あ……」

「大丈夫なのですか!？」

「大丈夫ぴょん!？」

電と卯月が駆け寄るなか、薄雲と神通は突き飛ばした子達に詰め寄る。

「何してるんですか!？」

「冗談だよ、じ・よ・う・だ・ん。お姉さん達、遊びもわかんねえのか?」

リーダー格の男の子が、ヘラツと笑いながら答える。

「冗談って……怪我するかもしれないじゃないですか!？」

「何ムキになってんだよ、おばさん?」

「何ですって!？」

もう一人が、言うてはならないことを言った直後、薄雲が神通を制す。

「冗談ですか、よく分かりました」

冷静にその三人を見回すと、両目が赤くなっていた。

「そ、そうだよ」

その鋭い殺気に、いじめっ子達はたじろいだ。

「……艤装展開」

薄雲の背中に、艤装が展開される。

「これで、あなた方を砲撃して、木っ端微塵にしても冗談で済みますよね?」

「えっ……うわあああああああ!!!」

その薄雲の冷徹な笑みと、砲塔が向けられた三人の男の子達は、真っ青になって逃げて行った。

それを見た薄雲は艤装を収納して、再び左目が青く戻る。

「アイスが……」

「アイスなら買ってあげるのです」

「いいの? あ、僕は健太」

「電なのです」

「うーちゃんだぴょん」

男の子達を蹴散らした薄雲と神通も、健太の方にやって来る。

薄雲は、地面に落ちたアイスにチョコミントが入っていることを確

認して、

「チョコミン党の同志を傷つける輩は成敗しました」

そう言って、健太の頭を撫でる。

「ちよつと、やり過ぎでしたけどね」

苦笑いの神通。

「お姉さん達は？僕、健太」

「薄雲です、同志」

「神通といいます」

電が健太君のアイスを買い直すと、埠頭で仲良く並んで食べる五人。

卯月は、シャーベット系のトリプルで、

電は、バナラ系のトリプル、

神通は、抹茶と小豆のダブルで、

健太君はチョコミント、ポップ系、チョコレートのトリプル。

薄雲は、チョコミント、チョコミント、チョコミントのトリプルである。

「あいつ等、いつもいじめるんだ。僕のこと」

「三人掛かりは酷いですね」

神通が憤る。

「チョコミントを愚弄する行為は、万死に値します。次に会ったら処刑ですね」

薄雲は時折、訳の判らないことを言う。

「でも、いじめられてばかりでいいじゃない？」

「よ、良くはないよ……でも怖くて……」

「でも、何もしなかったらこのままなのです」

その言葉に、神通が静かに語り出す。

「武とは、戈を止めると書いて武となる。武は無用な争いを防ぐもの、武は避けられぬ戦いでは負けぬこと……とあります」

「でも……」

「チョコミン党の同志なら、大丈夫」

「勇気を出して頑張るぴょん！」

「健太君なら、きっと大丈夫なのです」

「……………」

「その為には特訓なのです！」

その電の号令で、秘密特訓は開始された。

健太君は、放課後に鎮守府にやって来ては、鎮守府前の駐車場で、空手有段者の神通の指導により、空手の練習に明け暮れる。

神通が、桐山の土下座で女川に帰っても、哨戒ついでに金剛四姉妹と立ち寄って、

トレーニングを指導していつてくれる。

健太君も、運動神経はあるようで、メキメキと腕を伸ばして行った。そんな寒くなった11月。

薄雲が空き地を通り掛かると、健太がいじめっ子に立ち向かっていった。

でも、殴り返したりはせず、殴られるだけ。

でも、ぐつと歯を食い縛って立ち上がる。

「僕はお前達なんかに負けないぞ！暴力なんか使わない！」

薄雲は、すぐに助けに行こうか考えたが、様子を見ている。

「やめだやめだ。つまんね」

そう言うと、リーダー格の子は二人を従えて去って行ってしまった。

すぐに薄雲が駆け寄る。

「健太君、大丈夫ですか？」

「…………薄雲ねーちゃん…………僕、負けなかったよ…………空手も使わなかったよ…………」

健太をギュツと抱き締めて、涙を流す薄雲。

「君は馬鹿です。大馬鹿です…………殴り返したってよかったのに…………」

「薄雲ねーちゃん…………」

「すぐにお医者さんに行きましょう」

薄雲は健太を背負うと、病院に歩いて行った…………

「何てことですか！」

「うーちゃんがぶっ飛ばしてやる！」

「いいえ、砲撃を食らわせましょう」

「私がお仕置きをしましょう」

治療後、健太の家に送って、健太の母に感謝をされて戻って来た薄雲は、事の経緯を三人にも話した。

聞いた艦娘達は怒りの声を上げる。因みに神通、七度目の家出である。

「よさないか。艦娘が民間人に危害を加えるのはいけない」

「でも……許せないのです」

代表して電が不満を口にするも、直哉は、

「いや、大丈夫だよ。きつといい方に向かって行くよ」

と笑みを浮かべる。

数日後だった。

健太と、いじめっ子達三人が楽しそうに歩いている姿を、お買い物中の電が目撃した。

「あ、電ねーちゃん！」

「珍しい組み合わせなのです」

その言葉に、いじめっ子達はバツが悪そうだ。

「いじめられなくなつて、今は三人共遊べるようになったよ！」

「あの空手の型とか言うのを見せられたらな……」

「うん……」

「やられちゃいそう」

「それは良かったのです。いいのですか？君達、今度健太君や他の子をいじめたら、この電が許さないのです」

ビシッと指を立てて、腰に手を当てると、

『はーいー！』

と元気よく答える四人組。

「よろしいのですー！」

そう答えて、「うちでゲームやろうよ」と言う、健太と歩いて行く三人組の姿を、満足そうに眺める電だった。

そのことを報告したら、真っ先に納得したのは神通だった。

「なるほど……………」

そして、直哉も納得した表情で、

「武は無用な争いを防ぐもの、下手に手を出したら後の禍根になる、ってことか。健太君は強い子だったね」

そう言うのと、首を傾げる嫁達三人を尻目に、読書を開始するのだった。

獣耳注意報

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。……………

今朝も目を覚ます。

電が、モソモソと布団を手繰り寄せ起き上がる。

何か頭に違和感が……………

頭を触ってみる。何か付いている……………

横で眠っている卯月の頭を見ると、うさぎの耳。

布団を捲ると、お尻にもうさぎのちっちゃくて可愛いしっぽが付いている。

自分のお尻にも、尻尾は付いている。縞々模様の狸の尻尾……………

「な、何なのですかあああああ?!?!」

電の悲鳴が、寝室に響き渡った。

その叫びが響く頃、薄雲は漁港の埠頭で、工作艦明石と密会していた。

「私の新装備、どうでしたか?」

「ユニーク……………上手く行きました」

薄雲も、黒猫の耳に長い尻尾を付けている。

「さすがは私の元助手です」

そう、直哉の下に来る前に、薄雲は明石の下にいたのだ。

そこで明石は、薄雲の身体を検査したり調査したりしていたのだ。

薄雲は、それから直哉の下に行くまで、明石の助手をさせられていたのだった。

明石は、大本営の大工廠の所属で、日夜新装備を開発している。

それとは別に、趣味で日夜、全国の提督と一部の艦娘が喜びそうなものも開発しているのだ。

「私の『獣耳ドリンク』上手く行きましたね、これで全国の提督に高く売れば……………うふふ」

「碌なことにならないと思いますよ。マッドサイエンティスト」

「褒め言葉と受け取っておきましょう」

そう言われた薄雲は、先に立ち上がると、スタスタと高菜家に戻って行った。

「ただいま」

寝室に戻ると、虎の耳と尻尾をつけた直哉が、狸とうさぎを仲良く襲っており、

「あれっ」

黒猫さんも敢えなく捕まって、ベッドに放り込まれた。

数時間後……

獣耳の状態で庁舎に向かう四人、完全に遅刻である。

「しかし、どうしてこうなった……?」

「解らないのです……」

「そう言えば、薄雲が買って来たジュースは、皆飲んだびよん」

その卯月の言葉に、耳と尻尾がピコンと跳ねた。

その様子を見た三人は、ジト目で薄雲を見る。

「逃さないのです!」

逃げようとした薄雲の尻尾を、電が捕まえた。

「ふにゃああ……」

薄雲は可愛い声を上げて、へなへなと崩れ落ちた。

「……という訳なんです」

薄雲は腕を組んだ三人に囲まれて、庁舎で白状した。

「明石の仕業か……」

直哉は、エグゼクティブチェアに腰掛ける。尻尾は、キャスターで踏まないように、くるつと支柱に丸める。

「はい。昨日明石さんから、宮戸島に宿泊する旨連絡がありました、その際に実験をするように、と」

正座している薄雲が答えると、直哉は大きな溜め息を吐いた。

「取り敢えず、このまま哨戒に行っておいで。明石は、私に用事があるようだ」

仲良く哨戒に行つたのを見計らつて、大きな溜め息を吐いた。

「明石、一人だから入つておいて」

すうつと光学迷彩を解除して、明石が執務室に現れた。

「相変わらずのマッドサイエンティストだねえ」

苦笑いを浮かべる直哉に、同じく笑いを浮かべる明石。

「取り敢えず、応接室に行こうか？」

「はい」

庁舎の応接室に場所を移動した明石は、開口一番、

「薄雲はどうですか？」

「やはり、用件はそれか。半分深海棲艦と言うのは本当のようだね？」

「はい、再生力はかなり強いと思います。ただ、その方向性は生きて

い、という想いのようですね？」

そう言うのと、ちらりと意地悪そうな笑みを浮かべる明石。

「結局、一目惚れつてのは本心だったのか？」

「はい。薄雲の希望と、私の推薦で異動になつたようなものですから」

「さすがは『宮戸島の脱出行』の手品師。いずれにせよ、私のところに

押し付けると思つたよ」

宮戸島の脱出成功を、更に後押ししたのは、上陸して来た深海棲艦

達であつた。

これ等は全て明石が作成したダミーで、自立駆動もする後々、量産

型艦娘計画の基礎になつたものである。

この深海棲艦の姿に島民達は恐怖して、当時の直哉の言うことを信

じ、全島避難を完遂することになつたのだ。

その直後、艦娘部隊が結集して陸上戦を行い、奪還したのだ。

何故、宮戸島を深海棲艦が狙つたのかは、未だに分かつてはいない。

「うふふ、もう少し調べておきたいこともありましたし、今は宮城に出

張していますよ」

「また謎の物体を研究したいんじゃないのかい？結局、量産型艦娘は

どうなつたんだい？」

「ああ、あれはですね、コストの問題でボツになりました。後、浪漫的

問題で。中に自衛官がおっさんが入つてたらちよつと……」

「自衛官としては、それでも有用な手段なんだがねえ。防護力を考えれば、怪獣型の方がいいんじゃないかな？」

「怪獣の姿のパワードスーツみたいな感じですか……それもコストの問題が……それに人命も」

「現状、コストパフォーマンスがいいのは艦娘だ、というのは悲しい限りだな」

「……………」

溜め息を吐く二人。

「話を戻そう。薄雲についてはどう思う？」

「私の結論では、貴方の側にいる限りは大丈夫だ、と考えています。大本営は、理由を付けて処分したがかりそうですけどね」

悲しそうに明石が首を振る。

「深海棲艦化の問題か。だが、私はどうなったとしても薄雲を信じている。私達の敵にはならない、と」

「私も信じたいです。ですから、私が宮城に派遣されました。兵装関係は夕張に任せておけばいいですし、実装演習は鹿島に任せておいていい。実戦配備試験には、大和二佐率いる特殊艦隊もいますし」

「それで、宮戸島に滞在している訳か……いつその事、宮戸島鎮守府に工作士官として着任すれば良いじゃないか？」

「ふむ……その手もありですか。でも、私がここにはお邪魔でしようし。私は宮城地本に作ってもらった工廠で、研究を続けますよ」

「？」

「三人の嫁達に囲まれて幸せな日々を送っている、高菜二佐のお邪魔はできませんよ？」

意地悪そうな笑みを浮かべている明石に、直哉は苦笑いを浮かべる。

「あー!! いたー!!」

扉が開かれると、中に乱入してくる三人の嫁達。明石は慌てた顔をして、

「INVISIBLE!」

と発し、姿を消す。

「消えたのです!?!」

「どこ行ったぴよん!?!」

「きつと入り口に……ふにゃん!!そこです!」

尻尾を踏まれた薄雲が、悲鳴を上げた直後に腕を伸ばすと、そこに明石が引き攣った笑いをして立っていた……

「解毒剤を出すのです」

三人娘にとっ捕まって、正座状態の明石が泣く泣く解毒剤を出すと、それぞれが飲んで元に戻る。

「全く、酷い目に遭ったのです」

「うーちゃん、尻尾がパンツの中でずっと気になってたぴよん」

「尻尾を踏まれました……」

明石は苦笑いで立ち上がると、両脇をガシツと電と薄雲に掴まれた。

「えっ?」

引き攣った顔で両サイドを見回すと、卯月が笑顔で見上げる。

「お家でお仕置きだぴよん」

「た、高菜二佐、助けてえ……」

助けを懇願すると、

「やだ」

そう言っつて、さっさと執務室に戻って行ってしまふ。

その後、明石はめっちゃめっちゃお仕置きをされたの言うまでもない。

お鍋パーティー

寒さも強まる、東北の11月の昼下がりに。

いつものように、電、卯月、薄雲は哨戒に向かっている。

そんな折、いつものように報告書を事務妖精さんに丸投げして微睡眠でいると、

ぽろろぽろろぽろろぽろん ぽんぽんぽんぽん

プライベート用スマホの着信音が鳴り響く。

南三陸の武藤二佐からだった。

「ふぁい、もしもし……」

『また昼寝かね？聞いてくれ！うちの夕立がとうとう三尉になった！』

嬉しさを爆発させているような笑顔が見て取れる。

その言葉に、直哉の頬も緩む。

「それはおめでたいですね。折角ですから、ウチのダイニングでパーティーでも開いたらどうですか？」

『おお！あの高菜二佐の家には、一度お邪魔してみたかったんだよ』

「そうですね。ところで、変なこと訊くようですが、二佐んところは夜の生活とかどうしてるんです？」

誂い半分で訊いてみる。同じトリオ嫁同志なのだ。

『うちは、長門が曜日管理しておる。私もそう若くないものでな、週二回ずつで日曜日は三人で、といった形じゃのう』

「あはは。うちは、大抵三人とも積極的で、私ももう40代になるんだから、多少は遠慮して欲しいものですよ」

『愛されてる証じゃて。一度明石に、艦娘用増強剤を飲まされた時は、四人とも足腰が立たなくなつて、軍務に影響が出て、奈々海二佐のところ迷惑を掛けてしまったよ』

「明石印の薬品は気を付けてくださいよ。うちも、獣耳化してしまいましたよ」

因みに、その大村奈々海は幼女化したそうさ。

その写真を夫に送ったら、その姿でもOK！と言い出したらしい。

未だドバイに長期単身赴任中の為、幼女化奈々海のいろいろなセクシーショットを送ったそうなの。

本人もノリ重視だった為、ノリノリで送ったようだが……

『なんでも最近は、艦娘同志カップルの為に、怪しげな研究をしているとかしていいとか』

「まあ、その話はこの辺にしておきましょう。各艦娘に怪しげなクスリを飲ませないように注意喚起する、ってことで。明石には、この間嫁達が物理的にお説教をしたようですよ」

『なるほど。それじゃあ、お邪魔していいかい？』

「良いですよ」

『それじゃあ夕方、顔を出させてもらおうよ』

その言葉と共に、電話が切れる。

「ふあーあ……」

欠伸をしながら背を伸ばしていると、艦娘達が哨戒を終えて帰って来る。

「ただいまーなのです！」

「今日も口級を退治したぴよん」

「楽勝でした」

無表情でVサインをする薄雲の頭をナデナデする、電と卯月。

「今日は、武藤提督達が遊びに来るらしいぞ。夕立が、とうとう三尉になった」

「「おー」」

「そんな訳で、お祝いパーティーをしようと言ったことになった」

「なるほど」

「それはいいアイデアだぴよん！」

「そうですね」

夕方。

「こんばんはー」

やって来たのは、武藤提督に長門、それに木曾に、夕立……までは良かったが、

夏海に謎の少女。

「えへへ。先輩、私ですよ。私」

ふにやつと笑った笑顔、夏海と同伴でそばかすがある特徴的な顔。

「ああ、大村二佐か。何やってるんだ？まさか、明石の？」

「はい。子供化ドリンクを盛られました、それからその姿で……」

「艦娘的には庇護欲をそそるとかで、戻さないで欲しい、と言うことで……」

こめかみに指を当てながら、代わりに答える夏海に、電が、

「ご苦労さまなのです」

と云う謎の慰めの言葉を掛ける。

「制服も特注のを申請しましたし、足立一佐にはイヤな顔をされましたけど、自腹で特注してるんですから問題ないですよ」

自信満々に語る後輩に、夏海と直哉は大きな溜め息を吐いた。

「旦那はどうするんだよ？」

「旦那に写真送ったら、喜んでくれましたよ？」

「…………アイツはロリコンだったのか？」

一応、奈々海の旦那の顔も知っていて、生真面目一徹な男の意外な素顔に、もう一度大きな溜め息を吐いた。

「ところで、夕飯はどうする？すき焼きかしゃぶしゃぶか寄せ鍋にしようと思うんだけど？」

「寄せ鍋！お魚いっぱい食べたいっばい!!」

と云う主賓のご意見により、寄せ鍋に決定した。

主賓はリビングで、最新ゲームをやって楽しんでいる。

持参して来たアップルパイは夕立の独占で、卯月、奈々海と一緒に、楽しそうにゲームをしている。

奈々海は昔から場を盛り上げる天才で、ゲームも適度に手を抜いたり、力を入れたりして夕立を楽しませている。

「夕立、うまいうまい！」

「上手だぴょん！」

「うちにもゲームがあるからやってるっばい！」

自慢気になる夕立、その様子をほっこり眺めている長門。

「うちの姐あねさんは、ああなったら動かねえな。俺達だけで買い物に行

「こうや?」

「なのです」

「そうですね」

「そうだな。武藤提督もゆっくり座っててください」

「そう言うと武藤提督も、

「すまんねえ」

と言いながら、リビングのソファに腰を下ろす。

電と薄雲、木曾、それに夏海に直哉。

練り歩く先は、漁港近くの魚市場にあるお魚屋さんである。

「大村二佐には、いつも世話になってるねえ」

「いいえ。私としては、母が皆さんの迷惑になってないか?と」

恐縮する夏海に、ふふつと笑って、

「迷惑で思い出したけど、私が上級生の深夜番だった時に、門限破りから戻って来た旧姓水上奈々海候補生と出会ってね」

「出会って?」

「見て見ぬふりをしておいたんだ。今思い返せば、それが私達の出会いだっただけかな。君のお父さんを紹介したのも、彼女が在学中の時に、彼氏ができないなんて言い出したから、高菜HDの社員で結婚を考えてる人と私と三人で飲み会をしたら、任官直後に妊娠して出産。22歳の二尉で、いきなり母親になった訳さ。奔放な後輩だよ」

「そうだったんですか……母らしいです」

母親の知られざるエピソードに、ふふつと笑う夏海。

「そう言えば、母娘喧嘩とかしないの?」

「良くしますけど、武蔵や三笠曰く『提督のほうの子供だ』と言っていきます。そんなに私、落ち着き過ぎてますか?」

困った顔をする夏海に、薄雲が、

「落ち着いたガール、モテます」

「電もそう思うのです!」

「俺もそう思うぜ」

そう言うと、電も木曾も続ける。

「有難うございます」

笑顔を浮かべながら喜んでいる後輩の娘を見て、ふふつと笑みを浮かべる直哉。

やって来た魚屋さんで、

「直さんに、かわいいお嬢ちゃん達も来てくれたから、お刺身も付けてあげるよ！」

とのお言葉に甘えて、沢山お魚を買って来る。

シャケやタラや白身魚やブリ等、いっぱい買って、

お刺身の魚も、柵で持たせてくれる。

「いやあ、いつも濟まないねえ」

そう言いながら、代金を支払う直哉に、

「いいっていいって。いつも、海の平和を守ってくれてるんだから」

と笑顔で言う、魚屋のおっちゃん。

「いやあ、有難うございます」

直哉がそのおっちゃんに頭を下げると、おっちゃんは直哉の背中を叩く。

「げふっ」

少し噎せると、皆どつと笑うのだ。

お魚を買い終えて野菜も買って家に戻ると、武藤提督が金物屋で大きな土鍋を買って来てくれていた。

「ああ、すみません」

「卯月が、この間土鍋が割れたって言うから、卯月と買って来たんだよ。目止めも終わってるよ」

そう。この間の鍋で、卯月が洗い物中に、落として割ってしまったのだ。

すっかりそれを忘れていた直哉はそう言いながら、キッチンに向かう。

キッチンに入ったら、大村家の総料理長である夏海が、テキパキと包丁を走らせて大皿に魚と野菜を盛り付けてから、

柵の刺し身をしゅっ、しゅつと切って盛り付ける。電と木曾はその

お手伝いをしている。

「いやあ、良いお嫁さんになるよ」

そんな言葉に、少し照れて、

「そんなに褒めても、何も出ませんよ?」

そう言うも、長門も木曾も、

「良いお嫁さんになる」

と断言すると、いよいよ顔を赤くするのだ。

その間にダイニングでは、卯月が来客用の椅子を、収納から出して来る。

その頃ゲーム組は、ロリ奈々海と夕立で、格闘ゲームに熱中している。

『シネエーイ!、ドコヲミテイル!』

画面では奈々海のキャラが、バスケットボールのように叩き付けられている。

そして、夕立のキャラの姿はどこにもなく、奈々海のキャラが画面外と地面を往復しているだけの状態である。

出汁たっぷりのお鍋に、野菜とお魚を入れ、野菜とお魚が簡単に煮えたところで、ミトンで?んでカセットコンロに移動する。

「はいはい。夕立ちちゃんも、母さんもごはんですよ」

「はーい!」

ゲームを放り出して、ダイニングにやって来る二人。
全員揃ったところで、

「それじゃあ、乾杯の音頭を取る前に、発表があります!」

『えっ?』

直哉は宣言と共に、プリントアウトした昇進辞令と、今朝宅配便で届いた階級章を取り出す。

「えー、駆逐艦電。類稀なる優秀な戦績により、艦娘昇進規定によつて二尉に任じる。また駆逐艦卯月、同じく優秀な成績により、三曹に任じる。大本営幕僚総監 大貫 悟海将 おめでとう」

直哉は、余計なことをしたかな?と思いつつ発表すると、真っ先に主賓である夕立が、

「おめでとう!!!」

と祝福してくれた。

その後皆で、

「夕立も電も卯月もおめでとう!!!カンパニー!」

と、全員で乾杯の音頭を取り、お鍋パーティーが始まる。

ワイワイガヤガヤ、艦娘達がガールズトークに花を咲かせ、新しい階級章を身に着けた夕立・電・卯月の三人は、嬉しそうに食事をして
いる。

そんな艦娘達を眺めながら、自分達も彼女等を守って行こう、と決
意する提督三人組だった。

因みに、全員お泊りになり、リビングで雑魚寝することになった。

夕立と卯月と電はベッドの独占権が与えられ、ふかふかのベッドで
眠るのだ。

幕僚会議

早朝……ここは、宮戸島鎮守府付近の民宿という名の、秘密会議室。
卓袱台を囲んで、明石と薄雲が座っている。

「同志薄雲よ、作戦は万事滞りなく終わりましたか？」

「はい。昨日の夜、電が『直哉と服を交換してみたいのです』と言って
いました」

コクリと頷く薄雲。

「まさか今回、私が民宿に居るとは思わないでしょう」

「私が漏らせば一発ですが？」

フツフツと、悪役の笑いをする明石に、冷たく突き放す薄雲。

「それは止めてください」

と、前回のお仕置きを思い出すと顔を青くする明石。

電が目を覚ますと、布団を手繰り寄せて起き上がる。何やら違和感
を感じる。

卯月に、謎の美少女。

「……………あれえ？」

着ている服は、ダボダボの直哉の寝巻き（上のみ）。

「電、どうしたんだぴよ……………ん」

電を見て、卯月が固まる。

「どうしたのですか？」

「うっぴよおおおおん!?電がお姉さんになってるぴよん!?おっぴい
が大きくなってるぴよん!」

「うええええええええ!」

電と卯月の絶叫が、寝室に響き渡った。

「何だ、騒々し……………い」

起き上がった時点で声はおかしいし、視点が低い。何より股間が
スースーする。

股間に手をやると、いつものアレが無くなっている。

「何じやこりやあああああああああ!？」

直哉の絶叫が、寝室に響き渡った。

「取り敢えず今日、幕僚会議だぞ。どうすんだよ？」
と言ったところに、薄雲が戻って来た。

「本日の哨戒結果、特になし」

「こっちは特にあつたよ。今度は何を盛ったんだ？」

直哉の問い掛けに、薄雲は、

「直哉には、性転換・子供化薬。電には、大人の体になれる薬。副作用で、大口径主砲が搭載できる」

「いや。副作用と主作用、逆なのです!!」

電がたまらず、ツツコミに回る。

「今日の幕僚会議、どうしたもんか……?？」

「電の制服と交換して、徽章と名札を入れ替えれば……」

「それしか無いか……?しかし、トイレってどうするんだ？」

半分諦めて、トイレの方法を訊くと、

「普通に座つてすれば良いのです。ちゃんと前から後ろに拭くのですよ?。」

「なるほどな……」

二人が、制服の徽章を入れ替えながら会話しているのを、生暖かく見守る卯月と薄雲だった。

幕僚会議に向かう直哉と電。

仕方がないので、仙台までバスで行って、電車を乗り継ぎ、会議の時間には余裕で間に合う。

会議場は、自衛隊の仙台駐屯地の会議室なのだ。

薄雲と卯月は、お留守番である。

見た目は、徽章だらけの艦娘と、何故か海尉の階級章を付けている陸尉制服の女性という出で立ちである。

「電ちゃん?。」

声を掛けてきたのは、ちんまりとした奈々海と武蔵。

「奈々海さん、相変わらずこの姿なのですか?。」

「うむ、可愛いからな。『可愛いは正義』」

代わりに、武蔵が代弁する。

気仙沼鎮守府は、彼女が秘書艦なのだろう。

「ところで。この可愛い物体は……先輩？」

「そうだよ。明石の野郎に、一服盛られちゃったんだよ」

「あつはつは、可愛い可愛い。なのです、つて言ってみてよ、先輩」

「電は、可愛くて強いなのDEATH、HAAAA！」

「何か、言い方が変なのです！」

その婦婦漫才に、大笑いしている。

その後には会議場にやって来たのは、南三陸鎮守府の武藤提督^{二佐}である。

「おはよう、皆。つて、明石の葉害被害が拡大しておるのお」

二佐の階級章を付けた女の子を、一発で直哉と見抜いた武藤提督は、困ったような顔をする。

もちろん秘書艦は長門であり、

「おお、ロリ高菜二佐もかわゆい」

と、顔をデレデレさせている。完全にながもんである。

その後にはやって来たのが、宮城県地区を統括する岩沼鎮守府の、羽佐間真一郎一佐である。

妙高四姉妹と、娘でもある花梨^{かりん}三尉を連れての登場である。

「おはよう、諸君。今日も美人揃い……で……」

恭しく礼をして顔を上げると、視界には大人化した電に、ロリ二人、おっさん一人に長門と武蔵である。

「……明石の仕業か。徽章から察するに、大村二佐と高菜二佐か。流石にそっちは、私の射程範囲外だな」

この男40代の伊達男であり、とにかく女にもてるし、片っ端から口説く「不良中年」である。

妙高四姉妹とお留守番の扶桑、山城姉妹とは既にケツコンカッコカを済ませ、事実婚状態になっている。

そして娘は娘で、母親が死んだ為に、父親のところに転がり込んで、防大卒業後父親の副官に配属された、新米士官である。

もしかしたら、こう言ったご落胤はまだいるかも知れない、という

噂である。

そして、それにも懲りずに、他の鎮守府の艦娘や職員まで口説くことで、足立一佐にとっては頭痛の種なのだ。

「お久しぶりです、羽佐間一佐」

「やっぱり、ロリは対象外ですか？」

敬礼する直哉に奈々海。それに続いて、全員が敬礼する。

「あとは、桐山二佐が到着すれば宮城の提督が勢揃いだな」

そんな中、桐山二佐と神通がやって来る。

二人共機嫌が悪そうで、喧嘩したな、と皆察する。

「何だお前達、子供が来る場所じゃないぞ?!」

と、ロリ提督組に当たり散らすのが、二人のロリ提督はあっかんべーと、おちやらけている。

更にイラつき加減が増している桐山提督に、

「明石の薬害被害で、こうなったのだ。それより、会議の場だ。冷静になり給え」

羽佐間一佐が、鋭い眼光で窺めると大人しくなる。そして神通は、申し訳なきように頭を下げる。

羽佐間一佐は白兵戦技の達人で、深海棲艦にも有効な手段、白兵戦による直接攻撃と云う戦法で前線に出ている。

明石に作らせた、量産型艦娘を改造して作ったパワードスーツを強引に配備させ、装甲服のたまと宣って海を駆けている。

そう言った意味でも、華々しい戦果を挙げ、一佐まで上り詰めた男である。

「それでは会議を始めるから、全員席に付き給え」
会議は数時間にも亘った。

深海棲艦の進行状況や、戦果、それとおかしな点がなかったかを討論し合うのだ。

資料の機械操作は花梨三尉が行い、各鎮守府から上がって来たデータを纏めて、

それをこういった幕僚会議で説明する。

「姫は最近、出沒して来ませんな」

その資料を見ながら、武藤提督がヒゲを弄りつつ言うど、

「こっちも、岩手の釜石鎮守府と連携して、ミッドウエー方面に向かっているんですが、如何せんミッドウエー近辺からの敵の層が厚くて……」

「と言うことは、やはりミッドウエーから先を守っている、と言うことになるかな？」

そう議論し合う奈々海と直哉。だが外見が外見なので、あまり締まらない。

「取り敢えず、当分は様子見、と言うことで……ところで、今朝入ってきた耳寄りの情報だ。硫黄島に構築されていた、敵の物資集積要塞を大和二佐率いる、横須賀鎮守府第13艦隊が奪取し、集積地棲姫を捕縛した、との事である。これで日本領海圏内の敵の拠点は、失われたことになる」

その羽佐間一佐の報告に、全員から歓声上がる。

それに対して、花梨が付け加える。

「東京の情報本部の同期の話では、全国の艦娘を結集させ、硫黄島要塞を橋頭堡に南方に進撃、その陽動を以てアリユーション、ミッドウエーを攻撃する作戦が持ち上がっているとか。どうも、防衛相に直接作戦案を持ち込んだ幹部自衛官が居るとか」

『……………』

その嬉しくない報告に、全員が押し黙る。

「私の意見を言うのだがね、ミッドウエーやアリユーションを突くと藪になっていて、そこには藪蛇どころかどうも毒蛇の大家族がいるのではないか、と思われる。まあ無理はしないことだ、と私は思うがね。私の方でも、足立一佐と連携してどうにか廃案にできないものか、動いてみよう」

「お願いします。この作戦は、兵力分散の愚を犯した硫黄島の悲劇の二の舞の気がしてなりません」

直哉も、羽佐間一佐の言葉に同意する。

硫黄島の悲劇とは、戦争が始まってして少し経った後の悲劇だった。時期的には、宮戸島事件の直後辺りである。

硫黄島に集結する敵艦隊を包囲殲滅すべく、三個連合艦隊・36隻で出撃したものの、深海棲艦の連合艦隊が急進して、包囲網が完成する前に第3連合艦隊を襲い、続いて第2連合艦隊を撃滅した。艦娘24名が轟沈し、戦死自衛官百数十名を出す大惨事となったのである。

そして、総司令官である横須賀鎮守府司令官も瀕死の重傷を負ったが、指揮権を引き継いだ総秘書官大和一尉が突破されたと偽装し、背後から打撃を加え、撤退する、と言った戦法で全滅を免れた。

全滅を防いで、日本近海までの侵略を防いだ功績で、大和は三佐に昇格して『不敗の女神』と呼ばれるようになった。今も二佐として、横須賀鎮守府の13番目の艦隊の司令官兼秘書艦として、艦娘が艦娘を指揮すると云う、珍しい体制で行っている。

神奈川県には、横須賀にしか鎮守府はなく、常時13個艦隊が配備されている、関東の守りの要である。

その後、深海棲艦は硫黄島に要塞を築き、集積地棲姫を置いて日本侵攻の橋頭堡、としていたのだ。

その硫黄島要塞を、大和率いる第13艦隊が奪取した、ということになる。

尚、哀れ物資を強奪された集積地棲姫は捕虜となって、明石の魔改造の後、硫黄島要塞で働かされている。

「差し当たり、今のところは各鎮守府の自由裁量権で抵抗できる案件だ。その噂については、もう少し調査を続けよう。それでは今月の定例会議を終了とする。一同起立、敬礼」

羽佐間一佐の言葉に全員が起立し敬礼すると、真っ先に桐山と神通が退出する。

「さて、お嬢様方とおまけ一名様、小官とランチなどはいかがですかかな？」

「二佐、他所様の艦娘に粉掛けるつもりですか？」

そんな態度の羽佐間一佐に、ジト目になる花梨。

「まさか。私はそこまで無分別ではないよ。ただ、美しい花々に囲まれて食事を摂るのもいい、と思ったただだよ」

「いけません、帰りますよ。今鎮守府には、扶桑と山城しかいないんですから」

そう言うと、ぐいっと羽佐間一佐を引っ張るように帰って行く。

それを見送ると、

「それじゃあ、帰りますか？」

と、直哉の言葉と共に、各々が帰り支度をする。

「仙台市内で遅めのランチをしようか？」

「それは良いのです」

仙台市内のファミレスで、小さな提督と、大人化した電が仲睦まじそうに食事を摂っている姿が目撃されるのだった。

宮戸島に帰り着いた二人は、卯月と薄雲によつて捕縛された明石の解毒薬を、自宅で飲んで元に戻ったことは言うまでもない。

又しても明石は、手酷いお仕置きを喰らった。

海沿いを歩く

「ちよつと出掛けてくるよ」

直哉は、財布も銃も持たず、小銭入れだけを持って作業帽を被り……

そしてミリタリーコートを羽織ると、秘書艦として残っている電にそう告げてから、鎮守府を後にする。

鎮守府から、海沿いに漁港へと向かう。

漁港に近づくと、海には大漁旗の掲げられた戻って来たり、これから漁に行く船が向かって行ったり、船のエンジン音や波の音、潮風が心地良い。

「直さんー！こんにちは！」

漁港までやって来ると、声を掛けて来るのが漁師のおっちゃんである。

「最近、漁の様子はどうだい？」

「おかげさまで好調だよ。最近は、深海棲艦も近海には現れないからねえ」

「そうか、それはいいことだね。今年のサンマは、美味しいんだろうね？」

「今丁度、サンマ焼いて食べてるんだ。直さんもどうだい？」

その言葉に、少しだけ頬が緩む。空腹中枢が刺激されて、空腹感が表層へと浮き上がって来る。

「いいねえ、ご相伴させていたどころかな？」

漁港ではU字溝で炭火を起こしており、網の上には焼きたてのサンマが並んでいて、漁師達やその奥さん達が美味しそうに頬張っている。

「やあ、皆さんこんにちは」

作業帽を取って挨拶すると、漁港の皆は次々と直哉の周りに集まる。

「直さん、サンマ焼けてるよ、食べて行きなよ」

「ええ、ちょうど頂こうと思っていたところです」

そう言うと、勧められるままにパイプ椅子に腰掛ける。

漁師達とは、海の様子について意見交換する。

艦娘が少ない東北戦線では、こうやって漁に出かける男達の情報が何よりも不可欠なのだ。

流石に酒は、やんわりと断ってからサンマを頬張る。

塩味がついていて、脂が乗っていて美味しい。

新鮮なサンマをすぐに焼いただけはある。海の人間だけに許された特権だ。

直哉が漁港に顔を出すと、宮戸島の皆がすぐに顔を出して来る。

「やあ！直さん」

「嫁さん達との生活はどうだい？」

等と詭ねられる。

「最近、神通ちゃんも家出して来なくて安心だよ」

あまりにも夫婦喧嘩と家出の多い、女川の夫婦を心配する声も上がるが、

最近はまだ神通は耐える時期に入ったのか、家出しなくなった。

一説には電が、

「ウチは実家じゃないのです」

と、はつきりと言ったからかもしれない。

一頻り海の幸を味わうと、そのまま内陸部に歩いて行く。

商店街を通り掛かると、四人連れの小学生男子に出会う。

健太君と、元いじめっ子達である。

「高菜二佐ー！」

「お、健坊、空手の練習はやってるか？」

「はいー」

最近神通が家出をして来ないので、一応空手有段者の直哉が、健太の指導を引き継いだ。

土日の艦娘が哨戒している時間を利用して、この少年四人にまずは武道の精神を説いてから、

ちよつとずつ空手を手解きしている。もちろん自分の練習も兼ねてである。

直哉が指導できない平日は、宮戸島の空手道場に通うようになった。

今は健太が七級、元いじめっ子達は九級でそれぞれ緑帯・黄帯を身につけている。

もちろん直哉は二段の腕前を持っていて、稽古の時は長年使い込まれた黒帯を締める。

「お前達、いじめなんてくだらない事やってないだろうね？」

後ろの三人組に声を掛けると、

「もちろん、先生の教えを守ってるよ」

「学校の先生からも褒められたし」

「一度健太と勝負したけど負けちゃったし」

そう。健太は、一番練習と稽古を積んでいる為、本気で怒らせたら敵わないのだ。

もちろん、平和を愛する健太は暴力を嫌っている。

でも一度、島に変質者が現れた時には、女の子を身を挺して守って、急所蹴りで動けなくしたところを一緒に逃げたのだ。

その女の子愛ちゃんとは、それが縁でガールフレンドになったらしい。

その変質者は、急行した駐在さんと直哉に逮捕され、警察署に送られて行った。

「愛ちゃんとはどうだい？」

逃うように言うと、顔を真赤にする健太君。

「けーんちゃん!!」

可愛い声が聞こえてくると、やって来た噂の人物愛ちゃんである。

「あ、愛ちゃん」

「こんにちは、高菜二佐。びしっ」

戯けて敬礼をすると、直哉も答礼する。

愛ちゃんも空手を習いはじめて、八級の腕前になった。

「今日も熱々たぜ」

ひゃー、熱い熱いと三人組が囁し立てると、二人共顔が赤くなる。

「もー! 詭わないですよー!」

そう言いながら、ギュツと手を繋いでいる。

愛ちゃんは最近、自衛隊に興味を持っていらっしゃるらしく、土日の練習には健太君のお弁当を作っては持って来て、艦娘達とも交流を深めている。

「仲が良くてよろしい。それじゃあ、君達も寄り道をしないように帰ること。おじさんはお散歩を続けるから、またね」

『はいっ！』

皆の元気な声を聞くと、満足そうに再び散歩を再開する。

ポケットに手を突っ込んで鼻歌を歌いながら、商店街を歩いて行く。

ふと顔を上げると、夕焼け空。

太陽が沈んでゆく。

「最近どんどん日が短くなったなあ」

一人呟く。

「全くじゃのう」

声を掛けられた方を振り向くと、杖をついた御老人。

いつも散歩中に出会う、この時間の散歩をしている島の長老大五郎さん。

元漁師で引退してからというものの、こうやって散歩をしている。

「最近はどうじゃね？」

「平穩そのものですね。海も静かだし、駆逐級しか出て来ませんからね」

「それはいいことじゃ」

「ドタバタした日常もいいですけど、こうやって静かな日常もいい」

「そうじゃの」

二人フフツと笑うと、

「コーヒーでも飲まないか？」

と誘われ、近くの珈琲店に立ち寄る。

そこで数十分将棋を指すのが、二人の間の無言の約束となっているのだ。

時には一時間位将棋を指して、嫁達に帰りが遅い、と叱られるのだ。

パチ パチ

アマチュア段位は申請していないが、この爺さんもなかなか将棋が強い。

年の功とは、こういったことだろう。

喫茶店のマスターも、この爺さんの為に将棋盤を買って置いている。

普段は、詰将棋をやっているそうだ。

本人曰く、頭を使うとボケ防止になるそうなのだ。

実際、老人ホームで麻雀が流行っている事もある。健康麻雀と呼ばれる、お年寄りには人気らしいのだ。

「やはり、藤井システムには飯島流引き角戦法かろう？」

「そうですね」

最近の年寄りにはしては、ニツコリ動画の生放送で将棋の対局を行っていると見ているのだ。いわゆる観る将でもある。

その為に、パソコンを買って、インターネットを引いている。

出張パソコン教室を受けては、インターネットでお買い物まで出来るスーパー老人なのだ。

将棋こそ人生、と言わんばかりのおじいちゃん和对局するのが、直哉にとっても楽しみであるのだ。

因みに、スマートフォンもこの年で持っており、散歩中はイヤホンで将棋の中継を聞いている。

今も、横置きになっているスマートフォンで将棋の生中継が流れている。

大五郎さんと別れると、日も落ちて空は青紫になっている。

反対側から夕闇が迫っている。

「電達は帰ってしまったかな……？」

鎮守府に施錠確認をしに向かうと、消灯されており、《本日の業務は終了しました》という看板が掛けられている。

スマートフォンを取り出すと電から、

『夕飯はカレーなのです。さっさと戻って来るのです』
と言うメッセージが、数分前に着信している。

「今日は金曜日だもんなあ」

曜日を思い出しながら、家に向かって歩き出す直哉。

明日は、やって来るであろう少年達の空手を見ようか？等と考えながら、

その直後、何者かの気配を感じた。

直哉は振り向いたが、そこには誰もいなかった。

ふう、と溜め息を吐いて、帰りを待つ可愛い三人のいる家に再び向かうのだった。

深海よりの警告く月夜の密会く

深夜電が目を覚ますと薄雲が扉を開け外に出ていったところだった。

「こんな深夜に……」

電が服を身に着け追いかけると薄雲が赤い瞳で待っていた。

「電さん、呼んでいます」

「……誰がなのです？」

「……合えば分かります」

そう言うと、無言で艀装を展開して海に向かう。

電はそんな薄雲を追いかける。

薄雲は海に降り立つと沖合へと滑らせていく。

電も艀装を展開して海に降り立つと同じく沖合に進んでいく。

沖合には戦艦水鬼と旧日本軍の軍服を身に着けたどことなく睦月に似た青白い肌の女性が佇んでいた。

「はじめまして、電」

その女性が笑みを浮かべると電も軽く頭を下げた。

「貴方は、何者なのです」

「私わたくしは、そうですねえ。深海棲艦の提督。深海提督を名乗っておきましよう」

電は警戒を解かない。

「その深海棲艦の提督が電に何のようですか」

「そうですね、人類に警告を与えに来ました。深海棲艦と艦娘は表裏一体なのだ。ですから沈んだ艦娘が深海棲艦になるのです」

「……………」

その言葉に、青白い肌の駆逐艦が戦艦水鬼に隠れているのに気づいた。

「この子は……………」

「この子も、深海棲艦です。駆逐艦の…………この子はあるブラック泊地にいました。何度も何度も捨て艦戦法をするひどい提督のもとに

いました」

深海提督は悲しそうに語り始めた。

「何度も何度も、僚友を無為に失い、そして自分の番がやって来た時『悲しい、死にたくない』その思いが上位の深海棲艦に引き上げた。沈んで行つた僚友の魂と共に……………」

「ブラック鎮守府がある限り、深海棲艦は無くならない、という訳なのですか?」

「その傾向の強い、西の方には特に深海棲艦が現れているでしょう? 東北が平和なのは、貴女方の提督に原因があると、考えたことはありませんでしたか?」

その言葉に、電は納得した。

「なるほど、提督自身が殴り込む岩沼鎮守府。そして、きちんとした安全弁のいる女川鎮守府、善良過ぎる提督の南三陸、そして戦術センスに長けている気仙沼。そして、ここ宮戸島……………共通項は艦娘を大事にしている」

「よくご存知なので……………薄雲が?」

「大正解。わたくし私は深海棲艦の心を感じ取ることができません。半分深海棲艦化しても、艦娘として生きている薄雲の心を感じ取ることもできません。もちろん伝言を伝えることも。それに、こちらにもスパイはいます。人間社会に人として擬態して人間の様子を窺っている。それは、自衛隊内部にもいる、ということ」

「……………」

「二つ大ヒントを言っておきましょう。神谷徹二佐、と云う人物がいます。彼は政治ルートを使って、AL/MI作戦を再び行おうと画策している愚か者です。こちらで、彼を暗殺することは不可能ではありませんが、それによって全面戦争化することは私の本意ではありません。あなたの方の力で、彼を撃つすることを願っています」

「……………」

「わたくし私は、全ての深海棲艦の『母』でもありません。薄雲にしてもそう。彼女を半分深海棲艦だと知って尚、手元に置いて大事にしてくれる高菜二佐を、わたくし私は尊敬しています」

電は、その言葉にだけは同意し、小さく頷いた。

「分かったのです。電達は、全力で神谷二佐の作戦に抵抗するのです」「うふふ、楽しみにさせていただきます。神谷二佐にどう抵抗するかを」

楽しそうに笑う深海提督に、電は少し不愉快さを覚えた。

「楽しみにされるような物じゃないのです。きっと直哉もそう言うと思うのです」

「高菜直哉二佐、なかなか興味深い人物ですね。一度お会いしてみたいものです」

その言葉に、電は肩を竦めた。

「止めておいたほうが良いのです。ただのおっさんなのですよ？昼間は読書やトレーニングに明け暮れ、疲れたら昼寝をする。妖精さん達に全て丸投げして、可能な限り怠惰を貪る、どうしようもないおっさんなのです。でも、本気を出した時はとても頼もしい存在なのです」「まあ、益々お会いしたくなりました」

コロコロと喉を鳴らして笑う姿に、電は『ある人物』とダブって見えた。しかし、それが誰かが思い出せない。

「このことは直哉に報告させてもらってもよろしいのですか？」

「ええ、彼ならみだりに口外したりしないでしょう」

「テイトク、ソロソロヨアケニナル」

今まで黙っていた戦艦水鬼が口を開くと、

「では、会見はお開きと言うことにしましょう。頑張れと言う立場ではありませんが、元気にやってください」

「お互い、次に出会うのが戦場でないことを祈っているのです」

そういうと、お互い背を向けて、その沖合の会見場を後にした。

「電が夜中に目を覚ますまで、毎日こんなことをしていたのですか？」「そうです。深海提督は電に会いたがっていました」

帰り道、電は薄雲に問うてみると、薄雲は再び元の瞳に戻り、答える。

「深海棲艦にも提督がいる、つてことが判っただけでも、大きな収穫なのです。しかし……電は、深海提督に出会ったことがある気がするの

です」

「まさか、そんな筈が……」

「何か、奥歯にものが引つ掛かった気分なのです……このことは直哉に報告していいものか……」

「直哉を信じましょう」

二人は頷くと、家路に急いで行った。

「——ということがあったのです」

その日の朝食で、電は直哉にことのあらましを打ち明けた。

「ふむ。やはり、私の仮定は間違っていなかったか。私とて暇を持って余している訳じゃないから、ブラック鎮守府の摘発件数が多い関西が激戦区なのには、何か理由があるのではないか？と思っていたが、《きちんとして指揮する存在がいて、人類に対する咎なのであればそういうことか》、と納得できる。……深海提督か……」

直哉は、腕を組んで唸る。

「取り敢えず、この事は黙っておこう。神谷二佐の事は、私も知っている。もっとよく知っている人物が気仙沼にいるよ。大村二佐の同期で、主席卒業。野心が強く、今は大本営作戦部で作戦参謀をやっている……」

「その神谷二佐を、どうにか潰すことはできないものか、なのですか？」

「と言うよりは、この無益な逆侵攻作戦を潰すことができれば、深海棲艦との終わりなき全面戦争が避けられる、と言うことか」

「……………」

全員が押し黙る中、口を開いたのは薄雲だった。

「とにかく、まずは羽佐間一佐、足立一佐の動きに期待をして、その後どうするかを考えましょう」

「そうだね。何はともあれ、通常業務だ。皆頼むよ」

「「はいっ!!」」

数々の疑念と不安を残しながら、今日も一日が始まって行く。

作戦阻止の攻防

直哉と電は、東京に向かっていった。

マスコミへのリークにより、大侵攻作戦の存在が世間にも知れ渡ってしまったからだ。

世論も、大きく割れていた。

深海棲艦は敵だから攻撃すべし。と言った主戦派と、自衛隊は専守防衛の為の組織だ。と言う、防戦派の対立である。

このままでは、いずれ主戦論に傾いてしまう。その前に、この作戦そのものを叩き潰さなければならない。

その為に、神谷二佐との面会に向かったのだ。

東京に辿り着くと、すぐに大本営作戦部に向かった。

「これはこれは。宮戸島の英雄、高菜二佐」

すぐに、神谷二佐が出迎えた。

そして、応接室に移動する。

神谷二佐が座ろうとする直前に、話を切り出した。

「今回の出兵作戦、防衛大臣に直接提出して、マスコミにリークしたのは貴官か？」

「なっ?」

その神谷二佐の表情は、驚きに満ちていた。

「やはり貴官か。どういふつもりだ?」

その問い掛けには自信に満ちた笑みに戻り、腰掛けながら、

「どういふもこういふもありません。小官は、偏ひとえに日本国民の為に害敵となる、深海棲艦を殲滅せしめんと」

「どのような法的根拠で?」

「法的根拠ですと!」

神谷二佐は絶句した。

そう。現段階での深海棲艦への対処は、災害派遣として対処しているのだ。

要するに、日本領内に限って先制攻撃を含めた攻撃が可能なのは、嘗ての防衛大臣が記者会見に於て「ゴジラが出て来たら災害派遣」と

云う言葉遊びを最大限活用したからであり、正確には大村二佐等の領海外の進撃は、現段階ではグレーゾーンなのだ。

「それは、災害派遣で……」

「災害が起きていない場所に先制攻撃を、しかも国外へ派遣することを災害派遣として良いものか、私は疑問に思うがね。で、敵地ではどのような作戦を考えている？」

その言葉に、神谷二佐は自信満々に答える。

「日の丸を付けた日本艦娘艦隊が長蛇の列を成し、ミッドウエー・アリューシャンに攻め込むところ、深海棲艦の心胆を寒からしめる事ができましたよ」

呆れた。直哉はそれ以外に、思い付く言葉が見つからなかった。

「心胆を寒からしめるだけで、示威行動を取ったらすぐ退く、という訳かな？」

「いいえ、相手は害獣に過ぎません。知能の低い深海棲艦と、我々優秀な頭脳を持った艦娘軍がぶつかれば、自ずと結果は見えて来ましよう」

その言葉に、直哉は苛立ちを覚えていた。その苛立ちを隠しながら、冷静に反論する。

「では、どうすると貴官は考えるのかな？」

「それは、高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に対処する事になりましよう」

「要するに『行き当たりばったり』ってことか。それでは、硫黄島の悲劇での敗戦の解説をしてもらおうか？」

「そ、それは……相手が猪突猛進し過ぎて、対処が遅れたことにあります。相手がケモノだった、という何よりの証だったのではないでしようか？」

「私はそうは思わない。おそらく、相手には優秀な指揮官がいると見える。であるから、硫黄島に要塞も築き上げた、そう考えるのが妥当ではないかな？」

その言葉に、神谷二佐は嘲るような笑いを浮かべた。

「敵を過大評価し、過度に慎重になるのは自衛隊の作戦行動に障害を

来すことになります。ましてやそれが大規模作戦とあつては、敵を利用することにもなりましょう」

ドンツ!!

「いい加減にするのですー!」

苛立った電が、テールを叩いて立ち上がった。

「高菜二佐が慎重論を唱えたからと言って、利敵行為とは何ですか!? 礼を失するに余りあるのです!」

「電二尉、上官に向かってその言葉はどういう事か? それに私は、一般論を述べただけだ。一個人への誹謗と取られたら、甚だ迷惑だ」

「電。座りなさい」

「申し訳ありませんでした」

電が神谷二佐に一礼して腰掛けるのを見て、矢継ぎ早に質問を投げ掛ける。

「では、アリューション・ミッドウエーにて想定される、敵の規模は?」

「それは、現地にて索敵網を張り巡らし……」

「もし、敵が予想を遥かに上回っていたら?」

「高度な戦術によつて、数を補えばいいでしょう」

「もし敵に、提督——深海提督のような存在がいたとして、この作戦が敵に筒抜けだったとしたら?」

「ん な っ ……!?!?」

神谷二佐は再び絶句した。直哉は、今度は苛立ちを隠さずに、神谷二佐を睨み付ける。

「そもそも、マスコミにリークしたのが貴官の大失敗だ。相手には、知能のある個体も確認されている筈だ。それが、何の指揮も受けずにいるなどと、頭がお花畑もいいところだ」

「な っ ……?」

その厳しい指摘に、何も言い返せないのを見ると、直哉は皮肉を口にする。

「どうせ、貴官は作戦参謀だ。安全な日本から指揮するんだろう? 私達提督や、艦娘に犠牲が出て、貴官は困らないだろうな?」

「そんな事は決して……艦娘は、失えばまた新たに生み出せばいいだ

けではないですか？明石の浄化建造のおかげで、いくらでも補充は可能だ」

苦し紛れに放った神谷二佐のその言葉に、電はついにキレた。

「ふざけるのもいい加減にするのですー！」

「っ!？」

電は立ち上がり、神谷二佐の胸倉を？んでいた。

「電達に捨て艦戦法をやれと言うのですか!?!絆を深めてケツコンした艦娘や、戸籍上籍まで入れた艦娘達にも捨て艦戦法をやれ!?!提督達もその犠牲になれと言うのですか!?!」

「そ、それは……」

「さっきから黙って聞いていれば、戯けたことばかり言っつて！何が補充は可能だ、なのです!?!電達は心を持って、感情を持って生まれているのです。決して貴方達の言う、道具や兵器の類なんかじゃあない！」

「うっ……ああ……」

「神谷二佐、反論できるか？できないだろう。だから階級で、大村奈々海に並ばれるんだ。おそらく、彼女の方が先に一佐に行くだろう。貴様は今、艦娘全員を敵に回したんだ」

「うるさい!!」

「そう言う子ども染みた性格も、貴様の欠点だな。そんな作戦に、私の嫁達の命を預ける訳には行かない。これはおそらく、全国の提督達も同意見だと思うがな？」

「うるさい!!あはあ……ヒイ……」

「きゃあっ！」

神谷二佐は、電の腕を振り解いて、頭を抱え出した。

「うるさいうるさい!!うるさああああああい!!ヒイイ!!」

眼が血走り、奇声を上げて、顔を手で覆い……

涎が零れ、制服の股間の部分に染みができ……

突然倒れてしまった。

「……何が起こったんだ？」

「……分からないのです、すぐに足立一佐を呼んで来るのです」

泡を噴いている神谷二佐を見ながら、すぐに電は足立一佐を呼びに走って行った。

救急車で搬送された神谷二佐は、精神的な疾患により、挫折が極度の興奮を齎して癲癇発作を起こす、と医師に診断された。

発作を起こさない方法は、「物事が全て彼の言うとおりになる」ことだ、と言う。

病院に同行した、足立一佐と直哉と電は、その診断に大きな溜め息を吐いた。

「……この作戦案は、廃案になるだろうな。彼は原隊に送り返す」

「全く、困ったものですよ。あんな輩の為に、我々は死地に行く事になりかける、だなんて」

「……私の方から大貫総監に、『作戦は欠陥だらけで、何の役にも立ちません』と報告しておこう」

足立一佐は、再度大きな溜め息を吐いた。

それから数日後、防衛大臣はこの世論の混乱の責任を問われて、辞任に追い込まれた。

次に選出された防衛大臣は、大泉 純と云う名前の男で、真つ先に艦娘の受け入れを進言した、当時防衛政務官だった男である。現在は衆議院議員として活動しており、彼が防衛大臣に昇格した。余談ではあるが、彼の妻は軽巡洋艦大淀で、彼女も横須賀鎮守府第13艦隊に所属しているエース艦娘である。

つまりは、艦娘に一番近い人間が、軍政のトップを担うことになったのだ。

「……という次第です」

再び宮戸島沖の洋上で、深海提督に薄雲が事の経緯を語った。

「ふふふ、高菜直哉二佐。益々お逢いしたいものです」

深海提督は、楽しそうに笑っていた。

「テイトク、タノシソウ」

お供の戦艦水鬼が声を掛けると、いつものアームに腰掛ける。

「楽しいですよ。何せ、人類にも理解^{わか}る相手が現れたのですから」
「それでは失礼します」

一礼して去って行く薄雲を見ながら、深海提督は空を見上げた。

「星がこんなに綺麗なのに、何故私達は生まれたのでしょうか？」

「ワカラナイ、デモ、イツカハミツカル」

少し悲しそうな深海提督の頭を撫でると、彼女達は深海へと沈んで行った。

健太君と愛ちゃん

土日の朝も、直哉達は鎮守府にやって来る。

ただ平日と違うのは、二人の子供が待っているかないか、である。

「おはようございます！」

元いじめられっ子の健太君と、愛ちゃんである。

二人仲良く、空手の道着に着替えて待っている。

健太君には艦娘寮の鍵を預けていて、そこで着替えることを許可している。

これも、提督の自由裁量権のひとつなのだ。

「はい、おはよう。それじゃ着替えて来るから、埠頭で待ってるように」

「はいっ！」

健太君と愛ちゃんは、手を繋いで軍港敷地内の埠頭に向かって行く。

「今日も元気がいいのです」

「元氣いっぱいだぴょん」

「ですね」

三人の嫁達もそれをにこやかに見送ると、三人仲良く哨戒に向かっ
て行く。

深海提督の存在や、深海棲艦全てが戦争を望んでいる訳ではないこ
とを知っている三人は、少しやり辛いが、

漁師達の命と財産を預かっている身である為、はぐれ深海棲艦は沈
めざるを得ないのだ。

どんどん浄化して、そして轟沈艦娘がいなくなれば、この戦争も平
穩期を迎える。

そう信じて戦い続けるのだ。

その間に、直哉は空手着に着替える。

使い込まれた黒帯を締めると、顔も引き締まる。

そうして二人の指導を始めるのだ。

「正面に礼！」

「二押忍！二」

「互いに礼！」

「二押忍！二」

まずは、互いに挨拶をしてから準備体操をして、基本の練習から始まる。

「正拳突き、一！二！三！四！五！……」

「お疲れなのです！」

練習が終わる頃には、電達が哨戒を終えて戻って来る。

「今日は敵影なし。ぶいっ」

無表情でVサインをする薄雲に、

「何事もなかったぴよん」

笑顔を浮かべる卯月。

練習が終わると、埠頭でお茶会が始まる。

和気藹々としながら、お茶を飲んでいる皆を見つつ、健太と直哉は愛ちゃんが空手を習うきっかけになった出来事を思い出していた……

それは、健太といじめっ子トリオが修好状態になった直後の頃だった。

愛ちゃんは何時も通り、学校の帰りに裏道を通り、近道をして家に向かっていた。

そこに、コートを着たオジさんが立っていた。

誰だろ、普段誰も通らないのに、と不思議な顔をしてそのオジさんと擦れ違おうとした時、

「ねえ、お嬢ちゃん」

そう呼び止められた。

振り向いた愛ちゃんの眼前には、全裸のオジさんの姿があった。

「き、きや……」

母子家庭の彼女が、初めて見た男性のそれである。

恐怖と驚きで、腰を抜かしていた。

「こ………来ないで……」

オジさんは興奮した様子で、ジリジリと近寄って来る。ぎゅつと目を閉じた時、後ろから声が聞こえた。

「オッサン！やめろ！」

それと同時に、何者かが体当たりした。

オジさんは後ろに踡踞けると、男の子が愛ちゃんの前に立ちはだかった。

「お、おい、愛。大丈夫かよ？」

一緒にいたお騒がせ三人組、元いじめっ子の圭一・寛太・慎が、愛ちゃんを囲んで気遣う。

「慎くん、お巡りさん呼んで来て！」

立ちはだかった男の子、健太は空手の構えをしながらそう言うと、寛太と慎が二人でお巡りさん呼びに、駐在所に走って行った。

リーダー格の圭一は、近くで愛ちゃんを守るように、健太の様子を見ている。

「邪魔するなあ!!」

襲い掛かってくるオジさんに殴られると、少し踡踞ける。

「健太！」くん！」

二人の悲鳴に似た声が重なると、健太はバツとそつちに手を出して、

「大丈夫」

そう言つて、前を向いた。

オジさんが殴って来るのを受けて、払って躲す。

蹴りを膝で受け止めて、勢いを殺しながら下がる。

全裸の変態オジさんと健太の攻防を、愛ちゃんはじっと見ていた。

その頃、変態じゃないおじさんこと直哉は、駐在所で駐在さんと将棋を指していた。

「はい、王手飛車取り」

パチンと駐在さんが指すと、

「あれ、おかしいなあ……」

悪手だったかなあ、と苦笑いをしている。

この駐在さん、公認のアマ五段の持ち主なのだ。

「お巡りさん!!」

そんな中、寛太と慎が飛び込んで来た。

「お巡りさん!変なオジさんがいて、健太と戦ってる!」

「何だって!?!」

「私も行こう」

二人は立ち上がって、寛太と慎の案内で現場まで向かった。

二人が現場に着いた頃には、息の上がつているオジさんと、少し息の荒い健太が睨み合っていた。

腰が抜けた愛ちゃんは、立てなくて側に圭一がいる。

「何やってるんだ!?!」

「くそっ!このガキ共!!」

破れかぶれで蹴りを入れようとした時、健太は股間目掛けてカウンターで回し蹴りを放った。

「もちろん、蹴りは受け止めている。」

「!!!」

「沈め!この変態が!」

その股間の激痛に立ち竦んでいると、直哉が飛び込んで肝臓撃ちをぶっ放す。

「ぐぶうー!」

そのまま崩れ落ちたオジさんは、駐在さんによって現行犯逮捕されたのだ。

「大丈夫だった?愛ちゃん」

「うん……ごめんね」

腰が抜けた愛ちゃんを、おんぶしてお家まで送る健太。

そんな健太くんに、愛ちゃんは一目惚れしてしまったのだ。

そして愛ちゃんも身を護る為に、何より健太君と一緒にいる為に、

空手を始めた。

今では、お騒がせトリオよりも段級が上になっている。

練習をサボりがちのトリオより、熱心に練習しているのだ。

「今日もアツアツなのです」

仲良く隣り合って座っている、健太君と愛ちゃんを誂う電。

そうすると、二人揃って顔が赤くなるのだ。

そんな様子を見ながら、より一層頑張って海の安全を守らなくて

は、と決意を新たにする直哉だった。

避難訓練

「避難訓練で艦娘の参加を、ですか？」

12月に入った昼下がり、小学校の先生がやって来た。

宮戸島小学校には、六年生に健太達が在籍している。

その縁で、直哉は月毎の防災訓練に、何度か顔を出しているのだ。

「はい。普段、海で戦っている艦娘さん達に触れ合える機会を、と思いまして……宮城地方協力本部の方にご相談したら、提督の判断に任せ、とのことでしたので」

神通が、二人にお茶を出して脇に控える。

神通の家出も、とうとう二桁に到達した。今度は、桐山二佐がAVを見ているところに遭遇して、大揉めしての家出である。

いつもながらの「実家に帰らせていただきます」との宣言の下に、宮戸島鎮守府にやって来るのだ。

繰り返し返すが、宮戸島は決して神通の実家ではない。

「そう言うことでしたら、協力は惜しみませんが……ただ参加させるのも面白くないですねえ？」

「そこで、地本の明石さんから一つ提案をいただきました……これが計画書と台本です」

「ふむふむ、これは使えそうだな……」

その計画を聞いて乗り気な神通を見ながら、悪い企みを考え付いた直哉だった。

訓練当日。

『深海棲艦襲来、深海棲艦襲来、児童の皆さんは校庭に避難してください』

ジリリリリリリリ

健太達の六年生の教室でも、ベルが鳴り響く。

「はい。皆、帽子被ってランドセルを背負って、廊下に整列!!」

学級委員の愛ちゃんが前に出て言うと、皆学帽を被りランドセルを

背負うと、そろそろと廊下に出て整列する。

この学校では生徒の自主性を尊重して、先生はある程度学級委員に任せているのである。

電以下四名（神通含む）は、避難場所に並んでいる。

警察の駐在さんや、本土の消防署からも見に来ている。

愛ちゃんと健太達は、自分の師匠たる直哉の姿が無いことに、疑問を覚えていた。

校舎から、六年生を先頭に児童達が順番に学帽を被ってランドセルを背負って、整然と避難をしている。

宮戸島では万一の為に、学校では月一回、地域では隔月で避難訓練を実施しているのだ。

もう何年もやっている月の恒例行事で、ちよつと緩んでいるところもある。

ガヤガヤと私語が聞こえて来るのを、児童指導の怖い先生が、

「静かに!!」

と怒鳴ると、私語がパタリと止んだ。

そして校長の評価と、消防署の方のお話、警察の駐在さんのお話があった後、艦娘達が自己紹介を行う。

その後、

「それでは、陸上自衛隊高菜二佐がもうすぐ来られるので…」

と言い終わる前に、ガサガサと、校庭の茂みの方から、深海棲艦がのっしのっしと歩いて来る。

だが、その深海棲艦は恐竜か怪獣の類にしか見えない。過日の全島避難時に、明石の製作したダミー深海棲艦を改造した物体なのだ。

「キヤーー!!」

女の子達が悲鳴を上げるのを、電がマイクを持って、

「今から私達で倒すので、落ち着くのです!」

と、座らせる。

《いつも海を守ってくれる艦娘の言うこと》だからと、皆腰を下ろす。

神通が艤装を展開すると、のっしのっし歩いてくる深海棲艦に正対する。

「ガオー！」

棒読みなボイスチェンジャーのような歪んだ声で、両手を広げて襲い掛かる深海棲艦。

「行きますー！」

神通が上段受け身を取りながら、回し蹴りを叩き込もうとした……が、

深海棲艦は華麗にバック転をして躲した。

「な!? 台本と違……!?」

そのまま深海棲艦が、尻尾を使って神通を足払いする。

「っ……い！」

足を掬われた神通も、バック転して構え直す。

深海棲艦は、そのまま踏み込んでバックブローを放つ。

神通は、それをガシツと受け止める。

ポカーンとなっている児童達……愛と健太とお騒がせトリオを除いて。

『あー……先生エ……』

自分の師匠の、動きの癖くらい解る。

健太君や愛ちゃん、お騒がせトリオは、生暖かい目でその激闘を見守るのだった。

神通はバックブローを受けると、回し蹴りを放つ。

深海棲艦は、その短い足で軸足を払うと、転倒した神通の顔面を踏み付けようとする。

「シネエーイー！」

「っ!!」

それを転がって躲すと、すぐに起き上がる。

「今助けるのですー！」

電が駆け込むと、一気に距離を詰める。

バシツ、バシツとガチの殴り合いが始まる。

電が、手数を使って殴って来るのを、深海棲艦が両手で受け止める形である。

「コノチビメ、シツポフクラエー！」

そして電に、尻尾が容赦なく襲い掛かる。

「うぐっ……………」

尻尾の強打を受けて吹っ飛び、派手に児童達の前に転がって、ぐはつと血糊を吐いて、動かなくなる電。

「いなづまさーん!!!」

児童達の、悲鳴に似た声が響き渡る。

「傷は深い、しっかりして」

薄雲が抑揚のない声で抱き起こして、ガクガクと過剰に電を揺する。何故か無線式ヘッドセットを着用している為、声はスピーカーから校庭に響き渡っている。

「大丈夫じゃないのです!!頭が揺れるー!やめて!!台本と違うー!きぼぢわるっ」

こちらの声は聞こえていない。その揺すりで本当に脳震盪を起こして、ぐったりとなった電。

「残念ながら……………電さんは、やられてしまいました」

「う……………薄雲に……………がくっ」

卯月は、児童達を守るように両手を広げている。

「子ども達はやらせないぴょんー!」

児童達の悲鳴が聞こえる。

神通はそれを見ながら、もう訳が判らなくなっている。中に入っている筈の直哉と周囲の艦娘達は、台本にないことばかりやり始める。

深海棲艦は火を噴いて子ども達を威嚇したり、無駄に光る眼で目がぎよろぎよろ見回したり……………何故か、火災訓練でもないのに用意してある消火器をぶっ放したり、やりたい放題である。

児童達は恐怖で泣き出す子達もいる中、健太君と愛ちゃんとお騒がせトリオは、師匠の暴走を生暖かい目で見守っている。

『高菜先生エ……………』

「グハハ、ヨワヨワシイカムスメ、オレサマノテキデハナイワ」

「この深海棲艦め!!」

取り敢えず怒りの形相になり、再び深海棲艦に立ち向かう神通。

「神通おねーちゃん!!負けないでー!!」

児童達の、悲鳴に近い黄色い声援を背に受けて、強烈な回し蹴りを放つ。

深海棲艦はそれを受け止めると、強烈な尻尾を放つ。

神通は、その尻尾をすばやく脚を戻し受け止めると、そのまま蹴り込みに移行する。

背後から、ガツンと蹴り込まれた深海棲艦は、少し蹠踉ける。

そして振り向くと、口を開いて炎を吐く。

「ガオーー」

その炎をしゃがんで躲す。普通のガスバーナーの為、チリチリっと髪が焦げる。

神通はそのまま懐に潜り込むと、強烈なアツパーを叩き込む。

更にリバーブロー、正中線乱打でボコボコにして行く。

「熱いですってば!!この怪獣め!!」

そのまま神通は、∞の字を描きながら、アツパーやフックを叩き込んで行くと、深海棲艦は何とか受け止めているが、次第に受け止め切れなくなり、神通のデンプシーロールでボッコボッコにされ始める。

深海棲艦は、よろよろと後退りながら、

「オボエテロー!シロパンツ!」

そう捨てゼリフを吐き捨て、逃げて行った。

さつきから蹴りを多用して、パンツ丸見えだったことを思い出すと、ぱつとスカートを抑え、顔を真っ赤にする神通だった。

「わー!凄いい!!神通さん!!」

パチパチと拍手が沸き起こる中、漸く台本の笑顔で、児童達にVサインを決めるのだった。

数分後、深海棲艦の首を持って、汗びっしよりの直哉が戻って来る。

「いやあ、やられかけの深海棲艦を退治して来たよ」

そんなことを言いながらやって来る。

「わー、すごい!高菜提督!」

何も知らない児童達は、お目々キラキラになっている。

美味しいところを、総取りである。

「自作自演とは……」

「このことだよね……」

「だな」

「酷いね」

「だね」

「高菜提督、貴方って人は……全部美味しいとこを持って行って……」
健太と愛ちゃんとお騒がせトリオと神通は、ジト目で直哉を見ているが……

そんな中、直哉は朝礼台に立ち、マイクを片手に敬礼する。

「はい、陸上自衛隊の高菜二佐です。皆さん、訓練お疲れ様でした。皆さんの熱い応援のおかげで、深海棲艦を退治することができました。皆さんの避難もバツチリですが、ちよつと私語が多かったり緊張感が欠けているかな？と思いました。次回からは、毎回本番のつもりで避難訓練を行ってください。以上」

そう講評を終えると、電もよろよろと起き上がって整列する。

「酷い目に遭ったのです……」

「それでは皆さん、残りの時間は教室に戻って、授業を受けてください」
「いい」

『はい！』

教室に戻って行く児童達を見送りながら、ウンウンと満足そうに頷きつつ眺めてから、朝礼台を降りる直哉に、

「台本と話が違うじゃないですか！」

と、食って掛かる神通。

「いやあ。これは、うちの嫁達提案のサプライズでねえ、学校の先生も承知済みでね。鬱憤は晴れたかい？」

「あ……」

そうなのである。台本と違う行動で、神通も全力で体を動かしたところ、最早夫婦喧嘩のこと等、吹き飛んでしまったのである。

「あの、私、女川に帰りますね？」

「それがいいのです」

「早く帰ってあげるぴよん」

「桐山提督が心配してます」

神通の言葉に、笑顔を向ける艦娘達。

「まあ、夫婦喧嘩もあってもいいけど、程々にね？」

「そう言う高菜提督は、夫婦喧嘩するんですか？」

「するのですよ。仕事はスキを見つけてはサボるし、昼寝はする。

いっつも電達が注意してるのです」

「いやあ、喧嘩と言うより、一方的に叱られて終わるだけだけどね？」

そのやり取りに、肩を竦める直哉だった。

こうして神通は、十数回の家出で初めて、お迎えの前に、自分の意志で帰宅を果たした。

思い出の着任日

「起きるのですー！」

微睡んでいた直哉に向かって高角砲を向けると、直哉は目を覚ます。

その声の主を探ろうと辺りを見回すと、電が立っていた。

「もう、書類は終わったのですか？」

大きな溜め息と共に、扉を閉めて執務机に近づく電。

外は雪が降っており、愛ちゃんや健太君、お騒がせトリオそして卯月達が、雪掻きついでに工廠妖精さん達と一緒に、キャイキャイと雪だるまを制作している。

「てーとくのしよるいはおわってますー！」

事務員妖精さんがビシツと敬礼すると、電は決裁箱にある書類に目を通す。

きちんと、サインをすべきところはサインがされ、終わっている。

「よろしいのです」

「ん。電は、皆と雪遊びしなくていいのかい？」

軽く背伸びをすると、外の様子を一瞥してから、問い掛ける。

「直哉は、どうせ寒いのが嫌いだから、つて温かいこのお部屋に籠つてるに決まってるのです。電も温まりに来たのです」

部屋にはだるまストーブが置いてあり、煙突が天井に伸びている。

ストーブの上にはやかんが載っていて、注ぎ口からは湯気が揺らめいている。

「そう言えば、二人で着任したのも、こんな雪の日だったかな？」

「最初にやったのは、周りの雪掻きと、ストーブ設置だったのです……」

高菜三佐と電が、教えられた道どおりに、東京から業務車三号でやって来た、雪の宮戸島の鎮守府。

建築されたばかりの建物が二つ、雪に埋もれていた。

庁舎も官舎も、それぞれ所謂オーダーメイドのコンテナハウスと言

うものである。

庁舎は、執務室と応接室が用意されており、執務机や司令官パソコン等の最低限の備品が設置されていて、

いつのものだか判らないだるまストーブが、部屋の隅に置いてあった。

官舎もコンテナハウスで、無駄に広いコンテナハウスと、広めのコンテナハウスを連結させて、1LDKと言う体裁を整えた建物である。

いかにも急ごしらえで作りました、そんな代物である。

駐車場には、オリーブドラヴ色をした軽トラックが停めてあり、雪に埋もれている。

「……取り敢えず。ホームセンターで、雪掻きと薪を買いに行こう」「了解なのです」

高菜三佐と電は、業務車でホームセンターへと向かった。

ホームセンターは、深海棲艦の侵攻の爪痕がまだまだ残っていて、建物も駐車場も荒れていた。

営業自体はしているものの、店員の数も少なく、復興が始まったばかり、と言った様相を呈していた。

「高菜二尉じゃないかね!？」

声を掛けられると、その方を向く。

年老いた婦人が、ブーツと杖の姿で歩いて来ていた。

「やあ、先日はありがとうございます。昇進して三佐になりました」

そう。全島脱出の際、村の古株として纏め上げてくれたおばあちゃんである。

「それはおめでたい事で。そちらのお嬢さんが、艦娘とか言う人？」

「電なのです。階級は三曹なのです」

電は、ここ宮戸島に赴任する直前、三曹試験と呼ばれる艦娘の技術試験を通過している。さすがはチート艦である。

本来、士長が実力を十分に蓄えて受ける試験なのだが、電は^{二等海士}二士でその試験を受けた為、特例措置として、

試験合格後に一等海士、そしてその四時間後に海士長、更にその四

時間後に三等海曹への昇進、と言う扱いとなった。

「私はね、真っ先に宮戸島に戻りましたよ。息子夫婦から、リフォームのプレゼントを受けてね。前より住みやすくなったよ。残念だけど、中学の子供がいるから宮戸には行けない、と言われてしまったけどねえ」

そう。人口は、全島避難前の半分くらいになってしまったのだ。

小学校は何とか残ったものの、中学校は本州の方に統合され、未来中学校に行かなくてはならない。

片道七キロもある、遠い道のりである。

「おばあさん、何か手伝うことはありませんか？」

「そうね。お買い物に、付き合ってもらえないかしら？」

「了解しました。電、おばあさんのお荷物を持ってあげなさい」

「そうそう、私は加納美代。改めてよろしく頼むわね」

「了解なのです！」

ホームセンターで、美代おばあさんは調理器具などを新調して、高菜三佐が車に載せる。

薪と着火剤とマッチと軍手、やかんと雪かきを二つ購入してそれも車に載せて、美代おばあちゃんの家まで車を走らせる。

車内では、美代おばあちゃんと電が楽しそうに会話をしており、孫と会話をしているような感覚を感じながら、高菜三佐はハンドルを握る。

美代おばあちゃんの家で別れると、鎮守府に戻って来る。

早速、周辺の雪掻きを始める。コンクリートが打たれた埠頭には、やはりコンテナガレージで作られた工廠が設置されている。

工廠の周辺は、早速工廠妖精さんが着任して、雪掻きを始めている……と言うより、雪だるまを作っている。

雪掻きだけで数時間掛かってしまった。身体はガタガタで、寒くて仕方がない。

二人は、再び降り出した雪を見上げながら、大きな溜め息を吐いた。執務室に戻ると、だるまストーブの設置を始める。

天井の煙突口はすでに設置されており、そこにパイプを差し込んで

完成である。

だるまストーブの口から、薪を鉋で割りながら放り込んで着火剤を投入し、マッチをシュツと擦って放り投げる。

着火剤に火が着くと、薪に火が着いて、部屋がだんだん暖かくなつて来る。

「さむいぞー」

外にいた工廠妖精さんが、中に飛び込んで来る。妖精さんなだけあつて、テレポートして部屋に入つて来る。

暖かくなつた部屋の火の番を妖精さんに任せると、二人は次に官舎に向かった。

「ここで、共同生活する訳だけど、年頃の娘とおじさんが一緒に暮らすのも問題があると思うから、コンテナハウスを追加申請をするまでは、私がLDKに暮らそう。ふかふかのベッドがあるからねえ、それで寝るといいよ」

「そうなのですか？」

何気なく聞き返したが、そこで、電は気づくべきだった。その結果、高菜三佐が金持ちのボンボンだと言うことを、数年間も気づけなかったのであった。

「官舎からの荷物は、引越し業者が入れたみたいだね？」

ダイニングテーブルにソファ、キッチンがガスが引いてない為、電磁調理コンロが置いてある。

お湯も電気温水器である。

そして、連結したコンテナの先の部屋に入った。

ものすごく大きなベッドと、書斎机、その上にダンボールが置いてあり、あまり荷物は多くない印象だった。

「高菜三佐、変なことしなければ一緒に寝るのです」

「えっ?」

「電にはベッドが広すぎるのです」

「電がそう言うなら……」

そんな会話をしながら、そこから連結されているユニットバスを開ける。

LDKではなく、居室にトイレと風呂が連結されているのを除けば、二人で暮らすには十分な広さである。

最初のうちは、それぞれが遠慮をしながら生活をしていた。

それから年数を重ねるに連れ、だんだん夫婦化して行くのだが、この時の二人はそんな事は知る由もない。

「いやあ、あの時どうして、一緒に寝るなんて言い出したんだ？」

「そうですね……直哉は悪い人じゃない、って直感で思ったのです。

電は、直感が悪くない自信があるのですよ」

直哉の問い掛けに、悪戯っぽくぺろつと舌を出して答える電。

『さむーい!!』

雪だるまが完成した一同が、執務室に入ってきて来る。

「あれあれ、風の子達もギブアップかな？」

そう言いながら椅子から立ち上がり、壁際にある薪を手にとって、いつものように鉈で薪を割って投入口に放り込む。

電が、ストーブの上にあるやかんを踏み台を使って取ると、皆の分のお茶を淹れ始める。

「皆、お菓子を持って来ましたよ」

美代おばあさんが扉を開けて、何時ものりんごパイを持って来ると、皆大喜びである。

会議用テーブルを組み立てるとそこに乗せて、美代おばあちゃんも交えてのおやつ会である。

美代おばあちゃんには執務机を譲り、他の皆は立ってりんごパイを頬張る。

お騒がせトリオは美味しそうに食べて、健太君と愛ちゃんは仲睦まじそうに食べている。

そんな二人を卯月と薄雲が眺めて、御代おばあちゃんはそんな皆を楽しそうに見守っている。

そんな姿を眺めながら、電と直哉は寄り添って笑みを浮かべているのだった。

その名も連装砲ちゃん

雪の降っている12月下旬。

明石がやって来た。唐突に。

「こんにちはー!」

「こんにちはなのです。直哉は今、お昼寝中なのですよ」

秘書艦の電は、だるまストーブに薪を焚べながら声を掛ける。

直哉はエグゼクティブチェアに座ったまま、気持ち良さそうに眠っている。

窓の外、つまり埠頭では、健太と愛ちゃんとお騒がせトリオが、卯月と薄雲と楽しく雪合戦をしている。

子ども達は冬休みに突入して、空手の練習と宿題を、鎮守府でやるのが日課になっている。

電が屋内にいる理由、簡単である。直哉と同じく、寒いのが苦手なのである。

「ところで、どうしたのですか?」

「いや、新兵器を開発したんですけど、試射する場所がなくて」

宮城地方協力本部は仙台合同庁舎にあって、街のど真ん中である。

いつも、仙台駐屯地に勝手に作った工廠と、宮城地本を行き来する毎日である。

こう見えても、工廠部の責任者なだけあって階級は三佐であり、『偉い』のである。

「はあ。それでうちを選んだと。それで何を作ったのですか?」

「連装砲ちゃんですよ」

連装砲ちゃんとは、島風が連れている自律砲台のことである。

「あら、可愛いものを作ったのです。それで、今どこにいるのです?」

「今、トラックに積んでるので、ちよつと待ってくださいね」

「トラツ……ク?」

ストーブの火の番を事務員妖精さんに任せると、手袋とコートとマフラーと耳あてを付けて外に出る。

因みにスカートだが、タイツを履いており怒涛の210デニール

と、防寒装備は万全である。

無骨なブーツも忘れてなく、万事ザ・防寒である。

そして、1トントラックに鎮座まします連装砲ちゃんを見ると、動きが固まった。

全長は2〜3mくらいはあり、全幅も1mくらいある巨大な『連装砲ちゃん』なのだ。

浮袋の下には、足の代わりにキヤタピラが付いている。

何というか、ガン〇ンクである。

「水陸両用で、海にも連れて行けますよ」

「お……おうなのです」

トラックに付いている、パワーゲートに連装砲ちゃんを乗せるとリフトで地面に降ろし、連装砲ちゃんがキュラキュラキュラとキヤタピラを動かして、電の前にやって来る。

「キュ」

片手を上げて、可愛い鳴き声で挨拶する連装砲ちゃんに、電も、「あ、どうもなのです」

と頭を下げ、見上げる。

でかい。

圧倒的にでかい。

「ところで、明石さん。この連装砲ちゃんは、何て言う名前なのですか？」

「51cm連装砲ちゃんですよ」

ひゅるるるる

真冬の吹雪が吹き渡った。

口径にして、島風の連装砲ちゃんの四倍超である。

キュラキュラキュラと、51cm連装砲ちゃんは、埠頭へと向かって行くので、

二人も、その後に従って埠頭へと向かった。

埠頭では雪合戦も飽きたのか、雪だるまを作って遊んでいる。

因みに、愛ちゃんはスキーウェアで、ニット帽を被っており、健太君も、お揃いのニット帽を被っている。

お騒がせトリオは省略で、卯月と薄雲は制服のスカートに生足——
所謂タイツなし、である。こんな寒いのに頑張っている。

電曰く「若い子はいいいのです」と言っているが、自分も見た目はちっ
ちやい娘である。

「わー、なにになに!?!」

「おつきいー!可愛い!」

健太君と愛ちゃんが、真っ先に51cm連装砲ちゃんへ駆け寄るが、
『かわいい……う?』びよん?」

お騒がせトリオと薄雲と卯月は、その可愛い発言に首を傾げる。

「何か、新兵器らしいのです。いっちょぶっ放してみます」

「キューー」

51cm連装砲ちゃんが可愛く鳴くと、がっしょん、がっしょんと、内
部で装填が始まる。

そして海と平行に身体を向けると、首だけ海の方向に向け、腕が伸
びてがしつと接地する。

クレーン車のサイドアームと、同じ原理である。

「準備OKです、いつでも発射命令をしてください。あ、連装砲ちゃん
の後ろには行かないでね?」

明石が耳栓を付けると、子ども達と艦娘達は、耳を抑える。

「愛ちゃん、銀河英〇伝説のやつ、やってみようよ?」

「うん。ちよつと待ってね……」

愛ちゃんは腰に手を当てて、びしつと海を指をさす。

健太君は、愛ちゃんの耳を抑えてあげている。

そして、大きな声で発射号令を下した。

「ファイエル!」

ズツガアアアアアアアン!!

ズツガアアアアアアアン!!

ドサドサツ!!!

鎮守府周辺の、建物の屋根の上に積っていた雪は、全て落ちた。

更に連装砲ちゃんの後方にあつた、庁舎と艦娘寮のガラスは、背部
から出た反動軽減用のバックブラストの衝撃で、全て割れた。

そして直哉は、熱を帯びた爆風が庁舎に飛び込み、吹き飛ばされた。「な、何だ!?! ってアチいっ!!」

執務室も応接室も、メチャクチャである。

キヤタピラを発射方向と平行にして、サイドアームまで降ろして、反動軽減装置まで付いているのに、

51cm連装砲ちゃんは、反動で5mはズザザザつと下がっている。

「み、耳がキーンとなった!」

耳を抑えていない健太君は、悶絶している。

「だ、大丈夫!?!」

「う、うん……ちよつと、頭ガンガンするけど……」

涙目の愛ちやんに、苦笑いの健太君。

「何かあったのか!?!何だ、コレはあ!?!」

「あ、あはは……」

慌ててやって来る直哉に、全員が苦笑いだった。

二時間後……

「どういうことか、説明してもらおうか?」

ガラス屋さんが窓を交換している中、正座している明石は、エグゼクティブチェアに腰掛けた直哉から尋問を受けている。

因みに、いろいろ吹き飛んだ部屋は、皆と妖精さん達の頑張りで、何とか元通りに戻っている。だるまストーブがしっかり固定されていた為、火事にならなかつたのが不幸中の幸いである。

因みに51cm連装砲ちゃんは、海沿いの建物から落下した雪を除雪する為、ブルドーザーモードで融雪剤を撒きながら除雪作業をしている。

鎮守府庁舎内の片付けを終えた、子ども達と薄雲と卯月も、各地に散らばって雪掻きのお手伝いである。

艦娘寮の片付けは、明日以降の予定である。

幸い、人的被害はなかったものの、雪を舐めてはいけない。

「何か、ここだけじゃなくて、他のところでもガラス修理の依頼があつ

「たんだよね?」

ガラス屋さんがそう言うと、直哉は苦笑いで、

「ああ。修理代、全部こっちに回してください」

そう言うと、再び明石に向き直る。

「今回の51cm連装砲ちゃん試射で受けた損害は、君に弁償してもら
うからね?」

「ええっ!? そんなあ」

「なら、足立一佐に報告するか?」

「それは、もつとご勘弁ください!!」

土下座の勢いで懇願する明石に、二人で大きな溜め息を吐いた。

「判ったのです。直哉が立て替えるので、分割で払うのです。あと、宮
戸島鎮守府宛に顛末書を差し入れるのです」

「わ、分かりました……」

そんな中、ザザツと艦娘無線が入った。

『こちら、女川艦隊神通。ル級フラッグシップに追い回されていたの
ですが、謎の砲弾の直撃を受けて、ル級が木っ端微塵になりました。
どうぞ?』

『こちら、女川本部。何を訳の判らないことを言っている? どうぞ?』
『だから、今言ったことが全てです! だから言ったじゃないですか!?

無理な進軍命令ばっかりするから!!』

『ええい! 私のせいだと言うのか!』

『はい! 祟のせいです! いい加減にしないと家出しますよ!』

『何だ?! 神通、もう一度言ってみろ!』

夫婦で罵り合いが始まったので、堪らず無線機を取って、送信ボタ
ンを押す。

「えー、こちら宮戸島本部。女川本部、女川旗艦、夫婦喧嘩を無線でや
るな、どうぞ?」

その直後、数秒間沈黙して神通から、

『もつ、申し訳ありません。どうぞ?』

と、お詫びの通信が入った。

「女川旗艦、了解。先輩は何か言うことは? どうぞ?」

『す、すまん……どうぞ?』

「女川本部、了解。謎の砲弾は、こちらからの明石謹製の新兵器の試射と思われる。迷惑を掛けて申し訳ない。援護射撃になっていたように安堵している、どうぞ?」

『ル級が、肉塊と化して四方八方に吹き飛んでいきました、どうぞ?』
『……………』

神通の報告に、全員が沈黙した。

『と、とにかく、神通達が無事なら良かった』

そう桐山が言うのと、神通の、

『全然無事じゃありません……ル級と砲弾』の破片が直撃して、全員大破で返り血塗れです、どうぞ?』

その言葉に、全員が絶句した。

『えっ?』

『えっ?』

『……………』

視線が、明石に集中する。

「あー、これから明石を謝罪に向かわせます。どうぞ?」

『う、うむ。待っていると伝えてくれ、どうぞ?』

通信が終わると、業務用の電話が鳴り響く。足立一佐からである。

それをスピーカーホンにして、電話に出る。

「はいはいもしもし、こちら葬儀屋」

『高菜二佐!! たまたま、東北方面の通信をモニタリングしていたが、今のは何だ!?!』

初っ端から激おこである。艦娘本部では、各地方の通信を光回線で転送しており、モニタリングができるのだ。大抵は、無線の私語を戒めたり、不正の温床を確認する為のものである。

「いやあ、明石が51cm連装砲ちゃんを開発しまして。うちで、勝手に試射して行きました」

「直哉は、食後のお昼寝をしていたので」

「ちよ」

会話に加わる電に、直哉が慌てて声を掛けるが、電はしれっと続け

る。

「電が、代理で許可したのです。そしたら、反動で鎮守府庁舎のガラスは割れるわ、周辺のガラスにもヒビが入るわ、ついでに屋根から雪がザザザーツと落ちて、怪我人死人は出なかつたけど、今皆手分けして、『雪掻きなう』なのです」

『明石に、減給すると、伝えたまえ』

「ええっ!? そんなあ」

『そんなあ、ではない! 貴官は、佐官でありながら何をやっている? 大体、本部工廠を夕張一尉に丸投げして東北で何をやっている? 本当に薄雲のモニタリングだけか? 私の目の届かないところで、存分に趣味をやっているだけではないのか!?』

「そ、そんな事は決して」

『だいたい貴官は……』

足立一佐の説教は、二時間続いた。

真つ青で、小さくなつて正座のまま説教を聞いている明石を見ながら、電と直哉は肩を竦めるのであった。

明石が、51cm連装砲ちゃんをここ宮戸島に置き去りにして、女川に謝罪に向かったのと入れ替わりに、

子ども達と薄雲達が帰還して来た。

『さむーい!!』

愛ちゃんを先頭に、温まりに戻つて来た子ども達。

「報告・雪掻き部隊隊長笹野愛『名誉二等陸士』、以下六名、雪掻き任務完了しましたあ! びしっ」

愛ちゃんの元気のいい敬礼と共に、敬礼する子ども達と艦娘達。

宮城地本と相談して、艦娘達と子ども達の交流の為に、軍港内立ち入り許可証に地本の計らいで『名誉二士』と付けてくれたのだ。

愛ちゃんは特に喜んで、肌身離さず付けている為、あだ名が『愛ちゃん二士』になった。

宮本地本本部長から、名誉なら士長までだったら、好きに昇進させていいよ。とのお達しなので、そのうち一士をあげようか考えている。

それに、笑顔で答礼する電と直哉。

「ご苦労さま。それじゃ、今日はうちで夕食会にしようか？」

『わーい!!』

子ども達の喜ぶ声を横目に、子ども達の保護者に連絡を入れる直哉であつた。

その後、足立一佐から電話があつて、直哉もまた説教を食らつたのは言うまでもない。

尚、どきどきに紛れて51cm連装砲ちゃんは、未だに宮戸島にいる。

今は、工廠内で主人の帰りを待っている。

時折出勤しては、融雪剤を撒きながら雪掻きをしたりしている。

クリスマス・パーティー

連装砲事件の片付けも終わり、一息吐いたところで、司令官による通信会議が開かれた。

司令官コンピュータを使つてのテレビ電話で、全員の顔を見ながらの会議である。

さすがはブロードバンド時代の産物である。

『今年のクリスマスの警備計画についてだが……』

羽佐間一佐が、何時になく真面目そうに切り出す。

『あ、今年は、娘がイヴに女の子の友達とクリスマスパーティーするから、当日希望でー』

真つ先に、奈々海が当日を希望する。因みに、未だちんまいロリっ子のままである。

『ふむ、大村提督のところは夫子持ちだからな。旦那は帰つて来るのか?と言うか、その姿のままなのか?』

羽佐間一佐が、苦笑いをしながら奈々海に問うと、

『もちろん!旦那も帰つて来るから、この姿で夫婦の営みをしてみたんですよ。何かおじさんとロリっつて、背徳感無いですか?』

その答えに、羽佐間一佐の副官である花梨がモニタから顔を覗かせて、

『大村提督は変態です』

と、ジト目で言う。

『まあ、大村家の性生活は置いておいてだな。気仙沼は、25日休み希望ということだな?そうになると、隣接の南三陸は24日になるがいか?』

予定表を書き込みながら羽佐間一佐が問うと、武藤提督は頷いた。

『そうになると、宮戸島も自然と24日になるが、高菜提督も構わないか?』

「了解です」

『それでは、岩沼と女川、気仙沼は25日、宮戸島と南三陸が24日を全休としよう。各自、クリスマス期間中は無理な突出を避け、近海防

衛に専念してくれたまえ』

『了解です』

『それでは、今年のクリスマススシフト会議を終了する』

テレビ会議が終わると、武藤提督から電話が掛かって来る。

胸ポケットからスマートフォンを取り出すと、スピーカーモードで電話に出る。

「はいはい、どうしました？」

『丁度同じ日にクリスマスス休暇じゃろ？』

「そうですねえ、うちは弟子達と艦娘達でクリスマス会をやるう、と思っっていましたね？」

『そのクリスマス会、私達も参加させてくれんかね？』

「と言うことだけど、どうする？」

秘書艦執務机で、書類を整理していた電に声を掛けると、

「美味しい料理がいっぱい食べられるから、大歓迎なのです！」

「うんっ！大賛成！」

「同じく！」

執務室の会議机で、冬休みの宿題をこなしている愛ちゃんと健太君も、両手を上げて賛成する。

お騒がせトリオは今、外で艦娘達と埠頭の雪掻きを仲良くやっている。宿題は、後で愛ちゃんのを写すと言っている。

因みに、今日の格好はお揃いのオリーブドラヴ色の作業服である。

もちろん、子供サイズの自衛隊レプリカ品を、直哉が買ったのプレゼントである。

この間の雪掻きの功績で、愛ちゃんには陸士長、健太君とお騒がせトリオには一等陸士の名誉隊員階級を任命した。

愛ちゃんは、生きてるのに『二階級特進』である。

愛称は、『愛ちゃん隊長』に変わった。

「……と言う訳なので、大歓迎です」

『それは良かった。それじゃあ、当日お邪魔させてもらおうよ』

「了解です」

『それじゃ、また当日に』

「はっ」

電話が切れると、直哉は子供達が今日の宿題分を終えたところで、空手の練習に入る。

クリスマスイブ当日、雪がちらついてホワイトクリスマスの様相を呈している。

51cm連装砲ちゃんは、たった数日で宮戸島のモニユメントとなっている。

今日も、主要街道の雪を融雪剤を撒きつつ、可愛い声を出しながら強力な履帯とブルドーザーパーツで雪を押ししている。

バックブラスト排出口からは、工廠妖精さんの改造した温風ヒーターの熱風が、残った雪を融かしながら進んでいる。

51cm砲塔からは、融雪剤をポンツポンツと発射している。

宮戸島の工廠妖精さんも、技術力は大概である。因みに海上での試射は、海底にアームを伸ばして固定しないと狙いが付けられない、と言う致命的な欠陥が発覚して、兵器としては落第となったのだ。

その為51cm連装砲ちゃんは、明石の私物から正式に宮戸島に移籍となり、雪掻きマシーンとして活躍することになった。

有事の際は、半固定式砲台として散弾砲を搭載し、役に立てる予定ではあるが……

今日は宮戸島鎮守府はお休みで、

仲良し五人組の子ども達と艦娘達が、高菜邸で飾り付けを行っている。

「フンフンフーン、フンフンフーン」

電はご機嫌で、鼻歌でクリスマスの歌を歌いながら、楽楽市場で購入した大きなクリスマスツリーに飾り付けを行う。

そんな様子を、ソファアで眺めている直哉。

キッチンでは、武藤提督と夕立と木曾がクリスマスパーティーの準備をしている。

長門は、そんな様子をデレデレしながら見守っている。

子ども達が、サンタさんの格好でワイキヤイしながら、飾り付けを準備しているのも見ているのだ。

「長門も直哉も手伝うのです！」

電の雷カミナリが落ちると、二人共飾り付けや外の物置にある予備の椅子を持ちに向かう事になった。

「健太君、それ取って」

「うん！」

相変わらず、健太君と愛ちゃんは仲良く二人でイチヤイチャしながら、飾り付けをしている。

そんな二人に、キッチンから夕立が、

「ねー、二人はもうヤツたの？」

等と、子供の教育上良くないことをのたま宣う。

二人は学校で性教育を受けているし、愛ちゃんは生理も来ている。

二人で真っ赤になる。

「し、してないよっ!!」

「ここら、純真な少年少女を誂うんじゃあない」

「はーい」

そんな夕立を、武藤提督が窘める。

「しかし、昨今の少年少女は早い、って聞いてるぜ。都会の方じゃ特にな」

木曾は、姉妹艦の多摩がお台場鎮守府に所属しているので、常々都会の子供の早熟さを聞いている。

「全く嘆かわしい限りじゃ。二人共、もっと大人になってからにするんだよ」

武藤提督が二人に諭すように言うと、二人は顔を見合わせてから赤い顔のまま、

「はーい！」

と答える。

武藤提督も直哉も、ハーレム形成なんぞをしているが、そういうところに関しては、常識人である。

だからこそ保護者からの信頼も厚く、今回は子供達のお泊り許可も出ているのだ。

子供達にはクイーンベッドを譲って、自分達はまた、リビングで雑

魚寝のつもりのようなだ。

「トリオは、そういう子いるぴよん？」

「……………」

圭一・寛太・慎のお騒がせトリオは、卯月から目を逸らした。

「えつとねえ、三人共クラスの優花ちゃんのが大好きなんだよ！」
代わりにそう答えたのは、愛ちゃんである。

「「何で言うんだよ!?!」」

トリオが揃って、抗議の言葉を上げると愛ちゃんは、「巻き添えー♪」と、イタズラっぽく笑う。

「おつとお。これは取り合いだぴよん、不味いことを聞いちゃったぴよん」

「そして海岸で殴り合って、一番強い奴と結ばれる、という訳ですネ?」

薄雲も、子供達を誂うのに参戦し始める。

「何でそうなるんだよ!?!」

圭一が、薄雲に裏手でツツコミを入れる。

「少年漫画に描いてありました」

「いや、いつの時代の漫画!?!それ」

今度は、寛太が堪らず突っ込む。

そんな様子を、長門はデレデレして見ている。

「長門、動きが止まっているのですー!」

電に再び叱られる長門だった。

夕方になるとキッチン組の料理も完成し、ダイニングテーブルに料理がたくさん並んだ。

「それじゃあ、乾杯の音頭を愛ちゃん隊長にお願いしようかな?」

「それじゃあ、メリークリスマス!」

直哉の指名で、元気よくグラスを上げると、全員も、

『メリークリスマス!』

と唱和して、パーティが始まる。

長門サンタが、クリスマスプレゼントを各自に渡し始める。

予め、直哉を通じて欲しいものをリサーチしてもらっていたのだ。

「ほーらプレゼントだぞう」

そう言いながら、皆にプレゼントを手渡す。

自衛隊大好きな愛ちゃんには、作業着レプリカに縫い付けられる、ネーム刺繍と陸士長階級章レプリカワッペン。

健太君には、オープンフィンガーグローブ。最近グランプ^組プリング^技にも興味を持ち出して、直哉から自衛隊格闘術を学び始めている。

どこまでも、愛ちゃんを守るナイト^騎士^士である。

それぞれ欲しいものが行き渡ると、愛ちゃん達から大人にプレゼントが渡される。

それぞれ工夫を凝らしたもので、圭一の『肩たたき券』から、愛ちゃん健太君合作の手作りペン立て等が、直哉と武藤提督に贈られる。

プレゼント交換が終わると、いよいよ食事会が始まる。

皆、ワイワイ賑やかに食べている。

「愛ちゃん、健太君にチュくするっぽい！」

シャンパンを一本空けて酔っ払っている夕立が詠うと、真っ赤になつた愛ちゃんが隣の健太君を抱き寄せ、濃厚なキスをする。

「んっ……」

『おー！』

「大胆なのです」

フリーズしている健太君に、更に真っ赤になる愛ちゃん。

そして、

「オレ達もチュくする？」

と言う、ど天然発言をかます慎。

食事が終わったらケーキを食べながら、夜更かししてのゲームである。

最新のゲームを、子供達と艦娘達で賑やかにやっているのを見ながら、

長門と武藤提督と直哉は、酒を飲みながら将棋を始める。

将棋のできない長門は、酒を飲みながら見ているだけであるが。

日付が変わった頃、お騒がせトリオはクイーンサイズベッド、

そして積極的な愛ちゃんは健太君を強引に引っ張って、今は使用さ

れていない卯月の部屋のベッドを使用して、一緒に眠る。

そして、艦娘と大人達はリビングのソファや床で、布団を敷いて雑魚寝である。

床暖房の効いているリビングは、床に寝ても温かいのだ。

それぞれの提督に、愛する艦娘達が寄り添って眠っている。

明日は皆、お仕事なのだ。

大晦日

クリスマスを終えて、年末の宮戸島鎮守府。

公務員とはいえ、前線の鎮守府の仕事納めは大晦日である。

今日ばかりは、直哉も怠惰の衣を脱ぎ捨てて、掃除用具片手に鎮守府の大掃除をやっている。

これは宮戸島鎮守府に限らず、鎮守府の仕来りのようなもので、

全国どこの司令官もやっている。

そして艦娘は、エリア内の艦娘達が合流して、仕事納め出撃をするのだ。

今回の指揮官は、階級が一番上の電が務める。

海域の深海棲艦を、気仙沼エリアから南下して連合艦隊で掃除して行くのだ。

これも、一つの大掃除である。こちらは羽佐間一佐発案の、宮城管区の仕来りである。

提督達は、そんな艦娘達の帰る場所をキレイに維持しよう、と大掃除をしている。

もちろん、妖精さん達も工廠や執務室のお掃除を手伝っている。

小さい妖精さん達が、小さいモップを片手に至るところでお掃除している。

51cm連装砲ちゃん改二も、工廠妖精さんの改造を受け、今日は工廠のお掃除を手伝っている。

だが、工廠妖精さんは艦娘達が帰って来てからが本番なのだ。

皆の艤装をピッカピッカにメンテナンスするのも、大掃除に含まれている。

副官の配属されている鎮守府は、二人で掃除できているが、一人鎮守府は司令官の頑張りどころなのだ。

「こんにちはー!!うちの大掃除終わったから、お手伝いに来ました!」
元気良く、名誉副官こと愛ちゃん名誉士長がやって来た。

今日も、プレゼントで貰ったネームと階級章を付けての出勤である。

「おお、有り難い。窓拭きお願いできるかな？」

「了解！」

きちんと足を揃えて敬礼すると、直哉も笑って答礼する。

「あれから、健太君と仲はどうなんだい？」

クリスマス後のキス事件の後、健太君には照れ臭さが残っているように感じたので、誂い半分で訊いてみると、愛ちゃんは照れながら答える。

「提督、お人が悪いですよ。昨日、キスしてくれましたよ？」

「そうかそうか、結構結構。クリスマスの夜は眠れなかった、って健太君言ってたからね？」

「あれは、勢いというか……」

そう。買ったが良いが、使わなくなった卯月の部屋のベッドで、クリスマス之夜は二人一緒に眠ったのだ。

翌朝夕立が、

「昨夜はお楽しみでしたね？」

と誂うと、健太君は、

「何もしてないよっ！寧ろ眠れなかったよっ！」

と、顔を真っ赤にして反論していた。

愛ちゃんは、六年生にしてはちよつと発育が良い為、思春期前の男子には目の毒で、そんな子が目の前で無防備に眠っている姿にドキドキして、眠れなかったのだ。

「勢いは大事だけど、傷つくのは女の子だから。そのなんだ、しっかり考えて行動するんだよ？」

「了解です！」

既に愛ちゃんは、中学卒業後の進路を決めている。

両親や直哉はまだ早いだろう、と話半分で聞いているが、女子に門戸が開かれるなら陸上自衛隊 高等工科学学校への進学を志望している。

そしたら、卒業すれば三曹からのスタートである。

ただ、現在のところ受験資格は男子のみなので、第二志望は高校を出て、防衛大学校進学を考えている。

因みに愛ちちゃんは、妖精さんが見えるので、自衛隊に入隊すれば大本営への配属が約束された人材となるだろう。

残念ながら、健太君やお騒がせトリオには、妖精さんが見えない。妖精さんと、楽しそうに会話をしているのを見ると、健太君がヤキモチを焼くのでこうやって一人の時は、妖精さんと会話をしながら、お掃除をしている。

「たいちよー、たかいところおねがい」

妖精さんからも、隊長扱いされている愛ちちゃんは、「了解」と答える。と踏み台を持って来て、窓の高いところを洗剤を使つて綺麗に磨いている。

その間に、直哉は年末の書類をどんどん決裁している。

そして机の上には、紙袋が八つ置いてある。

そのうちの三つは、『賞与』と書かれている。

そう。振込至上主義の宮戸島鎮守府でも、年末賞与は別なのである。

それに加え、今年は名譽隊員となった愛ちちゃん達にも「お小遣い」の名目で、自分の賞与からお年玉扱いで渡すことにした。

頑張り度合いで中身も色を付けており、愛ちちゃんには特別に諭吉さんが入っている。

「執務室と応接室はだいたい良いかな？それじゃ、愛ちちゃん士長。妖精さんと一緒に、艦娘寮の掃除をお願いして良いかな？」

「艦娘寮って、あのままですよね？」

「うん。ガラスだけ直してもらったけど、明石のせいでメチャクチャになったままかな？」

その言葉に、愛ちちゃんは目を丸くする。

「うわあ、大変そうだなあ。皆来たら、手伝ってもらおうつと」

そんなことを言いながら、事務員妖精さん達を引き連れて艦娘寮に向かう。

よく見たら、愛ちちゃんの靴はミリタリーブーツになっている。これはきつと、親のクリスマスプレゼントかな？と思いつながら、

どんどんミリタリーマニア化して行く、未来の陸上自衛官愛ちちゃん

を眺めてから、

書類決裁の続きに取り掛かるのだった。

昼が終わった頃、やっと家の大掃除から解放された健太君とお騒がせトリオも合流して、

放ったらかしにしてあった、艦娘寮の掃除に取り掛かる。

彼等も、愛ちゃんに感化されて迷彩服を着用している。親にねだつたそうなの。

因みに直哉と愛ちゃんは、馴染みの食堂の出前を取って一緒に食べた。

書類整理を終えて、一旦ボーナス袋を鍵の掛かる引き出しにしまい、直哉も艦娘寮に足を運ぶと、完全に大破したものが外に出されていた。

中に入ると、散らばったガラスや壊れた家具の片付けが終わっており、

やっと大掃除に取り掛かっている。

直哉が現れると、愛ちゃんが作業を止めて、

「司令官殿に敬礼っ！」

と敬礼すると、健太くんとお騒がせトリオも、ピシッと敬礼する。

「大掃除ご苦労さま」

笑顔で答礼すると、直哉もポケットに入れていた軍手を付けて、大掃除のお手伝いに入る。

「しかし、テーブルも椅子も壊れちゃったかあ。初売りでホームセンターで揃えて、明石の借金に加算しておくかあ。しかし、テーブルどうすつかね？」

外に鎮座しているテーブルに、目を遣りながら考えると、

「薪にすれば良いんじゃないかね？」

と言う圭一のアイデアで、燃やしてはいけない部分だけゴミ袋に詰めて、直哉は電気ドライバインパクトと鉋で、搬出された壊れた家具類をどんどん薪にして行く。

途中から、慎も薪割りを手伝ってくれた。

夕暮れ時になって、六人の力で艦娘寮もピカピカになった。

次にやるのは、掃海作業を終えて帰って来る艦娘達のお出迎えである。

三人手を繋いで帰って来る艦娘達を、敬礼でお出迎えである。埠頭に上がって来ると、三人共直哉達に向かつて整列する。

「報告！電二尉以下三名、大晦日大掃除任務を終了して帰還しました、小破1、以上！」

電の報告に直哉は、

「了解。高菜直哉二佐以下六名大掃除部隊、破壊された艦娘寮修復作業も終えて、任務完了しました！」

「了解なのです！それでは、早速儀式なのです！」

電の言葉に首を傾げる、直哉以外のメンバー。

「まあ、従いてくれればわかるよ」

そう言つて、二人で執務室に向かうのに、残りのメンバーも従いて行く。

執務室に入ると、机から封筒を八つ取り出す。

皆は電の、「整列！」と言う号令で横一列に並ぶ。

「それでは、仕事納めの会を始めます。電二尉、年末賞与です。ご苦労様」

「ありがとうございます！」

電に賞与袋が手渡されると、電は初売りで何を買うか期待が膨らむ。

「次に、卯月三曹、年末賞与です。ご苦労様」

「ぴょん！」

初めてもらう賞与は分厚かった。目を白黒させて受け取る卯月。

「次に、薄雲三曹、年末賞与です。ご苦労様」

「有難うございます」

いつもの、抑揚のない声で受け取る。

「次に、笹野 愛名誉士長。ちよっと早いけどお年玉だよ、今年もいろいろありがとう。ご苦労様」

「はいっ！」

貰えることを期待していなかった愛ちゃんは、満面の笑顔である。

「次、大石健太名誉一士。愛ちゃんのことを守る、ナイトになるんだよ？」

「はい！」

同じく笑顔で受け取る。彼等以下四人は、同じ一葉さんが入っている。

「次、原 圭一名誉一士。あんまり大人を困らせないようにね」

「おうっ！」

嬉しそうに受け取る、お騒がせトリオのリーダー。

「次、富永寛太名誉一士。圭一くんの暴走を、きちんと止めてあげてね」

「はい！って、開けるの早いよー！」

同じく受け取って、早速開封しようとする圭一を止める。

「最後に齊藤 慎名誉一士。薪割りご苦労様、ありがとうね」

「有難うございますー！」

最後に慎も受け取る。

それから全員の前に戻ると、皆を見回して、

「本時刻を以て、2018年の全ての任務を完了したことを確認した。

ご苦労様」

「全員敬礼！」

ビシッと全員が敬礼をする。直哉も答礼する。

「直れ！」

「今年は、愛ちゃん達も来てくれて賑やかになって、良い一年を送れたと思います。来年は、愛ちゃん達も中学生になるし、より一層勉強や遊びに、艦娘達は一層の任務の達成に励むよう祈念して、一本締めを行います。お手を拝借、よおーっ！」

パン！

「お疲れ様でしたー！」

直哉の言葉に、

『お疲れ様でしたー！』

と、皆も挨拶する。

愛ちゃん達は、ちよつと早いお年玉を手に、それぞれの家に帰って

行く。

直哉達は、鎮守府を施錠してから家に帰るのだ。

家の冷蔵庫には、ネット注文したおせちやお寿司等が入っており、高菜ファミリー四人で、ゆっくりテレビを見ながら夕食が始まる。

「よし！アップーだ！いけー！」

「そこ！ぶつ潰すのです！相手のガードが下がってるのです！」

ダイニングテーブルに置いてある、持ち運び可能な小さいテレビで、年末特番の格闘技を直哉と電が見ている。

既に二人共、アルコールがたっぷり入ってる。

リビングの大きいテレビでは、下町という芸人コンビと仲間の芸人達の、年末恒例の笑ってはいけないシリーズを見ながら、

卯月と薄雲が大爆笑している。

デデーン

「あははははは!!!」

感情の薄い薄雲が大爆笑している、貴重なシーンである。

もちろん、こっちの二人もお酒を飲んでいる。

皆ご馳走を食べながら小休止したり、テレビの移動をしたりして、好き勝手に過ごしている。

ゴーン ゴーン

除夜の鐘が鳴り出すと直哉が、

「そろそろ行こうか？」

『はーいー！』

宮戸島にある五十鈴神社に、お参りに出掛ける。

「あー！司令官！」

その声の方向を向くと、愛ちゃんと健太君とその家族がいた。

「いつも、愛がお世話になってます」

愛ちゃんのお母さんが頭を下げると、

「いえいえ、こちらこそ色々助かってます」

直哉も頭を下げる。

「それじゃあ、お母さん、私健太くんと一緒に行くね！」

そう言うと、二人仲良く鳥居を潜って行く。

健太君と愛ちゃんがお付き合いを始めたので、笹野家と大石家も家族ぐるみでのお付き合いが始まっている。

二人の父親も幼馴染の知り合いで、多少酒が入ってるらしく楽しく話をしている。

「それじゃあ我々も」

そう言つて、四人で鳥居を潜る。

神社の本殿に向かい、四人並んでお賽銭を投げ込み、パンツパンツ

と手を合わせる。

((今年もいい年になりますように))

四人とも同じ願いを込めて……………

そして家に帰ると、スマホに大量のあけおめメールが入っている。防大の同期や、同級生達からのメールである。

「お、今年は村上兄妹からも来てるな。今は浜松で提督してるのか？情報保全隊からも人材引っ張ってきたのかあ？」

「誰なのですか？」

「ん？同期でね、いい男だよ。正義感がもの凄く強くて学年主席。妹は何というか、ブラコン？同じく主席の優等生兄妹。まあ、そのうち会えるだろう」

「そうなのだぴよん？」

「居場所が判れば、浜松旅行序でに顔を見に行つてもいいだろうしな？」

「そうですね」

それから、それぞれメールを返し終わると、四人で年越しそばを食べ、眠りに就く。

残念なことに、仕事始めは4日からだが、1日元日〜3日は各鎮守府には待機命令が発令されて、深海棲艦が発見され次第、出撃するのだ。直哉達は、どうせ愛ちゃん達がやって来るだろう、と思つて鎮守府を開けるのだ。

2018年が終わり、2019年がやって来た。

異譚『裏の警務隊』編
Capture(結成)

2018年大晦日から日付が変わった頃

浜松鎮守府ではとある兄妹が埠頭に腰掛けて海を眺めていた。

「兄様、高菜二佐にメール送りましたわ」

「そうか、ありがとう。……久しぶりに彼にも会ってみたいね」

「そうですね……」

この物語はそんな兄妹の物語……。

その兄妹が育って来た環境は最悪なものだった。

両親の仲は冷え切っていた。

そして、兄妹の2歳年下の妹の方は外人の愛人との間に生まれた子供だった。

右目が黒、左目が青い瞳を持って、栗色の毛の特殊な体質。

兄は両親に愛されたが、妹は両親から疎まれて育ってきた。

「お前は生まれてくるべきではなかった」

その呪詛の言葉を子守唄に育った。

妹は常に学校でもいじめの対象だった。それでも、兄は妹を守り続けてきた。

結果、兄も両親に嫌われるようになった。学校でもいじめを受けるようになっていた。

兄・村上浩助は公明正大で、曲がったことや嫌いな男になった。そして悪を過剰に憎むようになった。

妹・村上有紀はシニカルで露悪趣味なところがあつた。そして兄に依存するようになった。

兄妹は兄が高校を卒業した時に共に家を出た。

そして、二人共選んだ進路は防衛大学校だった。

食べるために、自衛官を志したのだ。そこで、兄妹共に首席で卒業した。

彼らは志願と適正により、情報保全隊に配属となって、カウンタースパイに辣腕を振るっていた。

そんなある日2011年3月11日、人々から『悪夢の日』ナイトメア・デイと呼ばれるその日がやって来た。

突如世界中の海に、『深海棲艦』と呼ばれる化物バケモノが現れたのだ。

その化物は、何故か日本を集中的に襲い、次々と護衛艦が沈んで行った。

日本はもう終わりか？そう誰もが思ったその時、

艦娘と呼ばれる存在が次々に現れて、深海棲艦と戦い始めた。

海上自衛隊は、その艦娘達かんむすに協力を約束し、全国に鎮守府ちんじゆふと呼ばれる拠点を作り、

陸海空三自衛隊自衛官の中から、艦娘と親和性のある人材。

つまりは、艦娘と共に頑張った妖精さんたちが見える存在を選抜し、「提督」ていとくとして送り込んだ。

その戦争が始まって、もう7年弱が経過していた

提督と艦娘には『自由裁量』を与えて、法整備が追いつくまで自由を与えていた。

その間に、グレーゾーンが拡大して立法が追いつかなくなって行った……。

そこで、その自由に枠をはめるために大本営に警務隊を設置した。

その責任者たる警務隊長には足立昭彦一等陸佐を充てた。

彼の人となりは常識人、堅苦しく『常識が服を着て歩く』男に皆苦手意識を持っていた。

だが、常に中立公平、上司には忠実だし、部下には公平。規範とルールという枠を聖典に常に綱紀肅正を凶っている男。

大本営の総責任者となった大本営幕僚総監たる大貫悟空将は、彼の誠実かつ実直、公明正大な人柄に警務隊の責任者として自ら彼のもとに赴いて就任を依頼したくらいである。

そんな大本営警務隊は実質は憲兵隊となっていた。

全員が司法警察員の資格を持ち、度を越したり、法令を破る提督や艦娘を撃つのだ。

それだけでは限界もあった。

特に捨て艦戦法を今の法律で裁くことはできない。ただの作戦失敗だからである。

一度殺人罪で告訴もしてみたが、司法の壁に阻まれた。

まだ、戦争開始してから数年間しか経っていない艦娘黎明期なのだ。

そんな中大貫悟空将は村上兄妹を大本営に呼び寄せた。

情報保全隊で勤務していた彼らは、大本営の幕僚総監執務室に出頭命令を受けていた。

「兄様、私達に艦娘本部の大ボスが何の用かしら」

「分からんが、空将閣下直々による出頭命令だ、DS深海棲艦なのだろう」

「お汚れ仕事なら、私らしくて良いですわね」

自虐的に笑う有紀を見て困った顔をする浩助。

「相変わらずの露悪趣味だな。そんなことでは嫁の貰い手がなくなるぞ」

「良いです、兄様さえいれば。それがおかしい事くらい分かっています。そこまではマトモですが、私はそこから先が歪んでるんですから、ふふ」

「やれやれ、困った妹だ」

妹には甘い彼、有紀に押し倒される形で関係をすでに持つており、同じ部署でカウンタースパイの任務をしている関係上、相互監視の意味で同居も認められていた。

そのカウンタースパイとは他国だけではない。情報保全隊では深海棲艦側のスパイがいるのではないかと疑っていた。

その情報は情報保全隊だけにとどめて、艦娘本部たる大本営ですら知っているのは大貫悟空将だけである。

その結果が神谷二佐の作戦立案、防衛大臣持ち込みという混乱を招くことになるのだが、それはまた後の話である。

神谷二佐にとって不幸なことは、高菜二佐に叩き潰されなくても大貫の手により廃案になってたことだろうということだが、それもこの時点ではまた後の話である。

そんな二人が揃って大本営に呼び出されたとあつてはやはりDS
案件なのだろうと思っていた。

幕僚総監室は防音設備が整っている部屋で、限られた人物しか入れ
ない。

そんな彼の部屋をノックすると、扉が自動的に開く。

扉の上には防犯カメラが設置されており、大貫自身が遠隔操作で扉
を開けたのだろう。

「村上浩助三佐入ります」

「村上有紀一尉入ります」

「うむ」

彼らが部屋に入ると再び扉が閉まる。

大本営幕僚総監たる大貫悟は執務を行っていたが、村上兄妹が敬礼
を行うと、答礼を行った。

その机の上には『小人』達が執務の手伝いをしており、二人が敬礼
すると作業の手を休めて答礼を行った。

「まあ、可愛い小人さんですこと」

「噂に聞く妖精でしょうか、ところで閣下、我々に御用ということは
深海棲艦DS案件でしょうか」

そんな兄妹の言葉に満足そうな表情を浮かべた大貫空将は執務机
の前においてある椅子を指して

「まあ掛けたまえ」

そう席を勧めると、二人共失礼しますと椅子に腰掛けた。

「早速だが、君たちに辞令を發布する。村上三佐を本日より浜松鎮守
府の司令官に任ずる。また村上一尉を同副官を命じる」

その言葉に二人はキョトンとなった。

「お言葉ですが、わざわざ情報保全隊から引き抜いて提督になれと
おっしゃるのですか？」

「表向きはな」

浩助が疑義を述べると大貫空将がにやりと笑った。

「提督と艦娘には『自由裁量』というものが認められている。政治家共
の不手際を現場に押し付ける形でな。そこではやはり不正や艦娘へ

の不当な扱いが問題となっておる。特に関西方面では『いてまえ作戦』としていわゆる捨て艦戦法が根付いてしまっている。実に嘆かわしいことだ」

「閣下、それと私達が呼ばれたことになにか関係があるのでしょいか」
今度は有紀が大貫空将に質問した。

「DS案件と絡んでくるが、捨て艦戦法が多い関西で深海棲艦の攻撃が激しい、逆に善良な提督が揃っている東北、特に宮城エリアには深海棲艦の攻撃は比較的ゆるい。これは、背後に深海棲艦の指揮官がいて操っている、かつ沈んだ艦娘は深海棲艦になるという仮定に沿ったものであると考えている。また、提督だけではなく、艦娘自身が鎮守府を乗っ取って運営している場合もあり得ることだ。私は艦娘という存在を頼りにはしているが、絶対的な信頼はしていない。彼女らも感情を持つ者たちだ、悪と呼ばれる個体も存在しうるだろう」

そういうと、大貫空将は一息ついた

「DS案件は引き続き情報保全隊に任せるとして、私はその自由裁量を逆手に取って「裏の警務隊」を作りたいと思ってきた。そこで、数年掛けて人選を進めてきた。表の警務隊は足立に任せておけばいいだろう。だが彼だけでは限界がある。そこで、ちょうど浜松で提督の空席ができている。艦娘達に性的暴行を働いた連中だ。それに艦娘への給与横領。全員逮捕してある」

その言葉で有紀はニヤリと笑った。

「浜松は隣接鎮守府でカバーをする。私達には提督業の傍ら、『必殺仕事人』のようなことをやれと言うことですね」

「そのとおり、足立の追求すら逃げおおせている奴らや、反逆を企む艦娘を始末してほしい。私が元締め且つ頼み人だ。晴らせぬ艦娘達や提督たちの恨みを晴らしてほしい」

「うふふ、私にお似合いのお汚れ仕事がやって来ましたわ、兄様」
「いずれにせよ、法秩序を守るために手を汚すなら私も異存はありません」

元々歪んでいた有紀はともかく、浩助も高校までの生活と情報保全隊での任務、そして有紀との関係で歪んだところがあるのだ。

普段は公明正大な正義感を持ちながら、『悪』への憎悪が異常なまでに強い。

「浜松の所属艦娘は最上、三隈、それに卯月だ」

プロフィールを妖精さんが運んでくれる。

有紀は妖精さんの頭を撫でている間に浩助はプロフィールに目を通している。

「了解いたしました。本日より浜松鎮守府司令官及び『裏の警務隊長』の任務仰せつかります」

「よろしく頼む。差し当たっては最上と三隈と卯月を鍛え直してやってくれ。練度的には卯月以外は改装を行っており、他の生き残った艦娘はすでに他の鎮守府で引き取ってもらった。来月には高梨宮湊子内親王殿下が浜松に視察にお見えになる。新規艦隊司令官の着任の儀式のようなものだ。それまでに鎮守府の体裁を整えてもらいたい」「かしこまりました」

二人は立ち上がり敬礼をした。

それから数日後、彼らは浜松の地にやって来た。

浜松鎮守府は他の鎮守府に比べ広くなっていた。

大貫空将から渡された足立一佐の報告書を見るに、地下宮倉まであつて艦娘を縛っておくのはうってつけの施設に改造されていた。

これも自由裁量のうちの一つだが、長年横領してきた金銭でコツコツここまでやっていたのかと思うと

浩助も有紀も怖気がする思いだった。

「まずは、艦娘達に会おう」

「そうですね」

鎮守府の庁舎に入ると執務室には3人の艦娘が立っていた。

一人は二人の艦娘の後ろに隠れており怯えきつた顔をしている。

「新しく司令官に着任した村上浩助三佐だ」

「同副官の村上有紀一尉です」

敬礼をすると、艦娘達もおどおどと答礼する。

「最上だよ、階級は三曹」

「ぐ、ぐきげんよう提督、三隈です、同じく三曹」

「う……卯月だぴよん……一士」

「ここに明言しておこう、君たちを苦しめて辱めたクソツタレはもうここには帰ってこない」

浩助の物言いに重巡の二人は安堵した表情を浮かべるが、卯月だけは怯えきって前に出てはくれない。

「では、最上、三隈ちよっと地下まで来てもらえるか？」

地下という言葉にビクツとなる二人だが、浩助に従って地下に向かつていく。

その間に有紀に卯月の相手をさせるのだ。

地下営倉にやってくる浩助は振り向いて二人をまっすぐ見た

「まずは君たちに苦しい思いをさせた、自衛隊を代表して心から詫びたい、申し訳ない」

頭を下げたのだ。

艦娘達は戸惑いの表情を浮かべていた。

「そこで、君たちに私の計画に協力してもらいたい。卯月には残酷すぎるからね」

「どういう、こと？」

最上が躊躇いがちに聞くと

「悪者退治さ」

そう笑みを浮かべて言い放った。

「悪者退治？深海棲艦ではなく？」

二人はキョトンとした顔をしていた。

「うん、君たちを傷つけたクソツタレ共は、逮捕された。でも、自由裁量を隠れ蓑にもつと酷いところが必ずある。私達はそれらを発見し、撃滅する」

「……なんか『必殺仕事人』みたいだね」

「そうね」

二人の例えが、妹と同じ喩えにくくつと笑うと

「我らは法秩序を守るために手を汚す。協力してくれるかな？」

「もちろんです」

彼女らも既に歪んでいたのかも知れない。虐待を受け続け、人間に対する憎しみをこの『仕事人』として晴らしたかったのかも知れない。「それでは、早速訓練だ。深海棲艦との戦いの主任務も忘れてはいけないからね。ところで、卯月は私に対して怯えていたね。やはり男性恐怖症かい？」

その問いに二人は悲しそうに頷いた。

「ボクの力不足で卯月を守れなかったんだ……」

「モガミンのせいじゃないです、三隈が力不足で……」

「そうか……有紀が上手くやってくれれば良いが……」

一方その頃

「お姉さんたちに何をするびよん」

浩助達が去った後に開口一番問われたのはその言葉だった。

「あら、何もしませんよ。兄様に、そんな甲斐性は無いですわ、うふふ」

その笑みに卯月は寒気を感じていた。

「こ、怖いびよん……」

「あら、怖がらせる気はなかったのですけど……」

困惑した有紀におずおずと近づくと卯月。

「うーちゃん、海に出れなくなっちゃったびよん……」

「海に出るのがトラウマですか？」

その問いに卯月はコクリと頷いた。

「兄様は怖い、私が怖いのは私が悪いとして……海に出られない……」

とりあえず、副官手伝いでもやってもらいましょうか」

「びよん？」

「私と一緒に書類をしまったり出したり、送ったりしてもらおうお仕事ですわ」

「分かったびよん……」

「いい子いい子」

卯月の頭を優しく撫でると漸く卯月から怯える顔が消えた。

こうして、新生・浜松鎮守府はスタートした。

やってくる湊子内親王の視察に備えて、重巡姉妹は哨戒に出て戦闘して練度を積み上げる。

浩助はモーターボートで陣頭指揮を取る。

防大主席卒とはいえ指揮官としての経験はまだまだ無いため、戦術戦略の実地訓練も兼ねている。

有紀は卯月と一緒に書類整理をしていた。卯月に書類整理を任せられるようになったら、有紀は時折大貫の紹介で「東富士の魔王」と呼ばれる教導隊長のもとで白兵戦技を更に洗練させていた。これは浩助も同様だった。

浩助も有紀もまだまだ新米『仕事人』なのである。

その間に、大貫の手配で、明石から最新の装備や、特殊兵装などが次々と送られてくる。

そんな中、高梨宮湊子内親王が視察にやって来た。

一種の観艦式でもある。

新しい司令官になった時に湊子は視察にできるだけ訪れるのが通例となっている。

卯月と村上姉妹は陸で、重巡姉妹は海でお出迎えをすることになった。

「湊子内親王殿下、小官は浜松鎮守に司令官として着任しました村上浩助三三陸佐であります」

「同副官、村上有紀一等陸尉であります」

「同補佐、駆逐艦卯月一士だぴよん……」

「艦隊旗艦重巡洋艦最上です」

「副旗艦三隈です」

湊子は陸上にいる卯月が気がかりになっていた。

「村上三佐、そちらの卯月は何故海に出ていないのですか？」

「……」

びくつと怯える顔になる卯月に困惑する湊子

「あの、私わたくしなにかいけないことを言いましたでしょうか？」

「内親王殿下、小官から説明させていただいてもよろしいでしょうか。男性に聞かせたくないのにお側に寄らせて頂くのをご許可願います」

「構いませんわ。私わたくしの耳だけに入りたいということですね」

有紀は湊子に、前司令官の元で虐待を受け、性的暴力を加えられた

トラウマで海に出られないため補佐として手伝わせていることを耳打ちした。

その報告に湊子は悲痛な顔をしてしばし考えた。

「ふむ……そうですわね、村上一尉、卯月を私のもとにいただけでないでしょうか」

「えっ？」

驚いた顔をする有紀に、湊子は悪戯をする子供のような顔をした。

「こんな可愛い娘なら、差し当たり私の側に置きます。わたくし前線から遠いところのほう心安らぐのでは無いでしょうか？」

「……小官の一存では決めかねます。上の許可をとってください」
その言葉には浩助が拒絶した。

「大貫空将には許可をいただきます」

その場で電話をかけ、大貫空将に電話をかけ始める。フットワークの軽い皇族である。

「え、あの……」

二人共困惑しているままに、スピーカーフォンにされて大貫の声で「言うとおりにしたまえ」

との指示に、湊子の無茶な提案に従うことになった。

「かしこまりました。本日より卯月は湊子内親王殿下にお預けいたします」

「私もそのほうが良いと思いますわ、卯月」

「……わかったぴよん。湊子内親王殿下、よろしく願いますぴよん」
ペコリと頭を下げた卯月の頭を優しく撫でる湊子。

こうして卯月は湊子と共に浜松の地を後にした。

内親王殿下の視察という一大イベントを終えて打ち上げと言う名の夕食会してから4人は埠頭に腰掛け海を眺めていた。

「まあ、これでよかったですんだと思う。あの子には手を汚してほしくないな」

「そうですわね」

「そうだね」

「ええ」

4人の願いはみんな一緒だった。

願わくば、優しい提督の元で幸せになってほしいと。

「宮戸島には私の同期がいてね」

「高菜先輩ですか？」

「そうそう、高菜君。宮戸島の英雄だとか言ってたかな。彼も正義の人だからああいう人のところで幸せになってもらいたいよ」

「武藤提督も良いですわね。根っからの善人ですもの。善人過ぎて困ったと言う噂ですわ」

「うん、武藤提督はボクも聞いたことある」

「高菜提督はなんでも、お気楽な提督だとか」

「いずれにせよ、そういう提督の元で幸せに暮らしてもらいたいね」

夜の星空を見上げながらその日は卯月の幸せを願って夜更けまで語り合った。

Capture 2（始末）

それから少しが経過した。

有紀は各地に飛び回り情報収集、浩助はビシバシと最上、三隈を鍛え上げていた。

そうやって数ヶ月が過ぎた頃、有紀がとある情報を持ってきた。

有紀は表の警務隊のネットワークを傍受して、全国の艦娘無線を傍受も出来る。

そこで発見したのは室戸鎮守府だった。

室戸鎮守府の所属人員はほぼ駆逐艦ばかり20名を超えていた。だが、調査してみると艦娘の数がそこまではないことに気づいたのだ。

さらなる調査を行うと、驚愕の事実が判明した。

旗艦である重巡艦娘が室戸鎮守府の日下部提督と共謀して捨て艦戦法を行っているのだった。

しかも、計画的に。

日下部提督は戦死報告を上げずに、その給料を着服していた。それだけならまだしも、駆逐艦ばかり集めては無理やり性行為を行っていたのだ。そして、十分に蹂躪して壊したところで、重巡である旗艦が激戦地へ連れて行ってその駆逐艦を沈める。

本人もタダではすまないがすべての艦隊旗艦の保有する『旗艦の保護機能』という明石謹製の艦装能力で大破はしても沈まないのだ。

そうやって、私腹を肥やしながら、性欲を満たし、艦娘もその恩恵に預かっていたというのだ。

「室戸鎮守府の日下部提督ですが、捨て艦戦法を多用して、戦死報告を上げていません。今のままでは公金横領と性的暴行だけですが、足立一佐が動く気配があります」

「他には？」

「艦娘がグルになっています。重巡クラスの艦娘が汚職の手伝いをし、日下部提督は駆逐艦の子を辱めてはその艦娘は証拠隠滅のために

夜中に捨て艦で殺している」

「そんな奴ボク許せない」

「三隈もです」

「よし、動こう。足立一佐が動く前に抑えてしまおう。すぐに支度をしてくれ」

艦娘達と村上兄妹は頷きあつた。

「『仕事』だ」

村上兄弟と艦娘達は公共交通機関で四国まで移動して夜を待っていた。

「作戦はこうだ、夜中に捨て艦をして帰ってくる重巡を洋上で殺す。私達はその間に鎮守府官舎に侵入して日下部を殺す」

「2対1ならなんとかかなりそうだね」

「油断は禁物よ、モガミン」

「私は付近で監視を行います。以後は専用無線連絡にて」

海沿いの廃倉庫で木箱を囲んで鎮守府見取り図を見ながら4人はそれぞれの持場に散っていった。

「ふう、今回はずいぶん粘ったわ、でも漸く沈んでくれたわね」

重巡の艦娘が意気揚々と室戸鎮守府に戻ろうとしていた時、二人の艦娘が立ちはだかった。

「待て！この悪魔め！」

最上だった。

「あなたは、何者？」

首を傾げる重巡艦娘に最上はニヤツと笑った。

「お前を殺しに来たものさ」

「なにっ!？」

その直後、砲撃音がして重巡艦娘の艤装が爆発を起こした。

「きゃあっ!!」

重巡艦娘の背後に静かに回り込んで三隈が砲撃したのだ。

それに振り向いたときにはもう遅かった。判断を誤ったのだ。

目前に突きつけられる主砲。そして、怒りに燃えた最上の瞳……。それがその重巡の最期の光景となった。

「沈め、この外道が」

「ギャツ！」

至近距離からの最上の砲撃は重巡艦娘の頭を吹き飛ばしていた。頭を失った重巡艦娘の身体はブクブクと海へと沈んでいく。

深海棲艦には通用する旗艦保護機構は、艦娘同士の戦闘殺し合いを想定していない。演習は模擬弾で行うためだ。

「ボク達……………」

「引き返せないところに来ちゃったわね」

血に染まっていく海面を見ながら二人呟いた。

その頃、室戸鎮守府の官舎では小さい悲鳴が聞こえていた。

「離せークソ提督!!」

埠頭から回り込んだ浩助は、有紀からの合図を待っていた。

すでに先に中に侵入している有紀は屋根に登って電線に向かってサイレンサーピストルを発射した。

バチツ

スパークが起こった直後、部屋の明かりが非常灯に変わった

「何だ！停電か！」

男の声が聞こえた時に有紀から通信が入った

『条件クリア、どうぞ』

「了解」

浩助が腰に帯びているアーミーナイフを手にとると開いている窓から飛び込んだ。

「何者だ！」

一糸まとってない曙と下半身を露出させた日下部提督の姿が浩助には見えた。

「この……クズ野郎が！」

その直後、一回転して立ち上がると浩助はすぐに日下部提督の口を抑えると首筋にナイフを滑らせた。

「むぐー……!!!」

「ひっ!!」

大量の血を出して息絶える日下部提督を見下ろす頃に、有紀はすで

に眠っている副官をピストルで始末していた。

「……………私も殺すの？」

怯えきつた曙の言葉に浩助は頷いた

「ただし、私と一緒に地獄に堕ちるか、ここで天国に逝くか決めていい」

「……………従っていくわ」

曙は決意の籠もった瞳で頷いた。

「いい子だ……………」

浩助が曙の頭を撫でていると有紀が血まみれで入ってきた。

「うふふ、副官の処理、終わりましたわ」

「こつちも、切り刻むか……………」

爪で引き裂かれたように刃物で日下部の死体を切り刻む。この刃物は、明石謹製の「デモンズグロー」と言う鉤爪グローブである。

それを曙はじつと見ていた。

「曙、君は死んだことにして新しく曙を浜松で建造したことにする。そつちの処理はやっておくから気にしないでいい」

「分かったわ、新しいクソ提督」

「うふふ、クソ提督、ね。道を違えた私達には相応しいですわね、うふふ」

「そうだね、悪を裁くクソだからね。……………もう、後には引き返せなくなつたな」

「でも、あなた達はいいいクソ提督よ」

「いや、曙。人殺しに良いも悪いもないんだ。でも、こいつは今の法では裁けない。横領と暴行で数年で娑婆に帰ってくるだろう。そんなことを許してはいけないんだ、だから、死んでいった艦娘達の晴らせぬ恨みを晴らすために私達のような『より凶悪な悪』が裁く」

「……………そうですわね」

「……………」

曙は二人が苦悩しつつも道を外す決意を決めたことが痛いほど分かっていった。そして自分もそうなる覚悟も決めていた。

「……………とにかく、最上と三隈と合流して帰ろう」

その後、有紀と浩助は最上と三隈に背負ってもらいながら、浜松まで戻った。

長距離移動用の明石謹製ブースターのお蔭で明け方には到着できた。

官舎のシャワーで血を二人で洗い流すと兄妹で激しく求め合った。

それが終わると新しい服に着替えて大貫に報告を上げる。もちろん曙加入の報告もだ。

「了解した、こちらで手を回しておく。今後も頼む」

大貫の返事により通信を切ると、二人は官舎に戻って再び求め合つて眠るのだ。

もちろん艦娘達も今頃艦娘寮に戻って惰眠を貪っている。

数日後、定期連絡の途絶えた室戸鎮守府に警察が立ち入った。無論大貫空将の裏からの手配である。

そこで、鉤爪のようなもので切り裂かれている日下部と副官の死体を発見した。

深海棲艦による攻撃と断定され、警察の捜査と、足立率いる警務隊の合同捜査は終了した。

「生きるも地獄、死ぬも地獄か、同じ地獄なら前に進むしか無いな」

「ええ、私達のようなクズが必要としなくなるまで、やるしかありませんわ、兄様」

「そうだね」

曙を厳しくしごいている最上と三隈を窓から見下ろしながら後戻りできない道と決意を決める二人であった。

アイキヤンフライ

「明けましておめでとうございますー!」

お正月三が日を過ぎた1月4日、仕事始めまたあの女が顔を出した。

明石である。

「明けましておめでとうございます、なのです。直哉は今日はお休みを頂いて、小学校で子供達に格闘術の手解きをしているのです」

「それは丁度良いです。新装備を持って来ましたので、試射しようかと」

「はあ……今度は、どんな物体を作ったのです?」

既に会議机の席に着いている明石に、お茶を出しながら呆れた顔をして問うと、

「薄雲さんがエラー艦娘だ、と言うことはご存知のとおりですね?」

「はい、薄雲さんからお伺いしてるのです」

そう言いながら電も、自分のお茶を持って秘書艦執務机のワーキングチェアに腰掛ける。

「薄雲さんは、装備種別の制限を受けずに装備が可能、と言うことです。そこで、大和改二でも装備できなかった装備を持って来ました」
「……………はあ」

全容が解りかねている電は、生返事をするしか無い。

「いやあ、今回ののは強烈ですよ。何せ、深海棲艦を吹き飛ばす最強砲を持って来たんですから」

「最強砲……」

「はい、史上最強砲です」

自信満々に言う明石に、嫌な予感しかしないが、自分が責任を取らないなら別に止める理由がない電は、その話を詳しく聞くことにした。

「どういう砲なのですか?」

そんな薄雲は今、卯月と哨戒中である。

「80センチメートル三連装砲です！」

ピュオオオオオオオ

北風が外で吹いて行った……

「は、80センチメートル三連装砲!？」

危うく、湯呑を取り落としてしまうところだった。

その80センチメートルという単語で、すぐにデスクに置いてある、直哉お下がりのノートパソコンでカタカタと調べる。

「ま、まさか、ナチス・ドイツの列車砲、グスタフ・ドローラなのです!？」

「いえす!ぎつつらいと!」

「……………それは、まともに撃てるものなのですか?」

「分かりません!」

「……………」

電は絶句していた。

「何、間抜けそうな顔をしているのですか?」

「呆れて物が言えないだけなのです」

「いやあ、今度はちゃんと洋上で発射しますし、大丈夫でしょう」

「大丈夫とは思えないのです」

ジト目で見ている電に、明石は笑いながら、

「科学には犠牲が付きものですよ」

「いやいやいや、半深海棲艦だからと言って、薄雲を矢鱈滅多に扱わないで欲しいのです」

その苦情に、明石はニヤリと笑う。

「大丈夫です、一発だけなら沈まない保護装置を付けて試射させます。それに錨を下ろして固定モードで撃てば大丈夫でしょう」

「は……………はあ」

どこから、その自信の根拠が生まれて来るのか解らない電は、大きな溜め息を吐いた。

「わかったのです。それでは直哉が戻って来る前に、薄雲達のところに向かうのです」

宮戸島沖。

薄雲が応急修理女神を乗っけて、砲身が数メートルある三連装砲を肩に取り付けた補強パーツと、腰のベルトパーツから何本も伸びてるサイドアームが砲身を支えている状態で、海に立っている。

「これ、死ぬほど重いです」

装備カードから薄雲の装備スロット装置に取り付けると、薄雲は膝まで水没する状態だった。

「大丈夫ぴよん?」

「まあ、ドカンと一発!やってみましようか?」

「薄雲、良いのですか?」

「まあ、やってみましよう。責任は明石三佐が取ってくださいるんでしようから」

ジト目で明石を見ると、明石は自信満々に、

「大丈夫、今度は市街地に被害は与えません」

「いや……………」

電が、突っ込もうとした直後だった。

「発射します」

ズツガアアアアアン!!

ズツガアアアアアン!!

ズツガアアアアアン!!

その直後、薄雲の姿が消えた。

「えっ?」

「薄雲ちゃんが消えた!?!」

「あれ?」

それから少し後のことだった。

その先の洋上で、神通率いる女川鎮守府艦隊が、戦艦棲姫に追い回されていた。

「振り切れないデース!」

「くっ、だから進撃はやめろと言ったのに……………!私が殿を務めます、五人は逃げてください」

神通が、撃沈覚悟で戦艦棲姫に相對した直後だった。
ザッポオオン!!

遠くで、大きな水柱が上がった。

「嫌な予感デース!」

「また、明石ですか?」

「ひえええ……」

「また何か飛んで来ます!!」

「じ、神通、どうするの!?!」

金剛型姉妹と陸奥が、口々に声を上げた。

戦艦棲姫は、その水柱に気を取られていた。

「ぜ……全艦退避いいいいいい!!!」

『きやああああああああ!!!』

真つ青な顔をした神通が悲鳴のように叫ぶと、女川艦隊は悲鳴を上げながら蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

バアアアアン!!!

バアアアアン!!!

空中を飛翔していた二発が炸裂した。

無数の子弹が、雨のように降り注いで来た。

「ク……クラスター弾ですかあああああ?!?!」

神通達と戦艦棲姫は、雨霰のように降り注ぐ子爆弾によって、ズタボロにされるのだった。

「み……皆生きてます?」

「大破で済んでマース」

「眼鏡が粉々になってしまったわ……」

「ひえええ、ズタボロです」

「いたたた……」

「酷い目に遭ったわ……」

必死で子弹範囲外縁まで逃げたのに、全員揃って大破である。

そして前を向くと、密集して降り注いだ範囲に棒立ちだった戦艦棲姫が、蜂の巣にされた無残な姿で、海の底に沈んで行った。

プカプカと、光に包まれた霊子結晶が浮かんでいる。

「これ、貫つて良いのでしょうか？」

神通が拾い上げると、はっと我に返った。

そして、女川鎮守府に通信を送る。

「こちら女川旗艦、女川本部どうぞー！また明石にやられました！」

それと同じ頃。

直哉は、小学校の体育館で護身術教室を開いていた。

小さな子供から、中学生まで護身の方法を教えていた。

「中休みにして雪合戦でもするかい？」

『おー！』

と、皆で外に出た時だった。

沖合の方から、大きな爆発音がした。

「何だい？」

もの凄く嫌な予感が過りながら沖合の方を向くと、愛ちゃんが空を指差した。

「提督！空から女の子が!!」

「うわあああああああああ!!!」

指差した先には、絶叫中の薄雲が飛んで来ていて、もの凄い勢いでグラウンドに向かつて、ぐんぐん高度を落として降って来る。

「薄雲おおおお!!?何があつたあああ!!?」

直哉の絶叫の後、

がっしやあん!!!

どっかああん!!!

降ってきた薄雲は、グラウンドにある野球のバックネットを突き破って、倉庫のドアを突き破り、倉庫に飛び込んで行った。

「薄雲おおおお!!!」

皆で慌てて倉庫に駆け込むと、薄雲がぐったりしている。

「薄雲、大丈夫か!？」

直哉が抱き起こすと、うつすらと目を開いた。艦装は応急修理女神のお陰で完全修理したが、薄雲の本体は擦り傷と火傷だらけである。因みに強烈過ぎる反動で、装備は強制解除されて、装備カードに戻っ

て薄雲が手に持っている。

艦娘でなかったら、即死である。

「あ、明石さんが……明石さんが……がくっ」

薄雲は気を失った。それと同時に艦装も解除された。

「薄雲さああん!!」

愛ちゃんも駆け寄る。

そのまま、皆で学校の保健室に担ぎ込むことになった。

「薄雲さんを探さないと……」

青い顔をしながら、取り敢えず明石は鎮守府に戻って来ていた。

薄雲のレーダー反応が陸にあることは分かっていたが、途中でレーダー反応が途絶えてしまったのだ。

薄雲が気絶してしまつて艦装が強制解除されたからであるが、電も卯月も顔が真っ青である。

「知らないのです。電は知らないのです」

「薄雲が死んじゃったぴよん……うわあああん!!」

卯月に至つては、薄雲が死んでしまった、と勘違いして泣き始めている。

その直後、遠くから車の音が聞こえ、ドアが開いて閉まる音が聞こえた。

最初に現れたのは、愛ちゃんだった。

「あー!!やっぱり明石さんだ!!薄雲さんに何をしたんですか!」

愛ちゃんが、明石を指差して叫んだ。かなり激おこである。

そして、次に現れたのが直哉と薄雲だった。

「明石……これはどういうことか、説明してもらおうか!」

応急処置を受けて、意識を取り戻した薄雲と一緒に来た直哉も激おこである。薄雲は、いつもどおりの冷静な顔である。

「いや、その……」

『薄雲ちゃあああん!!』

更に真っ青になる明石に、薄雲が生きてたことに安心して、薄雲に抱き付いてワンワン泣いている電と卯月。

トゥルルルルル

業務用の電話が鳴り出した。電話の主は足立一佐である。

「はいもしもし、こちら葬儀屋」

厭そうな顔をして、電話に出る直哉。

『女川鎮守府から連絡が入ったんだが、今度は何をやらかしたのだ?!』
「えー、明石のバカが80センチ三連装砲なんぞを製作して、薄雲に取り付けて試射をさせた結果、薄雲は数キロほどアイキャンフライして、小学校のバックネットを突き破り、倉庫のドアをぶち抜いて負傷しました」

『……明石に減給期間の延長と、薄雲のモニタリングを夕張一尉にやらせるから東京に戻れ、と伝えなさい』

「了解しました」

電話を切ると、直哉は青筋を立てながら笑みを浮かべた。かなり癡猛な笑みである。

「明石」

「ひゃいっー!」

「減給の期間延長と、明石の主任務は、夕張がやるから即刻東京に戻るように、と。あと、破壊した学校の備品は私が立て替えておくから、ちゃんと分割で給料から返すように」

「……そ、そんなあ……」

「まあ、私が監視されてるのは分かっていましたから、ぼかさなくても大丈夫です。それに、今回の実験については私は怒っていません。ただし……」

薄雲は冷静に語ると、抱き付いて泣いている二人の頭を撫でる。それから、再び明石に向き直った。その瞳は真紅と怒りに染まっていた。

「私の大事な二人を泣かせた罪は海よりも深く、地球より重いです」
「えっ、ちよっ……待ってください」

そう言うと、明石を引き摺るように工廠に連れて行って、シャツターを閉めた。

「ぎゃああああああああ!!!」

お正月の海辺に、明石の悲鳴が響き渡った。

お仕置きが終わった、明石の目からはハイライトが消えていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

そう譚言のように繰り返しながら……よほどの恐怖があったのだろう。

結局、小学校のバックネットと倉庫の修理代は、直哉のポケットマネーから立て替えて支払い、明石の借金に加えられることとなった。

今回ばかりは明石もタダでは済まず、異例中の異例である一尉への降格処分となった。

工作艦と言う、失う訳にはいかない工廠部の中枢をクビにはできないものの、今後は足立一佐と大貫空将の目の届くところで、大人しくしていることだろう。

その結果、解毒剤を作れずに大村奈々海は大人に戻れる機会を当分の間失うことになるうとは、誰も気づいていない。

……本人も夫も周囲も戻す気がない以上、あまり関係のない話ではあるが。

そうだ、浜松に行こう

「そうだ、浜松に行こう」

そう直哉が言い出したのは、薄雲飛翔事件があつてから数日後である。

「浜松なのですか？ああ、大晦日に言っていた同期の？」

「私も気にはなっていました」

「ぴよん……」

「旅行ですか？いいなあ」

「そうだね」

今日は哨戒を終えて、宮戸島メンバーに愛ちゃんと健太くんもいる執務室。

二人は宿題を終えて、三学期の勉強内容を予習している。

お騒がせトリオは今頃、直哉より宿題書き写し禁止令が発令され、家で缶詰になっていることだろう。

乗り気な皆に比べて、卯月の表情が暗い。

「卯月、どうしたのですか？」

電がそんな卯月の顔を見ると、卯月はポツリと話し出した。

「大晦日には知らないふりしてたけど、村上三佐と村上一尉、知ってるぴよん……」

「……もしかして、浜松鎮守府に居たのですか？」

「そうだぴよん……」

「どうしてまたそんな……」

「大晦日のあの場で、二人のことを知ってるって言って、嫌なことを思い出したくなかったぴよん」

「そうなのですか……辛い思いをさせてしまったのです」

薄雲は何も言わずに、卯月の背中を擦っている。

愛ちゃんと健太君も心配そうに見つめている。

「村上三佐のこと、何も知らないのに怖い人、って決めつけてたぴよん……」

『……………』

「卯月はお留守番しているかい？もし何なら私一人だけ行って来るけど？」

直哉が気遣うように言うと、卯月は顔を上げる。

「村上三佐に、ごめんなさいって言いに行きたいぴよん」

「それじゃ、休暇を取って皆で行くか？」

『はい！』

「二人も、ご両親の許可がもらえたら、連れて行ってあげるね？」

「わーい！」

という訳で翌日、大石家の3列シートのワンボックスカーを借りて、一路高速道路で浜松に向かう。

運転は勿論直哉。助手席には電が乗っており、二列目シートには薄雲と卯月、三列目には愛ちゃんと健太君が座っており、二人はイチヤイチヤしながら楽しく会話をしている。

笹野家と大石家から、あっさり許可が出る辺り、直哉への信頼が篤いことが判る。

「ところで、二人はもう、したんですか？」

薄雲が、何時も通りの抑揚のない声で訊くと、愛ちゃんと健太君は、

「だから『してない』ってばーまだ小学生だよ!！」

と、真つ赤な顔で否定する。

「いやあ、若いって良いなあ」

直哉はハンドルを握りながら、後ろの様子をチラ見しながら笑っている。

「直哉はもうおじさんなのです。そう言えば、初恋の人とか居たのですか？」

「もちろん居たよ」

懐かしそうに言う直哉に、電はふふつと笑いながら、

「今、どうしているのですか？」

「今かい？そうさなあ、婚礼の儀式の準備で大忙しだろうねえ？大変だよ、皇族の結婚は」

その言葉で、湊子だということが判った電は、

「あー……」

と答えるに留める。

「湊子様と初恋だったぴよん!?!」

卯月が食い付いて来る。

「そうだよ、後は姉さんかな。二人が初恋だったなあ」

「電は湊子様には敵わないのです。良かったのです、直樹義兄さんが射止めてくれて」

「そうだぴよん」

「その、直樹さんというのはお会いしたことはありませんが、直哉の兄さんと言うことは、かなりのイケメンみたいですね?」

そんな三人の、三者三様の言葉に、直哉は少し思案の後に口を開いた。

「そうさなあ、完璧超人。文武両道で、東大卒、エリート社長で資産家。今は日本を代表する大企業のトップに就いて、完璧さが更に磨きが掛かってる印象だね」

「さすがは三高ホールディングスのCEOなのです」

「直哉に負けず劣らずかっこいいぴよん。あ、でもうちちゃんは直哉が大好きだぴよん」

「私も直哉が大好きです」

「電も、直哉がだーい好きなのです!」

「あつはつは、ありがとう。私はこんないい嫁を、三人ももらえて幸せだよ」

笑っている直哉に釣られて、皆も笑い出す。

そんな三人に、今まで詭われた反撃とばかりに、お年頃の愛ちゃんが、

「そっちは『そういうこと』してるんですか?」

と訊くと、普通に、

「うん、してるよ」

「毎日してもらってるのです」

「昨日は、今日があるからちよつと物足りなかったぴよん」

「激しい時は朝方まで……」

とささっつと答えられて、愛ちゃんと健太君は顔が真っ赤になる。

「あう……」

「愛ちゃん、普通に答えられちゃったね」

「うん……」

途中のパーキングエリアでご飯を食べてから、浜名湖の辺りにある、予約した温泉旅館に着く頃には、夕方になっていた。

直哉は、全員一緒の部屋で泊まろうとしたが、そのまま夜の営みに発展したら愛ちゃん達が可愛そう、という嫁達の強硬な反対で、隣接する二部屋で泊まる形に落ち着いた。

三人共に、夜の営みをしないという発想がないのが、酷いところである。

健太君以外誰一人、男女別に泊まろう、と言う発想がないところが、これもまた酷い。

健太君は、一応ダメ元で提案したが、賛同者が直哉しか居なかった為、民主主義の原理という名の多数決の暴力で押し通されてしまったのだ。

という訳で、食事は皆一緒の部屋で摂って、寝るのは直哉＋嫁―ズと健太君と愛ちゃんだけで別、と言う事になった。

早速チエックインすると、仲居さんに案内されてお部屋へ。

艦娘達を「お嬢さんですか？子沢山ですね」と、間違えられるハプニングがあったものの、食事も大人と一緒にしてもらおう関係で、全員大人料金での宿泊である。

その辺は、事前にきちんと旅館と交渉している。

部屋に到着すると、早速夕食が運ばれて来る。

六人揃ってのお食事である。

直哉の両隣に卯月と電が座り、対面に健太君、愛ちゃん、薄雲といった感じで座って、お食事タイムである。

海の幸とお肉の豪華絢爛なお食事に、皆舌鼓を打つ。

「提督、良かったんですか？旅館まで出してもらって、こんな美味しいご飯まで」

心配する愛ちゃんに、直哉はははつと笑って、心配ないよと答える。

その隣で、健太君は美味しそうにご馳走を堪能している。

「もう、健太君」

そんな、まだまだ子供で色気より食い気の健太君を見ながら、ふっと笑う愛ちゃん。

そんな二人を微笑ましく眺めながら、お食事を摂る一同だった。

お食事が終わると、女子達はお風呂に行く。

そんな女子ーズを見送ると、直哉は持って来た将棋盤を取り出して、

「今日もやろうかね？」

「はいー」

脇室で浜名湖を眺めながら、将棋を指して男同士の語らいを深めるのだった。

女湯に入り、体を洗った一同は、露天風呂へと向かった。

「露天風呂なのです！」

「いっちばーんだぴよん！」

「卯月、飛び込んだら危ないです」

「景色も良いねー」

駆逐艦の、まだまだ子供な体型の三人と、大人への過渡期で丸みを帯びている愛ちゃん。

女風呂でも、きちんとタオルで前を隠している。

タオルを湯船に漬けるのはマナー違反なので、入る直前に取ると、

三人の艦娘は愛ちゃんを見て、

「おー」

「大人だぴよん」

「大人ですね」

と感想を漏らす。当の愛ちゃんは顔を真っ赤にしている。

四人並んで湯船に浸かる女子達。

「ふー、いいお湯なのです」

「浜松に、こんな良いところがあるなんて思わなかったぴよん。ご飯も美味しかったし」

「何でも、キャンセル待ちに割り込んで振じ込んだ、とか直哉が言っ

ました」

「そうなんです。でも良いのかなあ？お母さんも、一応ってお小遣い持たせてくれたけど」

心配する愛ちゃんに、電は笑顔を見せる。

「良いのです、電達のボーナスからも出してるのです。うちは四人共働きだし、任務であまり遊んでる暇もないので、安心してお言葉に甘えちゃって良いのです」

「そうだぴよん、せっかくの健太君との旅行なんだから、楽しむと良いぴよん」

「ところで、今夜は一緒のお部屋ですよ。健太君に襲われたらどうしますか？」

「健太君はそういう事しないよ！私のナイトだから！」

自信満々に言う愛ちゃんに、薄雲が耳打ちすると、みるみるうちに真っ赤になる愛ちゃん。

「薄雲ちゃん、何を吹き込んだのですか？」

「愛ちゃん顔真っ赤だぴよん」

「子供でも大丈夫なイヤイヤの仕方を伝授しました。今夜、早速実践すればいいと思います」

真顔で答える薄雲に、二人は嫌な予感しかしなかった。

そんな中愛ちゃんは、顔を真っ赤にしながら、何やらブツブツ言っている。

部屋に戻ると、お布団が敷かれていて、健太君は隣の和室で愛ちゃんのを待っていて、愛ちゃんとは部屋の前で別れた。

皆浴衣姿である。

野郎共の風呂は、短いのである。

そんな刹那、薄雲の瞳が真紅に染まった。

「……呼んできます」

そう言うと、外に向かって歩いて行った。

「おいおい、湯冷めするぞ」

「どうしたのです？」

「ぴよん」

浜名湖に向かうと、浜名湖畔に浴衣姿の一人の女性が佇んでいた。深海提督だった。

「深海提督、お久しぶりなのです」

電が声を掛けると、深海提督が振り向いて笑みを浮かべた。

「お久しぶりですね、電、薄雲。はじめまして、高菜二佐、卯月」

「お前が、深海棲艦の親玉か……？」

直哉は、銃を携帯していないことに舌打ちしながら、声を掛ける。

「そう言うことになります。神谷二佐の件、上手くやりましたね」

「……………知ってるのか。それで何の用だ？」

「室戸鎮守府で、提督が深海棲艦に殺された一件、ご存知ですか？」

「試すように深海提督が問うと、直哉はコクリと頷いてから答える。

「以前、足立一佐から聞いたことがある。卯月が宮戸島に着任する前

のことだったか。お前等の仕業か？」

「さあ？村上三佐なら、何かご存知ではないでしょうか？」

「浩助達が何か知っているのか？腹の探り合いも時には良いが、今は

食傷だ。用件は何だ？」

「ただ、貴方に逢いに来ただけです。そうそう、我々のスパイの存在

は、人間側でも把握しているようです」

「情報保全隊か……と言うことは、大貫空将も知るところか……」

「た、食えない爺さんだ。神谷は、元々潰される運命の作戦を立案して、

ただ世間を混乱させただけ、と言うことか……」

「ご明答、うふふ」

苦々しい顔をしている直哉に対して、楽しそうな笑みを浮かべる深

海提督。

「それを、敵である俺達に教えてどうするんだ？」

「再三申し上げました、私と貴方は敵ではないと。深海棲艦が人類へ

の咎なら、咎を生み出し続けるものが敵なのです」

「……………大貫空将と浩助達は何かを隠している、と言うことか。分

かった、十分に注意しよう」

「では私は失礼いたします」

「ああ、次会う時は戦場でないことを」

「はい……」

深海提督は、霧に包まれて消えて行った。

「しかし何だな。深海提督……不思議なやつだ……深海棲艦との共存の道が出来る、と言うことはこの際無視できない話だな」

「なのです」

旅館への戻り道すがら、直哉は思案に耽っていた。

「深海棲艦との共存の道が開けるなら……か。ずいぶんと迂遠な道のりだな」

そして、大きく溜め息を吐く。

「大貫空将はどういうスタンスなんだろう？徹底抗戦派かそうでないか、それによっては私の命も危うくなる。これを黙っておくべきか、報告すべきか……差し当たり明日次第だな」

「村上三佐が、何か知っているぴょん？」

「やつの口ぶりからはそうだな。だがそれは、ブラフという事もある。せっかくの旅行なのになあ、そういう事は屋根裏にしまいこんで、今日は考えるのをやめるか？」

「なのです」

体が冷えてしまった四人は、丁度空いてた家族風呂に入って十分にイチャイチャしながらお風呂を楽しんで、

部屋に戻ると、早速夜の営みが始まる。

翌朝。

「ゆうべはお楽しみでしたね？」

そう、顔を赤くした愛ちゃんに言われて、端の部屋で隣の部屋が愛ちゃん達だと油断していた四人は、流石に苦笑いを浮かべたのだった。

その間も、愛ちゃんと健太君はギュツと腕を組んでいる。ラブラブさが増している。

昨晚、二人に何があったかは、本人達だけしか知らない。

浜松鎮守府で

「さあ、ここが浜松鎮守府だよ」

鎮守府前の市営駐車場に車を停めると、一同が降り立つ。

直哉は自衛隊常装。艦娘達はそれぞれの制服の常装、子供達は作業服で、胸に入構許可証を提げている。

これは宮本一佐の計らいで、「どの鎮守府にも入構出来るように」と、取り計らってくれたのだ。

元々の意図は、武藤レストランこと南三陸鎮守府にお邪魔する為に、そのような許可証を大本営の許可の下、用意していたのだが、まさか宮本一佐も浜松まで行くとは予想してはいまい。

名目上は表敬訪問と言う形になっており、村上浩助三佐にも事前に確認済みである。

そこからは、歩いて移動になる。浜松鎮守府にはきちんと門や壁ができており、

コンテナハウスの宮戸島鎮守府より大きい敷地と建物に、全員は感嘆の声を漏らす。

「ここが浜松鎮守府か。いやあ、急拵えの宮戸島鎮守府より大きいねえ」

「うちの鎮守府より広いのです」

「……………」

「基礎の構造から、地下もありそうですね」

「……………」

「……………」

リラックスしている直哉と電と薄雲に比して、卯月と子供達は黙っている。

卯月は、またこの地に戻って来たことで、

子供達は、知らない自衛官と会うのが緊張なのだ。

庁舎建物から、二人の男女と最上、三隈。それに曙が出て来る。

「最上、三隈お姉ちゃん！」

卯月の言葉に、二人共笑顔を浮かべる。

「うーちゃん、君は高菜二佐の鎮守府に居るんだね!？」

「高菜提督は良い提督?」

門を開けながら問い掛けると、卯月は嬉しそうに頷く。

「卯月、久しぶりだね」

男性の方、浜松鎮守府司令官の村上浩助三佐が声を掛けると、

「村上三佐、うーちゃん三佐に酷いこととしてごめんさい。勝手に怖い提督って決め付けて……」

申し訳無さそうに頭を下げると、女性の方、妹の村上有紀一尉が卯月の頭を優しく撫でる。

「そんな謝らなくて良いんですのに」

「でも……」

「村上兄妹も、久しぶりだね?」

直哉の言葉に、浩助も懐かしそうな顔をする。

「高菜君も直接会うのは防大以来だね? 『宮戸島の英雄』」

「高菜先輩、ご無沙汰しておりますわ」

それぞれの知己と挨拶を交わすと、改めて自己紹介が始まる。

「私は、宮戸島鎮守府司令官の高菜直哉二佐だ」

「同秘書艦・艦隊旗艦の、駆逐艦電二尉なのです」

「同艦隊副旗艦の、駆逐艦薄雲三曹です」

「私は笹野愛『名誉士長』です!」

「僕は大石健太『名誉一士』です!」

小さな未来の自衛官達に、村上兄妹も笑顔を浮かべる。

「ようこそ浜松鎮守府へ。私が司令官の村上浩助三佐だ」

「同副官、村上有紀一尉です」

「同艦隊旗艦、重巡最上二曹だよ」

「同艦隊副旗艦、重巡三隈三曹よ」

「同艦隊隊員、駆逐艦曙二士よ」

お互い敬礼すると、庁舎の応接室に案内される。

応接室への道すがら、卯月は他の艦娘達のが気懸かりだった。

「他の皆はどうしちゃったぴょん……?」

「皆、他の鎮守府で頑張ってるみたいだよ」

最上がそう答えると、ほっと胸を撫で下ろす。
応接室に入ると、広い豪華な造りに一同驚く。

「これも、前司令官の趣味だったらしいんだけど、捨てるのにもお金が掛かるだろ？ 悪びれもなく、使わせてもらっているんだよ」

そう言いながら浩助と有紀は腰掛け、艦娘達は後ろに控える。

こちらにも、直哉と尉官である電がソファに腰掛け、卯月、薄雲、子供達は後ろに控える。

「曙、コーヒーをお出ししなさい」

有紀の指示に、曙は敬礼をすると部屋の外に出て行く。

「しかし、突然どうしたんだ？ 宮戸島から遠かっただろ？」

浩助が切り出すと、直哉がふつと笑みを零す。

「浜松旅行ついでに、久しぶりにあけおめメールを送ったくれた同期に会いたい、と思ったんだよ。それに少し訊きたいこともあるしね？」

その言葉に察した最上が、

「それじゃあ、子供達には寮の方を案内するよ。卯月も一緒においで」

『はい！』

と、三隈と子供達と卯月と共に部屋を出て行く。

コーヒーを淹れて来た曙も、部屋を出て艦娘寮に出て行った。

「できた娘達だね」

「自慢の艦娘さ」

直哉の言葉にふふつと笑うと、薄雲も電の隣に腰掛ける。

「積もる話もあるが、まずは二人に訊いておきたい。深海棲艦のスパイが居るといふのは、本当なんだね？」

その言葉に、二人の顔色が変わった。

「事実、なんだね？ そして、大貫空将も知っている？」

直哉が確信を持った表情で二人を見比べると、有紀が銃を抜こうとするのを浩助が止める。

「過剰に反応しなくていい。高菜君、君の言うとおりだよ」

「そうか……私なんぞが出張らなくても、神谷の作戦は握り潰されてたのか、やれやれ」

大きな溜め息を吐くと、制帽を取った。

「しかし、何でそれを知っているんだ？DS案件は、情報保全隊と大貫空将しか知らない筈なのに？」

「いやあ、簡単なことだよ。スパイを放った張本人から教えてもらった」

「!？」

愕然としている二人に、直哉は、

「これは、大貫空将にもまだ報告していないことだが、私は深海提督なる存在に出会った。とても可愛い女の子だったよ」

「深海棲艦には、やはり指揮する存在が居る、と言う大貫空将の仮定は正しかったのか？」

真剣に考え込む浩助に、電も口を開く。

「捨て艦戦法で沢山の駆逐艦が死んで、その魂が深海棲艦に変わった、と言う例も見せてもらったのです」

その言葉に、村上兄妹は思い当たる点があったが、敢えて口にしなかった。

眼の前の僚友には、表の世界で生きてもらいたいのだ。

「理論上、轟沈艦娘がいなくなれば深海棲艦の脅威は遠のく、と言うことだろうか？」

「そう言うことです」

その浩助の問いには、薄雲が答える。

「……これは、大貫空将に報告してもいいかな？」

「そうだねえ、村上君がそうすべきと考えるなら、それもいいと思うな？」

その言葉で二人共、この話題を切り上げる。

「しかし、相変わらず仲が良いねえ。君達兄妹は」

その直哉の言葉に、有紀は浩助に寄り添う。

「うふふ、地獄までご一緒するつもりです。ねえ、兄様？」

「そうだね。有紀とずっと一緒だよ」

「地獄だなんて、大袈裟だねえ。有紀は」

「それで、高菜くんは嫁を三人も娶ったと。卯月は恐怖症も克服した

「なんだって?」

「なのです。うちちゃんも電も、そして薄雲ちゃんも、直哉の嫁なので
す」

「あらあら、それは皆も羨むハーレムですわね」

その言葉に、皆がどつと笑った。

――
昼過ぎ、鎮守府前。

そろそろ帰ろうか、と庁舎を出てきた直哉達に、浩助達もお見送り
に出る。

「それじゃあ、私達は失礼するよ」

「長々と居座って、申し訳なかつたのです」

「それじゃあ、最上お姉ちゃん、三隈お姉ちゃん、またたびよん」

「また、今度は宮戸島までいらしてください」

「色々案内してくれて、ありがとうございました!」

直哉達の別れの言葉に、浩助達も笑顔を浮かべる。

「そうだね、時間ができたら宮戸島にも行こうかね?」

「そうですわね」

「卯月、幸せになるんだよ」

「高菜二佐、卯月のことをお願いしますね?」

特に艦娘達は、卯月のことを気に掛けている。直哉は卯月を優しく
抱き寄せると、

「もちろん、大事にするよ。なあ、卯月?」

「ぴよん!」

卯月も、嬉しそうに抱き付く。

そんな卯月を、浩助達四人は笑って見ている。

帰ろうかと言ったところで、有紀がはっと思いついて口にした。

「高菜先輩、神谷二佐なんですが、戻された原隊で脱柵したそうです。
お気をつけください」

「えっ?」

「脱柵、なのですか?」

電と直哉は、とても嫌な予感を覚えていた。

そしてそれが、宮戸島を巻き込む大騒動に発展するとは、今の直哉達には予想だにできなかった。

帰りの車の中で、直哉がポツリと呟いた。

卯月と薄雲、それに子供達は、途中で寄った遊園地で遊び疲れて眠っている。

「しかしあいつ等、随分と血腥くなったなあ」

「どう言うことなのです？」

助手席で起きている電には聞こえていたので、聞き返した。

「ん？理論的な話ではないんだけど、目つきが何か大事なものを失った目をしていてね。まさかとは思うが、ヒトゴロシなんてやってないだろうな？なんて思ってしまったのさ」

「ヒトゴロシ、なのですか？」

「それに、深海提督が思わせぶりの発言をしていたらどう？それも気になっていたので余計に……ね」

苦笑いを浮かべる直哉に、電は真面目な表情をする。

「確かに、電も重巡姉妹の目が気になっていました。鋭いというか、殺し屋の目……」

「殺し屋の目……か。それを含めて、大貫空将は何かを隠している、と見るべきだろう。私もまだ30代で死にたくないからね。十分気をつけることにしよう」

「大丈夫なのです、直哉は電が守るのです」

自信満々な電の頭を片手で撫でてから、再び運転に集中すべく、前に意識を向ける。

深夜の浜松鎮守府。浩助達はことのあらましを大貫空将に電話で報告した。

「……………と言うことがあります」

『なるほど、深海提督か。私の判断は間違っていないようだな』

「大貫空将、高菜先輩を消しますか？消すならすぐに動きますが」

「おそらく、我々が手を汚していることに気づいている、或いは何か違和感を持たれている、と思います」

『いや、その必要はない。高菜二佐は私と同じ志を持っているだろう。どうにか深海棲艦と共存の道を持ってないものか？とね。今はそのままでいい。それに、あのような男を死なせるには惜しい』

「もし、他人に漏らした場合は……やはり消しておくべきでしょうか？」

『半分深海棲艦の薄雲を、知っていながら側に置いている男だ、そのくらの分別は弁えているだろう』

「分かりました。どっちにせよ、小官も無辜の同期を殺したくはありません」

「お二人がそうおっしゃるなら、私は従います」

『分かってはいると思うが、村上一尉、先走るなよ？』

「……はい」

『それより。神谷二佐が脱柵した件、そっちの方が重大事だ。村上一尉、済まないが宮戸島に飛んでくれ』

「どう言うことでしょうか？」

『神谷二佐が、高菜君に復讐を企図しているかもしれん。あのような気持ちのいい男を死なせたくはない。高菜君一行を監視して、影から護衛せよ』

「かしこまりました」

その言葉と共に、有紀は闇へと消えて行く。

宮戸島。

「ククク……高菜め、今に見ておれ」

宮戸島の森の中に、神谷二佐が復讐の為に潜伏している。

そして、宮戸島で大騒動が起ることになるとは、この時点では誰も知りようもなかった。

宮戸島大騒動く逆襲の神谷く

「やめろ！神谷！俺が目的ならその子を放せ！」

「提督！！助けて！」

小学校の校庭で、神谷二佐が愛に拳銃を突き付けて、人質に取っている。

直哉が、必死に叫んでいる。

周囲を見回すと、薄雲も卯月も血溜まりを作って倒れている。

お騒がせトリオも同様だ。

「ウヒヒヒ！！お前も十分に苦しめてやる！」

「愛ちゃん！！」

健太が、必死で愛の名前を呼ぶ。

「何だ？こいつ等デキてるのか？なら……」

「えっ……？？」

「タアン！」

愛がドンツと押されると、神谷は愛の後頭部を撃ち抜いた。

「あっ……」

「愛ちやあああん！！」

そのまま、倒れた愛に駆け寄る健太。

「タアン！」

「えっ……？？」

健太は自分の胸に手を当てて……赤くなった手を見ながら崩れ落ちていった。

「貴様あああ！！」

「タアン！」

激昂して拳銃を抜いた、直哉の眉間も撃ち抜いた。

スローモーションのように倒れていく直哉……

「な、直哉ああああああああ！！！！」

眼の前が真っ赤に染まり……

「うわああああああ！！！！」

電は叫んで艤装を展開した。

気がついたら、辺りは砲撃で穴だらけ、校舎は焼け落ち、遺体が燃えている。

「直哉……………卯月……………薄雲……………愛ちゃん……………健太君……………皆……………」

がくつと、膝をついた電は叫んだ。

「嫌あああああああああああああああああああああ
!!!!!!」

はつと電は目を覚ました。体中が汗びっしりになっている。

「はあ……………はあ……………」

起き上がると、周囲を見回す。

クイーンサイズベッドで卯月、薄雲と直哉が眠っている。

ベッドを抜け出すと服を身に着けて卯月の部屋に向かう。

卯月が使っていたシングルベッドで、愛と健太が抱き締め合って眠っている。

昨日、浜松からの帰りが夜遅く、両親の許可を得てお泊りとなったのだ。

「……………」

階段を降りると、リビングに入る。

「何だったのです、あの夢は……………?」

月明かりが差し込むキッチンに置いてあるコップに水を汲んで、一気に飲み干す。

「……………神谷……………」

ぐぐつと、コップを持った手に力が入る。

パリン

コップを握り割ると、破片が手に刺さり、シンクにポタ……………ポタ……………と血が滴り落ちる。

「神谷あああああ!!!」

ガシャアン

コップを床に叩き付けると、キッチンの電気が点いた。

「電、どうしたんですか?」

服を身に着けて、襦袢を羽織った薄雲だった。眠そうに目を擦つ

て、電の手から血が滴り落ちているのを見ると、

「電、何をしているんです?!」

慌てて手を開かせると、葉箱に入っているピンセットで、刺さっていたコップの破片を取り除くと、携帯用高速修復材を手に掛ける。

みるみるうちに血は止まり、傷口が塞がって行く。

「片付けますので、リビングで座っていてください」

「ごめんなさいなのです、薄雲ちゃん」

暫く、茫然自失状態でリビングのソファにぽつんと座っていると、薄雲がやって来た。

「落ち着かれましたか?」

目の前に紅茶を差し出す。ブランデーの香りが漂う……ブランデー入り紅茶だ。

「はい、落ち着いたのです」

「何があったのか、話していただけですか?」

薄雲は、自分の紅茶にもトポトポとブランデーを注ぐと、切り出した。

「はい……っ」

紅茶を一口飲むと、アルコールの刺激で噎せそうになる。喉が少し熱くなる。

そして、蜂蜜のまろやかな甘さが、心を安らげる。

薄雲は、マグカップに半分ほど入れた紅茶入りブランデーを、平然と飲んでいる。

「皆が、神谷に殺される夢を見たのです」

「……神谷二佐が脱柵したのは心配事ですが、宮戸島に来ているとは限りません」

静かに、落ち着かせるように語る薄雲。

薄雲は感情が薄いように見えて、一番皆のことを想っている。

「もし万が一、今宮戸島にしていると仮定して、警備を強化するのは大事です」

「はい……」

「懸念事項は、宮戸島の人々を人質に取ったらどうするか?……或

いは銃乱射事件でも起こしたら?ということですね?」

「……………なのです」

「今頃、原隊の人達は血眼になって神谷二佐を追っているでしょう。そうそう遠くまでは逃げられないと思います」

薄雲は電を安心させるような語り口で、静かに続ける

「……………」

少し冷めた、ブランデー入り紅茶を一気に飲み干す電。

「蜂蜜とブランデーを入れた紅茶です。落ち着きましたか?」

「薄雲ちゃん、ありがとうございます」

「いえ。私はただ、貴方に助言しただけです」

その言葉に、笑みを浮かべる電。

「さあ、休みましょう」

「はい」

二人仲良く手を繋いで、再び寝室に戻って行った。

翌朝、愛と健太が二人仲良く、家に帰って行った。

電は一抹の不安を覚えていたが、二人腕を組んで帰って行く二人を見送って、

朝食の準備を始める。

その直後、健太が慌てて戻って来た。右腕を抑えて脂汗をダラダラ流している。抑えている手からは、血が流れ出ている。

「高菜二佐っ!愛ちゃんが…………!!目付きの…………悪いおじさんに…………捕まって連れて行かれ…………」

そう言うと、ガクツと膝を付いた。

「健太!何が起こった!?!その怪我は!?!」

「私が看ます。健太君、男の子だから少し我慢してくださいね」

薄雲が、すぐに救急箱を持って駆け寄ると、健太の上着を脱がせて、三角巾でぎゅつと肩を締め付け、止血する。

弾丸が骨で止まっていることを確認すると、タオルを健太の口に押し込んでから、ピンセットで銃弾を摘出する。

「むぐうううううっ!!」

「薄雲は、お医者さんみたいだぴよん」

「ブラック鎮守府に転属する前は、医務官提督の下で秘書艦をしていました。提督が戦死するまで医療の手解きを受けていましたので、このくらいは」

「銃創か……相手は、銃を持つてることか……まさか!？」

直哉には、思い当たる人物が一人しか思い浮かばなかった。

「一応、焼け石に水ですが高速修復材を掛けましょう。人間でも緊急止血程度にはなるでしょう、滲みませんが我慢してください」

「くうっっ!」

そう言うと、高速修復材を傷口に振り掛ける。出血は完全に止まり、傷口も少しだけ塞がった。

「はあ……はあ……そのおじさんが、高菜二佐を連れて来い、と……」

健太が、脂汗をダラダラ流した状態で言うと、全員は神谷だと言うことに気づいた。

「それで、愛ちゃんはどこにいます!？」

「わかんない……でも、鎮守府の方に向かっていったよ……」

「了解した!卯月!医者に連れて行ってくれ」

「分かったぴょん!」

健太に肩を貸しながら診療所に向かって行くのを確認すると、直哉達はすぐに鎮守府へと向かった。

鎮守府に着くと、警察の機動隊が鎮守府を包囲している。

「高菜直哉を出せえ!!」

愛に銃を突き付けて、神谷 徹が鎮守府に立て籠もっている。

愛に預けていた、鎮守府の鍵が仇となったのだ。

中には艦娘達の拳銃の他、89式小銃も仕舞つてある。もちろんガンロツカーは施錠しており、その鍵は渡していないが、こじ開けられればその限りではない。

神谷は89式小銃を肩に掛け、ニューナンプ拳銃を愛に向け、身体を抑えている。

パトカーを防御壁代わりに何台も止めてあり、警官達はパトカーの後ろに隠れている。

その中には、有紀と駐在さんもいる。

神谷は直哉達の姿を確認すると、そちらに向かって89式小銃を乱射する。

「高菜、死ねエエエ!!!」

パラタタタタタタタタ!!

「ちいっ!!!」

直哉達は、有紀の隠れているパトカーで遮蔽を取る。

駐在さんは腕を負傷していた。有紀の迷彩服も右足が血に染まっ
ていて、拘束用インシュロックで応急止血されている。

「申し訳ありません、すぐにここに向かったのですが、警察官の銃を強
奪する挙に出ると思わなくて……私も撃たれました」

有紀は申し訳なさそうに詫びると、直哉に腰に帯びていた拳銃を渡
す。

駐在さんも申し訳なさそうに、

「殺されるところを、この一尉さんに庇ってもらったんだ。ただ拳銃
は奪われて……高菜二佐、済まない……」

「いえ。駐在さんが気に病む必要はありません、あの野郎が悪辣なん
です」

直哉は、パトカーの窓越しに神谷を見遣りながら駐在さんを慰め
る。

「すぐに宮城駐屯地の警務隊が到着します。ですが……人質がいる以
上は……」

「手も足も出ないか……くそっ!!!」

直哉が覗き込もうとすると、神谷は89式小銃を乱射する。

パラタタタタタタタタタ!!!

直哉は慌てて頭を引っ込める。

「神谷二佐、その娘は無関係です。私が入質になります。その娘を解
放してください」

薄雲がパトカーの陰から出ると、まっすぐ神谷に正対した。

「………なら、手錠を持ってこっちに来い!」

「薄雲!」

「薄雲ちゃん!」

「私はお二人の為なら、何でも出来ます。ですから、心配しないでください」

直哉と電の声に、薄雲は笑みを浮かべて、負傷した駐在さんから手錠を借り受けると、手錠を片手に鎮守府の中へと入って行った。

「おい！娘！その艦娘に手錠を掛ける！」

「……」

涙も枯れ果てた愛は、申し訳なさそうに薄雲の後ろ手に手錠を掛ける。

「よし、娘は出て行け」

「……薄雲さん、ごめんなさい」

「いえ。怖い思いをさせて、申し訳ありませんでした」

愛は鎮守府を出て行き、警官隊に保護された。

女性警官がギュツと抱き締めながら、

「お家に帰りましょう」

と言う言葉に首を振って、

「ここにいます。私は、宮戸島鎮守府の名誉士長です！薄雲さんが人質になったのに、逃げたくないです！」

「でも……」

困惑する女性警察官に、警部補が諭すように言う。

「君は十分に頑張った、休みなさい」

その言葉に直哉も、

「愛ちゃん、診療所に健太君がいるから、卯月と一緒に健太君の傍に居てやってくれ」

と言葉を添えると、愛も頷いた。

「……はい」

女性警察官は「行きましょう」と愛を伴って、診療所に向かった。

宮城駐屯地の警務隊がフル武装でやって来たが、状況は変わらなかった。

穴だらけのパトカーに代わり、装輪装甲車がバリケードになったが、薄雲は無表情で銃を突き付けられている。

駐在さんも診療所に運ばれた。他負傷した警察官も数人に及んで

いる。

情報が漏れたのか、マスコミのヘリが上空を飛んでいる。

有紀にも、応急処置で高速修復材を掛ける。

有紀は太ももを撃ち抜かれており、そこまで深い傷ではないのと妖精が見える人間には多少効きが良い為、立ち上がれるようになっていた。

そして睨み合いが続いて、夕方になった。

神谷二佐の要求は高菜直哉の命であり、到底呑むことはできない要求だった。

そして暗くなると、直哉と有紀は頷き合った。

暗くなった死角を衝いて、有紀と直哉は埠頭は回り込んだ。

直哉は、埠頭側から執務室の窓を拳銃の銃床で叩き割ると、一気に飛び込んだ。

神谷はそれに気づいてはいたが、銃を向けられている以上スキを見せられない。薄雲に銃を突き付け、威嚇を続ける。

その直後だった。執務室のドアが開いて、直哉と有紀が体当たりを仕掛ける。

「ぎゃあああ!!」

よろけた神谷は、自身から離れた人質の薄雲に向けて、腰に帯びていた艦娘用九ミリ拳銃を乱射する。

「薄雲！危ない！」

「タアン！タアン！」

「ぐうっ!!!」

「くうっ!!!」

咄嗟に、薄雲を押し倒して庇った直哉と有紀は、両足に弾丸を受け動けなくなっていた。

「電の本気を見るのです！」

電が、装甲車に積んであった89式小銃を構えて、セミオートモードで人質を失った神谷の右腕を狙撃した。

「タアン！」

「ぐああっ!!」

神谷が持っていた拳銃を取り落とすと、電は小銃を投げ捨て、一気に走り寄って窓をぶち破り、神谷の顔面に飛び蹴りを放った!

「ぐふうっ!!」

壁と電の足のサンドウィッチになった神谷は、崩れ落ちた。

「確保なのです!!」

その言葉と共に、警務隊員が突入して神谷は取り押さえられた。

神谷は、奇声を上げながら連行されて行った。

「直哉!大丈夫ですか!?!」

有紀よりも、直哉の出血が甚大だった。

電が抱き起こすと、直哉はうつすらと目を開けた。

「ごめん、電……ごめん……薄雲……ごめん……卯月……ごめん……皆……」

それだけ口にする、直哉は意識を失った。

「直哉あああああああ!!!」

「いやあ、本当に死ぬかと思ったよ?」

その後、有紀と直哉は警務隊が同行させていた救急車で、東松島の病院に搬送された。

駐在さんと健太も、同じく救急車で、診療所から病院へ搬送されることになる。

結局、健太と直哉は入院することになった。比較的軽傷な駐在さんはすぐに退院して、有紀は浜松の病院に転院して行った。

お見舞いに来た電達に、苦笑いを浮かべながら直哉が言ったのが、先の言葉である。

「あまり、心配掛けさせないでほしいのです」

「全くだぴよん」

「まあ、死者が出なかったただけ良しとしましょう」

薄雲が、二人を宥めている。

その間、隣のベッドの健太は、愛が付きつきりでお世話をしている。

食事から何から、愛が全部やってくれている。

その別世界ぶりに、直哉達は肩を竦める。

結局、何だかんだで直哉が職務に復帰する頃には、二月になっていた。た。

その後、兄の婚礼行事やら何やらで多忙な日々を過ごし、漸く三月末になった頃、神谷二佐が拘置所で自ら命を絶つたことを知らされた。

その知らせを、足立一佐から聞かされた直哉は、複雑な思いだった。

「結局、理想と現実の折り合いが付けられない男だったんだろうな？」

卒業証書を片手に、卒業の報告にやって来た愛と健太を前に、そう零した。

「あの人は、ずっと提督が憎いつて言っていました。怖かったけど、何か可哀想な人だったな、つて」

「うん……」

愛の言葉に、健太も同意する。

「才能のある士官だったんだろうけどな。惜しいやつだった。ちよつと野心が強過ぎたんだ」

「なのです」

「そうですね……」

「ぴよん……」

三人の艦娘も同意する。

こうして、宮戸島を震撼させた大騒動は終焉を迎えた。

旅立ちく新たな提督の前奏曲く

神谷 徹獄死事件から少し経った。

お騒がせトリオこと圭一・寛太・慎は東松島市の中学校に進学した。しかしそこに、大石健太と笹野 愛の姿は無かった。

それは、そこから少し遡る、

三月半ばの事だった。

一日の業務を終えて帰ろうとしていた夕方、一通の出頭命令が宮戸島鎮守府に舞い込んで来た。

曰く『明日、笹野 愛を連れて大本営に出頭せよ』との命令である。直哉は、その出頭命令に目を疑った。

出頭命令は、鎮守府と大本営を繋ぐ、司令官コンピュータシステムのメールで届き、

差出人は、大本営幕僚総監たる大貫 悟からのものであるから、冗談の類ではない。

何より、エイプリルフルにはまだ早い。

それに何より、回覧先には足立一佐や羽佐間一佐も含まれている。

冗談の通じるようなメンバーではない。そもそも、艦娘達と提督を統括する総本山たる大本営のトップが、そのような冗談の類を送る筈もない。

それに、メールタグに『最重要』マークが付けられている。

その証拠に、業務用携帯電話にもメールが転送されている。

直哉は判断に迷っていた。

「しかしなぜ、無位無官の民間人の愛に、出頭命令が出ているのか？」

「そこなのです。妖精が見えることは、ここの鎮守府の面々と笹野家しか知らない筈なのです」

「そうだぴょん」

「あっ」

薄雲が小さく声を上げると、視線がそこに集中する。

「もうひとり居ます。浜松鎮守府の村上二尉」

「……………」

「愛ちゃんが村上一尉に話しているのを、ちらっと聞いていました」「チツ、有紀め……………大貫のオツサンに話しやがったか」

直哉は舌打ちをすると、大きな溜め息を吐いた。

「どうするのですか?」

「愛ちゃんへの出頭命令はともかく、私に対する出頭命令は法的根拠を持つてのことだろうよ。文面が『笹野 愛と共に』ではないからね……………笹野家に行ってくるか。電……………いや、薄雲、従いて来てくれ」

「わかりました」

直哉は、作業帽を被り立ち上がると、笹野家に向かった。

「あら、高菜さんに薄雲ちゃん、いらっしやい」

「こんばんは笹野先生、愛ちゃんと宗太郎さんはいらっしやいますか?」

「こんばんは」

にこやかに出迎えるエプロン姿の、愛の母親である笹野麻衣に、作業帽を取って頭を下げる。

笹野家は、夫宗太郎が30歳、妻麻衣が42歳の姉さん女房夫妻に愛、今年2歳の妹の未唯みいの四大家族である。

12年前、高校生だった宗太郎と新人医師だった麻衣の間に、できちゃった婚で生まれたのが愛なのだ。

愛を出産してから、仕事が多忙になったりで、なかなか授からず、10年開いたのだ。

そしてこの夫婦は、愛がたまに愚痴るほどアツアツな夫婦なのだ。夫婦の営みをしているのが聞こえてくることは一度や二度ではなく、艦娘とのガールズトークで愚痴るくらいだ。

麻衣は、この島の診療所で開業医をしている。宗太郎は、麻衣と付き合つて二年目に子供ができた当時高校三年生で、彼女を支えると決め、せっかく合格した防衛大学の入学を辞退して、一浪して看護学校に入り、ナースマンとなった。今は、夫婦で同じ職場で働いている。現在は看護師長という肩書を持っている。

余談だが、神谷事件では迅速に健太と駐在さんの応急処置を行い、

救急車を呼んでから、診療所のありったけの輸血血液を持って現場に駆け付けた、直哉と有紀にとっては命の恩人でもある。

「宗ちゃん、愛、高菜二佐がいらっしゃったわよー!」

「はーい!!こんばんはー!」

愛が、元気良くリビングから走って来て、ビシッと敬礼する。

笑いながら、二人共敬礼する。

その後から、未唯を抱っこして眼鏡の優男といった風の宗太郎がやって来る。

「こんばんは。まあ、上がってください」

「それでは、お邪魔します」

「お邪魔します」

宗太郎の書斎を兼ねた応接室に入ると、壁にはズラツと並ぶモデルガンやミリタリーグッズ、旧軍制服等が所狭しと飾られており、本棚には軍隊の本等がびっしり入っている。

新婚旅行はサイパンに行ったのだが、日程のうちの一日を使い、一日中二人で射撃場で銃を撃っていた、と言うくらいのミリタリーマニアなのである。

麻衣と出会わなければ自衛官になっていた、と言うのが本人の弁である。

件の宮戸島脱出行の時には、この夫婦も真っ先に直哉に協力してくれた、功労者の一人でもある。

全員がソファに腰掛けると、直哉が口を開く。

「早速ですが、愛ちゃんは妖精さんが見える。つまり、提督の資質がある。と言うのは、以前お話をした通りなのですが、艦娘と提督の総本山たる大本営から、愛ちゃんを連れて出頭するよう、大貫大本営幕僚総監から命令が出ました」

「……」

愛と宗太郎は黙って聞いている。そこに、麻衣が口を開く。

「それは、娘に提督になれ、と言う話ですか?」

「解りませんが、最重要という文言がついている以上、宮戸島鎮守府のお手伝いをしてくれ、なんて生易しいことじゃないと思います。現役

の自衛官でも、医務官やら戦闘機乗りやら、果ては会計経理まで引つ張り出している始末である通り、提督が不足しているのは事実です」「もし、提督になったとします。戦死の可能性はありますか?」

麻衣は、直哉の目を真つ直ぐ見て問うた。

「戦死の可能性は無いとは言いません。ですが、提督の自由裁量には『最悪一人だけ艦娘や鎮守府を捨てて逃げてても…つまりは敵前逃亡を行っても罰せられない』と言うのも含まれています。貴重な提督が戦死したら、大本営としても大いに困りますからね」

(その提督を、ブラック提督だからと殺しまくっている大本営に、そもそもの問題があるのだが)

その言葉をぐつと飲み込み、皮肉を込めて説明する。

「私達は地域医療の観点から、どこに行くにせよ愛に従って行くことはできません。ですが、12の娘一人で、鎮守府運営ができるとは思えません」

その麻衣の言葉に、直哉は、

「無論、成人の副官や参謀長を付けることになるでしょう。何せ、既に自由裁量と言う超法規的措置の名の下に、陸自高等工科学校生徒からも適性のある人材を、特任一尉として引つ張ってるくらいですから。無論、学校に行っている間は副官が代行するとしても、やはり妖精の見える提督が居ない鎮守府の艦娘は、戦力にはなりません。学校も、場合によっては休みながら行くことになりましょう」

直哉がそこまで話すと、宗太郎が口を開く。

「元々、愛は自衛隊志望だし、私に似てミリオタ気質もある。それに元気が良過ぎて、ジョスイーなどころもあるし、人質にされてもトラウマは残らないくらい強い子だ。私は、愛が望むなら送り出してもいいと思っているが、麻衣さんはどう思うね?」

「私は、愛の身の安全が保証されているなら反対はしません。ただ、愛は仲間を見捨てるほど冷酷ではありません。無理矢理にでも周囲が連れて行ってくれること、それが最低限の条件です」

「判りました。お二方の意向を添えて、大貫空将のお話を聞いて来ます。それで良いかな?愛ちゃん」

「……はい」

「薄雲、念の為、私のやっている業務を、お二人に説明してあげなさい」
「はい」

薄雲は、直哉が昼寝や読書をしていることを伏せて、そこまでハードスケジュールではないことを説明する。

海上でも、提督が戦場に乗り出さない限りは艦娘に任せる事が多い、と言うことも。

「海上に乗り出して殴り合いをする提督は、羽佐間一佐とか言う頭のおかしいおじさんだけです」

と、余計な説明を加えて……

「勉強する時間は大いにある、と言うことか」

「まあ、愛は宗ちゃんに似て賢いから、心配ないわよ」

「違うよ、麻衣さんに似てるんだよ」

「あー、いちやつくのはあとにして。お父さん、お母さん」

「あはは」

笑う両親に、恥ずかしそうに直哉と薄雲に頭を下げる愛。

「ところで、保護者の同行は流石に駄目とは言わないでしょうか。どちらが同行されますか？」

「私が行きます。医師はもう一人勤務医が居ますが、看護師長に代わりはいません」

直哉の言葉に麻衣が答えると、宗太郎と愛が頷く。

こうして、三人で新幹線で東京に向かった。

今回は艦娘は随行せず、電を司令官代行に任命した。

愛は、その新幹線の中で一つの決意を固めていた。

東京に到着すると、統合幕僚監部内の大本営に足を踏み入れる。

幕僚監部大本営フロアでは、足立一佐が待っていた。

「高菜二佐、大貫総監の命令により出頭しました」

直哉と愛は敬礼し、麻衣は頭を下げる。

「よろしい、それでは案内する」

足立一佐を先頭に、大本営幕僚総監の執務室に向かう。

執務室にやってくる、扉が自動的に開いた。扉の上にカメラが設

置されており、大貫自身が扉を遠隔操作で開いたのだろう。

「足立一等陸佐、入ります」

「高菜二等陸佐、入ります」

「笹野 愛、入ります」

「失礼します」

愛を含めて三人が敬礼し、麻衣は深々と頭を下げる。

大貫は立ち上がり答礼すると、応接セットのソファを指して、

「どうぞ、お掛けください」

と、愛と麻衣に声を掛ける。

愛と麻衣がソファに腰掛けると、大貫空将も対面に腰掛ける。

足立一佐は大貫空将の脇に控えており、直哉は愛達の脇に控えて立っている。

「高菜二佐も掛け給え」

「失礼します」

再び敬礼すると、愛の隣に腰掛ける。

「早速だが、用件に入りたい。笹野 愛さん、君はテーブルの上にいる『それ』が見えるかね？」

応接テーブルには、妖精さん達がずらりと並んで敬礼している。

見えるのは大貫と、直哉、それに愛だけだ。

「はい、妖精さんが並んで敬礼してます」

「うむ。笹野 愛さん、君にお願いしたいことがある。室戸鎮守府にて提督をしてもらいたい」

その言葉に間髪入れず、

「お断りします」

と、愛が答えた。大貫空将は半ば解っていたような顔をしながら、「理由を、お聞かせいただけませんか？」

「健太君と離ればなれになるくらいなら、提督なんてなりません」

「健太君とは？」

大貫が直哉の顔を見て問い掛けると、直哉は肩を竦めて答える。

「愛ちゃんの彼氏ですよ」

そう答えると、愛は少し顔を赤らめる。

隣室から、大本営の職員がコーヒーを持って来る。

全員に差し出すと、職員が出ていくのを見計らって、話を再開する。「もし、その健太君と共に行くのであればどうかね？ただ、うら若き青少年をひとつ屋根の下で暮らさせるのは、間違いを生じさせるかもしれないなあ」

そう冗談めかして言い、コーヒーを啜る大貫に、愛は、

「健太君と一緒になら、どこへでも行きます！それに大丈夫です！もう、間違いをしちやってますから！健太君を押し倒しました！」

「ぶっ！」

「あらあ、意外と積極的ね？」

「まじで!？」

「全く、困ったものだ。最近の若いものと来たら……」

愛のその衝撃的な回答に、コーヒーを噴く大貫、自身も12歳年下の高校生を押し倒して妊娠している麻衣は、やっぱりかと言う顔をし、二人の師匠である直哉は絶句し、常識王である足立一佐は、渋い渋い顔をしている。

妖精さんが妖精雑巾を召喚してコーヒーを拭いている。足立や麻衣にとっては、テーブルのコーヒーが消えて行くのは怪奇現象だろう。

愛が、妖精さんがコーヒーを拭いている、と説明すると、

「メルヘンかファンタジーの世界ねえ」

と感心する。

「そ、そうか。しかし、まだ子供なんだから、避妊はしないといけないよ。」

大貫が、苦笑いをしながら言う。

「その子供を、戦場に引つ張り出すあんたには、言われたくないですよ」

それには直哉が、強烈な毒の籠った皮肉で応える。

「高菜二佐、大貫空将に非礼であろう？」

その言葉を足立が咎めるも、大貫は苦笑いのまま手で制す。

「愛さんの親御さんとしてはどうかな？」

「高菜二佐にもお話ししましたが、愛の身の安全が保証されるなら。あと、必ず大人の自衛官を付けてください」

真つ直ぐ大貫を見て麻衣が答えると、大貫は頷いた。

「当然だ。副官として、岩沼鎮守府の羽佐間三尉を異動して付ける。妖精さんも、二倍の動員を予定だ。配属艦娘も、各地からある程度の練度の持った艦娘を異動させるつもりだ。そして、君には特任一等海尉として給料も差し上げる。戦果に応じて昇任、昇給する」

「提督の自由裁量は、本当に超法規的措置なんですねえ？」

大貫の言葉に、直哉が呆れるように口にした。

「妖精が見える、と言うのは本当に稀有なのだ。我々だって、自衛官が戦えるならそうしたい。苦渋の末のお願い、だと思ってもらいたい」
苦々しい顔をして語る大貫に、愛は笑顔で答えた。

「わかりました。笹野 愛、提督になります！」

そこから大石家に、健太を愛と一緒に連れて行く許可をもらう為に、大貫自ら宮戸島に飛んだ。

大石家は、直哉と大貫二人のお願いと健太本人の、「僕も愛ちゃんの側に居たい」という意向で、室戸行きを許可した。

丸亀に親戚がいるから、たまに様子を見に行つていいなら、との条件付きである。

こうして、ドタバタと引つ越しの準備が行われて、愛達の卒業式翌日。

鎮守府の前には地域の人々とお騒がせトリオ、小学校の同級生達が集まった。

健太は、「司令官付き」という立場で特任海士長の階級で、鎮守府運営の手助けをすることになった。

二人共、羽佐間三尉が運転席に座っている車の前で、皆のお見送りを受けている。

「愛、健太、あっちでもがんばれよ」

「たまには電話してね」

「あ、スマホ買ったらメッセージ交換しようよ」

お騒がせトリオが、別れを惜しむように言葉を掛ける。

「愛ちゃん、健太君元気でね！頑張ってるね！」

クラスの女子達が、愛達にエールの言葉を掛けると、地域の人達も口々にエールを贈る。

「健太君、愛をよろしくね」

「仲良くするんだよ」

愛の両親が、健太に言葉を掛ける。

「愛ちゃん、うちの息子を頼むね」

「ちゃんと避妊をするんだよ」

16で結婚をした、健太の母泰子が、誂い半分でそう言うと、二人とも赤くなり周囲がどつと笑う。

「愛ちゃん、健太君。たまには顔を出しに行くのです」

「二人とも頑張るぴよん」

「必ず生き残ってください」

艦娘達も、口々に二人に言葉を送る。

「さて。本日を以て、宮戸島鎮守府名誉隊員の任を解く。これからは私達の僚友となり、弟子も卒業だ。私から二人に贈る言葉はただ一つだけ、どんなに惨めでも良い、みつともなくても良い、君達は艦娘や羽佐間三尉が守ってくれる。元気に、そして無事に頑張りなさい」

「はいっ！」

「室戸鎮守府司令官殿に敬礼！」

直哉が敬礼すると、艦娘やお騒がせトリオが敬礼する。

花梨も運転席から降りると、敬礼する。

「笹野一尉、大石士長、そろそろ行きましよう？」

「はいっ！」

業務車三号の後部座席の扉を開けると、二人が乗り込む。

そこで扉を閉め、花梨が改めて宮戸島鎮守府の面々に敬礼すると、直哉と艦娘達は答礼する。

そして大石家、笹野家の両親に、

「お子さん達は、私の命を懸けてお守りいたします」

と敬礼をすると、

「宜しく願います」

と、二人の両親が頭を下げる。

花梨が乗り込むと、車は走り出し鎮守府を後にする。

それを見送ると地域の人達は解散となり、残ったのは両家の両親と直哉達である。

「行ってしまったのです」

「元気でやってくると良いぴよん」

「きつと大丈夫です」

三人の艦娘達が言うと、直哉や両親達も頷く。

「二人が結婚する頃には、この戦争も終わっていると良いねえ？」

「そうだね」

笹野夫婦の会話に大石家の旦那さん、勉さんも同意する。

「でも、20代でお祖母ちゃんにはなりたくないねえ？」

現在、ギリ20代の泰子がそう言うと、麻衣が、

「流石に16で妊娠しても、アンタ30になるでしょ」

とツツコミを入れて、皆どつと笑う。

こうして、宮戸島の小さな弟子達が旅立って行った。

圭一の恋物語〜激闘編〜

愛と健太が室戸で奮闘している中、宮戸島では四月中旬から下旬になっっていた。

「おつす！師匠！電の姐御」

「こ……こんにちは」

お騒がせトリオの悪ガキ大将の原 圭一が、女の子を伴ってやって来た。

彼女の名前は草加史絵^{そうかふみえ}。セーラー服におさげのオカッパ、瓶底眼鏡の女の子。東松島の公立中学校の三年生である。

外見的には、ザ・地味子といった女の子に、坊主頭で学ランのボタンを止めず、Tシャツの圭一と言った対照的な二人。

「やあ、こんにちは。怪我の具合はどうだい？」

「オツスなのです。と言うか、姐御はやめるのです。今日は寛太と慎はどうしたのです？」

「怪我はもう大丈夫つすね。寛太と慎の奴は、優花とギャルズと合同デートしてる。今日は金曜だし、帰って来ねえんじゃね？」

そんな二人に、にこやかに挨拶をする直哉と電。

今日も、哨戒を卯月と薄雲にやらせて、電と直哉は執務中という名のサボリである。

「今日も……その……お邪魔します」

「自分の家だと思って、寛いでくれよな？」

恐縮して縮こまる史絵に、笑いながらソファを勧める圭一。

こう見えて、お付き合いを始めてまだ一月未満の、初々しいカップルなのだ。

出会ったのは、入学式を終えて数日経ったある日だった。

お騒がせトリオマイナス1は、何時ものように昼飯を食べに、屋上に上がって行った。

マイナス1と言うのは、寛太が同じクラスになった優花に、入学式の日爆死覚悟で告白して、即OKを貰った為である。

まさに、一言完結の告白である。

同じクラスになった嬉しさの勢い余って、寛太は公衆の面前で自爆上等の告白を宣ったのだ。

「優花ちゃん、付き合ってくださいー！」

「うん？いいよお？」

「えっ？」

これが、後々まで語られることになる、『入学式告白即諾事件』である。

そんな訳で、お騒がせトリオは一人減ってコンビになったり、一人増えてカルテットになったりしていた。

公立にしては珍しく、給食ではなく弁当か購買がある学校の為、

おっとり天然な不思議ちゃんの優花が、毎日寛太の分も作って来る手作り弁当と一緒に食べるので、

圭一は、お昼ご飯を屋上で、慎と寂しく食べるのだ。

寛太と優花は、今頃甘い甘いラブラブなお昼ご飯を、教室で食べていることだろう。

さて。屋上では、瓶底眼鏡でザ・地味子の女の子が、隅っこご飯を食べていた。

セーラー服のリボンと靴の色で、最上級生の三年生だと判る。

「地味だな」

「うん」

これが、二人の第一印象だった。

その後ろから上がって来た、ギャルっぽい数人が三年生のその地味子のところにやって来ると、食べている地味子の後ろから蹴りを入れた。

「どーん！」

「きゃあっ！」

女の子は派手に転び、お弁当の中身が散乱した。

「キャハハハ、陰キャが屋上で飯くってんじゃねーし。便所で食ってな」

「そうよ、地味なあんたには便所飯がお似合いだよ」

転んで手を衝いた地味子の眼鏡がずれた時、圭一はその地味子を「可愛い」と思ってしまったのだ。

その瞬間、圭一は頭より行動が先んじた。

「おい、先輩。寄って集って弱い者いじめして、あんた等のほうが陰キャじゃね?」

「ちよつと、圭一! 相手は三年だよ!」

止めに入る慎に、憤る圭一。

「ばっか! 三年だろうが、四年だろうがあんなの見過ごせつか!」

「四年はいねえし!」

ツツコミ役が、今はラブラブ中の為、憤が堪らずツツコミを入れる。

陰キャ呼ばわりされた上に、放置されて漫才を見せられているギャル達はご機嫌斜めである。

「何? 一年坊主のくせにナマ言って! ちよつとシメたほうが良くね!」

「やっちやう!」

そんなことを言いながら、スマホを取り出してメッセージを送る。すぐに、ヤンキーの三年生が三人上がって来た。

地味子はメガネを掛け直し、散らばったお弁当を黙々と片付けている。

「何? こいつが生意気な一年坊か?」

「あ? 先輩、何か用すか?」

神谷事件の後、お騒がせトリオも真面目に自衛隊格闘術と空手を習うようになっていた。

そんな自信が、先輩相手にも物怖じしない態度を取っていた。

「あ? 生意気なガキだな! ちよつと教育してやるわ!」

三年のヤンキーが圭一に近づいた直後、圭一は胸へ掌底を放った。

「えっ?」

トクン……

心臓の拍動が一瞬止まり、体の動きが固まった直後、足を払って相手に尻餅を衝かせる。

転んだヤンキーは、何が起こったか判らなかつただろう。

「この！」

「野郎！病院送りにしてやるぜ！」

仲間がやられて激怒した三年のヤンキー達は、ジリジリと距離を詰める。

「慎！こいつ等勝った気でいるみたいだな!？」

「そうだな。師匠直伝の、自衛隊格闘術で教育してやるか!？」

圭一と慎は、それぞれ殴って来るヤンキーの腕を掴んで、ギリギリと後ろ手に回して締め上げる。

「いでででで!!!」

「ただだだだ!!!」

そのまま、ギャル達に向けて締め上げた腕を離すと、それぞれ背中に向かってシヨルダータックルをブチかます。

「うわわっ!!」

「きゃあっ!!」

ヤンキー達は、ギャル達に衝突して、押し倒す形になって転ぶ。

「ちよつと!?!どこ触ってんのよ!?!」

「す、すまん!!」

ギャル達はご立腹で、ヤンキー達にビンタを食らわせている。

「さ、先輩、手伝うよ」

圭一は、黙々とお弁当を片付けていた地味子を手伝う。

「お前等！覚えてろよ！」

「そうよ！覚えてなさい!!」

ヤンキー達とギャル達は、圭一達を睨み付けながら、屋上から出て行った。

「さあ、先輩、食え」

「……え？」

自分の弁当を差し出す圭一は、驚いた顔の地味子から、拾い集めた弁当を奪い取る。

「オレはこっちを食うわ」

「まあ、先輩、遠慮なくもらっただけでございます」

「……その……あの……ありがとうございます……ございます」

地味子はか細い声でお礼を言うと、圭一の弁当を受け取り、圭一は砂まみれの弁当を、

「うめえうめえー！」

と言いながら、砂をジャリジャリさせつつ平らげる。

そんな様子を見ながら、申し訳無さそうな顔で、少しずつ圭一の弁当を食べる地味子。

「そう言えば、俺は原 圭一だ。宜しくな、先輩」

「俺は齋藤 慎。先輩、よろしくお願いします」

「……その……草加……史絵……です」

「そうかそうか」

「……………」

自己紹介で、圭一が放った渾身のボケは史絵には伝わらず、史絵は首を傾げる。

「滑ったな?」

「うっさいわ」

「あの……その……わからなくて……すみません」

慎のツツコミに毒づく圭一、そしてそれに申し訳なさそうに謝る史絵。

それからというもの、圭一は昼の度に慎を引き連れ、三年生の教室まで押し掛けて、

史絵と連れ立って、屋上でお昼を食べるようになっていた。

そんなある日。

「ちわーっすー!史絵先輩いますか?」

「さつき、横澤さん達が連れて行ったよ。体育館まで来い、つて言つてた」

そのクラスメイトの言葉に、圭一はチリチリとした危機感を感じていた。

「慎!先生呼んで来い!」

「分かった!」

二人は頷き合うと、互いに反対方向に駆け出して行った。

圭一が体育館倉庫に踏み込んだ時、史絵はヤンキー達に押さえられ、付近の荒れていることで有名な高校の制服を来た金髪ヤンキー達が、史絵のセーラー服をバタフライナイフで切り裂いて、ブラを前から切っていたところだった。

「ひっ……ひっく……」

史絵の、純白の控え目のトップレスの下着姿を目にしたところで、圭一はブチッと何か切れる音が聞こえた。

「てめえええええええええええ!!!」

ダツと駆け寄ると、ナイフを持っているヤンキーの腕を掴んで、背負い投げの体勢を取ってから体を捻るように、脇腹に肘を叩き込んだ。

ボキッと鈍い音がして、悶絶しながらナイフを取り落とすも、そのまま身体を巻き込んだの背負い投げで、床に叩き付ける。

「ぐはあっ!!!」

背中からやられた上に、肋骨が数本折れたヤンキーは、真っ青な顔で呼吸困難に陥っている。

その直後だった。

ガツンツ

「圭くん?!?!」

圭一は、後頭部に衝撃を感じた。

悲鳴のような史絵の絶叫で、飛び掛けた意識を繋いだ。

頭から血がダラダラ流れている中、ギロリと後ろを向いた。

「な、何だコイツ?!」

不良高校生は、三段警棒を持っていた。

「おい、コラ。パイセンよお……武器使うってんなら、相応の覚悟持つてんだろうなあ!?!」

ギロリと不良高校生を睨んだ圭一は、渾身の力を込めて顔面に向かって拳を振り抜いた。

「ぐわあっ!!」

不良高校生は壁に叩き付けられて、そのままズルズルと崩れ落ちた。

殴った拳は、赤黒く腫れ上がっている。

「圭くん後ろ!!」

圭一が振り向く直前だった。ヤンキーの一人が体当たりしていた。ザクツ……

腰に激痛が走った。

「おあ……?」

「きゃああああ!!圭くん!!!ナイフが!!!」

史絵の悲鳴が響き渡る。

そのまま、尻餅を衝いたヤンキーに振り向いた。

そして獰猛な笑みを浮かべる。

「よせよ、痛いじゃねえか……」

右腰にナイフが刺さったまま一步、また一步とヤンキーに近づくと、拳を顔面に振り下ろす。

「ギャツ!!」

ヤンキーは、悲鳴を上げて崩れ落ちた。

「この野郎!!いい加減くたばれ!!」

「くたばんのは手前えだ!!!」

襲い掛かってきたヤンキーを、右腕一発でノックアウトする。

「ぐわあっ!!」

数分後、ガタガタ震えている史絵に、血だらけになりながらフラフラとしている圭一。

そして、地面に倒れ伏している不良高校生にヤンキー共。

ギャル達は、その死屍累々な状況に、三人身を寄せ合ってガタガタ震えている。

中には、スカートに染みを作ってしまう子もいた。

「け……けいいいち……く……ん」

小動物のように震えている史絵に、圭一は自分の学ランの上着を脱ぐと、史絵に掛けて……

そのままバタリと、前のめりに倒れた。

「圭くん!!圭くうん!!!」

「う……(う)は……?」

圭一が目を覚ますと、病室だった。起き上がるうとすると、史絵が押し留める。

「まだ駄目?……」

「っ、つう……」

激痛に顔を顰める圭一。周囲を見回すと、寛太や優花、慎に直哉、電や卯月、薄雲までいる。

「あの、師匠……途中までしか覚えてないんですけど……?」

直哉の方を見ると、腕を組んだまま大きな溜め息を吐いて答える。「慎くんが体育館倉庫に着いた時に、大量出血で呼吸が弱まってショック症状を起こしている圭一を発見したそうだよ。直ぐに救急車で搬送されて、頭の緊急手術で一命は取り留めたよ。右拳も亀裂骨折だよ。どんな力で殴ったらあなるのか、訊きたいものだね。当然ながら、君がやつつけた不良共も全員仲良く病院送りだ。全く……『危ないことをしてはいけないよ』と、いつも言っているだろう。どうして宮戸島の名誉隊長は、二代続いてこう無茶なことばかりするんだ?」

直哉は、苦々しい顔をしてそう言うてから、笑みを浮かべる。

「ただ、『男としては』よくやった。草加さんはレイプされかけてたそうだからね?」

「グツジョブなのです。いつその事、キンタマを踏み潰せば良かったのです」

「女の子に手を出す男は最低だぴよん」

「全くです」

その言葉に、艦娘達も同調する。

「圭一くん。『圭一くんが死んじゃうかも』って、慎が取り乱した時はどうなるか、と思ったよ」

「けーちゃん、危ないことはだめだよお?」

「寿命が縮まったよ、圭一のせいだ」

同級生達は、圭一に心配という名の叱責を送る。

「す、すみません……」

圭一は、そんな周囲に謝ることしか出来なかった。

「数日間入院だ。後その期間、出席停止処分になった。どうも、草加さんは圭一くんとお話がしたいそうだから、邪魔者は御暇させてもらうよ?」

その直哉の言葉を合図に、皆そろそろと病室を出て行く。

最後に電が、「ごゆっくりなのです」とボタンと扉を閉めると、二人つきりになる。

「圭一くん……その……ごめんなさい……」

泣きそうな史絵の眼鏡を、圭一はそっと取った。

瓶底眼鏡のない史絵の顔は、とても可愛いものだった。

「か、可愛い……」

「えっ……?」

史絵の顔は、みるみるうちに真っ赤になる。それを見て圭一の顔も赤くなる。

「その、先輩。……俺、先輩のオツパイとか見ちまったし、責任取って……その、付き合ってくんないか?」

「えっ……責任は……感じなくても……」

「いや、違う!俺は先輩がいいんだ。可愛い先輩が!」

「……はいっ、喜んで……っ」

そして、夕日に照らされた二人の影が重なった。

ソファアーに二人並んで、史絵に勉強を教えてもらおう圭一の姿を見て、直哉と電はお互いを見て肩を竦めて笑う。

「純愛カップルだな」

「なのです」

「圭一くん、ここは、こうして……」

「ふむふむ、なるほど。さすが史絵先輩」

二人は、仲睦まじく勉強をしている。

因みに、中学の番長のヤンキーどころか高校の裏番までノシてしまった圭一は、中学の新しい番長として勇名を馳せてしまった。

今回の一件に関わったヤンキー達はもちろんの事、他の不良からも一目も二目も置かれる存在になってしまったのだ。

当然ながら、圭一もヤンキー達も、学校からの処分の対象になった。圭一は入院中の出席停止、ヤンキー達や不良高校生は停学に加え、少年鑑別所送りとなった。

ギャル達も出席停止となったが、それ以上に圭一の恐ろしさを目の当たりにして、学校に『行けなく』なってしまった。

こうして、史絵をいじめる者もいなくなってしまう、クラスにも平和が訪れたのだ。

そんな中、慎は自業自得とは言え、不登校になってしまったギャル達を不憫に思い、学校からの配布物を届ける役を後輩ながら買って出ている。

いつしか、本来のマイペースな優しさがギャル達の心を惹いてしまい、横澤望、平岩奈緒子、田中櫻子と言う三人のギャル達の彼氏となっていた。

こうしてお騒がせトリオは、《番長と愉快的仲間達》に格上げとなった。

ゴールデンウィーク突入前には、学校にも出られるようになって、慎と圭一の仲介でギャルズと史絵の間で、謝罪と関係修復が行われた。

こうして宮戸島の、濃厚なドタバタが詰まった四月が過ぎて行った。

ゴールデンウィークは、皆で東京に泊り掛けで遊びに行くことになった。

東京での世話役は、湊子を買って出てくれた。

ゴールデンウィーク初日、番長と愉快的仲間達は仙台までやって来ていた。

お騒がせトリオは、服を買いに行く彼女、ズの荷物持ちとして、だ。

「全く。女ども達で仲良くなりやがって」

「いいじゃん。こうやって、皆彼女出来た訳だし」

「俺なんか、三人もいて大変だよ。師匠の大きさがよく分かるよ」
キヤイキヤイと服を選んでる彼女。ズを眺めながら、お騒がせト
リオはシヨツピングセンターのベンチで佇んでいた。

番長と愉快な仲間たちの東京旅行記①

ゴールデンウィーク二日目。

番長と仲間達 with 優花は、電車で仙台駅に向かっていた。

「仙台駅で集合だったっけか？」

一応、皆よそ行きの格好で遊びに行く気満々である。

優花は、昨日のお買い物で買った可愛い服に、麦わら帽子といった格好である。

「そうそう。優花ちゃんの服、可愛いね」

「そう？ありがとお。仙台駅で、先輩達と合流するんだよお？」

寛太が服を褒めると、ちよつと気の抜けた口調で笑みを浮かべる優花。

慎は、ジャケットパンツスタイルにハットの大人びたスタイルで、これは彼女達の選んでくれた服である。

「しっかし、慎はよくもまあ彼女を三人も作ったな？」

圭一が詭うように言うのと、慎はハハツと笑う。

その為、優花が代わりにほんわかと答える。

「あのね、同時に慎くんのことを好きになったみたいでえ、取り合いの喧嘩に発展しそうになったんだってえ。それで、話し合いの結果三人でシェアすることになったんだよお？」

「私のごとで争わないで、って奴か？」

圭一が感慨深く言うのと、慎は「まあね」と答える。

電車が仙台駅に到着すると、四人は改札口を出る。

「「慎くんー！」」

「圭くん……おはようございます」

ザ・ギャルといった格好の望・奈緒子・櫻子の三人に、清楚なワンピースといった出で立ちの史絵が、改札口前で待っていた。

眼鏡もこの日の為に新調し、地味子から可愛い地味子にランクアップしている。

「お、おう………」

地味な彼女の変貌っぷりに驚いている圭一に、ギャルズが早速詭

う。

「番長驚いてる?」

「驚いてる感じ?」

「番長マジ顔真っ赤」

「うっさい!」

ギャル達に毒づく圭一のそんな反応に、史絵は、

「あの……似合ってますか……?」

と、心配そうに問い掛ける。

「いや、超似合ってる……凄く可愛い」

「あっ……有難うございます……」

そこで、二人の空間ができ上がりそうになるのを、慎が止める。

「はいはい、新幹線の時間だよ。今日はなんと、師匠から新幹線代を出してもらったんだ」

全員分の新幹線の切符をそれぞれに配る。今日の旅の幹事役でもある。

『おー』

「そこまで……良いんですか?」

感嘆の声を漏らす一同の中、史絵だけは恐縮している。

「フミちゃん、貰えるものはビョーキ以外貰つときなよ」

「……はいっ」

関係が修好化した望が、史絵の背中をぽんと叩くと史絵も頷く。

こうして、一同は一路東京に向かった。

東京駅の改札口を出ると、人でごった返す東京駅の圧倒的な人波に、一同驚きを隠せない。

「すごいな、東京」

「……はい」

圭一の言葉に、史絵が頷く。

そんな中、女性の声が聞こえる。

「あー、君達直哉んところの弟子だよな?」

皆が声の方に顔を向けると、大きなワンボックスカーから降りて来

た優衣が声を掛ける。

「はい、師匠の双子のお姉さんの優衣さんですね？宜しくお願ひします」

幹事役の慎が代表して頭を下げると、ニカツと笑う優衣。

「うん、三友優衣。今日は、湊ちゃんから頼まれて送り迎え役を仰せつかったのよ。宜しくね」

『はいっ』

一同が車に乗り込むと、優衣が六本木のセレブヒルズに向けて車を走らせる。

セレブヒルズの駐車場に入って行くと、一同にざわめきが起こる。

「ここ、セレブヒルズじゃん？」

「そうだよ？」

望の言葉に、優衣はさも当たり前のように答える。

駐車場を降りると、フロントコンシェルジュのいるエントランスルームを抜け、

一同はエレベーターを使って、部屋まで向かう。

皆、物珍しそうに周囲を見ながら優衣の後に従って行く。

そしてとある部屋の前に到着すると、扉が開かれて湊子が顔を覗かせる。

「そ……湊子さま!？」

史絵が目を白黒させる。国民誰もが知る超有名人である。

さすがのギャル達も、目を白黒させている。

「もう、無位無官の民間人ですよ。初めまして、高菜湊子と申します。どうぞ上がってください」

『はい』

「それじゃあ、皆またね」

優衣とはここで別れて、一同はぞろぞろと上がり込む。

「^{わたくし}私の夫……つまり直哉の兄さんは長期出張中ですので、私が皆さんのお世話役として、面倒を見させてもらいますね」

「はい、有難うございます」

慎が代表して、お礼を言う。

「お部屋は、こちらと、こちらと、こちらを使ってください。お布団は用意してあります」

客間を三部屋案内する。

どの部屋も10畳以上で、かなり広い部屋である。

元々、来客用の客間として使っていたので、そこを使ってもらう形になる。

来客用バスルーム・トイレも完備している、超豪華レジデンスである。

「それじゃあ、カップルずつ使えば良いんじゃない？」

「いいね！私等慎と一緒に寝たい」

「うん」

「私も寛太くんと一緒に寝るよお？」

「えっ、あの……その……」

望の提案に同調するギャルズ&優花に、顔を赤らめて動揺する史絵。

「ほら、今日勝負を決めるんでしょ？」

「……うん」

そう望が耳打ちすると、史絵も顔を赤らめて頷く。

そんな女子達の事も知らないで、男三人はバルコニーから東京の眺めを満喫していた。

そんな皆を見ながら、湊子は楽しそうに口元に手を当てて笑っている。

夕飯までは、その客間で皆で明日行く場所の、遊園地での予定を皆で相談していると、

コンコンとノックの後、湊子が入って来る。

「お夕飯ですよー」

との湊子の言葉で、皆そろそろリビングにやって来る。

リビングは40畳くらいの広さで、ソファやダイニングテーブルが置いてあり、

壁掛けの超大型テレビが設置してあったりしている。

ギャルズも、借りて来た猫状態である。

「すごい、お金持ちの家だ……」

「だね」

「さすがは元皇族の旦那で、日本一の企業のCEOの家……」

お騒がせトリオが、それぞれ感想を漏らす。

ダイニングテーブルには、お寿司桶やオードブルなどが並んでいる。

「取り敢えず、オードブルとお寿司を出前してもらいました。足りなかつたら言ってくださいね?」

『ひゃいつ!』

皆、借りて来た猫である。

とは言え、食事が始まる頃には打ち解けて来て、ギャル達も猫の毛皮が行方不明になる。

そして、望の超失礼な質問である。

「湊子さまは、夫婦の営みとかあるの?」

「うふふ、無論、ありますとも。夫婦なのですから」

こんなことにも、丁寧に答えてくれる。

「直樹さんはとても多忙な方で、家にいられる時間も限られていますから、私わたくしにとって夫婦の時間と言うのは、エメラルドよりも貴重なものですね」

そう言いながら、直樹との惚気話を聞かせてくれる。

そんな惚気話を聞きながら、ギャルズ達は際どい質問まで投げ掛ける。

「こちら、さすがにそれは失礼じゃないかな?」

慎が窘めるも、湊子は楽しそうに答えてくれる。

優花は何時も通りの天然で、お食事を寛太と仲睦まじく食べているし、

その際どい質問で顔が真っ赤なのは、圭一と史絵である。

恋愛に関しては本当に初心者で、まだキスすら覚束無いのだ。

「ところで、皆さんはどこまで進んでらっしゃるのですか?」

と、湊子からのキラーパスが飛んで来る。

「どっ、どこまで……!?!」

「あのっ……キ……キスもまだ……」

これは、番長カップルの答えである。

「キスはしたよね?」

「そうだねえ? 入学式の時に皆見てる前でちゅーしたよねえ? あとはあ……」

「これ以上いけない」

余計なことを答えそうになる優花を、寛太が止める。

とは言え、初体験はまだ済ませていない。

まだ触り合いくらいなのだ。

愛と健太の影響で、それでも進んでいる方なのだ。

「四人でしたよね?」

「チョー激しかった」

「だね」

「ここら。わざわざ皆の前で言わなくても。君達は容赦なく襲って来るから、いつもヘトヘトだよ」

開けっ広げに、もう既にエッチまでしていることを言うギャルズに、肩を竦めて苦笑いを浮かべる慎。

そんな回答に、更に顔を真っ赤にする番長カップル。

「あらあら、最近の中学生は積極的なんですね。でも避妊はするんですよっ。」

口元に手を当てながら諭すように言うと、

『はーいー!』

と答える、ギャルズと優花。

史絵は、顔が真っ赤で気絶寸前である。

「女共は風呂なげえな」

「だね」

「まあ、お風呂の中でガールズトークでもしてんじやね?」

お騒がせトリオは、携帯ゲームの対戦プレイをしながら、お風呂に行った女子達を待っている。

「お待ちせえ」

扉を開けて入ってきた女子は、バスローブに身を包んでいる。

「何？バスローブまで買った訳？」

「そうだよお？」

「ほら、お泊りだからバスローブは必須っしょ？」

「だね」

「うん」

「……あ、あのっ……」

慎が肩を竦めながら問うと優花が答え、さも当然のように言うギヤルズに、顔を赤くしている史絵。

「それじゃあ今日は解散だね。行くよ、優花ちゃん」

「うん、それじゃおやすみい？」

優花の手を引いて、部屋を出て行く寛太。

出ていく間際、史絵にウインクする。

「それじゃあ、僕達も部屋に戻るか？三人共今から言っておくけど、あんまりうるさくしないようにね？」

「大丈夫。何か、防音壁が付いてるんだって」

「湊子さまが言ってた。ピアノとかも出来るんだって」

「だ・か・ら」

「はいはい。明日もあるんだから、夜更かしし過ぎないようにするか
らね」

慎が一番先に出て行って桜子、奈緒子が出て行くと、望が振り向い
た。

「フミちゃん、頑張ってるね？」

「は……はい……」

顔を真っ赤にしながら答える史絵に、満足そうな笑みを浮かべて出
ていく望。

「……お、俺達も寝るか？」

「あ……あのっ……」

意を決して、バサツとバスローブを落とした史絵。

黒いレースの大人な下着である。

「ふ……史絵先輩!」

「圭」……キス……して下さい」

「あ……ああ……」

圭一は史絵を抱き寄せ、唇を重ねた。

『んっ……』

永遠にも感じるくらいの、キスをしてから離れる。

お互いのファースト・キスだ。

顔を真つ赤にしている二人だが、意を決して圭一を布団に押し倒す史絵。

「おい、先輩……」

「大好きです……圭一」

そのまま、二人は抱き締め合った……

「おはようございます。よく眠れましたか?」

「あの後、すぐグツスリだったよお?」

「優花ちゃん、布団に入ったらコロンと寝てたね」

「元気いっぱいのお花ちゃんに寛太。」

普通に、そのまま手を繋ぎ合って寝てたらしい。

「一徹だね!」

「うん」

「だね」

「一徹だね!じゃねえよ……」

開けっ広げに答えるギャルズに、大きな溜め息を吐く慎。
何があったかは、お察しである。

「あっ……あのっ……」

「……」

顔を真つ赤にする二人だが、史絵が小さい声で言う。

「が……頑張りました……」

「おー、えらいえらい」

史絵が真つ赤になって告白すると、頭を撫でる望。

「とっ、とにかくだ！今日は遊園地に行くからな、目一杯遊ぶぞ！」
顔を真っ赤にしたままの番長が、話題を逸らそうと宣言すると、

『おー！』

皆が元気良く答える。

そんな、三者三様のカップルを見ながら、湊子は楽しそうに笑うの
だった。

番長と愉快な仲間たちの東京旅行記②

一同が朝食を食べ終わると、優衣が再びやって来た。今日もゆつたりとした服に、帽子を被っている。

「おいつすー!」

『おはようございますー!』

朝食は、湊子お手製のシンプルなモーニングである。

皇族から専業主婦となった湊子は、最初から花嫁修業をしている為、お料理も得意なのだ。

「今日も外に出れない湊子に代わって、この三友優衣が皆さんのエスコート役を務めるからね」

「私が外に出る時は警備を手配しないといけませんし、皆さんの迷惑にもなりますので、今回はご遠慮させていただきませぬ?」

サムズアップしてみせる優衣に、口元に手を当てて笑う湊子。

慎が、昨日言おうとしたことをふと思いついて口にする。

「そういえば、三友商事の新社長の龍太郎さんって、優衣さんの旦那さんなんですよね?」

「そうそう。お義父さんが楽隠居しちやっただから、三高HDの副社長兼任だね」

そんな慎と優衣の会話に、ギャルズも加わって来る。

「マジで?あのイケメン社長って19とかじゃなかった?優衣さんいくつ?」

「39ですが、何か?」

「アラフォーに見えないし!」

「だね」

遠慮なく年齢を聞く望に、普通に答える優衣。

そして、年より若く見える、と褒めちぎっておく奈緒子に櫻子。

「いやいや、おばちゃんを煽っても何も出ないよ?」

「煽ってないですよ。十分若く見えます」

「ありがと」

慎の言葉に素直に礼を言うと、

「それじゃあ、幹事さん。今日はどこに連れて行ったら良いんで？」

「今日は、三高ワンダーランドに行きたいと思います。最新鋭の大型遊園地で、お台場鎮守府の近くでスパもある総合リゾートですし」

「あ、三高ワンダーランドなら特別パスあるし。皆快適に過ごせるんじゃないかな？」

さすがは、三高ホールディングス総帥の妹である。

三高ワンダーランドとは、元々三友グループで計画・建設していた総合リゾートを、高菜直樹自らデザインしてリファインさせ、ゴールデンウィークに合わせてオープンさせた、総合型リゾート施設である。

千葉の某リゾートや、大阪の某テーマパークに並ぶ三大リゾートとして誕生した、お台場の新名所なのだ。

その為に大規模な埋め立てを行い、敷地面積を広げ、お台場鎮守府を移転させてまで誕生させた、高菜直樹CEO肝煎りの一大プロジェクトの結晶なのだ。

鎮守府とも提携を結んで、時折艦娘と触れ合うことの出来る、人と艦娘の融合の地でもある。

海沿いのテーマパークということで、鎮守府からの警備も強化され、基地航空隊も配備されており、今日日本で一番安全な海、東京湾と呼ばれている。

余談だが、室戸鎮守府の基地航空隊が後回しにされた《遠因》でもある。

「それじゃあ、三高ワンダーランドの社長に電話しながら向かいますかね？」

『おー！』

慌しく従業員が準備している、ワンダーランド構内。

まだオープン前である。

裏口の地下駐車場に車を停めると、裏口から事務所を通って中に入る。

入り口では大勢の人達が並んでいる中、オープン前に真っ先に入る

ことが出来たのだ。

皆の胸元には、特別優先パスが提げられている。

本来有料の、優先パス使い放題のスペシャル特典である。

本来は遊園地のアトラクションの提供企業に配布されるものだが、特別に頂いたのだ。

そんな訳で、何組か入っているお客さんは、提供企業のお偉方のご家族、という訳だ。

「という訳で、一番最初のアトラクションは、真っ先に行けるけど、どうする?」

優衣がパンフレットを開きながら、従業員が鋭意準備中の構内を歩き始める。

皆も、あとから従って来る。

キヤイキヤイ言いながら、四人でパンフレットを見ながら従って来るギャルズと慎に、

周囲も憚らずに腕を組んでいる天然ちゃんの優花に、羞恥心は入学式で捨て去った寛太。

そして、顔を赤らめて手を繋いでいる番長カップル。実に初々しい。

「まずは早速、ジェットコースターっしょ!?!」

「それな!」

「だね!」

「ジェットコースター楽しいよねえ?」

ギャルズの提案に、優花が賛同する。

「ジェットコースターも色々あるんだけど、お勧めはメテオストライクサンダーボルトかな?」

優衣が、天高く聳え立つ構造物を指差す。

日本一の高低差・速度を誇る、超絶叫ハイスピードジェットコースターである。

海まで張り出したそのジェットコースターは、総距離も日本一を指して作られ、最新の技術をふんだんに盛り込み、AR拡張現実エリアもあり、宇宙にまで飛び出す感覚を味わう事もできる、と言うコースターであ

る。

「それにしよう！」

「それいいな！」

「だね」

男子達が優衣の提案に乗つると、一同メテオストライクサンダーボルトに向かう。

ワンダーランド中心地から出発し、構内をグルッと回って、ARエリアに突入、帰って来るルートなのだ。

オープン時間まで待っていると、オープンと同時に押し寄せる人の波を、スタート地点に待機している一同は上から見下ろす形になる。

「うわ、すげえ人だな」

番長^{圭一}が驚きの声を漏らす。

「そりゃあゴールデンウィークで、オープン数日の新遊園地だからでしょう？」

慎が番長に言う。

優衣はコースターの反対側、つまり出口に移動すると、

「行つといで。私はさあ、ちよつとパスく。妊婦だからさあ」

そう笑顔を向ける。

「そんな時にすみません」

史絵が申し訳なさそうにすると、

「気にすんない、君達は遊ぶのに専念すること。せつかくの特権濫用なんだから」

そう言うと、史絵にも笑顔が戻った。

そしてじゃん負けで、史絵と圭一が先頭になった。

提供特権で事前入場している人達や、一番最初にたどり着けた人達^が乗り込むと、コースターがガタンガタン……と上がって行く。

「ね、ねえ……高過ぎない？」

「お……おう……」

途中から、史絵の顔色がだんだん青くなって行く。

周囲を見渡すと、どんどん地面が遠くなって行く。

ここが第一の地獄、超高低差である。

そして頂点が見えると、降りたところでガタン、と停止する。
先頭は、垂直落下状態での一旦停止である。

「ひっ」

史絵が、小さく悲鳴を上げる。

そしてコースターは、超スピードで急降下して行く。

「ぎゃあああああああああああ!!!」

「うわあああああああああ!!!」

史絵が、今までにない大きな声で大絶叫を上げた。

そして圭一も、ギョツと二人手を握り合つての大絶叫である。

「「あっはっはっはっは!!!」」

「っ……………くくっ!!!」

ギャルズ達は、今まで聞いたことのない大音量での史絵の絶叫に、大爆笑している。横では、慎が笑いを堪えている。

「わああ〜い!」

「おわあっ!」

寛太と優花は、それなりに楽しんでる。

上下左右とブンブン振り回され、海面ストレスレに走って行く。

遠くで演習中の艦娘達も、手を振っている。

「ぎゃあああああああ!!!」

史絵は大絶叫である。!!!

そのまま、コースターは速度を落としながらARエリアに突入する。

ここからはコースターは微速だが、風のお蔭でぐんぐん加速しているように感じる。

そのままコースターの映像は、大気圏を突破して宇宙に登って行く。

サンダーボルトの名の通り、雷がピシャーんピシャーんとコースターに襲い掛かって、風と音響のお蔭で一瞬ふわつとなった瞬間、隕石がコースターにぶつかる演出が為され、一気に急落下する演出と、大気圏突入の温風で絶叫が響き渡る。

「ぎゃあああああああああ!!!」

史絵は、再び大絶叫をしている。
圭一が、痛いくらい手をぎゅうっと握り締めている。
そして、ARとの切れ目で再び加速したコースターは、最後のループを迎えてスタート地点に戻って来る。

「あっはっは、大丈夫？これ、制作にかなりの費用を投入した自信作らしいけど？」

優衣が、大笑いでお出迎えする。

史絵は、完全に腰を抜かしてしまっていた。

圭一がお姫様抱っこで抱き抱えて、近くのベンチに座らせる。

「フミちゃんマジうける」

「それな」

「だね」

まだ笑ってるギャルズに、涙目で抗議する史絵。

「ジェットコースターなんて、初めて乗ったんですもん……こんなに速い、だなんて思わなくて……」

「そうだぞ。史絵は絶叫マシーン苦手なのが、何か問題か？」

そこへ番長も史絵を庇うように言うと、史絵も漸く立てるようになって、後ろから抱き付く。

「圭一、ありがとう……」

「お、おう……」

照れまくっている圭一を、暖かく見守る愉快的仲間達。

降りて来ると、構内は人ばかりである。

お上りさんたちにとっては、おどろ木ももの木さんしよの木である。

「それで、次どこに行く？」

エスコート&ガイド役の優衣は、そんな一同に振り向いて問い掛ける。

「お化け屋敷行きましょう。怨霊ハウス」

次にどこに行くか考えようとすると、史絵が主張する。

「よっしやー！皆行くぞー！」

優先パスを使って、怨霊ハウスに次々入って行く。
今度は、ギャルズ達の悲鳴が響く。

この怨霊ハウスも最新鋭のAR・VR仮想現実技術を惜しげもなく盛り込んだ、最新テクノロジーの結晶である。

技術監修に、明石が参加していることは、関係者のみを知る事実である。

「きゃあああああああ!!」

慎にギュツと抱き付く。三人で。

「ちよつとー密着し過ぎー!」

慎は、左右後ろにギャルズにくっ付かれた状態で進む羽目になった。

そして優花は、あまりのマイペースと天然が過ぎて、

出て来た幽霊に、

「こんにちはあ?」

って、挨拶するくらいホラー耐性がある。

「ひえええっ!?!」

こっちは逆に、寛太が優花に抱き付いて怖がっている。

さて、番長カップルだが、史絵の狙い通り、

「きゃッ!」

と、お化けが出る都度、圭一に抱き付く。

史絵の、大きい目の胸がむにゅと当たるとたんびに、顔を真っ赤にする圭一。

「だ、大丈夫だからな」

史絵を勇気づけようとする圭一だが、実は史絵はホラー大好きなのだ。

本当は怖いのは少しだが、大袈裟に怖がって、わざと圭一に抱き付いている。

優衣はホラー苦手なので、またまた敵前逃亡している。

三組三様の楽しみ方をしながら、怨霊ハウスを抜ける。

「いやあ、怖かったな」

「う、うん……」

「ちびりそうだった」

「…だね」

爽快な顔をしている慎に、まだ恐怖が抜け切っていないギャルズ。

「楽しかったねえ？」

「うん」

二人共満足している、寛太と優花。

「怖かったです……」

「む、胸が……」

まだ圭一に抱きついていてる史絵に、顔が真っ赤の圭一。

「あっはっは。皆楽しそうだねえ？」

大笑いしているのは、敵前逃亡した優衣。

「さあ、ちよつと早いけどお昼にするべ」

皆で優衣プロデュースのイタリアンレストランで——ここは株主・

提供先専用レストランである——美味しい食事に舌鼓を打ってから、

ここからは、カップルで別行動にしよう、と言う提案で、皆それぞ

れ散らばって行く。

「圭一、観覧車乗りましょう？」

「おう、そうだな」

二人腕を組んで、観覧車に向かって行く……

観覧車に乗り込むと、ゆっくり回って行く。

東京の海の景色が一望できる観覧車、

観覧車の中はふたりだけである。

「圭一……」

「ん？」

「私、圭一に会えて幸せです……」

そつと寄り添うと、頬に長い間キスをする史絵。

「……………ダイスキです」

そう耳元で囁く史絵に、圭一は理性が崩壊した。

抱き寄せると、濃厚なキスを今度は唇同士で行う。

「んう……」

「んうっ…」

唇が離れると、再び寄り添い合って東京の景色を眺める二人だった。

そして、圭一と史絵は仲良く、大人しめのアトラクションをのんびりと楽しむのだった。

夕方、それぞれのカップルズとお一人様優衣が思い思いに満喫したところで、スパに移動する。

野郎三人がサウナでガマン大会をしている間、女子達は並んでお風呂に浸かっている。

「ふいー、生き返るわぁ」

優衣が足を伸ばして入ると、望が優衣の身体を覗き込む。

「優衣さんて、ちよープロポーションいい感じ?」

「うん」

「私も欲しいなあ、もっと……」

その言葉に、奈緒子と櫻子も続く。

因みに胸部は、史絵・望・奈緒子・櫻子で、大・中・中の下・小である。

「もうすぐ40代だからね、いろいろ気を使ってるんだよ。40になるといろいろ崩れるからね?」

「そういえば妊婦だけど、ここまで綺麗な人、なかなかいないよ?」

「あはっ、ありがと。高齢出産だから大丈夫かなあ? って心配になるけどね?」

望の疑問に、優衣があははつと笑う。

「30代半ばでも高齢出産になりますからね……」

史絵が、しみじみと言うと優衣が、

「そうなんだよね。特に、あたし初産だから大変よ。だからアトラクションは遠慮したんだけどね?」

「良い赤ちゃんが生まれると良いねえ?」

「ほやーんとしている優花が、結衣の下腹部をナデナデすると、優衣はあははつと笑う。」

それからは、それぞれのカップルのデート報告会に移る。

ギャルズ達は、とにかくアトラクションに乗り捲ってボルタリングもやって、パルクールエリアで汗も流して、アクティブに過ごしていた。

一番、優先パスを使い捲ったのが、この四人である。

「とにかく、慎君運動神経いいから、楽しかったよね？」

「うん、かっこよかった」

「惚れ直したね」

優花と寛太は、寛太の希望で艦娘ショーを観ていた。

そして、艦娘体験ARライドや、VR系の乗り物に乗っていた。

個々のテーマの一つが、艦娘との共存なのだ。

「大迫力で艦娘達が躍動して面白かったよお？」

そして、史絵が観覧車でキスをしたことを報告すると、

報告会は盛り上がり、今度はどんなキスをするかをギャルズ達がけしかけて、史絵は顔が真っ赤になっていた。

「ど、どんなキスって……その……恥ずかしい……」

その間も、野郎共はサウナでガマン大会をしている。

翌日は宮戸島に帰る。

番長と愉快的仲間達は、初の東京旅行を充実したものとして過ごして行った。

余談だが、室戸からの帰り途中の直哉ご一行様も、家族特権で同じ方法で遊び捲っているのを、番長と愉快的仲間達は知らない。

岩沼鎮守府の騒動

『先生え、お金貸してください』

「はあ？」

愛弟子である、笹野 愛特任三佐から電話が来たのが、五月中旬である。

「何だつて、そんな事になったんだ……？」

『話せば涙、聞けば涙の物語なんです、花梨さんの恋が実りまして、お相手は土佐鎮守府の郷里三佐でして……』

「郷里三佐か、意外だねえ。この間はゆっくり話はできなかったけど、前にも話したとおり、私は彼のことを知っていてね。防大の三つ後輩で、猛獣男と云う異名で有名だったからねえ」

『どうも、花梨さんはファザコン気質があったようで。父性が強い郷里三佐に惚れてしまって。真正面から叱ってくれた相手に陥落、と』
「やはり、羽佐間一佐への態度は、ファザコンの裏返しだったのか。しかしそうになると、生きているうちの1佐との和解は難しそう……或いは不可能だねえ」

今日も哨戒をサボっている電が、紅茶を淹れてそこにブランデーを多めに入れて、直哉の前に差し出す。

「お茶なのです」

「ああ、ありがとう」

『ですよね……それで、事の顛末が書かれた顛末書を提出されたんですけど……今そちらに送りましたけど……』

FAXが音を立てて動き出し、紙を印刷する。

電が、内容に目を通す。

「どれどれ……う？飲酒の勢いで小官を好きだと告白され、その後羽佐間三尉が自分が庶子だと涙ながらに語り、仕方なしに父親の家に転がり込んだものの、父親の女性への態度は変わらず、生んでもらった恩はあるが感じたくないし、育ててもらった恩はない、と言いつつ恩を父親への反感から笹野三佐が失敗して、自分も戦死することを望んでいると言った為、叱責した結果三尉を泣かせてしまった。その後宥め

たあと、三尉の望みでホテルに入り……』ちよつと、これ以上は口に出して読めないのです」

そう言つて、FAXを渡す。直哉も目を通すと、内容に溜め息を吐いた。

「ああ、もしもし。それで、朝まで計十数回戦して……」

『先生、それ以上はいけない』

要約して読み上げようとするのを、愛が止める。

「面白そうだから、羽佐間一佐のコメントでも求めようかね？」

『それで面白がつてたら、花梨さんが泣いてしまつて。宥める為に《回転しない》寿司屋に連れて行つたら、ウニトロ赤貝等と高いのばかり食べられまして……領収書で六桁とか、初めて見ましたよ』

「なるほど……昇進祝いで10万ほど送るから、それで何とか食い繋いでくれ」

『有難うございます。ところで、一つ気懸かりなことがあります……その羽佐間一佐のことなんですけど。ストップパー役がいなくて大丈夫なんですか？』

直哉は、愛の質問に大きな溜め息を吐いた。

「大丈夫じゃなかったさ。先日も、ちよつとした大騒動があつてね……」

数日前の事だった。

慎の彼女である、ギャルズが揃つてやつて来たのは。

「高菜せんせー。ちよつと相談があるんですけどお？」

「電ちゃん。最近夜の性生活どう？」

「激しい感じ？」

ツツコミ不在の恐怖である。入ってくるなり、どっかりソファに座り込んで、相談があると切り出す。

一応、彼女達にも入構許可証を与えてるのだが、あまり礼儀がよろしくない。

「ふむ……相談ねえ……」

直哉は、奈緒子と櫻子を表面上無視して、対面のソファに座り直す。

とうとう応接室を廃止して、壁をぶち抜いて広い執務室にしてしまったのだ。

番長と愉快的な仲間達が、勉強や遊びに来る為にこうなったのだが、慎なして相談に来るとは、珍しいことである。

そして電は、奈緒子と櫻子に対し、

「そりやあもう、毎日激しくやってるのです」

と、平然と答える。

「まあそれは、後ほど女子同士でゆっくり話してくれ。それで相談つてのは？」

「あたしの二個上のパイセンなんだけどお。子供を孕まされちゃって……」

望が真面目な顔をして答えると——口調は真面目に見えないが——直哉も真面目な顔になる。

「そりやあ、君等の先輩だったら遊び捲ってるんだろうから。でも、君達もそうだけど、きちんと避妊してるよね？」

「当たり前じゃん。だって傷つくのは女の子の方だよ。慎くんもだつてちゃんとゴム付けて、ピルも飲んで、子供だけは出来ないようにしてるもん」

「いや……そういう問題では……まあ良いか」

望の主張は、何かズレてる気がするが、直哉は敢えてツツコまないことにした。

「それで、私のところに相談に来たってことは、自衛隊の隊員か……」
「そうなの。岩沼鎮守府のハザマっておじさんなんだけど、ナンパされて、食事に行つて、そしたらホテルに、つてことになるじゃん？」
「少なくとも、中高生が言うセリフじゃないことは、よく判つたよ」
とうとう、頭に頭痛鉢巻を巻いた直哉は、こめかみを押さえながらツツコんだ。

そんな時に、ボタンと扉を開けて圭一と史絵が入つて来た。圭一は激怒である。

「おい、師匠よお」

「あの……圭一……落ち着いて……」

「どうしたんだ？ちよつと今、慎ガールズの相談を聞いてるから後に……」

「こつちも緊急の用件なんだよ！自衛隊のハザマっておっさんが、史絵を強引に口説こうとしやがったんだ！」

「……圭一、私は怒ってないし、圭一が助けてくれたからもう……」

「良くねえよ！おれが助けに入った途端『なんだ彼氏がいるのか？この坊主に飽きたら連絡を』って、連絡先渡して来やがったんだ！」

その圭一の憤怒に、ギャルズ達も直哉も電も固まった。

「普通中学生なんか、いいおっさんがナンパするか？ちよつと九ミリ拳銃貸してくれ、そいつぶつ殺してくる」

「良いわけ無いだろ、アホか？」

「そうです。圭一も、いい加減に落ち着きなさい」

呆れた顔をする直哉と、少し怒った顔の史絵が諫めると、圭一も大人しくなる。

「……で、話を整理すると、のんちゃん^望の先輩がハザマと云うおっさんに子供を孕まされて、フミちゃんがハザマという男にナンパされた、と……」

そして、再び扉が開かれた。大石家の二人である。

「はいはい。ちよつと今、多忙なんで後に……」

「高菜二佐、聞いてください。泰子が不倫をやらかしてしまって……ああ、離婚とかはほしらないで。僕はそれでも泰子を愛してるんだ。ただ、その相手に苦情を言いたくて」

「ごめんなさい……実は仙台の方で高校の友達と食事に行ったら、自衛隊のハザマって方に、ナンパされて……二人共ホテルに……あ、友達の方は独身なんですけど、私は夫がいますと言ったんですが……上手く乗せられてしまって……ごめんなさい」

泰子さんは憔悴しきっているが、勉さんはその泰子さんを支えるように抱いている。

「またハザマなのですか？」

「はあ……取り敢えず、どっか空いてるテーブルの椅子に座ってください」

圭一と史絵、それに大石夫妻を、勉強用テーブルの椅子に座らせる。「次はないだろうねえ？」

そしてその言葉の直後、笹野麻衣がやって来た時に、直哉は応接テーブルに突っ伏した。

「……で、笹野先生の所の看護師が、仙台で自衛隊のハザマと云う人にナンパに遇ったと。それで、避妊もせずに10回戦ほどして、モーニングアフターピルを処方したと」

「はい、ちよつと酷くありません？外について言ったのに、全部中に……いや、抑々医療者として、避妊くらいしつかりなさい、ときつく叱ったのですが」

笹野先生は、頭痛鉢巻でこめかみに手を当てつつの説明である。

直哉もげつそりしている。

来客の度にお茶を出す電も、もう次はないだろう、と口にする。

そしてやって来たのは、はぴはぴほえほえ娘の優花と寛太と慎である。

番長と愉快的仲間達が総結集してしまった。

「……で、優花ちゃんのお姉さんの紗花さやかさんが、自衛隊のハザマって人にナンパされてお付き合いを始めた、と」

「そうなのお。お姉ちゃん、そのハザマって人に他に女の人もいるの知ってて付き合ってるから、良いんだけどお」

「僕達が心配になって、ここに来たんです」

「ちよつと、そのハザマって人、まともじゃねえよ」

優花の姉に彼氏ができたという話に寛太が不安を覚えて、優花を連れてここに来たのだ。慎はついでにここに従って来た。

「マジで、慎もハザマ騒動に関わってたんだ。マジウケる」

望がケラケラ笑うと、慎が頭を抱える。

「まさかとは思うけど、望に奈緒子に櫻子は、ハザマとか言うおじさんと、ホテルに行ったりしてないだろうね？」

「待って!!心外だよ!!確かに今まではビッチだったし、ナンパもされただけどき。今は、慎のアレ以外満足できない身体にされちゃってえ、断ったよ!!」

「それな」

「うん」

「いや、そんな事は聞いてねえよ。恥ずかしいから、そう言うことを公衆の面前で言うな。つてか、ナンパされたんかい？」

大きな溜め息を吐いてツッコむ慎に、もうティーカップが足りずに、紙コップでお茶を出し始める電。

「では、話を整理すると。のんちゃんの先輩がハザマってやつに子供を孕まされて、史絵ちゃんがハザマってやつにナンパされて、大石さんの奥さんが既婚者だと知った上で、ハザマってやつにナンパされてホテルに行つて、笹野先生の看護師がハザマってやつにナンパされてホテルに行つて、モーニングアフターピルを飲む羽目になった。それで、優花ちゃんのお姉さんがハザマってやつとお付き合っていると。ついでに、ギャルズがナンパされて断つたと」

その言葉に、全員が頷いた。

「取り敢えず、望さんの先輩は、うちに来てくれれば処置はします」

笹野先生が、渋い渋い顔で言う。

「よろー、あいたつ！何すんのよお!」

望が軽い調子でお願いすると、頭を叩いた慎に抗議口調で文句を言う。
「よろしくお願いします。だらう?」

「よろしくお願いします。」

「よろしくお願いします〜」

望は、ペコリと頭を下げた。

「……………という訳なんです、お心当たりは?」

翌日、岩沼鎮守府に赴いた直哉は、応接室で宮戸島で起こっている騒動について、問い質した。

「一々覚えてなぞいない」

「……………でしようねえ」

態とらしく、大きな溜め息を吐いた直哉は、

「花梨さんは、そういったトラブルの後始末をして、いい娘だとは思わなかったんですか?」

「いい娘さ。養育費が掛からなかったからな」

「今後の慰謝料に加算されるかもしれないから、覚悟しておくんですな」

悪びれずに言う羽佐間一佐に、強烈な皮肉をぶつける。

「さて、真面目な話をしましょう。貴方は何を埋めたいんですか？」

「何だと？」

「艦娘達がいる。全員嫁にしている。他にも女がいる。貴方は戦場にも出ている。破滅を望んでいるんじゃないですかね？」

「……………」

睨み付け合って一触即発の雰囲気の中、妙高が口を開く。

「高菜二佐、私達はそれでも真一郎を愛しています」

「……………」

「話を戻しますと、花梨さんに手を差し伸べるのは、親であるあなたの責務なんじゃないですかね？」

「貴官に何がわかる？」

「分りたくないですね、そんなくだらないこと」

「金持ちのボンボンだった、貴官には分からんだろうよ」

再び一触即発になる。妙高は、悲しそうな顔をして二人を見る。

「高菜二佐、そろそろ今日の会見の《真の目的》を聞かせてもらおうか？」

「では、遠慮なく。羽佐間一佐、いい加減にしろ」

「何だと？」

「貴官は上官だし、よその鎮守府のことだ、と今まで見て見ぬふりをしていたが、正直迷惑だ」

「……………」

「いい加減、自分を偽るのはやめたらいかですか？」

「……………」

羽佐間一佐は、何も語らない。

「妙高を始め、こんないい娘がいるのに……………」

「それは否定しないな。私も、良い娘達だと思っている」

「なら何故……………」

「愛してもいない女を抱くには、人生は短すぎるだろうな」
「ええ」

「愛してもない男に抱かれるにも、人生は短すぎるだろうよ」
「でしようね。貴方を埋めるのは真実の愛、と言うことですか……」

その言葉に、妙高はどこか決意を秘めて、口を開いた。

「私達の愛では不足ですか？今までは、眞一郎が良かれと思つて何も言つて来ませんでした。私達だつて嫉妬もします。もし、眞一郎に何かあつたら、私達は後を追うでしょう」

「……あなたの負けですよ。まあ、どうせ女癖は死んでも治らないでしょうがね？」

「そのようだな」

直哉は、そう言うのと立ち上がる。

「高菜二佐、この埋め合わせはいずれしよう」

「期待していますよ、准将補殿」

直哉がニヤツと笑うと、羽佐間一佐は拍子抜けした顔をした。

「何だ、知つていたのか。勿体ぶつて黙つていたのに」

「東の羽佐間、西の坂本と、新設される准将補になる面子は予想は付き
ますよ」

「……と言うことがあつてね」

『それじゃあ、花梨さんは一生許すことができなさそうですね？』

「或いは、三尉が人間的な成長を迎えた時だろうねえ。はてさて、その時に墓石と仲直り、と言つた事にならなければいいがね？」

『先生え、縁起でもないことを』

「人はいつか死ぬ。それがいつかは、誰にも判らないのさ」

ふふつと笑うと、紅茶を啜る。ブランデーの香りと味が、頬を緩める。

昼から、しかも執務中に飲酒である。

「まだ愛ちゃんには難しい話だと思うよ？ただ、艦娘達は抑えていた嫉妬を開放したようで、毎晩放してくれない、と羽佐間一佐が私に愚痴つていたがね」

「聞いてください、愛ちゃん。直哉ったら、最近岩沼鎮守府との電話ばかりで、執務を放ったらかしなのです」

秘書艦執務机で、執務をしていた電も会話に混ざる。スピーカーフォンで会話しているのだ。

『何してるんですか？先生え』

「いやあ。同じ艦娘達に愛される者同士で、語り合いたい話もある訳さ」

『そうなんですネ……』

「さて、そろそろ愛ちゃんも執務があるだろうし、失礼するよ」

『はい、了解です』

「……という訳で、三尉は自分で壁をこじ開けたようですね？」

岩沼鎮守府の近くのバーで、羽佐間陸准将補……今日は昇進祝いの飲み会である。

気仙沼と宮戸島鎮守府合同でバーを貸し切って、艦娘達はテーブル席で親交を温めている。

因みに、優花の姉の紗花は、優花以上の天然でヤンデレ気質がある為、直哉と優花と寛太の三人で、十数時間に及ぶ根気強い説得の末、納得させて別れることになった。

カウンターに招かれた直哉と元に戻った奈々海、そして羽佐間准将補、それに正妻の妙高が並んで座っている所で、

件の郷里三佐の顛末書を見せた。

「ほお……あの男がか。確かに、粗にして野だが、卑ではない男だ。花梨の父親役には打って付けだろう」

「まあ……ずいぶん激しくなりましたね？」

羽佐間准将補はニヤツと笑って、妙高は口元に手を当ててうふふつと笑う。

「そんな有様では、人間的に成長した三尉が、先に手を差し伸べそうですね。こうやって赤子を抱いて、『あんたの孫ですよ、お祖父ちゃん』と言ってね。精々、それまで墓石にならないように生き残ってください」

「いね？」

「大丈夫です。私達が、眞一郎を絶対に死なせません」

そんな直哉の、皮肉の籠った言葉に、自信に満ちた言葉で答える妙高。

「どれどれ、わお。羽佐間三尉もずいぶん過激ですねえ。このままだと、お祖父ちゃんになるのもそう遠くないですねえ？」

奈々海も面白がって、顛末書を取り上げて目を通すと、ニヤニヤし始める。

後に本人の与り知らぬところで、奈々海に渡った顛末書は、南三陸の武藤提督の手に渡り、最終的に南三陸鎮守府に査察に入った、大本営副長の兼任と共に陸将補に昇進した、足立警務隊長の手によってシュレッダー破棄された。

「全く、困ったものだ」

この顛末書流出の元凶である愛と直哉の師弟は、足立陸将補に説教されたのは言うまでもない。

花梨は、この官能小説として出してもおかしくない顛末書が、宮城の各提督、ましてや父親に流出していることは未だ知らない。

岩沼鎮守府の騒動Ⅱ・幕間狂言

『高菜二佐、ちよつと困ったことが発生したんだが……』

陸准将補に昇進したばかりの羽佐間眞一郎が、直哉に連絡を入れたのは、それから数日後の事だった。

何時ものように、薄雲と卯月が哨戒をやって、電は新たに補職された副官の仕事をしながら、秘書官として支える……と言えば聞こえが良いが、

二人共、書類仕事は事務員妖精さんにアイスの賄賂で任せ、直哉は買い集めた歴史書を大型タブレットで眺め、電は五年ローンで買ったテレビで、お昼のワイドバラエティーを羊羹とお茶を楽しみながら見ている。

直哉のデスクには紅茶が置いてあり、おやつにはバタークッキーが置いてある。

この段階で査察が入ったら、足立陸将補からの大説教不可避である。

最近自衛隊は、将官階級の見直しを行い、将補の下に准将と准将補を新設した。

それぞれ、少将・准将に相当する職位で、NATOコードでは、OF7と6に相当する。

足立陸将補は、一佐からの将補への最後の昇進組である。

彼の昇進を待ったかのように、彼の昇進直後に新制度が施行された。

そして羽佐間陸准将補は、一番最初の陸准将補への昇進である。

相対的に、現存の将は横並びで大将相当に昇進したことになり、将補は准将と将補へ職位に応じて振り直された。

各幕僚長たる将は、元帥（OF10）相当と改められた。

何れにせよ、給与的には公務員の指定職号俸や各階級の号俸の為、結局は全員微増に留まる。

そんな、現在唯一の准将補である羽佐間眞一郎からの着信を受けた直哉は、また騒動か？と思いつつながら、スピーカーフォンに切り替えて、

スマートフォンをデスクに置く。

「困った事とはどうしたんです?」

スピーカーフォンにすると、電が気を利かせてテレビの音量をミュートにする。

紅茶を飲みながら、彼の相談事に乗ろうと困りごととやらを聞き出すと、

『刃物を持った若い女が押し掛けて来た。付き合った覚えはないんだが、先日『別れます』と電話が来た……そうそう、西野紗花』

危うく、二人共飲み物を嘔き掛けた。

先日の騒動の時に出て来た、仙台の銀行勤務で一人暮らしをしている、優花の姉の紗花である。

「紗花ちゃんなら、十数時間の説得の後に諦めます、って言ってたんですけど、押し掛けたんですか? 刃物を持って」

「と言うか、羽佐間准将補は大丈夫だったのですか?」

がたつと立ち上がり、直哉のデスクに椅子を持って来て、電も会話に参加する。

『本来なら警察に引き渡しても良いんだが、妙高が妙に冷たくて『ご自分の仕出かした事ですので、ご自分で解決なさいませ』と言って、今面倒を見てもらっているところだ』

「残念ながら当然ですね」

「同歩（同じくなのです）」

二人も、妙に冷たく突き放す。

『おいおい、残念ながら当然はないだろう。確かに種を実らせてしまったのは私の不覚だが……』

「妊娠してるんですか!?!」

二人共ハモった。

「あのですね、羽佐間陸准将補。貴方、女子高生も妊娠させて墮胎させたのを、ちゃんと自覚してくださいよ。貴方の行いでどれだけ今まで花梨さんに、そして前回、私達に迷惑をかけたと思ってるんですか!?!」

「で、どうするのですか? ヤリオン」

今回、電は過激である。たかだか二尉の艦娘が、陸准将補を捕まえ

ての大暴言である。

『返せる言葉が思いつかないのは残念だが、産ませてくれないなら自殺するか私を殺す、と言って聞かなくてな。妙高は『ご自分でお考えください』と言って相談に乗ってくれないし、那智には叱られたし、足柄には殴られ、羽黒には泣かれ、扶桑は現実逃避して外で空を見上げに行つたし、山城は『不幸だわ……』と嘆いていてな……』

「……………」

岩沼鎮守府の《大惨事》に、二人共何と言つていいか、判らなかつた。

『頼む。前回の迷惑ついでと言う訳ではないが、来てはくれないか?』

羽佐間准将補の懇願に近い言葉に、大きな溜め息を吐いた直哉は立ち上がりながら、

「はあ……分かりました。これから岩沼にお伺いします。電、卯月達を呼び戻してくれ」

と電に指示をすると、電も大きな溜め息を吐いてから、

「はあ……了解なのです」

と答えて、卯月に「緊急帰還命令なのです」と、指示を出した。

「またハザマ騒動だぴよん?」

「呆れてものが言えませんか」

帰ってきた二人の反応である。残念ながら当然である。

「そういう訳で、ちよつと行つて来るから、お留守番を頼むよ」

「優花ちゃんが帰つて来たら、連絡を欲しいのです。今日は、宮戸島少年カルテットでお勉強会の筈なのです」

慌しくお出掛けの準備をしながら、二人に指示をすると、返事を聞く間もなく、二人は業務車三号に乗つて、岩沼鎮守府に向かった。

「嫌ですつ……墮胎なんてしませんつ……眞一郎さんとの子供が欲しいんですつ……無理なら今ここで死にますう……」

岩沼鎮守府に到着した二人は、応接室に入った途端に、泣いている

紗花から開口一番にそう言われた。

今までの天然っぷりが、完全に影を潜めた取り乱しぶりである。

「いや、紗花ちゃん。最悪一人で育てないといけないよ。それでも良いのかい？」

「今なら傷は浅いのです。よく考え直すのです！」

二人の説得にも、耳を貸そうとしない。

イヤイヤと言って、隣で宥めている妙高を困らせる。

「高菜二佐、電。本当にうちの眞一郎のせい岩沼で申し訳ない」

那智が、物凄く申し訳なさそうに恐縮している。

「い、いや、私は良いんだが、羽黒は大丈夫なのかい？」

「今、足柄と一緒に着いている。山城も、扶桑と一緒にいるから大丈夫だろう。私と眞一郎が出先から帰って来た時に、鎮守府内に潜んでいて、このようなもので襲い掛かれてな」

応接室に置いてある収納から、ヒ首を取り出す。

「あ、ヒ首!? どのヤクザだ!?」なのです!」

「本当に申し訳ない。私達も放任していたのがいけなかったが……」

「いいえ、眞一郎が悪いんです。今回は反省してただかなければ」

直哉と電が、ヒ首という凶器に愕然としている中、那智は申し訳なさそうにして、それをピシヤリと遮って厳しい態度で臨む妙高。

「ふう……それで、妙高四姉妹と扶桑姉妹の意見はどうなんだい？」

「私は何も申し上げません。眞一郎が決めることです」

「私は迎え入れてもいいと思っています。足柄も同意見で、羽黒は眞一郎に従うと。これは、扶桑姉妹も同意見だ」

直哉が嫁達の見解を確認すると、再び紗花に向き直る。

「……という訳だが、紗花ちゃん。後は君の気持ち次第だよ？」

「あう……」

紗花は、涙をポロポロ零しながら、一生懸命考える。

「……子供が欲しいですう……例えお嫁さんになれなくても……」

「よし、解った。決戦に行こう」

「なのです」

二人は立ち上がると、紗花の両手を引いて執務室に向かった。

妙高と那智も、従いて来る。

「……という訳で、羽佐間陸准将補。年貢の納め時だ」

「大人しく、紗花ちゃんを迎え入れるのです」

「お願いしますう……」

「むう……」

暫し逡巡している眞一郎だったが、ボタンと扉を開いて入って来た残りの嫁艦達の、

『紗花ちゃんの気持ちも考えてあげてください』

と言う後押しに、眞一郎は大きな溜め息を吐いた。

「わかった。お前達がそこまで言うなら、この子の両親に土下座して、娘さんを頂くことにしよう」

その瞬間、紗花の顔がぱあつと明るくなった。

「有難うございますう!!」

「良かったですね、紗花ちゃん」

後ろから、紗花をぎゅっと抱き締める羽黒に、那智が懐かしそうに口にした。

「そう言えば何年か前、花梨が岩沼にやって来たのを思い出すな」

「そう言えば、花梨はどういう経緯で認知することになったんです?」

直哉は、そんな那智の方を向くと、那智はふつと笑みを浮かべる。

「ティータイムでもしながら、スイーツバイキングでお茶をしつつゆっくり話そう」

それは、那智から眞一郎への『スイーツ食いたい』と云う脅迫である。

眞一郎は、大きな溜め息を吐いて両手を上げた。

「わかったわかった。仙台のスイーツバイキングの店だな。仕方がない、ティータイムとするか?」

『はい!』

「いつその事、卯月と薄雲も連れて来るのです」
「だな」

これに便乗して、卯月と薄雲も呼び寄せようとするがめつたい直哉に、眞一郎は苦笑いを浮かべる他なかった。

一旦宮戸島に戻った直哉は、番長と愉快的仲間達（フルメンバー）を連れて、仙台で合流した。

『ゴチになりまーす！』

「あ……あのっ……すみません」

全員ノリノリでごちそうされる気満々の中、史絵だけは申し訳無さっぱいである。

「ちよつと待て、高菜二佐。ここまで膨れ上がるとは聞いてないぞ!？」
「いや、おっさん。優花のお姉さん孕ませといて、そんな細かいことでグダグダ抜かすなんて小せえな。と言うか、俺の史絵をナンパしたと覚えてねえのかよ?」

「け……圭……年上の人に……」

数倍に膨れ上がった人数に流石に抗議するも、義侠心豊かな番長が真っ向からピシヤリと言いつつ、

それを諫める史絵だったが、

「真一郎、その番長っぽい子の言うとおりで。諦めろ」

那智の、ちよつと苦笑いを浮かべた言葉に、真一郎も苦笑いを浮かべた。

「まあ、これも迷惑料だと思って、潔く全員ご馳走しよう」

真一郎は、自分の艦娘達と紗花の七人に加えて、直哉に電、卯月に薄雲。

更には圭一・寛太・慎・優花のカルテットに、ギャルズの三人・史絵のスイーツバイキング代金を負担する羽目になった。

皆が、思い思いにスイーツを取って各々のテーブルで食べている中、

岩沼鎮守府の艦娘達に直哉・電は、同じテーブルでデザートタイムに入る。

「さて、あれはもう何年にもなるか……花梨が高校三年生の時だったか……思い出すな。あの日は台風が直撃して大嵐だった……花梨が、母親の死によって天涯孤独の身になり、最期の言葉を手掛かりに真一郎が父だ、と突き止め自分を認知させに来たのは……」

岩沼鎮守府の騒動Ⅲ・花梨がやって来た日

それは数年前の話である。

病弱な母親だけだった柴崎花梨は、貧しい暮らしの中育った。そんな花梨を育ててくれた母・真花^{まなか}が、高校三年生の時病床にて亡くなる間際、父親のことを初めて語ってくれた。

「陸上自衛隊の、羽佐間真一郎という人が花梨の父親よ……」

そして、形見に二人で撮った写真を託して、この世を去った。

その瞬間、花梨は天涯孤独の身になった。

その時点で、彼女の進路は自衛隊に決まった。母の死亡保険金で、何とか仙台で暮らしていた。

防衛大学の資料集めで、積極的に宮城地本に顔を出していた。

「防衛大学校に興味があるのかね？」

声を掛けたのは、当時宮城地本で広報官をしていた、武藤 廉二尉である。

スキンヘッドで髭を蓄えた、そして温なおじさん。

「はい、父を探してまして……それと生活する為に自衛官になりたいんです」

武藤二尉は、曹からの叩き上げの経理畑の士官で、今は地本に出向中の身ながら、花梨の相談に親身に乘ってくれていた。

新たに発足した、大本営や鎮守府のことも詳しく教えてくれて、大貫空将を筆頭に、各提督が自由裁量で運営しており、それを監督する足立一佐率いる大本営警務隊が取り締まる。

花梨が、羽佐間真一郎と云う名前を話した時に、武藤二尉は豊かな髭を弄りながら口を開いた。

「知つとるよ。岩沼鎮守府というところで提督をしている。どれ、連れて行くのか？」

「いいえ。岩沼鎮守府ですね？分かりました、有難うございます」

花梨は立ち上がると、武藤二尉に礼を言つて、宮城地本を後にした。

武藤 廉と再び出会うのは、幹部候補生学校を卒業後、岩沼鎮守府副官として任官してからになる。

その日は大嵐だった。

羽佐間眞一郎二佐は秘書艦である妙高、そして那智を連れて出掛けた帰りだった。

「……………」

鎮守府の門の前で、高校の制服姿の花梨は、傘も差さずに立っていた。

「お前さんは……………」

声を掛けた眞一郎を、睨み付けるようにこう告げた。

「貴方の……………娘です」

岩沼鎮守府の応接室に通された花梨は、羽黒からタオルを受け取って、濡れた身体を拭いていた。

「それで。お前さんが私の娘だ、と言う根拠を聞かせてもらおうか？」

対面に座っているのは眞一郎。そして妙高が隣に座っていた。

「……………この写真です」

ラミネート処理された、一枚の写真を取り出す。

「……………」

それは、彼女の母親とツーショットの若き日の写真である。

「提督……………昔も相変わらずだったんですね。種を撒いても、実らせるへまをなさる方とは思っていませんでしたが」

妙高は、何時になく冷たい感じで眞一郎に当たっていた。

「若気の至りさ。臆気ながらに覚えている、確か……………真花と言ったか？」

「はい、柴崎真花は私の母です」

「そうか。それで、本日の会見の目的を教えてくださいらおうか？」

「私を、貴方の子として認知してもらいます。嫌なら、私にも考えがあります。このことを、足立一佐と大貫空将に話しに行きます。地本の武藤二尉から聞きました」

「……………それは私を脅迫しているのかね？」

鋭い眼光で睨む眞一郎に、花梨も負けてはいない。

「仰る通りです。脅迫をしています。認知していただきます」

「……提督、この子を認知してあげることが出来ませんか？」

花梨の隣に座っていた羽黒が、おずおずと口を開く。

「……提督、この子は嵐の中傘も差さずに、入りなさいと言っているのも拒否して、提督を待っていたのよ？」

コーヒーを出しながら、足柄が眞一郎に告げる。

「提督、私達が提督の下で戦うようになって一年と少し。ここで、私達の信頼を壊すつもりか？」

那智が脇に控えていて、花梨に同調するように言う。

「……提督。貴方にはご落胤の一個中隊がいる、という噂があると聞いています。それが本当だとして、今の今まで認知を求めてきた事はありましたか？」

妙高の質問に、眞一郎は静かに答える。

「一々覚えてはいない。ただ、認知をするに至ったことはない」

そんな態度に、花梨はキツと睨んで、

「私の母を愛しておいででしたか？」

そう詰問した。

「愛してもいない女を抱くには、人生は短すぎるだろうな」

その眞一郎の回答に、花梨は更に睨み付ける。

「それだけですか？」

「愛してもない男に抱かれるにも、人生は短すぎるだろうよ」

続けて言われた眞一郎の言葉の真意は、その時の花梨には判らなかつた。

「判りません。本当に愛しておいでだったんですか？」

その問い掛けに眞一郎は、

「判らなければ判るまで考えればいい。何れにせよ、私の迷惑にならないなら鎮守府で暮らすことと、認知届を出すことは了解しよう」

「ご迷惑を掛けるつもりはありません。生活費は、母の死亡保険金で食べて行けます。それに防衛大学校に入ります。短い間ですが、どうぞ宜しく願います」

その日から防大着校まで、羽佐間姓に改めた花梨は、岩沼鎮守府で過ごすことになった。

最初からいる妙高四姉妹に、新たに配属された扶桑姉妹。

彼女達には、心を開いていた。

彼女達にだけは、父に対して育ててもらった恩はない、と言い切つて話した。

こうして、父の監視を兼ねた生活が始まった。

岩沼から仙台の高校に通い、防大の試験を通過して着校して行った。

その間に、妙高達や扶桑姉妹と《事実婚》をすることを知った。

その時点で、花梨は父へは反感と軽蔑しか抱かなかつた。

幹部士官候補生学校を卒業した花梨を待っていたのは、岩沼鎮守府副官の任官命令だった。

自由裁量で、人材を自由に引つ張ることも出来るのだ。

花梨は、父の監視とストツパーの為に、任官命令を受諾することになった。

「結局、認知を求めてやって来たのは、花梨一人だったよ」

眞一郎と那智が、岩沼鎮守府に転がり込んだエピソードと、花梨から聞いた話を披露し終わると、ポツリと語った。

「ご落胤の一個中隊がいるかは？」

直哉は意地悪そうに訊いたが、眞一郎は首を振った。

「分かん。もしかしたら、或いはいるかも知れないが……私が父親でないほうが幸せだよ」

「愛が深ければこそ……なのですか？」

ケーキを頬張りながら、電が感慨深げに問い掛けると、眞一郎はふっと笑った。

「浅い恋愛をするほど、人生は長くないだろうよ」

『……………』

岩沼鎮守府の艦娘達は、とんでもなく愛に飢えている人間を愛してしまったことを、改めて理解した。

「大丈夫ですよ。私があ、眞一郎さんの愛を満たしてあげます。ううん、皆で」

紗花が艦娘達を見回すと、妙高が口を開いた。

「戸籍上の結婚をして来なくてよかったですね？提督」

この妙高の言葉は、生まれて来る子供には、きちんと《嫡子》として生まれて来て欲しい、との願いである。

「紗花、この男の愛欲を満たすのには六人では足りない。力を貸してくれ」

那智が真面目な顔で紗花に語ると、紗花はニコつと笑って返す。

「よろしくお願いしますね」

「はいっ」

羽黒が深々と頭を下げると、同じく深々と頭を下げる紗花。

「鎮守府の暮らしは楽ではないかもしれないけど、岩沼に銀行の支店があつたら、転勤願いを出してもいいのよ？」

「足柄さんも、これからよろしくお願いしますねえ？」

足柄の配慮に、笑顔を浮かべる紗花。

「うふふ、新しい妹ができたようですね」

「姉さまの妹は私だけです。……私の妹なら少しは考えても……」

少し姉に依存する山城は、扶桑の言葉には不満顔だが、自分の妹ならいいと言葉を濁す。

「いいんです、皆さんの末席に連なるだけで……」

紗花はそう言うも、艦娘達の心は既に定まっていた。

「眞一郎。紗花と正式な結婚をなさいますか」

代表して、妙高が笑顔でそう言うと、眞一郎はもう何も言えなくなってしまう。

「お前達、結託するのが早過ぎだろう」

それだけ言つて……ふつと笑いながら、とある歌を歌った。

冬になり、春になれば鳥達が帰って来る、という内容の歌である。

「その歌は？」

直哉が問うと、眞一郎はふつと笑いながら答えた。

「どこかの誰かが歌っていた歌であ。歌だけ記憶に焼き付いてし

まったんだろう」

その言葉に、艦娘達と紗花はふふつと笑っていた。

その頃、同じ仙台の地に笹野 愛と羽佐間花梨が、とある霊園にやつて来ていた。

室戸鎮守府の仕事を数日休み、愛は更に学校を休んでのことである。

その傍には、郷里 剛三佐がいる。

「母さん。漸く大切な人を見つけました。貴女はあの男から何も愛されていなかった、とお嘆きでしょうが、あの男は確かに母さんを愛していたようです。愛するにも愛されるにも人生は——短過ぎます」
「愛してもいない女を抱くには、人生は短し。愛してもない男に抱かれるにも、人生は短し……かあ」

花を手向けた花梨に、愛はそう声を掛けた。

「言い換えればこうです。『命短し恋せよ乙女』」

「……………」

「ぬう……花梨の母親は嘆いてはいたが、憎んではいなかった。そう言うことなのだろうな？」

振り向いた花梨は、微笑を浮かべてその言葉に答えると、愛は掛けていい言葉を思い付くほど、大人ではなかった。

それを代弁するかのように、剛が代わりに答えると、花梨は頷いた。

「毎年、命日にこうやって墓参りに来るんです。あの男には、命日は教えませんでしたから」

「何で教えなかったんですか？」

「あの男に、私の母の前に立って欲しくないからです。母は私だけのものです。たった一人、私だけのものです」

言い切った花梨に、愛はこれ以上何も言うべきではない、と押し黙った。

花梨は、ふつと笑いながらとある歌を歌った。

冬になり、春になれば鳥達が帰って来る、という内容の歌である。

「その歌は？」

「母がよく歌ってた歌なんです。あの男にも聞かせた、と」

「そうですか……」

「こうなったからには、せいぜいあの男にも長生きしてもらわないといけませんね？」

「どうしてですか？」

首を傾げた愛に、花梨はうふふつと笑った。

「復讐をするから」

愛はその言葉にフリーズし、剛は困惑した。

「こうやって赤子を抱いて『あんたの孫ですよ、お祖父ちゃん』って言うってやるの。どう？ 最高の復讐だと思いませんか？」

続いた言葉に、愛はお腹を抱えて笑った。

「うふふつ、あははつ……産休申請はいつでも許可しますから、子作りに励んでくださいね。或いは、あれだけ中に出していれば、既に子供が出来ているかもしれませんね？」

「……あの顛末書ですか？」

「ぬう……正確に書き過ぎたか……」

愛の言葉に、顔を赤らめながらジト目で睨む花梨を抱き寄せながら、違うところで反省する剛。

「まさかとは思いますが、あの顛末書、高菜二佐に送ってないでしょうね？」

「……オクテナイアル」

目を逸らした愛に、花梨は全て察してしまった。

あの顛末書が、きつと父にまで流出したことを。

肩を震わせワナワナとしている。顔は耳まで真っ赤になっている。

「か、花梨。笹野三佐も、悪気があってやった訳じゃないんだ、と思うぞ……」

「悪気はなくても、面白がってではあるでしょうっ？」

「……ごめんなさい」

素直に謝った愛に、花梨はふわつと包み込むように抱き締めた。

「提督、ありがとうございます。剛さんとの縁を取り持ってくれて」

「いやあ、私は何もしませんでしたよ。貴女は不満でしょうけど、貴女もそれに羽佐間陸准将補も、私に言わせれば似たもの親子なんですよ。自分を偽っていたら幸せになれませんよ?」

「……………そうね」

「そう言えば、どういう経緯で羽佐間陸准将補が花梨さんを認知するに至ったんですか?」

「それはね……………そうそう、仙台には美味しいスイーツバイキングがあるんです。そこに行きましょう。そこで、ゆっくりと経緯についてお話ししましょうか?」

愛の頭を撫でながら花梨がそう言うと、三人で墓地を後にした。

当然ながら、彼女等は目的地で父親御一行と鉢合わせすることになる。

岩沼鎮守府の騒動Ⅳ・Epilogue

羽佐間眞一郎と愉快的仲間達と、花梨等三人はスイーツバイキングの店の前でバツタリ遭遇した。

「先生、こんなところでどうしたんですか？」

「愛ちゃんこそ、室戸鎮守府はどうしたんだい？」

バツタリ出会った、師弟の最初の会話である。

「私の方は野暮用です。先生はどうしたんですか？」

「いやあね、聞くも涙語るも涙の物語があつてね……」

苦笑いを浮かべる直哉が、どう話せばいいか迷っているうちに、番長と愉快的仲間達が直哉を押し退けて出て来る。

「おつす！愛」

「元気そうだね」

「こっちは、色々大騒動だったんだよ？」

三者三様の声を掛けると、大自己紹介が始まる。

「ええと、こちらが圭一くんの彼女の史絵さんで、寛太くんは優花ちゃんと呼き合つて、慎くんはそっちのギャル三人とハーレムを築いた、と……」

「それで健太はどうしたんだよ。留守番か？」

「うん、お留守番だよ」

圭一の問い掛けに、愛は答える。

「なんだ、残念だな。また夏休みにでも遊びに行くわ」

「うん、楽しみにしてるね」

押し退けられた直哉が、

「どれ、愛ちゃんに三尉に、郷里三佐。立ち話も何だ。羽佐間陸准将補閣下の奢りで、バイキングダイナーでも食べながら話を聞こうかね？」

「ちよつと待て、高菜二佐、私はまだ奢るとは言っていない」

「奢る奢らないはいんですが、まずこれを見てください」

愛が、お財布からとある紙を取り出して、眞一郎に見せる。

「何だ？ 鮫政の領収書……21万9800円……これは？」

「おたくの娘さんが、私の財布で飲食した料金です。慰謝料ついでに返してください」

「な、何を言って……」

愛もここぞとばかりに、過日の寿司代金を眞一郎に払わせよう、と言う魂胆である。

「まあまあ、ここじゃあゆつくり話も出来ないでしょうし。ほら、三尉の継母と叔母と妹が出来ることも話さなくてはいけないでしょう？」
愛に援護射撃をするように、直哉がニヤニヤと笑いながら眞一郎に迫ると、花梨は首を傾げる。

花梨は、宮戸島のハザマ騒動を知らないのだ。

「継母？叔母？妹？どう言うことですか？」

「それはだな……解った。迷惑料が足りないというのだろう。その三人も序にご馳走するから、従いて来なさい」

一同は、デイナーバイキングのレストランに、場所を移動した。

「……ということ、宮戸島で大騒動が起こった訳だ」

「呆れました。私は陸准将補が無節操だと思っていました、そこまで無節操だと思いませんでした。最低です」

バイキングデイナーの席で、直哉の口から過日のハザマ騒動と、年下の継母と叔母が出来ることを知らされた花梨は、今までにないジト目で父である眞一郎を睨んだ。

「まあ、花梨。紗花ちゃんの一件は、准将補殿がきちんと責任を取って正式に結婚する運びなのだし、いいだろう？」

そんな花梨を、隣でオロオロと宥めているのは、野獣こと郷里 剛である。

「花梨さん、私が継母になる紗花です。よろしくお願ひしますねえ」

「同じく、叔母ってことになるのかな、優花です」

「よ、宜しくお願ひします……」

18の継母に12の叔母である。花梨はもう訳が判らなくなる思いである。

「ええと、紗花さんが羽佐間陸准将補のお嫁さんになるから、花梨さん

にとつての継母。で、私と同一年の優花がその妹で、叔母つてことになるんだね……本当にどう言うことなんですか？」

愛は、大きな溜め息を吐いた。

「それで、皆さんは納得なのですか？」

花梨は、艦娘達の方を見回す。

「花梨ちゃん、私達は紗花さんを正妻として受け入れることを決めました。ただし、紗花さんを含めて私達を皆平等に扱う、と言う条件です。ですから、赤ちゃんも皆で育てます」

妙高が代表して答えると、花梨はわざとらしく、大きな溜め息を吐いた。

そんな花梨に、愛は口には出さないが、ほら、似たもの親子でしょう？と考えていた。

「ところで、寿司の代金なんだが……」

眞一郎が切り出すも、妙高はニコッと笑って、

「払ってあげたら良いじゃないですか。元を正せば、眞一郎の日頃の行いなのですから」

そう援護射撃をすると、眞一郎も大きな溜め息を吐いて、

「解った、近日中に送ろう」

「助かります。いやあ、12で借金をすると思いませんでしたから。それでは」

そう約束した眞一郎に笑みを見せて、愛は用件は済んだとばかりに、番長達のテーブルへと行ってしまふ。

「羽佐間准将補殿、小官は花梨さんと結婚を前提にお付き合ひさせていただきます。郷里 剛三佐であります」

剛が立ち上がると、ビシッと敬礼し自己紹介をする。

「うむ、まあ座りなさい。初夜は随分激しかった、と聞いている」「ぬううう……」

「やっぱり、あの顛末書……」

剛が唸りつつ顔を赤らめながら座ると、肩をわなわな震わせて顔を真っ赤にする花梨。

「宮城の提督は、皆知っているのです。随分激しかったのですね。超

特大の」

「やめて!!それ以上は言わないでください!!」

ニヤニヤと、顛末書の内容を語ろうとする電に、悲鳴に近い声で止めようとする顔が真っ赤な花梨。

急激な勢いで、正気度が削られて行く。

「で、あの顛末書はどうなったんだね?大村が持つて行ったが」

眞一郎が直哉に問い質すと、直哉は苦笑いを浮かべて、

「いやあ、あの後武藤提督のところへ渡って、最終的には足立将補が発見して、シユレッダー処理されました。後で、足立将補にこつてり叱られましたよ」

そう答えた。

「……………」

皆知ってる。しかも、足立や世話になった武藤にまで知れ渡っているとどう事実にも、とうとう花梨の思考は停止した。

「すまない。私達も、読ませてもらった……………」

「ごめんなさい、花梨ちゃん……………」

那智と羽黒が、フリーズ状態の花梨に謝る。

「しかし、猛獣ねえ。私も飢えた狼と言われるけど、まさに飢えた野獣ね」

足柄は、剛の方を詠う。

「むうう、ワシもその、加減がわからなくな……………」

顔を赤くしている剛は、詠われて正直なことを口走ってしまう。

「もしかしたら、10代でお祖母ちゃんになるかもしれないねえ……………」

ど天然な紗花は、ある意味大爆弾発言を投下する。

因みに、顛末書の内容は足柄から全部聞いている。

「ぬうう、その、ワシに合うのがなくて、全て破れてしまっ……………」

「いや、おっさん。そんな事は、誰も聞いてないのです」

堪りかねて、電がツツコミを入れる。

「ところで、花梨ちゃんがずっとフリーズ状態なんだが、大丈夫なのか……………」

「……………」

直哉の指摘どおり、花梨はショックのあまり、考えるのをやめていた。

「…………漸く分かりました。あの日の質問の答が」

「そうか、なら良い」

皆解散した後、愛は宮戸島の実家に一泊。花梨と剛は岩沼鎮守府に泊まることになり、岩沼の近くのバーに三人連れ立って飲みに来ていた。

花梨だけは、なぜかノンアルコールカクテルを頼んでいた。お酒は先日で懲りました……………と言って。

「あの日の質問……………とは？」

「母を愛していたか？と言う質問です」

剛が判らず尋ねると、花梨が剛には笑みを見せて答える。

「貴方も随分深い愛を求めていたんですね。……………愛は満たされましたか？父さん」

花梨が転がり込んでから……………正確には、真花から出産したと知らされてからの二十数年間、待ち続けていた回答を持って来たことに、真一郎は満足していた。

「……………全く、いい嫁達を貰ったものだ。妙高、那智、足柄、羽黒、扶桑、山城、それに紗花。そして、お前さんのような強い子が娘でよかったです」

「……………有難うございます。私に命を下さって」

「……………お前もいい娘で感謝している。養育費が掛からなかったからな」

照れ隠しに、敢えて露悪的に答える真一郎に、ふふつと笑う花梨。

「養育費は、慰謝料とセットで孫の養育費として頂きますから。精々溜め込んでおいてくださいね、お祖父ちゃん」

「お、おい……………まだ出来たと決まったわけでは……………」

今度は、剛が狼狽している。

「うふふつ、あの日は危険日も危険日だったんですよ。それに、私には

分るんです」

そんな剛に笑いかけながら、自らの下腹部を優しく擦る花梨。

「ぬうう……そうなたては、結婚の許可を陸准将補殿に頂かねばならないな」

どこまでも真面目一徹な剛に、堪え切れずに笑い出してしまおう眞一郎。

「くくくつ……貴官のような男に、娘を渡すことには異存はない。花梨のことを頼む」

「はっ。命に代えても、花梨を守り、支えて行きます」

「剛……私も貴方をお慕いします。妻として……」

こうして、静かに父娘は雪解けを迎えた。人間的に成長した花梨によるものなのか、

艦娘達の深い愛に気付かされたから眞一郎によるものなのかは、定かではない。

五月も、下旬になろうとしていた

『いやあ、優花ちゃんのお母さん、ビックリしてたみたいですねえ?』

何時も通りの昼下がり。宮戸島鎮守府は、何時も通りの怠惰な時間が流れている。

今回の騒動で、電が仕事をサボっていることが卯月・薄雲に露見して、秘書艦は輪番制になった。

今日は、薄雲が秘書艦として座って、お茶を飲みながらヤクザ映画のDVDを見ている。

そんな中、直哉は室戸鎮守府の笹野 愛と電話をしている。

羽佐間眞一郎は、西野紗花と入籍した。

結婚式は、艦娘達と紗花の協議の結果行わず、小さなお披露目会を行うに留めた。

宮城の提督達と親族だけが集まる、ほんの小さな。

年下の義理の母になった紗花・優花姉妹の母萌花は、娘より30近く年の離れた男からの結婚の許しの願いに、仰天したという。

母子家庭で育った紗花は或いは、眞一郎の中に父性を求めていたのかもしれない、と眞一郎自身は考えていた。

何れにせよ、羽佐間紗花は岩沼鎮守府に引越しをし、銀行も岩沼支店に異動を勝ち取り、今日も働きに出掛けている。

「そりゃあそうだろう、年上の男が娘さんをくださいってものだ。しかも、もう既に孫が宿つてると来たもんだ。私が父親でも戸惑うよ」
『おまけに、年上の義娘がいる、なんて聞かされればそうなりますよね。下手すると、30代で《義理の》とは言え、曾孫ですよ』
「ところで、花梨の方はどうだったんだ？」

『そうですね、予定では来る筈の生理が来てない、と言っていましたけどまだ何とも……少なくとも入籍はするそうですよ』

「そうかそうか。まあ、この大騒動もようやくめでたしめでたし、かな？」

『ですね』

こうして、岩沼鎮守府を巡る大騒動は終結した。

その頃の岩沼鎮守府。

「このシフト表は何だ？」

岩沼鎮守府の司令官執務室に張り出されたシフト表に、眞一郎は疑問の声を漏らした。

「うふふ。那智、説明してあげてくださいいな？」

「丁度、正妻含め七人になったので、毎晩輪番で提督の相手をしようという事になった。もう絶対に、他の女遊びはさせないから、覚悟してもらおう」

うふふつと笑い、説明を妹に任せる秘書艦・妙高に、まっすぐ見て有無を言わせない勢いで迫る那智。

「そうですよお？もし、そんなことしたら、相手の女の心臓を匕首ですりっ、ですよお」

「紗花ちゃん、怖いですよお」

ニコニコしながら物騒な事を言う紗花に、少し怯えながらツツコミを入れる羽黒。

「提督が十分満足した、つて言うくらいに満たしてあげるから、覚悟なさい」

「そうです。姉さまと同じだけ、提督にも愛を注ぎます」

「ですから、女遊びはご卒業なさいませ」

足柄がそれに続いて、山城と扶桑が最後にそう告げると、眞一郎は笑みを浮かべて両手を上げる。

「わかった、わかった。お前達の愛は、十分に満たされているよ。私もそろそろ年貢の納め時のようだ。これからはお前達を愛するので精一杯になりそうだな、お手柔らかに頼む」

『はいっ！』

岩沼鎮守府は、今日も平和である。

査察がやってきた！・I・足立将補の憂鬱

査察と言うものは、事前に予告して行うのが、大本営警務隊の役回りであった。

しかし一部の悪徳提督が、その予告された日までの間に、悪事の証拠を全て隠してしまい、

その結果、幾つかのブラック鎮守府が摘発を逃れた、と言う歴史がある。

それを重く見た大本営は、浜松鎮守府内に闇の組織を作り上げた。

日本の法律で、裁き切れないほどの重大な悪に対し、始末してしまう《裏の警務隊》を。

彼等は、表の警務隊より迅速に動き、巨悪の排除を行う。

結果、査察の重要性は以前より増し、警務隊員への権限は以前以上に重くなった。

自由裁量には自由裁量での査察が、と言うことになった。

頻発する怪死事件にプライドを傷つけられた警務隊員は、より徹底的に過激に、査察を行うようになっていた。

表と裏の、縄張り争いが始まったのだ。

その結果、どんな微罪でも摘発して、処分を課すようになっていた。その傾向は、足立が副長を兼任し、全ての査察に同行できなくなっ

てから、更に増していた。

そんな六月中旬の梅雨の頃……

「あまり、いい傾向とは言えないな」

規模が大きくなって、警務隊から正式に大本営警務本部に格上げし、

警務本部長（准将の職位）と大本営副長（将補の職位）を兼任している足立陸将補は、自らの執務室で始末書の束を見てぼやいた。

微罪で引っ張って来たものは、全て足立の判断で譴責処分に留めたのだ。

六月に新設された大本営警務本部は、同じく新設された北海道・東

北・関東・甲信越・東海・近畿・中国・四国・九州及び沖縄の各警務隊を統括する事となった。

今までのように、東京からコントロールすることに限界を感じたのもあるが、規模の拡大と共に現地に警務隊を配置したほうが良い、と言う意見が根強いのだ。

足立は未だに裏の警務隊の存在を知らないが、こうも怪死事件が続けば、何かを疑いたくなる。

村上兄妹も巧妙になり、ブラック鎮守府同士の抗争、と云う形で始末することもあり、あるかもまだ分かっていない『裏の警備隊』にまで、捜査を及ぼす余裕が無いのも事実なのだ。

そして、各地の警務隊はプライドを傷付けられ、挙げた拳の振り下ろし先として、提督への掣肘を更に強めようとしている。

「はい。本来は、立法院で鎮守府運営に関する法律を定めてもらうのが肝要なのですが、如何せんまだ『自由裁量』のフリーハンドで、艦娘の身分も婚姻後戸籍に入った艦娘以外への、捨て艦戦法すら殺人罪に問えない状況です」

副官である七原秋奈一尉が、国会批判を口にしながら、直近の現状をグラフ化した資料を提示する。

「うむ。そっちは、大貫空将に働きかけて頂く他なからう？」

「はい。永田町の老人達に、働いてもらう他有りませぬね？」

七原秋奈。現在は結婚しているが、旧姓は足立。この年36歳。大村奈々海の同期であり、次席卒業。

過日、七原春人陸将補（当時・現陸准将）と目出度く結婚をして家を出た、足立陸将補の娘である。

昨年の電生放送暴走事件で、足立の後で大爆笑をしていた二人のうちの一入であり、結婚後同じ職場は問題があると、

父の『自由裁量』の下で、規模が拡大された父親である警務本部長の副官となった。

現在三ヶ月の妊婦でもある。

「全く。日本中を旅から旅で過ごして来た時もなかなか体に堪えるが、今東京で警務本部員の報告を待っているだけというのも、なかなか

か堪えるものだなあ」

秋奈が、二人分のお茶と羊羹を持って来てそつと差し出すと、副官デスクから椅子を引っ張り出して、父の執務机の前まで持って来る。「年、ですかね？」

「私の同期を連れて来て、後妻として結婚したお前には言われたくないわ」

「あら、春人さんは今も元気に、教導隊で部下達を扱っていますよ。東富士の魔王の二つ名は、伊達じゃないですね？」

羊羹をパクリと口にしながら、秋奈は答える。

「お前さんの惚気話はいい。問題なのは、どうも部下達と鎮守府とで、トラブルが起きる傾向にあつてな」

「はい、閣下のご懸念どおりです。警務隊の目的が、自由裁量の掣肘から規制になりつつありますね。現状あまりに酷いもの、人格を無視するものを除けば、各提督の好きにやらせればいいんですが」

秋奈の「今までどおりが一番」と云う言葉に、足立将補も同意する。「先日の、閣下が体調不良でご欠席された幕僚会議で、東北の監査が甘いい、と言う指摘が入りました。東北が平和な今、ガチガチに固めて綱紀粛正を図るべし。近海防衛ではなくミッドウエーへの攻撃を行わせよ、近海防衛に甘んじている提督は、片っ端から更迭し原隊に戻せ。名前が出たのは、武藤二佐、高菜二佐等数名」

「馬鹿馬鹿しい。艦娘の信頼ある提督を更迭してどうする？」

「閣下が、会議に参加なさってそう仰って頂ければ幸いだったのですが、警務隊本部も各地区の警務隊に分かれてしまいました。今は、宮城地本の宮本一佐が兼任で東北地区警務隊長としてその任に当たっておりますので、彼の人柄として東北への締め付けは緩いのは確かなのですが……会議の場では、宮本一佐もやり玉に上がっており、広報がしやしやり出てくるな、等と言う発言もありました。流石にそれは、別の幕僚が嗜められましたか」

「組織が大きくなれば、コントロールも難しい……か」

「はい。先日、四国の室戸鎮守府と四国警務隊の間で、トラブルが発生しております。事前通告もなしに査察に入り、学校に行っていた笹野

三佐を臨時で呼び戻す事態になりました。更にはその笹野三佐へ『提督の分際で学校など行くものではない』と罵り、心配で同行した友達が激怒して抗議した所、少年法を『自由裁量』で無視し『公務執行妨害』で拘束中。……それで、鎮守府陸戦隊と警務隊で一触即発状態になり、慌てて駆け付けた土佐の坂本一佐と郷里三佐のお取り成しのお陰で、武力衝突の事態は免れましたが、四国警務隊は鎮守府と学校の監視に乗り出しました。笹野三佐を監視し、毎日のように『職場放棄』の戒告を連発しています。可哀想に、現在は学校にすら行けてない状態で……現在もお友達も拘束中です。警務本部長昇進で、各提督との直通電話が廃止されたのが裏目に出ました」

「すぐにやめさせろ、友達も解放するように。四国の警務隊長は、何をやってる？」

「はい。閣下のお名前です、中止命令を出しておきましょう」

そう言うと、秋奈は自らのデスクに戻り、立ったままでキーボードを叩いて、四国警務隊に向けて命令文を送信する。

そして、再び椅子に戻りお茶を啜る。

「やはり、一度東北には閣下自らが出掛けになって、東北は問題ない、と云うところを示して頂く必要があるのではないのでしょうか？一週間ほど、東北の集中監査をいたしましょう」

「だが、武藤のところは先日監査したばかりではないか……？」

「いえ。やはり、閣下が足を運ぶことに意義があると思います。それに――」

羊羹を平らげると、流し目で父に笑みを向ける。

「良い骨休みにもなりましょう。集中査察ついでに、休暇も設定しておきます」

「お前もだんだん大本営に染まって来たな。或いは元からか？」

その言葉に、足立将補も娘を見やる。

「偉大なる父を、反面教師として育てて来ましたので」

「ふふ。母さんと三人、たまには東北旅行もいい、と言うことだな？」

「そういう事です。まずは宮城の岩沼、宮戸島、女川、南三陸、気仙沼の各鎮守府から当たりましょう」

「うむ……最近では、羽佐間陸准将補の女遊びも、極めて少なくなっているようだしな」

「噂によると、嫁シフト制度で毎日陸准将補殿をお離しにならないそうですよ。入籍された女性との間には、お子さんも出来ているとか」「全く器用なやつだ。うちなんぞは、カカアと娘で手一杯なのになあ」「良いじゃありませんか？手の掛かる娘は、嫁に行っただんですから」
嫁が七人もいる羽佐間陸准将補のことを思いやると、羨むべきか、大変そうだと思うべきか？

何にせよ自分には無理だ、と大きな溜め息を吐く。

そんな父を見ながら、笑いを堪え切れない秋奈だった。

こうして足立一家は、東北への査察旅行に向かうことになった。

そこで、色々なドタバタと遭遇することになるうとは、今の彼等は知る由もなかった。

査察がやってきた！Ⅱく足立将補の査察く

「ああ、疲れた……………」

宮戸島の民宿に辿り着いた足立将補は、大きな溜め息を吐いた。行く先々で、鎮守府運営《以外》のトラブルに巻き込まれていたのだ。

今回は、宮本東北警務隊長に地本業務に専念してもらう為、警務隊員も連れず、副官と夫人で行ったのが大失敗だった。

トラブルが無かったのは、南三陸と気仙沼くらいなもので、それも、真っ先に行ったのが大失敗だった。

武藤提督と艦娘達の熱愛を目の当たりにした、足立早苗夫人が激発して、その日滞在した旅館では、娘が躰を搔いて寝ているところへ、それはもう激しい夫婦の営みがあった。

娘から、『ゆうべはお楽しみでしたね？』とニヤニヤしながら言われると、夫婦揃って赤面する事になった。

気仙沼では、大村奈々海が幼女化している、ということを除けば問題はなかった。こちらも、丁度日本に帰って来ていた大村奈々海の旦那とのアツアツぶりを、胸焼けがするほど見せ付けられたのだ。

その晩の、旅館での出来事は言うまでもない。

次に赴いた岩沼鎮守府では、羽佐間夫人の紗花が両手に匕首を持って、鎮守府から出ようとしているのを、羽黒が必死で止めている、と言う騒動に巻き込まれてしまった。

聞くところによると、羽佐間眞一郎陸准将補がチョット一回のつもりで、逆ナンされた女子大生と一夜を共にして、朝帰りしたところに丁度足立が査察に入ったのだ。

執務室内では修羅場が発生しており、艦娘達に説教されている眞一郎と、あらゆる手段を尽くして突き止めた住所に、匕首二刀流で殴り込みに行こうとするヤンデレ紗花を必死で止めている羽黒、と言う信じられない光景を目の当たりにしたのだ。

「うふふ。ちよつとあの女を、バラバラにしてくるだけですよお」

「駄目です！紗花さん!!お腹の子に障ります!!」

早苗夫人は度胸のある人だが、秋奈は腰を抜かしてしまっていた。「何と言うか、極道の妻ですわね」

とは、早苗夫人の言である。

足立将補・秋奈が、紗花に10時間ほどお説教と云う名の説得をして、何とか納得させて旅館に帰って来た時には、父娘共々ぐつたりとなっていた。

次に向かった女川では、夫婦喧嘩真つ最中の桐山提督と神通の仲裁に入った。

最終的には、仲直りすることになった。

そして、その足でやって来た宮戸島鎮守府である。

何が起こったかは、お察しである。

その日には鎮守府には入らず、旅館で一泊してから査察に入ることにした。

旅館から出ると、電と薄雲が待っていた。

「閣下、お出迎えに参上したのです」

「鎮守府までご案内します」

「なぜこの民宿にいると?」

「民宿の親父さんから聞いたのです」

「ゆうべはお楽しみでしたね?」

にんまりと笑う艦娘達に、固まる足立夫妻。

「!?!」

「あははは。お父さん達、年考えてくださいいよ?」

と、大爆笑している副官で娘の秋奈。

「全く……守秘義務とかはないのか……?」

ブツクサ言いながら、鎮守府にやって来る。

鎮守府前では、直哉と卯月そして番長と愉快的仲間達オールスターズがお出迎える。

「……え?」

人数の多さにキョトンとしていると、タクシーがやって来る。

タクシーからは、大荷物を持った神通が降り立った。

「高菜提督、家出して来ました。今日からお世話になります！」
「……………」

昨日の説得が、無駄に終わった瞬間だった。
お互いに自己紹介を終えると、足立将補は多少混乱し始める。

「愛くんの所のお友達は覚えておる。それで、その彼女がいるというのも判る。寛太くんの彼女は、この間の刃物娘の妹さんなのも判った。慎くんは、なぜ彼女が三人もいるのかね？」

「それは、もうあたし達、慎じゃないと満足できないカラダにされちゃったからあ」

「それな」

「うん」

あつけらかなと、白昼堂々そんなことを言うギャルズの頭を、ペしペしと叩く慎。

「やん！」

「いたっ」

「きやつー」

「足立将補、申し訳ありません。コイツラには、後で厳しくお仕置きしときますので」

お仕置きと聞いて、何故か喜んでいるギャルズを尻目に、慎が深々と頭を下げる。

「う……………うむ……………」

苦笑いしか出て来ない足立将補。

「まあまあ、あなた。高菜さんのお弟子さんなら、三人くらいいても問題ないでしょう」

「羽佐間准将補なんて、七人いますからね」

嫁と娘が、真っ先に適応している。

「そんな訳で、この子達は宮本さんから名誉隊員に任命されて、子供達の勉強の面倒を見たり、島でのPR活動をしたり、ボランティアをやってもらったりしてるんですよ」

「ほう。民間人交流としては、モデルケースとすべきだな」

応接のソファーに座ると、史絵がお茶を出す。

可愛い史絵は独り占めしたい、と言う圭一の意向により、瓶底眼鏡の地味子モードである。

番長と愉快的仲間達は、今日も勉強用の大テーブルで勉強中である。

今日は、皆学校創立記念日でお休みなのだ。

「うん、お茶も丁寧に出していて、いいお嬢さんだな」

「そうですわね」

ソファに座っている足立夫妻は、微笑ましくその様子を見ている。

副官である秋奈は、その後ろに立って控えている。

その対面には、直哉と電と卯月が座っており、薄雲が後ろに立って控えている。

「俺の彼女だからな！」

自分のことのように自慢する圭一に、顔を赤らめる史絵。

それを見て、微笑ましげに笑う足立夫妻。

「ねー、オジサン達って、エッチとかしてんのお？」

「!?!」

礼儀のかけらもない、望の爆弾質問に固まる足立夫妻。

直哉は頭を抱え、三人の艦娘は溜め息を吐く。

ばしつと、慎が再び頭を引つ叩くと、

「足立夫妻、失礼しました」

と、頭を下げる。

そんな中、大爆笑をしているのは娘の秋奈だった。

「そう言う、JC達はどんなのよ？」

秋奈は冗談半分で返すと、優花は、

「まだだよお？」

とほんわか答え、史絵は顔を真っ赤にする。

そしてギャルズ達は、

「してるに決まってるじゃん、何言ってるの？」

「それな。昨日は、学校でしたよね」

「だね。その後、公園の雑木林でもしたよね」

と答えて、また慎に頭を叩かれる。

「全く君達は。師匠の上官の方がお見えになってるんだから、きちんとしなさい」

「「はぁーい」」

慎が、ツツコミ役でお説教をしている。

気を取り直した足立将補は、直哉と真面目な話に入る。

「まあ、最近はどうなんだね？他の警務隊では東北は緩い、どんどん攻め込め、と言う声も上がっているが？」

「それこそナンセンスですよ。近海防衛とシーレーンの確保さえしておけば、深海棲艦はトドや海獣と一緒にです。それに、自衛隊の専守防衛に反します」

「確かに……………」

「他の地方では、警務隊とのトラブルが起きてるみたいですね。愛ちゃんは、自衛隊の有り様に不信感を持ってますよ」

「あの一件は、直ぐに私がやめさせるように命令を出した。東北出発前に、各地方の警務隊には提督の自由裁量を尊重するよう、訓令を出しておいた」

「足立閣下も大変ですね。組織が大きくなるとコントロールも難しくなるし、組織は末端から腐って行きますからね？」

「全くだ。だが、これ以上提督を更迭しては、日本の防衛も覚束無くなる。微罪は、見逃さざるを得ないのが実情だ。それに、大罪を犯したものは《何故か》天罰のように消えて行くしな」

「全く困った話ですよ。抑々、深海棲艦が全面戦争を望んでいるかもまだ分かってないのに、全面戦争しよう等とはナンセンスですよ」

「確かに。全面戦争を望んでいたら、今頃焼け野原だからな」

足立が感慨深げに語ると、外からバイクの音が聞こえて来る。

そして、

「原 圭一を出せえ！」

と、声が聞こえて来る。

「あっちゃあ、この間ヘッドをやっつけた暴走族か」

圭一は、溜め息を吐きながら立ち上がり、学ランを羽織る。

「どうということなのだね？」

足立が同じく立ち上がり、圭一に問い質す。

「いやあ、ギャルズの先輩の女の子にちよつかい出す暴走族がいたから、ヘッドをシメたんですよ。そしたら報復かな？ちよつと潰して来ますんで」

「待ちなさい。私が退去するように、警告を出そう」

そう言うと、圭一を制して外へと出る。

「君達！私は、自衛隊大本営警務部長足立昭彦陸将補である。ここは自衛隊の敷地内である。速やかに退去しなさい！これは警告である。退去しなさい！」

数台のバイクに跨って、鎮守府の門を囲んでいる暴走族に向かって、足立将補が毅然と警告を与える。

「うるせえ!!やるかじじい!?!」

「何だど?!」

次の瞬間、一番先頭のバイクに跨っていた暴走族は、一気に距離を詰めた足立に、見事な背負い投げを決められていた。

「ゲホッ、ゲホッ!!」

他の皆が出て来た時には、暴走族を一人無双で片付ける、足立昭彦陸将補の姿があった。

「あいたたたたたた……」

暴走族を駐在さんに引き渡した後、足立は腰の激痛を訴えて、ソファーに横たわっている。

「明らかにぎっくり腰ですね」

往診にやって来た笹野先生が、腰に湿布薬をぺたりと貼る。

「お歳なのに、無理するんだから」

娘の秋奈が、苦笑いしながら声を掛ける。

「全く。柔道六段だとは言え、無理はしないでくださいまし」

早苗夫人が、暴走した夫を諫めるように声を掛ける。

『じゅ、柔道六段!?!』

番長と愉快的仲間達が驚く。

「そうだよ。足立さんは柔道六段で、師範も務めている。格闘上級徽

章を付けてる時点で、気づくべきだったねえ」

執務机の、エグゼクティブチェアに座りながらふつと笑う直哉。

「いやはや。骨休めのつもりが、ドタバタでしたねえ」

副官の秋奈が、くすつと笑うと、

「どうも私にとっては、仕事で骨休めのようらしい。東京に戻って、各警務隊長をいかにコントロールするかに腐心しよう」

そう苦笑いを浮かべながら、漸く起き上がる。

こうして、足立昭彦の休暇にならない休暇は終わりを告げた。

『……という訳で、各警務隊は足立陸将補の嚴重命令で、今までどおりになったよ』

東北警務隊長を兼任する、宮城地本本部長宮本一佐が連絡をくれたのは、その数日後だった。

「宮本さんも大変ですねえ」

直哉は、苦笑いを浮かべる。

『私は、広報ごときが、と言われるだけで済むからいいのさ。君達が不正をやるなんて思っちゃいけないからね。今までどおり、提督の自由裁量に任せるよ。それが一番の道だと思う』

「そうですね……助かります」

『では失礼するよ』

宮本一佐は温和な声でそう言うと、電話を切った。

「ところで、神通はいつまでここに居るつもりなのかね？」

神通の家出は、未だに続いている。

兄と妹の狂想曲

『二度と電話を掛けて来ないでください』

愛弟子の言葉が、何回もリフレインする。

「はあ……」

直哉は、ジメジメしている梅雨の中、陰鬱な気分で昼過ぎを過ごしていた。

敢えて誰にも、愛の置かれている窮状を伝えていない。

足立暴走事件の後、大貫から四国は何とかするから手出し無用、との連絡も入ったのだ。

「世の中何をやっても駄目なことばかり、どうせ駄目なら酒飲んで寝よか」

いつもより多く、ブランデーを紅茶にトポトポ入れていると、電が見咎める。

「直哉、最近酒の量が多いです」

「そうかい?」

「それに、使途不明金が発生してるのです。まさかとは思いますが、全部酒ですか?」

「まあ、そんなようなもんさ」

「飲み過ぎなのです」

腰に手を当てて、ぶんすかしている。

そういう自分も、今日のおやつはモンブラン（1ホール）なのだ。

「そういう君は、何でモンブランをワンホール食べてるんだい?」

「女子は甘いものは別腹なのです。艦娘は糖尿病知らずなのです。人間と一緒にしないで欲しいのです」

「まあ、墮落はしていくけどね」

偉そうに言っている電にツツコミを入れたところで、執務室の扉が開く。

「昼間から飲酒に、おやつとはいい身分だねえ」

「電ちゃん、お久しぶりですわ」

入って来たのは『必殺仕事人』こと村上兄妹である。

「何だ、浩助に有紀か。何しに来たんだい？」

紅茶入りブランデーを飲みながら出迎えると、浩助は肩を竦める。

「随分なぐ挨拶だね。休暇を取ったから、宮戸島に骨休めに来たんだよ」

「皆さんお変わりありませんか？」

村上兄妹は、遠慮なくソファーに腰掛ける。

そんな中、ギャルズWith慎がやってくる。

慎は、短ランの前ボタンを外して黒Tシャツに、対ギャルズツッコミ用プラバットを持っている。

ギャルズ達は、いつものパンツが見えるくらいの超ミニスカセーラー服である。

「師匠こんちわ。あれ、神谷騒動の時に怪我してた人……確か有紀一尉」

神谷騒動の時、慎は診療所で有紀に出会ってたのだ。

「あら、お久しぶりですわね、たしか健太さんの友達の……慎くん？」

「はい、お久しぶりです。お怪我はどうですか？」

「おかげ様で、よくなりましたわ」

そう会話を交わしていると、ギャルズ達が割り込んで来る。

「シンくんの新しい彼女？」

「もうやった感じ？」

「浮気はだめだよ」

その瞬間、場がピシッと凍り付いた。

「うふふ、私は兄様以外はあり得ませんわ。変なこと言うと、ぶち殺しますわよ？」

「ゆ、有紀、取り敢えず銃を向けるのはやめようか？」

そう、ギャルズ達に銃を向けていたのだ。

「ひえっ!!」

「撃たないで!!」

「ヘルプ！」

ギャルズ達は、三人共両手を上げてフリーズする。

「うわ、紗花さんよりおっつかねえ」

慎はぼそつと呟いた。

「おいおい、有紀。うちの鎮守府で殺傷沙汰はやめてくれ」

直哉が他人事のようにそう言うと、有紀はニコニコしたまま銃を下ろす。

「ところで、お隣の人はその有紀さんのお兄さん？」

「もうやった感じ？」

「キンシンソーカン？」

「おい！こら！お前等！」

懲りてないのか、またデッドボールな質問を投げ込むギャルズ達の頭を、ぽかっぽかっぽかっつとプラバットで叩く慎。

最近は遠慮が無くなったのか、割と強めにぶっ叩いている。

「きゃん！」

「やん！」

「いたっ！」

三人共、頭を抑えて慎に抗議する。

「二何すんのよお！」

「アホか、お前等？近親相姦なんてある訳ねーだろ？有紀一尉達に失礼だろ？」

そう、バット片手に腰に手を当ててギャルズ達を叱るが、

「あるよ、やった感じだよ」

「ですわね、もう毎日」

平然と応えるこの兄妹に、今度は慎がフリーズする。

助けを求めるように直哉の顔を見ると、直哉は肩を竦めて、

「こいつ等、病的なブラコンでシスコンだからね」

と、遠慮なく物を言う直哉。

ギャルズ達と有紀と電は、ケーキを食べながら猥談で盛り上がりつつ、男子達は勉強テーブルでおやつタイムだ。

「兄様の*****は*****で*****に*****して……それで、首を締めてもらおうと*****が*****って……」

「うわあ、えぐいのです」

「ちよーやばい感じ」

「それな」

「うん」

女子達の会話内容は非常にエグいものであり、ギャルズ達が却って勉強になる、と言わしめるほどだ。

慎は、ギャルズ達が悪い影響を受けそうで、先が思いやられるなあ、と思いつながら聞き流している。

「しかし、鎮守府運営はいいのかい？」

「ああ、大丈夫。最上と三隈とボノがいるから」

「そうなのか？まあ、それならいいか」

浩助の答えに、納得仕掛けている直哉に横から、

「ちやあんと、『旅に出ます。探さないでください』って書き置き残しましたわよ」

と、どこかズレた回答をする有紀に直哉は、

「それ大丈夫なのか？」

と、疑問を呈さずには居られなかった。

「哨戒終わったぴよん」

「今日は賑やかですね」

扉を開けて、哨戒組も入って来る。

「卯月、久しぶりだね」

「お、村上提督に、有紀一尉。今日はどうしたぴよん？」

「うん、骨休めに旅行かな」

「卯月の顔を見に来たんですわよ」

有紀の言葉を聞くと、卯月はぱあつと明るくなる。

「おー、それは嬉しいぴよん！」

「よかったですね、卯月」

ぴよんぴよん飛び跳ねる、卯月の頭を撫でる薄雲。

「ところで、他の連中はどうしたんだ？」

「ああ、圭一と史絵さんは史絵さんちでおうちデート、泊まるってさ。」

寛太と優花は寛太んちでゲームやるってさ」

肩を竦める慎に電は、

「寛太はおこちやまなのです」

と冗談めかして言うのと、ギャルズ達も同調する。

「ねー、ドーターと処女が許されるのは小学生までよねー」

「それな」

「だね」

その言葉に、有紀がリリースする。

「えっ……?」

「どうしたのですか?有紀さん」

電がリリースしている有紀を覗き込むと、目に大粒の涙を溜めてい
る。

「うっ、うわああああん!!!」

突然の大号泣である、おいおいと泣き出したのを、慌てて浩助がソ
ファまで行つて抱き寄せる。

「ど、どうしたんだよ?」

「だってえ、私達初めてしたのハタチの時ですもの!!!兄様が優し過ぎ
て、振り向いてくれないのがいけないんですの!!!」

兄である浩助を、ぽかぽか叩きながら泣き続ける有紀。

ギャルズ達は、最初は意外と清純だったんだ、と三人共認識を改め
ている。

「おいこら!お前等!!アホか!」

「「やんっ!!」」

当然ながら、ギャルズ達は慎からのバットの刑を食らう。フルスイ
ングでど突かれる。

「いや、あの?」

「ちよつと待て!」

困惑している浩助に、はっと思ひ出したようにツッコむ直哉。

「お前等、防大でやったんかい!」

「うん、そうだけど?リネン室で……」

さも当然のように答える主席卒業生に、直哉は大きな溜め息を吐い
た。

そんな中、有紀はおいおいと泣き続けている。

「あ、で、でも有紀さんは目が可愛くて素敵なのです」

「そ、そうチョー可愛い。青と黒で」

「それな」

「うん」

困ったように、有紀の金銀妖眼ヘテロクロミアを褒める電とギャルズ達。

「あっ！」

それが、地雷であることを知っている直哉と浩助は、顔を見合わせた。

そして、地雷であることに気づいた慎は、

「あのバカ共……」

と苦い苦い顔をして、フルスイングの準備をする。

「う……うふふふ……」

今度は笑いだした有紀に、ギャルズ達は三人で身を寄せ合う。

「ゆ、有紀さん」

「こ、怖いよ」

「うん……」

電は地雷を踏み抜いたことを悟り、ソロリソロリと敵前逃亡した。

「聞いてくださいまし。この目には深い深い呪いがありました……私の母は海外の男と浮気をして、その男との間に生まれた忌み子が私……うふふ……」

そんな暗い暗い話をし始めると、望が笑顔で、

「それじゃあ、ハーフ!? チョー可愛いからそう思ってたんだ」

と脳天気言い始め、奈緒子と櫻子もそれに続く。

「それな、栗色の髪の毛も可愛くていい感じ」

「うん、浮気が何さ? 慎なんて、私達三人でシェアしてるんだよ。私等、経験人数二桁だし」

有紀は、キョトンとした顔になった。

今まで、そんな事を言ってくれる人は一人も居なかったからだ。

「に……兄様あ!! 私っ、この目で、この髪で、初めて褒められましたあ!!!」

「うん、良かったね…有紀」

今度は嬉し泣きである。おいおいと泣き出す有紀の頭を、優しく撫で続ける浩助。

そんな有紀を、ギャルズ達も頭をナデナデし始める。

「ふっじゃねえからな、こいつ等」

慎は、ポケットに手をつ突っ込んで、フルスイングしようとしたバツト片手に、

ぼそつと毒を吐きながら、心の中でギャルズ達に拍手をしていた。

自分の最大のトラウマである、ヘテロククロミア金銀妖眼と栗毛を褒められた有紀は、上機嫌であった。

場所を高菜家に移してからも、陽気に楽しくグビグビお酒を飲んでいる。

ワインの瓶を、片手でラツパ飲みである。

「うふふ、可愛いって♪青と黒のお目々♪栗色のお毛々♪」

「チョー可愛い。有紀さん、のんが食べちゃいたいくらい」

「それなく」

「だね」

四人で肩を組んで、陽気に楽しく歌いながらである。因みに、ギャルズ達はお酒を飲んでいない。

「てなことを、うちのバカ共は言ってるんですが、いいんすか？」

「女の子はノーカウントでしょ？」

「はあ」

兄の方は兄の方で、常識がズレてるのを感じた慎は、浩助のグラスにビールを注ぐ。

「こいつ等、常識が狂ってるからな」

「なのです」

「ぴよん」

「ですね」

さも他人事のように言っている直哉達に、慎が、

「いや。嫁三人とか、あんた等もおかしいっすよ？」

と、ツツコまずにいられない。

「うふふ、いいじゃないですかあ。と云うか慎くんだったて、中学生なのにお外で致したんでしょお？」

慎がお手洗いで中座した時、ギャルズ達から聞いた情報を暴露すると、慎は件のプラバットでぽかっぽかっぽかっぽかっ頭を叩く。

「何！話して！…んだよ！…お前等!?!」

「きやん！」

「いたっ！」

「やん！」

「あたっ！」

序に有紀まで叩いてしまった慎は、やべっと思つて振り向くと、浩助は呑気な顔をしてる。

「あ、すみません、つい勢いで」

「ううん、いいよ、有紀叩かれるのも好きだから。もつと強くても良かったんだよ？そのバット碎けるくらいで」

「いや、そういうことを聞いているんじゃねえすよ!?!」

慎は、この兄妹の常識のズレ方に従って行けていない。

そんな、コントを繰り広げている状況を、直哉達はにまにまと眺めている。

「彼奴等はいろいろ影を背負ってるからな？…こういうところで発散するのもあり、さ」

「なのです」

「びよん」

「ですね」

「綺麗に纏めようとしてるんじゃねえよ!?!」

慎のツツコミが、高菜家に木霊した。

「このクソ提督！…どっほっつき歩いてるのよ!?!」

因みに、有紀の残した置き手紙に方々探し回つて、宮戸島にやって来た激おこな曙が迎えに来るのは、その数十分後である。

東北警務隊員の憂鬱

大本営警務隊は警務本部に格上げとなり、今までは足立昭彦が、全国を旅から旅で査察をしていたのが、その権限を取り上げられてしまった。

「自由裁量を掣肘するには自由裁量を」

そんな言葉まで出ている、提督の自由裁量への対策だが、

この東北でも査察の数が激増した。

そんな、警務隊員の憂鬱の物語である。

「へいらっしやいー」

仙台のとある居酒屋。いつも仕事を終えた警務隊員が集まる、憩いの場である。

今日は、五人連れがやって来る。

今日は宮城県内の鎮守府一斉査察で、皆一仕事終えて来た後である。

いつものお座敷席に通されると、「取り敢えず生中」と言うことになる。

焼き鳥や唐揚げ等、食べるものも注文して行って、一通りの注文を済ませる。

生ビールとお通しが出されると、蒸し暑くなって来たこの梅雨の時期、

生ビールで乾杯となる。

「そんじゃ、お疲れ様です」

『おつかれーっす』

グビグビグビ

『ふはあーっ』

五人の吐息が重なると、各々ビールジョッキを置く。

隊員の一人——坊主頭が口を開く。

「聞いたか？室戸鎮守府が利敵行為容疑で大査察だつてよ。トラブル起こして、司令官のプライベートまで暴いちゃったそうだけ？」

別の隊員——メガネが唐揚げをつまみながら、

「何でもあそこの鎮守府、女子中学生が司令官だろ？女の子を持つ親としては辛いわー。マジで何考えてんだろな？」

その隣りにいた隊員——ヒョロ長が、顔を青褪めさせながら一同を見回す。

「僕、ミヤ^宮本^本さんの電話聞いちゃったんだけどよ。そのあと、謎の深海棲艦の攻撃で高知駐屯地諸共、四国警務隊殆ど全員死にしまった……って話だよ……クワバラクワバラ」

その言葉に全員が、

『うわー……』

と声を漏らす。

その後、ビールを再び飲み始めた東北警務隊副長幸田一尉が、皆を見回しながら口を開く。

「しかし、自由裁量で査察しろ。って言われても、現場は現場で困るのよね。ほら、うちの隊長は『広報さん』でしょう？」

広報さんとは、宮本一佐に対するある意味《蔑称》である。

「その宮本一佐は、警務隊業務に関して『全て君達の裁量でやってくれ、提督の自由裁量をなるべく尊重してあげてね』としか言わないし、ツイッターばっか更新してるし、ある意味丸投げよ。そう言えば、七原准将が東北観光にお見えになるから、って東北の観光スポットのりサーチばかりやってたわ」

最後に二杯めのビールを注文しながら、軽巡洋艦・球磨が口を開く。「と言うか、東北の提督達は問題児揃いクマ。また北海道に戻りたいクマ」

そんな球磨に、坊主頭が詭うように野次る。

「だから警務隊なんか飛べされんだよ。何で艦娘がクマ退治したり、シヤケ捕獲やってるんだよ!?熊かお前!?!」

「球磨は球磨だクマ、熊じゃないクマー!」

そう言うと、二杯目のビールを口にして、

「今日、女川の査察に行つて来たクマ。それはもう大惨事だったクマ」
大きな溜め息を吐いた球磨は、唐揚げを頬張りビールで流し込む

と、ドンツとジョツキを置く。

「球磨が女川鎮守府に行ったら、神通と桐山二佐の怒声が聞こえて、ガラスは割れてる、執務机は砲撃で木っ端微塵、金剛四姉妹や陸奥は顔面蒼白で見てるだけ、神通は鎮守府内で砲撃するわ、桐山二佐は物陰から罵るわ、球磨が必死で止めなかつたら殺傷沙汰クマ」

『うわあー』

残りの四人は、『今日』女川の当番じゃなくてよかった、と思いいながら声を漏らす。

「それで結局、神通は家出して、武藤南三陸鎮守府レストランに食事に行っちゃったクマ。後片付けをやったり、一緒に始末書書いて修理手配を掛けたり、壁の補修や床の掃除、査察どころじゃなかったクマ。明日土曜日だけど、休日出勤で査察クマ」

憤慨しながらビールを飲む球磨。飲まなきゃやってられない、って雰囲気である。

神通が何故来たか、やっと得心が行ったメガネが愚痴り出す。

「あー、だから神通が来たのかー。南三陸は、査察ご自由に……って感じんだけどさー、武藤のヒゲハゲ、プライベートを自ら公開しようとして来るんだよ。やれ、これは三人とどこどこにいった写真だ、どれこれには出撃何回記念だ、艦娘と仲がいいのは結構んだけどさー、こっちは査察で来てるんだからなー。武藤のおっさん、元経理だから財務状況は綺麗だし、過剰に艦娘を愛するから、査察する余地全然ないんだよねー。でも、はいサヨナラで帰る訳にも行かないから。報告書書かないといけないからね」

そう言うと、ビールをぐびっと飲んで続ける。

「延々四時間ほど惚気話を聞かされてさあ。早くうちに帰って娘の笑顔を見たい、って思っちゃったよ」

『だったら、飲んでないで早く帰れよ』帰りなさいよ』帰るクマ」

メガネ自身の惚気話に移る前に、四人がそうは行くかとツツコミ態勢に入る。

警務隊員の愚痴は続く。

次に口を開いたのは、女性副長の幸田一尉である。

「あたしは岩沼に行ったんだけど、殺されかけたわ」
『えっ?』

初っ端からハイペースな告白に、一同ギョツとなる。

「岩沼ってところでお察しして欲しいんだけど、羽佐間陸准将補。あの無類の女好きじゃない? 気障で。それで跪いて、あたしの手を取ってキスをして『今晚夕飯でもいかがですか?』なあんて言うのよ。…………その瞬間、ヒ首が目の前を通過していったわ…………」

思い出すと、背筋が凍り付く思いの幸田一尉がビールを一気に飲みまして、日本酒を注文する。

「えっと、ヒ首クマ?」

堪りかねて幸田一尉に聞き返す球磨に、幸田一尉は首を縦に振った。

「日本酒お待ちどおー」

店員さんが、マスの中にコップの入った冷酒を持って来ると、コップを手に取りぐびっと呑む。

店員さんが下がったのを見計らって、声を落とすと、

「ヒ首よ。あの、ヤクザ映画とか任侠時代劇で出て来るヒ首。飛んで来た方向を見ると、目のイツちやった女の子が、もう一本ヒ首構えて笑ってんのよ。羽黒が必死に止めてなかったら、二階級特進して二佐になってたわ。岩沼って時点で、あんた等と任務交代できないか? って思ってたけど、やっぱりお察しだったわ」

『うわあ…………』

全員顔面蒼白である。

「それで、査察をやらせてもらったんだけど、常にその女が付きつきり。刃物は没収されたけど、何と言うか焦点の合ってない眼で、こつちをじーっと見詰めて来るのよ。生きた心地しなくって、何を査察したか記憶に無いわ。報告書書かれてたから査察はしたんだろうけど、何か記憶が抜け落ちたと言うか…………」

「副長、呑むクマ」

「そうだね」

球磨が、ぽんと幸田一尉の背中を叩くと、日本酒を一気に飲み干す。

そんな様子を、坊主頭が乾いた笑いをしてから慰める。

「ハツハ、副長は美人だから損だな。俺なんか『ガキのお守り』だったわ。気仙沼鎮守府だったんだけど、まず提督が幼女だろ？明石の幼女化ドリンクを飲んじまってよ、うちのガキと同じくらいじゃねえ？」

「あんだ、ガキって小一でしょう？そんなに幼女化してんの？」

幸田一尉が聞き返すと、坊主頭が「おう」と言っただけで続ける。

「それで実権は、皆娘の夏海ちゃんが握ってんの。ある意味、中学生提督だぜ。戦術は的確に出すし、経理関係の資料はきちんと整理して提出してくれるし、何から何まできちんと理路整然と説明してくれて、最後に『何か落ち度はありますか？』と来たもんだ。娘の方がよっぽど出来るよ」

そんな坊主頭にメガネが、

「楽そうではなかったじゃんよー」

と、軽いノリで加わって来る。

「そこまではいいんだが……こっちの落ち度まで指摘して来やがんの。ここの査察はいいんですか？とか、ここまだ見てませんよね？とか、可愛くねえ」

『……………』

全員が、生暖かい目で坊主頭を見遣る。

最後に、ヒョロ長が口を開く。

「皆はまだマシだよ。僕なんか問題児の巣窟の、《あの》宮戸島だよ。高菜ん所。行ったら、高菜二佐はタブレット弄りながらブランド入り紅茶——あれは紅茶入りブランドー——を飲んでるし。秘書艦の電は、バラエティ番組見ながら羊羹片手に緑茶飲んでるし。査察日くらい、まともに仕事してて欲しいよ」

大きな溜め息を吐いた。

「それで、途中から番長みたいな坊主と、ザ・地味子って女の子と、天然でネジが飛んでる女の子と、その彼氏と、ギャル三人と、バットに短ランの坊主がやって来て、査察の邪魔なんだったらありやしないよ。で、予め薄雲が査察資料全部用意してるから、僕は騒がしい執務室で目を通して終わり。そしたら、バット坊主がお手洗いに席を外

した途端、ギャルズに色目使われてさ、耳元で『あとで、シよ?』って……」

その言葉に幸田一尉が、

「あんたまさか、手を出してないだろうね!？」

と確認すると、ヒョロ長が目を逸らす。

「あつきれた!」

幸田一尉が憤慨すると、ヒョロ長が慌てて、

「違うんだよ。まだ査察してないところがある、ってギャルJCTリオに隣の建物連れ込まれて……その流されて……ちよつといい思いをさせてもらいました」

「最低ね」クマ

ジト目で見る女性陣に、羨ましそうに見る男性陣。

「二応、彼氏のバット坊主に謝ったんだよ。そしたら『あー、このバカ共がご迷惑お掛けして申し訳ありません』って逆に謝られて。ギャルズは、プラバットで頭ボカボカ殴られてたよ。何と言うか、あの彼氏大物になるわ」

遠い目をしていた、バット男こと慎の顔を思い出すと、苦勞が多いだろうなあ、と思いながらビールを飲み干す。

「そんで高菜二佐は、サボってるくせに定時前に「うちの定時は1500」とか言って、勝手に仕事切り上げてんのよ。自由裁量だからいいんだけど、さつきまでサボってたよねあんた等?」って。そんな報告上げられないから、テキトーに報告書書いちゃったわさ」

そう言って溜め息を吐くと、全員揃って溜め息を吐く。

「自由裁量って怖いわね」

皆の意見を代弁するように、幸田一尉が溜め息を吐く。

来週は、別の県の査察がある。

宮城県内の提督に限らず、東北地方の提督は、皆個性的なのだ。

「やあ、〴〵苦勞さん」

そこにやって来たのは、警務隊長にして宮城地本本部長の宮本一佐だ。

全員が座ったままで敬礼するのを、手で制す。

「皆、査察ご苦勞だったね。どれ、今日の飲み代は私が出そうじゃないか？」

そう言つて、宮本一佐も席に着く。

「隊長は、例の計画は終わったんですか？」

幸田一尉が問い掛けると、ああ、と言いながらやつて来た店員にビールを注文して見送ると、

「七原准将夫妻の東北旅行の一件だね？リサーチは終わつて、後は先方さんとのスケジュール調整待ちだね。何せ、東富士の教導隊長殿はご多忙だからね」

席に届けられたビールを片手に、改めて乾杯をしながら宮本一佐が答える。

「どうだい？自由裁量の査察は。皆のびのびと出来ただろう？」

にこやかに言う宮本一佐に、全員は苦笑いするしか無かった。

日本には、こういう可哀想な警務隊員も居ることを、心の片隅に置いていて欲しい。

変わる政治

六月という月は、ドタバタの連続だった。

まず、大貫 悟大本営幕僚総監が暗殺された。

それは、突如行われた記者会見でのことである。

「諸君。本日の記者会見ですが、私は《重大な真実》を伝えねばなるまい」

その直後だった。自衛官の服を着た男が飛び込んで、大貫に銃を発砲した。

銃弾は胸を貫通して、大貫は《青い血》を吐いた。

記者達が騒然とするのを、大貫は手で制した。

銃撃犯はすぐに取り押さえられ、大貫は言葉を続ける。

口元から血が溢れているが、毅然としている。

「見ての通り、私は人間ではなく、深海棲艦である……まずは国民の皆さんに侘びねばならない。深海棲艦との戦争は、私と深海棲艦の提督とのマッチポンプだったのだ。それには理由がある。私は、人類が滅びた未来から来た未来人なのだ。深海棲艦と艦娘は表裏一体であり、何れかが滅びればもう片方が滅びる。私はその両者が滅びた世界からやって来た大垣守という人間だ。私達は、深海棲艦と艦娘が共に居なくなった時、ジレーネという海の魔物に世界を滅ぼされた。ジレーネとは……」

再び別の自衛隊員が飛び込んで、大貫に銃を撃ち込む。

左胸が貫かれて「うぐつ」と血を溢す。

すぐに銃撃犯は取り押さえられて、記者クラブの扉が閉じられる。

「ジレーネ……とは……日本軍の制服を着た艦娘……まさに、人類に罰を下さんとする……神……深海棲艦は敵ではない……知性のないものが害獣と化すのは仕方がないが……心も……感情も……ある……我々の仲間……だ……そしてもう一つの敵は……艦娘の身分を……遅々として……進ませない……この国の政治中枢そのものだし……どうか国民の皆さん……艦娘を受け入れ……共に歩んで欲しい……この国の政治家は……長寿不老の艦娘の社会進出を

……恐れ……艦娘を社会から……排除……しようとしている
……この国は……民主国家だ……皆さんが……考え……決めて」
その続きは放送されなかった。
爆弾を持った自衛官が、記者クラブの会見場に飛び込んで、部屋ごと自爆したからである。

その大貫の言葉は、国民を目覚めさせた。
怒れる市民達は、次々と国会前へ集結した。

「政府は艦娘を国民として受け入れろー!」

「政権を明け渡せー!」

「ジレーネと結託している政府を許すなー!!」

「大貫 悟暗殺の真相を話せ!!」

市民の数は、どんどん増えていった。

全国から集まった市民達は、数十万人にのぼっていた。

そしてその先頭には、高菜直樹・湊子夫妻や三友龍太郎・優衣夫妻も居た。

国会前デモ活動は連日続き、政府をどんどん圧迫していった。

マスコミはついに政府と決別し、今まで闇に葬って来たブラック鎮守府やその他不祥事を、どんどん取り上げるようになった。

更には、デモに進んで協力するようになった。

経済界も、戦後は艦娘を労働者として受け入れる声明を発表した。

そして政権は、市民からの圧迫、と言う憲政史上初めての理由で、解散総選挙に追い込まれた。

GHQ体制から脈々と受け継がれてきた日本という国に、新しい風が吹き込まれた瞬間だった。

自衛隊の足立幕僚総監代行兼警務本部長が、ジレーネの殲滅を発表したのは、その数日後の事だった。

国民は歓喜して、新たな時代の幕開けを祝福した。

英雄のいないその戦いでは、自衛隊全てが英雄だった。

季節は流れ、七月になっていた。

総選挙が行われ、現職議員がバタバタと敗れて行く、前代未聞の選挙となっていた。

選挙公示後、立ち上がった市民派の議員候補が現職議員に勝利し、議席を奪い取ったのだ。

そのトップには、艦娘と人間の融合の象徴だった高菜湊子が自ら立ち上がり、東京1区で大勝利を収めた。

そして東京2区には、妊産婦ながら立候補した三友優衣が大勝利を収めたのを皮切りに、

『日本国民艦娘会議』と言う政党が立ち上がり、党首に高菜湊子、幹事長に三友優衣を据えて、追加公認を含め八割の議席を占める、と言う大勝利を齎した。

高菜湊子は、史上初の女性且つ元皇族の総理大臣である。

高菜湊子政権最初の大事な仕事は、艦娘・深海棲艦基本法の制定である。湊子がこの七年間ずっと温めていたものである。

お付きの法学者を招いて、せっせと法案を作り、手許で温めていたのだ。

いつか、この法案を託せる人に渡せる日まで。

これが、彼女の所信表明演説である。

「さあ、皆さん。艦娘や深海棲艦と手を取り合って歩いて行ける時代がやって来ました。人間にもいい人や悪い人が居るように、艦娘にも深海棲艦にもいい人と悪い人が居ます。深海棲艦の一部は動物と同じものですから、迷惑を掛けたら退治しなくてはなりません。人間と同じ心を持った個体には人間と同じように接するような社会がやって来ます。これから、私達国民の手で。さあ、戦後は終わりました。これからは——」

——明るい未来です。

ここ宮戸島では、何も変わらないいつもの暮らしがあった。

変わったのは、親戚に総理大臣と政治家が増えただけ。

「当分の間は、ねじれ国会に苦しむだろうね」

その所信演説を見ながら、高菜直哉《一佐》は呟いた。

高菜一佐は、デスペラン要塞でジレーネを殲滅した一人として、昇進辞令を受けていた。

とは言え、相も変わらず宮戸島鎮守府で、のんびんだらりと暮らしている。

東北でもう一つ、大きな出来事があった。

宮本一佐が、総選挙に出馬したのだ。自動的に自衛官は失職となり、

見事当選し衆議院議員になった。

もちろん日本国民艦娘会議の幹部・国対委員長である。宮本一佐から宮本議員となった。

その、空席になった東北警務隊長には、羽佐間陸准将補が兼任となった。

まさかの査察する方とされる方の兼任である。

そんな訳で、実務は三佐をバイパスして二佐に昇進した、警務隊副長幸田美紅が指揮を執ることとなった。

彼女曰く「給料以上の責任を押し付けられた」である。

「ねじれ国会なのですか？」

秘書艦の電が首を傾げる。

「そう、衆議院の八割は日本国民艦娘会議だろうか？でも参議院は、今までどおりなのさ。今月末参議院の選挙があつて、半数が改選される。まあ、日本国民艦娘会議の圧勝だろう。でもまだ、半数は居るからね。厳しい政権運営の船出になるだろうね」

「ところで、艦娘・深海基本法というのはどういう物になりそうなのですか？」

「そうだね、艦娘の実態に合わせた法律適用法になるらしいよ。例えば電は見た目小中学生だろう？」

「なのです」

「それでは年齢で適用できないだろう？年齢適用に関する法律は艦娘

には適用しない、なんてことになるだろう。或いは被選挙権がどうなるか。それによって、国会議員の常識も大きく変わるだろうね。ずっと若く、老化のない艦娘が議席を占めるかも知れない。或いは、艦娘には選挙権を与えても、被選挙権は与えないかもしれない。何れにせよ、選挙に出た時点で艦娘としては失職さ」

「なるほど……電は政治家にはなる気はないのです」

お茶をズズツと飲みながら答える電。

「結局の所、海賊化した深海棲艦や艦娘、そして害獣化した深海棲艦。そういう連中の対処に、艦娘の必要性は変わらない訳さ」

「全く、困ったものなのです」

「まあ、東北は平和でいいものさ。さあ、今日も子供達が来る。その前に精々、給料分の働きをしようではないか」

「なのです」

そう言いながらも、仕事をサボっているのはいつもの彼等である。

気仙沼鎮守府の平和な(?)一日

七月の後半、また熊谷で日本最高気温記録が更新された時期だった。

まだまだ、熊谷や多治見よりは涼しい、ここ気仙沼鎮守府には、定期的に持ち回りで行われる艦娘大演習に、各鎮守府の提督達が集結していた。

岩沼鎮守府からは、羽佐間眞一郎陸准将補と妙高四姉妹、扶桑と山城。紗花を連れて来ると危険が危ない、という判断で、宮戸島の妹・優花のところで預かってもらっている。

南三陸鎮守府からは、武藤 廉二佐と長門に夕立、木曾が参加して、宮戸島のお気楽トリオと艦隊連結して、連合艦隊として演習に参加する。

女川鎮守府からは、神通がデスペラン要塞に家出してしまった為、代わりにハーフェンが寄越したのが軽巡棲姫。それと金剛四姉妹に陸奥、と言う艦隊である。勿論指揮官は、桐山 崇二佐である。

そして、主催する気仙沼鎮守府からは三笠に武蔵、大鳳に加賀、瑞鶴に翔鶴で、ロリ大村奈々海が指揮することに……なっていた。

筈だったのだが……

「大丈夫かね?大村二佐」

「ゲホツゲホツ……あー、大丈夫う」

大村奈々海は、風邪をひいていた。

「全く。暑いからって、スッポンポンで寝てるからこうなるんですよ」
夏休み突入の大村夏海が、腰に手を当てて片手で眼鏡をくいっと上げながら咎める。

「いやあ、最近暑くて……ゲホツゲホツ……」

「ああ、わかったわかった。今日の演習、気仙沼鎮守府は見学と言うことに……」

「なっちゃん、代わりやって……ゲホツ……ゲホツ」

奈々海の言い訳に、今日の演習は三艦隊総当たりでやろう、と考えている眞一郎に、奈々海はとんでもないことを言い出す。

「大村二佐、何を言ってるのかね？」

「いやあ……ゲホツ……たまにやつてもらっ……ゲホツ」

「ああもう。母さんは黙って、そこで横になっててください」

呆れた顔をしている眞一郎に、奈々海がゲホゲホ言いながら説明するのを遮って、夏海が奈々海を抱き抱えてソファーに寝かせる。

「で、夏海ちゃん、どういうことかね？」

「母さんがたまにドバイに行ってる間、鎮守府運営は実は私がやっています。妖精も見えるので、艦隊指揮も可能なんです。ああ、お氣遣いなく。母には負けない自負がありますので」

眼鏡をくいと上げて、挑戦的な目で見上げる夏海に、眞一郎はニヤツと笑う。

「では、元祖中学生提督の実力見せていただくか？気が強くて冷静沈着な娘とは、私の好みでね」

「宜しくお願いします」

夏海は、深々と頭を下げた。

「ところで、先輩。それ、神通じゃないですよね？」

然も当然のように並んでいる軽巡棲姫に、直哉がツツコミを入れる。

神通の制服を着せてはいるが、軽巡棲姫である。

「実はな、高菜……神通が家出してな……帰って来ないんだ」

神通と言い争いの末に、デスペランに家出したことを桐山が語る。

「で、デスペラン要塞に家出したと。全く、先輩のところは……今度は何で家出したんですか？」

しよんぼりしている桐山に、直哉が呆れ返って居ると、眞一郎が顎に手を当てて考える。

「これはアレかな？先日の岩沼での会議の折に、一緒に風俗に行ったのが不味かったかね？」

「そうなんですよ……」

『風俗!?!』

それに反応したのが、嫁達である。その日は紗花担当日だったが、紗花が夏風邪をひいて寝込んでいたので、担当無しデーだったのだ。

「眞一郎、それはどういう事ですか？」

「眞一郎、紗花が熱を出していたのに風俗とはどう言うことだ？居酒屋に行つて来ただけではなかったのか？」

「場合によつては、怒りますわよ？」

「……酷いです」

「山城は、一晩中看病してたんですよ？」

「ああ……不幸だわ……」

ざつと並び立つて、二人に迫る嫁達。

「い、いや、あのその……」

「風俗ぐらい、男たるもの誰でも行くから、良いだろう？」

しどろもどろになる桐山に、悪びれない眞一郎。

女川鎮守府の、偽神通ごと軽巡棲姫と金剛四姉妹と陸奥は、生暖かい目で見ている。

「まあまあ。その辺で許してやってくれないか？羽佐間さんも、多分心の中では反省しているし、何より紗花ちゃんに露見したら、風俗嬢の死体が発生しかねない。これは皆の胸のうちに仕舞つておこう」

直哉が、そう仲裁に入る。

「しっかし、風俗のどこが良いんじゃ？わしなぞ艦娘達の相手で、もうへトへトじゃよ」

「武藤提督は、もうお年ですからね？」

「はっはっは。最近腰の調子が悪くてのう。艦娘達からは痩せてください、と言われてのう」

「お腹も出てますからねえ」

仲裁そつちのけで世間話に入る二人に代わつて、夏海が仲裁に入る。

「皆さん、その辺にしましょう。所詮男は、そういう生き物なんですから」

そう艦娘達を宥めるが、眞一郎がカチンと来て噛み付く。

「そう言う夏海ちゃんは、《そういうこと》をする彼氏なんて居ないだろうから、そんな事が言えるんだろうけど……」

「恋人なら居ますが、何か？」

「……………え？」

そう詔った直後にスパツと切り返され、さすがの眞一郎も絶句している。

「私だつて中二ですから、恋人の一人くらい居ます。何かおかしい事でも言いましたか？」

「い、いや、意外だな……と思っただけで……どこまで行つたんだね？」

「何で、そこまで言わないといけないんですか？」

眞一郎がニヤニヤと詔うのを、冷静沈着に切り返す夏海。

「いやあね。処女に、女の道を説かれたくないだけさ」

「少なくとも節操なしの貴方と違って、プライベートはあまり公にしたくありませんので」

バチバチツツと火花が飛び散る。

「ほう、言ってくれるね。では提督の腕を見せてもらおうか？もし負けたら、一夜を相手してもらおう」

「眞一郎！」

その挑発的な物言いに那智が咎めるが、ぼつと夏海が手で制す。

「良いですよ。では、羽佐間陸准将補が負けたら……何をしてもらいましようか……………？」

「ふむ。負けたら、何でもしてあげようではないか」

「分かりました。では一回戦は岩沼と気仙沼、南三陸宮戸島連合と女川でよろしいですか？」

意地の張り合いは、こんな賭けへと発展する。

「だ、大丈夫なのかね？」

心配性の武藤が、不安そうに直哉に問うが、直哉はニヤリと笑う。

「ああ、あの子は紛れもない天才です」

「そうなのか？」

「攻守のバランスの良さは、大村以上ですよ」

そんなひそひそ話をしている中、夏海は一旦部屋に引つ込むと制服に着替え、海自の母親の帽子を被つて戻つて来る。

制服は元々セーラー服なので、そのまま水兵さんっぽく見える。

「では、三笠。行きましようか？」

「うむ、我々の全力を見せてくれよう」

そう言いながら指揮艦に乗り込む夏海。勝手知ったるかのように指揮艦を操縦しているが、勿論無免許運転である。

「さて、お前達。手加減するんじゃないぞ？」

そう言いながら、指揮艦に乗り込む眞一郎。

戸惑いながら、海に降りる妙高に直哉が、

「舐めて掛かると、手酷い目に遭うよ？」

と、警告して来る。

航空戦力の居ない岩沼鎮守府としては、一気に加速して距離を詰めるのが作戦で、

航空戦力中心の気仙沼としては、距離を取つてと言うことになる。

「まあ、インファイトには定評のある岩沼だ。大村の娘が天才とは言え、敗北は必至だろう」

アイステイを飲みながら自身の分析を語る桐山に、直哉は桐山の耳にヒソヒソつと何かを告げる、

「何だ?!まさか空母をそのように運用するとは……?!?それでは……」

「はい、ですから天才と言ったんです。それに羽佐間さんは陸戦の専門家であつて、戦略の専門家ではない、と言うことです。一緒に前線に出るくらいですから」

「大貫前総監も、彼女を室戸に行かせていけば良かったものを……」

「まあ、大貫さんの真意は、最早誰にも判りませんからね」

そう言うと、直哉も椅子に腰掛けてアイステイを飲む。

その隣で武藤が、双方の艦を演習モードにする。

3

2

1

「全艦突撃ー!」

眞一郎が、0になる前に密集突撃命令を出す、相手の陣形の違和感に気づいた。

間を広く取った複縦陣である。

武蔵と三笠が先頭で、右側が瑞鶴・翔鶴。左側は大鳳・加賀が続いている。

そして、一気に加速して行く……

お互いが交差した時、気づいたら羽黒が陸に戻されていた。

「バカな!?空母が副砲だど!」

そう。すれ違いざまに、空母を含めた六隻が副砲で、羽黒にクロスファイアを放っていたのだ。

そのまま、前方に向かって空母隊が航空機を発艦して、360度回転をしながら回頭する岩沼鎮守府艦隊を急襲する。

特に、翔鶴と瑞鶴は噴式爆撃機である。

「全艦広がれ!!」

「遅い!爆撃!」

眞一郎の命令虚しく、密集隊形のまま爆撃を受けると、先頭の妙高が撃沈判定で陸に戻され、回頭を終えた戦艦が前に出て撃ち合いになる。

夏海はジリジリと後退命令を出しつつ、距離を維持する。

眞一郎は、突撃するチャンスを狙っていた。

戦艦と空母の連携に、一瞬のスキが見えた時、

「全艦突撃!!」

その突撃は強烈だった。

「しまった!」

一気に距離を詰められた気仙沼艦隊は、加賀が撃沈判定で陸に戻された。

そのまま突破した岩沼艦隊が急速回頭を行った時、空に見えたのはすれ違いざまに発艦した爆撃機の群れだった。

これは、加賀をエサにしたトラップだった、と気づいた時には、岩沼の残りの艦娘も陸に戻されていた。

指揮艦から降りた眞一郎は、同じく指揮艦を降りて来た夏海に、ニヤツと笑って手を差し出すと、夏海は少し躊躇した後に握手に応じる。

「いやはや、空母に副砲を付けてのクロスファイアとは、恐れ入るね」
「上手く行つてよかったです。ところで先程のお約束、覚えていますか?」

「ふふ、何でも言い給え。男に二言はない」

「じゃあ、『羽黒さんとデートに行く』でも良いですか?」

『えっ?』

「ふええ!」

その言葉に全員が絶句し、当の羽黒が驚いている。

「まあ、私は構わんが、良いのか?左葉指に指輪……を……」

困惑した眞一郎は、その指輪がケツコンカツコカリリングだ、と言うことに気づいてしまった。

「まさか、夏海くん?」

「はい。私、恋人はいるとは言いましたよね?」

そう言うと、降りて来た艦娘達が夏海の元にやって来る。

「そういうことだな」

「私達は提督じゃなく、夏海とケツコンカツコカリをしてるんだ」

ニヤリと三笠が笑い、武蔵が夏海のポンと頭を撫でる。

「夏海さんは『男性嫌悪』で『同性愛者』なんです」

加賀が、そつと夏海を抱き寄せる。

「そ、そうだったのか……道理で、艦娘との息が合っていると思った。もう実質、君が提督のようなもんだな?」

「そんな事はありません。母とうちの艦娘は親友、私とは恋人です。実は私、小学生の時に変質者に乱暴された事があつて。それから、男の人は家族以外表面上は接することは出来るんですけど、……正確にはそこから先は嫌悪感が出るようになって……そんな時に、母が艦娘達と同居するようになって……それで、先程のような失礼な態度になつてしまいました。申し訳ありません」

眞一郎の言葉に、夏海は真面目に答えると、眞一郎も優しい笑みを浮かべて敢えて、

「そう言うことなら納得だ。喜んで羽黒をお貸ししよう。羽黒、いいな?」

「はっ、はいっ」

トンつと羽黒の背中を眞一郎が押すと、羽黒もびしつと敬礼する。

気仙沼
「うちの艦隊には、内気な子がいませんものね？」

「この子、学校では友達居ないみたいだね……」

そう言うのは、翔鶴・瑞鶴姉妹である。

「ですから、女子中学校に通ってるんです。かと言って、学校ではそういう一面は見せたくないらしくて」

大鳳がそう続けると、夏海は少し頬を膨らませる。

「皆がプライベートを暴露して、どうするんですか？」

その夏海の言葉に、皆がどつと笑った。

「もう……」

皆の笑いに頬を膨らませながら、ふつと笑みを浮かべている夏海。

「しかし、男性嫌悪は少しは和らいでいるのではないかね？」

「判りませんし、女の人が好き、と自覚してしまったからには、もうどうでも良いことです。両親の血を残してやれない事は申し訳ないんで、母には第二子を妊娠してもらって、さっさと産休に入って貰いたいですね？」

眞一郎が、男性嫌悪の件について指摘すると、夏海は笑って答えた。

そんな会話を聞きながら、奈々海は笑みを浮かべていた。

翌朝、夏海と羽黒は東京へデートに旅立って行った。高菜家特権の、三高ワンダーランド優先パスポートを持って。

番外編：夏の海の向日葵

『羽黒さんとデートさせてください』

夏海は、羽佐間眞一郎陸准将補との賭けマツチに勝った時、そう告げた。

そして、演習が終わった翌日である。

「あ、あの……夏海さんをお預かりします」

「母さん、行って来ます」

羽黒は、ロングのスカートに若草色の薄手のカーディガンにブラウスにつばの広い帽子。

夏海は、ノースリーブの白いワンピースで麦わら帽子を被っている。眼鏡ではなく、ブラウンの度付きカラコンを付けて、お化粧もバッチリである。

賭けに負けたからと、眞一郎が全部旅費を出してくれた。

『東京に日帰り』は、可哀そうだろう」

と高菜直哉二佐が、三高ワンダーランドの敷地内にあるホテルのスイートルームを、タダで提供させた。

兄直樹によると、最上階に四部屋あるエグゼクティブスイートルームは、お得意先からの急な依頼で提供することが多く、一般客には提供していない、とのことだ。

「丁度、空いてたから使っていいらしいよ。大村夏海の名前で予約取ってあるからね」

「そんなに……有難うございます」

丁寧に、ペコリと頭を下げる夏海。

「しかし、羽佐間さんも君達も、浮気旅行はいいのかい？」

直哉が意地悪そうに問うと、眞一郎はふふっと笑って、

「女の子同士はノーカウントだろう」

と、余裕の発言をすれば三笠は、

「たまの浮気くらい大目に見るわ。家には六人の嫁が待っているんだからな」

と、夏海を撫でながら直哉に答える。

「夏海さん、お財布は持ちましたか？忘れ物はありませんか？お荷物はホテルに発送しておきましたよ」

「はい、大丈夫です」

心配そうに、荷物を確認したりしているのは、加賀である。

母親があんな感じなので、恋人兼母親代理なのである。

その母親は、未だに風邪が治らないので、艦娘六人が付きつきりで看病の予定らしい。

「それよりも、母さんをよろしくお願いしますね？」

「分かっているわ。ちゃんと、パジャマ着せて寝かせてるから、大丈夫だと思うけど」

瑞鶴が、未だに寝込んでる奈々海の部屋を見上げながら答える。

「それじゃあ羽黒さん、行きましようか？」

「はっ……はい……」

「わあ、グランクラスってこんなに広いんですね」

「お弁当が出るらしいですね」

初めて乗るグランクラスに、興味津々の二人。

「手を繋ぎませんか？」

「は……はい……」

女の子と、こういう感じで手を繋いだのが初めてで、ちよつと顔を赤らめる羽黒に、ふふつと笑う夏海だった。

お昼を過ぎた頃に、夏休みで人がごった返す東京駅からりんかい線に乗って、三高ワンダーランド駅に到着する。

「早速、楽しみましよう！」

「は、はいっ」

パンフレットを見ながら、片手をギュッと握って、人がごった返す三高ワンダーランドのメイン広場に居る二人。

つい最近、プールエリアが解禁となつて、一段と広くなった三高ワンダーランド。

二人のリュックの中には、キチンと水着も入っている。

「夏海さん、早速どこに行きますか？」

「そうですね、メテオストライクサンダーボルトに行きましょう」

「ふえっ、あのキングオブ絶叫マシンですよね？」

「はいっ」

メテオストライクサンダーボルト。日本一の高低差・速度を誇る、超絶叫ハイスピードジェットコースターである。

海まで張り出したそのジェットコースターは、総距離も日本一を指して作られ、最新の技術をふんだんに盛り込み、AR拡張現実エリアもあり、宇宙にまで飛び出す感覚を味わう事もできる、と言うコースターである。

優先パスであり並ばずに乗り込む二人。運良く先頭に乗り込むことが出来た二人は、ちよつと怯えている羽黒とニコニコしている夏海が、仲良く手を握っている。

皆乗り込むと、コースターがガタンガタン……と上がって行く。

「た、高過ぎませんか……？」

「そ………そうですね……」

ぎゆうつと、二人で手を握り合って顔を見合わせる。

周囲を見渡すと、どんどん地面が遠くなって行く。

ここが第一の地獄、超高低差である。

そして頂点が見えると、降りたところでガタン、と停止する。

先頭は、垂直落下状態での一旦停止である。

「ひえっ」

「ひっ」

そしてコースターは、超スピードで急降下して行く。

『きやあああああああああああああああああああああああ!!!』

「だ、大丈夫ですか？夏海さん」

「足腰抜けるかと思いました………AR舐めちゃいけなかったですね」

二人肩寄せ合って、ベンチに腰掛ける。

「もうちよつと、大人しい乗り物に乗りましょうよお」

「そうですね……」

暫く遊ぶと、水着に着替えてプールエリアに突入する。

羽黒が、大胆な黒いビキニなのに対して……夏海は、地味なセパレートタイプ。

大きな浮き輪に二人乗っかって、楽しくプカプカ浮かんで流れて行ったり、そのまま急流下りで羽黒がポロリをして、悲鳴を上げたり……

二人は、ナイトタイムの観覧車に乗っていた。

「夏海さん、どうして私……だったんですか？」

羽黒は、意を決して訊いてみた。

「そうですね、一番私に近いから……かもしれない。私は、ずっと内気で気弱でした。それを覚えてくれたのが艦娘達と、この戦争です。後は、ちよつと悪い子になりたかっただけです」

「悪い子……」

「学校でも鎮守府でも、私はいい子であろうとしましたし、実際いい子である自負があります。最近では、鎮守府運営に携わることにもなつて、実権は私が握っているようなものです。でも、私だって羽佐間さんみたいに悪いことをしたいんです。火遊びだってしてみたいんです。……羽佐間さんが、あっさり了承するとは思いませんでした」

その言葉に、羽黒は驚いてから、うふふつと笑った。

「やっぱり、夏海さんはいい子なんですよ。いろいろ苦悩して、苦悩して、それでレズビアンであることを受け入れて。でも、学校でもいい子で居なくちゃいけない、って考えてるんでしょう？」

「……そうですね。カミングアウトすることの難しさを、身を以て感じてます」

「……そんないい子に、プレゼントです」

羽黒は妖艶に笑うと、夏海を抱き寄せて唇を重ね、ディープなディープなキスをした。

「んう……」

「んっ……」

そして、長い時間を感じさせるキスを解くと、羽黒が耳元で囁いた。

「私、実はあの鎮守府で……一番エツチなコなんですよ……」
少し顔が赤く、トロンとした夏海は、

「……意外でした……」
と答えた。

チェックインした部屋は、豪華なエグゼクティブスイートだった。
部屋には、宅配便で送られたキャリアバッグが置いてあり、ベッド
もクイーンサイズのベッドである。

「ふかふかですよ」

真つ先に飛び込んだ夏海は、両手を広げて羽黒を誘う。

羽黒は、遠慮がちに飛び込むと、

「すごくふかふかで……」

そこから先が言えなかった。

唇を夏海に奪われたのだ。

ねつとりと長いキス、舌を絡め合って……

一旦離れると、今度は羽黒が蕩けた顔になる。

「うふふ、お返しです……」

二人の影が一つになって……

数日後、眞一郎のベッド。

羽黒と眞一郎が、ダブルのベッドに横たわっている。

「で、どうだったね？夏海嬢とのデートは」

「……あ、危うく落とされるところでした……夏海さんが自分を受
け入れた時、どうなってしまうのか」

冷や汗を浮かべた羽黒の報告に、それを受けた眞一郎は、ニヤツと
笑った。

「その時、眞実の愛はどこにあるのか、分るだろうよ。彼女は、夏の海
の大輪の向日葵だったんだろうさ」

「向日葵……？」

「花言葉は、偽りの愛」

「なるほど……夏海ちゃんは、敢えて偽りの愛を私に投げ掛けて、真

実の愛の深さを測ろうとしたんですかね？」

「さてね、これは私の予測にしか過ぎんよ。或いは本気にさせてしまったのかもしれないが、いずれにせよ、向日葵さ。今頃、小さな向日葵が待っていることだろうさ……彼女達を愛慕している艦娘達が」
そう続ける眞一郎に、羽黒も頷いた。

その頃、気仙沼の官舎では……

夏海の部屋のキングサイズベッドに、加賀と夏海が横たわっている。

「どうでしたか？浮気体験は……」

「私は、浮気には向かない、と思います」

困ったように、加賀に顔を向ける。加賀は意図が分からず、首を傾げる。

「浮気ではなく、本気で落としてしまいました。さすがに羽黒さんでしたから、落とすことは出来ませんでした……だから加賀さん、そうなる前に、私を繋ぎ止めておいてください」

冗談でもなく、本気のその表情に優しく頭を撫でる加賀。

「夏海さんには、三笠さんに、武蔵さん、それに、大鳳さん、瑞鶴さん、翔鶴さんも居るわけでしょう？皆夏海さんに愛を注いでくれます。貴女は、その愛を信じて私達と共に居てくだされば良いんです。ムリに浮気をしなくてもいいですし、カミングアウトもしなくていいです。悩んだら七人で考えましょう。皆夏海さんの為に悩み、考えられます」

「そうよ！」

「あたり前のことだろう」

「そうですよ」

「一緒に泣いて」

「一緒に笑いましょう！夏海」

やって来たのは、三笠に武蔵、大鳳に翔鶴、瑞鶴である。

遠慮なく、そのまま布団に潜り込もうとする。

「わわっ……」

ギシツと、軋むベッド。

「夏海さん、皆浮気されて寂しかったです。今日は……」
——寝かせませんよ。

こうして夏海は、艦娘に愛される日々を過ごしているのだった。

南三陸大騒動

今日も平和な南三陸鎮守府。

長門・木曾・夕立のトリオは、いつもの哨戒を終えて帰港した。

「提督、異常はなかったぞ」

長門の声に、反応がない。普段なら、エプロン姿で三人の帰りを待っている筈なのに。

「提督、お出掛けっぽい？」

「いや、そんな話は聞いてないぜ？」

夕立と木曾も首を捻る。

「とにかく、提督のお部屋に行ってみよう？」

長門の提案に、二人が頷くと三人で武藤二佐の私室に向かう。

私室のドアを開けると、武藤二佐が脂汗を流して寝込んでいた。

「うーん……うーん……」

「提督!!」

長門が、武藤二佐のおでこを触ると高熱がある。

「すぐにお医者さんを呼んで来るっぽい!」

夕立が走って行く。

すぐに、近所の町医者が駆け付けられるも、原因が分からずほとんど困り果てていた。

「こんにちは」

そんなところに、薄雲がやって来た。

七月一日に成立・布告・施行された艦娘・深海棲艦基本法に基づき、薄雲は一発試験で普通自動車免許を取得した為、ローンで買ったコンパクト電気自動車ドライブがてら、高菜二佐からのお使いついでにやって来たのだ。

「おお、武藤提督が大変なのだ」

「武藤二佐がどうされたのですか？」

困り果てた顔をした長門が出迎えると、長門の案内で薄雲が武藤二佐の部屋に入り、

武藤二佐の様子を見て、薄雲は即座に一つの結論に達した。

「靈子の枯渇ですね」

『靈子の枯渇?』つぽい?」

「はい。靈子と言うのは艦娘や深海棲艦、人間の靈的エネルギーです。言い換えれば『精力』と言ってもいいでしょう。通常、人間は日常生活を送っている限り、靈子が枯渇することはありません」

宮戸島鎮守府の物知り、薄雲の解説は続く。

「ですが、例えば極めて靈子の高い状態の艦娘と深く接触したりすると、靈子の低い方の靈子は奪い取られます。質問ですが、昨晚は…?」

その質問に、三人共顔を赤らめて目を逸らす。

「栄養価の高いお食事をして、ゆっくり休めば一〜二週間で回復しますが、もう一つ《靈子のコア》を与えれば、直ちに回復するでしょう」
『靈子のコア?』つぽい?」

「はい。DSビーストと呼ばれる害獣が、北極海近辺に集中的に存在します。言うなれば、深海棲艦が《ヒトと軍艦の負の感情》を元に生まれて来たものなら、DSビーストは《動物の負の感情》を元に生まれて来たものと言えます。まあ、トドや害獣といった類のもので、時折南に流れて来ては北海道地区鎮守府の所属艦娘と交戦状態になります。その中で、幾つか種類があるのですが『グリズリー級』と呼ばれる物のコアを与えるのが一番の解決法だと思います。性交は程々に、と言われても毎日するでしょうし」

薄雲の指摘に、視線を外す三人娘。

「と、とにかくだ! DSグリズリーを倒して、コアを持って来れば良いんだな!」

「そういう事です」

強引に話を戻す長門に頷きながら、薄雲は答える。

「それじゃあ、北極海に出撃するか?」

「そうだな」

「行って来るっぽい」

そう言いながら、武藤二佐の私室を出る三人に、

「心配なので、私もお手伝いしましょう」

そう言って、薄雲もその後を追いつける。

北極海では、艦娘や深海棲艦達がDSビーストと戦闘を繰り広げていた。

小動物から、数mを超えるような怪物まで、いろいろ屯している。

「この中から、グリズリー級を探すのか」

「熊みたいなDSビーストを探すのか？」

「アレがそうだっばい？」

夕立が指を指した先には、何かの足が口から出ていて、それを食べている熊のようなものが海に立っている。

「ああ……艦娘が食べられましたね……南無南無」

薄雲が両手を合わせると、三人の顔色が青くなる。

「マジか……？」

「本当にグリズリーか……」

「こつちに向かって来るっばい！」

ペツと艀装の靴を吐き出すと、DSグリズリーはこちらに向かって襲い掛かって来る。

「来ましたよ！爪は体術で避けてください！」

薄雲の言葉に、全員が戦闘態勢になる。

DSグリズリーは、一番食べ応えのありそうな、長門に狙いを絞る。

「っ!!」

DSグリズリーの爪が、長門を掠める。長門の服が破れ、血が滲んで行く。

「ぐうっ……砲撃しろ!!」

木曾と夕立と薄雲が艀装を展開して砲撃を連発するも、硬い皮膚で阻まれる。

「何だ!?この硬さは!？」

「ちまちまと、ダメージを与えるしかないっばい！」

「或いは、長門改二艀装の51センチ砲ですが……」

其の三人の言葉に、長門も艀装展開して51センチ砲を構えるが、遅かった。

DSグリズリーが、ベアハッグをして来たのだ。

「ぐわあああああ!!!」

ミシミシと、艀装が軋む音がする。

「長門!」

「長門さん!!」

叫ぶ二人に薄雲は、

「ベアハッグだけは外しますので、後お願いします」

そう言い残し、アイキャンフライ砲を展開させると、後方に向ける。

ズドオン

ズドオン

ズドオン

その反動で、薄雲がDSグリズリーにショルダーチャージを決めると、DSグリズリーは蹠踉けた。

そのスキに、長門はベアハッグをするりと抜け出すと、一気にバツクステップで退がる。

体当たりを行った薄雲は、そのまま海を水切りのように転がり、気を失い海面に浮かぶ。

「薄雲!!」

気絶した薄雲が、ビーストハンターの深海棲艦に保護されているのを見ると、ほっと胸を撫で下ろす。

「長門!!こつちが注意を逸らす!!長門は、ヘッドショットを決めてくれ!!」

「そうだったぽい!」

「分かった!」

再びDSグリズリーに正対すると、木曾と夕立が交互にヒット・アンド・アウェイを繰り返して、

DSグリズリーに砲撃を加える。

何度も砲撃を加えた時、一瞬DSグリズリーの足が止まった。

「今だ!!」

連装51センチ砲を、DSグリズリーの頭部に向けて発射すると、

DSグリズリーの頭部が弾けるように吹き飛んで、バタリと倒れた

……

「やったっぽい？」

「そのようだな……」

そんな三人に、声を掛ける艦娘が居た。重巡洋艦摩耶である。

「おー、あんた達見ない顔だけどやるねえ。ビーストハンターは長いかい？」

そんな感嘆の声に、仲間らしき深海棲艦が薄雲を抱えてやって来る。

「い、いや……今回は初めてだ……」

長門の言葉に、摩耶はヒューウと声を漏らし、

「いやあ、初めてでGハンターとは、見込みあるぜ。いつその事自衛隊なんざ辞めて、ビーストハンターになんねえ？」

そう、スカウトまでして来る。

「い、いや、今回はお断りさせてもらおう」

気を失っている薄雲を受け取りながら、勧誘を謝絶すると、摩耶はゴソゴソと処理をしてくれる。

綺麗に輝く、大きな霊子結晶を取り出す。

「コレが霊子のコア。コレは、何十個ものケツコンカツコカリリングになる、高く売れる貴重品だぜ。あとはグリズリーの牙。コレは、幸運のおまじないと言われているんだぜ。チョット待ってな」

摩耶はそう言うと、ポケットからペンダントにしたグリズリーの牙を、三つ渡してくれる。

「その代わり、こいつの牙はあたしが貰ってくぜ？」

「分かった。ありがとう」

DSグリズリーの肉もお土産にもらった一行は、途中薄雲が意識を取り戻し、四人で南三陸鎮守府に戻って行った。

鎮守府に戻ると、早速肉を冷蔵庫にしまい、

武藤二佐の元へ向かった。

武藤二佐に霊子のコアを近づけると、ぱあつと光が注ぎ込まれるようにコアが崩れて行き、

真っ青だった顔色が、もとに戻って行く。

「うーん……」

武藤二佐が、身体を起こす。

「提督！」

三人が抱き締めるのを見ながら、薄雲は肩の痛みを感じつつ、ふつと笑みを浮かべてそつと部屋を出た。

「と、言うことがありまして……………」

「そうか。武藤さんはお年だからな」

薄雲の報告に、直哉はふつと笑った。

「しかし、わざわざグリズリー級を選んだのには、理由があるのかい？ それこそ、もう少し小さいのでも回復は可能だろう？」

「それは、Gクラスの靈子のコアを人間に与えたら、20代の若さを取り戻して絶倫になれるからです。きつと今頃、艦娘達が「もう許して」って音を上げている頃でしょう？」

悪戯っぽい笑顔を浮かべた、薄雲の頭を撫でる直哉。

「さて、今日は薄雲の日だったね？武藤提督も今頃夜の営みをしてるだろうし、早速始めようかね？」

「……………はい」

こうして、東北の提督達の愛の営みが始まって行く……………

デスペラン要塞の一日

太平洋はミッドウエー諸島。

深海棲艦達が集う、デスペラン要塞。

人間社会に馴染めない深海棲艦達が、ハーフエンと呼ばれる深海提督の下、長閑に暮らしている。

「そんじゃあ、今日も狩りに行ってくるぜ」

そう言つて出掛けるのは、ビーストハンターになった摩耶。

深海棲艦を引き連れて、北極海に繰り出して行く。

摩耶は元々、四国でジレーネ決戦と呼ばれる大戦争に生き残った艦娘だったが、

大貫 悟の告白と暗殺で、自衛隊の在り様に嫌気が差し、デスペランへとやって来た。

その後は、北極海で現れるDSビーストを倒して、戦利品である『靈子のコア』を自衛隊に売り払う、ビーストハンターになっている。

「はーい！行ってらっしゃい」

手を振つてお見送りするのは、要塞周辺の生簀いけすエリアで、イ〜ツ級に餌やりをしている神通。

毎度お馴染み、女川鎮守府の神通である。

桐山二佐と風俗を巡る一件で、大喧嘩の末家出して以来、一度も帰っていない。

毎朝、網を担いで小魚群を底引き網漁法で掻っ攫つては、要塞の横に設置した生簀にぎーつと流し込む。

「キュッキュッ！」

流し込まれたお魚に向かって、深海棲艦の子達が次々に群がって、美味しそうに食べている。

これでも、知性のない深海棲艦イ〜ツ級全体の1%にも満たない。

害獣化しないように保護を行っているのも、デスペランの大きな仕事の一つである。

イ級の一匹がぴよんつと飛び跳ね、神通に飛び付いてスリスリする。

「やんつ、もう……甘えん坊さんなんだから」

神通は、優しい笑顔を浮かべながらイ級を優しく撫でる。

「キュツキュツ！」

嬉しそうな鳴き声を上げて、神通にスリスリする。

このイ級は、神通に懐いている。

「神通さん、お昼にしましうか？」

深海提督が、上の司令室の窓から顔を出すと、

「はいー！」

そう答えると、玄関でもある軍港から今は物置となつているクラール格納庫を通り、生活エリアに登って行く。

生活エリアには、幼児の深海棲艦——これもイ級である——から大人の深海棲艦まで、人間型の深海棲艦が共同生活を送っている。

深海棲艦のイーツ級は、霊子を与え続けると人型化する事が、深海提督の手によつて分かっている。

デスペラン要塞は、無尽蔵の霊子発生装置でもある。今は、それをクラールの製造ではなく、生簀の深海棲艦の子達を育てる為の装置に作り変えたのだ。

そうやって人型化した幼児体イ級は、人型化して間もないのと服を着るといふ文化そのものがない為、素っ裸で走り回っている。

基本、深海棲艦が女性或いは雌だけの集団の為問題はないが、男の子がいたら赤面ものだろう。

それをワンピース片手に、ヲ級のお姉さんが追い掛けている。

「コラ、ワンピースクライ、キナサイ」

「イヤー！アツイモン」

そんな様子を眺めていると、幼児体イ級が神通目掛けてまっすぐ飛び込んで来る。

「きゃっ……もう」

飛び込んで来た幼児体イ級を優しく抱き留めると、青白い肌で青い瞳に白い髪の幼い笑顔を、神通に向ける。

「エへへ……」

そんな笑顔を浮かべる、幼児体イ級のサラサラの白い髪を優しく撫

でる神通。

お昼と言つても、ちゃんとした食事を摂るのは、神通や摩耶のようなデスペランに住み着いている艦娘と上位深海棲艦だけである。

買い出した材料やビーストの肉を、料理上手の神通が生活エリアの隅っこにあるキッチンで調理して食べている。

他の深海棲艦の子達は、基本的に外に行つては魚を捕まえて、むしやむしや食べたり、摩耶の持ち帰ったDSグリズリー等のDSビーストの肉を、生で食べたりしているのだ。

「買い出し行つて来たにゃ」

多摩が週一回、買い出しと霊子のコア売却で夜明け前に出掛け、昼前には帰つて来る。今日がその日なのだ。

買い出しのない日は、タブレットの猫漫画を見ながら、ゴロゴロと過ごしている。

多摩も同じく、四国での死闘を生き抜いた後、摩耶に同調して自衛隊を辞めて来た。

因みに、彼女も摩耶も自衛隊では『脱柵』扱いになっている為、追われる身だったのだが、

現在の四国警務隊立秋の責任者一佐の、「ぼっか、辞めたいやつにお国のために働け、つて探し回るほうが無駄だ。もう放つといてクビにしろ」と言う鶴の一声で、艦娘・深海棲艦基本法施行後に懲戒免職となっている。

明石開発の冷蔵冷凍型ドラム缶に、ぎっしり食材を積んで帰つて来る。霊子のコアの売買も、北海道・釧路鎮守府の熊崎提督を通して、日本政府と取引が行われている。

脱柵中から、熊崎提督とは極秘の取引を行っており、食材も熊崎提督経由だったのが、今は大手を振って『外国人』として、市場で堂々と買い出しを行えるようになっていた。

クラーリン格納庫の一部も、冷蔵庫と冷凍庫になっており、そこに一ヶ月分の食料を保管してある。

「ジンツウママ、イキューモ タベタイ」

さつき抱っこしていた幼児体イ級を降ろして、お昼ご飯——基本的に魚は自給自足の為魚料理が多くなるが——の調理をしていると、クイツクイツとエプロンを引っ張って、指を口に咥えて見上げる。

因みに、白いワンピースを強制的に、ヲ級お姉さんの手によって着せられている。

どうせそのうち、また脱ぐだろうが……

そんな彼女に、魚の煮付けの煮ている途中のものを菜箸で取って、ふーふーと冷ましてから、

「はい、あーん」

と、幼児体イ級の口元に持って行くと、あむつと食べる。

小さい乳歯でもぐもぐと食べて、ごつくんと飲み込むと、

「オイシーー！」

と、ぱあつと笑顔になる。

基本、お魚は大好きな深海棲艦達だが、お野菜も好き嫌いなく食べる。

それなので、出来た料理の匂いに釣られて、他の深海棲艦の子達もやって来て良いように、大皿料理が多くなる。

出来た料理を、多摩がちゃぶ台に運んで来る。

今日は、ヲ級と幼児体イ級が、ちゃぶ台にちよこんと座っている。

そんな頃に、深海提督が螺旋階段で執務室から降りて来る。

デスペランを、《移動国家》として真つ先に認めたアメリカ合衆国を始め、それに追隨した環太平洋の各国家、日本との書簡のやり取りや調整も、深海提督のお仕事なのである。

正直な話、ジレーネを滅ぼしたとは言え、二度と現れないとは限らない為、どの国も深海棲艦との戦争はもう嫌だ、と言うのが本音だろう。

文化の違いから、外交官の派遣は行わず、デスペランの代理国として日本を指名し、実務的なやり取りは日本に委託する、という形を取って、捕虜になったまま放つたらかさかされていた集積地棲姫を外交官として任命し、東京にある在日本デスペラン大使館の特命全権大使として暮らしている。

ただ、硫黄島要塞で触れたヲタク文化に感化されてしまい、東京暮らしになってからは《憧れの秋葉原》に毎日通うようになってしまった為、実務は参事官である駆逐水鬼と北方棲姫が行っている。

終いには、MeTubeを始めてSYUSEKINと名乗って活動も始めている。

全く《仕事をしない大使》である。

だがこれも、深海棲艦と日本との宥和政策の一環でもある。

ただ、デスペラン大使館の諸費用は、全て日本政府のODAとして賄っているのは、外交上の極秘事項である。

因みに、多摩の買い出しは多摩に与えられた《外交特権》であり、逆に神通は日本国民となっており、不法出国者状態であるが、両国とも見なかったことにしている。

そんな訳で、深海提督は毎日お仕事をしている。

その補佐として、神通は秘書艦として手伝ったり、まだ知性のない深海棲艦を養ったりと、デスペランのお母さんとなっている。

多摩は「そろそろ桐山提督とは離婚だにや」等と思っている。

今日のお昼はヲ級に多摩、深海提督に神通、それに幼児体イ級のご飯である。

因みに、折角ヲ級が着せたワンピースは床に転がっており、素っ裸である。

『いただきまーすー！』

お箸の使えない幼児体イ級は、神通が食べさせている。

「そう言えば、そろそろ愛ちゃん達はお産の時期ですね？」

「そうですね」

「三人も嫁をもらった健太は羨ましいにや」

そんな世間話をしながら、未だ日本に張り巡らされている諜報網を活用して情報を仕入れ、更には仕入れた情報も披露する。

日本と手を結ぶことを決めてはいるものの、日本を完全に信頼している訳ではないのだ。

特に、四国の方は体制が一新したばかりで、まだ警戒の網は解かれ

ていないのだ。

お昼が終わると、深海棲艦の有志を集めての、日本語講座が始まる。

講師は、勿論神通である。

「こんにちは、鈴木さん」

『コンニチハ スズキサン』

「お元気ですか、鈴木さん」

『フゲンキデスカ スズキサン』

「本当にお元気ですか、鈴木さん」

『ホントウニ フゲンキデスカ スズキサン』

「そんな物飲んでも何の自慢にもなりませんよ、鈴木さん」

『ソナモノ ノンデモ ナンノジマンニモ ナリマセンヨ スズキサン』

どこかおかしい。

そんなおかしい日本語講座をしながら、正しい日本語のイントネーションを身に付けて行く。

因みに、大使館の深海棲艦トリオは日本語どころか英語もペラッペラの、バイリンガルである。

「大漁だぜ。今日はグリズリー二匹と、クラーケンを落として来たぜ」

「おー、大漁だにゃ」

「コアも高く売れますね」

「それじゃあ、クラーケンは早速捌いて、皆さんにお配りしましょう」

摩耶達の遠征隊が大漁旗を掲げて帰って来る頃には、辺りは日が暮れて夜になっている。

クラーケンは、イカが突然変異してDSビースト化したもので、こいつの犠牲になる艦娘や深海棲艦も、潜水艦種を中心に多い。

しかし、コレの刺し身が絶品なのである。

皆の大喜びの声が、デスペランに響き渡る。

引き摺って来たクラーケンを、神通と摩耶が大包丁を使って二人掛かりで捌くと、皆に配り始める。

艦娘や深海提督達は協力して、夕飯の準備に取り掛かる。

生派なまの深海棲艦達は、配られたクラーケンの刺し身をあむあむと食

べている。

「マヤネーチャン オイシイ」

「おつ、そうか。それじゃあたし達も、料理ができたら堪能させてもらうぜ」

美味しそうに食べている、幼児体イ級の頭をポフポフと撫でると、摩耶は料理番の手伝いに向かう。

そして海の幸と、海の幸と言えるか怪しいDSグリズリーのステーキが食卓に並ぶと、

お酒を片手に、皆で今日はああだった、こうだったと楽しく語り合いなながら、楽しく暮らしている。

そして、提督の執務室で艦娘達と深海提督の、夜の晩酌タイムが始まる。

下の生活エリアでは、深海棲艦達が雑魚寝で眠っている。

晩酌タイムでは、たまに過激な猥談も行われ、軽いお触りやくすぐり等、じゃれ合いながら夜を過ごす。

たまに幼児体イ級が目を覚まして、じゃれ合い途中の所にやって来ては、興味本位で色々訊いて来る。

「ネエ ドウシテ マヤオネエチャンハ ジンツウママノ ヲマタオ サワツテルノ？」

「あつ これはな、あははは」

「子供には、まだ早いニヤ」

「もう、イ級ちゃんを起こしちやっただじやないですか、摩耶さん」

「うふふ、これはナイショのお遊びですよ。さあ、もう寝なさい」

「ハーイ、テイトク」

こうして、デスペランの一日が過ぎて行く……

泰子さんの憂鬱

七月初頭の事だった。大石泰子は、診療を終えた笹野診療所を訪れていた。

看護師や医療事務の人達は帰っており、もう一人の医師で勤務医の倉田めぐみは、隣の第二診察室で一生懸命勉強中である。

後期研修が終わったばかりの、宮戸島出身の新米産婦人科医をヘッドハンティングして来たのだ。

「やあ、ばあさん」

20歳年上の笹野麻衣医師に誂うように言われた泰子は、大きな溜め息を吐いた。

「誰がババアですか？麻衣さんの方がばあさ……」

「あ？」

「ひっ」

そして、言い返しながら余計な一言を言った泰子は、麻衣にドスの利いた声で睨むように言われると、小さく悲鳴を上げる。

「まあまあ、麻衣さん」

そんな麻衣に、宥めるように声を掛けるのは、笹野診療所の看護師長、笹野宗太郎である。

「人の娘を孕ませた上で、しかも同級生と深海棲艦の女の子も同時に孕ませるって……いつかそうなるとは思ったけど、手が早いにも程が有るわよ」

「それについては、健太の母親としては何も言えないんですが……」

麻衣の指摘に大きな溜め息を吐くと、診察室のベッドに腰を下ろす。

そんな泰子の隣に腰を掛けると、足を組んだ麻衣はポンと肩を叩いた。

「健太君は自衛隊の闇をまざまざと見せつけられ、それへの怒りと絶望で深海棲艦化して、デスペラン要塞で大勢の人を死なせる結果になった。本人の記憶が無くなったのは、それを突きつけられたら正気ではいられなくなるからねえ。結局は、当事者の記憶の中だけに留め

ておけば良いのよ」

「……………」

「高菜一佐が言っていた言葉なんだけどね、『健太君の記憶が戻った時、支えてやるには愛だけでは足りない。三人くらいいて支えてあげないとね』と言った具合ね」

「両手に花どころか、三人も女の子に惚れられて。高菜一佐のところは艦娘だけど、人間二人に深海棲艦、妊娠速度は通常の五倍速。《本当に》、20代で孫ができるなんて思わなかったです」

肩を落として俯き加減の泰子に、苦笑いを浮かべるのは30の宗太郎である。

「まあまあ、僕だって30で祖父になるとは思いやしませんよ。泰子さんと三つしか違わないんですからね。でもね……………」

宗太郎は、言葉を区切った。

「倉田先生！」

「はーい」

隣の診療室からひよっこり顔を出したのは、ショートボブでまん丸眼鏡の20代後半の女医、倉田めぐみである。

産婦人科専門医を目指しながら、小児科の勉強もしている努力家である。

勿論、地方の診療所では専門を選び好み出来る訳もなく、内科外科も診察している。

だが、麻衣の曰く《専門外》の産婦人科だけは、めぐみが任されている。

「どうされました？ 笹野師長」

「12の母の話だよ、倉田先生」

その言葉にピンと来ためぐみは、空いている椅子に腰を下ろすと、持っていた本を抱き抱えながら真剣な表情をする。

「深海棲艦と人間のハーフ自体、初めてのケースですからね。何でも、わざわざ大学の産科指導医の教授先生が、四国まで出張ってるくらいですからね。どうなるかは何とも……………」

「そうよねえ、めぐちゃんの言うとおりに心配なのよ」

自分の娘の、身体を心配する麻衣。

「ですが、何があっても大丈夫なように万全の体制を取っている、と聞いています。笹野先生が帰郷させれば？と、以前仰いましたけど、ここでは無理です。三人の出産を、私ごとき新米医師では手に負えません。万一の備えで、基幹病院にすぐ行ける場所の土佐鎮守府の方が良いですし、逆算した予定日に近くなったら入院させる予定だ、と聞いています」

そんな麻衣の心配に、元氣付けるように言うと、めぐみは言葉を続ける。

「私は研修時の指導医の先生の勧めで、出産前に休診して四国に行つて来よう、と思います。丁度、この前後に出産を間近に控えている患者さんもいませんし、笹野先生の後輩が代打で来てくれることになっていますから、勉強して来ます。愛ちゃんが第二子を妊娠したときの為に」

そう言うと、眼鏡越しに悪戯っぽく流し目で泰子を見遣ると、泰子は頬を膨らませる。

「もう、倉田先生まで。皆私を誂って楽しいんですか!？」

その言葉にどつと笑う。

「それはともかく、ちよつと誰かに四国に行ってもらいたいよ。高菜さんから預かったとあるものを渡して欲しいし」

深海提督の指示で、多摩が高菜直哉一佐に渡した『霊子のコア』がそれである。

麻衣は立ち上がると、パッケージングされたキラキラと煌く宝石のようなものを三つ取り出す。

「霊子なんて概念はオカルトチックだけど、霊子不足に陥った時の為に、って深海提督から渡されたみたいなのよ。それで……」

「分かりました。私が行きます」

泰子が立ち上がると拳をぐつと握った。それを見ると、麻衣はフツツと笑った。

「ありがとうね、泰子さん。めぐちゃん、しっかり勉強して来なさい。そうそう、四国までだいたい掛かるから、ゆっくり2〜3日掛けて行き

なさいね?」

「運転、よろしくおねがいます」

麻衣の言葉に、めぐみが深々と頭を下げると、泰子はキョトンとする。

「倉田先生、運転してくれないんですか?」

「車の免許ないんですよ」

申し訳なさそうに言うと、ポケットからゴソゴソと免許証を取り出す。

「倉田めぐみ ……免許の種類、大自二……大型自動二輪!?!」

「そうなんですよ。バイクの免許しかなくて……」

「めぐちゃんって、650ccの大型ビッグスクーター持ってるのよ」

免許の種類に驚愕する泰子に、申し訳なさそうにするめぐみ、それに補足説明をする麻衣。

そんなめぐみは、身長150cm台でちんまりとしている。

こんな小さな体で、大きなバイクを操れるパワーが有るのか?と泰子が感心しているとめぐみが、

「まあ、引き起こしは数やってれば慣れますし、低身長用のカスタムもしてますから。これで後ろに乗せる彼氏もいれば良いんですけど、女医はモテないですからね?」

「そうなんですか?」

「なかなか忙しくて、出会いの場がないんですよ。逆なら、医師と看護師のカップルが多いんですけどね……ほら、むしろ主夫になってくれる人じゃないと……或いはナースマン……笹野家と同じような条件ですかね?」

そんな女医の恋事情に、麻衣も参戦する。

「まあ、宗ちゃんは逆だけだね。私と結婚する、って決めてから、一浪して看護師学校に入った口だから。本当だったら、今頃は自衛官になってたかもしれないわね。私と出会ってなかったら」

そんな麻衣に、宗太郎はハハッと笑って、

「僕は、麻衣さんと出会えて良かったと思ってるよ。ところで、一つ訊いていい?あの時、『安全日』だったってのは……」

「ああ、嘘」

「だよねえ」

ケロツと答える麻衣に、苦笑いを浮かべる宗太郎。

「おかしいと思っただよね。安全日だって言うからその……アレだったんだけど、医療者として今思うと、あり得ない発言だなんて」
「当たり前じゃない。私は『宗ちゃんが欲しい』から、嘘吐いたの」

麻衣が流し目で言う、今度は泰子が苦笑いを浮かべる。

「いやあ、考えることは一緒なんです。私も勉さんに『安全日なの』って嘘ついて妊娠して……15で」

「その騒動は知ってるわよ。島を上げての大騒動だったもの。『あの学校ドラマがリアルになった』って」

「そうだねえ。村で、賛否両論巻き起こってたもんねえ」

泰子の告白に、てしと裏手でツッコむ麻衣。それに、懐かしそうに語る宗太郎。

「そろそろ診療所閉めて、ご飯にしませんか？」

めぐみ時計を見ると、そろそろ午後七時である。

勉さんと合流すると、近所の居酒屋にやって来る。

珍しく、一人で酒を飲んでいる直哉を見つけると、麻衣が声を掛ける。

「あら、高菜一佐。一人でお酒とは、珍しいですね？」

「いやあ、嫁達は番長と愉快的仲間達と一緒に遊びに行ったよ。艦娘・深海棲艦基本法で成人として扱う、と布告されたから、保護者役として街に出て、カラオケでもやってるんじゃないかなあ。まあ、10時までには家に帰るだろう。薄雲が車を借りて行ったから」

合流すると、さつきまでの話を直哉に披露する。

「そういう騒ぎがあったんだねえ。そうになるとベンさんは困っただろう。何せ——」

その先を、麻衣が続ける。

「ベンちゃんと私、同級生だったからねえ。アラサー男が中学生妊娠させたって。危うく逮捕モンよ」

「でしようねえ」

そんな麻衣に、直哉は苦笑いを浮かべる。

「困った困った、本当に困ったよ。僕は泰子の両親に殴られる、うちの親父にも殴られて土下座して嫁に貰え、と言われるし」

「元からそのつもりだったですよ。わ・た・し」

「だったら、何で羽佐間さんに誘惑されたんだよ？」

「そっ……それは……」

困った顔を浮かべる勉さんに、自慢気に言う泰子。それを突っ込む直哉に、しどろもどろになる泰子。

「健太に話したら『呆れてものが言えません』だそうだよ？」

「けっ、健太に話したんですか!？」

意地悪い顔をしてそう続ける直哉に、泰子は焦り全開で狼狽える。

「愛ちゃんのコメントは『相手が羽佐間さんなら仕方ない』だったよ？」

「あの馬鹿……」

お気楽なコメントを残した娘に対して、頭痛がする思いの麻衣。

「あーあ、私も恋人欲しいなあ」

そんなぼやきをするめぐみに、麻衣は意地の悪い笑みを浮かべる。

「そんな暇、ある筈ないくせに。産婦人科医専門医でしょ？それに小児科専門医でしょ？生涯お一人様コースを覚悟しないとね？」

「もう！私だってすごい人見つけますよ！」

そんなめぐみに、どっと笑う皆だった。

翌日。

「さて、行きますか？四国に」

「よろしくお願いしますー」

こうして、アラサー女子二人の四国への旅が始まった。

一路東京へ南下する車中、めぐみが運転する泰子を見遣って口を開いた。

「今日は、東京に泊まりですよね？明日、三高ワンダーランド寄りませんか？」

「いいわね。どうせ高菜さんから、例のパス借りたんでしょ？」
「はい。東京での宿泊も、高菜さんに口利きしてもらいました」
二人の女子はふふっと笑うと、東京へ向かって走り出すのだった。

師匠襲来

お盆真つ盛りの八月。

番長と愉快的な仲間達は、夏休みの宿題をやっていた。クーラー完備で涼しい中の勉強である。

特に史絵とギャルズ達は、高校受験を控えて勉強中である。

史絵は進学校に、ギャルズ達は偏差値低めの高校に進学予定であり、

史絵が猛勉強なのに対し、ギャルズ達はサボリアボリ休み休みの勉強で、慎にプラバットでポカポカ殴られている。

因みに、プラバットは二代目で、初代は敢え無く折れてしまった。今日、秘書艦はうーちゃん番で「それいけ！ワンパンマン！」と言うお子様向けアニメを、オレンジジュースとお菓子を食べながら見ている。

司令官の直哉は、ブランデーをたっぷり入れた紅茶入りブランデーを飲んでいる。

それこそ幸田二佐が来たら、お説教モノの状態である。そんな昼下がりがりだった。

ガシャーン！窓ガラスが割れて、何かが放り込まれた。

「!! 皆目を閉じて、耳を塞げ！」

そう叫ぶと、直哉は机の下に避難した

カッ

キューインバリバリ!!

激しい閃光と共に、大音響が宮戸島鎮守府司令官執務室を襲った。

「皆、大丈夫か!？」

すぐに執務机下から這い出て皆を見ると、爆心地至近の卯月は秘書艦席で気絶している。

対応の遅れた史絵も、白目を剥いて気を失っている。

素早く対処した男子トリオと、最初からイヤホンガンガンで勉強していた優花は、よろよろと立ち上がる。

ギャルズ達は、逃げようとして爆心地に向かいぶっ倒れている。

「な、何が起きたんだ……?」

「ふむ。相変わらず対応力はさすがだな、直哉」

扉が開かれると、陸上自衛隊の制服を着た、スキンヘッドで厳ついおじさんが入ってきた。

その姿に、直哉は驚きで目が見開かれる。

「し、師匠!」

「こんにちは、来ちゃいました」

そして、足立の娘こと七原秋奈も入って来る。

この直哉の師匠とは、現警務本部長の七原春人陸准将である。

「七原夫妻揃って、どうしたんだよ?」

「漸く時間が取れたので、宮本議員のプロデュースした東北旅行をと思つて、春人さんが練度確認で愛弟子の元に立ち寄りたからって、春人さんのリクエストで閃光音響手榴弾スタングレネードを投げ込んでみました」

「投げ込んでみました、じゃねーっすよ!うちの史絵に何しやがるんだい!」

「う……ううん……耳が痛い……頭も痛い……目がチカチカする……」

圭一は、倒れた史絵を抱き抱えながら春人に抗議する。

史絵は、真っ先に意識を取り戻す。

「バカモン!男たるもの常在戦場と思え!」

「は、はい!」

春人の怒声に、圭一も思わず怯んでしまう。

そんな様子を、優花は気にせず勉強をされていて、寛太もそれに寄り添って勉強している。

慎はと言うと、気絶しているギャルズ達のお尻を、プラバットでペシ叩いている。

「うーん……何が起きたぴよん……?」

漸く、気絶状態から目覚める卯月。

皆が気絶から目覚めたところで、勉強デスクに皆座り、お茶会が始まる。

卯月が、皆に緑茶を配っている。

「という訳で、私の師匠の七原陸准将。今は、足立さんの後任の警務本部長を務めておられる。それで、先日来たと思うけど、こっちがその奥さんで、足立さんの娘」

「うむ。よろしく頼む」

「また来ちゃいました。宜しくね」

直哉の紹介を受けると、腕を組んだま渋い声で挨拶し、秋奈が軽いノリで挨拶する。

「あの、オジさんさー」

望が、遠慮なく声を掛けるのを慎が、

「こらー師匠の師匠の方なんだから、ちゃんとした言葉遣いしろ」

とぽかっとプラバットで叩くも、春人はハツハツハと笑い、

「今時のギャル達はそう言うもんだらう。構わん、何だね？」

「おじさん、トシいくつう？」

「うむ、今年で59になる。来年定年になるからなあ。そうになると、62歳定年である足立に苦勞を掛けてしまうなあ」

しみじみと言う春人に、望は首を傾げる。

「秋奈さん、いくつう？」

「私は今年37かな、もうおばさんよ。あっはは」

秋奈が笑いながら答えると、望は指折り数えて……………

「22も違うの!？」

「うむ。足立くんの同郷の同期でな。前の妻に先立たれて落ち込んでいたところを、小さい頃から知っている秋奈に慰められていた所に、秋奈が妊娠してしまつてな。それで男としては、やはり責任を取らない訳には行かないだらう？」

朗らかに笑うと、秋奈は少し照れながらふふつと笑う。

秋奈は、よく見るとああ、妊婦だ、と解るくらいの妊娠五ヶ月目である。

「漸く安定期になったから、新婚旅行に行こう、って事になってね。ああ、式はやらないことにしたの」

「そう言えば、写真撮っただけだもんなあ」

秋奈の言葉に直哉は立ち上がり、デスクからハガキフアイルを取り出して結婚しました、と言うハガキを取り出して皆に見せる。

和装の紋付袴を着ている春人に、白無垢綿帽子の秋奈の姿が写されている、写真付きはがきである。

「わあ……綺麗です……」

史絵がそう感嘆の声を漏らすと、

「そうだねえ、春人さんもかっこいいよお？」

優花が頷く。

「わあ、チョー綺麗」

「それな」

「うん」

ギャルズ達も、目をキラキラさせている。

「さて、直哉。いつものアレをやるか？」

そう言うのと立ち上がり、上着を脱ぎ始める。突然のことで、史絵は顔を赤らめるが上半身裸になると、

還暦前とは思えない、超ムキムキな筋肉が顕になる。

「さて、やりますかね？」

直哉も立ち上がると、そのまま軍港の埠頭に向かう。

皆も、そこへ従って行く。

二人は距離を取ると、正面に向かって構える。

「でやっ!!」

直哉が一気に距離を詰めて、上段回し蹴りをすると肘で受け止めようとするので、そのまま軌道を無理やり中段に変えて、振り下ろすように蹴りを叩き込む。

攻撃的受けが失敗したと気づいた春人は、膝を上げてケリを受け止め、そのままコメカミに向かってフックを放つ。

それを足を戻して上段払いで躲すと、更に春人は鳩尾に向かいボディブローを叩き込む。

それを直哉は、バックステップで躲すと再び回し蹴りをするも、それを素手で掴まれてしまう。

そのまま持ち上げて、地面に叩き付ける。

「ぐあつ!!」

「ふんっ!」

直哉は受け身を取るも、背中に激痛が走る。

更に追い打ちで、鳩尾を踏み付けに掛かる春人を、転がりながら躲し立ち上がる。

「準備運動は、この辺だな?」

「ええ」

二人は一気に距離を詰めると、素早く拳を繰り出し合う。

春人は全部避けて躲しているが、直哉は五発に一発は貫つてしま
う。

「ぐふっ」

「まだまだ修練が足らんのではないか?」

「くっ……これならどうだ!」

フェイントを掛けてのリバーブローを、春人に叩き込む。

「ぬおっ!」

「倒れねえか……!?!」

春人の顔が歪むも、まだ戦いは終わっていない。

更に蹴りも混ざり、戦いもクライマックス……と言ったところで、バイクの音が聞こえて来る。

『原 圭一を出せー!!』

と、口々に声が聞こえてくる。

二人は、一旦距離を取る。

「何だね、あれは?」

せつかくの楽しみを邪魔されて、少し気に触った顔をすると圭一
が、

「ああ、すんません大師匠。多分、この間女の子に暴力を振るおうとしたのを見つけて、シメた暴走族つすね。ちよつと潰して来ますんで、待っててください」

「待ていー私が説得して来てやろう。武という物は、争いを避ける為にあるものだ」

そう言うと、皆を引き連れて出て行く。

「諸君。私は、自衛隊統合幕僚監部直轄大本営警務本部が本部長、七原春人陸准将である。ここは自衛隊の敷地内である。速やかに退去せよ！これは警告である。退去せよ！」

数台のバイクに跨って、鎮守府の門を囲んでいる暴走族に向かって、七原准将が毅然と警告を与える。

「うるせえ!!やるかじじい!」

イキがった暴走族の言葉に、春人の動きが止まって、体が震え出す。「ほう、お前達。若いのに、死にたいようだな?」

その言葉に、直哉が顔面蒼白になると、暴走族に警告する。

「おい、お前等、悪いことは言わないから、七原さんに謝るんだ!」

「どうしたんだ師匠?」

「師匠がキレたんだよ!」

そんな様子の直哉を、不思議そうに見ている圭一に、必死で言い返す。

「は?うつせえよ。てめえ等全員ぶつ殺して、女共は犯つ……」

先頭のバイクに跨っていた暴走族は、春人にガシツと頭を掴まれた。

「ぎゃあああああ!!!」

ミシミシつと、音を立てて頭を掴まれた暴走族は悲鳴を上げる。

そして、そのまま地面に叩き付けられた。

足立のような、技ではない。ただ単に、頭を掴んで投げたのだ。投げられた暴走族は、泡を噴いている。

春人は、そのまま大きく構える。背中には、鬼の顔が浮かび上がっているように見える。

「み、皆!師匠を止めるんだ!死傷者が出るぞ!!」

「待って!あの化物を、どうやって止めんだよ!?!」

「と言うか、もう救急車呼んだほうがいいんじゃない?」

「と言うか、何で自衛隊には、暴走老人しかいねえんだよ!」

真つ青の直哉に、ツッコむ弟子一同。

そんな間に、もう一人はリバーブローを叩き込まれていた。

「うごええええええええ!!!」

バイクから吹き飛ばされて、地面に叩き付けられた暴走族は、腹を抑えてのたうち回り、嘔吐と失禁をしている。

そんな惨事に、暴走族はバイクをUターンさせて逃げようとする。「逃げられるとも思っているのか!」

哀れ、三人目の犠牲者はベルトを掴まれて、そのまま地面に投げ付けられた。

残りの暴走族は、あまりの恐怖に逃げ出すことを忘れてしまい、失禁するものも出る始末。

それも始末しようとした時だった。

「春人さん、そこまでですよ」

「む……」

動きが止まったところで、我に返った暴走族は、我先にと逃げ出した。

結局、置いて行かれた暴走族は、笹野診療所に担ぎ込むことにした。

「で、一人目は頭蓋骨にヒビが入って、二人目は肋骨骨折。肝臓破裂まで行かなくてよかったわね。三人目は脳震盪。この子等、頑丈ねえ」

犠牲者の暴走族達を診察した笹野麻衣医師は、大きな溜め息を吐いた。

「いい運動になったな。ずっと観光観光で、体が鈍るところだった」

「師匠。《一応》警務本部長なんですから、鎮守府内での殺傷沙汰はやめてもらえませんか?」

げんなりした直哉がツツコむと春人は、

「バカ言え。やるかジジイなぞと、戦争を仕掛けたのはあっちだ。男たるもの常在戦場、と言うではないか」

「それを体現してるのは、大師匠くらいっすよ!」

圭一も、堪らずにツツコミを入れる。

「しかし、圭一と言ったか。彼奴等高校や大人と見たが、中学生でそこまで出来るとは、お主も喧嘩が強いな。いい孫弟子を持った。是非自衛隊に来てもらいたい。陸上自衛隊 高等工科学校、と言うのがあってなあ。まだ早いが、進路の一つとして考えてもらいたい」

「はいっ」

師匠の師匠、つまりは大師匠に褒められた圭一は、嬉しそうな顔をして答える。

そんな横で、恋人の史絵は内心心配をしているので、複雑な顔をす

る。「では、弟子の練度も確認できたし、いい孫弟子にも恵まれたことがわかった。暇を見つけては、稽古を付けてやろう」

「はいっ。宜しくお願いします」

こうして、嵐のように現れた七原陸准将の訪問は、終わりを告げた。

その後、七原春人は暴走族を病院送りにした件について、休暇中ながら始末書を書いたことは言うまでもない。

始末書を提出した脇で、秋奈によって足立自身も暴走族を返り討ちにしたことを暴露されると、

足立将補は、苦笑いを浮かべる他無かった。

そんな怪物も、後一年と少々で自衛隊を去る。

足立は、彼の後任人事をどうするか。今から頭を悩ませるのであった。

真夏の夜の夢

それは、一つの可能性の形。

「直哉……」

「直哉さん」

直哉が目を覚ますと、知らないマンションの一室でソファアームに座っていた。

そんな直哉を、湊子と優衣が覗き込んでいる。

「お疲れ？」

「副社長は大変ですものね」

優衣と湊子が、笑顔を浮かべている。

「副社長？」

直哉は疑問に思ったが、何故か自分は三高ホールディングスの副社長、

兄である高菜直樹を補佐する立場だ、ということを出す。

東日本大震災で、被災救助時に精神を病んでしまった直哉は、自衛隊を除隊。

兄の勧めで、高菜ホールディングスグループに専務として入社。

そしてその後、学友で、リハビリ中も献身的に尽くしてくれた、

高梨宮湊子に思いを告げて、目出度く高菜家へ降嫁して、結婚した。

同時に姉への思いも告げると、事実婚としてそばに居てくれる、と約束した。

兄と父だけが知っている秘密。

それから、八年の年月が経過していた。

その頃、大きな商社系である三友商事を買収して乗っ取る手腕を見せた高菜直樹は、

三高ホールディングスCEOとして、日本で一番有名な実業家となっていた。

兄から、アミューズメント関連の三高ワンダーランドの社長を任せられるようになると同時に、

本社副社長へ昇進。

兄直樹は、秘密主義なところがあつた為独身を貫き、後継者の期待は弟の直哉に向けられていた。

「直哉、夕飯できてるわよ。今日は湊子が作ったのよ？」

「ふふ、わたくし私の手料理が口に合えばいいのですが」

二人に手を引かれて、食卓へと向かう。

食卓には、四く五歳くらいの女の子が座っている。

「パパ、お昼寝してたの？」

「パパはね、ちよつと疲れて眠ってたんですよ」

娘の海来ミクの頭を撫でながら語り掛けると、湊子と優衣が席に座る。

そして直哉も席に座ると、楽しい夕食の時間だ。

姉の優衣は、社長秘書として子会社化した三友HDに乗り込んでいる。

三友派と高菜派の接着剤・緩衝材として、日々社長の龍三郎を補佐している。

所謂、お目付け役でもある。

「今日も見合い持ってこられたんだけどさあ、断つてね」

なんて「無駄なのにね」と付け加えながら、直哉にウインクする。

「まあ、そんなものだろう。二人がいてくれるおかげで、私は幸せだよ」

直哉の口からは、そんな言葉さえ出る。

家族四人幸せな生活。

娘が眠れば夫婦の時間。

そして翌朝は、また会社に出勤する毎日だ。

日本一のレジャーランドとなった、お台場三高ワンダーランド。日本復興の象徴となった、そのアミューズメント施設を統括して……

優衣と湊子……

初恋の相手と……

『直哉……』

目を覚ますと、波の音が聞こえる、東北は宮戸島鎮守府だった。真夜中で、月明かりが差し込んでいる。

「ん……………」

「直哉。風邪を引くのですよ」

電が、顔を覗き込んでいた。

そうか、直哉は思い出した。夜、何となく抜け出して、鎮守府の執務室で酒を飲んでいた。

そして、眠ってしまったのか、と……

甘くて切ない夢が、傷を抉る。

もし、深海棲艦が現れなかったら。

もし、提督になってなかったら。

抑々、自衛隊に入っていなかったら……

こんな幸せな結果になっていただろうか。

何も答えない直哉に、電は心配そうに覗き込む。

「直哉、お酒の飲み過ぎなのです。今日七原准将から頂いたコニヤツクを、もう空けてしまってるのです」

そう言えば、師匠から立ち去り際にコニヤツクのボトルを頂いたことを思い出した。

「もう、困ったお方なのです。お水を持ってくるのです」

そう言うと、執務室の隅に設置しているレンジシンの水道から、コップに水を注ぐ電。

未練と言うやつか、今が幸せではないと考えているのか……

そんなことはない筈。電や卯月、薄雲と三人も素敵な嫁に巡り会えて、

気楽な生活を送っているではないか。

直哉は葛藤をしながら、残っているブランデーを喉に流し込んだ。

「あつ、直哉。本当にどうしてしまったのですか？」

「…………夢を、見たんだ」

水の入ったグラスをそつと差し出す電は、首を傾げる。

「そう、何と言うか甘い夢だった。甘いけどほろ苦い……………もしも、深海棲艦が現れなかった世界さ。私は三高ホールディングスの副社長になつていた。湊子と結婚して、優衣姉さんとも一緒に暮らして、娘の海来もいて……………」

「……………」

「日本に大きな地震があつて、私はその救助活動で心をやられて、それで兄さんの勧めで高菜ホールディングスに入つた。お台場に遊園地を兄弟で創り上げて、日本一のテーマパークになった。そして明日も仕事だから早く寝ないと。そう思った時に、誰かの声が聞こえて目を覚ました」

「……………未練、のですか?」

電ははつきりと口にした。女の勘で分かっていたのだ。湊子や優衣を好きだった、と言うことは。

「未練なのかなあ?でも歴史に、もしもはつきみものであり、禁句のように、もしもあの時ああなつていたら、なんて考えないほうがいいのさ。そう思っていたんだけどね」

自嘲する直哉に、電はふふつと笑い直哉の手を引いて立たせる。

「歩けるのですか?」

「ああ、大丈夫だよ」

「お月さまを見に、外に行きましよう」

「そうだね」

二人は、軍港の埠頭の先に歩いて行き、腰を下ろした。

ふと、電が思い出したように口を開く。

「電も、夢を見たのです。それはもうおかしな夢。東京スカイツリーで女の人からケツコンカッコカリリングを渡される夢……………その女の人は『不敗の女神様』なんて呼び名で呼ばれていた提督。可愛くて、真面目で、ちよつと天然なところもある、放つてはおけない小さな英雄さん」

「……………」

「その世界は、名古屋一円が深海棲艦の侵攻で焼け野原になってたのです。電達はその復興を見守りながら、名古屋でもう一人無二の親友とその女性提督と楽しく賑やかに暮らしていたのです。男勝りがかっこいい女の子や、可愛くて活発な女の子、それに暗い過去を背負っても明るく振る舞う提督の親友、賑やかで楽しい世界だったのです」

『もし、そんな世界だったら』

二人の言葉が重なる、フツツと二人で笑う。

「きつと、真夏の夜の夢だったのです。この世界はこの世界で幸せなのですよ。もしもとか、どっちが幸せだったか、なんて物差しが違うものを測れないのです」

「そうだな」

直哉は、それだけ言うと考え込む。

大貫 悟は『別の世界から来た』と言って死んで行った。

「いずれにせよ……電は、貴方のお側に居られて幸せなのです」

そう言う、抱き付いて頬にキスをした。

「そうだね、そのとおりだ。その夢の先は、悲しい結末だったかもしれない。電は一番いい時に起こしてくれたよ。例えば、点検ミスで三高ワンダーランドで事故が起きていたり……」

何気なく、直哉はポケットからスマートフォンを無意識に取り出して、湊子に「点検はしつかり」と送っていた。

「電の夢の世界だってそうなのです。もしかしたら司令官が殺されて、不幸な悲しい物語に転落してしまっただけかもしれない。艦娘同士が、血で血を争う戦いになってたかもしれない」

『もし、そんな世界だったら』

再び二人の言葉が重なる。

「きつと、私は絶望していただろうね。兄さんを誰よりも尊敬している私が、兄さんの足を引っ張ってしまった等と……」

「電も、希望を失ってたのです。そして死に場所を求めて、戦場で散っていたかもしれないのです」

『もし、そんな世界だったら』

三度、二人の言葉が重なる。

そんな『二度あることは三度ある』のような事に、二人は顔を見合わせると、

二人でお腹を抱えて大笑いする。

笑い声が、静かな埠頭に木霊する。

「やっぱり……真夏の夜の夢だったのですよ。甘くてほろ苦い」

「そして、甘美な夢……か」

笑い終えた電がポツリと呟くように言うと、直哉も電の頭を撫でながら呟く。

そして、電は顔を見上げる。

「でもやっぱり、電は現実が一番なのです。直哉がいて、卯月 & 薄雲うーちやんずがいて、圭一がいて、寛太がいて、慎がいて、四国で愛ちゃんと健太が頑張っていて……、ヘンテコリンな人達が、ヘンテコリンな騒動を巻き起こす、そんな現実が一番なのです」

「そうだね」

直哉が電を抱き寄せると、電はふふつと笑う。

そんな電の頭を、優しく撫でていると、

「あー……ここにいたぴよん」

「探しましたよ」

うーちやんずが、埠頭にやって来た。

「卯月、薄雲、どうしたんだい？」

二人で振り向くと、卯月はおこである。

「どうしたもこうしたもないぴよん。突然二人が居なくなつたから、探しに来たぴよん」

「どうせ鎮守府だろう、と思っていましたか」

腰に手を当てておこのポーズをしている卯月の隣で、表情の薄い薄雲がさほど探してないと補足する。

「いやね、真夏の夜の夢を見ていたのさ」

『真夏の夜の夢?』

首を傾げる二人に、立ち上がりながら二人がもしもの世界を語り始める。

「うーちゃんもそんな夢を見たぴよん。レジェンドとか言うお姉さんが強かったぴよん」

「私は、世界を敵に回した大悪党でした」

『もし、そんな世界だったら』

四人の言葉が重なると、四人共ふつと笑う。

「そんな世界より、現実がいいな。これから何があるうともね」

「またドタバタの連続なのです。おかしなのが来て、おかしな騒動を巻き起こす」

「楽しく賑やかでいいぴよん」

「そうですね」

帰りの道すがら、そんな会話をしながら誰もいない我が家へ帰って行く四人だった。

「直哉、お手柄だ」

「はあ？」

三高ホールディングス総帥・高菜直樹から電話があったのが、翌日の昼過ぎだった。

三高ワンダーランドの目玉アトラクション、メテオストライクサンダーボルトで点検の手抜きがあったのだ。

建設段階で危険な箇所があり、すぐに補強工事に取り掛かることを教えてくれた。

補強工事は一日掛けて行い、明日からは再開の見込みだ、と。

無意識で湊子に送っていた内容に、湊子が不安を覚えて直樹に伝えていたのだ。

直樹は、即座に開園前に業者を手配して、総点検をさせたのだ。夏休みのハイシーズンにも関わらず、開園を遅らせてまで……

「何で、点検の瑕疵なんて解ったんだ？」

「さあ。何ででしょうね？真夏の夜の夢……としか言えないですね」

「まあ、とにかく助かった。私も日本一の経営者と持て囃されて、鼻が高くなっていったのかもしれない。これを機に、襟を正すでしょう」

「兄さん」

「何だ？」

「兄さんを支えられなくて、ごめんなさい」

「フン、やっぱりお前は、自衛隊に入らない、と言う選択に未練を感じていたんだな。だが、お前達自衛隊のおかげで、日本と言う貿易に頼らなくては生きて行けないこの国が、干からびずに済んだ。それでよかったんだ——」

——『もし、そんな世界だったら』

「なんて、考えても無駄なことだ。私には、益体もないことを考えている暇はない」

直樹は、ピシヤリと言い放った。

「そうですね。兄さんも無理しないでくださいね」

「分かっている。そうそう、親父が蔵書が足りない、とかぬかして全国を旅してるそうだ」

「あの人は変わりませんねえ。大屋敷を図書館に改築してしまうくらいの読書狂いですからね。電子書籍の良さもわかってほしい『時代遅れ』ですよ」

「まあ、私に海外の書籍の搜索を頼むくらいだから、今ある本では飽きたのだろう？」

「それじゃあ、兄さんも忙しそうだしこれで」

「ああ」

電話を切った直哉は、大きな溜め息を吐いた。

「これも『真夏の夜の夢』か……」

実家へくLabyrinthLibrary

「実家に帰ろうか?」

直哉が思い立って三人に告げたのは、あの夏の夜の夢の翌日だった。

「実家……なのですか?」

突然の言葉に、電は首を傾げる。

「何となく、親父の顔も見たくなつたのさ」

「なるほど……」

今日は、愉快的仲間達は遊びに出掛けて不在。

薄雲と卯月もソファアで寛いで、久々に四人でいられる空間である。

「親父さんってどんな人ぴよん?」

「そうだなあ、読書狂ヒブリオマニアいって印象だね。世界中からどんどん書物を集めて、毎日家で読んでいるよ。その御蔭でマルチリンガル。ヘブライ語まで読み書き出来るよ」

「面白そうな人ですね」

「そうだね。行ったら、きっと驚くと思うよ。何せ……」

——本の城だからね。

翌日。直哉達は一路、高速道路を飛ばして東京へと向かった。

東京の閑静な住宅街の一角に、その城は存在していた。

まさに、ファンタジー映画に出て来そうな要塞そのものである。

「おお……大きいのです」

「お庭が殆どないぴよん」

「まさに、建物ありきの設計ですね」

三者三様に驚いていると、直哉は門を、持っている電子キーで開けると、開いた大きな門を車が通り、高級車の横に空いているスペースに車を停める。

「さて。ようこそ、高菜図書館へ」

ギイ……入り口の大きい扉の中に付けられた小さい扉を、電子キー

で解錠すると中へと入って行く。

中のホールは螺旋階段となっており、至るところに本棚が設置されている。

廊下ですら、本棚が据え付けられており、左右に見える書架の列は、三人を唾然とさせるようなものだった。

「何だ、直哉。来ておったのか？」

上から降りて来たのは、本を片手に螺旋階段を降りて来る、ヒゲも髪も伸ばしっぱなしの白髪の男。

「この、浮浪者みたいなオッサンが、うちの親父だ」

「浮浪者とは何か？毎日、ヴィダルサスーンを使って洗っておる」

早速、再会の毒舌の応酬である。

「初めまして。直哉の第一嫁の電なのです」

「第二嫁の卯月だぴよん」

「第三嫁の薄雲です」

そんな自己紹介に、ハツハツハと笑い、

「何だ、直哉も艦娘を嫁にもらったのか？しかも三人も」

「ん？」

直哉には、「も」という言葉が引つ掛かった。

「まあ、立ち話も何だから、ちよつと待ちなさい。本を戻すのでな……」

螺旋階段を降りると書架に消えて行き、新しい本を片手に戻って来る。

「青葉、青葉ー！」

「はあい、お呼びですか？館長」

地下室の階段から、ひよっこり青葉が顔を出した。

「も、つてことは……？」

「まあ、それも含めて、自己紹介と行こうではないか。私が、この高菜図書館の館長の、高菜源一郎だ」

「ども、恐縮です、青葉ですう！源一郎さんと、先日入籍しました」
その言葉に直哉は、

「き…聞いてないぞ、親父！」

「誰にも話したらんからな。自衛隊のやりように嫌気が差して除隊した青葉が、ワシがお手伝いさんを探していた所へ面接に来てくれてな。そしたら、本好きで意気投合して、そのまま結婚することになつてな」

「交際期間0日の結婚でしたよお」

自信満々にいう二人に、啞然とする四人。

「まじか……？」

「すごいのです……」

「そうだぴよん……」

「ところで、夜の営みの方は？」

そんな、薄雲のキラークラスは、

「は？私達は、本で結ばれているから、その必要はない」

「その通り。本に対して、失礼ですよ」

等と、しれっとクリアーされてしまう。

「ともかく。お茶を出すから、上がって来なさい」

そう言うと、螺旋階段を登って行く。その間に、青葉が図書館の解説をしてくれる。

地上四階、地下二階の建物で、地下と一、三階は全て書架。四階は生活エリアで、リビングと食堂とベッドルームと書斎。

左右のタワーにも小部屋があり、籠もって読書するのに丁度良いらしい。

青葉の案内でリビングに通されると、座れるタイプのリビングにローテーブルが置いてある、シンプルな部屋である。

「さて、コーヒーでも淹れてもらえないかね？」

「はい、館長」

青葉が、一礼して出て行くのを見計らって、源一郎が口を開く。

「最近、新しい本がいっぱい入荷して、忙しい限りだよ」

リビングのローテーブルには、大貫 悟の著書や防衛白書が多数積み上げられている。

「親父、大貫さんの著書なんてどうしたんだ？」

「そうさなあ、彼は何故暗殺されたか、その真実を知りたくてな。差し当たり、彼の艦娘論に関する本や防衛白書を取り寄せて、今インプットしているところだ。彼は何を思い異世界人等と名乗ったのか？本当にそうだったら、どのようなテクノロジーを用いたのか？そして、大貫 悟の過去を救う、という事は達成されたのか？私はこう思っている。大貫 悟のやったことは無駄だった、と」

「どうしてだい？」

「過去を変えて未来が変わるなら、そのタイムパラドックスはどう整合するんだね？それよりも、私はマルチバース論の方に興味があつてねえ」

「多元宇宙論……世の中には、並行した宇宙が複数存在している」

「世界は、生まれ続けているのかもしれないよ。例えば大貫某の世界がαワールドとする。その世界は、彼の言うように滅びたのだろう。だが、大貫のやって来た時点で、この世界はαワールドⅡ、という分岐点を迎えたかもしれない。何れにせよ、仮説の話だがね。私は、大貫 悟の考えて来たことを、著書を通じて彼の為人を知って、周辺の人間の著書で真相に近づけると良い、と思っているよ」

そんな高菜源一郎が、後に『大貫 悟伝』を著し、反艦娘派の息の根を止めることになるうとは、今の誰にも予想すらできないことだった。

『…………』

そんな源一郎の話を黙って傾聴していると、青葉がコーヒーを持って来る。

「お待たせしました。よかつたら、皆さんも自由に本を読んでください。こうなったら、お二人ともお時間掛かりそうですし。返す場所に困ったら、中央のコンピュータに裏表紙に貼り付けてあるバーコードを読み取って頂ければ、対象の書架がランプが光りますので……ああ、地下には危険な禁書が眠っているので、お気を付けください」

そう言われると艦娘トリオが立ち上がり、大貫 悟論を語り合っている直哉達を尻目に、三人で階段を降りて行く。

高菜図書館には、日本語の本から外国語の本まで、多数に亘って収

められている。天井まで衝く書架に、各書架の横には脚立が立て掛けられている。

古典から最近のライトノベルまで、多種多様な本は電達を楽しませていた。

「ファンタジーにも、古典から新しいものまでいろいろあるのですね？」

「うーちゃん『指輪物語』読んだよ」

「私は『ナルニア国物語』を読みました」

「電は『銀河英雄伝説』を読んでいたのです。ヤンとかいうやつが死んでしまつて、悲しいのです。まだ読み途中なのです」

「うーちゃん、地下室に行つてみたいぴよん」

「でも、気を付けてって言われたのです」

「私が同行します」

卯月と薄雲が、地下室へと消えて行つた。

「くたばれ！カイザーラインハルト！」

電は、未だに『銀河英雄伝説』を読み続けていた。

地下書庫は、薄暗い電球が点いているだけのもので、しっかり装丁されている本から、そうでない本まで転がっている。

卯月が古ぼけた本を取り出した。

表紙には、『腹腹時計』と書かれていた。

「腹腹……時計ぴよん？」

「どんな時計なんでしょうね……？」

二人は、置いてある椅子に腰掛けて、読み進めて行く。

「どれどれ、今日、日帝本国に於いて、日帝を打倒せんと既に戦闘を開始しつつある……」

読み進めて行くうちに、二人共顔がサーツと青くなつて来る。

「これ、ゲリラの教科書だぴよん！」

「そのようですね……ここまで詳細に書かれていると言うことは、実際の反日ゲリラが用いた読本ですね」

「もつと、マシな本はないのかぴよん」

「取り敢えず、戻しておきましょう」

二人は『腹腹時計』を戻すと、更にその隣の本も読んでみる。過激思想やゲリラの本、或いは有害な本ばかりが収められている。

「下の本のほうがマシっぽい。この本は、血腥い本ばかりだぴよん」

「そうですね……」

奥の階段を降りて行った。

地下二階は、更に怪しい本がずらりと並んでいる。

「この『エイボンの書』とかはどうだぴよん？」

「嫌な予感しかしませんが……次元を超越した混沌の中心に存在する、盲目にして無知なる無限の神アザトースを地球に招来する儀式……」

薄雲はそれを読んだ瞬間、無形の恐怖に背筋が凍り付いた。

それでも、途中までは読んで、パターンと本を閉じた。

「や、やめよう。これは駄目です」

「どうしたぴよん？」

「この本は危険過ぎます」

「……」

真つ青な顔で本を戻し、二人は隣の本を取り出した。

その本は、ルーン魔法の一例の本だった。

力の言葉を唱えて、秘薬を掲げれば使える……と書かれている。

「面白そうだぴよん」

「そうですね……」

そう言いながら読み進めて行くと、薄雲があることに気づく。

「抑々必要な秘薬が、『黒真珠』『ニンニク』『マンドレイクの根っこ』『蜘蛛の巣』『血の根っこ』『朝鮮人参』『ペラドンナ』『硫黄』の時点で、収集困難なんです……『Armageddon』だけは『ブラックロツク』だけでいいらしいですね？」

「Armageddonって言うからには、恐ろしそうだぴよん……」
「戻りましょうか？この本は危険過ぎます」

「ぴよん」

二人は、トボトボと地上へと戻って行った。

その様子を、丁度青葉が見つけた。

「お二人とも地下に行ったんですか？まさか、地下二階に行っていないですよ？あそこの本は、読むだけで正気をなくすほどの危険な本ばかりで……」

『……………イツテナイデスヨ』

その様子に、青葉が大きな溜め息を吐くと、上から高菜親子が降りて来る。

「皆、満足したかね？」

『はーい！』

三人の艦娘が、揃って笑顔で答える。

「では、外で夕飯にしよう。今日は奮発して、焼き肉にでも行こうか？」

『はーい！』

直哉の言葉に、嬉しそうに艦娘達が答える。

皆が次々と図書館から出て行く中、薄雲は何かの気配を察知して、振り向いた。

「……………」

振り返ると、誰もいない。

「おーい、早く行くぞ」

そんな直哉の言葉に、後ろ髪惹かれる思いで、薄雲は図書館を出て行った。

球磨、自衛隊やめるってよ

球磨が、他鎮守府に移籍する。

そんな噂が、真しやかに宮城県内の鎮守府に流れたのは、直哉が実家から戻って来た翌日の、

幕僚会議の席上だった。

「……………ところで、何で夏海くんが居るのかね？」

羽佐間眞一郎陸准将補は、まず幕僚会議の席に奈々海ではなく、夏海が居ることをツツコんだ。

大村夏海の首からは、大貫 悟前幕僚総監印の、自衛隊施設入構許可証が下げられており、

艦娘の加賀を伴っての幕僚会議参加で、宮城駐屯地の隊員も、最早顔パスで通しているのだ。

「母は今ドバイですから。それに今、私も夏休みで……………」

しれっと答える、眞一郎とは反りの悪い夏海。

そんな眞一郎は、妙高を秘書艦で伴っている。

「まあまあ。奈々海君も、ダンナとの逢瀬を楽しみたいだろうし、夏海ちゃんも夏休みだからのう」

そう取り成すのが、南三陸鎮守府の武藤二佐である。

秘書艦には、長門を伴っている。

「……………」

どんよりしているのは、女川鎮守府の桐山二佐である。

未だに、神通は帰って来ない。

秘書艦代理は、金剛が務めている。

「ところで、球磨が異動になるって噂、本当なのかい？」

直哉が口を開く。直哉のところは輪番秘書艦制で、今日は薄雲が同行している。

「まあ確かに、艦娘が警務隊に居ることが異常だからなあ」

眞一郎が、従卒として将官権限で特任した紗花——階級は二士——が淹れたコーヒーを啜りながら言う。

「抑々、宮城県内に異動と言うことは、あまり考えられないでしょう

？」

夏海がこのコーヒーを飲んで、「美味しいです」と笑みを投げ掛けると、紗花もニコニコ笑顔を返す。

「うちに来てもらっても構わんが……居づらくなるだけじゃ、と思うがのう」

そう言うのは、武藤二佐である。

「レストランの従業員として雇う、と言うのはどうだろうか？」

南三陸鎮守府は、とうとうレストランを開いてしまった。ダイナーのみの営業ではあるが、

艦娘と地域住民の触れ合いの一環で、当時の宮本一佐が許可したのだ。

「艦娘を、レストラン従業員に雇うってのはどうなんじゃろう？寧ろ、女川で欠員が出てるんじゃないかね？」

「……………」

そう話を振ると、更にずーんと落ち込む桐山二佐。

「あれから、神通は帰って来てくれてないのデース。軽巡棲姫も、デスペランに帰ってしまったデスし」

「うおおおお!!羽佐間准将補と行った風俗が、そんなに気に入らなかつたのかあ!?!」

おいおい泣き出してしまうが、場の空気はぴしつと凍り付いた。

「眞一郎……風俗に行ったってのは、本当なんですか？」

紗花が、ハイライトの消えた目で見つめる。

「桐山二佐の付き合いでな」

責任を、人に擦り付ける酷い将官である。

「うふふふ……ちよつとその風俗店を教えてください。その風俗嬢をバラバラに切り刻んで、トイレに流して来ます」

「紗花さん」

夏海が立ち上がって、紗花に正対する。

「いけませんよ、所詮風俗嬢なんて身体だけの関係。心までは奪えませんが。男という生き物は所詮、性欲に忠実なんですから、あまり目くじらを立ててはいけません」

「はあ」

何故か紗花は、夏海の言うことはきちんと聞いてくれるのだ。

「でも、先日は危うく私と関係を持つところだっただろう？」

意地悪めかして眞一郎が余計なことを言っていると、他の提督は冷や汗を掻き始める。

泣いていた桐山二佐も、顔が青褪めている。

「それは、賭けに負けたらの話ですし。抑々『男性嫌悪症』の『同性愛者』を、無理やり抱くのは酷過ぎませんか？」

「そうです、眞一郎。夏海ちゃんに手を出したら、いくら眞一郎でも『メツ』です」

「何だ、紗花。夏海には懐くのか？お前さん、女にモテたりしてないだろうなあ？」

誂う眞一郎に、少し考えると、

「一人だけいますよ、何度振っても根気強くアタックする子が。運動神経バツグンでかわいい、所謂『僕っ娘』が」

「そうなのか？ともかく、球磨の異動話だったなあ？」

答える夏海に、あまり興味が沸かなかったようで、話を戻す眞一郎。

「抑々、何で警務隊に入ることになったんでしょう……？」

加賀が、素直に疑問を口にする。

『……………』

然も当たり前のように、球磨が警務隊にいたから、皆答えられないのだ。

そんな所に、この度東北警務隊長に昇格した、幸田美紅二佐が通り掛かった。

「幸田二佐」

「何でしょう？提督方がお揃い……で」

美紅が入って来ると、目に止まったのは夏海の姿である。

「なっちゃん、お母さんはどうしたの？」

「母は今、有給休暇を消化する為にドライブに行ってます。私が提督代理を仰せ付かりました」

「納得。ところでどうされました？」

立つたまま提督達を見回すと、

「何か、球磨が他の鎮守府に移籍するんじゃないか、つて噂が流れてるな？」

代表で、眞一郎が問い質す。

「はて。特にそんな予定は、小官の耳に及ぶ所ではありませんか？」

「異動予定はないのだな？」

「そのように申し上げた筈ですが？」

「抑々、どうして球磨は、警務隊にやって来ることになったんだね？」

「それですか……………」

美紅は、大きな溜め息を吐いて語り出した。

「元々は、札幌鎮守府で深海棲艦やDSビーストとの戦闘を行っていたようですが、大貫前総監に呼び出しを受けてから戦闘に従事しなくなり、陸の害獣を倒したり、鮭を捕まえたりしていたようです」

「大貫さんか……………」

直哉が、溜め息を吐いた。

「それで、警務隊が各地区に分かれるようになったところで、札幌鎮守府より大貫総監のご指示で異動になって…………然も当然のように監査をしているから、なんの疑問を持っていませんでしたが」

「それで、球磨からは転属願ひ等は出ているのか？」

「いいえ」

眞一郎の質問には、首を振りながら答える。

「では、何でそのような噂が流れたか？と言うことになりますね。球磨自身が海に戻りたがっているのではないですか？」

夏海が、メガネを掛け直しながら問い掛けると美紅は、

「今の暮らしが気に入ってるらしいので、それはないと思うのですが……………」

そう答えると、提督全員は大きな溜め息を吐いた。

「ただ、除隊という可能性はなくはない、と思います。所謂『大貫の告白』で脱柵した摩耶や多摩、除隊した青葉のように、自衛隊を辞めて違う途を進む、と言う可能性もなくはない、と思います」

「或いは、PMSCsのコントラクターのように、艦娘という特性を一

匹狼でやるか……か？」

美紅の見解に対して、直哉の呟きは、他の提督も興味を唆るのに十分な話だった。

「まあ、幸田二佐も座ってください」

夏海が席を勧めると、幕僚会議は今後の大本営の、未来予想図展望になる。

「現状、害獣化した下位深海棲艦とDSビーストとの戦闘だけだから、それこそ民間に鎮守府機能を移してもいい、とは思うんだよ。それに抵抗するのは、政府のお歴々さ。元々反艦娘派が、何故艦娘の社会進出に抵抗したか？それは、艦娘にこの国が乗っ取られない為さ。それともう一つ、私は疑問に思っていることがあってね」

直哉はそう言うと、周囲の艦娘達と提督達を見回す。

「なぜ、艦娘は誰も妊娠していないんだ？」

『あつ……』

百合の夏海のところの加賀以外の艦娘達は、はっとした。

「それで、うちの弟子が三人の娘に一発命中だろう？うち一人は深海棲艦だ。それで考えられるのは、大貫 悟もまだ何か隠したまま死んで行った、と思うほかない。或いは、大貫 悟は影武者で、真の大貫がどこかで生きているのではないか？まあ、私の言いたいのは、なぜ艦娘に生殖機能がない、或いは妊娠の可能性が殆ど無いのか？明石を捕まえて、吐かせる他ないか。艦娘建造システムを作ったのは明石だからな」

その言葉に、全員が頷く。

「話を戻そうか。何故、鎮守府機能を民間に委託できないか？それはやはり、艦娘が強大な軍事力を持つているから、日本としても手放せない、と言う背景もあるだろうね。艦娘利権と言うものもあるかもしれないなあ。いずれにせよ、前政権と今の艦娘融和政権の考えが一致しているところは、『艦娘という軍事力は、政府がコントロールすることにあるんだよ。その為の警務隊で、相互監視に艦娘を配置したところで、別におかしくはない』

「……………その発想は、ありませんでした」

直哉の仮説に、美紅は目からウロコが落ちる思いだった。

「いずれにせよ、私の父が『大貫 悟伝』なるものを著すと息巻いているし、彼の軌跡とやりたかったことの仮説が揃うのは、もっと先の話になるだろうね。さて……」

そう言っている間に、通り掛かったのは球磨だった。

「おーい、球磨」

直哉が呼び掛けると、球磨も敬礼して会議室に入室する。

「球磨、自衛隊辞めるって?」

「はあ? 誰がそんなこと言ったクマか? 球磨は、ずっと東北警務隊クマ」

「何かね、そういう噂が宮城県内の鎮守府で、持ちきりになってね」

「女川に来てくれないか、ってオフアアはあつたけど、断ったクマ」

その言葉で、視線は桐山二佐に集中した。

「桐山先輩……あんたって人は……」

直哉が、ジト目で見遣る。

「もしかして、神通さんが抜けた穴埋めですか?」

無表情で薄雲も見つめる。

「本当に、神通と離婚するつもりなんじゃないだろうねえ?」

「場合によっては、ちよつと庁舎裏でお話させてもらうぞ?」

武藤二佐と長門も、珍しく怒っている。

「………サイッターです」

夏海は、吐き捨てるように叩き付けて、ゴミを見るような目で見ている。

「……夏海さん、どうか落ち着いてください」

加賀は、夏海が本気の本気で怒っていることを心配している。

「桐山二佐、原因の私が言うことではないが、それは不味いんじゃないかね?」

「ちよつと、神通さんが可哀想過ぎます」

「桐山二佐、ちよつと殺していいですか?」

眞一郎も諫めるように言い、妙高も抗議を言い、紗花は殺意全開でニコニコしている。

「い……いや……そういうつもりではなく……艦隊の……」

しどろもどろになる桐山に、黙っていた金剛が口を開く。

「デスペランに行っても、迎撃されて近づけないのデース。どうも神通は、デスペランで皆に慕われているママになっっているようで、摩耶曰く戻る気一切ないそうなのデース」

『……………』

全員が、大きな溜め息を吐いた。

「わっ、私としては謝ってもいいのだが……………」

その言葉に、夏海がキレた。

「桐山提督が2000%悪いのに『謝ってもいい』？本当にサイツテীদেরね、ゴミ以下です。いえ、ダニ以下です」

「夏海さん。流石に、それは言い過ぎです」

若い女の子にまでゴミ呼ばわりされた桐山二佐は、テーブルに突っ伏しておいおい泣き出してしまう。

さすがの大暴言に、加賀は夏海を諫める。

「球磨は、桐山提督に、神通の席は空けておくべきだ、と言って断ったクマ」

「なるほど」

球磨の言葉に、直哉が納得した。

「……………と言う訳なんですが」

单身、ビーストハントのお礼も兼ねてデスペランを訪問した薄雲は、ことのあらましを神通に話した。

「ママ、帰っちゃう、だめ！」

日本語が、ちよつと上手くなった幼児体イ級の一人が、薄雲を睨み付ける。

「こら、お客様に失礼ですよ！」

「ごめんなさい」

神通に叱られ、しよぼんとする幼児体イ級がそこに正座すると、

「戻るつもりは一切ありませんが、もう祟に対して怒ってはいませぬよ」

「では何故……?」

「そうですね、崇が迎えに来たらきちんとお話します。……が、それは彼の意思で迎えに来た時に。男にもプライドがあるように、家出した女にもプライドがあるんですよ」

「お互い、不器用ですね」

薄雲の言葉に、神通はフフと笑った。

「私はそれほど分ならず屋ではないんですが、どうしても退けない部分もあると言うことです」

「分かります」

「わるいこと、ごめんなさい、する」

幼児体イ級が口を挟むと、二人は顔を見合わせてふふつと笑う。

「ちよつとお出掛けしてきましようか? イ級、一緒に行きましよう。ちゃんと、服着てね」

「あい」

「漸く和解ですか?」

「ふふ、提督、ちよつと出掛けて来ます。今日は、お泊りになるかもしれません」

そう声を掛けると、深海提督の「はい」という声が聞こえて来る。

薄雲はそれに満足すると、宮戸島へと帰って行った。

「結局、週一回帰ることと、旗艦代理に妹のようにかわいがっている軽巡棲姫を派遣することで、話が纏まったそうですね?」

直哉がいつものおさぼりタイムで、南三陸の武藤とダベリ中である。

『おお、それは良かった。これで一安心じゃな』

「そうですね。桐山先輩も変なところでプライド高いんだから……世話を焼かせます」

『まあそう言ったらいかんよ。彼の性分というものもあるうて』

「そうですね」

『それじゃまあ、そろそろレストランの準備もあるし、切るぞ?』

「はい、お疲れ様です」

電話を切ると、ふうつと溜め息を吐く。

今日の輪番秘書艦は薄雲で、紅茶を飲みながらヤクザ映画を見ている。

「薄雲もぐ苦勞だったね」

「私は何もしてません。イ級ちゃんのおかげです」

「なるほどね。デスペランの、深海棲艦人間型養成事業か……害獣化する深海棲艦を減らす……そしてなくなる。そうになったら、何れ艦娘も真の意味で社会の一員となるだろうねえ。大貫 悟の描いた未来とは異なるかもしれないけど」

「いいえ。或いは本当に、第二の大貫 悟が居るのかもしれない」

「親父の『大貫 悟伝』に期待だな。まあ、親父は暇ならいくらでもある人だ。精々余生を楽しんでくれればいいさ」

「ところで、最近変な夢を見るのです。南緯47度9分 西経126度43分の海底、ポイント・ネモに何かあると……」

「……まあ夢の話だろう、忘れたほうがいいよ」

「……そうですね」

「ただいまなのです！」ぴょん！」

哨戒に出ていた二人が帰って来る1500。

「さて、そろそろ番長達がやって来る時間かな？じゃあ業務終了！」

業務切り上げを宣言すると、執務室の扉が開かれて、賑やかな番長と愉快的仲間達が入って来る。

今日も楽しい一日だ、と直哉はふつと笑いながら出迎える。

「こんにちは、皆」

薄雲にルルイエの呼び声が聞こえる……

番外編：夏の海の向日葵Ⅱく365回目の告白く

「何だ、紗花。夏海には懐くのか？お前さん、女にモテたりしてないだらうなあ？」

詠う眞一郎に、少し考えると、

「一人だけいますよ、何度振つても根気強くアタックする子が。運動神経バツグンでかわいい、所謂『僕っ娘』が」

「そうなのか？ともかく、球磨の異動話だったなあ？」

答える夏海に、あまり興味が沸かなかつたようで、話を戻す眞一郎。その答えの続きを、夏海と加賀は持っていた。

それは、夏休みに入る前の七月頃。

「ねえ、僕と付き合つてよ？」

にへらつと笑つた、ショートカットで背の高い女の子。

大村夏海は、そんな彼女から求愛を受けること295回。

毎朝の挨拶のようになっていた。

「はいはい、おはようございます。先輩」

「ちえ、今日も駄目かあ……」

カバンを持ちながら、両手を頭に回すそんな彼女——各務原結有は溜め息を吐いた。

そんな彼女の姿を、ちらつと見ながら校舎へと向かう。

結有は、所謂寮生で毎日、学校敷地に隣接している、白百合寮から通学している。

男性の立ち入りは厳禁、教師や職員も全員女性の女子学園である。

初等部から中等部、高等部まである由緒正しい『東北百合根女子学園』と言う女子学園の中等部。

相手は高等部の一年生。二つ年上である。同じ中等部の頃から声を掛けられている。

「もういい加減、諦めたらどうです？何度言つたら気が済むんですか？」

夏海が、もううんざりだと言わんばかりの態度を取ると、

「僕は、諦めの悪いのが取り柄なの」

と、アハハツと笑う。

「私には、ちゃんとした人がいるんです」

いつものダメ押しという言葉にも、へこたれない。

「知ってるよ、艦娘達なんだろう？その指輪、ケツコンカツコカリリングだよね？」

「あつ……」

いつもは学校に行っている時は、外してチェーン・ネックレスにして、服の中にしまっていたのに、

今日はうっかりしていた。

ケラケラと明るく笑う先輩に、顔を見上げながら、

「変だと言いたいなら、仰ってください。どうせ私は異常……」

「そうかなあ？いろいろな愛の形があつていいと思うよ。僕だって、君のことを好きになりたいし」

「ですから、私には艦娘達が居るんです。六人も！先輩の入る余地なんて、ないんです！」

今日は夏海も、自分で何か苛立ちを感じていた。

前日の、査察の一件もあつたかもしれない。査察の落ち度を指摘しただけなのに、舌打ちされた。

それに対して食って掛かったら、こう言われたのだ。

「お前さんは可愛くないねえ」

と来たもんだ。宥める加賀のおかげで、それ以上の衝突は避けられたものの、夏海の心には苛立ちが残っていたのだ。

宮本一佐に苦情の電話を入れたものの、子供を宥める態度で申し訳ないねと一言、それも癪に障っていた。

「それにどうせ、私みたいな理詰めな女かわいくないですよ。先輩だってそう思ってるでしょう!？」

言われた結有は、目をまん丸くして驚いた。

そして両手で宥める仕草をしながら、

「全然。かわいいよ。そうやって理詰めなところも、理詰めで納得出来ない所に苛ついてるのも、かわいいよ」

「なっ……もう良いです！失礼します！」

彼女にとつては「そうだね」と言つて欲しかったただけなのに、軽薄な感じの言葉に余計苛立つて足を進める速度を早めて、中等部校舎へと歩いて行く。

そんな彼女を、結有は頭を掻きながら見送っていた。

そんなこんなで、夏休みがやって来た。

夏休みと言つても、夏海の在籍する進学コースは、補習や有名講師を招いての講習があり、

登校することの多い彼女は、学校にやって来る。

「おはよう、なっちゃん」

丁度、校門で走り込みを終えて休憩している結有が、夏海に声を掛ける。

「おはようございます。今日も走り込みですか？」

「うん」

「ところでさ……」

夏海は、ほら来たと言わんばかりの顔をする。

これで、丁度365回である。

「ちよつと気になった事があつて、気仙沼の提督に相談すべきかどうか、悩んでたことがあるんだ」

そう、今回は僕と付き合わない？ではなかったのだ。

少し残念そうに思いながら……そんな思いを自分の中で必死に否定しながら、

「どうしたんですか？先輩」

「それがね……昨日仙台に遊びに行ったら……艦娘らしき子がビルの中に連れ込まれていたんだ……」

「えっ……？」

大本営警務隊の管轄対象は鎮守府であつて、それ以外に権限は及ばない。

こういうケースでは、幸田二佐ではどうにもならない。

「どこですか？」

「案内するよ」

今日の自由参加の補習をパスして、夏海と結有は仙台のそのビルへと向かった。

そこは、繁華街からちよつと離れたところで、人気の少ない場所だった。

ビルの前には、黒服の男が二人立っている。

「どうする？二人くらいだったらノせるけど？」

結有は、とんでもないことを言い出す。

「い、いえ……様子を見ましよう」

二人共、電柱の影に隠れて様子を見ている。

暫くすると、車が停車して中から人が出て来る。

「あつ、この人……市会議員の……」

「うん、黒沢……とか言ったね。艦娘を、社会に進出させるのに反対してる活動してる人だ。昨日も駅前で演説してた」

反艦娘派、つまりは現政権に批判的な態度を取っている人なのだ。彼曰く軍国化の第一歩であり、艦娘は鎮守府にいればいい、と言った具合らしいのだ。

その黒沢議員はニヤニヤと笑いながら、黒服に案内されて中へと入って行く。

「何だろうね……？」

「判りませんね……」

結有は、スマホのマナーカメラでその様子を撮影すると、

「反艦娘派の黒沢議員が入って来て、艦娘が連れ込まれた可能性のある場所……」

「一旦離れようか？」

二人連れで、仙台の中心街に向かった。

一旦トイレに立ち寄って、出て来た時には人だかりが出来ていた。「なんだろう。先輩もいない……し」

人だかりを掻き分け、一番前まで出ると、結有と学ランを来た男子中学生……原 圭一が喧嘩をしていた。

「えっ？」

事の発端は、こんな感じだった――

史絵が、圭一のトイレを待っている所に、結有が冗談半分で声を掛けたのだ。

「ねえ、君。今一人？」

「えっ、あの……その……」

軽い感じの『男』に見えた史絵は、しどろもどろになる。

そんな時に現れたのが圭一だった。

圭一は

「おいこら！ニーチャンよ。俺の女に手を出すんじゃないやねえ！」

と、いきなり殴り掛かったのだ。

「圭一！」

止める史絵を、結有が腕で制するとすぐ構えて、そのパンチを難なく躲して距離を取った。

「その構え、ジークンドーか!？」

「あはは。よく知ってるね、坊や」

そのまま、殴り合いと言うか圭一の攻撃を躲す結有、と言う図式が出来上がっていたのだ。

そんな二人に、つかつかと近付くと、

「何やってるんですか、二人共?」

「あっ、夏海先輩」

「あっ、なっちゃん」

「こんにちは、夏海さん」

と、言うことになる。

差し当たって入った、ハンバーガーショップで圭一に、結有は女だと告げると、「マジか!？」と驚くことになる。

「と言う訳なんです」

圭一と史絵にも、艦娘連れ込み事件カッコカ리를話すと、圭一の表情も深刻なものになる。

「ああ、そう言えば族の間で噂になってたんだけどよ……」

圭一は、二度の『やるかじじい事件』の後、大番長としての名を挙げて、暴走族からも一目置かれている。

その彼女の史絵も、そういう連中から「姐さん」呼ばわりされている。

「この仙台に、艦娘のフーズクがあるって噂で……」

そう声を落として言ってから、ポテトを頬張る圭一に、夏海と結有は顔を見合わせる。

「まさか……!?!」

「今すぐ踏み込もう!」

「おう!」

「あ、あの、危ないと思います」

その可能性に渋い顔をし、結有と圭一は立ち上がり、それを止めようとする史絵。

「史絵は師匠に連絡してくれ!先輩、行くぞ!」

「うん!」

「分かりました!」

「は、はい!」

立ち上がると、急いで向かう三人。史絵はすぐに、スマートフォンで師匠である直哉を呼び出す。

「鎮守府関係者です。中を改めさせていただきます」

完全にハツタリであるが、ビルの前の黒服が無線で連絡をしようとした直後、後ろの二人が同時に顎先に蹴りを叩き込んで、黒服を失神させる。

圭一を先頭にビルの中に入ると、幾つかの小部屋があつて、中から女の子の喘ぎ声が聞こえて来る。

「やろう」

「おう」

結有と圭一がドアを蹴破ると、そこにはベッドの上で真っ最中の黒沢議員と駆逐艦子日がいた……

その光景を目撃した夏海は、嘗て自分が受けた暴力を思い出して、

過呼吸を起こしていた。

「い…………いや…………ああ…………」

「なっちゃん!？」

「おいおっさん!何してやがんだ!？」

圭一が飛び込んで黒沢議員をボコボコにしている間に、結有は過呼吸を起こして、虚ろな目で泡を噴いている夏海を抱き抱える。

「夏海!!しっかりして!!夏海!!!」

ボタン!

「全員動くな!……………つて夏海ちゃん!？」

「卯月、薄雲、すぐに制圧するのです!」

「わかったぴよん!」

「了解です」

結局、偶々仙台市内で買い物をしていた直哉達により、裏風俗店は制圧され、黒沢議員も逮捕された。

夏海は意識を失っていた為、一旦はということで、直哉の車で宮戸島鎮守府に担ぎ込まれた。

「……は……………?」

夏海が目を覚めたのは、宮戸島鎮守府の艦娘寮のベッドの上だった。

「ここは、宮戸島鎮守府だつて。彼奴等は、高菜一佐が全員逮捕したよ。四国のブラック鎮守府から売られて来た子達だつて…………」

「そう……………ですか……………先輩、みつともないところを見せてすみませんでした……………」

「ううん、いいよ。高菜一佐から聞いたから」

「そう……………ですか」

「ねえ。なっちゃん、僕と付き合わない?ほら、軽い感じの浮気程度でいいからさっ…」

365回目のそれである。

「……………先輩。私はご存知の通り、男性嫌悪症で同性愛者です。そんな私でも良いんですか?」

「それがどうした?」

そんな結有の物言いに、夏海は目をまん丸くすると、うふふつと笑い出す。

「……………ふっ……………うふふふ……………」

そんな夏海に、結有が何と言って良いのか考えあぐねていると、「分かりました。ガールフレンドから始めましょう」

「あはは、ありがとう」

その日は、鎮守府で泊まって行きなさい、と言う直哉の配慮に甘えて、二人で色んな話をした。

勿論、学園の寮にも直哉が連絡を入れてくれた。

「なつちゃん！両親から下宿の許可貰ってきた！女性しかない鎮守府ならOKだつて！」

「ええっ!?!」

その数日後だった。荷物を持って結有がやって来たのは。くるつと後ろを振り返ると、加賀が笑いを堪えながら、学園の下宿許可証を見せる。

わざわざドバイにファックスして、下宿先の奈々海のサイン捺印と、父親の裕二のサイン捺印まで入っている許可証が…………

そして、夏休みながら学校も、ドバイと親元と鎮守府に確認を取つての、異例の許可である。

「宜しくね、なつちゃん！」

「ふふ、賑やかになりそうね」

「そうですね……………」

こうして、気仙沼鎮守府に新しい仲間が加わった。

総理大臣来訪

内閣総理大臣が宮戸島にやって来る。

その情報は、宮戸島全土を駆け巡っていた。

目的は、宮戸島鎮守府の視察。

今国会での重要課題に、改憲議案が持ち上がった。

曰く「自衛隊を国防軍に改組する」案である。

こちらは、スピード施行された艦娘・深海棲艦基本法とは異なり、じっくりゆっくり審議して行くつもりである。

最大与党の『日本国民艦娘会議』と、連立を組んだ公民党で改憲委員会を発足させ、

お付きの法学者を複数招いて、議論している最中の訪問である。

……とは言っても、『自衛隊員と首相の間柄』ではあるものの、義理の姉弟なので、

今回は私的な目的だろう、と言うのが大方の予想である。

そんな湊子がやって来る。宮本議員を伴って。

今日は、長閑な鎮守府にも緊張感がある。宮戸島は、東松島市に属している。

市長や市議会議員がやって来ているのだ。

直哉も輪番秘書艦の電も、仕事をしない訳には行かず、慌しく今日の為に貯めておいた仕事をこなしている。

薄雲と卯月は、保護して預かっている子日と哨戒に出掛けている。

「総理の到着はもうそろそろかね?」

市長である黒井が、執務室をウロウロしている。

「もうそろそろ到着されますね。と言うか市長、落ち着いたらどうですか?」

「そうは言っても、君にとってはご学友で義理の姉かもしれないが、私にとっては元皇族で総理大臣なんだぞ?雲の上の存在だよ」

「そう言うもんなんですかねえ……?」

黒井が、汗をハンカチで拭いながら右往左往しているのを、苦笑いを浮かべながら眺めている直哉。

車がやって来る音が聞こえると、直哉は立ち上がる。

今日はいつもの作業服ではなく、常装第三種夏服である。

電が立ち上がり外に出て行くと、皆もそれに倣い外に出て行く。

外に、首相公用車と議員公用車と車列警護車が停まると、車列警護車から見知った男性が出て来て、扉を開ける。

村上浩助であり、スーツを身に纏っている。上着の襟には、SPバッジが付けられている。

中から、有紀と内閣総理大臣高菜湊子と艦娘・深海棲艦基本法担当大臣三友優衣が降りて来て、議員公用車からは宮本議員が降りて来る。

島民が、総理の顔を一目見ようと集まっている中、地元警察が入って来れないように警備をしている。

直哉と電が敬礼し、黒井市長や市議が深々と頭を下げる。

今回参加した市議は、日本国民艦娘会議の会派議員で固めている。

「宮戸島へようこそ、総理。私が東松島市長の黒井誠司と申します」

「わざわざのお出迎え、有難うございます。奇跡の地宮戸島に、総理大臣として訪れることが出来て光栄です」

両者はがっちり握手をする。

「さあ、どうぞお入りください」

直哉が促すと、一同は中に入る。警護官は、浩助と有紀だけが中に入る。

執務室の勉強テーブルに椅子を買い足して、真ん中に湊子、右に優衣、そして左に宮本議員が座る。

その対面に、それぞれ黒井市長、直哉、議員先生が座る。

浩助と有紀は入り口に立っている。

暫し歓談が行われる。

黒井からは、鎮守府と行政についての説明が行われ、宮戸島から民間交流のモデルケースとなって欲しい旨を伝えられると、

「分かりました、^{わたくし}私の方から防衛大臣にお伝えしましょう」

「有難うございます」

「やはり艦娘を社会に浸透させるには、民間人の受け皿が必要ですね。」

提督とだけでなく、例えば結婚を希望している艦娘と、民間人の結婚とか」

直哉も度々、その歓談に参加する。

そういった話を、湊子は頷きながら聞いて、隣にいる優衣がメモを取る。

宮本議員は、終始にこやかに聞いている。

電はお茶汲み係である。

会談は一時間に亘り、宮本議員と市長と市議の先生方は、別件で先に退場する。

漸くお偉方が居なくなつた。

「しかし、お前等何やってんだ？まあテキトーに、ソファにでも座つてくれ」

直哉が、村上兄妹に声を掛ける。

「私わたくしが指名して、防衛省より警察庁に出向させました。もう『必殺仕事人』も廃業でいいでしょう？」

湊子がうふふつと笑みを浮かべると、有紀がソファに腰掛けながら、

「そういうことですの。最上に三隈、それに曙は除隊して、それぞれ民間人の方と結婚して幸せな生活を送っていますわ。浜松市の街コンで知り合った方だそうです」

と答えると、浩助も続く。

「そうだね。ある日突然、湊子さま……総理が直接、浜松にオファーに来たんだ。警護官をやってくれ、つて」

「しかし、すごい転職だな。お転婆湊子姫は健在か」

直哉は笑いながら、電も座るように促すと、隣に座らせる。

「で、どうだい？国会運営は」

「そうですね、野党の方々にも勉強させて頂いてますわ」

「日本国民艦娘会議が、だんだん地方にも根付いて来たし、崩れかけの元与党から離党して、うちに入って来る人も多数いるよ？」

湊子も優衣も甘い人間ではない。日本国民艦娘会議に入党するに際しては、最低限の基準を設けている。

艦娘や深海棲艦との融和策に賛同する人間。たったそれだけである。

その為、日本国民艦娘会議でも他の政策については多種多様な意見があり、国会では活発な議論が推奨されている。

また、党議拘束が緩いのも特徴の一つである。

その為、国会では政局よりも議論が優先される風潮になっている。特に、まだ過半数を取っていない参議院でその傾向が顕著で、今までにない活発で健全な政治が展開されている。

参議院で否決された法案については、その気になれば衆議院で再可決できるが、湊子はそれを良しとはせず、廃案にして新たに野党の意見も踏まえた上での再提出を行う方針だ。

とは言え、まだ政権発足二ヶ月目である。

「やつぱり、もう少し防衛省に予算が欲しいねえ。鎮守府運営もギリギリだからね？」

「なのです」

「とは言え、四国の復興も優先しませんと。デスペランとの戦いで疲弊し切っていますし」

「そうだね。海賊化した艦娘の対策も考えないといけないしね？」

そう。『大貫の告白』による摩耶のような脱柵者は、他にも居るのだ。

一部の艦娘は海賊化して、ソマリア沖で商船を狙って暮らしている。

「まあ、二人共元氣そうでよかったよ。姉さんはファースト・レディ役も板に着いて来たしね」

「まあ、現職議員のファースト・レディってのもそれはどうよ？って話だけど、ダンナ達も忙しいからねえ？」

高菜直樹は、とうとう経団連の役員に名を連ねるようになった。

若い風が経団連にも入って来た、と国民は歓迎しているが、彼は孤軍奮闘していて、

古い体制を変えるには、もう少し時間が掛かりそうである。

それを支えるのが、三友龍太郎である。

若い経営者同志支え合って、日本最大の複合企業グループ・三高ホールディングスを経営している。

政治にまで口を出している暇がない、と言うのが実情なのだ。

「ところで、湊子や姉さんは、大貫 悟についてどこまで知ってるんだい？」

直哉は、少し考えてから切り出してみた。

「謎の多い人でしたわね。目の前じゃなく、もっと遠くを見ている人……内親王時代から、いろいろなことを教えてくださいました。艦娘の未来やジレーネ……それと平行世界論。とにかく、遠くを見据えていた方でしたわ。亡くなってしまったのは残念ですけど」

湊子は残念そうに答える。

「すると、ジレーネの存在は最初から知ってたのかい？」

「はい。ジレーネの存在を明かすタイミングは、ジレーネが現れてから。と言う約束でしたので、誰にも話せませんでした」

「結局、宮戸島の奇跡も茶番だったんだろう？」

「……ええ」

「全く、余計なことをしてくれたもんだ」

肩を竦める直哉に、

「そうでない、電とは出会えなかったのです。茶番でも良かったのです」

と力説すると、皆がどつと笑う。

「そう言えば、親父が大貫 悟伝を書くと思巻いていたが、何か聞いているかい？」

「ええ、何度か防衛省に取材に訪れて、足立総監と会談なさってたそうですよ」

「大貫 悟は『本当に』死んだのか？」

『えっ？』

直哉の疑問に、全員が言葉を失う。

「大貫のオッサンのことを、全て知ってる訳じゃないが、『全てを無責任に放り出す人』でもないと思うんだよ。真の大貫 悟は、どこかで今の日本を見守っているのではないか？私はそう考える時があつて

ね」

直哉の言葉に、湊子が思い出したように口を開く。

「そう言えば、あの《大貫の告白》前日に電話がありました『もし私に何かあったら、立ち上がってくれ。私は、遠くより見守っている』と。その言葉通りに、立ち上がった結果がこれですわ。日本国民艦娘会議も、草案は大貫さんが生前送り付けて来た『大貫ノート』を見ながらやっていますもの」

「大貫さんは『民主主義の真髄』を、国民に知らしめる為に死んだのかもしれないね？」

「『民主主義の真髄』か……確かに、市民派議員の多い今はそうかも知れないけど、湊子も優衣も心に留めておいて欲しい。組織と言うものは、生み出された時点で腐敗が始まる、と」

優衣の言葉に、直哉は頷きつつも警告を与える。

「自衛隊も腐敗していた、残念ながらね。利権や欲と言ったものは、人間には甘美な毒だからね？」

「なのです。そんな小難しい話より、お二人の近況が聞きたいのです」

電の言葉に、早速優衣が口を開く。

「妊娠八ヶ月目で、お腹ぼんぼこリーナよ。ギリギリまで国会議員頑張るけどね」

自分のお腹を擦ると、あははっと笑う。

「高齢出産なんだから、あまり無理するんじゃないよ？」

姉さんは無理するんだから、と直哉が付け加える。

「そうですわよ。いつでも、産休して下さって良いんですからね？」

「それで、どっちか分かったのですか？」

「んー、女の子。龍ちゃんに似て、賢く育つと良いね？」

「それじゃあ、直哉には可愛い姪が生まれるのです」

「そうだねえ。もし何なら、宮戸島でお産すれば良いんじゃないかな？今、頑張ってる産科医が居るよ」

「それもいいわねえ。東京は何かと騒がしいし、龍ちゃんも忙しいし」

「そうですわね。私もわたくしいいと思いますわ」

楽しい談笑は、数時間に亘って繰り広げられた。

「総理、そろそろお時間です」

有紀が立ち上がり、時間を促すと、

「あら、もうそんなお時間ですね。それでは、私達わたくしは失礼いたしましたす」

「またお産の時に来るから、その先生にも宜しくね?」

「そうだね。私も、ここは第二の故郷だと思ってるから、いつでもおいでよ」

名残惜しそうに出て行く湊子達を見送りながら、直哉は呟いた。

「人や世の中は変わったつてのに、私は変わらない……か」

「それも良いのです」

寄り添いながら、直哉と電は二人笑うのだった。

「さ、そろそろ卯月達が哨戒から帰ってくる頃だ。出迎えるか?」

「なのです」

今日も、宮戸島は平和である。

不敗の女神様と導き手

国内最強と謳われた第13艦隊。室戸鎮守府に移籍した今でも、その『第13艦隊』の名前は外されていない。

そんな第13艦隊が、四国立て直しを終えて落ち着いた頃だった。「いやあ、お疲れ様だねえ」

直哉は早速、室戸鎮守府の執務室にいる大和に連絡を取った。

『高菜一佐は、また休憩中ですか？まあ、平穏なのが一番ですが』
『そうそう。平穏なのが一番だよ』

『結局、貴方が本気を出したのは硫黄島の悲劇とジレーネ戦、それにあの時だけでしたね？』

宮戸島の奇跡茶番のあと、高菜直哉はごく短期間、横須賀鎮守府の幕僚を務めていた。

その時に起こったのが、硫黄島の悲劇である。

その後、大和に一切の功績を押し付けて、東北へと旅立ったのである。

「いやあ。私は、貴女に最悪な時の対処法を伝えたに過ぎないよ。ジレーネ戦にしたって、頑張ったのは愛ちゃん、私は何もしてないよ？」

その物言いに、話を聞いていた秘書艦の電は白々しいものだ、と肩を竦める。

『その御蔭で私の人生……艦娘生活設計がオジャンになりましたよ。』

艦娘が、艦娘を指揮する生活の始まりです』

『そういう貴女はどうなんだい？』

『悪くは無かったです。いろんな艦娘が出たり入ったりしましたが、漸く今の形に落ち着きましたし……鳳翔さんは、今は土佐で頑張ってますよ。』

『そうか……そう言えば、こっちでも中学生提督が頑張ってるよ』

『ああ、大村二佐の娘さんでしたっけ？夏海さん』

『そう、司令官のカリスマと参謀の緻密さを持つ有望株だね。前に、羽佐間准将補との賭けマッチにも勝ったしね？』

『まあ、あのお方は戦術家ではありませんが、前線指揮官タイプですからね?』

長話になると、電は決まって冷めた紅茶を下げ、紅茶を淹れ直す。ブランデー入りの紅茶だ。

紅茶抜きブランデーでもいいのに、とは直哉の率直な意見だが、抑々、昼間の勤務中である。

薄雲が自動車免許を取得してから、更に飲酒に拍車が掛かっている。

急な外出時には、薄雲を呼び戻して、自分は助手席に……呑気なものである。

『それで、黒幕としてはどんな種を仕込んだんですか?』

「それはねえ……」

直哉は懐かしそうに、数年前の出来事を思い出していた。

四年ほど前の話だった。

第13艦隊が、まだ電と二人っきりの宮戸島鎮守府にやって来たのは。

「第13艦隊が雁首揃えて、どうしたんだい?」

大和率いる第13艦隊がやって来た、と哨戒中の電の連絡によって、高菜三佐は埠頭にやって来た。

大和に大淀、時雨に鈴谷、熊野に鳳翔、それに明石である。

当時明石は、第13艦隊に所属していた。

大和が、指揮を執るようになった時の数合わせ程度で、実際は大和以下六名の艦隊である。

「高菜三佐、真剣勝負を申し込みに来ました」

大和は、高菜三佐をまっすぐ見据えてそう切り出した。

「ふむ……真剣勝負ねえ?……艦隊戦の勝負、つまりはあの時全て押し付けて行ったお返しがしたい、とそういう訳だね?」

「そういう訳ではありません。あの戦術案を、私に託して下さいました。貴方の本気を見せて欲しいのです」

真剣な表情の大和に、ふっと笑みを零す高菜三佐。

「良いだろう。私も、同数の艦隊で勝負したいからねえ。気仙沼に場所を移そうか？」

「分かりました」

気仙沼では、先年着任したばかりの大村奈々海一尉が、空母攻撃艦隊を編成していた。

三笠と武蔵以外は数少ない、空母を任される艦隊。

モーターボートで気仙沼までやって来ると、大村奈々海と娘の夏海が出迎える。

夏海は先年、暴行事件の被害に遭い引き籠もっていた頃だった。

高菜三佐はあまり恐怖の対象ではないが、率先して接触する訳でもなく、

母の後ろに隠れている。

「先輩、突然どうしたんです？」

奈々海が、訝し気に声を掛けると、高菜三佐はにいつと笑った。

「ちよつと、君のところの艦隊を貸して欲しいんだ」

「はあ」

夏海の相手を電に任せると、高菜三佐は気仙沼鎮守府の艦娘達と作戦方針を立てる。

「相手が大戦艦大和で、こちらは練度が低い艦娘達です。どう対処しましょう？」

真面目一徹の加賀が、高菜三佐に問い質す。

「まず、装備を変えよう。全艦副砲を積む。残った艦載機は艦爆を揃える。ただし、距離を取つての航空戦はやらない」

高菜三佐はそう言うと、艦娘達を呼び寄せてひそひそ声になる。

「……………つまり、我々は戦闘開始と同時に突っ込む訳さ」

「……………正気ですか？」

加賀は「本気ですか？」等とは言わなかった。

「正気も正気さ。どうせ、距離を取った撃ち合いじゃ、君達は勝てないよ。ただ、鈴谷も熊野も航巡じゃあない。だから乱戦に持ち込んで、とにかく鳳翔を黙らせよう。副砲によるクロスファイアだね」

「……………そういう事。続けて」

三笠が、高菜三佐の意図を臆気に攔むと、続きを促す。

「戦闘開始と同時に、足の遅い艦隊が突っ込むとは思わないだろう。それで相手の調子を狂わせる。失敗したら、頭を掻いて誤魔化すさ」
「そうだな。我々は、低速艦隊だからな」

武蔵が、うんうんと頷くように答える。

「逆に、相手は機動艦隊だ。時雨辺りが突出して来るから、それは無視して鳳翔に副砲でクロスファイアを仕掛ける。その後、急速反転……いや、そのまま前進して艦載機を発進。艦載機にはアクロバティックな動きを要求するけど、そのまま背後の敵艦を爆撃する」

「……大丈夫かしら……?」

「やってみなきやわからないって、翔鶴姉え」

心配する翔鶴と、それを元気付ける瑞鶴を見て、高菜三佐は続きを語る。

「戦艦はその場で回頭。距離を取りながら砲撃戦を仕掛ける。突出した時雨は一番後方になるから、攪乱される心配はないし、後背から砲弾をお見舞いしてやればいい」

「……………分かりました。やりましょう」

加賀も、その作戦案に同意した。

こうして、高菜三佐は無線通信で、大和は陣頭指揮で、明石を陸に残して相対する。

「戦闘開始!」

奈々海の号令の下、時雨が駆逐艦らしく突出して攪乱しようとする。

その前を、次々と気仙沼の艦娘達が通り越して行く。

「えっ!?!」

時雨だけではなく、大和も啞然としていた。

そのまま突っ込んで来る艦娘達に、一瞬の啞然から立ち直った大和の号令により、第13艦隊は散開する。

「衝突回避!」

『よし、プランA実行。サーカス開始!クロスファイア!』

「了解、副砲、てーっ!」

三笠が、前進しながら手を上げ振り下ろした直後、衝突回避で弓を引き絞るのを止めた鳳翔は、次の瞬間陸地に戻されていた。

「えっ……?」

副砲の集中砲火を浴びた、雷装満載の鳳翔は撃沈判定を受けていた。

「何とか、付け焼き刃のクロスファイアで仕留められたか、偉いよ。加賀、やっつけてくれ」

「了解です。全艦発艦、急速反転して後方で回頭している艦隊を爆撃！」

加賀達は弓を引き絞ると、まっすぐ前方に矢を放った。

放たれた矢は艦載機に変化して、一気にアクロバティックな転回で後方の大和達に爆撃を行う。

この爆撃で、鈴谷と熊野は陸地行きになった。

その直後、空母艦娘を守るように、武蔵と三笠が回頭を終える。

『次のターゲット、大淀』

「了解、てーっ！」

三笠は号令を放つと、武蔵と共に大淀に集中砲火を叩き込む。

大淀も、陸地行きになる。

『さて、まだやるかね?』

「いいえ、完敗です。まだまだ提督初心者でした」

艦娘達が戻ると、大和は一同を見回してこう言う。

「ありがとうございます。長距離哨戒に託けて、東北まで来た甲斐がありました。おかげで私の慢心癖も治りそうです。『不敗の女神の黒幕』さん?」

「そうか。役に立てることがあったら、また何でも言ってくれよ。勿論、コニヤックを提げて来てもらうけどね?」

高菜三佐の冗談めかした言葉に、ふふつと笑うと、

「皆さん。この邂逅は、どうかご内密にお願いします。大貫総監や足立二佐辺りにバレると、恐ろしいので」

そう言うと、全員は頷いた。

「……という訳さ。夏海ちゃんは賢いよねえ、まさに天才と言っている。よく、あの邂逅の戦術を覚えていて」

『まあ……それを知ったら、羽佐間准将補は怒ると思います。お人が悪いですよ』

直哉は、どう言う手品の種を明かしたか。あの時の邂逅と同じだよ、と告げると、ちよつと声色を低くして大和が言っていると、直哉はふふつと笑った。

「まあ私としても、賭けマツチには夏海ちゃんにどうしても勝つてもらいたかったから、丸く収まってよかった、と言うべきだろう。そしてあの邂逅から、第13艦隊は不敗となった」

『本当に苦労しました。その節は、源一郎さんにお世話になりました』
「高菜図書館に籠もりつ切りで、第二次大戦の戦術書を読み漁った、と聞いているよ。あの爺様は、本だけは大量に持っているからねえ。何なら、戦術書の電子データをお裾分けしようか?」

『著作権法違反はいけませんよ?』

「ふふ。私的な使用という建前で、あれは愛ちゃんに譲ったものだよ。タブレットの外装を新品に変えてね」

『高菜一佐は、色んな所で黒幕でいらつしやるんですね?』

ふふつと大和の笑い声が聞こえた直後、ノック音がしてから、

『大和さん!お迎えにきました!』

と、元気のいい声が聞こえる。出産して、退院したばかりの笹野愛である。

「何だ?愛ちゃんと、夕飯の約束でもしてたのかい?」

『ええ、可愛い赤ちゃんのお披露目会です。あとで写真を送りますね?』

「うん、それじゃあね」

電話を切ると、電が声を掛ける。

「あのクロスファイアサーカスは、色んな人に受け継がれて行くのですね?」

その言葉を、すっかり冷めてしまったブランデー入り紅茶を飲みな

がら肯定する直哉。

電は「すっかり冷めてしまったのです」と立ち上がり、直哉のそばに行く。

「まあ私は、いつも黒幕でいたいのです。デスペランなんぞに乗り込んで、前線指揮なんてもうゴメンだね？」

「それが、なりたくて自衛官になったお方の言葉なのですか？」

「まあ、いろいろ人生設計が崩れたのも、宮戸島の茶番以降さ。皆、大貫 悟というやつのせいさ。尤も、おかげで電とも出会えることが出来たし……」

「なのです」

キョロキョロとあたりを見回して、寄り添った電にキスでもしようとした瞬間だった。

「ただいまー!!!」

元気良く帰って来た子曰が、執務室に飛び込んで来たのは。

メカいなづまちゃん騒動（前編）　く宮戸島鎮守府壊滅

硫黄島要塞は、深海棲艦との戦いの拠点としての役目を終え、放棄されることになった……

と、言うことにはならなかった。

明石が、硫黄島要塞にラボを移設したのだ。

更に、明石は足立昭彦将補が幕僚総監になったのをいいことに、日夜、硫黄島要塞研究所で研究を続けている。

勿論、助手に夕張も引き連れて、である。

夕張は、幾分常識人ではあるが、やはり研究家肌なので、いっつも明石に押し切られ——もとい。乗り気になって、研究を手伝っている。

東北の、薄雲の監視も終了した、と看做されて戻って来ているのだ。

「できましたー！メカいなづまちゃんー！」

明石が、巨大な電型ロボットを見上げながら叫んでいる。

そんな叫び声に、上階の夕張ラボに設置されてる、簡易ベッドで仮眠していた夕張が、目を覚ましてやって来る。

「何作ってるんですか？」

「これはですね、害獣化した深海棲艦を自動的に殲滅してくれるロボットです。武器も選りすぐりのものをご用意しました！」

見上げる夕張。確かに物々しい装備を取り揃えている。

背部に付いているのは箱型のもの、両肩には何かの発射筒が取り付けられていて、右腕には主砲らしきもの、そして左腕には連装型ガトリングガンが取り付けられている。

「……………何ですか、これ？」

「良く聞いてくださいました！これはDミサイル搭載型駆逐艦D Gメカいなづまちゃん

です！」

「……………えっ?」

発展型シースパローミサイル

垂直発射式対潜水ロケット

「背部にトマホークとE S S M、それにV L Aを搭載したミサイル垂直発射システム。V L S。両肩には対艦攻撃も可能な90式艦対艦誘導弾、主砲は信頼と実績のMk 45 5インチ砲。近接防御用にフアランクスを搭載した、害獣深海棲艦絶対殺すマシンです。但しトマホークは、政治的な理由で核弾頭は搭載できませんでした」

夕張は、目の前で子供のように解説する上司に、目眩がする思いだった。

確かに、趣味のものを作るから、と休暇を取って早三日。こんなものを作り上げるとは、思ってもいなかった。

その間夕張は、上階の自身のラボで、艦娘の装備の更新をせっせとやっていたのである。

各地での開発とは別に、成績優秀な鎮守府に配る為の、新装備等の開発である。

害獣深海棲艦絶対殺すマシン等と、深海提督が聞いたら絶対に気を悪くするだろう。

そう思いながらも、夕張は敢えて何も言わなかった。正直な話、火の粉が自分に降り掛かってこなければいい、

そんなことさえ思っていたのだった。

敵味方識別装置

「それですね、深海棲艦と艦娘を識別できるIFFを取り付けています。AIの効率化の為に、どの鎮守府にどの艦娘が居るか?のデータベースも搭載しています。深海棲艦も、クラーリン級まで全部インプットしてありますから、知性のある上位深海棲艦には、攻撃しないような設定も可能です」

「ところで、その費用はどこから出てるんでしょう?」

「はい、良い質問ですね。実は大貫さん独身で、亡くなった時の保険金とかご自宅とか遺産とか、研究費用に使ってくれ、って遺言状に書かれていたので、遺産相続をですね……………」

「は……………はあ」

「それで蓋を開けたら十億円くらいあって、ご自宅も分譲マンション

ンだったの、それは売って……」

「売ったんですか!?!」

「死亡保険金も、億単位の良い保険入ってて、それも相続し……」

「それで作ったんですか?」

夕張は、だんだんジト目になって行く。

「それで、ちよつと冗談で競馬で一万円ほど、3連単で一番高いオッズの馬に賭けてみたんですよ」

「あんた、大概人でなしだな!?!」

「人じゃない艦娘ですから」

夕張のツツコミを、サラリと流す明石。

「流石に、遺産でもらった研究資金で私的な物体を作るのは、大貫さんに申し訳ないじゃないですか?」

「いや!競馬にツツコんだ時点で、今すぐ大貫さんのお墓に行つて謝つて来いよ!」

「まあまあ、話は続きがあるんですから。それで其の一万円が、三千万ほどに化けまして……」

「はあ!?!この間の、三千万馬券当てたの、あんだだったんですか!?!」

夕張は、開いた口が塞がらない。確かに先週のニュースで、最大払戻金が数年ぶりに更新されて、三千万馬券の大台に乗ったニュースが来てたなー、くらいに思っていたが、

眼の前の上官がその張本人だとは、思ってもみなかった。

「それで、各種資材を私的に買い集めて作ったんですよ。ほら、サイズも電の人間サイズ五倍程度ですから、数十万お釣りが出ましたよ」

「大貫さん……遺産を相続させる相手、間違つたんじゃないですかねえ……?」

夕張は、硫黄島要塞の窓から見える夕日を見上げながら呟いた。

「それで、早速起動させたいなと思ひまして……こうして、夕張さんを呼んだんです」

「はつきり言わせていただきますが、嫌な予感しかしません」

「いやいや。それでは、スイッチ・オン!」

リモコン操作で、遠隔で電源を入れると、ウィーンと言う起動音の

後、電子音声が響き渡る。

「ターゲット・ナノDEATH」

電にそっくりな声が鳴り響くと、夕張は技術者として、そこまで似せたのか？とちよつと感心する。

「ターゲット、電、破壊ナノDEATH、抹殺ナノDEATH。本物ハいなづまナノDEATH」
ズガアアン

そのまま、のっしのっしと要塞の壁を破壊し、外に出て行ってしまった。

向かうは北の方向……

ザザーっと、海を滑るように去って行った……

それを、啞然として見送る二人……

夕張は、ふと気になっていたことを思い出した。

「そう言えば、あのメカいなづまちゃん、どうやって方向を認識するんですか？」

「GPSと内臓マップですよ。グーグルさん優秀ですよねえ？」

「さつき、艦娘がどの鎮守府に所属しているか、データベース化して内蔵した、って言っていましたよね？」

「はい」

「今、電を抹殺するとか、不穏当な事言ってますませんでしたか？」

「何のことですかねえ？」

明石は、不穏当な発言は聞かなかったことにしたようだ。

「もしかして、宮戸島に向かったんじゃないあ……？」

『……………』

二人は、全てを忘れて壁の修復作業を始めた。

真つ先に異常に気づいたのは、岩沼鎮守府だった。

「何ですか、あれ？」

羽黒が指差すと「虐殺ナノDEATH」と連呼しながら、深海棲艦を蹴散らしに掛かっている、巨大な電型ロボットがこつちに向かつて

来ている。

そして、警報音が鳴り響いた。

「岩沼鎮守府艦隊認識、進路妨害卜判断、破壊ナノDEATH」

『え……………?』

「何なのあれ!?嫌な予感しかしないんだけ……………ブフォ!!」

そのロボットの物言いに、不愉快さを張り付かせながら言った足柄が吹き飛ばされた。

メカいなづまちゃんは、主砲を発射していた。

足柄は、数m後ろで目を回してプカプカ浮かんでいる。艀装も大破状態である。

「せ、戦闘開始!羽黒!岩沼鎮守府に連絡。『我、謎のロボットと交戦せり……………』」

と言い掛けたところで、肩の発射筒からミサイルが発射された。

ミサイルは、那智をロックオンすると、ぐんぐんと速度を上げて向かって来る。

「わ、私か!?!」

那智は一目散に逃げていくが、90式艦対艦誘導弾は、那智をロックオンしたまま逃さない。

「ホーミングしてくるんだが!?!どうしろと!?!」

那智は全速力で必死に逃げているが、ぐんぐん誘導弾は差を詰めている。

妙高は我に返ると、通信指示を続ける。

『『て、敵は誘導弾を搭載している』と!羽黒急いで!』

「ほ、はいー!」

羽黒が、岩沼鎮守府に通信を終えたところで、那智は仲良く足柄と目を回してプカプカ浮かんでいる。

「ほ、砲雷撃戦開始!」

妙高の指示に、

「ふ、ふええ……………」

「誘導弾相手にどう対処しろと……………」

「ああ、不幸だわ……………」

三者三様に嘆きながら、メカいなづまちゃんと交戦状態に入った。数分後、主任務を思い出したかのように、戦闘を中断して北上して行くメカいなづまちゃんを見送る妙高。

周囲には、気絶した僚艦がプカプカ浮いている。

その頃、宮戸島鎮守府の直哉と艦娘達は、哨戒と執務をサボって、全員執務室で各々の長閑なひとときを過ごしていた。

直哉は、高級スピーカーのミニコンポで、最近ハマっているクラシックを流しながら、ブランデーを飲んでいて、

電は、お茶と羊羹を食べながら、宮戸島図書館から借りて来た佐伯泰英氏の『古着屋総兵衛影始末』シリーズを読んでいる。

そして卯月と子日は、

「今日は何の日ゲーム！」

「いえーい！」

「今日は何の日？」

「子日だよー！」

「明日は何の日？」

「子日だよー！」

「明後日は何の日？」

「子日だよー！」

「明々後日は何の日？」

「子日だよー！」

「弥明後日は何の日？」
やのあさって

「子日だよー！」

「五明後日は何の日？」
このあさって

「子日だよー！」

と、延々掛け合いをするのを薄雲が眺めている。因みに六日後からは、普通に六日後である。

そして、薄雲が外を見た時に何かがこっちへ飛翔して来るのに気づいた。

「皆さん、ミサイルが飛んで来てますけど？」

『え?!?』

その直後だった。艦娘通信で、全員を気絶から叩き起こした妙高から、

『こちら、岩沼旗艦より宮戸島本部！宮戸島方面に、謎の電ちゃんぽいロボットが向かってます！どうぞ?』

と、通信が入ったのは……

「に……逃げろおおお!!!」

直哉の号令と共に、慌てて執務室から飛び出す一同。
チユガツ

爆風で吹き飛ばされる、直哉と艦娘達。

こうして、宮戸島鎮守府と隣の艦娘寮は壊滅した。

直哉の買った、50万以上するオーデオと、電のローン支払い中の大型テレビと共に……

後図書館で借りた本も一緒に……大炎上中である。

「あ……ああ……電のテレビが……」

「俺のオーデオが……」

がっくりと項垂れている二人に卯月が、

「今のは何だったぴょん!?鎮守府が大火事だっぴょん!」

と、燃え上がってる鎮守府と艦娘寮を指差す。

「取り敢えず、119番します」

冷静な薄雲。

周囲の民家からも、野次馬が出て来る。

「何だ何だ!?!」

「深海棲艦の攻撃か!?!」

「いや、深海棲艦じゃなくて海賊化した艦娘か!?!」

消防車がやって来た頃に、漁師から謎のロボットが宮戸島に向かっている、とのさっきの通信を思い出して、漸く事態の状況を把握できた一同だった。

『明石か……』

「ちよつと、その『電っぽい謎のロボット』ぶっ壊して来るのです。薄雲、卯月、子日従いて来るのです」

「了解」

「分かったぴよん」

「了解だよお！」

そう言うのと、四人は艀装を展開して、海へと滑り出て行く。

「こちら、宮戸島本部カッコカリ。緊急、緊急。明石の作った物体が洋上で暴れて、トマホークらしきもので鎮守府が壊滅。至急来援を乞う！」

直哉は、軽トラに積んでいる艦娘無線機で各鎮守府に無線を発信して、増援を要請した。

こうして、メカいなづまちゃん対宮城連合艦隊との決戦が始まるのだった。

メカいなづまちゃん騒動（後編） ～宮戸島沖会戦～

宮戸島鎮守府は、メカいなづまちゃんの暴走によるトマホークミサイル攻撃で壊滅した……

ブチ切れた電は、艦娘達を伴って出撃したのだった。

その頃硫黄島要塞では、明石と夕張が、メカいなづまちゃんによって破壊された壁をせっせと直していた。

一緒に研究員兼被験体兼駐留艦隊として所属している、一人艦隊旗艦の島風と連装砲ちゃんも、せっせと手伝っている。

一応、建前上は明石のお目付け役なのだが、本人がその役目を果たす気が一切なく、面白いから、という理由で被験体になっている。

島風の機装も速力がアップして、明石曰く『本気を出せば、主翼を付ければ離陸できる』程度の速度、と言われている。

そんな硫黄島トリオが壁面の修復に取り組んでいると、夕張は一つの疑問に行き着いた。

「ところで、明石さん」

「何ですか？」

「メカいなづまちゃんの弾薬って、どうするんですか？」

「ふふ、良い質問ですねえ」

手を止めて、夕張に向き直ると島風に、

「明石、作業を止めない。遅くなるよ」

とツッコまれ、再び壁面修復作業をしながら解説を始める。

「最近、私が編み出した三大理論により、メンテナンスフリーなんです」

「三大理論？嫌な予感しかありませんが、聞いてみましょう」

「自己修復、自己増殖、自己進化。今回、自己進化は予算の都合上省きましたが、自己修復で、燃料・入渠不要ですし、自己増殖で弾薬は勝手に増えて行きます」

「何か、デビルなんとかみたいなの金属細胞ですね？」

「そう、そのデビルなんとかを参考にしました！夕張さんの、アニメラ

イブラリからちよつと拝借しまして」

「いや！借りるなら借りるで、ちゃんと行って借りようよ?!?って言うか、それ既存の艦娘に適用出来ないんですか？」

夕張がツツコむが、その横で島風が涼し気に、

「艦娘の艦装に適用できてたら、島風が実験体になってない、と思うな？」

と、然も当然のように答える。

「まだ艦娘の艦装には、適用する段階には至っていません、もつと研究を重ねませんことには……」

深刻そうな表情をしつつ、壁面を修復しながら、ふと明石は思い付いた。

「要塞の壁に自己修復機能付ければ、いくら壊しても治りますよね？」

「あんだ！大概、壊さない方法考えろよ!?!」

夕張のツツコミは、留まることを知らない。

結局、修理作業を中断して、自己修復機能を要塞に搭載することにしました。

ものの数時間で、みるみるうちに壁面が修復されて行った。

「この一日半の作業は何だったんだ……?」

夕張は、がっくり項垂れた。

硫黄島のお気楽トリオが呑気にしている同じ頃、宮戸島沖では激戦が始まっていた。

急行した女川鎮守府艦隊の軽巡棲姫、金剛四姉妹、陸奥が早速撃ち合いを開始していた。

と言っても、無尽蔵に発射される90式艦対艦誘導弾を、必死で撃ち落とされている。

音速を超える飛翔体を落とすだけでも、神通の訓練が行き届いていて練度が高いのだが、攻撃ができていない。

メインターゲットの電は、女川艦隊の後ろに布陣しており、メカいなづまちゃんの周囲を、駆逐艦コンビが魚雷を撃ちながら、主砲を避

けている。

魚雷はバシバシ当たるものの、自己修復機能で修復されているので、焼け石に水である。

子日はまだ練度が低いので、軽巡棲姫の後ろに隠れている。

「待たせたな！」

「魚雷は任せな！」

「素敵なダンスしましょう！」

長門が自慢の超大和砲を発射すると、メカいなづまちゃんに命中する。

メカいなづまちゃんは痛そうに蹠踉けるが、損傷箇所はじわじわと修復して行く。

「痛いノDEATH！ターゲット、長門、滅殺ナノDEATH」

長門をギロツと睨むと、VLSからトマホークを発射する。

トマホークは、一直線に長門に飛んで行って爆ぜる。

長門は、大爆音と共に吹き飛ばされるが、ぎざつと立ち上がる。

一気に、中破まで持つて行かれた。

「お待たせしました！」

「今度こそ仕留める」

「さっきのお返しよ！」

「はわわ……長門さんが一撃で……」

「また再戦ですか……」

「ああ……不幸だわ」

岩沼鎮守府艦隊が、緊急入渠を終えてやって来て、距離を取りながら砲撃戦に加わる。

ミサイルが必殺必中とは言え、同時に追尾できる対水上目標は二発までなので、ターゲットにされた艦娘を後ろに下がらせて、弾幕でミサイルを撃ち落とす、と言う艦娘ならではの戦法で乗り切っていた。「待たせたな」

直哉が、モーターボートに乗って戦場に乗り出して来た時には、

最後の増援である気仙沼艦隊が、指揮艦搭乗の夏海と操縦の結有同伴でやって来た。

何れにせよ、自由裁量による無免許運転である。

「全艦爆撃用意！」

夏海が手を上げ振り下ろすと、加賀を中心に爆撃隊が発艦して、メカいなづまちゃんに殺到する。

「ESSM、サルボーナノDEATH。CIWS、AAWオートナノDEATH」

VLSから勢い良くミサイルが飛び上がると、殺到して来る爆撃機を次々と落として行く。

そして腕の連装ガトリングガンが、残った爆撃機を次々と破壊して行く。

「マジで!？」

「あんなのどう倒せばいいのさ!？」

唾然とする夏海に、安全な位置で指揮艦を停める結有。

直哉が、モーターボートから通信で指示を出す。

『しように無いね。間断なく攻撃を仕掛けながら、薄雲と武蔵はこっちに来てくれ』

じわじわと修復しながらも、傷は拡大しつつあるメカいなづまちゃん。

電も、薄雲の代りに前に出て、速度で自分のパクリ、もといテレビの仇を翻弄する。

宮城連合艦隊が総力を結集して攻撃をしている中、武蔵と薄雲は直哉のボートのそばまで来ていた。

「どうした？高菜提督」

「どうしました？直哉」

二人がやって来ると、直哉はメカいなづまちゃんの頭部を指差す。

「たぶん、頭部に重要部分が詰まってると思うから、アイキャンフライ砲^{8.0mm三連装砲改}で狙撃してくれ。武蔵は、アンカーを下ろして後ろから抱き付いて、薄雲がアイキャンフライしないように抑えていてくれ」

結局、最終兵器投入である。

二人は頷くとアンカーを下ろして、武蔵がそのまま後ろから抱き付いた。

それを確認すると、直哉はモーターボートを夏海達のいる位置まで移動させる。

「やあ、お嬢さん達。ちよつと、全部の航空機を出してもらえないかな?」

直哉が指揮艦に移乗して、モーターボートと連結させると夏海に声を掛ける。

「それは構いませんが、航空機はCIWSで……あつ」

夏海は、アイキャンフライ砲を展開している薄雲に気づいてしまったのだ。

それを見ると、頷いて加賀に、

「噴式航空機含めて全機発艦、一発でもいいから当ててください!」

「了解しました!」

「行きます!」

「やるわよ、翔鶴姉え」

「ええ、瑞鶴」

四人の空母艦娘が、同時に弓を引き絞って航空機を全機放つ。

その直後、カウンターで飛んで来た90式艦対艦誘導弾を食らって、加賀が派手に吹き飛ばされる。

「加賀あああつ!!!」

三笠が、慌てて加賀を救助に向かう。

「お願い!」

「一矢だけでも……」

「当たって……」

残った艦娘達の期待空しく、艦載機は皆CIWSにより墜とされて行く。

「駄目なの……?」

大鳳が、ぐつと目を閉じて顔を背ける。

次々と航空機が墜とされている中、前線の艦娘達も奮闘している。「今です。敵が、航空機に気取られている間に、肩のロケット発射口を

潰しましょう！」

前線で、細かい指揮を執っている軽巡棲姫の号令で、ピンポイント攻撃が加えられる。

「アウツ！滅殺ナノDEATH！殲滅ナノDEATH！」

三鎮守府の連合艦隊がロケット発射口を潰した時、再びトマホークが発射される。

やはり狙いは、軽巡棲姫である。

「軽巡ちゃん！」

その間に陸奥が割って入り、陸奥は吹き飛ばされる。

それを、金剛四姉妹が救助に向かう。

その間、岩沼鎮守府の妙高四姉妹と扶桑山城が砲撃を加えて、注意を自らに逸らす。

「ミンナ殲滅ナノDEATH！」

メカいなづまちゃんは、怒りの主砲乱射を放つが、だんだん狙いが外れて行く。

蓄積されたダメージが、明石の計算を超えてだんだん溜まって行つたのである。

「死ヌノDEATH」

それでも、再びトマホークを発射すると、今度は妙高に向かって飛んで行く。

「妙高!!」

「ここは私達が!!」

扶桑と山城が前に出てトマホークを受け止めると、二人は宙を舞って海面に叩き付けられる。

それを、妙高四姉妹が救助に下がった。

そう。電以外、近接距離から居なくなった瞬間だった。

「電。滅殺ナノDEATH」

電に、主砲を向けた時だった。

「準備完了、視界オールクリア」

「アンカーロック完了。やれ！薄雲」

「80cm三連装砲発射！」

ズガアアアン!!!
ズガアアアン!!!
ズガアアアン!!!

薄雲とメカいなづまちゃんの間がクリアになった、その瞬間を逃さずに、薄雲がトリガーを引いた。

「ぐうううっ!!!」

腹部にダイレクトに来る反動で、武蔵の身体に激痛が走るが、奥歯をぐっと噛み締めて堪える。

砲弾は二発が外れたものの、一発がメカいなづまちゃんの頭部に命中し、メカいなづまちゃんの頭が吹っ飛んだ。

「うわぁ」

紛い物とは言え、自身の似たものの頭が吹っ飛ぶ姿を間近で見た電は、複雑な気持ちだったものの、

そのまま弾薬に誘爆を起こし、爆発しながら沈んで行く、メカいなづまちゃんを見ながら呟いた。

「本物は、電だけなのです」

完全にメカいなづまちゃんが爆沈した頃には、夕方になっていた。

皆ポロポロで、ぐったり疲れ果てていた。

「武藤提督、ミッション完了だ」

長門が、自身の提督である武藤二佐に作戦終了を伝えると、

『おお、皆南三陸に来なさい。高速修復材と夕飯をたっぷり用意して待っているよ』

と言う通信が、全艦に入ってくる。

その武藤二佐の穏やかな声を聞いた皆は、「ああ、終わったんだ」と、実感したのだった。

数日後。

「……という訳で、修理代と鎮守府再建費用は皆、君のところに戻しておくよ」

『まあ、良いデータが取れましたし、修理代はこちらで。それに、七原准将にもこつてり絞られましたし』

『宮戸島鎮守府仮庁舎』と言う名の自宅リビングで、直哉は硫黄島要塞の明石に電話を掛けていた。

「全く、電はかなり怒ってたよ。『何で電モデルなのですか!?!』って、武藤レストランで皆に愚痴ってたよ。テレビもオーディオも、皆灰になってしまったし」

『まさか、暴走するとは思わなかったんですよ』

「どうせ、君のことだから懲りないだろうけど……」

そう言いながら、リビングで寛いでいる四人娘を見遣る。

艦娘寮が炎上してしまった為、子日も高菜家で暮らすことになったのだ。

電を代表に、「鎮守府が再建できるまで、仕事はしないのです」と言う、ストライキ宣言の下サボっているが、

直哉だけは、焼け跡から何事もなく這い出て来た事務員妖精さんと共に、顛末書と戦闘報告書を書いている。

結局轟沈艦は出なかったものの、宮城県の有戦力の半分を損傷させる、と言う大惨事になってしまった為に、

各報告書も山のごとである。

特に鎮守府壊滅の一件では、消防車を出す事態になり、東松島消防本部や宮城県警本部には顛末書を差し入れることになったのだ。

現在、新鎮守府は焼け跡の片付けを終えて、建設中である。

とは言え、また急拵えのコンテナハウスなので、数日中には完成するだろう、とは大工の親父さんの言葉である。

今度は、テレビとオーディオは据え付け型にしてもらい、全ての費用を明石に請求した。

結局明石は、それを大貫財産から支払う羽目になった。

漸く落ち着いた直哉は、子日を買ったブラック鎮守府に対する調査を、四国警務隊長足立秋也一佐に依頼した。

そんな子日は、電達と共謀して同居している今だからこそと、ある企みを実行に移すことになるのだが、ブランデーを飲みながら足立秋

也に電話している直哉には、知りようもなかった。

這い寄る子日

宮戸島鎮守府が再建中のある朝。

高菜直哉は目を覚ました。

普段なら居る筈の嫁達がおらず、子日が寄り添って眠っている。

そこまでは良かった。

二人共、一糸纏わぬ姿なのだ。

「な…何が起きた!?!」

直哉は、頭痛がするのを堪えながら、必死に記憶を手繰り寄せた

……

そこから、前日に遡る。

高菜家リビングでは、とある計画が水面下で動いていたのだ。

『子日を嫁に迎える計画』を開始するのです」

『おー』

今頃直哉は、消防本部と県警本部からお叱りを受けている最中の一日仕事で、家にはいなかった。

「と言う訳で、子日を家族に迎える為に、いいアイデアを考えるのです」

「直哉に、子日が家事ができるところを見せる為に、今夜直哉のお疲れ様会をやるぴよん」

「おー、子日頑張るー!」

俄然、やる気の出ている子日。

何故か子日を直接助けた圭一ではなく、後からやって来た直哉に惚れてしまった訳は、

かつこよく、紳士的に裸の自分をジャケットに包くんでくれたので、一目惚れしてしまったのである。

その間圭一はと言うと、議員先生をケチヨンケチヨンにしていたのだ。

電は、そんな相談を子日から受けていた。

嫁の筆頭としては、嫁がこれ以上増えてもなあ、という思いは否定できなかったが、

何よりも、真剣に相談に来た子日が可愛くなってしまったのだ。

其の結果が、直哉不在のこの計画なのである。

卯月は乗り気になっており、冷静沈着な薄雲は、

「お二人が可なら、私も同意見です」

と言う言葉と共に、子日嫁加入計画に加わった。

「他に、何かいい方法はないのですか？」

「夏だから、浴衣を着てお出迎え、つてのはどうかなあ？」

子日の提案に、電自身が飛び付いた。

「いいアイデアなのです。せっかくだから、浴衣と水着を買いに行くのです」

「おお、それはいいぴよん。薄雲ちゃん、運転お願いぴよん」

「了解しました」

と言う訳で、薄雲の運転で仙台のデパートにやって来た四人。

「まずは呉服屋さんで、思い思いの浴衣を買うのです」

まず卯月が飛び付いたのが、黄色のうさぎ柄である。

早速試着してみると、黄色の生地 of 白いうさぎ柄で、青の帯でアクセントも付いていて、とっても似合う。

「おお、うーちゃん似合うのです」

「可愛いですね」

「うーちゃん、いいなあ」

そう言いながら、子日はいろいろ探したがあまり気に入ったのが無くて、奥の方に入って行く。

薄雲は、灰色ベースで水色の地味な浴衣を見つけて来て「これにします」と、早速決めていた。

相変わらず、薄雲は地味なものが好きなようだ。

電は、秋にも着こなせるような茶色の花柄を選んだ。

そして、子日が奥から出て来た。

黒と灰色のモノトーンで、ネズミ柄の浴衣を身に着けてやって来た。

右手には、猫とネズミの手拭いも持っており、チーズを思わせる黄色の帯である。

「おー、子日ちゃんも似合うのです」

「一生懸命探した甲斐があるぴよん」

「素敵ですね」

「えへへっ、ありがとー!」

その後、浴衣姿のまま水着も購入した。

今回のお会計は、ボーナスの出ている電持ちである。

さすがは幹部艦娘である。

制服に着替えると、家に戻って再び作戦会議である。

「それだと、弱いと思うぴよん」

「なら……既成事実を作ってしまったらどうでしょうか?」

薄雲のその言葉に、子日に視線が集中する。

子日は笑顔で、

「うん、高菜一佐となら!」

と答える。

「しかし、理性と常識のある直哉を、どうすれば理性を失わせることができるのか……そこが問題なのです」

「私にいい方法があります。明石謹製の酔薬があります」

『お〜』

冷静に語る薄雲に、感心の声を上げる三人。

「これを一粒、コニヤックに混ぜて渡します。するとぐでんぐでんになる筈です」

「採用なのです。では早速、楽しい料理に入ります」

『おーっ!』

電の号令で、料理タイムが始まった。

女子四人、賑やかに楽しく武藤レストラン謹製レシピで料理作成が進んで行く。

「ああ、今帰ったよ」

『おかえりなさい!』

浴衣四人衆が、揃ってお出迎えにやって来る。

「お、今日はどういう趣だい?」

四人それぞれの頭を撫でると、リビングに入る。

ダイニングテーブルにはお御馳走が沢山、特に直哉の好物を中心に並んでいる。

「これは?」

直哉が電の方を見ると、

「これは今日、消防と警察へごめんなさいに行つた直哉へのお疲れ様会なのです、子日が頑張つたのです」

「そうか。子日、ありがとうね」

直哉は、子日に笑みを向ける。子日は、えへへと笑みを返す。

「いやあ、今日は大変だったよ。明石の尻拭いとは言え、それぞれ事情を一から説明しないといけなかったからねえ」

そう言いながら、ダイニングチェアに腰掛ける。

「それじゃあ、早速乾杯なのです」

『お疲れ様でしたー!』

直哉も、一杯目はビールである。

「子日も、ここの鎮守府は馴れたかい?無理せず、練度を上げて行かなくてはね?」

「うん!薄雲ちゃんと卯月ちゃんが丁寧に教えてくれるから」

「そうかそうか、それは良かった。預かるからには、練度をある程度上げないといけないからねえ」

其の言葉で、艦娘達は顔を見合わせる。

これは最終手段発動しかない、と頷き合つた。

「さあ、コニヤックも入れたのです、飲むのです」

「お、今日はどういう風の吹き回しだい?」

いつもは飲み過ぎを掣肘するのに、今日は率先してコニヤックを持って来る電を、訝し気に見る直哉。

「いやいや、今日は特別なのです。お疲れ様会なのです」

そう言いながら、明石謹製の酔っぱらい薬を仕込んだ。

「はい、どうぞなのです」

「ああ、ありがとう」

直哉がコニヤックを飲む様子を、じーっと見る四人。

「どうしたんだい？」

不思議そうに見ると、四人の艦娘は慌てて食事に戻る。

直哉は、（ああ、なにか隠し事でもしてるな）等と思いながら、コニヤックをグイッと飲む。

数十分後。

「あっはっはっは」

直哉は陽気に笑いながら、コニヤックをラツパで飲み出す。

「直哉、楽しそうなのです。でもちよつと飲み過ぎだから、お布団に行こうなのです」

「ワタシ、マダヨテナイアル」

「充分酔っぱらいだぴよん。薄雲、子曰、手伝うびよん」

「わかりました」

「わかったよお！」

四人の艦娘の手により、何とか二階の寢室のベッドに直哉を横たわらせると、どんどん服を脱がせて行く。

一糸纏わぬ姿にすると、子曰はちよつと顔を赤らめる。

「さあ、子曰。あとは子曰次第なのです」

子曰は頷くと、シユルツと帯を解いて、パサツと浴衣を落とす。

それを見ると、電達艦娘トリオは部屋を出て行った。

「直哉、子曰も抱いて……」

「うえ？子曰……」

二つの影が合わさった。

漸く直哉は、頭痛の中から異常に酔っ払って、子曰に迫られたことを思い出した。

「思い出した……何か仕込まれたな……」

気持ち良さそうにすやすや寝ている子曰を、ゆさゆさと起こす。

「うーん……………よその鎮守府に出さないで……………」

「はあ、最初から養子に迎えるつもりだったんだがなあ……………」

直哉は溜め息を吐くと、更にゆさゆさと子日を起こす。

「おーい、子日ー!!」

「ふあ……………直哉、おはよお」

「全く、昨日は散々だったよ」

「ごめんなさい……………」

シユンとしている子日を抱き寄せると、

「最初っから、どこの鎮守府にも出すつもりはなかったんだよ。養子として置いておく予定だったんだけどなあ?」

「電が、嫁でもいいって言うから、既成事実を……………」

「電がいいって言うならいいか。昨日は殆ど覚えていなかったからもう一度……………」

そう言うと、子日を抱き締めて唇を重ねた。

「んうっ……………」

「んっ……………」

そして昼過ぎ。

「全く君達は、何て馬鹿なことをしたんだ?」

四人を正座させてのお説教である。

「だって、子日は直哉のことが好きになったんだからしようが無いのです。きつと直哉はこれ以上増やさないと思って」

「他の鎮守府にやる為に、育てていたと思ってたぴよん」

「そうです、それじゃ子日が可愛そうです」

「ごめんなさい……………子日が皆にやろうって」

シユンとしている艦娘達を見遣ると、一通の決定書を艦娘達の前に置く。

子日の、高菜直哉との養子縁組決定書である。

そしてカバンから取り出したのは、ケツコンカツコカリ指輪である。

「……………全く、君達のおかげで、順番が逆になってしまったじゃないか」

そう言いながら、子日の手を取って左薬指に填める。

「わぁ……………ありがとう、直哉」

目を輝かせて、笑顔の花を咲かせる子日の頭を撫でる。

「さて……………休暇申請の為に頑張ろうかね？三高ワンダーランドのプールに連れて行ってあげるよ。どうせ水着も買ったんだろうし」

「ぎくっ、なのです」

「電の考えている事はお見通しなのさ」

肩を竦めて笑うと、直哉は早速、事務員妖精さんと執務に取り掛かった。

そんな直哉の姿を見て、ストライキ中の彼女達は、惚れ直したかのように見つめていた。

大貫悟伝・序章く新たな鎮守府く

九月半ばに入って、漸く新しい鎮守府が完成した。

地上二階建て、それぞれ一階20畳・二階10畳の二間である。

二階の10畳は、応接室となる。

流石に、ちゃんとした来客対応はしないと拙い、ということになり、ちゃんとした応接室が、強制的に確保された。

下20畳は、今までどおりの執務室兼多目的室である。

天井には7・1chホームシアターシステムが取り付けられ、副官デスクの真正面には、

60V型4Kプラズマテレビが取り付けられている。

今度の執務室はエアコン完備で、だるまストーブは廃止された。

他、シャワー室・給湯室・トイレが、執務室から出入りできるようになった。

執務机も幅広になり、司令官コンピュータシステム用端末に加えて、

私物のiMacPro（フルスペック）を、明石に買わせて机に設置した。

偶々難を逃れたMacBookProは、お下がりとして秘書艦の電に譲った。

そして、大きな目玉が大テーブルである。

特注で、番長と愉快な仲間達が全員座れる様になっていて、壁には、カバンロッカーも用意した。

そんな鎮守府の初来客者は、明石であった。

「いやあ。その節は、多大なるご迷惑をお掛けしました」

「多大なるご迷惑過ぎるよ」

直哉の目の前には、茶菓子のレインボー最中が置いてある。

「明石には、いろいろ酷い目に遭って来たからね。応接行くかね？」

「あ、はい」

二人して応接室に上がると、今日の秘書官薄雲が立ち上がり、紅茶の用意を始める。

意図して二人共、ブランデー入り紅茶を淹れる。

「お茶です、どうぞ」

無表情でお茶を出すと、明石は口を付けてから、その芳醇なブランデーの香りに気づく。

「まあ、積もる話もあるから、今日はゆつくりして行きなさい。民宿には話をして置くから」

「謀られた……まあ、そうでしょうねえ。と言うか、高菜家じゃないんですねえ？」

「夜の営みを聞く趣味があれば、別に構わないけどねえ」

「いえ、民宿でいいです」

明石は苦笑いを浮かべると、直哉の提案に従った。

「最近の私のライフワークなんだが、『大貫 悟』とは一体何者なんだ？」

「質問の意図が解りかねます。元大本営幕僚総監で暗殺された方とか……」

直哉の質問に困惑している明石は、紅茶を啜ると、

「では、生来の『大貫 悟』はどうなったんだい？」

と言う直哉の質問に、紅茶を嘔き出しかけた。

「……………」

「私の仮説を述べようか。深海提督や大垣 守等のグループは、密かに自衛隊幹部に潜り込んで行った。そうやって、当時の大貫空将補と入れ替わった大垣 守と、艦娘の有用性を共に訴えたのが、原初の艦娘の『工作艦』『任務艦』である明石と大淀だった」

明石は、何も反論できなかった。

「そして宮戸島に、ジレーネを倒す要素のピース・リーヴエが居ることに気づいた君達は、偶々大貫空将^{大垣}から命じられた陸上自衛隊の私の小隊が、宮戸島の調査任務をしている日に、深海棲艦の大侵攻が発生した。それを薄雲と明石と協力して成し遂げたのは予定調和のうちで、私は民間人を誰一人死なせること無く逃がした功績で、三佐に特進した」

「……………」

「薄雲は、何か知っていたのかい？」

「提督のおっしゃりたいことは大体。私は元々、深海と艦娘のハーフで、以前説明したお話はだいたい嘘です」

「やっぱりか……」

「私への監視も、全て茶番だった、と言うことです。本気で監視をしているつもりだったのは、当時の足立警務隊長だけです」

その言葉に、明石はほう……と溜め息を吐いた。

そして薄雲は、真っ直ぐ直哉を見て続ける。

「ですが、直哉を愛していると言う気持ちには嘘偽りはありません。改めて申し上げます。直哉を愛しています」

「はいはい、それは知ってたよ。ありがとうね」

薄雲を優しく抱き寄せるとソファアに座らせて、明石の目の前だと言うのに濃厚なキスを交わす。

「んんん……」

「んんう……」

「わあ、大胆ですねえ」

いつもは冷静な薄雲が、顔が真っ赤になっている。明石は苦笑いを浮かべている。

「その……直哉……人が見えます」

「今まで、私を謀ってくれたお礼さ。明石にもね」

直哉はそう言って、わざとらしく溜め息を吐いた。

「結局……私の人生設計をメチャメチャにしてくれたのは、大貫 悟というやつさ。私は彼を恨んでるし、感謝もしている。何せ、合計四名もの艦娘を嫁に貰えるんだからな」

「それは、大貫前総監も申し訳なく思っただらうしやいました。彼には重責を担わせる、と」

「それが『導き手』だったんだらう？」

「……………はい」

直哉は、再び大きな溜め息を吐いた。自身の身に、これほどの不条理な運命を押し付けておいて、さっさと退場してしまった大貫 悟と
言うやつが、笑っている姿しか想像できなかった。

「ところで、本物の『大貫 悟』はどうしている？」

「……………」

「惚けないでもらおうかな？大垣 守が大貫 悟と入れ替わった先だ。まさか、死んだ訳じゃないだろうな？」

「はい。大貫 悟さんは、我等の同志です。彼は元々別の顔を持っていましたので……………」

「とある人物とねえ。どうせ、そのとある人物もお前さん達の同志だったんだろう？」

「はい」

「大貫 悟とは一体何者だったのか？ 生きていれば生きていけばで、死んだら死んだで我々を困らせる」

「ふふ……………」

「もう一つ確認事項なんだが、薄雲、生理は来ているか？」

「はい、子曰、卯月、電にも」

「艦娘が、妊娠しない理由を教えてもらおうか？明石」

「……………」

最早明石は、言い逃れはできない、と悟っていた。

「そこまで辿り着いていたとは、予想外でした」

『知識の蒐集者』の息子を、バカにしないでもらいたいねえ。私だつて、それなりに仮説は立てていたんだ。この七年間で、艦娘の妊娠例がないことを調べ上げた。全部の艦娘が避妊するとは限らないから、妊娠は必ず起こりうる現象だ。人間の生理的機序も働いているならば、何らかの理由でロックしていた、違うか？」

「……………」

直哉の、真っ直ぐ見る視線に耐え切れず、明石は目を逸らしながら答えた。

直哉は足を組み直して、薄雲に哨戒緊急中止を命じると、薄雲は立ち上がり一礼して応接室を出て行った。

「それはどうしてか？まずは、反艦娘派への配慮。提督と子供が為せるとしたら、それは彼等の警戒を招き、艦娘の立場を『兵器』として、一気に人権を与えない方向に傾いてしまう恐れがあった。それに伴

「Die^こse^の wa^真hre^の Lie^愛be^こ, hi^こer^に」
銀色のケツコンカツコカリリングが輝くと、白金色^{プラチナ}のリングに変わって行った。

「これで、艦娘の最後の能力。ケツコンした人物との間に、子を成すことが出来るようになったよ」

直哉は肩を竦めて、皆を見回した。

「これでカツコカリが取れて、ケツコンリングになった訳だ」

そう付け加えると、四人を優しく抱き締めた。

明石は、その光景を目に焼き付けていた。そして、少し寂しそうに、しかし嬉しそうに、

「おめでとうございます。その通りです」

そう祝福した。

「明石、君はやはり大貫 悟を……？」

「はい。ですが、新しい出会いを探しますとも。それに私には、まだ研究という恋人がいます」

「はは、あまりやり過ぎないでもらいたいものだ」

直哉は苦笑いしてから、コホンと咳払いをする。

「さて。ここから、前回の一件の賠償のお話なんだが……」

「はて。請求されたものは、全て払いましたが……？」

明石が首を傾げると、直哉がにいつと笑った。

「武藤レストラン食べ放題コースが履行されてないから……ね？」

「ああ、そう言うことですか。宮城の提督全員、開封させる気ですね？了解です」

改めて、メカいなづまちゃん事件のお疲れ様会が、武藤レストランで執り行われた。

全員のケツコンカツコカリリングが、ケツコンリングに変わって、皆大喜びをしていた。

そして、間違えて酒を飲んで酔っ払った夏海が、

「明石さん！私、艦娘達や結有に、子供を孕ませたいです！何とかしてくださいー！」

「ええっ！そんなの無理い……」

と、滅茶苦茶過ぎる無茶振りをして、明石を困らせていた。

「まあ、明石の技術力なら、何とかなるだろう」

「いやいや、私を何だと思ってるんですか？一佐は」

と、直哉は更に退路を断って、明石は困り果てていた。

「散々迷惑掛けたんだから、そのくらいやれんだるお!？」

「ぐえっ!!しぬ……しぐう」

「夏海さん！落ち着いてください！これ以上やると、死んでしまます!？」

「なっちゃん！明石さんを殺す気!？」

「散々、メカいなづまちゃん事件で迷惑掛けた無駄な技術力を、役に立てろやゴルア！」

と、夏海は人格が変わったようなドスの効いた声で、明石の首を絞めて脅しているのを、加賀と結有が止める形で、

そんな様子を見ながら、一同はどつと笑っていた。

後に明石が、新技術を用いてそれを可能にして、世の中の同性愛者の希望の星になるのだが、

それはまだ、もう少し先の話である。

番外編：それいけ浜松警備保障

ザザーツ

太平洋上では豪華クルーザーが停泊して、お金持ち一家がデツキで楽しく食事をしている。

その周囲を、三隈・最上・曙が周辺警戒している。

「あーあ、美味しそうね」

「そうだね、高級牛のローストビーフだって」

「全くよ。ホントセレブは、呑気でいいわね?」

ヘッドセットに付けている通信機で、駄弁っている三人。

それぞれ、株式会社「浜松警備保障」の代表取締役社長、同副社長、取締役専務。

何でこんな事をしているか?と言うと、クルージングの警備である。

ジレーネ戦争が終わって、高菜政権が発足したのを見届け、艦娘達は除隊した。

浜松鎮守府は廃止となり、三隈達は小さなアパートを借りて、仕事探しをしていた。

そんな中、参加した街コンで彼等と出会った。

起業家トリオの、飯村いむらただし 規いなつたいじと稲津泰司いなづまけんと中垣なかがきけん 堅けんだった。

最初は、

「ねえねえ君達、成人過ぎてるよね?街コンの参加資格、20歳以上の男女だけど?」

と、規が声を掛けて来たのがきっかけだった。

それぞれスポーツ刈りの筋肉質の青年、瓶底眼鏡でロン毛の青年、お相撲さんのように太っている青年だった。

曙が憤慨して、

「失礼ねーほら、免許証」

生年月日に、《艦娘により成人》と記載された免許証を、印籠のように見せ付ける。

この度の艦娘・深海棲艦基本法の制定により、艦娘は全て成人として、選挙権も認められるようになった。

まだ被選挙権は認められなかったものの、大きな第一歩である。因みに、曙の取得免許は普通自動二輪である。

「へえ、艦娘なんだ。それじゃ自衛隊員？」

「ううん、僕達除隊したんだ」

「そっかあ。俺達は、一応実行委員会兼参加者で、僕が飯村。それから、隣の眼鏡が稲津、太いのが中垣。皆独身の、30代男だよ」

「ボクは最上」

「私は三隈よ」

「あたしは曙」

自己紹介も終わったところで飯村達が、

「もしよかったら、夕飯ご一緒しない？」

「お、お勧めの居酒屋もあるし」

「ポリュームいっぱいだよ」

と誘って来るのを、三人は顔を見合わせてから、コクリと頷く。

お見合い形式で三隈の前に規、稲津の前には曙、そして中垣の前に最上が並ぶ。

「それじゃあ、かんぱーい」

『かんぱーい！』

「皆さんは、どう言ったお仕事をされてるんですか？」

早速三隈が、ジョッキを持ったまま声を掛ける。

「俺は、一応自営業者かな。経営コンサルティング関係の仕事をしてる」

「僕は……その……作家、兼イラストレーター……」

「オレは土建屋かな。小さな土建業を営んでるんだ」

飯村と稲津と中垣が、それぞれ自己紹介をする。

「私達は今就職活動中で、なかなか艦娘を雇ってくれるところがなくてね」

最上が代表して、苦笑を浮かべている。

「そっか。ねえ、艦装って個人所有なの？」

「ええ、陸上での使用は禁止されてますけど……」

「そっかそっか」

飯村が暫し考えてから、

「街コンの趣旨とちよつと外れる話なんだけど、一つ聞いてもらえないかな？」

「うん」

「君達、就職活動中だろう？ いつその事、起業してみたらどう？」

『き、起業!?!』

艦娘三人の声がハモった。

「起業って！ 僕達そんなお金ないよ」

「そ、そうですよ。会社を立ち上げるだなんて……」

「ばかなの!?!」

艦娘三人が狼狽えている中、飯村が笑みを浮かべたまま話を続ける。

「警備会社ってのはいいんじゃないかな？ ほら、深海棲艦はまだ害獣化している、つて話だろう？ 漁業や大きな貿易船舶は、自衛隊が手厚く保護してるけど、例えばレジャーとか小さな海運は、保護申請を出しても却下される傾向にあつてね。特に四国の大戦争以降、人手が足りないとかで……」

飯村が真面目に語り出すのを、三人の艦娘達が真面目に見ている。

「それでも、レジャーに行く人はいるんだよね、保険を掛けて。さて問題です。保険会社は、どうやってお金を工面するでしょうか？」

ビールを飲みながら三人の艦娘に問い掛けると、曙が手を挙げる。

「はいはい、保険の掛け金から出される！」

「はい正解。ぼのちゃんだつけ、それじゃ、テロや深海棲艦がいつぱい現れて、保険会社のお金では賄い切れなくなつたらどうするか？ 保険会社も、保険を掛けてるんだ。それを、再保険と言うんだけど。小さな海運やレジャーで被害を被つた人たちが多くて、一時期小さい保険会社がバタバタ潰れたことがあつてね。再保険会社が、深海棲艦案件での支払いを戦争や天変地異等、常軌を逸した変乱に因る時に拠る免責を主張して停止したのもあつて、それと海のレジャーも衰退してそ

う言う会社もバタバタとね……大企業は鎮守府を誘致できるけど、小さな自治体や企業はそうも行かなくてね」

『……………』

艦娘達は、申し訳無さそうな顔をする。

「いや、責めてる訳じゃないんだ。そこで俺が思い付いたのは、保険会社や個人と契約して、小さな海運やレジャー目的の船を護衛して、深海棲艦案件や保険金の支払い事案や命を落とすのを阻止する会社を立ち上げる、つてのなんだけど、どうだい？」

『おー……………』

艦娘達は、目から鱗だった。

「そ……………それよりも……………」

「今日は、折角の街コンだから、さっ？」

二人に突っ込まれると、飯村が苦笑いを浮かべる。

「興味があつたら、明日にでも話すとして……………今日は折角だから、いろいろなお店回って楽しもうよ？」

『おー！』

いろいろなお店を回って、スタンプラリーみたいな感じで、はしご酒をして行く。

自然と飯村には三隈、稲津には曙、そして中垣には最上がくっ付き始める。

飯村と三隈は延々と起業の話をして、

DMの稲津は、曙に「クソ泰司！」と罵られながらも、楽しく絵を書いて過ごしている。

そして酒の回りの早い最上は、中垣の大きいお腹をポンポポンと叩きながら、くっ付いている。

そして自然と、それぞれのカップル(?)で解散となり、明日お昼ついでに警備会社の話をする、と別れると、規と三隈はバーに足を運んだ。

「私達のこと、最初から知ってたんでしよう？」

青年会議所

「あはは、大正解。村上さん達から、JCを通して君達が街コンに参加するから、どうか楽しく過ごさせるように力を貸して欲しい、つて」

「あの二人は『優し過ぎる』んです。だから今は、警察で総理の護衛になれてよかった、と思うんです」

「そうだね。ところで明日もあるし、お家に送るよ」

「……あの、まだ帰りたくない、って言ったら怒りますか？」

「全然？」

「それじゃあ……」

「うん、行こうか……」

二人はバーでお勘定を済ませると、バーを後にしてホテル街へと向かった。

翌朝。待ち合わせ場所で、昨日と同じ服装の六人が、顔を揃えた。

『……………』

艦娘達は、無言でそれぞれ顔を見合わせると、少し赤らんだ。

「三人共朝帰りだった、と」

規が代表して突っ込むと、泰司がしどろもどろになってしまう。

「……あの、その……童貞を貰ってくれて……」

「クソ泰司！そういう事は、報告しなくていいから！」

顔を真っ赤にした曙が、バシツと叩きながらツツコミを入れると、ガリ細の泰司が蹠踉ける。

「こつちはねえ、フツカフカのお腹だったよ」

「あはは、上に乗ったまま寝ちやったもんね」

最上が照れ笑いしながら言うと、堅も照れながら笑った。

「ところで、くまりんこはどうだったのよ!?!」

「そうだよ、僕達の話ばかりずるいよ！」

二人に迫られると、三隈は両手を上げて、

「その、激し過ぎて……チエックアウトギリギリでシャワーを浴びて……」

「寝てないよね？俺達」

二人で照れっ照れになりながら言うと、曙が目を逸らす。

「あれえ？曙さーん？どうしたのかなあ？」

最上が意地悪そうに言うと、三隈も弄りに参加する。

「そう言えば、遅刻ギリギリだったよねえ？」

「っ……!!」

曙が、更に顔を真っ赤にして耳まで赤くなると、

「あの……ネットですって冗談で買った、「アカシ秘薬」ってネットショップの「超絶ギンギン丸」ってのをぼのたんに見つけられて……全部飲まされたら朝まで萎えなくて……その……漫画の資料で取り寄せたグッズで……前だけじゃなくお互い後ろも……」

「言うなあああああ!!!」

げしっ
今度は、真っ赤な曙の蹴りが入って、蹠踉けて堅に凭れ掛かる。

「うん。DSとDMのいい関係になりそうだ」

「そうですね」

規と三隈は顔を見合わせると、笑みを浮かべた。

結局、警備会社の設立を規のコンサルティングの下に行って、社会に進出したけど、仕事のない深海棲艦達も次々入社して、他にも自衛隊を除隊した五十鈴等が参加して、

総勢60名の社員で、『株式会社浜松警備保障』は船出した。

三隈達の村コネク上シ兄ョン妹を使って、高菜直樹や高菜湊総子等理の支援を得たのも大きい。

一ヶ月足らずの、スピード設立となった。

因みに本社は、浜松鎮守府跡地を買い上げた。

大株主は三高ホールディングスであるが、子会社にするほどは保有していない。

いろんな業種から、規が見付けて来てくれた出資者が、株をどんどん保有してくれた。

規達も、経営の方法から経理の方法、税理士を紹介してくれたりいろいろ手伝ってくれた。

大人気イラストレーターの泰司が、社員募集や依頼募集の広告を、いろんな即売会で出してくれて、

土建屋の堅も、本社改築工事に力を貸してくれた。

その間にも、それぞれのカップルは互いに愛を深めて行き、こちらもスピード結婚となった。

やはり結婚のきっかけは、優しくしてくれる相手をそれぞれ求めていた、と言うのもあった。

専業主婦とは行かなかったものの、それぞれの家で実業家として、主婦として頑張ることになった。

「夏休みシーズンだから、役員まで総動員で仕事かあ……クソ泰司はコミケ行ってるのに」

「ごめんねえぼのたん、折角のエロコスで売り子する予定だったのにねえ」

「僕も行きたかったなあ、コミケ」

楽しそうに、子供が燥いでる豪華クルーザーを見ながら、駄弁っている三人。

会社の役員でもあるこの三人は、艤装を着けて海に出る機会が少ないが、経理部長である五十鈴まで動員している以上は、

社員が足りないので出来ません、と断る訳にも行かなかった。

しかも、このミッションの報酬はかなり破格であり、「金は命には代えられない」と言うのを、まざまざと見せられるような思いだったのもある。

依頼人の、

「命を金で買えるなら、安いものだ」

と言う言葉も、三隈にとっては忘れられない言葉になった。

「さあ、気を引き締めましょう。このクルージングの旅が無事終わったら、規さん達がご褒美に、三高ワンダーランドに連れて行ってくれる、って言ってたわ！」

『おーー』

こうして、除隊した後も自衛隊の手が回らない分野を民間でカバーすることによって、深海棲艦事案の保険金支払いや被害が多少は減つ

たとか。

こうやって、海のレジャーは守られている。

今度、デスペランから卒業した子達が新規採用枠でやって来る。

そんな子達の教育をしないと。そう思いながら、三隈達浜松警備保障は今日も頑張っているのである。

余談だが、副業がバレた明石は減給処分となった。

知識の蒐集者

今日も高菜直哉は、いつもどおり執務机でブランデーを飲みながら、歴史書を読んでいる。

最早、ブランデー入り紅茶ではなくストレートのブランデーである。

輪番秘書艦である電は、いつもの時代小説を読みながら、おいおい泣いている。

「千鶴さんが……千鶴さんが可哀想なのです」

そんな言葉に、直哉は肩を竦めながらこう語る。

「歴史は、大小の悲劇によって作られてきた。昔も、今もね」

「ぐすん……そうなのですか？」

「四国の戦争だって、もう100年もすれば、歴史の悲劇として語られるだろうね」

「……そうかも知れないのです」

そんな中、駐在さんがやって来た。

曰く「浮浪者と艦娘が図書館に来て書物を読み漁り始めている」と。

「あ、まさか……？」

「なのです」

一応、鎮守府執務中^{営業}は鎮守府を離れるわけにも行かず、

満足したところで、鎮守府に顔を出すように伝えてもらおうよう頼んだ。

高菜源一郎と青葉は、早速地元の本屋で、宮戸島に関する本を一通り買い揃えた。

『浮浪者が本を探している』、そう言う噂が島中に伝わり、

小学校は集団登下校になるくらいだった。

そして一軒一軒民家を訪れて、宮戸島大避難について訊き始めた。ある意味恐怖である。

風体が浮浪者な、自称ヴィダルサスン愛用者が古民家を訪れて、宮戸島事件のことを訊き始めたのだ。

そんな話は直哉の耳にも入って来たが、訴え出て来た島民には、「う

ちの親父です」と説明し、安心させて帰らせた。

更に図書館に常駐して、資料集めである。

それに飽き足らなかつたのか、手に入らなかつた書物を求めて、再び一軒一軒民家を回り始めたのだ。

島民は、高菜直哉の父源一郎の風貌に恐れを抱いていたが、

美代おばあさんの家にやって来た時に、彼は蔵書の多さに歓喜した。

「おお、こんなに絶版の書物が……………」

「これはねえ、死んだ旦那がコツコツと集めたものなんですよ。あの人は、この風土を気に入ってらしたので……………」

「そうだったのですか。では、形見も同然ですなあ」

残念そうにしている源一郎に、美代おばあさんはフフツと笑った。

「お世話になっていいる高菜提督のお父様ですから、好きだけお譲りしますよ?…」

「おお!でも、それではた^{無料}だでは申し訳ない。何か対価をお支払いしたい」

「そうですねえ、宮戸島の昔話でも付き合ってもらいましょうかね……………これは、母から聞き伝えられたことなんですが……………」

宮戸島と太平洋戦争のお話を、延々と話をしていた。

源一郎も知識の蒐集者ぶりを発揮して、話は大いに弾んだ。

その頃青葉は、もう一人の大長老大五郎さんの家で、将棋を指していた。

将棋を指しながら、宮戸島全島避難についての生の声を聞いた。

そして、大五郎さんの口から衝撃的な事が語られた。

「あれは、侵略では無かつたように思える」

「えっ?…」

青葉は、勢いよく打とうとして持っていた飛車を、取り落とし掛けた。

「ほれ、直ぐに取り返しただろう?どうも深海棲艦の目的が、島以外にあるんじゃないか、と思えてのう」

「確かに、おっしやるとおりかもしれません」

「そうになると、壮大な茶番だった、と言うことになるのお……フオフオ
フオ」

「あはは……」

島民でも、気づいている者は気づいているのだ。

慎重に聞きながら、青葉は宮戸島事件のことを取材して行った。

「どれ、折角将棋を指してくれたお礼じゃ、土蔵の古書を持って行くが
いい」

「えっ、古書ですか？」

土蔵に案内された青葉は、その古書の年代に驚愕していた。

「明治出版の古書……解体新書まである……これはのらくろ上等兵の
初版……!?!?よろしいのですか？最早、歴史的価値のある本ですが
……」

「ホッホ、この土蔵も取り壊そうと思っておったからな。若いのに本
の虫で、将棋も上手い、と言うところが気に入った。好きだけ持っ
て行くが良い」

「き、恐縮です」

「うちは、伊達家に連なる家の分家でのう。どれ、本家にも何か譲れる
資料があるか、聞いてやろう」

「そ、そこまでは恐縮で……」

大五郎さんの太っ腹ぶりに、こちらは恐縮しっぱなしの青葉であつ
た。

島民を、別の意味で恐怖に陥れた源一郎と青葉は、乗って来た車に
大事に蔵書を積み込むと、鎮守府に立ち寄った。

「お久しぶりなのです」

「ようこそだぴよん」

「こんにちは」

「初めまして。新しい嫁の、子日だよー」

最後の子日の自己紹介に、源一郎は一瞬目を丸くするが、

「不肖の息子を頼むよ」

そう言つて、子日の頭を優しく撫でる。

「えへへっ」

少しはにかみながら笑うと、直哉は大テーブルを勧める。

「直哉も、きちんと仕事をやっているかね？」

「恐縮です、館長。宮戸島の英雄が、そんなサボったりしないですよお」

その言葉に、直哉と嫁艦は目を逸らした。

「ところで、大貫 悟伝進んでいるかい？」

「うむ。最近行き詰まつておつてな、それで方々を回つて本集めを再開しておる。ところで、直哉に訊きたいと思つておつたのだが、宮戸島の一件は茶番だな？」

「大正解」

真つ直ぐ直哉を見遣る源一郎に、両手を上げて降参する。

そんな頃に、いつもの番長と愉快的仲間達がやつて来る。

「お、オツサン誰だ？」

「圭一！失礼です」

「こんにちはあ？」

「こんにちはー」

「お前等、お客さんなんだから失礼のないようにな？・どうも」

『ごんちわー』

「ああ、この浮浪者はうちの親父」

と紹介すると、史絵がじーつと源一郎の顔を見る。

「も、もしかして!?夏向かなた 伊知玄楼先生いちげんろうでいらっしやいますか!？」

「いかにも。よく判つたのう」

高菜源一郎は、読書狂いとは別に作家の貌も持っている。

今までに出した時代小説や歴史小説は、地味ながらヒットを出しており、

メディアにあまり露出しない作家として、有名なのだ。

勿論、この奇抜なペンネームは、高菜源一郎のアナグラムである。

「この間の古本屋長兵衛シリーズ、読ませていただいています！」

史絵は目をキラキラさせながら、両手で握手をする。

中学生で時代小説を読む史絵に、源一郎も破顔する。

「こんな若いファンには、せっかくだからプレゼントをしないと。最新刊は買ってもらえたかな？」

「はい、持ち歩いていきます」

文庫を取り出す。夏向先生は、文庫書き下ろしも多い作家なのだ。

その奥付の後ろのページに、名前を聞いてから『草加史絵さん江』と書いてサインを入れる。

「わあ、一生の宝にします！」

大喜びの史絵に、

「良かったな」

と、頭を撫でる圭一。

「ところで、うちの息子は本を大切にしないでな？」

「そうなんですか？」

史絵が、ジト目で直哉を見ながら聞いている。

「ちよつと待て！私は電子書籍派なだけで、本を大事にしないとは言ってない！」

直哉も堪らず反論すると、

「本は本で、手に取って紙の手触りの良さとか、ページを捲る楽しさがあるんです！」

「そうじゃそうじゃ、もつと言ってやれ」

史絵まで加勢してしまった為に、直哉も両手を上げて座る。

「わかったわかった。親父達の言うとおり、両方の良さを分るようにするよ」

「うむ。電子書籍のみの出版も増えて来たからな、わしもとうとう電子書籍デビューしたんじゃ」

「ほれ見たことか。結局は時代の流れなんだよ」

今度は、直哉が勝ち誇る。

そんな論争をぶった切るように、ギャルズの望が、

「エロい本ないの？」

と言い出すと、慎がボカッとド突く。

「アホか？ある訳無いだろ？」

「いいえ、ありますよ」

「官能小説も書いとるぞ」

「電子化もしてるし、読んでみるかい？これは確か、船宿のお話だったかな？」

慎に史絵、源一郎、直哉が言うと、

「マジっすか？」

と、慎も少し驚く。

「何を驚くことか。人間の営みには不可欠のものだからな」

源一郎がそう言うと、直哉が電子書籍のタブレットを操作して、望達の前に差し出す。

「何か、難しい言い回し多い……」

そう言いながら読み進めて行くと、三人共ちよつと顔を赤らめる。

「何か、直接的な物がないほうがエッチだ……」

「それな」

「うん……」

読み終わると、史絵が自分のことのように、

「夏向先生は、そういう描写がとてもお上手なんですよ」

と、自慢気に言うと源一郎もニコニコしている。

「他にも、高菜源一郎名義でノンフィクションも書いてるよ。最近書いたのは、「艦娘の新たな形―浜松警備保障―」だったかな？」

「うむ。ノンフィクションは、本名で出してるからの」

「館長のお手伝いを始めてから、意外と多忙だと分かりましたよう」

直哉が他の出版本の紹介をすると、史絵も興味を持ったらしくて、

「今度買いに行きますね？」

と意気込んでいるのを見て、源一郎は、

「青葉。車に、今度のサイン会の分まだあった筈だから、一冊分けてあげなさい」

「了解です！」

そう言って車に戻ると、一冊の本を持って来て史絵に手渡す。

「わあ、本当に有難うございます！ところで、先生の今後の作品は、何かご予定があるんですか？」

「うむ。今のシリーズの他には、ノンフィクションで『大貫 悟伝』を書こうとしておる。神谷事件のことを、明日にでも聞いて回ろうか、と思っておる。神谷 徹が、何故この地にやって来たのか？息子への復讐だけでは、説明が付かないからのう」

「神谷事件なら、健太と愛ちやんなら何か知ってるかもしれないなあ。今度LINEして、訊いてみるつすよ」

「おお、すまないねえ。何か分かったことがあったら、直哉に伝えてくれ」

圭一が会話に加わって、愛達に聞くことを約束すると、圭一の頭を撫でながら優しく笑みを浮かべる源一郎。

こうして、番長と愉快な仲間達の趣味に「読書」が加わったのは言うまでもない。

夏向作品の一部は、コミカライズもしていて、ギャルズ達はそつちから入って、

今活字に移行しているところである。

「しかし、親父が宮戸島に来るとは思わなかったなあ」

「やっぱり、蔵書集めは足だからなあ」

「ロングドライブでしたよう」

嫁達が寝静まった夜、ブランデーを片手に三人で語り合う。

「ところで、『大貫 悟氏』は本当に死んだのかねえ？」

直哉がポツリと漏らすと、青葉と源一郎は直哉の方を見た。

「大貫 悟は、最初から自分の世界を諦めてこの世界にやって来た、と言う考えは出来ないだろうか？だったら、あんな中途半端で終わらせる人間じゃない。きっと、どこかで生きて見守っていると思う」

その言葉に、源一郎は一瞬ヒゲの奥の口元を歪ませた。

「ふむ、その考え方もあったか。いい勉強になった。どうせ、大貫 悟伝は自費出版で締め切りもない。私の寿命が尽きる前に完成させたものだ」

「そうだね。協力できるところは協力させてもらおうよ」

「うむ。最近足立総監とも仲良くなってるなあ……」
親子の語らいは、夜遅くまで続くのだった……

番外編：フルアーマーアルティメットいなづまちゃん
VSデビルメカいなづまちゃん 南海の大決戦

「とうとう完成しましたあ!!」

硫黄島要塞研究所改め硫黄島科学要塞研究所の所長、明石が叫んだ。

「はいはい、今度は何ですか?」

夕張が、上階の夕張ラボから降りて来た。

「第13艦隊が抜けたことで、哨戒に穴ができたのでその代替となる艦娘を制作しました」

「また今度は、大騒動にならないでしょうね?」

「多分大丈夫です」

明石ラボの真ん中に鎮座しているのは、電型の艦娘である。

「これは?」

「良く聞いてくださいました!アルティメットいなづまちゃんです」

「あんた!電に、何か恨みでもあるんですかねえ!」

ツツコミを入れる夕張。

「まあ、このアルティメットいなづまちゃんは、外付けフルアーマーパーツにより、戦艦並みの火力と、駆逐艦並みの機動力と、水雷艇ならではの雷装と、ついでに航空機発艦装置も付けました」

「それ、レ級じゃねえ!」

「弱点は装甲ですが、最新の三大理論の二つ、自己修復・自己増殖で補ってます」

「嫌な予感かしらないんですが……」

「まあまあ。外装パーツを取り付けましょうか?」

そう言うと、クレーンで何処かのオーキスユニットみたいな外装パーツを、アルティメットいなづまちゃんに取り付ける。

がしよん、と取り付けるとフルアーマーアルティメットいなづまちゃん(以下いなづまちゃん)が起動する。

「なのDEATH」

「おお、起動しました！」

「ちよつと待てあんだ！起動しましたって、不確かな物体創り上げたんかい!？」

いなづまちゃんは、ニコニコと『なのです顔』をしている。

起動したことに驚いている明石に、夕張はハリセンで叩きながら突っ込む。

「それでは早速、性能試験に行きましょう」

「は、はあ……………」

夕張は、頭痛がする思いだった。

もうこんな職場嫌だ……そう思いながらも、律儀に従っている。

硫黄島沖で、量産型メカいなづまちゃんを多数出撃させる。

「だから、何でいなづまちゃんなんですか!？」

「面白いからですよ」

本人が聞いたなら、きつと気を悪くするだろう。そう思いながら、いなづまちゃんが出撃するのを見守る夕張。

フルアーマーユニットの背部ファンにより、駆逐艦並みの速力を出せる、小さな体に大きな艤装。

見るからにアンバランスな姿に、夕張は不安を覚える。

「それでは戦闘開始！」

量産型メカいなづまちゃんは、

「滅殺ナノDEATH」

と言いながら近づいて行くが、いなづまちゃんがフルアーマーユニットからよきつと出ている、51cm砲を容赦なく発射する。

ズドオン

その砲撃音と共に、量産型メカいなづまちゃんの一体が木つ端微塵になる。

それを見ながら、夕張は思った。

（この、量産型メカいなづまちゃんとやらで艦隊作ればいいんじゃないかないか？）と。

次に右側のコンテナが開いて、九九式艦上爆撃機が無数に出撃する。

そして、爆弾を抱えたまま体当りして行く。

「特攻かよ!？」

「はい。AIによる制御なので、代わりはいくらでも居ます!」

「いや、艦爆の役目果たせよ!？」

「普通に、爆撃も出来ますよ?」

「だったら最初からやれよ!？」

「あ、でもこの艦装、着艦できませんよ?」

「最初から犠牲前提かよ!？」

明石と夕張が漫才を繰り広げている中、量産型メカいなづまちゃんは次々と木っ端微塵にされて行く。

「さあ、次は雷装ですね」

「あの、魚雷発射管が見当たらないんですが……………」

「ああ、これです」

左側のコンテナが開くと、ロケットが発射される。

ロケットが、ヒュルヒュルと上がって行き、パラシュートで魚雷が舞い降りて来て、

着水して少し立った後、足下で爆発を起こし、量産型メカいなづまちゃんが木っ端微塵になる。

アンチサブマリンロケット

「アスロツクかよ!？」

「はい、対潜水・対水上誘導魚雷です」

「無駄に高性能だな、おい!？」

「では今度は、防御性能を試しましょう」

そう言うと、量産型メカいなづまちゃんが一齐に主砲を発射する。

ドゴオン!

「あうっ!痛いのでATH!殺されるのでATH!」

ボコボコにされるいなづまちゃんだが直ぐに自己修復で、受けたダメージを回復して行く。

「とでも、思っていたのかATH!」

その様子を見て、夕張は感心する。

「おお、これは入渠要らずですね」

「今回は、破片が一片でも残っていれば復活しますので、大丈夫です」
「それは経済的ですね。恐るべしアルティメットいなづまちゃん細胞
……」

時間は遡り……

宮戸島沖に沈んでいるメカいなづまちゃんは、自己修復を終えて浮上し始めていた。

そう。取り外し忘れた自己進化機能で、ゆつくりと進化しながら海中で修復をしていた。

「硫黄島要塞二敵方居ルノDEATH 破壊ナノDEATH 滅殺ナノDEATH 皆殺シナノDEATH」

洋上に現れた、禍々しい姿に変貌したデビルメカいなづまちゃんは、丁度進行方向にいた岩沼鎮守府の艦娘達を蹴散らしながら、南下して行った……

「どうして、私達ばかりこんな目に……ああ、不幸だわ……」

妙高は、山城の口癖で嘆きながら、気絶している僚艦に浮き輪を取り付けつつ、南下して行くデビルメカいなづまちゃんを見送っていた。

「ところで私思っただんですけど、量産型メカいなづまちゃんて艦隊を組むのは駄目なんですか？」

「えっ?」

「『えっ?』って何ですか?」

そんな事考えもしてなかった、と言う態度に、夕張は絶句していた。取り敢えず、いなづまちゃんは量産型メカいなづまちゃんを、次々と片付けていた。

「殲滅完了なのDEATH。お腹が空いたのDEATH」

ざざつと二人の目の前に戻ると、食事を要求するいなづまちゃん。

「ああ、普通に空腹にはなるんですね?」

「はい。ちよつと人間っぽさも欲しいかな?と取り入れてみました」
「そうなんです、ちよつと可愛いです」

「今回のいなづまちゃんは、電に近づけてみました」
そう言う三人は、ザザーツと要塞に戻って行った。

「美味しいのDEATH」

硫黄島要塞の食料合成プラントをフル稼働させて、助手型メカいなづまちゃん達が次々と運んで来る食事を、バクバク食べているいなづまちゃん。

フルアーマーユニットは、ウエポンラックに掛けてある。

「どんだけ食べるんですかねえ……?」

そんな大食漢ぶりを、啞然として見ている夕張に、明石は平然と、

「そうですね。大 艦娘大食いチャンピオン 和の五倍位は……」

「それ、財政傾くじゃねえか?!食料合成プラントでよかつたよ!!」

答えるのに、夕張はいつもどおりにツツコンでいた。

食事を終えると、じーつと夕張を見る。

「えっ?」

「デザートなのです」

「えっ、アツー!」

夕張は、ベッドルームに連れ込まれると、メチャメチャ愛された。

数時間後。

「いやあ、酷い目に遭いましたよう」

そう言いながらも、顔を赤らめていなづまちゃんと共に出て来る夕張。

いなづまちゃんも、満足そうに夕張に寄り添っている

「メロンちゃんのダブルメロンを堪能したのDEATH」

その直後、硫黄島科学要塞研究所に艦娘通信が入って来る。

第12艦隊からである。

「こらあ!硫黄島要塞!返事しなさい!」

第12艦隊旗艦の叢雲である。

「はいはい、こちら硫黄島要塞ですよ?」

明石が通信に出る。

「あんた等が開発したと思われる、禍々しい巨大電型ロボットによって、哨戒中の第12艦隊壊滅、全員大破して漂泊中。今第11艦隊に救援を求めたわ。ロボットはそっちに向かったわよ!」

「えっ、あれは沈んだ筈……まさか……自己進化機能!?!」

「やつぱりあんた等か!?!そっち行ったから、自分達で何とかしなさいよ!以上!」

ブツツと、通信が切られた。

「あの、自己進化機能って、何ですかねえ?」

顔面蒼白になっている明石に、夕張が顔を覗き込む。

「実は……あのメカいなづまちゃんから、自己進化機能を取り外すのを忘れてまして……完全に木っ端微塵にしないと、何度でも復活して強化するんです……そして多分、暴走してます」

「あんた!碌でもない機能付けたな!」

「しようもないマッドサイエンティストなのDEATH」

いなづまちゃんと夕張が、ゲシゲシと明石を蹴る。

「痛い!!やめて!!変なのに目覚めてしまいます!!」

「ええい!やかましい!」

「なのDEATH!」

明石はボコボコにされてから、ヨロヨロと起き上がる。

「そ、それはともかく迎撃しないと……」

「私も出撃します、一応軽巡なので」

「いなづまも出撃するのDEATH。夕張はいなづまが守るのDEATH」

「いなづまちゃん……」

「帰ったら、またご褒美のダブルメロンを堪能するのDEATH」

「そっちかい!?!」

そんな夫婦漫才をしながら、夕張といなづまちゃんは出撃して行った。

因みに、島風は休暇で不在である。

現れた、デビルメカいなづまちゃんに対峙している夕張といなづまちゃん。

そして、緊急入渠して救援に駆け付けた叢雲と共に、三方から半包囲している。

ミサイル系を、要塞からのシースパローで無力化している間に、三隻の艦娘はちまちまと傷を与えて行く。

「九九式艦上爆撃機出撃なのDEATH!」

無数の艦爆が、上空から爆弾を落とすが、焼け石に水で直ぐに回復して、装甲が強化してされて行く。

「これ、対処しようがないじゃない!」

叢雲が、何度も魚雷を放ちながら叫ぶ。

夕張が、至近で主砲を放とう、と接近した時だった。

「危ないのDEATH!」

デビルいなづまちゃんの主砲が、夕張を捉えていた。

それをいなづまちゃんが、ブーストダッシュで夕張を突き飛ばして庇った。

チユガツ!

フルアーマーユニットが木っ端微塵になり、通常艦装になつたいなづまちゃん。

通常艦装は自己修復で回復したものの、フルアーマーユニットには自己修復機能が付いていないので、回復しない。

「いなづまちゃん!」

「夕張は、いなづまが守るのDEATH」

そう言うと、ウェポンコンテナの中に入っていた、唯一生き残った武器である、巨大爆弾を担いで突っ込んで行く。

「メロンちゃん、愛しているのDEATH!サヨナラなのDEATH

!」

「いなづまちゃあああああん!!!」

「た、退避!!!」

叢雲は、慌てて夕張を引っ張って要塞に飛び込んで行く。

チユガツ

きのご雲と爆風と共に、デビルメカいなづまちゃんは多分消滅した。いなづまちゃんと共に……

因みに、要塞はバリアで無事だった……

「あ……ああ……いなづまちゃああああああん!!!」

夕張の悲痛な叫びが、硫黄島要塞に木霊した。

数日後……

「夕張、今日の作業は終わったのDEATH」

「ああ、ありがとう、いなづまちゃん」

いなづまちゃんは、生きていた。

巨大爆弾を投げ付けると、いなづまちゃんも全力で退避していたのだ。

あの後、爆沈確認に出た叢雲が、見るも無残なボロ雑巾のような姿で浮かんでいるいなづまちゃんを発見したのだ。

直ぐに要塞に引き上げられ、それに縋り付いておいおい泣いている夕張を余所に、いなづまちゃんはゆっくり自己修復して行き、元通りになったのだ。

「ただいま、なのDEATH」

「いなづまちゃんのバカ!もうさよならなんて言わないで!」

「ごめんなさいなのDEATH。これはお詫びの……」

にこりと、いなづまちゃんは夕張の涙を指で拭うと抱き寄せて、濃厚なキスをした。

「んう……」

「んっ……」

そんな二人を見ながら、明石は朗らかに宣言した。

「これにて、一件落着ですね?」

「綺麗に纏めようとしてるんじゃないわよ!？」
それにツツコんだ叢雲の叫びが、要塞に木霊した。

結局、新しい艦隊にいなづまちゃんは配属されなかった。

夕張が全力で拒否したのだ。

「アルティメットいなづまちゃんを側に置いてくれなかったら、私退職します」

との脅迫付きで。

結局第13艦隊の代理は、量産型メカいなづまちゃんで購入することになった。

旗艦には叢雲がスライドで着任して、第12艦隊は別の艦娘が旗艦になった。

最初から、量産型メカいなづまちゃんとやらを配属すれば済む話なのである。

しかし、デビルメカいなづまちゃんが復活した為、結果オーバーライドはあるが……

今日も、叢雲と量産型メカいなづまちゃんの第14艦隊を含む横須賀鎮守府艦隊は、関東の海の平和を守っている。

「今日も哨戒に行くわよ!」

『了解ナノDEATH!』

だが、海の平和は長く続かないだろう。

第二、第三のデビルメカいなづまちゃんが復活するかもしれないのだ。

その時は、おそらく多分きつと、直哉達や愛達が迷惑を被るだろう。

そして明石は、デビルメカいなづまちゃん騒動の一件で、減給処分になったのは言うまでもない。

そんな中。

夕張とアルティメットいなづまちゃんは、着実に愛を育んでいる。
そんなラブラブっぷりを、延々と見せ付けられる明石と島風には、

目の毒である。

「はい夕張、あーん、なのDEATH」

「あーん、ぱくっ」

「コーヒーが甘く感じますね」

「全くだよ」

こうして硫黄島要塞に、また一人珍妙な仲間が加わった。

源一郎とサイン会と作家への道

作家・夏向^{かなた} 伊知玄楼^{いちげんろう}は気難しい人間、と世間では評判である。

ツイッター等をやっているが、おかしいと思う時はおかしいと発信し、高名な政治家や著名人相手でも真つ向から衝突する。

そして、大抵は論破して『読書の邪魔をするな』或いは『仕事の邪魔をするな』と言って一方的に議論を打ち切り、ブロックまでする。

作家・夏向としては、熱心なファン以外はそんな感じの塩対応なのである。

逆に、熱心なファンにはこぼれ話などを披露したり、時には住所を聞き付けて、『最新刊は絶対買うな』と言って、最新刊をサイン付きで送り付けたり、とファンサービス旺盛な作家である。

今日も神谷事件の調査の傍ら、鎮守府に居座っては貰った本を読んでいる。

それが数日なら、直哉も仕事のフリをしながら過ごすのが、一週間を超えた辺りで源一郎から、

「真面目にやってるふりなぞせんでもよろしい。ツイッターで、史絵ちゃんから聞いておる」

と言われた為、ありがたく何時も通りの執務に戻った。

史絵は、自身の書いた長編作品を持って、毎日やって来る。

しかも、今時珍しい原稿用紙で、だ。

神谷事件の調査や本を読むのに忙しい筈なのに、史絵がやって来ると小説教室に変わる。

毎日添削を受けては書き直し、翌日には完成度の高い小説を持って来て、源一郎を驚かせる。

「おい親父、勉強もついでに見てやってくれんかね？ 史絵ちゃんは、進学校を目指したいそうさ。東大で文学を学ぶんだと」

「何、学校じゃなくても学べることは多いぞ。要は学ぶ姿勢じゃ」

「そうなんですな。私、もったもった勉強します。小説も、学問も」

「そう、その姿勢じゃ」

頭を撫でると、笑みを浮かべる。

一方圭一は「ジジイに浮気された」と嘆きながら、史絵の趣味を応援しており、家で一生懸命小説を書く史絵のお買い物を頼まれたり、コーヒーを淹れたり、もはやアシスタントになっている。

「早く帰れよ、じじい」

そんな直哉の言葉にも耳を貸さず、滞在すること早一ヶ月。季節は、秋本番の10月になっていた。

ツイッターで、史絵がうっかり『夏向先生が宮戸島に滞在されています』とツイートしてしまった為、ファン達が集まるようになっていた。

鎮守府で、勝手にファン交流会を開いたり、やりたい放題している。直哉は、そんな親父を放っておいて仕事をしていない。

史絵が書いた「金と銀の瞳の竜の物語」が漸く完成を見たところで、源一郎は神谷事件の調査に本腰を入れた。

いろいろな人の証言や、警察の記録を調べたり、新聞を調べたり……

そんな中で、神谷騒動は愛を狙った事件だと判明すると、神谷はやはり反艦娘派の手先だった、と結論付けて神谷事件の調査は完了した。

「さて、そろそろ宮戸島での用事も済んだことだし、青葉が戻って来たらサイン会をしてから帰ろうか？」

「いい加減にしてくれよ、親父。今まで好き勝手しやがって」

直哉は大きな溜め息を吐くと、源一郎を諫める。

「ご、ごめんなさい。私のツイートのせいで……」

しょんぼりしている、史絵の頭を撫でる圭一と源一郎。

「ほれ、直哉は可愛い女子中学生をいじめて何が楽しいんじや？」

「いや、史絵ちゃんが悪いんじゃないからね？そのクソジジイが悪いんだからね？」

「夏向先生を、クソジジいなんて言うのは、高菜一佐でも許しません！」

「らしいぜ、師匠よお」

一気に集中砲火を食らうと、直哉は大きな溜め息を吐いた。

そんな中、青葉がやって来た。

青葉はこの間、東京と宮戸島を往復して、読み終えた蔵書を高菜図書館に収蔵したりしてたのだが、今回やって来たのは違う目的だった。

「先生、「金と銀の瞳の竜の物語」のサンプル、持って来ました！」

「え、っ!？」

史絵には、寝耳に水だった。

作者名の入っていない無線綴じのA4本。青葉が文字起こしして、イラストレーターに挿絵とカバー絵を依頼して、パーソナル製本機で自家製本して完成した、世界で一冊の本。

「この、挿絵のイラストレーターの先生……私が大ファンの冬風先生……」

「うん。原稿見せたら喜んで書いてくれました。出版社にも見せたんだけど、もう乗り気でして。どうします?」

「ど、どどどどどどうしますって……け、圭一?」

「良いんじゃないの?」

狼狽える史絵に、気楽な圭一。

「ワシも、これは行ける、と思ってるがのう」

「……………分かりました、お願いします。ペンネームは既に決めてたんです……『扶桑 咲花』って」

「草加史絵のアナグラムじゃな?」

敬愛する夏向先生の後押しに、史絵は強く頷いた。

そのやり取りを見て、青葉が携帯を取り出して電話を掛け、「GOサイン出ました」と、出版社に声を掛ける。

「そうじゃ、『金と銀の瞳の竜の物語』のプレビュー版も頒布したらどうかね?」

「それ良いですね。先生ならそうおっしゃると思って、序章の部分を作ってあります……300部あれば足りませんか?」

「それはいいな、それを頒布しよう」

史絵が目が回る思いの間に、あれよあれよとサイン会に『金と銀の瞳の竜の物語』プレビュー版の頒布会も追加されることになった。

夏向の公式ツイッターで発表された「宮戸島の英雄勤務の宮戸島鎮守府で、サイン会します。当日は、私の弟子の作品のプレビュー版も頒布します。10月20日10時より」と言うツイートにより、多数の夏向先生ファンが集まった。

「先生、気まぐれも程々にしてくださいよ」

「はっはっは。ファン交流の一環で、宮戸島の英雄とワシと新進気鋭の若手作家が一同に会すイベントなぞそうそうないじゃろう?」

出版社の担当は苦笑いしながら、プレビュー版の『金と銀の瞳の竜の物語』の入った箱を持ってやって来た。

鎮守府は休業日だが、直哉達や圭一と愉快的仲間達もやって来て、テント等の設営を手伝っている。

朝からファン達や作家仲間が詰め掛け、源一郎は和気藹々と作家仲間と雑談している。

他にも、他の出版社の担当者等もやって来ては、源一郎に挨拶する。多数の出版社から本を出している彼は、イベントを開くとメイン担当の出版社の他にも、出版している担当者がやって来るのだ。

そんな中、史絵はガツガチに緊張している。

それはそうだ。初めて書き上げた作品が、皆に見られるのだ。

一番のおめかしをして、眼鏡も瓶底眼鏡ではなく圭一セレクションの眼鏡、ギャルズ達と選んだ秋物ワンピースと、今までになく気合が入っている。

そんな緊張の中、サイン会が始まった。

基本的にファンは、宮戸島の英雄高菜直哉一佐と握手をして、夏向のサインを貰って帰って行くが、

何人かに一人は史絵……もとい。扶桑咲花の『金と銀の瞳の竜の物語』のプレビュー版を貰って帰って行く。

作家仲間も、直哉と握手をして最新刊にサインを貰って行く。

電以下、艦娘と番長と愉快的仲間達は、出版社の担当とその後ろで手伝いをしている。

そのうちに、有名なMeTuberの「しゃちよー」と言う人物もやって来た。

もちろんカメラ付きで、高菜一佐と握手をして、夏向先生に「いつも読ませてもらってます!」と、サインを貰って握手する。

夏向先生も、MeTubeで夏向作品を取り上げてもらっているの
で、見知った仲のようで軽く雑談を始めて、「また後で」と横にずれて、
ひよいっと『金と銀の瞳の竜の物語』のプレビュー版を受け取り、時
間潰しも兼ねて目を通し始める。

「これ、超面白い!」

しゃちよーが絶賛すると、帰ろうとしていた夏向ファンも戻って来
て自分も自分も!となつて、余らせる予定だった300部が一気にな
くなってしまう。念の為に、もう300部用意しておいたことで事な
きを得たが、

途中からは艦娘達が総動員で史絵に手渡して、史絵からファンに渡
すことになる。

サインも欲しい、と言われてパニックになりかけたが、一応練習し
ておいたサインをすると、夏向先生のサイン会は、

高菜一佐の握手会に有名作家夏向先生のサイン会、それと新人作家
のお披露目会へと変わっていた。

サイン会が終わると、今度は史絵の争奪戦が始まる。

もう既に、夏向のメイン出版社からの出版は決まっているものの、
うちでも出版しませんか!?!と言うオファーで、史絵の取り合いにな
る。

史絵がパニックを起こして訳が判らなくなつてるのを、青葉と夏向
でまあまあと、落ち着かせる。

結局、メイン出版社でハードカバーの新書、ジャンケンに勝った一
社が、何巻かに分けて文庫本契約を結ぶことになった。

史絵としては、自身の作品が世に出ることが喜びであつて、印税そ
の他のことは全く頭に入っていない。

「それでは、古本屋長兵衛シリーズ重版記念と扶桑先生の作品のヒッ
トを祈つて……」

『かんぱーい!』

夏向のメイン出版社担当の乾杯の音頭で、その夜は仙台の居酒屋の大座敷で打ち上げ会が始まる。

作家仲間が、夏向の周りに集まって、最近の文学談義を披露する。作家仲間の先生達もレビュー版を読んでいるので、その隣にちよこんと座っている史絵こと、扶桑咲花に感想を言ってくれたり、アドバイスをしてくれたりしている。

更に、挿絵を担当してくれたイラストレーター・漫画家の冬風も来てくれていて、「ぜひ漫画化させて欲しい」と頼み込まれた。

「この作品、挿絵を書いた以上は、どうしてもあたしがコミカライズしたいよ」

「えええっ!?!そんな……私の憧れの冬風先生に、そんな……」

「どうかな?」

「はいっ!よろしくお願いしますっ!!」

深々と頭を下げる咲花に、ギャルズ達も「よかったじゃん」と祝福する。

そんな賑やかな打ち上げは夜遅くまで続いて、史絵は幸せ気分であつた。

圭一は、自分の史絵が遠くに行ってしまった、と寂しさを感じていたものの、それを言い出せずにいた。

大座敷の隅で、艦娘達と飲んでいる直哉に、

「オレ、史絵と別れたほうが良いのかな?不良だし……」

そう相談すると、直哉は隣に座りなさいと前置いて、まっすぐ見つめる。

「圭一の気持ちは分かってる、分かっているつもりだ。釣り合わないと身を引くか、愛を貫くか、もう一度ゆっくり考えると良い。それまでは、私の方から史絵ちゃんに、圭一とは会わないように言っておくよ」
「……………すみません」

史絵はギャルズ達の宣伝により、本出るよ面白いよと言うことで、学校の人気者になっていた。

11月初頭に出版される本は皆予約してくれて、予約数が出版予定

を上回り、まさかの発売前重版が決定したのだった。

そんな史絵は、ある日直哉の下に呼び出された。

「何でしょう?」

「圭一が、ちよつと今後も付き合つて行けるか悩んでる。彼なりの結論が出るまで、そつとしてやつて欲しい」

「……………」

史絵も半ば予想は付いた話だった。以前、親からも言われた話だったのだ。

不良番長と優等生が付き合うのは大変だよ、と。

「分かりました」

史絵は、まっすぐ直哉を見て答えた。

そんな様子を、圭一を除く愉快な仲間達も心配そうに見ていた。

圭一は圭一で悩んでいる。自分の道を曲げて愛を貫くか、番長を貫いて身を引くか……………

圭一は圭一で、番長としてできた仲間達も多い為、そう言う仲間と縁を切れるか?

そのジレンマがあった。

そうして、色々な人の思いを残して、11月初頭の『金と銀の瞳の竜の物語』の発売日がやって来る……

番外編：それいけ浜松警備保障Ⅱ（新入社員）

夏が過ぎて秋になった10月半ば……宮戸島でサイン会騒動が起こってる頃。

旧浜松鎮守府庁舎改め、株式会社浜松警備保障本社社屋の社長室では、

代表取締役社長の三隈が、今度アスペランから入社して来る深海棲艦のプロファイルを見ながら、訓練方針を考えていた。

今度送られて来るのは、イロハ級駆逐艦の少女型深海棲艦50人である。

「どうしようね？ 恵美ちゃん」

元司令官執務室の社長室には仏壇が置いてあり、一人の少女の遺影と位牌が飾られている。

裏の警務隊時代に保護して、そして殺されて喪った少女である。その遺影に語り掛けると、再び書類に目を落とす。

「おっす！ 社長、教育方針の件だけだよ」

ボタンと、勢い良く扉を開けて入って来たのは天龍である。

天龍は、元々釧路鎮守府所属だったが、除隊して浜松警備保障に入社した。

現在は訓練部門の部長として、艦娘達や深海棲艦達の教導を行っている、いわば浜松警備保障の姐御さんである。

皆、天龍の姐御と呼んでいる。

「今それを考えたのよ、姐御」

「社長まで姐御かよ……まあいいけどな」

副社長の最上と専務の曙の二人は、新事業の為に各地を飛び回り、忙しい日々を送っている。

艦娘や深海棲艦の艦装についての、法規的なものが決まった。

やはり、銃刀法によって規制されることになった。つまりは艦装は銃砲類に類することになったのだ。

自衛隊に所属していない艦娘等は、みだりに砲撃や雷撃を行うと銃

刃法違反によって処罰される、と言うことだ。

そこで、浜松警備保障は大ピンチになるかと思われたが、同時に警備業法も改正された。

警備業を営む艦娘は、艀装武装の使用を『深海棲艦等害獣』に向けてのみ許されるのだ。

模擬弾に関しては、訓練時のみ許可されている。

余談だが、摩耶達はデスペランの所属の為、今回の規制には該当しない。

その改正を待っていたのは大手警備会社各社であり、艦娘による警備を模索していたが、結局は艦娘や深海棲艦の運用ノウハウが充実している浜松警備保障の存在が何歩も先を行っており、自社で艦娘を保有するのではなく、『警備会社のサービス』として、浜松警備保障との業務提携を結ぶに至った。

最初は、水上バイク便等の新事業も展開しようと思っていた三隈等幹部達であるが、今や警備業の方が忙し過ぎるのだ。

抑々の原因は、業務提携先にある。

業務提携先の一つ、警備業最大手である全日本警備保障が『パーソナル海洋警備』と言うサービスを打ち出し、各社もそれに倣ったのだ。

その結果、お金持ちや中小企業の直接依頼とは別に、一般の個人顧客の警備も、業務提携として行い始めたのだ。

報酬単価はあまり高くないとは言え、件数がとにかく多いのだ。要するに警備の下請事業である。

元請け側である警備会社も、艦娘のアドバンテージを理解していて、薄利で浜松警備保障に事業を卸してくれている。

この大変化が、約二ヶ月で発生したのだ。

非上場企業であるが、株主は当初の予定以上の配当金が期待できるだろう。

尚、パーソナル海洋警備の入れ知恵をした主犯は、高菜直樹と明記しておこう。

艦娘達や深海棲艦達も、ブラック企業とは言わないまでも、休日出勤も多々ある業務環境で仕事をしている。

元々深海棲艦達は、海に出て戦うのが好きで、気質としては『残業休出上等』であるので、それで何とか賄えている。

取引金額は、三隈どころか飯村の予想を遥かに上回る規模に急速拡大して、200人まで増員した警備員も足りない、と言う緊急事態に陥っていたのだ。

常務取締役経理部長の五十鈴が、顔を青褪めさせるくらいの急激な事業拡大である。

艦娘や深海棲艦によるPMS C分野を事実上独占している、と言う民間軍事警備会社事実の重大さを、改めて見せ付けられたのだ。

今や、艦娘よりも深海棲艦の方が所属としては多い。深海棲艦達が浜松に集まり住むようになり、浜松市は日本有数の外国人街ならぬ深海棲艦タウンとして名を馳せるようになった。

浜松市も市の事業として、深海棲艦専用の公営団地を作って深海棲艦をそこに纏めて住ませる、と言う受け皿もあって、深海棲艦人口は浜松市がダントツで日本一である。

公営団地が、事実上の社員寮となった。

そんな状況に立ち上がったのが、デスペランである。

デスペランで養育している、少女型になったイ級に日本語を教えて送り込む、と言うのだ。

デスペランには訓練の鬼の神通がいるから、深海棲艦の質としてはまあまあだろう、と思いつながらも、教育は引き続きして行かなくてはいけない。

そこで、自衛隊からヘッドハンティングしたのが天龍である。

駆逐艦達を引き連れ、遠征や訓練に勤しんでた彼女を『執行役員業務統括兼訓練部長』と言う肩書で引き抜き、現場を任せただ。三隈達が現場に出る時期は、早くも終わったのだ。

今までの給料の三倍以上の給料を提示された天龍は、相思相愛の妹龍田を残して浜松の地にやって来た。

今は深海棲艦専用の団地に特例で住み込み、団地の自治会長を務めながら深海棲艦の暮らせる環境を守っている。

そんな訳で、デスペランの駆逐艦ちゃん達を50人も受け入れる三

隈達は、訓練計画に頭を悩ませていた。

連日、天龍と夜遅くまで会議会議の連続である。

社員の上位深海棲艦——姫や鬼といった個体もいる——にも意見を聞きながら、訓練計画を練り上げている。

そんな訳で、夏休みシーズンのクルーザー警備の一件から、三人は顔を合わせる機会が殆どなくなっていた。

ケツコンリングを付けて子供の準備は万端だが、子供はもう少し先だね？と、それぞれで話をしている。

そして、ついにデスペランの駆逐艦ちゃんズがやって来たのだ。

浜松の洋上に、ずらりと並ぶ少女型駆逐艦50名。

リーダー役である改イ級——一番最初の少女型改イ級——の初海がビシツと敬礼すると、

それに倣って、皆ビシツと敬礼する。

「本日よりお世話になります、改イ級一番艦初海以下50名、浜松警備保障に到着しました！」

『お世話になります！』

さすがは神通の教育である。

一気に増えたイロハ級を、ここまで教育したのだ。

イロハ級で姿形は似ているので、人型になった順番から何番艦というネーミングをすることにした。

初海だけは、特別に固有の名前をつけてもらった。

この中では、一番お姉さんなのだ。

「おーし！お前等。オレが浜松警備保障の業務統括兼訓練部長の天龍だ。いいか、上司の命令は絶対だ。右に行けと言えば右に行け、左に行けと言えば左に行け、空を飛べと言えば空を飛べ！」

『はいっ！』

「おーし、いい子だ!!」

にいつと笑って、訓練が始まる。

まずは、硫黄島要塞に依頼して作ってもらった、量産型メカいなづまちゃんとの模擬戦である。

深海棲艦の艦装も、改良を加えれば模擬弾を搭載する事が可能に

なったので、デスペラン側で改良は済んでいる。

雷撃や砲撃をどんどん行っていくが、まだまだ量産型メカいなづまちゃんのほうが上手で、ボコボコやられて行く。

唯一強いのは初海で、それ以外は訓練がもつと必要だ、と天龍は感じていた。

「こりゃあ苦勞しそうだなあ」

天龍は、用箋挟を片手に溜め息を吐いた。

「それじゃあ、駆逐艦ちゃん達の入社を祝って……」

『かんぱーいー!』

社長の三隈の乾杯の音頭の下、浜松警備保障の港の埠頭で浜焼きパーティーが始まった。

会社の幹部である社長の三隈、副社長の最上、専務の曙、更に常務・経理部長の五十鈴、そして業務統括・訓練部長の天龍が、漸く一同に会した。

「いやあ、怒涛の二ヶ月だったね」

イロハ級ちゃん達がワイワイと浜焼きを楽しんでいるのを眺めながら、曙が大きな溜め息を吐いた。

艦装をスーツに着替えて、東京で大手警備会社との調整を一手に引き受けていたのだ。

曙の、無自覚ながら艦娘等事業を独占している、と言う強気な態度から、有利な条件での業務提携を決めたのだ。

もちろん、大株主の三高ホールディングスから社員を外向させて、交渉補佐としての条件勝ち取りであるが、強気に出た曙の寄り切り勝ち、と言う側面も否定できない。

「最初はローカルな会社で、三世帯慎ましく食べて行ければ良い、と思ってたんだけどね。ボクは」

最上は、自衛隊大本営との交渉を主に行っていた。補給と修理は、工廠でないとできない。

もちろん本社の自社工廠も可動しているが、補給と修理の委託契約を結んだのだ。

自衛隊にも手数料が入る、浜松警備保障側にも実質的な拠点が全国に広がる。

Win—Winな契約だった。

これも、未だに残っている大本営・鎮守府の自由裁量を上手く活用した形である。

「業務規模が倍々算で増えて行くから、どうしようかと思ったわ」

五十鈴は、一時期最上達と同僚だった艦である。浜松鎮守府の前々任司令官の暴力を受けており、耐えかねて脱柵した、と言う艦である。

一時期は、人間と偽って小さな会計士事務所勤務していたが、三隈達が会社を立ち上げたと聞いて、原隊……消滅した浜松鎮守府の代わりに大本営に戻って、正式に懲戒免職処分を受け、やって来たのだ。

三隈は、簿記もできる五十鈴に経理を全て任せ、今では経理部の社員を統括する立場として、常務取締役になっている。

彼女が経理になってから、税務・法務関係のことは外部に任せずに良くなったのだ。

「まあ、新入社員のチビ共は、これからビシバシ研修して、使い物になるようにしねえとな？」

業務統括と訓練部を任された天龍は、いわば現場監督である。

早速、イロハ級の子達に懐かれている、優しく厳しい教官である。

「まあ、街コンの時には思いもしなかったことよね？」

社長である三隈が、この怒涛の二ヶ月を思い返すと、溜め息を吐いた。

本当なら、妻である三隈が家事を引き受けるところだが、今は規が家事をしてきている。

経営コンサルタントである彼は、基本在宅業務が多いので、助かっている。

「てんりゅーぶちよー、こっちにきていつしよにたべましょー」

口級一番艦の子が、天龍を呼びに来ると天龍は、

「おっ、そうだな。今日の主役は、お前達だもんな」

と、手を繋いで皆の所に向かう天龍。

「関係は良好みたいね。実に良いことだけど」

五十鈴がそれを見送りながら呟くと、皆が頷いた。

「折角、デスペランから50人も人材を送ってくれたんだから、大事にしないといけないわね？」

三隈も、見送りながらビールを飲み干す。

「ところで、秋冬はどうするのよ？」

曙が、海のレジャーシーズンが終わったこれからを問うて来る。

「船釣りはなくなりはないし、小さな海運護衛も今後も継続して行われし大丈夫よ。ね、五十鈴？」

「今までが異常過ぎただけで、問題ないわ。深海棲艦共生モデル事業で、国と市から補助金も毎月出てるし」

三隈と五十鈴が答えると、最上が話に加わる。

「暇だからと言って、パーソナル海洋警備は月々の掛金だからね、こっちにも収入は入って来るよ」

「そう言った道筋を付けてくれた三高ホールディングスには、感謝しか無いわ」

最上の言葉に、三隈が頷く。

「それにこの際、一般警備も視野に入れるべきね。艦娘や深海棲艦は頑丈だから」

曙の提案に、今度は三人が頷く。

「今までより、更に責任が重大になって来たから、しつかり気を引き締めなくてはね？」

三隈の言葉に、気持ちを新たにする幹部達であった。

番外編：それいけ浜松警備保障Ⅲく新人研修く

「よし、今日から俺様の手伝いをしてくれる教官を紹介するぜ」

天龍は、新入社員を浜名湖に集合させる。

まだ朝の五時半である。

天龍の横には、龍田が立っていた。

結局、天龍の傍から離れるのが耐え切れず、自衛隊を除隊してしまつたのだ。

これで釧路鎮守府は、熊崎提督の嫁艦である不知火のみになつてしまつた。

その動きを察知した三隈は、龍田を訓練部次長として引き抜いたのだ。

入社して来たのは、入社祝いの浜焼きの翌々日である。

「天龍ちゃんがお世話になつてるわねえ、龍田よ。よろしくねえ？」

『よろしくお願ひしまーす！』

一斉にビシツと敬礼する、初海以下50名の人型駆逐艦深海棲艦ズ。

制服は白いワンピースで、その上に艤装を着けている。

もちろん、スパツツとタンクトップも履いている。

「よっしゃあ、まずは海を走る練習だ!! 駆逐艦らしく素早く正確に、海を走り抜ける技術を覚えてもらおう!!」

『はーいー!』

浜名湖に浮いているブイを、スラロームで走らせる。

まだまだ練度の低い、駆逐艦ちゃん達である。

ブイに衝突したり、遅かったりしている。

「きゃんっ!」

「まだまだ!! やり直しだ!」

「は、はい!」

衝突した、口級二番艦ちゃんがスタート位置に戻る。

「皆のお手本にならないとっ!」

初海は、ザザーツと音を立てて、ブイをスラロームで駆け抜けて行

く。

そして、ザザーツと転回する

「よし。お前等、初海ねーちゃんのように走るんだ」

『はいっ』

イロハ級の駆逐艦ちゃんズが、何度もブイにぶつかりながら機動航行訓練をする。

その様子を見ながら、龍田が天龍に声を掛ける。

「ねえ、天龍ちゃん？」

「ん？どうした？」

「皆、元々はあのお魚さん擬きじゃない？」

「そうだな」

「やっぱり、人型になって、体の動かし方に慣れてないんじゃないかしら？」

「そうなるか……」

天龍は、暫し考え込むと声を張り上げる。

「お前等！航行訓練中止！陸に上がるぞ！」

『えっ？』

「ロードワークに行くぞ！人型の体の動かし方を慣れてもらおう！」

『はいっ！』

次々に陸に上がると、艀装を収納する一同。

「ロードワーク始めるぞ！車の迷惑にならないように走るからな！声上げろー！」

『おー！』

浜松の海岸線を、走り始める一同。

「いっちにーさんしー！」

『いっちにーさんしー！』

天龍の声に続いて、駆逐艦ちゃんズが続く。

「ごーろくななはちー！」

『ごーろくななはちー！』

「にーにつさんしー！」

『にーにつさんしー！』

「ごーろくななはち！」

『ごーろくななはち！』

「さんにつさんし！」

『さんにつさんし！』

「声上げろ！」

『こえあげろ！』

「足上げろ！」

『あしあげろ！』

「顔上げろ！」

『かおあげろ！』

天龍は怒鳴りながらも、どんどん速度を上げていく。

龍田は、最後尾でへとへとになってる子達に櫂を飛ばす。

「さあ、ここから後ろは首チョンパよく♪死にたい船はどこかしらあ
♪?。」

櫂と言うより、最早脅迫である。

「ひええええっ!!」

落ち零れ掛けている駆逐艦ちゃんズ達は、顔を青くして気合を入れ、再び走り始める。

そんな中、天龍に食らい付いているのは初海である。

「よし、初海、もっと上げるぞ！」

「はいっ！皆、従いて来い！」

『おーっ！』

「皆頑張ったら、そこの先のかき氷屋でかき氷奢ってやる！」

『かきごおり!?!』

駆逐艦ちゃんズは、目をキラキラさせて速度を上げて行く。

「おっ、やればできるじゃねえか？ラストスパート行くぞ！それかき
氷！」

『かつきごおり！』

「かき氷！」

『かつきごおり！』

「あともう少しだぞ！行くぜ！かき氷！」

『かつぎごおり!』

漸くかき氷屋さんの前にやって来ると、天龍は息を整えながら、かき氷屋の親父さんに財布から万札を出して、

「おい、オヤジ。かき氷52人前だ!」

「えっ?」

「えっ、じゃねえよ。早くしろ!」

「は、はいっ!」

かき氷屋さんの地獄が始まった。

順次できて来る、ブルーハワイのかき氷を、ゴール順に配って行く。艦の番号が大きい子達——人型になって日の浅い子達——はヘトヘトになっている。

結局、妹艦達からかき氷を食べさせるように回って行く。

駆逐艦ちゃんズは、

「ちゅめたい——!」

「あまい——!」

「おいしい!!」

等と言いながら、天龍の奢りであるかき氷を頬張っている。

天龍は、一番最後に宇治金時の粒館金時抜きを頼んで頬張る。

「天龍ちゃん、相変わらず粒館苦手なのねえ?」

「うっせえ、粒館なんて滅びちまえばいいんだ」

うっかり名古屋人に言ったら、処刑されそうな問題発言である。

次に、本社埠頭横にある中田島砂丘で、ビーチフラッグス大会が始まる。

これも、体幹の動きをコントロールするのに良いと、龍田の提案で取り入れたのだ。

「よし、優勝者の景品は間宮アイスだ!」

『お——!』

駆逐艦ちゃんズは、ぱつとワンピースを脱いで、スパッツタンクトップ姿になる。

そして、龍田が旗を設置している。

10人に対して、旗は5本。

初海にはハンデとして、天龍の着けている足の錘（10kgずつ）を装着しての参加である。

「よーい！どん！」

天龍の掛け声で、旗に背を向けてうつ伏せになっていた駆逐艦ちゃん達が、バツと起き上がって走って行く。

「やったー！」

「負けたあー！」

優勝者が決まる頃には、皆砂だらけになっている。

結局、ハンデを物ともせず優勝して、アイスを食べている初海は、

「初海おねーちゃん、ずるいー」

と、妹達に文句を言われていたが天龍は、

「負けたオメエラが悪い」

と、ピシヤリと黙らせる。

本社の食堂でお昼を食べてから、今度はまたスラロームの練習である。

天龍の先導で、まず列になってゆっくりスラロームを走って行く。慣れて来たら、だんだんとスラロームの速度を上げて行く。

そんな猛訓練で、一日が終わる。

「よーし、今日の訓練はおしまい。皆、まっすぐ家に帰れよ！」

『ふあーい』

駆逐艦ちゃんズ達は、会社の食堂で夕飯を食べると、公営団地に向かって大移動を始める。

「チビちゃん達、訓練はどう？」

空母棲姫が、コンビニ袋を片手に声を掛ける。

コンビニ袋には、ビールがいっぱい入っている。

「てんりゅーぶちようがちよーきびしかった」

「うん、つかれた」

口々に感想を語ると、空母棲姫がふふつと笑う。

「頑張つて、一人前の警備員になれるようにね？」

『はーい！』

駆逐艦ちゃんズ達は、家に帰り着くとベッドに飛び込んで、そのま

ま寝てしまおう。

天龍教室の訓練は、そこまで疲れるのだ。

初海を除いて。

初海は、摩耶達に従ってビーストハンターもしていた為、基礎はできている。

初海は、夜の海岸線を一人自主練習をしている。

天龍から譲り受けた、足の錘を着けて。

「精が出るね」

丁度本社に帰って来た時に、出て来た最上が声を掛ける。

「はいっ、副社長！ 副社長はお帰りですか？」

「お帰りしたいんだけど、もう少し残業かな？ 休憩で、コンビニでアイスでも食べようかな？ って」

「そうなんですネ。ダンナさんはお家で待つてるんですよね？」

「うん、夕飯作って待つててくれると思う。だから頑張つて、仕事終わらせないとね？」

そんな会話をしている、現在2000。

初海は、途中まで最上と会話を楽しみながら、コンビニの前で別れ、公営団地へと歩いて行く。

家に帰ると、ワンピースを脱いでタンクトップもスパッツも脱ぐと、シャワーを浴びてからタオルを体に巻いて、

そのままベッドに飛び込んで眠る。

そんな毎日を繰り返し、11月に入ろうとしている頃だった。

量産型メカいなづまちゃんから、勝利を勝ち取る子達が現れたのだ。

「よし、口級15番、合格だ！」

「やったあー!!」

「よし、ハ級7番、合格だ！」

「わあい!!」

合格した子達は、警備員見習いとして戦艦棲姫率いる通常訓練の傘下に加わる。

もちろん、海上警備にも同行する。

残ってる子達は、デスペランへのホームシックに陥っている子もいるが、天龍が厳しく、龍田が優しく、アメとムチを使い分け、脱落者は発生させなかった。

何より、初海という駆逐艦ちゃんズの長姉が、人一倍頑張っている姿を見て、

憧れの感情が生まれて、頑張るようになったのだ。

初海は正警備員に昇格しても、自主練習は欠かさず行っている。

そんな姿を見せて、天龍は檄を飛ばす。

「お前等のお姉ちゃんは、今日も頑張ってるのにお前等は降参か!？」
『やりますー!』

今夜も天龍夜間教室は、厳しく激しく行われている。

毎日疲れ果てた駆逐艦ちゃんズは、部屋の神通ママの写真を見ては、明日も頑張ろう、と眠りに就く。

もちろん、教える側も大変である。

夜遅くまで訓練をしてから、天龍は業務統括の仕事があり、龍田は訓練報告書を上げる。

毎日、2200まで会社に残っている。

因みに、三隈・最上・曙は、それ以上に仕事を抱えているし、部下より先に帰らない、のがモットーの為、もっと遅くまで仕事をしている。

更に言うと、経理部の五十鈴は、毎日定時帰宅である。

経理部のモットーは『ノー残業ノーライフ』らしい。

この日も、天龍達が帰っていくのを見計らって、本社社屋を出る旧浜鎮トリオ。

「くまりんこ、お疲れさん」

「ぼ、ぼのちゃん、今日はどこかで外食でも……」

「もがみん、お疲れ。金曜日だから飲みに行こうか?」

居酒屋のカウンター席で飲んでいた五十鈴と天龍龍田姉妹を搔っ攫うと、奥座敷で飲み会が始まる。

『おつかれちゃん』

一斉にビールジョッキを掲げると、ごくごく飲み干す一同。

「天龍さん、訓練はどう？」

「あと三人かな？それで、全員卒業になるぜ」

ビールを一気に飲みながら言うと、三隈はニコつと笑った。

「それ終わったら、第二陣の二十級ちゃん達が50人来るから、頑張つてね？」

「ぶっ!？」

天龍は、ビールを嘔き出しかけた。

そんな天龍に、皆どつと笑う。

「いいじゃない、天龍ちゃん。駆逐艦小さい子の面倒は、私達の役目だったじゃない？」

「そ、そうだな……二級に十級なら、もう少し期待できるかもしれねえからな」

三隈は、そんな皆を見ながらああ、平和が来たんだ、と思いながら、その姿を見せてやれなかった少女恵美への申し訳無さと悔恨を、ビールで流し込んだ。

そして、翌日やって来た新人の少女型深海棲艦の駆逐艦ちゃんズ。

「おーし！お前等。オレが浜松警備保障の業務統括兼訓練部長の天龍だ。こっちは次長の龍田だ！いいか、上司の命令は絶対だ。右に行けと言えば右に行け、左に行けと言えば左に行け、空を飛べと言えば空を飛べ！」

『はいっ！』

「おーし、いい子だ!!」

「頑張りましたようねえ」

二人はにいつと笑って、天龍と龍田の厳しく楽しく激しい訓練が始まる。

それぞれの進路と秋の空

11月も下旬になろうとしていた。

「ええっ、進路変更するの!？」

3年B組の教室。

ギヤルズの望が「フーミン、進路どうするの？」と訊いたことが発端だった。

『金と銀の瞳の竜の物語』が発売されて、扶桑咲花と言う名前は一躍有名になった。

……が、それが草加史絵だと知っている人間は少ない。

クラスで扶桑咲花の話題になっても、興味なさそうに自分も書店で買った『金と銀の瞳の竜の物語』を読んでいる。

「フミえもーん!」

「どうしました?のんちゃん」

放課後、次作である艦娘をモデルにした小説『小さな提督の物語』の構想を考えていると、横澤 望から声を掛けられる。

「先生から『お前はどっこも入れない』って言われちゃった」

「そうなんですわね……今から頑張らないと」

「それな」

「だね」

ギヤルズのもう二人である、奈緒子と櫻子も同意する。

「ところで、フーミンは進学校に通うの?」

「それなんですけどね、進路を変更しようかなって……」

『ええっ、進路変更するの!?!この時期に!?!』

「はい。東京の高菜一佐のご実家に下宿して、都内の高校に越境入学しようかと」

その言葉に、三人は深刻な顔になる。

「圭」はどうすんのよ?」

「それな」

「うん……あれから会ってないんでしょ?」

それを言われると辛い史絵は、机に顔を突っ伏す。

「だって、圭一が会わないっていつてるんですもん……………」

そうぼやくように言うと、三人はうーんと唸りながら、この問題を考え込んでいる。

「抑々、何で高菜一佐に『会わないほうがいい』って言われたんだろ?」

「それな」

「うん」

「それが分かったら、苦労しないですよ」

史絵は、顔を突っ伏したままで大きな溜め息を吐いた。

「……………てな訳なんだけど」

望は、慎をハンバーガーショップに呼び出して、経緯を説明した。「それな、俺も気になって圭一に訊いたんだよ。そしたら『俺の史絵が遠くに行ってしまった感じがしちまって、本当に付き合うべきなのか解らなくなった』って言い出したんだ。ほら、圭一は番長だろ?お前等の事件がきっかけで」

そう言われると、ギャルズ達はかなり申し訳無さそうな顔をする。「まあ、番長になっちまってそのままやってるのは圭一の選択だからいいんだよ。だけど、そういう連中を切って愛を貫くか、それとも、自分と史絵さん…………というより、扶桑先生とは釣り合わないと身を引くべきか、悩んでんだよ」

「それでも、フーミンだって悩んでるんだよ!夢を優先して東京の高校に行くか、圭一を優先して夢を後回しにするか!」

ずいっと身を乗り出して主張する望のおでこを、指で抑えて座らせる。

「分かってる。圭一も分かっている…………と思う。だからそんなにエキサイトしないでやってくれ」

「だって…………」

「このままじゃあ」

「フーミンも圭一も可哀想」

この三人が悲しそうに言うのを見て、約半年前には思いもしなかつ

た事だろうな、と考えながら、慎はフィッシュバーガーを口に運ぶ。「圭一も可哀想なのは俺も理解してる。圭一は最近苛立ってるから、寛太と優花ちゃんに様子を見てもらってるからな」

『うーん……………』

四人は、唸りながら考え込んでしまった。

そんな頃、圭一は岩沼鎮守府にやって来ていた。

出て来た今日の秘書艦の那智によつて、応接室に通される。

圭一が座ると、羽佐間眞一郎と羽佐間紗花がやって来て対面に座り、那智はそこに控えている。

「圭一くん、君がここを訪ねて来るとは珍しいこともあるものだ。本日突然やって来て、面会をしたいという理由を聞かせてもらおう。私も暇ではない身分……………」

そう言い掛けたところで、那智がオツホンと咳払いをする。

執務などしておらず、正妻である紗花と愛を育んでいたのである。

そんな紗花は、もう妊娠九ヶ月目。大きいお腹をニコニコしながら擦っている。

あの岩沼鎮守府騒動から、早半年も経つたのだ。

「まあ、話を聞かせてもらおうか。高菜一佐には聞き辛い話なのだろう?」

「おれ、史絵と別れたほうがいいんすかね?」

『えっ?』

全員が絶句した。紗花は、圭一をよく知っているから余計に驚きである。

「や、藪から棒に何を言い出すんだ?」

「圭ちゃん、何があつたの?」

「まさか…………他に男ができるような子でもあるまいに?」

三人三様の言葉に、ツツコミを入れず圭一は続ける。

「何だか史絵が遠くに行っちまう感じで、おれと釣り合わないんじやねえか? つて考えるようになったんすよ」

その言葉で、長い話になりそうな予感がした那智は、コーヒーを淹れに一旦席を外した。

眞一郎は、その話に笑みを湛えて目を伏せて、しみじみと語り出した。

「ふふつ、いやあ失礼。私も青春時代を思い出してね。君と同じこともあったものさ、付き合っていた彼女と別れるか別れまいか悩んだ時があつてねえ？」

その瞬間、紗花の目からハイライトが消えた。

「眞一郎、その女は今どこに居ます？バラバラに切り刻んで海に流しますが？」

「紗花さん、いくら何でもそれは……」

圭一が宥めようとした時、眞一郎は、

「この世のどこにも、もう居ないさ」

そうポツリと呟いてから、那智が戻って来てコーヒーを配り始めたところで語り出した。

「私の時分は、まだ自衛隊に対する偏見もあつた時代だ。私が防衛大学校を志したのは、お前さん達も周知のことだろうと思う。当時付き合っていた彼女、雪絵の両親は政治思想的に左派の家庭で、自衛官を志すやつと付き合うなんて言語道断だ、と言われた。電話はもちろん取り次いではくれないし。今のようにネットもない時分だからなあ」

そう懐かしそうに語ると、紗花の目のハイライトは戻り、再びお腹を擦り始める。

「私は父が自衛官だった、それで憧れもあつたんだろう。どうしても防衛大学校に行きたかつた。雪絵とも別れたくなかつた。それこそ、今の圭一君のように悩んで悩んで悩み抜いたさ。そこで私は、雪絵を誘拐同然で連れて行く計画を立てた。東京には親戚も居たからな。しかし、事前にそれが露見してしまった。それからは、雪絵は家を出ることも許されなくなつた」

眞一郎は寂しそうに、秋から冬に変わる夕暮れの空を窓から眺めた。

「こんな秋の空だった。全てに絶望した雪絵が、首を吊つたと知らさ

れたのは……………」

全員が絶句した。

「私が殺したようなものだ。今でもそう思っている」

「眞一郎、そんなことはないです。雪絵さんは自殺して……………」

「紗花……………」

その言葉に口を挟んだ紗花を、那智が首を振って諫める。

「私が殺した。それは紛れもない事実だ。私のせいで死を選ばせてしまった。別れていれば或いは死ななかつたかもしれない。もつとい男と結婚できていたかもしれないのになあ……………」

「眞一郎。それが原点だったのだな？」

那智の言葉に、眞一郎は頷きながら口を開いた。

「雪絵の葬式は酷いものになってしまったよ。私は雪絵の父と殴り合い、塩を撒かれて追い出された。雪絵の母からは『二度と来ないで、墓参りも結構』そう言われて以来、お線香も上げられずにいた。そして私は防衛大学校に入った。空虚な気持ちで。女遊びを始めたのもこの頃だな」

「……………」

圭一は、そこまで重い話になるとは思ってもみなかった。

それでも、眞一郎は語りたかつたのだろう、自分の前で。そう思い、黙って聞いていた。

「それじゃ、雪絵さんがあんまりです……………」

紗花がボロボロ泣き始めるのを、那智が紗花の背中を擦る。

「そうだな。でも眞一郎も充分に傷ついた。だからこそ、私達が眞一郎の愛を埋めなくてはならない。七人で……………」

「はい……………」

「それでだ、余計な話をしてしまったが、君はどう悩んでいるのかね？」

「もちろん史絵と一緒にいたいのは間違いないっす。だけど、俺は番長として付き合っている連中を切って愛を貫くか、身を引いて扶桑咲花先生の邪魔にならないところで史絵の幸せを祈るべきか……………」

不良中学生の真面目な、真面目な吐露に、三人は一斉に考え込んで

しまった。

「それで、恋愛の名人である羽佐間さんなら、何かいいアドバイスを貰えるんじゃないか?」思つて来たんすよ」

「申し訳ないが、私も月並みなことしか言えないよ。『いかに二人が後悔しない生き方をするか』私としては、私と雪絵、それに雪絵のご両親のように、後悔を背負つた生き方を君にはして欲しくないなあ?」
「後悔をしない生き方……つすか……?」

真顔で答える眞一郎に、圭一はコーヒーに視線を落として呟く。

「そう。後悔をしたところで、過去をやり直せる訳ではない。私は艦娘達や紗花のおかげで幸せになったが、それでも今も悔やんでいる」
「……………眞一郎。それが前線に出る理由か?」
「……………」

那智の鋭い言葉に、眞一郎は否定も肯定もしなかった。

「肯定と看做すぞ。今後、前線に出るのはやめていただきたい。これは嫁達の総意だ」

「……………わかった。それよりも圭一の相談だ」

「そうだったな。申し訳ない、圭一くん」

頭を下げる那智に圭一は、

「いえ、大丈夫つす。でも俺は、どうしたらいいんすか?」

「お前さんはどうしたいんだね?」

「史絵と付き合いたいです。史絵の処女を貰つたのも、童貞をあげた責任も無くはないつすけど。史絵と付き合いたいつす」

「ならば不良たちとの付き合いをやめるか?」

「それで、そいつらと険悪になるのも本意じゃねつす」

「そうだよな」

二人して、大きな溜め息を吐いた。

「急に押し掛けて、すみませんでした」

「いや、私もあまり役に立てずに申し訳ない」

圭一は、悩みを解決できないまま、岩沼鎮守府を後にした。

その頃史絵は、自宅で夏海とインターネットビデオ通話をしてい

た。

『こんばんは、史絵さん。新作読みましたよ、さすがは新進気鋭の作家先生』

パソコンのモニタには、ヘッドセットを付けた夏海が映し出されている。

「いえいえ、誂わないでください」

史絵が、顔を赤らめて手をブンブンさせると、夏海は笑みを浮かべる。

『ところで、どうされました？』

「私と、圭一。別れた方がいいんでしょうか？」

『えっ？』

画面の中の夏海が絶句する。

『先輩、何があったんですか？』

「実は、圭一が悩んでるんです。私と付き合うか、別れるか……私の作家の夢の障害になるかもしれない、と」

『ふむ……私の彼女の一人は、私に365回も告白しましたよ？』

「結有先輩ですよね？」

『そうです』

「それと私、進路を変えようと思ってるんです。夏向先生の下で、小説を教わりながら学校に行つて、文芸を極めたいんです」

『そうなるよ、遠距離恋愛になる……か』

「はい……………」

二人共、深刻な顔になる。

ひょいっと、結有が顔を出す。

『要するに、夢を優先したいか、愛を優先したいか、だよな？』

「結有先輩……そうなんです」

『僕は愛を優先したけど、史絵ちゃんには才能があるもんね？』

「才能なんて……………」

謙遜している史絵だったが、結有は、

『書き上げて夏向先生に認められたことを、才能と言わずして何なのやっ。』

「……………そうだったとしても、私は夢を選ぶか、圭一を選ぶか……………」

『そこが間違いなんだよ。両方選んじやいなよ。東京に、うちの学校の系列の中高一貫校があつてね。その編入試験受けて、一緒に東京行つちやいなよ?』

そんな提案をし出す結有を、夏海が諫める。

『結有、抑々圭一のご両親がいい、と言う保証もないですし、受かる保証もないんですよ?』

『まあそうなんだけど……………』

二人で言い合っている画面を見ながら、史絵は軽く笑って、

「ありがとうございます。充分参考になりました」

『そ、そうですか?すみません。ですけど、後悔だけはしないでくださいね?』

真面目な顔で言う夏海に、史絵は頷いた。

インターネット通話を切ると、史絵はドサツとベッドに倒れ込んだ。

「圭一……………私どうしたらいいの……………?」

二人の苦悩はまだ続く……

タイラントハンティングく作戦準備編く

11月も、下旬に差し掛かった頃のことだった。

「大村二佐、いい加減に戻ってください」

「ふえ？」

東北地区警務隊長となった、幸田美紅二佐が解毒剤を持って気仙沼に殴り込んだのは……

「もういい加減、大人の身体に戻ったらどうですか？」

「うん、そうだねえ」

ごくごくくと、紫色の液体の入った瓶を一气飲みするロリ奈々海。

明石謹製の解毒剤を飲んでも、効果がない。

「あれ？戻らない」

「えっ？明石から、減給処分の打ち切りの嘆願書を書く代わりにもらった解毒剤なのに……明石め……騙したな……」

美紅は、肩をワナワナ震わせて、明石に電話を掛けた。

『はい、こちら硫黄島科学要塞研究所です』

「明石！大村二佐の身体が、解毒剤飲んでも戻らないんだけど！」

『ああ。きつと、ロリ化が固着して解毒剤以前の問題になってますね。もう肉体が、完全に子供化してます』

「えっ？……ええええええ？ちよつと待つてください」

美紅は愕然とした。そして、はっと思い出したように奈々海に、

「大村二佐、生理来てます？」

「七歳の身体で、来る訳無いじゃん」

「ですよー!？」

だめだこりや、と思いながら直ぐに電話を耳に当てて、明石との通話を再開する。

「やっぱりそのようです。どうすれば元に戻るんですか？」

『普通に年月を費やせば、大人になるでしょう』

「いやいやいや、そう言うのはダメです。一発で治す方法、教えてください
やん」

『そうですねえ。 グリズリー G クラスの霊子結晶を与えたら、一歳位加速する

んじゃないでしょうか?」

「30個要るじゃないですか! DSグリズリーを30匹も狩るんですか!」

『もう一つあることはあるんですが……』

「何でも良いから、教えてください」

『DSタイラントレグレクスの肝臓を煎じて飲めば……強力な解毒復元作用で、戻ると思いますが』

「……」

DSタイラントレグレクスとは、DSビーストの最上位に君臨する、暴君の名を持つ巨大恐竜のことである。

恐竜が絶滅した時の負のエネルギーが深海に溜まって、極稀に出現する強力なビーストである。

これを狩り取った艦娘や深海棲艦は、『タイラントキラー』と呼ばれ、最上位の栄光を以て讃えられるほどで、討伐例は一件もない。

不知火は、その際に轟沈してしまったほどで、それ以降艦装のない生活を余儀なくされているくらいである。

その際の出現では、北海道管区の艦娘が総動員で、北極海へ押し返す事に成功した。

偶々いた深海棲艦達も、DSタイラントレグレクスに立ち向かった、と言う噂もあるのだ。

裏を返せば、今も北極海の何処かで暴れているのである。

DSグリズリーもかなりの強さを持っており、30体狩るのは一苦労である。

そこで美紅は、一計を案じた。

警務隊の『緊急命令権』を使用して、宮城県の全提督と艦娘を緊急招集したのだ。

「と言う訳で、DSタイラントレグレクスを狩ります」

「おいおい。急に集めておいて、何を言い出すんだね?」

羽佐間真一郎准将補が、その宣言に異議を挟む。

「あのですね、ロリ大村二佐が警務隊長会議で問題になりました。自衛官でもない、中学生の夏海さんが実質的に艦隊の指揮をしているこ

とがバレまして、足立秋也一佐から『ぼつか、お前何を見てるんだ!』と糾弾されました。七原将補から、すぐに戻すように命令されまして、明石に解毒薬を作ってもらって飲ませたんですが……」

眞一郎から目を逸らしながら説明すると、

「効き目無かったんだよね?」

と、奈々海が付け加える。

「全く、傍迷惑な話だな」

「本当だ」

「うむ」

直哉に桐山、それに武藤二佐が続く。

「グリズリー30体を狩るか、タイラントレギレックスの肝臓を収集するか。後者なら、タイラント級の霊子結晶はかなりの数のケツコンカッコカリリングを作れますから……全員一階級昇進は間違いないと思います」

『……………』

そう。今は、戦時中ではない為、昇進の条件がかなりきつくなったのだ。

ジレーネ戦で活躍した、直哉以外は全員二佐なのだ。美紅を含めて。

最近、煩雑だった艦娘の階級制度が撤廃されて、給与の見直しが行われた。

唯一階級を保持している艦娘は、大和や旧土佐鎮守府艦娘の『司令官兼任艦娘』のみとされた。

そして艦娘の給与は、司令官の給与に連動されることになったのだ。

つまり司令官が昇進する、と言うことは、艦娘の給料も上がるのだ。それに加えて、艦娘検定と言う資格が新設された。

検定は三級から特級まであり、艦娘の練度によって給料が上乘せされる制度なのだ。

特級の条件の一つに『タイラントレギレックス級のDSビーストの討伐』と言うものが有り、艦娘にとっても悪い取引ではないのだ。

現在、薄雲と南三陸長門・夕立・木曾トリオがDSグリズリーの討伐で一級。残りの宮城艦娘が、全員二級を取得している。

タイラントレグレクス級を討伐出来たなら、全員特級で司令官の階級も上がり、お給料もウハウハなのだ。

「しかし、ワシは心配じゃ」

武藤二佐は、不知火の一件を知っており、艦娘達の身を案じている。

「正直私も、給料が上がるうとも、今の給料で困ってないからな。別にカネには困ってない」

直哉も、あまり乗り気ではない。

「私は、神通と新しく家を建てるのにローンを組んでしまったから、できれば給料のベースは上げておきたい」

そう言い出したのは、桐山二佐である。

女川鎮守府の横に、マイホームを建築中なのだ。

「幸田二佐の言い分も分る。チマチマ30体、DSグリズリーを狩るよりも、大物を仕留めた方が武人の誉れではあるな」

眞一郎が、顎に手をやりながら艦娘達を見回した。

「…………艦娘達は全員、目が？マークになってるようで、目をキラキラさせている。」

『特級検定ゲットです！』

美紅は内心、ちよろいぜ、と思いつつ、眞一郎に顔を向けた。

「と言う訳で、私も指揮艦で出ます。DSタイラントレグレクスをハンティングしましょう！」

「そう言う幸田二佐も、昇進が掛かってるのではないかね？」
「うっ」

「そうかそうか。他の警務隊長は、全員一佐だものなあ？」

眞一郎がニヤニヤし始める。

美紅は、がっくり項垂れて両手を上げる。

「それどころか、降格が掛かってるんです。七原将補から、今月11月が終わるまでに戻さなければ、連帯責任で三佐に降格し、警務隊長を更迭する、とお達しが出まして…………もちろん、大村二佐も降格して、司令官職の更迭になって…………」

「まじで!？」

奈々海が、ぎよつとしてから両手を上げて、ぴよんぴよん飛び跳ねる。

「降格はともかく、更迭は嫌だ！皆助けて！」

「分かった分かった」

「仕方がないのう」

後輩の、涙目での懇願に、直哉も武藤も大きな溜め息を吐いて同意した。

「と言う訳で何でもしますので、人助けと思って協力してください！」
美紅も、大きな溜め息を吐きながら懇願する。

仙台駐屯地の会議室を借り切つて、作戦会議が始まる。

「と言う訳で、皆さんの活発な意見をお願いします」

司会進行役の美紅が、DSタイラントレグレクスのデータを、稚内鎮守府から取り寄せて全員に配布する。

全長10Mの、二本足歩行の恐竜で、尻尾による薙ぎ払いや両手の爪による攻撃、それに強力な牙による攻撃で、

それこそ、北海道エリアに侵攻して来た時には、二桁の艦娘と深海棲艦の犠牲を払ったのである。

ジレーネ戦争勃発前に、DSタイラントレグレクスに関してのみ、熊崎提督が秘密裏に手を組んだのである。

何とか、北極海に押し戻して以降は北極点近くにおいて、他のDSビーストや無謀にも手を出すハンターを食べながら生息しているらしい。

「やはり、メカいなづまちゃん事件同様、アイキ8キャン0フcmライ三砲連が決め手のように思える」

そう眞一郎が口にするると、全員が頷いた。

「予め言っておくが、眞一郎は絶対前線に出ないでもらいたい」

那智が、釘を刺すのを忘れない。

眞一郎も、

「流石に、化物相手に戦死したくないので、大人しく指揮艦に乗り込む

や」

と、両手を上げながら答える。

「駆逐艦隊がしつぽを避けつつ牽制して、航空隊が爆撃をして惑わせている間に、戦艦と重巡隊で両腕を破壊してから、腕で頭を防御できなくなったところで、アイキャンフライ砲を頭に放つ、と言うのはどうでしょう?」

今回ばかりは、夏海に頼れない奈々海は、真面目に作戦を立てる。最早必死である。

「それで行こう」

「そうじゃな」

桐山と武藤も、その作戦案に頷く。

「アイキャンフライ砲に頼るのも、あまり健全な作戦じゃないが、まあ仕方ないだろうねえ」

直哉も、そう言いつつも対案を出さなかった為、その作戦案をベースに決定した。

「さあ、皆さん出陣です！狩りに出掛けましょう!!」

『おー!』

美紅の号令で、全員が立ち上がる。

こうして、後に伝説となるDSタイラントレグレスハンティングが始まるのだった。

ボリツバリツ

その頃、DSタイラントレグレスは、北極点近くで無謀にも数人のパーティでハンティングしに来た艦娘と深海棲艦を、食べ終えたところだった。

「グルルルルルルルル………」

満足したDSタイラントレグレスは、再び眠りに就いた。

タイラントハンティングく作戦実行編く

五鎮守府の艦娘連合艦隊、総勢25名は次々と、宮戸島鎮守府を出港して行った。

宮戸島鎮守府でほとんど使うことのない指揮艦には、直哉と桐山と眞一郎、それに美紅が乗り込んだ。

武藤は、南三陸鎮守府に戻って、皆の帰りをご馳走を作って待つことにした。

ロリ奈々海も、危ないと言うことで、武藤と一緒に留守番である。「行ってらっしゃい！皆頼んだよ〜！」

「無事帰ってくるんじゃないよ〜！」

奈々海と武藤の見送りの言葉に、艦娘達も全員意気揚々と、『行ってきま〜す！』

と、声を上げる。

途中、デスペランに寄港して、補給と食事を摂る。

デスペランには、熊崎提督経由で直哉が話を付けてくれたのだ。

「まあ、宮城の皆さん総出で、どうなさったんですか？」

深海提督が、ニコニコと笑顔を浮かべながらお出迎えしてくれる。

「いやあ、ちよつとDSタイラントレグレクスを狩ろうと思ってるね？」

直哉の言葉に、居住ルームでだらけていた摩耶と多摩と深海提督の顔色が、さつと変わる。

「アレを狩るのか!?悪いことは言わないから、よししたほうが」

「そうだなや。あれはやばいにや」

「そうです。悪いことは言いませんから……」

その言葉に眞一郎が、

「ところが、そういう訳には行かなくてな。自業自得とは言え、大村二佐が子供化から戻れなくなってしまうって、DSタイラントレグレクスの肝臓が必要なのだ」

と説明すると、美紅も必死に懇願する。

「お願いです！デスペランからも戦力を出してください！」

その必死さ具合に、三人は顔を見合わせると、頷き合った。

「そんなに必死なら、手伝ってやるぜ」

「多摩も出るニヤ」

「私も戦場に出ましよう。軽巡棲姫、改ヲ級、従いて来なさい」

「はい」

「分かりました」

総勢29人の艦娘・深海棲艦達は、巨大な輪形陣を作って北極海に向かって行った。

フリーのハンター達が、驚くような大行列である。

北極海に差し掛かった時に、

バリツボリツ

大きな音が響いた。

駆逐艦の艦娘が、10mほどの恐竜に食べられている音である。

「あいつだー!」

摩耶が指差すと、駆逐艦の艦娘が巨大な牙に咀嚼されて、断末魔の叫びも上げること無く飲み込まれて行くのを見るしか無かった。

「グルルルルルルルル!!」

ギロリと艦娘の集団を睨むと、物凄い勢いで近づいて来た。

「避けるー!腹を空かせてるぞ!!」

摩耶の指示で、艦娘達は左右に分かれる。

その後ろの指揮艦から、直哉が無線で指示を出す。

「駆逐艦隊、あの速度を振り切れるか!」

「大丈夫なのです!」

代表して電が答える。

「よし、駆逐艦隊は目標に追い掛けられながら逃げ捲れ。済まないが、エサになってくれ」

「分かったぴよん」

「了解です」

「わかったよ!」

「素敵な逃走パーティしましよー!」

「皆、やるのです!」

卯月、薄雲、子曰、夕立、電の駆逐艦クインテットが、直哉の指示

通りにDSタイラントレグレクスを惹き付けて、逃げ回る。

DSタイラントレグレクスは、とにかく美味しそうな駆逐艦を捕食しようとして、必死で追い続けるが、速力は駆逐艦隊が上である。

「木曾、多摩、摩耶、援護してやれ。後ろから追い掛けて魚雷を叩き込め！文字通り、尻尾に火を点けてやれ!!」

「あいよっ！」

「了解だにゃ！」

「わかったぜ！」

追撃戦の得意な桐山が、木曾達に命令を下す。

木曾達が、逃げ回る駆逐隊を追い掛けるDSタイラントレグレクスの後ろに回って、魚雷を叩き込む為に接近する。

その瞬間、ギロツとDSタイラントレグレクスが木曾達を睨んだ。ブウンつと、尻尾の薙ぎ払いが木曾達を襲う。

その瞬間、振り向いた電達が尻尾を狙い撃ちにする。

「グオオオッ!!」

尻尾の先が千切れ飛ぶと、返り血が木曾達に降り注ぐが、そのまま三人で魚雷を叩き込むと、尻尾が根元から千切れ飛んだ。

再び、小癩な駆逐隊を追い掛けにDSタイラントレグレクスが走って行くと、返り血を浴びた三人は腰を抜かした。

『し、死ぬかと思ったあ……………』

「す、すまん！」

艦娘達を危険に晒した桐山は、謝罪を口にする。

すぐさま、深海提督・軽巡棲姫が、戦意を失ってしまった三人の艦娘を回収に向かう。

「次のターゲットは両腕だ。戦艦・重巡部隊整列！」

眞一郎が金剛四姉妹に陸奥、妙高四姉妹、扶桑に山城、それに三笠に武蔵を整列させる。

その判断が、間違っていた。

もっと美味しそうな、戦艦・重巡に向かって突進し始めたのだ。

「ああっ！従って来ないのです！」

駆逐隊が追い続ける中、戦艦・重巡部隊は主砲を乱射し始める。

先頭の妙高に噛り付こうと、襲い掛かる。

「きゃああっ!?」

「危ない!」

ガキンツ!!

武蔵が、大きな口に飛び込んで、口につつかえ棒のようになって、閉じないように支える。

強力な顎の力で、武蔵の膝がどんどん曲がって行こうとしている。

「撃てえええっ!」

至近距離からの、戦艦の主砲乱射である。

DSタイラントレグレクスは、両腕を上げて防御する。

その間に、武蔵は再び腹の底から力を入れて、無理やりに口を押し開く。

「ガアアアアア!!」

顔面を防御した片腕が千切れ飛んで、首をブンブン振り回す。

「うわああああっ!」

「オウ!シイツト!」

『きゃああああ!』

遠心力で吹き飛ばされた武蔵が、金剛四姉妹に向かって飛んで来て、ボウリングのピンのように吹き飛ばして行く。

金剛達は、艦装に大ダメージを受けて、戦闘不能に追い込まれた。

武蔵もまた、艦装に大ダメージを受けて、海に浮かんでいる。

電達が、後ろから魚雷を乱射して再び惹き付けると、妙高達は足に力が入らなくなる。

それほどもでの恐怖を味わったのだ。

「お前達、よくやった。残った戦艦・重巡は、薄雲と合流だ」

「は……………はい……………」

妙高が、身体の奥底からの恐怖で体を震わせながら、駆逐隊から抜け出した薄雲と合流する。

戦艦や重巡の艦娘達が、恐怖で慄いてるくらいだから、追い回されてる駆逐隊は、もっと怖いのだ。

齧られたら、即死なのだ。

練度の低い子日は途中で脱落し、電が横に蹴飛ばして深海提督が回収する。

回収された子日はぼろぼろ泣いて、失禁するくらい怖いのである。トリオになった駆逐隊は、必死で逃げ回っている。

燃料も半分を切つて、そろそろデンジャーゾーンに入りつつある。妙高四姉妹に山城・扶桑・三笠が、フォーメーションを組んで錨を下ろす。

そこに薄雲が収まって、アイキャンフライ砲こと、80cm三連装砲を構える。

「航空隊、発進して爆撃を加えてください！急いで！」

深海提督の指示に、大鳳と加賀、翔鶴と瑞鶴、それに改ヲ級が順次爆撃機を発進させる。

空からの攻撃にも、頭を振って艦載機と撃ち落とさんと、大暴れする。

それでも爆撃を食らって、藻掻き苦しむように、身体を振らせる。動きが止まった。

「アイキャンフライ砲発射！」

美紅の号令で、80cm三連装砲が大轟音を発しながら、火を噴いた。ズガアン！

DSタイラントレグレクスの顔面に、一発クリーンヒットするも、下顎が吹き飛ばされた状態でまだ生きており、薄雲を睨み付ける。

「嘘……………ああ、ここで終わるのね……………不幸だわ」

山城が嘆くも、薄雲が急いで再装填する。

「薄雲、避ける!!」

三笠が薄雲を外に放り投げると、三笠達はボウリングのピンのように吹き飛ばされる。

『きやああああっ!!』

「やります……………皆さん、さようなら」

薄雲はそのまま着地すると、支えのない状態で、後ろから二発目のアイキャンフライ砲を放った。

ズガアン!!!

DSタイラントレグレクスの、後頭部に直撃した炸裂弾は頭を吹き飛ばし、今度こそこの伝説の海獣の生命を断ち切った。

薄雲の姿は、何処にもなかった。

『薄雲おおおお!!!』

艦娘達の叫びが北極海に響き渡った。

「全く、死ぬところでした」

薄雲は生きていた。お守りに着けていたパラシュートで、ゆっくり降下したのだ。

電達駆逐隊は、疲れ切って海に座り込んでおり、戦艦・重巡は大怪我を負って浮き輪を付けられ、指揮艦で曳航されている。

薄雲は、二発目の反動で艀装が故障しており、同じく浮き輪を付けて曳航されている。軽巡棲姫がパラシュートを発見しなければ、そのまま着水して沈没していただろう。

無傷の空母隊が、肝臓と巨大な霊子の結晶を取り出している。肉も切り取って、積み込めれるだけ積み込んでいる。

「いやあ、とんでもない戦いだったねえ」

深海提督がデスペランを呼び寄せて、次々と収容される。

轟沈は無かったものの、艦娘達は口々にこう言った。

『もうビーストハンティングなんて二度とゴメンだ!』

摩耶も多摩も、叫びはしなかったものの、

「もう一体出て来たら、嫌だよなあ」

と、引き攣った笑いを浮かべていた。

電が、大急ぎで南三陸鎮守府に戻って、DSタイラントレグレクスの肝臓を武藤二佐に渡した。

それを武藤二佐が、明石の指示通りに煎じて、そのエキスを奈々海に飲ませた。

奈々海の姿はどんどん大きくなって、服を破って元の大人の姿に戻った。

「わ!?!」

「武藤提督は、見ちゃ駄目なのです!」

「おっとお、そりやそうなるわね」

「母さん、服です。早く着てください」

素っ裸の奈々海は、慌てて目を逸らす武藤二佐を見ながら、笑っていた。

そんな中、冷静な夏海が服一式を渡し、奈々海はその場で身に着けた。

修繕を終えて、宮城連合艦隊が大漁旗を掲げて戻って来たのは、日も落ちた夕方の事だった。

すぐ大本営に、DSタイラントレグレクスの討伐を報告した。

大本営幕僚総監の足立は、

「何て無茶なことをしたんだ!?!君達は」

と、叱責の言葉という形で、その偉業を讃えた。

こうして、宮城県所属の全艦娘に艦娘検定特級が授与され、

眞一郎は准将に、直哉は准将補に、そして美紅を含めた二佐は一佐に昇進した。

「ところで、幸田一佐。何でもする、と言ったよね?」

直哉が、意地悪そうな笑みを浮かべる。

「うっ、言いました……………」

そう。査察する側とされる側の力関係が、逆転した瞬間だった。

当分の間は、宮城県の各鎮守府の自由裁量は、一佐に昇進した美紅の手により守られることになった。

もちろん大本営から、正式に夏海の艦隊指揮は禁止された。

奈々海は、今日も娘の代わりに艦隊の指揮を執る。

夏海は、行ってらっしゃいとお帰りなさいを言うだけに戻ったが、満足していた。

母が更迭されると、愛する艦娘達と別れるかもしれないなかつたのだ。

そうさせない為に頑張ってくれた艦娘達に、感謝の気持ちを持ちながら、学業に専念することになる。

ただ時折、母の指揮艦に同乗して参謀の真似事をしているのは、幸

田美紅一佐と夏海達だけの内緒である。

「やれやれ、大騒動だったなあ」

「なのです」

「もう二度とごめんだぴよん」

「おしっこ漏らしちゃったよお……」

今日も、宮戸島鎮守府の面々は呑気なものである。
そんな中、熊崎提督が東北にやって来る。

圭一の苦悩

圭一は苦悩していた。

番長を辞めるべきか、自分とは釣り合わなくなってしまった史絵と別れて、遠いところで幸せを願うべきか。

圭一は、女川鎮守府にやって来ていた。

桐山が応対に出た。

「おお、どうした？君は、高菜のところの原くんではないか？」

「すんません、突然。ちよつとご相談したいことがあります……」

「そんな深刻な顔をしてどうした？神通！神通や！」

声を掛けると、漸くデスペランでの教育係を一段落させて、女川に帰って来た神通がやって来た。

デスペラン
あちらでは、神通の妹分である軽巡棲姫が、あとを引き継いで教育係になっている。

「どうされました、崇？あら、圭一さん？」

「相談があるらしいんだ。応接室を使うから、コーヒーを用意してくれ」

「はい」

「原くん、こつちで話をしよう」

「うっす」

圭一はコーヒーを出されて、対面に桐山が神通と座ったところで切り出した。

「俺と史絵がお付き合ひしてることは、知ってると思うっすけど」

「うむ、聞いておる」

「はい」

「俺達、別れた方がいいんすかね？」

『えっ？』

その吐露に、二人は言葉を失った。

「待ち給え、どういふことかね？」

「史絵が、作家としてブレイクしたことは知ってるっすよね？俺でい

いのか？俺よりもっと釣り合った人間がいるんじゃないか？と思うんすよ」

桐山は、腕を組んで考えてから口を開いた。

「……………原くん、私の私見を言わせてもらってもいいかね？」

「うつつ」

真つ直ぐ見ると、少し躊躇いがちに続けた。

「……………私は、別れない方がいいと思う。私なんぞを見てみる。プライドが高く、艦隊運用は後輩達の足元にも及ばない、それでいて負けず嫌いで、よく神通を困らせる。神通は、私にとってはもったいないくらいの女房だ。それでも別れていないのは、偏に神通を愛しているからだ」

「崇……………」

「原くん。苦悩している、と言うことは、それほどその史絵さんを愛しているのだろう？」

「うつつ」

桐山は、真面目な顔で語った。

「だが、君は私一人の意見に流されるほど、軽い人間ではない筈だ。いろんな人のアドバイスを聞いて、それで自分の頭で考えて決めなさい。年長者として、言えるのはそれだけかな？」

「……………」

黙っている神通が、少し微笑みを浮かべて続ける。

「本当に、崇はどうしようもない男です。すぐキレル、人のせいにする、男として器はお世辞にも大きいとは言えません。でも、そんな崇がたまらなく好きなんです。私も家出を繰り返す不器用な女です。それでも離れて判ったことは、『離婚しないで良かった』と、言うことです。離婚していたら、きつと後悔して再婚していたでしょう。そして、離婚と復縁を繰り返すような夫婦になっていたかもしれませぬ」

「……………」

「すまんね、あまり参考にならなくて」

「うちはやっぱり特殊なんですよ。武藤提督のところなら、もっと気の利いたアドバイスをしてくれるんじゃないでしょうか？」

「二人は、どういう経緯で結婚されたんですかね？」

「うむ……何と云っていいかな？」

「私からお願ひしました。崇のような人は、私が結婚しなくては誰も結婚しないだろう、って」

「神通……」

桐山が苦笑いを浮かべる。

そんな桐山を、ちらりと横目で見て涼し気に言葉を続ける神通。

「うちは、嫁艦一人にそうでない艦娘の組み合わせの鎮守府です。他の艦娘は、あくまでも提督と部下。私は僚友、と言った関係です。そういう意味では、『夫婦で鎮守府を運営している』と、言うことになりますか？私が、デスペランの教育を一段落させて帰って来ましたから」

「私は提督としての戦術能力は神通に劣る。神通はハーフエン提督のもとで勉強して来たからな。それでも私は別れていないだろうか？」
「うつつ」

圭一が答えると、桐山は優しい顔になる。

「私は、その時決めたんだ。私のやるべきことは、艦娘達が働き易い職場を作ることだ、と。変なプライドを捨てて、今まで迷惑を掛けて来てもそれでも付き従ってくれた艦娘達の為に何ができるか？この、神通のいない期間で学んだよ」

その言葉に、圭一はコーヒーに視線を落として少し考えてから、顔を上げる。

「男が女を支えるのも有りだ、と言うことつすかね？」

「うむ。武藤さんのように、『行ってらっしゃい。お帰りなさい』を言うだけの提督もいる、と言うことだ。そして、武藤さんは家事を全部やっている。主夫とも言えるな。それを喜んでやっている。私は、家事は苦手だから神通に任せてしまっているが……」
「むう」

唸る圭一に、桐山は諭すように続ける。

「原くん。釣り合ってるか釣り合っていないか、そんなことは二人で決めるものだ。そうは言っても、史絵さんには話し辛いだろうか？」

「うつす」

「だったら、他の提督達にも意見を聞いてみるといい。特に、女性でもある大村母娘の意見は、聞いておいた方がいい」

「すんません。貴重な時間を、ありがとうございました」

圭一が去って行くのを見送ると桐山は、

「彼もまた不器用な男だ、と言うことだな？」

「ですね」

圭一の姿が見えなくなるまで、見送っていた。

圭一が次に訪れたのは、南三陸鎮守府の武藤レストランだった。

今日は偶々定休日で、ガラーンとしているお店のカウンターに案内された。

「圭一くん、どうしたんじやね？」

「実は……………」

圭一は、事の経緯を武藤に話した。

「別れて、遠くから見守る。それも一つの選択肢じゃろうなあ」

「やっぱりそうっすかね？」

「うむ。圭一くんには圭一くんの譲れない部分もある訳じゃ。それを貫いて愛する者の幸せを願うのも、一つの生き方じゃ。二人共まだ若い、もっと幸せな相手に巡り会えるかもしれないのう」

武藤は、事前に桐山から連絡を受けていたので、敢えて違うアップローチから意見を述べた。

「でも後悔して、それがずっと残ってるようでは、本当の幸せと言えるのか？ワシにも判らんよ」

「……………」

「桐山くんからも話を聞いたが、私達はアドバイスしか出来んからのう」

「いや、そのアドバイスが欲しいんすよ。どうするか俺が考える為の」
「別れるにせよ、別れないにせよ、史絵ちゃんと話し合わなくてはな。史絵ちゃんも、きつと悩んでいるに違いない。夢を優先するか。圭一くんとの愛を優先するか」

その言葉に、圭一はガタツと立ち上がった。

「そんなの、俺は史絵には夢を優先してもらいたいんだよ！」

「わかった、わかったから落ち着きなさい」

エキサイトする圭一を宥めると、圭一はさすがに椅子に座る。

「すみません」

「こりや重症じやのう。ちよつと待ってなさい」

武藤は、電話で奈々海を呼び出した。

奈々海と夏海親子がやって来たのは、それから数十分後だった。

武藤は、圭一を落ち着かせる為に、美味しいパンケーキをこちそうしていた。

カランカラン

扉が開くと、大人に戻った奈々海と夏海が入って来る。

「よつす、話は聞いてるよ。圭一とフーミンで悩んでるんだって？
なっちゃんからも聞いてたし」

「私は、史絵さんからも相談を受けていますし」

相変わらずの、脳天気な態度の奈々海に、真面目一徹な夏海。

相談場所をテーブル席に移して、改めて圭一が口を開いた。

「おれ、分かんなくなっちゃったんすよ。本当に史絵を愛して行けるのか」

「こりやこりや。また重症だねえ」

「母さん、もつと真面目にしてください。二人共、本気で悩んでるんですよ？」

軽い態度で答える母親を、諫める夏海。

「参考になるか判ないけどさ、あたしとダンナ遠く離れてるじゃない？最初は、結婚してドバイに転勤になった時に、辞めるつもりだった訳、自衛隊」

「そうなんすか？」

「妻としてはトーンゼンでしょ。そう言ったら、旦那に叱られたの。『才能も資質もあるのに、それを捨ててどうする!？』ってね。それで単身赴任になって、あたしは提督を続けてる訳。

だからねえ、夫婦ってのは支え合いなんだよ。お互い支えるのが夫

婦。それが出来ないなら別れたほうがいいし、それをする覚悟があるなら別れちゃいけない。それに、遠距離恋愛の覚悟も要るかもしれないね?」

「えっ?」

その言葉に、今度は圭一が言葉を失った。

「史絵ちゃんね、高菜先輩のお父さんの下に下宿して、東京の学校で文芸を極めることも考えてるみたいなんだ。知らなかった?」

「今、初めて聞いたっす」

「遠距離恋愛になっても大丈夫?」

「……………余計解らなくなっただっす」

圭一は、苦悩のピークに達していた。頭を抱えて唸っている圭一を見て、三人は困った顔をした。

「圭一さん。一緒に東京に行く方法は無くはないです」

「大村先輩、どう言うことっすか?」

「二月に、東京にある私の通っている女子校系列の、男子中高一貫校の中等部二年次編入試験があります。もちろん私立ですから、費用は公立中学校より掛かりますが、越境入学可能で、下宿か寮の選択制です」

「……………」

「これは、ご両親と相談しないといけない話ではありますが」

「……………それだ!」

「待ってください。それにも、いろいろ問題があるんです」

ガタツと立ち上がった圭一を、夏海が慌てて座らせると、

「まずは、編入可能なのが特進コースなこと。編入できても、特進コースの成績最下位者は、一般コースに脱落することです」

「どう言うことっすか?」

「少なくとも、偏差値70台の成績を叩き出さないと、勝ち残れない」

「……………」

「次善策は、二年待って高校受験時に、東京の学校に越境入学するか」

「……………だあああ!!!」

頭をボリボリ搔いて叫び出す圭一に、奈々海がキツめの口調で諫める。

「そりや悩むよね？声も出したくなるよね？でも、何で史絵ちゃんと相談しないの？」

「えっ？」

「史絵ちゃんも、一人で苦悩してるんだよ。何で、恋人同士相談し合わないのさっ？」

「それは……………」

「まさかとは思うけど、それがダサいから、とか思っていないだろうねえ？」

「ずずいっと顔を近づける奈々海は、少し怒っていた。

「…………その通りっす」

「だろうねえ。先輩は、二人共に頭を冷やす為に離れたんだろうけど、余計悪化しちゃったねえ」

「すんません……………」

「謝るのは史絵ちゃんにね。それで圭一はどうしたい訳？」

「…………俺なんかで史絵に釣り合うんすか？」

「バック！私のダンナは、エリートスーパーサラリーマンで、私なんか娘に戦術の才能で追い越されてる一提督よ。それでも結婚してるんだからさ、釣り合うか釣り合わないか、そんなモンはドブに捨てちまえ！」

「……………」

「もう一度聞くとよ。圭一はどうしたい訳？」

「史絵の支えになりたいっす！」

「よっしや、腹は決めたね？」

「うっす」

その言葉に、夏海が母の後に続く。

「それで、編入試験に挑戦しますか？ただし、此処から先は勉強詰めになります。遊んでる暇ありません」

「……………」

「正直、私はお勧めしません。特進コースはストレスの掛かる場所です。私のところにも特進クラスがありますが、私は敢えて普通クラスを選びました。蹴落としあいがあるから、特に女同士は」

「……………どうしてあんた等、俺を余計に悩ませるんすか？」

「それは、あなたの人生の話だからですよ。自分の人生を自分が悩まないでどうしますか？」

「……………そうは言ってもよお」

頭を抱えている圭一を尻目に、武藤謹製のパンケーキを口に運ぶ大村母娘。

「はっは。悩める時に悩め、若人よ」

「こうやって脳天気な母でも、悩んだ時は多々有りました。例えば私がレイプされた時には、母は苦悩したと思います」

「なっちゃん……………」

「夏海先輩……………」

「だから、悩むのは当たり前です。しっかり悩んで悩んで悩んで悩んで、悩み抜いてください。そして最後には、史絵さんに相談してください」

「……………そうっすね」

トボトボと、武藤レストランを後にする圭一を見送りながら、三人は溜め息を吐いた。

圭一は、未だ答えを見い出せていない。

熊崎提督がやって来たく岩沼編く

熊崎正志陸准将補は、釧路鎮守府の司令官職および、北海道地区統括責任者である。

そんな彼は自己の職権を利用し、脱柵した摩耶や多摩の支援を行って来ていた。

国家承認までのデスペランとの折衝も非公式に担当していたが、今やそれも外務省に移管されてしまった。

艦娘も、天龍・龍田が除隊してしまった為、秘書艦の不知火しか居なくなってしまうた。

そして、12月に差し掛かったある日のことだった。

「人材交流ですか？」

「そう。デスペランとの折衝も、外務省に取られてしまったからね。暇で仕方がないからさ」

司令官執務室の椅子で、肩を竦める。

秘書艦で妻の不知火は、そんな司令官を見て咳払いをする。

「確かに、流入して来る害獣深海棲艦やDSビーストはデスペランが始末してくれては居ますから、現在釧路鎮守府は深海棲艦に対する拠点機能を失っています。申し訳ありません」

不知火は、艦装を失った艦娘である。

北海道地区では、ジレーネ戦争以前からDSビーストとも戦っていた。

不知火は、元々稚内鎮守府の所属だったが、DSビーストの最上位であるDSタイラントレグレクス級との戦闘で、轟沈してしまったのだ。

偶々艦装の完全破壊のみで、素体である不知火自身は僚艦に救われたものの、『艦娘としては失格』の烙印を押されていた。

海に浮けない艦娘に居場所はなかった。不知火は身を持ち崩し、一時期は風俗街で働いていた。

そんな時に知り合ったのが、熊崎提督だった。

熊崎提督は、すぐさま艦娘としての再登録を行い、秘書艦に据えた。

海に浮けない艦娘を秘書艦にすることには、他の提督からの異論があつたが、

『鎮守府の自由裁量』で、私の勝手だ。口を挟まないでもらおう」と。そんな熊崎提督に、不知火が惚れない訳はなかった。

熊崎提督は、嫁の不倫により離婚したばかりだった。

不知火が、あらゆる手を尽くして結婚に漕ぎ着けたのは、ジレーネ戦争が終わった六月末だった。

「やることもないし、新婚旅行序に東北旅行、と行こうではないか。余った有休も、消化し無くてはならないしね？」

「確かに、大本営より有休を消化するよう、通達が入っております」
不知火は、鎮守府ではあくまで秘書艦の姿勢を崩さない。

『艦娘としては欠陥品』と言うコンプレックスから、そうさせている。

唯一の理解者であつた、天龍・龍田姉妹が除隊してしまつた為、その傾向に拍車が掛かつていた。

「今度、東北方面隊幕僚長・仙台駐屯地司令になられた、中岡慎之助准将にも会いたいしね？」

「お知り合いなのですか？」

「世話になつた対番だね。本来なら、統幕に上がられる優秀な方なんだが、栄転の形で左遷されてしまつたのさ。ジレーネ戦争でやり過ぎたからね」

「何をなさつたんですか？」

『民兵・不正規兵』を戦力として運用してしまつたんだ。それだけ苛烈だつたんだね、ジレーネ戦争は」

「……」

「それで、丁度前任者が定年退官されて空席になつた、東北方面隊幕僚長・仙台駐屯地司令に補職された訳だ。進退伺は、陸上幕僚監部で破棄されてね。『楽して辞めることは許さん。定年まで働け』、と言うことなんだろうね。恐らくは足立陸将の手で、七原将補の後任に宛てるつもりだろう」

「それでは一休みポスト、と言う訳ですね？」

「うん。七原将補は、来年の11月に退官だ。60になるからね」

熊崎正志は、大きな溜め息を吐くと、コーヒーを飲み干した。

「今日も美味しいコーヒーをありがとう」

「不知火に落ち度はありませんか？」

「全くないよ」

その言葉に、不知火の頬が緩む。

「そんな訳だから、スケジュール調整を頼む」

「はい、落ち度無く調整いたします」

ジレーネ戦争で鹹を覚悟し、『自衛隊をクビになるかもしれない』と、妻に告げた中岡慎之助は、進退伺を提出した。

しかし大本営の横槍が入り、進退伺は陸上幕僚監部によって破棄された。

丁度、定年退官で空席になった東北方面隊幕僚長・仙台駐屯地司令の席を用意したのだ。

再び、単身赴任の身になった慎之助は、姉さん女房の妻・悠から、「クビにならなかつただけマシです。喜んでお行きなさい」

と送り出されて、東北の地にやって来た。

「いやあ、大変でしたね。中岡准将閣下」

「なのです」

直哉が、慎之助を誂いに電と顔を出していた。

防衛大学校時代に、教官と生徒と言う間柄で知己を得て、その後、第20普通科連隊連隊長横領事件でも、足立と共に世話になったり、直哉にとっては頭の上がない大先輩である。

「ジレーネ戦は後輩の坂本は死んじまうし、勝手に暴走族やヤクザが出しゃばって来るし、最悪だったよ。どうせクビになる、と思ったら、今度は東北に赴任だ。どうも足立陸将が横槍を入れたらしい」

「多分次のポストは、大本営警務本部長でしょう。何なら、一休みポストとして満喫したらどうですか？」

「なのです」

「ところで、その大本営所属の宮戸島鎮守府司令官が、こんなところで何をしているのかね？」

「いやあ、熊崎提督が提督交流序に旅行でお見えになるので、お迎えが
てら大先輩の不景気な顔を拝謁しに来た、と言う次第で」

直哉がニヤニヤ笑いながら言う、慎之助は少し驚いた顔を浮かべ
る。

「何だ、熊崎も来るのか？」

「きつと、後輩としては先輩の不景気な顔を拝謁しに……」

言い終わる前に、ノックもせず司令執務室の扉が開かれる。

「先輩、不景気な顔を拝謁しに来ましたよ」

「提督っ！我が提督が失礼をしました。申し訳ありません、不知火の
落ち度です」

熊崎提督が陽気に声を掛け、慌てた不知火が頭を下げる。

「まあ熊崎も、相変わらず元気そうで何よりだ」

「熊崎提督、お久しぶりですね？」

「高菜君も元気そうよよかったよ。タイラントレグレクスを狩ったん
だっつて？」

『提督、知り合いなのですか？』

お互いの秘書艦が、同時に首を傾げる。

「熊崎提督とは、ネット将棋で知り合ってたね。ほら、ベアーさん。アレ
が熊崎さんだよ」

「おお、この間は良くもケチヨンケチヨンにした上に角不成をやつて
くれた、ベアーさんなのですか？」

「あれは、打ち歩詰め回避の角不成だから、許してくれよ」

「初めまして。熊崎准将補の秘書艦をしています不知火です」

「高菜准将補の筆頭秘書艦、電なのです」

秘書艦同士の自己紹介が終わると、慎之助は、

「さあ、仕事のジャマだから、ヒマ人はさっさと出て行ってくれ」
そう言って、執務室から追い出す。

「それじゃあ、宮城の鎮守府をご案内しますよ」

「なのです」

「よろしく頼むよ」

「よろしくお願ひします」

早速やつて来たのが、岩沼鎮守府だった。

岩沼鎮守府では、日本刀を持ったお腹ポッコリンの紗花が、羽黒の羽交い締めで入り口に止められているのを目にした。

「あれは……？」

「あれは何ですか？」

同時に問い掛けた熊崎と不知火に、直哉は大きな溜め息を吐いた。

「日本刀を持つてるのが羽佐間夫人、羽交い締めしてるのが多分、今日の秘書艦の羽黒だと思いますね」

「なのです。紗花さん、どうされたんですか？」

電が紗花に声を掛けると、ハイライトのない目で電を見る。正直怖い。

「うふふ、眞一郎が昨日女子高生と……」

「私が、検診で紗花さんと同行したスキにナンパされて、ホテルに行つたらしく……」

「とにかく。その物騒日本刀なモノをしまつて、羽佐間提督の所に案内するのです」

電は、日本刀と鞘を取り上げると日本刀を鞘に収める。

「はあい。眞一郎は今、他の皆さんがお説教している所かと」

「それでは、さっさと案内するのです」

「はあい」

くるりと背を向けて、中に入つて行く紗花。

「羽佐間准将は女好きで有名だったが……ここまでとは」

「正直、私は好きにはなれません」

それぞれの感想を述べながら、直哉と電と共に執務室に案内される。

扉を開けると、羽黒以外の妙高姉妹に説教されている眞一郎が居た。

因みに窓の外には、埠頭で扶桑と山城が現実逃避して、空を見上げているのが見える。

「おお、高菜。丁度よかった。何とか言ってくれ？」

「あんたは、まだ懲りてないんですかね？残当」

「同歩なのです」

助けを求める眞一郎を、冷たくあしらう直哉と電。

応接室に場所を変える。

先に、応接室のソファに腰掛ける熊崎と不知火。

直哉と電は、埠頭で妙高と足柄と一緒に、扶桑・山城姉妹を慰めている。

羽黒が紗花に付きつきりなので、那智が代わりに、秘書艦代行として応対する。

「お見苦しいところを見せて申し訳ない。私が秘書艦代行の那智だ」

「私が、宮城県地区の提督の統括をしている、岩沼鎮守府の羽佐間眞一郎准将だ」

二人が挨拶すると、熊崎達も挨拶する。

「いえいえ、こちらこそ。何と言うか、私は北海道地区の統括をしている、釧路鎮守府の熊崎正志准将補です」

「私は、秘書艦の不知火です」

「しかし、いきなり修羅場を目撃して、びっくりしたと言うか何と言うか」

「僭越ながら、妊婦の奥様がいらっしやる上でそれは、あんまりではないでしょうか？」

不知火が、鋭い眼光を見せる。

「いや、今回ばかりは私も反省している。ナンパされると、なかなか断りにくくてな。今までの女癖で慣れてしまったようだな」

「確かに、羽佐間提督は伊達男ですからな」

「私は嫌いです、こんな不潔な男」

「不知火、流石に言い過ぎではないか？」

フオローする熊崎に、遠慮なく物を言う不知火。それを諫める熊崎。

「いや、もっと言ってくれ。眞一郎は全く女癖が治らない。困ったものだ」

「反論が出来ないのは残念だが、熊崎提督のところも大変そうではな

いか、現有戦力が……申し訳ない」

途中で言い掛けて、不知火が艀装を持ってなくなった艦娘だ、と言うことを思い出して詫びる眞一郎。

「いえ。不知火が、艦娘としては欠陥品なのは、承知しています」

「不知火くん、自分をそう言う風に卑下するものではないよ。熊崎提督の側にいて、役に立っているではないか」

「ですが、事実です」

「それを言うなら、私だって人殺し……」

そう言うと、先日圭一に話した思い出話を、二人にも話した。

「……………そんなに重い背景があったとは思いませんでした。不潔な男等と言って、申し訳ありませんでした。不知火の落ち度です。お許しください」

不知火は、深々と頭を下げた。

「そんなに頭を下げてもらうと、私が困るよ。それにだな、愛に飢えているのは間違いない。七人も嫁がいるのに情けないことだ」

「那智さん、一つお伺いしてよろしいでしょうか？」

「どうした？」

「嫉妬はされないのですか？ 不知火は正志の妻ですが、もし複数お嫁さんが居たら、嫉妬してしまいます」

「私達が普通じゃないのかもしれないな。眞一郎の愛を埋めるには、一人では足りないのだ」

「……………正志が夫でよかったです」

「おいおい、不知火。あまり照れることを言わんでくれんかな？」

熊崎がそう言うと、不知火は顔を赤らめ、眞一郎と那智は笑った。

「さて、次は宮戸島鎮守府をご案内しましょうか？」

「なのです」

「その前に観光をして行きたいから、私の方から立ち寄らせてもらおうよ」

「了解です、お待ちしております」

二人、寄り添いながら出て行く熊崎と不知火を見ながら、二人の提督はその初々しさに少し羨望を持っていた。

スペシヤル「圭一の苦悩と決断く史絵との愛く」

圭一は、悩みに悩んでいた。

そんな中、暴走族の溜まり場に顔を出していた。

「何だケイイチ、今日は彼女さんは一緒じゃねえのか？」

暴走族のヘッドが、圭一に声を掛ける。

髪の色が七色の、ピアスを色んな所に付けた、キングオブ不良という感じのこの男。

東北最大の暴走族のヘッドで、非公式にヤクザからも盃を貰ってる男である。

三島雄二というこの男は、中学一年で高校の番長を殴り倒したり、自身のメンバーをシメた圭一を、一目も二目も置いている。

「三島さん、俺……史絵と別れたほうがいいんすかね？」

「はあ？何言ってるんだ？あんなにラブラブじゃねえか。史絵だって、他に男を作るような女じゃないだろう。まさか、うちのヤツが手え出したのか!?何処のどいつだ！俺様がぶち殺して来てやらア！」

「違うつす！だから落ち着いてください!!」

早とちりする、瞬間湯沸器を宥めると、

「じゃあ、何だよ？」

「史絵、実は小説家としてブレイクしたんすよ。あんまり言わないでほしいんすけど、扶桑咲花先生」

「おー。俺の女が漫画版の『金銀竜』読んでるぜ。マジか？あれの原作か？」

「それで、史絵が遠くに行っちゃった気がして、おれと釣り合わないんじゃないかねえかと」

圭一がそう言うと、三島はふむ、とビールケースに腰を下ろして、隣にあるケースをバンバンと叩く。

「うつす」

圭一も、頭を下げると腰を下ろす。

「それで、悩んでんのか？」

「うつす」

「オレは馬鹿だからよお。あんまりチマチマとした事は苦手だからア
ドバイスになんねえかもしんねえけど、お前はもうしたくないだ？」

「それが判らないから、悩んでるんすよ」

三島は「重症だな」と笑いながら、背中をバンバンと叩く。

「史絵に相談はしたのか？」

「それが………あれ以来会って無くて、会わないようにしてるんす
よ」

「ああ？」

その瞬間、三島の表情が不快に染まった。

ザツと立ち上がり、圭一の胸倉を掴んだ。

「おいおいおいおい、圭一よお？お前は、いつからケツの穴の小せえ男
に成り下がっちゃまったんだあ？まずは史絵と相談だろうがよ？逃げ
回ってねえで」

「それが、怖いんだ………」

「ばつきやろー！圭一い！歯あ食い縛れえー！」

そのまま、顔面に一発パンチをお見舞いする。

「ぐうっ!!」

胸倉を掴まれたままだが、重いパンチが頬を直撃する。

頬が痣になって、口元から血が流れる。

「女つてのはよお！惚れた男に愛される為に生まれてきた生きもんだ
！何をチマチマ心配してんだよ、おめえはよお!?まさか、俺達の付き
合いに気を遣ってんじゃねえだろうなあ!？」

「……………」

バキッ！

「ぐうっ！」

もう一発殴られた。

「それこそフザケンなよ！お前を、男ん中の男と見込んでダチとして
付き合ってたんだ。どうしちまったんだよ、大番長原 圭一は!?男なら
どっしり構えて、テメエの女守ってやるんが男だろうが!?それを、悩
ませ苦ませてどうするんだ!?男だろ!?もっとしっかりしろや!!」
「……………」

「史絵、東京行くかもしんねえんす。文学極めるために。その邪魔をしたくねえんすよ」

「だったら、従って行けばいいだろう!？」

その言葉に、圭一の苛立ちが爆発した。

「ヘッド、簡単に言わねえでくれよ！勉強苦手な俺が、今から勉強してたら遊ぶ暇なくなるんすよ！ここにも顔出せなくなっちゃまう！」

「バツキャロー！俺達に気を遣ってんじやねえよ！ダチが勉強するのを応援するのが、本当のダチじやねえか!？」

「ヘッド……………」

三島は、感極まって両目に涙を浮かべながら、両手で胸倉を掴み上げる。

「バカヤロウが！俺達なんかに気を遣いやがって！俺は、お前のようなガキに気を遣われるほど、落ちぶれちやいねえよ。勉強が足りねえんなら、必死に勉強すりやいだろ!？女つてのはな、男が愛してやれば、どんどんないい女に育つんだよ！扶桑咲花つて花を、大輪の花に育ててやれんのは、テメエだけだろうがよお!!」

「三島さん……………」

「まだ分かんねえなら、分かるようにしてやろうか!？」

「もう大丈夫つす」

力強く言う胸倉から手を外し、再びビールケースに腰掛ける。

「そうか。俺達は、お前を男と見込んで付き合ってるんだ。別に、兵隊として付き合ってる訳じやねえ。スキな時に面あ出して、忙しかったら来なくていい。でも、たまに電話はくれよな？チーム中に、大学行ってるやつもいるから、困ったら勉強見させるからよ?」

三島は、獰猛な笑みを浮かべると圭一を見上げた。

「実はよ、史絵からも相談受けてたんだよ。单身、この怖い巣窟に来てな。圭一が、いつもの圭一じゃなくなっちゃった、って」

「そうだったんすか……………」

「おうよ。そんな時は一言、『圭一を信じて待ってる』って、言ってやった」

「そうだったんすね……………」

三島は、再び隣のビールケースをバンバンと叩くと、
「まあ座れや」

と、席を勧めると「うっす」と言っつて腰を下ろす。

「俺なんかよお。二十歳過ぎてもチームやつてる、半端モンだ。でも半端モンだけど、男としては誰にも負けねえ自信があるぜ。喧嘩も、酒も、女も」

「……………」

「圭一よお。お前、俺に相談してよかったろ？一言エールを送ってやる『愛は最強』だ」

「…………ヘッド…………」

圭一は、バツと立ち上がって深々と頭を下げた。

「ありがとうございました！」

「おうよ！それでこそ大番長の男、原 圭一よ」

三島と別れて繁華街を歩いている時、スマホが鳴った。
取り出すと、愛からの長い動画だった。

「圭一くん、見てる!?!」

笹野 愛が、手を振ってフレームインすると、ピアノを弾いている
燿子の姿が映し出される。

『愛は勝つ』の前奏が流れる。

「♪〜」

まずは愛の独唱から始まり、ワンフレーズごとに健太が加わる。

「♪〜」

そして、燿子の声が加わって、リーヴェの声が加わる。

「♪〜」

真愛は、愛に抱き抱えられて加わり、

「♪〜」

倶楽部カルテットも、どんどん加わって行く。

「♪〜」

そして、土佐の艦娘達、ビスマルク、アイオワが加わり、

「♪〜」

鳳翔達が加わって大合唱になる。

「皆……………」

二番になると画面が分割されて、そこに慎が加わる。

「♪」

そしてギャルズ達が加わって、寛太と優花が加わる。

「♪」

そして最後に、直哉と宮戸島カルテットが加わって、大合唱で全て歌い上げる。

歌い終わると一画面に戻り、愛だけフレームインしてメッセージが流れる。

「圭一。今の悩みに、この歌詞が全て当て填まってる。いい？最後に勝つのは……もう分かってるよね？」

愛がウインクで再び横に避け、健太がフレームインする。

「圭一くん。一度愛情から背いた僕が言うのも何だけど、史絵さんの愛から逃げちゃ駄目だ！」

そして今度は、耀子と入れ替わる。

「喧嘩番長が、恋の喧嘩に負けてどうすんのよ!？」

次に、娯楽部カルテットと入れ替わる。

『皆、圭一くんの恋を応援してるよ!』

更に艦娘達が、全員フレームインする。

『自分に負けるな!自分を信じる!』

続いて画面が切り替わり、慎が画面に映る。

「世話の掛かる隊長だよ、全く。もう答えは見えてんだろ？」

そこにギャルズ達が加わる。

「フーミンは待ってるよ!」

「それな、圭一を待ってるんだよ」

「うん、早く行ってあげて」

慎とギャルズ達が画面から避けると、優花と寛太が画面に入る。

「圭一、自分に負けちゃ駄目だよ」

「圭ちゃん。ファイトだよ」

そしてカメラは、艦娘達に向けられる。

「圭一は、本当に世話の掛かるやつなのです」
「全くだぴよん」

「自分に正直に生きてください。それが貴方らしい」
「何なら押し倒しちやえー!」

最後に、画面は直哉に向けられる。

「全く、世話の掛かる弟子を持ったものだ。でももう、答えは出てるんだらう?後は、それに向かってまっすぐ進めばいい。あの歌に全てが詰まってる。それだけだ」

そして、画面が黒くなり皆の声で、

『せーの。頑張れ、圭一!!!』

そこで動画が途切れた。

「皆……史絵……俺は決めたぜえええ!!!」

そう叫ぶと、学校に向かって走って行った。

学校の文芸部……と言っても、史絵以外は引退した一人だけの部室で、史絵は陰鬱な気分で本を読んでいた。

東京に行くべきか、夢を遠ざけるか……

「はぁ……………」

その時、ボタンと扉が開いた。

「史絵!!」

「圭一……………」

「史絵、文学勉強する為に、東京行くんだってな!」

「……まだ決めてなかったけど、地元の学校に行こうかなって……」

「夢を、諦めちゃ駄目だ!」

圭一は、声を振り絞って吠えた。

「高業師匠のお父さんの下で、勉強できるチャンスなんだろう!?!行けよー!」

「でも、圭一と会えなくなるから……」

「行くよ!俺も東京に!」

「は……はいい!?!」

圭一の宣言に、史絵は絶句した。

「難関に挑戦するよ！それでも駄目なら、高校入試で東京の高校に行くよー！」

「い、今から間に合うの!?特進コースだよ!?!」

狼狽する史絵に、圭一は自信満々に宣言した。

「絶対に勝ってやる！愛は最強だからな！俺は、お前の為なら何でもできる！」

その改めての告白に、史絵の顔は真っ赤になり、ボロボロと涙が溢れる。

「圭一い……………」

「史絵っ!!!」

圭一は史絵を抱き寄せて、力いっぱい抱き締めた……

ここからが大変だった。

圭一の両親には、直哉を伴って頭を下げ、私立への編入試験の許しをもらった。

そして、塾に通い始めた。

「何だこれ!?中一の領域かよ!?!」

出て来る問題に愕然とするも、圭一は寝る間も惜しんで勉強に打ち込んだ。

息抜きに、暴走族の溜まり場に顔を出す時も、参考書片手だ。

三島ヘッドも、勉強のできるメンバーに勉強を教えさせた。

こうして戦いが始まった。

受験まで後三ヶ月。二月の編入試験までに、統一模試が何度もある。

そこで、偏差値を70台以上に持って行けなければアウトである。

それでも、圭一は頑張っている。

頑張って頑張って頑張っている。

今までの悩みが嘘みたいに、猪突猛進で勉強だけに精を出した。

「すごいですね……お勧めしないって言ったのに」

「それが愛の力なんだよ」

家庭教師役の夏海お手製の小テストで、夏海の思った以上の点数を叩き出すと、

夏海は、その愛の力にある意味呆れるように溜め息を吐いた。

そんな夏海に、結有はふふつと笑って、ポンと肩に手を置いた。

史絵は史絵で、ある決断を下していた。

本命を、偏差値の高い都立高校に切り替えたのだ。

毎日、鎮守府にやって来ては二人並んで勉強して、夜は圭一の家で一緒に勉強する。

史絵の親は母親だけだったが、娘の為に血の滲むような努力をする彼^{圭一}氏を、絶対的に信頼していたのだ。

お泊りでの勉強も、何度も許可したし、草加家でのお泊りも許可した。

こうして、12月は下旬を迎えようとしていた。

熊崎提督がやって来たく南三陸編く

圭一の猛勉強開始から、少し遡る11月末。

熊崎准将補は、不知火と共に直哉と薄雲の案内で、南三陸鎮守府の「武藤レストラン」にやって来ていた。

今は12時30分。ちよつと遅めの食事である。

「おお、ここが噂に聞く武藤レストランだね」

「綺麗な建物ですね」

武藤レストランの建物は、鎮守府の横に併設されていてバリアフリーになっている。

自動ドアを潜ると、

『いらつしやいませえ』

と言う声が響く。

従業員さんが十人くらいはいて、皆ニコニコしている。

「おお。従業員さんも雇ってるんだねえ」

間隔が広く取られたテーブルに腰掛けると、車椅子の女性がお冷に乗っているトレーを膝に乗せて、こちらにやって来る。

そして、にこやかにお冷をテーブルに置きながら、

「ご注文がお決まりでしたら、お呼びください」

と言うと、くるつとUターンしてカウンターの方に戻って行く。

通い慣れている直哉達にはいつものことだが、熊崎提督と不知火は目を白黒させている。

「ここは、継続型就労支援作業所《B型》でもあるんですよ」
直哉が説明する。

継続型就労支援作業所とは、障がい者等一般の就労が困難な者を対象に提供される、仕事の場である。

そのうちのB型は、雇用契約を結ばず、ここで働いている利用者さん達には、工賃が支給される。

「ここは、武藤提督が出資して、武藤提督の弟さんが社長として経営してるNPO法人がやってるお店で、武藤提督や艦娘達は名目上ボランティアとして、空いてる時間とかでお手伝いに入るんです」
「おお、そうなんだね。これは、地域密着型鎮守府としては、是非参考にしたい一例だね」
「そうですね。障害者手帳を持つ『轟沈扱いの艦娘』も存在しますから」

艦装を喪うと、海に浮けなくなる。

艦娘の死亡原因1位は全身打撲による即死だが、2位が溺死なのである。

そう言った不知火自身は、障害者手帳を保持していない。

片目の視力はないものの、もう片方の視力が1.5と、障害者手帳認定される6級以下の基準に満たないのだ。

全員が注文を決めると、薄雲がちらつと先程の女性店員を呼ぶ。

すると、ニコニコと車椅子を転がして、注文を取りにやって来る。

「足の具合が……悪いのですか？」

不知火が躊躇いがちに訊くと、女性はにこやかに、

「はい。生まれつきの下肢障害があつて、歩けないんです」

「変なことを訊いてすみませんでした。大変でしょう？」

申し訳なさそうに言う不知火に、車椅子の女性店員は笑顔を崩さず答える。

「もうこの生活に慣れましたから、大丈夫です！」

「そうですか……私は海に浮けなくなった艦娘で……」

「そうだったんですか。でも聞いた話ですと、腕や脚を失ったりした艦娘がいる、と聞いてますから」

「艦装の保護機構の限界を超えると、素体にダメージを受けるんです。かくいう私も、右目は義眼で見えませんが」

不知火の告白に、自分のことのように悲しがると、不知火が冷静に説明する。

そう。不知火も、無傷と言う訳ではなかったのだ。

体の傷は高速修復材で癒えるが、失った四肢その他は治らないの

だ。

高速修復材は、人間の通常治癒の範囲にしか及ばないのだ。今のところ、ボロ雑巾のようになっても再生するのは、アルティメットいなづまちゃんくらいなものである。

明石は、何れはそのアルティメットいなづまちゃん細胞を再生医療に役立てたい、と日々研究を行っている。

「そうだったんですね。海の平和を守ってくださいって、有難うございます」

車椅子の女性が深々と頭を下げると、不知火は首を横に振る。

「今は、『艦娘として』は何も出来ません。お情けで、艦娘登録はそのままになっていますが……」

「それでも、秘書艦として頑張ってるんですよ?」

「はい。熊崎提督に支えられながら……」

車椅子の女性は、不知火の左薬指のプラチナ色のリングを見つけてる。

「そちらの提督とは、ご結婚されてるんですか?」

「はい……六月に」

不知火が顔を赤らめて頷くと、直哉が口を挟む。

「鳶沢さん、こちらが鉤路鎮守府の熊崎提督と、秘書艦の不知火さん」

「鳶沢と申します。ご新婚なんですね、おめでとうございます」

「……有難うございます」

「ありがとう」

熊崎提督も、鳶沢さんに笑顔を向ける。

「それじゃあ、注文をお願いするよ。私はカレーライスセットで、セットのドリンクはホットティ、いつものアレもお願いね?」

「かしこまりましたっ。ブランドー入りですね?」

直哉は、ここから先運転する気はないらしい。

「私はホットティで、500円の方の」

薄雲の注文に、不知火が不思議がる。

「お食事はよろしいのですか?」

「このお店、ランチタイムからティータイムの間、ドリンクを頼むと、

500円でパンケーキが食べ放題なんです」

鳶沢さんの説明に、不知火は「なるほど」と頷いた。

「では不知火も、同じくホットコーヒーで。パンケーキもお願いしま
す」

「かしこまりました」

「では私は、この十三穀米三色丼セットでコーヒーにしようかね？」

「かしこまりました、少々お待ちください」

そう言うのと、車椅子で戻りながら、

「オーダー入りまーす！」

と、元気のいい声で注文を厨房に告げる。

昼食は、和やかなムードで進んでいた。

周囲を見ると、ランチタイムはサラリーマン等がよく利用してい
て、賑やかな雰囲気になっている。

「儲かってるのかね？」

「熊崎さん、NPO法人ですから、利益は殆ど出てないですよ。値段を
見ていただけると解ると思いますが？」

そう。どのメニューも、結構リーズナブルな値段で提供しているの
だ。

「武藤提督の弟さんの晋也さんが、別のところでも会社を経営してい
て、そっちで利益を出している状況ですね」

「そうなんだね……」

「ほら、常勤……つまり正規雇用の健常者の方もいらしゃるし、厨房に
は同じく正規雇用のシェフもいますからね？」

「なるほど……」

直哉と熊崎提督がそんな会話を交わしている中、不知火と薄雲は無
心でパンケーキを食べている。

鳶沢さんが驚くくらいの枚数を食べてから、

「ふう、満足です」

「不知火もです」

と、ホッコリ顔の二人と熊崎提督を連れて、隣の鎮守府へと向かう。
ランチ代は、熊崎提督が出してくれた。

鎮守府に入ると、武藤 廉一佐がにこやかに出迎える。

「ようこそ。ランチは楽しんでいただけましたかな？南三陸鎮守府を預かる、武藤 廉一等陸佐であります」

「美味しかったよ、ランチは小鉢が沢山ついてくるんだねえ。熊崎正志陸准将補です」

早速、応接室に通される。

その間直哉達は、武藤レストランに舞い戻ってカウンターで駄弁っている、と言い出て行った。

応接室では、秘書艦の長門が立ったままで待っており、皆が中に入ると敬礼する。

廃止された階級章に代わって、全部金色の艦に葉っぱで囲んで真ん中に桜のマークが入ったバッジが輝いている。特級艦娘検定のバッジである。

不知火には二級……錨マークだけ金色で、後は銀色のバッジが付けられている。因みに一級は、葉っぱが金色に変わる。

「南三陸鎮守府秘書艦の長門です」

「釧路鎮守府秘書艦の不知火です」

「まあお掛けください」

年上だが、階級が下の武藤提督が席を勧めると、熊崎提督が不知火と共に腰掛ける。

「遅くなったが、一佐への昇進おめでとう」

「いやはや、数年前には二尉だったのに、あれよあれよという間の一佐ですからなあ」

「いいことだよ。今は艦娘の給料も、提督の階級に連動してるからねえ」

「各艦娘に、階級を設定するのが間違이었다、ということですか？」

ハツハツハと、二人が笑っている。

「しかし、今や武勲も立て難くなっている昨今ですから。今から新規提督になる尉官は、辛いでしょなあ？」

武藤提督が、髯を弄りながら言う、

「そうだろうね。うちは、不知火との二人家族だからねえ」

「不知火は、提督のおかげで暮らせてます。ありがたい限りです」
そう言うと、武藤提督と長門が笑う。

「仲良い夫婦で、よろしいことではないかね？」

「そうだぞ、不知火。うちも負けてはいないが……」

ボタンと扉が開くと、夕立が木曾と一緒に入って来る。

「提督、哨戒完了っばい！」

「こら、お客様がいるぞ。ノックぐらいしろ。申し訳ない」

飛び込んだ夕立を、後から入って来た木曾が諫めてから、頭を下げる。

武藤提督と長門も恐縮するが、熊崎提督はハツハツハと笑う。

「元気のいい嫁艦達で、いいことじゃないか」

「これ、夕立、木曾、自己紹介しなさい」

武藤提督の言葉に、夕立は緩やかに、木曾はビシツと敬礼する。

「私は夕立っばい！」

「木曾だ。提督、俺達は武藤レストランの方を手伝って来るぜ」

「うむ。頼んだぞ」

「それでは失礼するっばい！」

今度は、二人共ビシツと敬礼すると、出て行く。

「しかし、三人の嫁艦に囲まれるとは羨ましい限りだなあ。体が保つのかい？」

「いやはや、何と申しますか。嫁艦達が私の為にG^{グリスリー}級の霊子結晶を取りに行ってくれまして、足腰も元気でやっていますわい」

「おお、G級は20代の体力と精力を取り戻す、と言うからね。逆に嫁艦達が大変だろう？」

『はっはっは』

長門と不知火が顔を少し赤らめる中、二人の提督が朗らかに笑っていた。

「熊崎さん、どうでした？南三陸鎮守府は」

「うん。福祉の地域密着は、私も目からウロコだったよ。これは是非、北海道でも取り入れたいねえ」

「はい。艦娘にも、こういう福祉を提供したいです」

直哉の問い掛けに、メモをしながら答える熊崎提督と不知火。

「それでは、今夜の宿までお送りしますよ。薄雲、頼んだよ?」

「了解しました」

薄雲に車の鍵を渡すと、熊崎提督が目丸くする。

「もう、自動車免許を持つてるのかね?確かに、任務を続けながら自動車学校に通う艦娘もいるが……」

「一発試験で受かりました。ぶい」

無表情でVサインをする薄雲に、不知火も目を丸くする。

「一発試験!?!自動車学校に通ってないんですか!?!」

「はい。直哉の為に頑張りました」

その言葉に、熊崎提督は朗らかに笑って、

「いやはや、君も艦娘に愛されてるねえ?」

「深く連れ添えばこそ、ですよ。特に電とは、何年来の付き合いですからね。うちの嫁の筆頭格ですよ」

そう言うと、少し照れた薄雲が先に業務車に乗り込む。

その様子を微笑ましく見ながら、熊崎提督と不知火も車に乗り込む。

最後に直哉が車に乗り込むと、業務車が発車して熊崎提督が予約した宿へと向かったのだった。

その夜。

「提督」

「何だい?不知火」

「私、提督との子供が欲しいです」

そう。指輪のアンロックは、既に済んでいるのだ。

不知火が浴衣をはだけると、熊崎提督の上に押し掛かり………右手に持つてるのは、G級の霊子結晶。

「し、不知火……!?!」

「今夜は不知火が寝かせません」
戦艦のような眼光で笑みを浮かべると、G級の霊子結晶を熊崎提督
に与えて……

翌日、仲居さんに、

「昨夜はお楽しみでしたね？」

と言われるほど、激しく愛し合ったと言う。

クリスマスのできごと in 土佐①

12月半ば、いつもの通りのんびりしている直哉達の元に、クリスマス・イヴの招待状に加え、『子供が出来ました』と言う、写真はがき付きの封筒が届いた。

高菜家には、子日を含めて全員に届いており、子供ができた？日数おかしくないか？と、推定容疑者の明石を締め上げたところ、レ級が靈子結晶を与えてブースト出産させたことが判明して、何だそう言うことか、と安堵した。

その会話で、郷里二佐が靈子結晶とアルティメットいなづまちゃん細胞で人外化した話も、明石から聞き出した。

「郷里をあれ以上強くしたら、それこそ核兵器でも持ち込まないと殺せないんじゃないか？5. 56mm弾を筋肉で弾くって……まあ、花梨ちゃんが未亡人にならなくて済むのは、良いことだがね」

とは、直哉の感想である。

因みに、熊崎准将補はこの旅行の為に、40日フルに溜まっている年次有給休暇を全て取得して、一月末まで北海道を留守にする計画だ、と聞かされている。

元々旅が大好きで、コツコツ貯金をしていたお金と今年の賞与で、東北各地を見て回る計画なんだそうだ。

昨日LINEに、『宮戸島には年末に行くよ、ちよつと岩手・青森に行つて来るからね』と連絡が入った。

熊崎提督の話によると、気仙沼と女川での交流は、楽しい一時だったよ、と付け加えられていた。

「さて、どうやって移動するかだね。私のハイブリッドカーで行けばいいか？」

等と算段をしている。

「今回は、薄雲と直哉と電が、代わりばんこで運転すれば良いのです」

「そうたびよん」

「そうですね」

「電ちゃんも自動車学校終わって、免許取れたもんね」

そう。電は、11月からこっさり自動車学校に行き始め、この度自動車免許を取得したのだ。

宮戸島鎮守府で二人目の、艦娘の免許保有者である。

これで、直哉はより運転をしなくなったのだ。出掛ける先で飲酒をしては、運転を薄雲や電に押し付ける。

そんな算段をしていると、圭一と愉快的仲間達が揃ってやって来た。

「おつす、師匠。花梨さんから、俺達にもクリスマス・イヴの結婚式の招待状来たんだけど?」

「何だ、君達にも来たのか……………」

直哉の計画は、音を立てて崩れ去った。

直哉達五人に加え、圭一に史絵、寛太に優花、慎にギャルズの望、奈緒子、櫻子の13人である。

「そうなんだよ。俺達、行きたいのは山々なんだけど…………アシが無くてさ」

そこで、お金持ちの直哉に相談に来た訳である。

「なるほどね。まあ、移動のことは私が考えてあげよう。君達は、ご祝儀とあつちで遊ぶお小遣いだけ、持って来ればいいさ」

「おお!さすが師匠!」

「良いんですか…………?確かにこの間の圭一の統一模試、偏差値70行きましたから、少しお休みでも、と思ったんですけど…………」

圭一が喜んで、史絵は恐縮する。

「優花はあ、花嫁の叔母さんだからあ、ママから交通費出してもらって、新幹線で行くつもりだったよ?」

「僕も出してくれるってことでしたので」

優花と寛太も答える。

「師匠、こんなに大勢いいのか?」

「いいじゃん、慎。お言葉に甘えようよ?」

「それな」

「だね」

いつもの慎と、ギャルズ達である。

「と言う訳で、折角だから全員お邪魔させていただこうか？」
『はい！』

と言うことで、急遽追加招待された倉田めぐみ医師を加えた14人を、どうやって土佐に向かわせようか悩んでいた直哉だったが、先にお車代として、羽田までの往復電車切符と往復新幹線切符、羽田・高知龍馬空港間の往復航空券が同封された直筆の手紙が全員に届いた為、その悩みは杞憂に終わった。

「しかし、大盤振る舞いだなあ」

航空券を眺めながら、ふっと笑みを零して、直哉は旅館の手配だけを行った。

結婚式前日の朝。

仙台駅で岩沼鎮守府の面々とも合流して、合計22人での大移動である。

「何だったら、あのまま土佐にいればよかったですね？」

「全くだ。まさかクリスマスに結婚式をするとはなあ」

二人の将官が、隣り合って航空機に乗っている。妊婦の紗花は、産科医のめぐみが同伴する、と言う条件で航空機の搭乗が許可された。「もし心配事があつたら、隣に座ってますので、声を掛けてくださいね？」

「はあい、ありがとうございますう」

ニコニコ笑いながら心配するめぐみに、笑みを浮かべる紗花。

そんな中、航空機が初めての中学生の面々は、目をキラキラさせている。

「おお、飛んだぜ」

圭一が、窓に齧り付いて離陸の瞬間をバッチリ目に焼き付けている。

「そりや、飛行機ですから飛びますよ」

その隣にいる史絵は苦笑いしながら、持ち込んだMacBookで執筆をしている。

「落ちないかなあ……？」

心配する寛太。飛行機はあまり得意ではないらしい。

「大丈夫、落ちたら死ぬから」

そんな寛太に、だいじよばないフォローをするのが、天然の優花。

「優花、縁起でもねえ」

「そうだよ」

「それな」

「うん」

突っ込む慎に、同調するギャルズ達。

そんな様子を見て、電はジュースを片手に優雅に、

「ふふん、番長ズは子供なのです」

と鼻で笑っているのを、通路を挟んだ隣の薄雲が、トントンと肩を叩く。

「どうしたので……」

薄雲のその隣を見ると、窓に齧り付いて見ている、卯月と子日。

「……………」

「もう二人ほど、いました」

「なのです」

大きな溜め息を吐いた、電と薄雲だった。

そんなことを気にせず、卯月と子日は大燥ぎである。

「飛んだぴよん！」

「空飛んでるぴよん！」

「しかし、こうやって皆の往復航空券を出していただいて、良かったんでしょか？」

眞一郎の隣に座った妙高が、心配そうに問う。

因みに、三列シートずつで一番前から、

直哉・眞一郎・妙高	足柄・めぐみ・紗花
圭一・史絵・寛太	優花・慎・望
那智・羽黒・扶桑	山城・奈緒子・櫻子
子日・卯月・薄雲	電・他の客・他の客

こんな感じで乗っている。

「気前よく22人分の往復航空券・新幹線代だからね。申し訳ない気もするが」

「まあ、私の方からも、この間出産祝いとして纏まった額を渡してある。慰謝料代わりにな」

申し訳なく思う直哉に、悪びれずに言う眞一郎に、ふふつと笑う妙高。

「あらあら、提督。この日の為に何年も貯めておいたお金でしょう？結婚資金につて」

「そうだったんですかね？准将殿」

それに食い付く直哉に、眞一郎も苦笑いを浮かべる。

「そうだ、と言うのも癪だからな。溜め込んでおいた分だけくれてやったさ。養育費ではなく、慰謝料としてな」

「全く、素直じゃないですね？准将も」

「フツ、素直じゃないから、今まで生き残って来たんだよ」

「全く、孫を持ったら、もう少しは丸くなるものですよ？」

「ふん。私は後100年は生きる予定だ、取り敢えずは今のままでいいやい」

そんな皮肉や揶揄の応酬に、妙高が口元に手を当てて笑っている。

「史絵さん、いえ、咲花先生」

羽黒がぼそつと、前の席の史絵に囁く。

「えっ？」

『『金銀龍』読みましたよ。とっても良かったです』

ふふつと、笑みを零しながら囁くと、後ろから画面を覗き込む。

「執筆中ですか？」

「はい、次作のプロットを提出しないといけなくて……」

「大変なんですね、ふふつ」

そんな会話をしている間も、圭一は窓に齧り付いて空を楽しんでいる。

「ふつ、陸の番長も空ではただの中学生だな」

後ろの席で、窓の外を眺めながら前の席の圭一の様子を、那智が笑

いながら見ている。

その後ろで、子日と卯月がずっと窓に齧り付きのまま眺めているのを、薄雲が流し目でふっと笑いながら見て、

通路を挟んだ隣の席では、電が偶々隣り合った親子と親しくなつて、楽しくお喋りをしている。

それぞれが空の旅を楽しんで、高知龍馬空港に降り立った。

「お久しぶりです!!」

「元気だった!?!」

「皆、ジレーネ戦役以来ね」

「こんにちわあ」

愛と健太と燿子と真愛が、出迎えに来ている。

赤ちゃんの世話は、相変わらずリーヴェが一手に引き受けている。

「おっす! 健太、お前の言葉、突き刺さったぜ」

「うんっ! 圭くん!」

がしつと、拳と拳を合わせる二人

「愛ちゃんも元気そうだね……………ってこの子は?」

「真愛ですよ。真愛、この人が直哉おにいさんだよ」

「えっ? 大き過ぎないかい?」

「実は、皆から霊子を欲しい欲しいして育っちゃったんですよ。つまりは口移しで」

「ちゅーか……………?」

「はい」

直哉と愛は、そんな会話をしながら真愛を抱き上げる。

「おじちやまこんにちは!」

「……………」

「真愛、直哉おにいさんでしょ?」

「あきやさまが、さんじゅうすぎたらおじさんだ、ってゆってた」

「足立め……………」

ほそつと、同期への恨み言を呟くと、電が加わる。

「30過ぎで結婚したら、もうおじさんなのですよ」

「ちよつと待つてくれ電、私は好きで40になる訳じゃないぞ?」

「はいはい。愛ちゃん、電なのです」

「いなづまおぼちゃ……」

「あ?」

「いなづまおねえちゃん、こんにちは!」

真愛ちゃんは、電に恫喝されてもにぱつと笑って挨拶する。将来大物になるに違いない。

「ところで、花梨と剛くんはどうしたのかね?」

真一郎がこの場にいない二人を問うと、愛は苦笑いを浮かべる。

「式の準備で忙しいんですよ。急な結婚式で前日まで打ち合わせなんです。それでお出迎えを私達が」

そう愛が言うと、耀子が思い出したように、

「羽佐間准将と岩沼の皆さん! ゆっくりしてる暇、ないです。ご両家顔合わせですので、外のマイクロバスに乗ってください!」

「やれやれ、忙せわしないな」

耀子の案内で、真一郎と紗花と岩沼の艦娘達とめぐみが、バスの方へと向かって行く。

因みに、全員荷物は既にホテルに発送済みで、手荷物しか持っていないのである。

「私達も仲人なんで、失礼します」

「真愛、行くよ?」

「あい」

真愛は、直哉からぴよんと飛び降りると、三人手を繋いで真一郎達を追い掛けて行く。

それを見送る、直哉と愉快的仲間達。

「さて、旅館から迎えが来る筈だから」

「高菜様ですか!」

「ああ、はい」

旅館の法被を着た、ワイシャツネクタイのおじさんがやって来る。

外にはマイクロバスが停まっており、旅館の人の案内の下、旅館へと向かうのだった。

旅館の部屋割りは一応三部屋確保してあったが、直哉の独断と偏見で、

直哉と艦娘達、圭一と寛太と慎、史絵&優花&ギャルズに決まった。以前の浜松の旅で、愛と健太がやらかしてしまったので、直哉が男女を分けることにしたのだ。

「まあ、どっちの部屋に入るのも自由だけど、明日が本番だから、羽目を外さないようにね？食事は、大広間で皆で摂ることになるよ」
そう言い残すと、艦娘達を連れて早々と部屋に入って行く。

男子達は男子達でゲームに夢中で、女子達はガールズトークに花を咲かせているだろう。

「ふう、やれやれだねえ」

早速、スーツケースに仕込んで来たブランデーを取り出すと、湯呑にとぼとぼ入れて飲み出す直哉。

「提督、私にもいただけますか？」

「電ももらうのです」

「うーちゃんももらうぴょん」

「子日も飲むの！」

早速、アルコールが入る宮戸島鎮守府の艦娘と司令官である。

もちろん、その後の夕食でも日本酒を飲むの言うまでもない。

クリスマスのできごと in 土佐②

クリスマス・イヴ。

全員大人しく過ごしたようで、皆各部屋で朝食を摂って集合した。学生組は学生服が正装なので学生服、圭一も慎も普通の学生服を身に着けている。

直哉は、将官の正装である飾緒付き陸上自衛隊第1種礼装で肩の階級章も、将官用の三本で細かく編み込まれた金色モールに、銀の桜バッジが一つ付けられた、准将補の礼装用階級章である。

艦娘達の襟には、特級艦娘検定徽章が付けられている。

「おはよう、皆よく眠れたかい？」

『はい！』

元気のいい皆の声に、直哉はふつと笑みを零すと、

「さて、そろそろ迎えが来る時間だが……」

「皆さん、お迎えに来たわ」

燿子が、海上自衛隊の第1種礼装で現れた。肩の階級章は尉官の二本で編み込まれた金色モールに桜が一つの、三尉の礼装用階級章である。

「お待ちせしました、それじゃあ向かいましょう」

「ありがとうございます、ところで愛ちゃんは？」

バスに向かいながら、直哉が声を掛ける。

「もう既に式場入りして、乾杯の音頭のスピーチを練習してたわ」

「だろうねえ。あの若さで仲人になるなんてねえ」

「最初は足立ご夫妻も考えたんだけど、遠方から何度も足をお運びいただくのも悪い、ってことでいずれ結婚するんだし、愛ちゃん達が仲人になることになった、と」

「なるほどね。二人の上官でもある訳だしね？愛ちゃんは」

「そういう事」

「なるほどね」

直哉はふふつと笑うと、真つ先にバスに乗り込んだ。

皆バスに乗り込むと、最後に燿子が乗り込んでバスが結婚式場に向

かつて行った。

全員で受付を済ませると、

「つけもん！久しぶりだな」

と声を掛けられる。同期の足立秋也一佐である。彼も陸自礼装で、肩の礼装用階級章は三本モールで桜バッジ三つである。

「ああ、秋也か。そう言えば、四国の警務隊長だったな。よく問題児がなれたな？」

「ぼっか、元々北海道の警務隊副隊長だったの」

「そう言えばそうか。何でも、祝辞はお前さんなんだってな？」

「そうなんだわ」

その言葉に、幕僚総監足立昭彦陸将夫妻がやって来る。足立総監は苦い顔をしている。

「私は今から心配だよ。秋也が何を言い出すか、判ったものではない」
「ぼっか、円城寺に一応原稿はチェックしてもらったよ。アドリブ入るかもしれないけど」

「バカモン、私はそれが心配だと言っているのだ」

「まあまあ。一応これでも一佐ですから、よっぽどのことはしないでしよう」

そんな足立を、直哉が宥める。

艦娘達は艦娘達で、中学生組は中学生組で固まってワイワイ話をしている。

「ひでえな」

「まあ、日頃の行いでしような？」

「おいこら、円城寺」

「うむ、円城寺君。うちのバカ息子を頼んだぞ」

「了解いたしました」

お手洗いを済ませた円城寺がやって来て、しれっとそう言うと、秋也は文句を言い、足立総監は満足そうに、改めて息子の手綱を曳くように頼む。

警務隊からは、この二人が招待されたのだ。

「先輩！先輩のところは皆全員招待ですか？」

大村奈々海がやって来た。

「何だ、大村も来てたのか？ だったら、一緒に来ればよかったじゃないか？」

「いやあ。招待は同期で親しかつた人間、と言うことで、気仙沼からは私だけだったので、観光も兼ねて何日も前から四国入りしてたんですよ」

「なるほどね。郷里の同期と言うと、後は……」

そう考えていると、

「先輩、おはようございます！」

「高菜、元気そうだな？」

七原夫妻がやって来た。秋奈はもう臨月で、マタニティドレス姿である。

「七原に師匠、久しぶりだねえ」

「うむ」

「七原は大丈夫だったのかい？」

「あはは。これで、今日出産とかだったら洒落になってないですけど、予定日は来月頭なんで、まあ大丈夫でしょう」

暫し談笑していると、式場の係員に案内されてチャペルに入る。

宮戸島の愉快的仲間達は、新婦側の席に案内される。

結婚式は、翼のウィットに富んだ司会で無事終了し、披露宴になる。披露宴会場もクリスマス色一色で、トナカイの絵等が飾られている。

各テーブルにも、小さなツリーが飾られている。

宮戸島軍団は2テーブルに分けられ、叔母の優花とその婚約者の寛太は、親戚席に行く為、

直哉と艦娘達と圭一&史絵で1テーブル、慎にギャルズ達とめぐみで1テーブルである。

「花梨さん、とっても綺麗だったのです」

「霊子があっても溢れてた式場だったぴよん」

「人間同士でもああやって輝くんですね……」

「子日もウエディングドレス着たい」

新婦の家族席を見ると、紗花がマタニティドレス。妙高四姉妹と扶桑山城は、お揃いの和服に身を包んでいる。

「和服も良かったのです」

「でもうちにはないぴよん」

「そうですね……」

「直哉、買って?」

子日のお強請りに、直哉はハハツと笑って、

「仕方ないなあ、分かったよ。帰ったら呉服屋さんに行こうな?」

『わあい』

圭一と史絵はそんな姿を見ながら、

「史絵の和服姿見たいな?」

「でもうちも和服が……」

なんて会話を聞いていた電達が、

「直哉、史絵のもクリスマスプレゼントで買うのです」

「うーちゃん達のボーナスは多かったぴよん。直哉のボーナスはもつと多いぴよん」

「そうですね、圭一の夢を叶えてあげるべきです」

「そうだよ、それで帯回しをするの」

子日はどっかズレている。

「帯回しは駄目だけど、どれ、宮戸島軍団のお呼ばれ用に用意しておくかね? ほら、後三年で愛ちゃんと健太くん結婚だろう? 深海棲艦化して、身分が成人になってしまったから。もちろん男子達の礼服も用意してあげるかね? クリスマスプレゼントで」

「おお、直哉は太っ腹なのです」

「いやあ、今回の移動費が割と浮いたからね」

軽く肩を竦めると、式次第が始まる。

「さて、披露宴でも引き続き司会を務めさせていただきます。新郎新婦入場いたします」

仲人である健太と愛、それに招待客が見守る中、二人がタキシードと真っ赤なウエディングドレスで入場して来て始まる。

「ふむ。タキシード姿の郷里も、意外になかなか様になるな」
「なのです」

後輩の晴れ姿に、少々毒の籠った賞賛を口にする、電も同意する。
「凛々しくてカッコイイぴよん」

「石器時代の勇者が、文明時代の勇者になりましたね」
「うん」

カッコイイおじさんにお目々キラキラの卯月に、とんでもない暴言を放つ薄雲に、同調する子曰。

「タキシードもいいな。花梨さんも綺麗だ。俺達もクリスマスにしような？」

「圭一、気が早過ぎます。後五年待つてください」

「だよなー。早く史絵と結婚したいぜ」

「……………もう」

圭一もタキシードに憧れて、もう結婚の話をしている。

史絵は顔を赤らめながら、満更でもないと言う顔をしている。

「それでは、乾杯の音頭を、土佐鎮守府司令官で仲人でもある笹野 愛一佐にお願いいたします」

翼の紹介に、愛はグラスを持って立ち上がるとマイクまで向かう。
ガツチガチに緊張している。

「愛ちゃん、ガツチガチに緊張してるのです」
「だろっうねえ」

直哉と電が、小声で話している。

「ただ今ご紹介にあずかりました、新郎の剛さん、新婦の花梨さんと同じ職場の土佐鎮守府司令官の笹野 愛でございます」

深々と頭を下げると、

「このような若輩者が僭越せんえつではございますが、ご指名いただきましたので、乾杯の音頭を取らせていただきます。剛さん、花梨さん、並びにご両家のご親族の皆様には、心よりお祝いを申し上げます。それでは、乾杯の音頭を取らせていただきますので、ご唱和をお願いします。お二人の末長いお幸せと、ご両家並びにご臨席の皆様のご健勝とご多

幸をお祈りいたしまして、乾杯！」

『乾杯！』

一同、コップのお酒やジュースを空けると、拍手が巻き起こる。愛は、一礼して仲人席に戻って行く。

「それでは、艦娘と提督を統括いたします、四国地区警務隊長の足立秋也一佐より、祝辞を述べさせていただきます」

そう言うと秋也が立ち上がり、原稿を取り出して、マイクの所に向かう。

新郎新婦と両家の家族が立ち上がる。

「えー、只今ご紹介いただきました、お二人の勤務先の上司の上司に当たります、足立でございます」

そう言うと、一礼する。

足立総監にとっては、ヒヤヒヤものの時間が始まるだろう。

秋也は二人に向くと、

「諸先輩方を前に、誠に僭越ではございますが、ご指名を賜りましたので、一言お祝い申し上げます。剛君、花梨さん、ご結婚おめでとうございませう。そしてご両家ご親族の皆様、心よりお祝い申し上げます。本日は、この素晴らしい披露宴にお招きいただき、誠に光栄に存じます」

そして、両家に向き直り一礼しながら祝辞を述べる。

「皆様、どうぞご着席ください」

秋也の言葉で、一同着席する。

そして、原稿をポケットにしまい込む。

直哉が自衛隊幹部席を見ると、足立が渋い顔をする。そして秋奈が何か言うと、苦笑いに変わるのをにこやかに見ていた。

その秋也の、長くも心の籠った祝辞が終わると、秋奈と紗花がそれぞれの夫に付き添われて、そつと会場を出て行くのが見えた。

直哉はすつと立ち上がると、めぐみの横で、

「めぐみ先生、多分陣痛でしょうね？」

そう言うと、めぐみは頷いて会場からそつと抜け出す。

そのまま、ジュースとビール瓶を持って新郎新婦仲人席へと向かう直哉。

「おお、先輩。ありがとうございます」

「結婚おめでとう。君に限っては戦死の心配はないから、安心して花梨さんを託せるんじゃないかな？羽佐間准将も」

ビールを注ぎながら「まあ飲みなさい」と、一気飲みさせてそれを見たと、

「郷里君には、グラスじゃなくてジョッキのほうが良いかな？」

「はっはっは。皆さんに注いでもらえるよう、今日はグラスで十分です」

「儀礼服も様になっていたが、タキシードも良いね」

「はっはっは。馬子にも衣装、と言うやつですな」

「幸せそうで何よりだ」

そう言うと、今度は花梨の前にやって来る。

「人間として、私の想像以上に成長したね」

「いえ。私など、まだまだ未熟です」

ビールを注ぎながら語る直哉。

「いやあ、未熟じゃない。半熟と言ったところかな？郷里くんと一緒に、花梨も隣の若人を支えてやってくれ」

「はいっ。死んでしまった、葵の分も生きると決めています。それまで愛ちゃん提督を支えます」

「うん、それでいい。夫婦は支え合うものだからね」

「ところで。紗花さんと秋奈さん、大丈夫ですか？」

「めぐみさんも居るから大丈夫だろう。足柄と妙高も行ったし」

「そうですね……無理なお願いをしてみましたね」

「いやあ。これで無事生まれたら、クリスマスにウェディングにバーステードと、めでたいことだらけになるさ」

申し訳なさそうにする花梨を慰めてから、招待した花梨の同期がやってくるのを見て、敬礼する同期に答礼しながらその子達にビール瓶を渡して、

「禁酒解禁で飲みが足りないようだ。任せるよ」

と、ニヤツと笑ってから仲人席へずれる。

「やあ、愛ちゃん。大任ご苦労さま」

同期の女子達に、どんどん飲まされている花梨を尻目に、愛に声を掛ける。

「あはは、一つポカしちゃいました」

『『全員起立』を忘れてたね？まあ良いじゃないか、司会がどんどんやらかすんだから」

「あははっ」

そう言いながら、グラスにオレンジジュースを注ぐ。

「深海棲艦化した健太には、ビールが良いかな？」

「いいえ、ジュースで。ビールは苦くて嫌い、って言っていました」

「そうか。今度ゆつくり、酒の良さを教えねばならないな」

「あまり飲まさないでくださいよ。深海棲艦化して成人になったとは言え、中学生ですから」

「ははは、努力するよ」

釘を差すのを忘れない愛に、笑いながら健太の前にずれる。

「師匠、将官昇進おめでとう御座います」

「まあ、今日は結婚のほうがおめでたいよ。ジュースでいいかい？」

「はいっ」

「一番弟子の健太は成人だから、後三年で結婚式だね？嫁三人で」

「あははは………」

「その時には、もちろん駆け付けるからねえ」

「ありがとうございます」

「えー、それではこれより、土佐鎮守府空母二人娘による、艦載機曲芸飛行を行います」

その翼の言葉に、席に戻る。

伊勢と鳳翔が同時に矢を放つと、艦戦が曲芸飛行をして、ハートのスモークを作る、と言う演出が為される。

皆万雷の拍手をする。

『改めまして、おめでとう御座いますー！』

伊勢と鳳翔が、祝福の言葉を述べる。

その後は出産報告があったり、ビスマルクとアイオワの漫才や、大井北上の居酒屋事件暴露話等、余興は続いている。

異例づくめの結婚式・披露宴がお開きになると、直哉を先頭に立ち上がり、会場を出て行く。

新婦側は妙高と眞一郎が、新郎側が鐵太郎と小夜子が、新郎新婦の横に並んでお見送りである。

「結婚と出産、おめでとうございます」

「うむ、ありがとう」

「名前はこれからですか？」

「紗花がもう決めててな、女の子で眞梨紗にするそうだ」

「眞梨紗ちゃんですか。もしかして、両親と姉で「文字ずつ？」

「ご名答」

笑う直哉と眞一郎。

それぞれから感謝の言葉を受けると、直哉はロビーに皆を集めさせる。

「愛ちゃんには、LINEで連絡して二次会は遠慮させてもらうことにしたよ。ここからは、一度戻って着替えたらカップルで自由行動を
していいよ。飲酒と問題だけは起こさないようにね？」

『はーいー！』

皆のクリスマスは、ここから始まるのだ。

クリスマスのできごと in 土佐③

新郎新婦達
それぞれから感謝の言葉を受けると、直哉はロビーに皆を集合させる。

「愛ちゃんには、LINEで連絡して二次会は遠慮させてもらうことにしたよ。ここからは、一度戻って着替えたらカップルで自由行動を
していいよ。飲酒と問題だけは起こさないようにね?」

『はーい!』

皆のクリスマスは、ここから始まるのだ。

皆で旅館に戻って私服に着替えたところで、直哉は中学生カップル
ズに、

「私達は今夜、帰って来ないから、皆それぞれで三部屋使っていいよ」

『はーい!』

カップルズが、手を上げて答える。

これは事実上の、カップル同室許可である。

「夕食を外で食べると思ってキャンセルしてるから、旅館で夕飯食
べるなら、フロントに連絡してね?」

『はーい!』

これは、史絵が手を上げた。

圭一と史絵は、あまりデートをしたことがなかったので、

旅館デートと洒落込むことにした。

お互い、旅館の浴衣でのんびり寛いでいる。

「そう言えばさあ?」

圭一が切り出す。

「三島のヘッドに会ったんだって? ごめんな、怖かっただろう?」

その言葉に、史絵は笑みを浮かべて首を横に振った。

「ううん、いい人だったです。真面目に考えてくれて、『圭一を待って
な』って」

「そっかあ……ああ見えて、ヘッドはオレのことを考えててくれ

て、『扶桑咲花と言う花を、大輪の花に咲かせるのはお前だけだ』って」
「……………」

その言葉に史絵は照れてしまい、言つて良い言葉が見つからずに顔を赤らめる。

「そうだ、新しい小説つてどんなんだ？」

「艦娘をモチーフにしたんです、東京島嶼部に任官された小柄な提督『高梨 湊』という提督と艦娘による物語で、今回は連載物の予定で
す」

「そつかあ。史絵、改めて訊くけど、俺とお前、釣り合つてるか？」
その問い掛けに、史絵は慈母のような優しい笑みを湛えた。

「釣り合つてますよ、最初から。私にとつては、大番長原 圭一は白馬の王子様です。ちよつと気性が荒くて喧嘩っ早いのが玉に瑕ですけど、ご愛嬌です」

その言葉に、圭一は顔を赤らめる。

「そ……そうか？」

圭一は手のやりどころがなく虚空を掴んだり、右往左往させていたが、決意を固めると史絵の隣に座つて抱き寄せた。

「ぎゃ……………圭一」

「史絵、どこにも行つてしまわないでくれ、俺と一緒にいてくれ。だから俺は頑張る」

「突然どうしたの？圭一？」

「いいか、俺より先に死ぬな。俺よりずっとずっと長生きしてくれよな？」

「突然の『亭主関白宣言』ですか？」

その不器用な愛情に、ふふつと笑いながら圭一を抱き締める。

その柔らかい胸が圭一に当たつて、圭一は顔を真っ赤にする。

そんな圭一の反応を、史絵は愛おしく感じていた。

「……………あの、やっ？」

「何です？圭一」

「俺達、婚約者……でいいのかわ？」

その気の早い言葉に、史絵は堪え切れずに笑つてしまう。

「ふふ……うふふふ」

「何だよお？」

「私からのクリスマスプレゼントは、これです」

一旦離れると、カバンからリングピローを取り出して蓋を開ける。「ケツコンカツコカリリングです。人間用に明石さんが改良したもので、カツコカリの段階では子供が生まれなくなるそうです。圭一ったら突然したいって言い出して、今までヒヤヒヤものだったんですよ？」

少し顔を赤らめながら、腰に手を当ててお説教ポーズをする史絵。今までは、ギャルズ達がたくさん持っているモーニングアフターピルで何とかなっていたのである。

「クリスマスプレゼントです、受け取って………ただけですか？」
事実上の婚約^{プロポーズ}の申し出である。

「もちろんだぜ！」

「それじゃあ、付けてください、圭一」

「おう！」

圭一は、リングピローからケツコンカツコカリリングを取り出すと、史絵の左手を取って薬指へそつと填める。

「それじゃあ、私も………」

史絵も、リングピローからケツコンカツコカリリングを取り出すと、圭一の左手を取って薬指へそつと填める。

銀色の指輪は、キラキラと輝き始めている。

「愛情がある限りは取れないし、輝き続けてるんですって」

「そうか！俺達好きあつてるんだな!？」

「うふふ、そう言うことです。今度、三島ヘッドに報告に行きましょう？」

「おうっ！」

元気良く答える圭一に、史絵はふふつと笑いながら抱き締める。

圭一はやんわり離れると、荷物からラッピングされた箱を取り出す。

「ほい、プレゼントな」

「有難うございます、何が出て来るかな……?」

ラッピングを開けると、Apple Magic Mouse 2の箱が中に入っている。

史絵は、目をまん丸くする。

「え、こんなに高いものどうしたんですか?」

「うん、小遣い貯めて買った。ヘッドの知り合いの電機屋店員に、従業員割引使ってもらって」

「今、一番欲しかったものです……ううん、一番めかな?」

「一番は?」

「もちろん、圭一です、うふふっ」

そう笑いながら、史絵が抱き寄せると唇を重ねる。

「んっ……」

「んう……」

そっと離れると、圭一はゆでダコのように真っ赤になっていた。

「あく……甘いデートはここまでだな?」

「えっ?」

キョトンとする史絵に、圭一はカバンから勉強道具を取り出した。

「ここからはお勉強デートだぜ」

「ふふ、そうですね。圭一には頑張って「東京晴嵐男子学校中等部」の編入サバイバルマッチに勝ち残ってもらわないといけませんからね?」

「おうよー」

夕食まで、一生懸命勉強する圭一と、執筆しながら勉強を教える史絵の姿があった。

「かんちゃん、なんかデートプランあるう?」

「海を見に行かない?見慣れてるだろうけど」

「いいよお?」

ほふつと頭を撫でる優花。

実は、寛太は背が低いので優花の方が背が高い。

手を繋いで、海に向かって歩く。

埠頭に二人腰を下ろすと、寛太がポツリと呟く。

「優花ちゃん、僕でよかったの?」

「もお、良いから告白を断らなかつたんだよお?」

「そ、そうだったんだ……」

「優花も選ぶ権利はあるよお? そんな寛太にはこれだあ」

寛太の左手を取ると、ポケットから取り出したケツコンカッコカリリングを左薬指に填める。

もう既に、優花の左手薬指にはカッコカリリングが填まっている。

銀色のリングは、キラキラ輝いている。

「うふふ、これでかんちゃんは逃げられないよお?」

「逃げられないよお?」

「優花と結婚するの。優花もお姉ちゃんと一緒に嫉妬深いから、他の女の子に浮気したら……」

「したら?」

「お家に閉じ込めちゃうっ♪ぐるぐる巻きに縛っちゃうっ♪」

「し、しないよ……僕だって優花ちゃんだけだよ!」

ちよつと物騒な会話が交じるのは、姉妹だからか?

「この指輪って、子供ができなくなる効力もあるんだって、カッコカリの間は。かんちゃんが結婚できる日になったら、解除しようね?」

「うんっ!」

「うふふ、優花幸せえ」

優花は寛太に凭れ掛かり、寛太はそれを抱き寄せる。

「そうだ、僕からもプレゼントがあつたんだ」

「ん? プレゼント?」

「うん、これ……」

ラッピングを開けると、ネックレスケースが入っていた。

中身は、鍵デザインのネックレスと、錠前デザインのネックレスのペアネックレスだった、

優花には、錠前のネックレスを付けてあげる。

「これ、この前の仙台のデートで……」

「うん、買った買った」

「あれ、1万円以上したけど大丈夫だったの？」

「お小遣い貯めたのと、お母さんに前借りしたので買った買った」

「もう……かんちゃんったら。お礼にちゅーしちゃう」

そう言うのと、唇を重ねる。

「んう……」

「んっ……」

こっちのカップルはキスは日常茶飯事なので、二人共えへへっと笑う。

「かんちゃん」

「なあに？」

「優花ねえ、キスより先に進みたいなあ？」

「……うん」

「旅館に戻ろ？」

「うんっ！」

こうして二人は、旅館に戻って行った。

二人して圭一達のところに行って「エッチってどうやれば良いんですか？」と史絵訊いて、二人を赤面させたことはご愛嬌である。

「♪」

慎とギャルズ達は、カラオケボックスでデートしていた。

「望超うまいな」

「それな」

「だね」

歌の上手い望はレパートリーも広く、最新の歌から、演歌まで歌える。

望曰く、ばあちゃんによく連れて行ってもらった、らしい。

歌い終わったところで慎が、

「そろそろ、プレゼント交換会しようかね？」

『はいー！』

三人は、揃って同じものを取り出した。そう、ケツコンカツコカリリングである。

「おい、お前等まさか……?」

「ハーレム確定な感じ?」

「それな」

「うん」

「いや、俺も同じものを用意してたんだよ」

『…………』

全員が顔を見回すと、皆なでお腹を抱えて笑い出す。

「このリング、チョーすごいんだよ? 避妊効果もあるから、コンドーム無しでできるね?」

「それな」

「うん」

「アホかお前等? コンドームは、避妊だけじゃないだろ?」

ペしペしペしと突っ込む。本日は、プラバットは持参していない。

四人同時にリングピローを開けた瞬間、キラキラと輝いて皆の左薬指にリングが填まっていた。

ケツコンカツコカリリングが……

皆、強い霊子を感じるようになっていた。

「おお……何か力が漲るな」

「四個分のリングな感じ?」

「それな」

「うん」

「そう言えば、訊いときたかったんだが、俺で本当に良かったのか?」

「どういうこと? 慎」

「それな」

「うん」

「なし崩しで付き合うようになって、俺もお前等も告白してねえだろ?」

『あっ』

「だろ? もうね、アホかと、馬鹿かと。と言う訳で、ケツコンカツコカ

りもしたことだし、言わせてもらおうわ。俺達は戸籍上の結婚はしない。たりめーだ、誰かを一番にしたりはしない」

『うん』

「事実婚ってことになる。苦勞を掛けるかもしれないが、それでいいか?」

『うんっ!』

「と言う訳で、遠慮なく封印を解除できる訳だ」

「えっ?」

「慎……?」

「櫻子達を孕ませたいの?」

「アホか!」

また、ぺしぺしぺしつと頭を叩く。

「ちげえよ。俺の親とお前等の親の許可をもらって、親父が大家の、俺ん家の隣の空き家の使用許可が出たぞ。生活費として、当面仕送りも出る。まあ、現物支給だけだな?」

「同棲開始!」

「まじで!」

「おお!!」

その同棲宣言に、歓喜の声を上げるギャルズ達。

「指輪の開封条件は、俺を含めて全員、高校を出ること。そしたら俺は就職する。お前等も就職になるな。お前等の18の誕生日に開封だ。オレが中学出るまでは、親とお前等に養ってもらおうことになるが?」

「うんうん、養つちやう!高校も最低ランクだけど頑張る!」

「それな、バイトもするよ?」

「うん。三人で協力すれば、生活できる」

養育宣言に、慎はニツと笑って、

「さて、お前等の告白も聞かせてもらおうか?それな、とかうんとかはなしな?」

そう言うのと、望から真面目な顔になって話し始める。

「あたしは慎の優しさに惚れて好きになったけど、今はDSの慎がもっとう好き!」

「……………おいつ！」

「やんっ」

謎の告白に対し、望の頭をべしっと叩く慎に、声を上げる望。

「私も、飄々としてる慎が好き」

奈緒子も、真面目な顔で告白する。

「三人で慎を愛そうって決めたから、三人分の愛を受け取ってね？」

櫻子も真顔で言うと、三人が慎に飛び付いて、抱き付いた。

「おわっ」

「旅館戻ったらシよ？」

望が耳元で囁くと、慎はふふふっと笑い始める。

「元からそのつもりだよ？師匠が帰って来ねえってことは、そう言うこった」

『お〜』

そうして四人は、カラオケボックスで散々歌い捲ってから、仲良く旅館に帰って行くのだった。

クリスマスのできごと in 土佐④

旅館で着替えた後、それぞれのカップルが出掛けるのを見送った直哉と秘書艦ズ。

「さあ、我々も行くのか？」

「ところで、どこに行くのです？」

笑みを浮かべる直哉に、電は首を傾げた。

「そうだね。まずは、坂本将補の墓参りに行くのでしょうか」

「知り合いだったのですか？」

再び不思議そうな顔をした電に、直哉は笑みを浮かべたまま首を振った。

「いいや、直接の面識はないさ。でも、優秀な自衛官だった、と聞いているよ」

「遺された艦娘達も大変なのです」

「そうだぴよん。司令艦娘として頑張ってる、って聞いているぴよん」

「確かに、大変そうですね」

「そうだね」

直哉達は、レンタカーで五人乗り乗用車を借りていた。直哉の乗ってるのと同じプリウスである。

薄雲がハンドルを握り、電が助手席に座って、後部座席の真ん中に直哉。その両サイドに卯月、子日が座る。

薄雲と電はハンドルキーパーで、ノンアルコールカクテルを飲んでいたので。

霊園に到着すると直哉が花束を、電がお線香をあげる。

五人で手を合わせると、直哉は振り返った。

「坂本龍馬は、『日本を洗濯したい』と言っていたそうだけど、正に坂本将補は彼の生まれ変わりだったのかもしれないね」

直哉が肩を竦めると、艦娘達も頷いた。

「死に方まで、彼の真似をして欲しくなかったのです」

「そうだぴよん、殺される理由なんてなかったぴよん」

「そうですね」

「子日は知らない人だけど、死んじやったら全て終わりだよ」

子日の言葉に、直哉も頷いた。

死んだら全て終わりだ。勝ち逃げして逝ってしまった……

羽佐間准将の言葉を思い出す。

「でもね。彼の遺志は、確かに受け継がれているさ」

ふっと笑い皆の頭を撫でると、直哉は悪戯っぽい顔をして、とんでもないことを言い出した。

「さあ、帰ろうか?」

「えっ? 旅館には戻らないって言ったのです」

「どこに帰るびよん?」

「もしや?」

「宮戸島!」

電が首を傾げ、卯月は不思議がり、薄雲が察すると、子日は驚いた顔をして口を開けている。

「そだよ。貰ったチケットを何とか振り替えて、羽田経由の仙台空港の最終便を取ってあるから帰ろう。やはりクリスマスは、慣れ親しんだ宮戸島で、五人だけで過ごしたいのさ」

等と直哉は言っている。

嫁艦達は、あんぐりと開いた口が塞がらない。

「どうしたんだ?」

「いや、どうしたんだって、番長達はどうするのです?」

至極当然である。一応彼は、引率者としてここに来ているのだ。

『朝起きたら、引率者は宮戸島に帰っていた』ドツキリかねえ? 差し詰め。さつき、史絵と席を外しただろ? その時に、史絵には事情を話して20万ほど預けておいたんだ。使い切っていいから、全員無事に帰って来てね。って」

「おー、ドツキリを仕掛けるびよん」

「知りませんよ? 後で何言われるか解ったものじゃないです」

「いいじゃん? たまにはそう言うドツキリも」

「ふふっ。直哉は、子供の時があるのです」

艦娘達が笑いながら直哉を諷めるが、直哉は笑っている。

「まあ、彼等へのサプライズはそれだけじゃないさ」

そう言って直哉達は、高知龍馬空港から空路羽田経由で仙台空港へ移動していた。

何故か直哉の車は仙台空港に移動されており、仙台空港から宮戸島の直哉の自宅に帰って来ていた。

自宅のリビングに入って電気を点けると、部屋にはびっしりとクリスマス飾りがされていた。

出掛ける時には、何もしていなかった筈である。

「これは……?」

「いやあ、武藤提督に頼んだんだよ、飾り付けをしておいて欲しいって。冷蔵庫を見てご覧?」

「冷蔵庫なのですか?」

電達がトトとテと冷蔵庫に向かい、扉を開けると中にはご馳走の数々が入っていた。

そう言えば出掛けるから、と冷蔵庫をほぼ空にしていたのを思い出した。

そしてシャンパンが冷えている。

温めないといけないものはレンジで温めて、皆で手分けしてダイニングテーブルに戻って来ると、

直哉はサンタ衣装を着て、袋を持って待っていた。

「さて、プレゼントを渡そうか?皆テーブルに置いておいで」

『はーい!』

「まず、子曰。クリスマスに欲しいものは?」

「スマホとタブレット」

「と言う訳で、子曰には最新スマホと12インチタブレットをプレゼントするよ」

「わあ!!やったあ!」

子曰が大燥ぎで、直哉から渡されたラッピング済みの携帯電話会社の袋を開けて、スマホとタブレットを取り出すと、

「ありがとう!直哉!!」

とジャンプして抱き着き、頬にキスをすると早速スマホから開封し始める。

「次に卯月、クリスマスに欲しいものは？」

「最新のゲームソフト！」

「卯月の言つてた欲しいソフトを全部買つておいたよ」

「おおお!!すごいぴよん!直哉、ありがとうだぴよん」

ラッピングされたゲーム屋の袋を直哉から受け取ると、同じく直哉にキスをする。

「薄雲は、欲しいものは何かな？」

「はい、電子書籍リーダーを希望していました」

「と言う訳で、大型電子ブックリーダーと、その中にクレジット10万円入れてあるから好きな本をかうと良い」

「分かりました。感謝します、直哉」

薄雲はペコリと頭を下げる。キスしたさそうな顔をしている為、直哉が身を屈めるとそつとキスをした。

「最後に電だが、電の欲しいものは？」

「電気自動車なのです。でも、ローンで買っちゃったのです」

「……だろう?納車前つてことで、車屋さんに最新カーナビとオーディオを追加で付けてもらったよ、あと、うちで充電できるように電気工事も手配したよ」

「おおおお!!!ナビとオーディオと充電ポートは、予算で諦めていたのです。直哉、ありがとうなのです!!!」

目録を電に渡すと、電も抱き付いてキスをする。

「直哉サンタさん、ちよつと待つのです」

電達が、どどどつと二階に駆け上がって行くのを見送ると、すぐに戻つて来る。

ラッピング包装された箱。

「直哉。これ、電達から直哉へのプレゼントなのです」

「お。皆、ありがとうな」

包装と箱を開けると、直哉が仙台でそろそろ替え時かな?と擦り切

れた自分の財布を見ながら、欲しいな…と呟いたブランド物の財布が入っている。

「それで、もう一つ。皆で話し合って決めたぴよん」

「私達は妊娠が可能になりました」

「でも、第一子は……」

「電と直哉との間の子供が良い、って皆賛成してくれたのです。一気に産休は出来ないのです」

「それじゃあ、四人の年子の異母兄弟が生まれるな？」

直哉が笑うと、全員笑ってダイニングテーブルに着いた。

シャンパンをお互い注ぎ合うと全員で、

『かんぱーい!!』

楽しい、遅めの夕食が始まる。

途中から卯月はゲームを始め、子日はスマホとタブレットを嬉しそうにしながら器用に弄っている。

薄雲は、黙々と電子書籍リーダーで読書を始めている。

一番始めに購入したのは、電子書籍版が発売された『金と銀の瞳の龍の物語』である。

「ねえ、直哉」

「何だい？」

電が直哉の隣りに座って声を掛けると、ブランデーを飲み始めた直哉は電の方を向いた。

「鎮守府が始まってから、また新しい年が来るのです」

「そうだね」

「二人が着任した時には、思ってもみなかったことなのです」

「卯月や薄雲が来て、もう二回目の年末なんだね。短いようで」

「長かったのです。いろんなドタバタがあったり」

「まあ、これからもいろんなドタバタがあり続けるんだろうな？」

その言葉に、電はふふっと笑った。

皆も、直哉の方を見て笑い掛けている。

皆に笑顔で返す直哉。

笑い声が、辺りを包み込んだ。

寝室で、電と直哉が買い直したキングサイズベッドに横たわっている。

「電」

「どうしたのですか？」

「ありがとうな」

「何がなのですか？」

首を傾げる電に、真面目な顔をしている直哉。

電が不思議がつっていると、直哉は電を抱き寄せた。

「こんな私に、秘書艦として連れ添って何年か。嫁艦として一年半、私は電に出会えてよかった」

「他にも居るのですよ？」

「原点は、やはり君だよ。だから皆、これを望んだんだろう？」

「かもしれないのです」

「君が卯月と一緒に嫁艦にしたい、と言い出して、薄雲を受け入れて、子日も受け入れてくれて」

その言葉に、電はふふつと小さく笑った。

「また増えるかもしれないのです」

「それは私が困るな。電はそれで良いのかい？」

「嫁達は、皆仲良しなのです」

直也は肩を竦めたが、電は自信満々な笑顔を見せる。

「もしかしたら、羽佐間准将のようになるかもしれない、ってことかな？」

「かもしれないのです。直哉はいい男なのです」

「ありがとう」

頭を撫でる直哉に、擦ったような顔をする電。

「さ、あの子達も見てます。早速始めるのです」

ドアの隙間から覗き込む三つの目をちらりと見ながら、電は直哉を見上げると唇を重ねる。

『んっ……………』

翌朝。土佐に居る番長と愉快的仲間達が目を覚ますと、枕元にプレゼントが置いてあった。

直哉が、仲居さんに頼んで置いたのだ。

皆の欲しいものが入っている。

それよりも深刻だったのは、置き手紙だった。

『宮戸島に帰ったよ』

「師匠は、俺達を置いて帰っちゃったってことか!?!」

「……………」

憤慨する圭一のその言葉に、仕掛け人である史絵は何も言わない。

「そんなあ……………」

不安そうにしている寛太。

「だいじょうぶだよお。飛行機乗って帰るだけだからあ」

天然の優花は動じていない。

「…………ふむ。史絵先輩、何か知ってるんじゃないですか?」

「い、いえっ! ドッキリなんて事は知りません!」

鋭い慎の言葉に、慌てて無意識にバラしてしまったダメダメ仕掛け人に、全員が溜め息を吐く。

「いくらか預かってますので、それとチケットで帰りましょう。ね?」

皆を宥めようとする史絵だったが、あまり効果はなく。

東京で三高ワンダーランドに立ち寄って、宿泊までして預かったお金をほぼ使い切って宮戸島に帰って来た、圭一と愉快的仲間達であった。

『ただいま〜』

鎮守府にやって来た一同に、直哉と電は顔を見合わせて笑った。

「思ったよりも遅かったね。史絵ちゃん、お釣りは?」

「その、ありません」

「そうだろうねえ」

ふふつと笑いながら、肩を竦める直哉。

電も笑いを堪えている。

「師匠、非道いじゃねえか！」

「まあまあ、圭一」

「俺達も預かった金使い切ったから、相当酷いぞ？」

「だよねえ」

「慎の言うとおり」

「それな」

「うん」

圭一は憤慨し、寛太が宥め、慎がツツコミを入れて、女子達が同意する。

「クリスマスが終わったら、こっちも大仕事だな」

『え？』

慎がギャルズ達を見ると、ギャルズ達は首を傾げる。

「引越しだよ。年内に終わらせるぞ？」

『はーい！』

慎がそう言うのと、三人共笑顔で手を挙げる。

「オレも手伝うぜ」

「はい」

「僕も手伝うよ」

「そうだねえ」

残りの面々も、俄然やる気を出している。

「それじゃあ、鎮守府は今日で仕事納めにしようかね？」

「なのです」

こうして、皆の協力の下、クリスマスの翌日に大引越しが始まる。

お引越しし&大晦日

慎と望、それに奈緒子、櫻子の四人は、それぞれの家から荷物を持って来る。

5LDKの大きな家だが、宮戸島の侵攻以来買い手が付かなかった為に、慎の父親が息子用に持っていた物件だったのだ。

住むと決めてから内覧もおかしいが、リフォーム済みでオール電化のこの家。

20畳のLDKにはダイニングテーブルとリビングソファアが運び込まれており、既にテレビも鎮座ましましている。

キッチンの家電も、既に新品が鎮座しており、ビルトイン型のIHコンロや食洗機等、最新のものを揃えてある。

これは、慎の父と直哉が酒飲み仲間たまに居酒屋で飲んでいる仲間のもあって、直哉の仕業である。

それに、全員では入れないものの広めのお風呂、洗面室にトイレ、LDKから出入りできる一部屋の10畳間。

そして二階には八畳間四部屋の居室があり、そのうちの一つには屋根裏部屋への階段がある。

既に慎が、大家の息子特権でこの部屋に決定しており、旅行中に家族の手により荷物を運び終えている。

「わぁ、どの部屋もチョー広いし綺麗」
「それな」

「うん」
早速部屋決めのじゃんけんを行って、荷物の運び込みが始まる。

一階の10畳和室は寝室に決まり、皆各々の布団を運び込む。
「おつす！」

「手伝いに来ました」
「手伝いに来たよ」

「おはよお〜」
圭一と史絵、それに寛太と優花がやって来ると、人数も増えて賑やかになる。

とは言え、引っ越し屋さんがやってくれる為、皆リビングに集まってソファで寛ぐ。

「ふっかふっかで良いソファだな、流石師匠」

慎が、ふふつと笑いながら凭れ掛かっていると圭一が、

「その師匠なんだが、大晦日の食事はここでやんね？って言ってたぜ」

と、直哉の伝言を伝える。

「いいな。八人掛けテーブルだし、ソファもあるから何とかなるだろ。どうせ、飯は師匠の奢りなんだろう？」

「だあな」

二人の不良学生はふふつと笑うと、辺りを見回す。

ダイニングテーブルでは優花と寛太と一緒に宿題をやっており、史絵は望の勉強を見ている。

そして奈緒子と櫻子は、大型テレビでゲームをやっている。

おそらく、この慎ハウスが二つ目の溜まり場になるに違いない。

大晦日。

鎮守府では、大掃除が始まっていた。

高菜家の大掃除は、既に前日に済ませており、鎮守府の大掃除には圭一と愉快的仲間達がやって来ている。

「こうやって、愛たちも大掃除してんだろうな」

圭一は、感慨深げに二階の窓を磨いている。

そして艦娘達も、工廠から倉庫を大掃除している。

今までやっていた大掃除出撃は、不要と判断されて廃止された。

圭一と史絵以外の面々は、慎ハウスの大掃除の手伝いに向かった為、

鎮守府の大掃除は、直哉と史絵と圭一の三人で行っている。

史絵は漸く、月刊誌連載の原作担当の「小さな提督と艦娘の物語」の三回分のプロットを送り終えた為、自身の入試に専念できるようになった。

圭一は塾にも通い、自分でも勉強して、まさかの期末テストトップテンに名を連ねていた。

それでも夏海曰く、まだまだ油断するな、と言うことである。

「おーい、師匠。応接間の掃除終わったぜー」

「ああ、ありがとうね」

圭一が応接間から降りて来ると、直哉は普段使っている机の掃除をしている。史絵は、エプロンに三角頭巾、と言うお掃除仕様で蜘蛛の巣払いをしている。

「工場の掃除終わったのです」

「了解」

電達も、鎮守府の庁舎に戻って来る。

そこからは、賑やかに和気藹々と掃除になる。

そして、慎ハウスの掃除の面々も戻って来ると、皆待望の儀式が始まる。

賞与授与式である。

電の号令で、艦娘達と圭一と愉快的仲間達は二列になって並んでいく。

「それでは、仕事納めの会を始めます。電、年末賞与です。ご苦勞様」

「ありがとうございます！」

電に賞与袋が手渡されると、電は初売りで何を買うか期待が膨らむ。

「次に、卯月、年末賞与です。ご苦勞様」

「ありがとうございます！」

卯月も、新しいゲーム機を買おうか考えている。

「次に、薄雲、年末賞与です。ご苦勞様」

「有難うございます」

いつもの、抑揚のない声で受け取る。

「次に、子曰、年末賞与です。ご苦勞様」

「わあ、こんなにいっぱい！ゲームの課金しようっと！」

初めてもらう賞与に、目をまん丸くさせる子曰。

最近スマホゲームにハマっており、パズルゲームを日夜やってい

る。

とは言え、高菜家は寢室スマホ持ち込み禁止の為、布団に入るのが一番遅いのが子曰である。

「さて、ここからはちよつと早いお年玉だね。原 圭一君。スタートラインまで後もう少しだ、頑張つてね」
「うつつ」

受験に打ち勝つのがゴールじゃない。

圭一は、男子ばかりの特進コースで生き残って行かなくてはならぬのだ。

笑顔で受け取るが、今年は早速開けて中を確認したりはしない。

「草加史絵さん。「小さな提督と艦娘の物語」連載開始おめでとう。また困ったら、広報を通じて協力できるところはするからね？」

「はいっ、ありがとうございます」

史絵も、お年玉を笑顔で受け取る。

「次、富永寛太くん。優花ちゃんと仲良くね」

「はいっ！」

寛太も笑顔で受け取る。

「次、西野優花さん。いつも明るく元気だね」

「はぁーい」

「優花ちゃん！開けるのは後で！」

受け取って開けようとするのを、寛太に止められる。

「齊藤 慎くん、三代目の名誉隊員隊長、よろしくね？」

「圭一達も旅立ったら、少し寂しくなるっすね」

「そうだね。でも、圭一達にとっては大事なことだからね。笑顔で送らないと」

「そっすね」

そんな会話を交わしながら受け取る。

「横澤 望さん、入試、頑張つてね？最悪浪人しても、高校行くんだよ？」

「マジ頑張ってる！ふみえもんが勉強教えてくれて、最低ランクの次の高校の射程圏内に入ったよ！」

自信満々に言うが、何とか滑り止めを確保した状態である。

「平岩奈緒子さん。慎と仲良くね」

「それな」

いつもの口癖を言いながら受け取る奈緒子。

「田中櫻子さん。あんまり羽目を外さないようにね？同居生活」

「うん」

同じく、いつもの口癖で受け取る櫻子。

それから全員の前に戻ると、皆を見回して、

「本時刻を以て、2019年の全ての任務を完了したことを確認した。

ご苦労様」

「全員敬礼！」

電の号令で、全員がビシッと敬礼する。直哉も答礼する。

「直れ！」

「今年は、圭一達の彼女達も鎮守府にやって来て、一層賑やかな年になったと思います。来年は圭一と史絵は東京に巣立って行きます。

そしてギャルズ達は、高校生に多分なると思います。来年もより一層勉強や遊びに、艦娘達は一層の任務の達成に励むよう祈念して、一本締めを行います。お手を拝借、よおーっ！」

パン！

「お疲れ様でしたー！」

直哉の言葉に、

『お疲れ様でしたー！』

と、皆も挨拶する。

直哉達は、鎮守府を施錠してから一旦高菜家に届いたおごちそうを
持って、皆で慎ハウスへ向かう。

各自のグラスにジュースやお酒が行き渡ると皆で、

『かんぱーい！』

と、大晦日の夕飯が始まる。

「いけーやれーアツパーだ！」

「そこーぶっ潰すのです！相手のガードが下がってるのです！」

「ああ、バカ！攻めどきだっつうのにハゲ！」

「いや、スキンヘッドだからな？あれ」

直哉と電と圭一と慎は、ダイニングテーブルで持ち運び可能の小さいテレビで、年末特番の格闘技を見ている。

リビングの大きいテレビでは、下町という芸人コンビと仲間の芸人達の、年末恒例の笑ってはいけないシリーズを見ながら、女子達と寛太は大笑いしている。

『あははははは!!』

皆ご馳走を食べながら小休止したり、テレビの移動をしたりして、好き勝手に過ごしている。

ゴーン ゴーン

除夜の鐘が鳴り出すと直哉が、

「そろそろ行くこうか？」

『はい！』

宮戸島にある五十鈴神社に、お詣りに出掛ける。

一同ぞろぞろと五十鈴神社に向かうと、それぞれ祈願をして圭一と史絵、あと望には皆で合格祈願の大きなお守りを買ってプレゼントした。

「さて、ここで解散だな。皆今年もよろしくね？」

『はいっ！』

「行くこうぜ、史絵」

「はい」

圭一と史絵は圭一の家で過ごすらしい。最初に手を取り合って帰って行った。

「かんちゃん、うちでおそば食べよお」

「そうだね」

ぎゅつと腕を組んだ優花に、寛太が頷くと帰って行く。

「帰ったら、イケメンアイドルのコンサートテレビで見ながら蕎麦だね？」

「それな」

「うん」

「そうだな」

慎とギャルズ達も別れて行く。

そして家に帰ると、スマホに大量のことよろメールが入っている。防大の同期や、同級生達からのメールである。

それから、それぞれメールを返し終えると、五人で年越しそばを食べ、眠りに就く。

残念なことに、仕事始めは四日からだが、一日^{元日}〜三日は各鎮守府には待機命令が発令されて、深海棲艦が発見され次第、出撃するのだ。

2019年が終わわり、2020年がやって来た。

Extra Season／浦の星鎮守府編 邂逅

年も明けた2020年。仕事始めに、直哉達は早速硫黄島科学要塞研究所に呼び出された。

「明けまして……いえ、今年は喪中の年でしたね」

明石は、大垣 守を失ったんだ、と言うことを改めて思い出していた。

それを見た一同は、今年もよろしく、と返事を返す。

「さて、会談の目的を聞かせてもらおうよ?」

早速直哉が切り出す。

とは言え直哉には、会談の目的は大体解っていた。

目の前に、巨大な謎の装置が鎮座ましましているのだ。

円形の装置で、四方に立てられた円錐状の柱が印象的なその装置。

「何かのゲートなのです」

電が呟くと、明石が目を輝かせた。

電は、余計なエサを与えてしまったのです、と苦い顔になる。

「よくぞ聞いてくださいました。これは『クロスゲートシステム』と言いまして、好きな場所に移動できる装置です。無論、場所だけではなく次元も……要するに『大垣 守の世界の明石』の遺産の発展形です」

その言葉で、明石の意図は大体判った。

「これで過去に行つて、大垣 守の世界をジレエネから守ろうとするのは無理だよ。その時点で、大垣の世界は平行世界化して大垣の世界αになるだろうからね。タイム・パラドックスの一種の解答が平行世界マルチバース論だよ。やはり核は変えられない」

「やはりそうですか……」

厳しく指摘した直哉に、がっくり肩を落とす明石。

そんな彼女を慰めるように、直哉が続ける。

「まあ、世界間移動なんてものは派生世界を生み出すだけで、大垣 守の世界も派生世界かもしれないね?」

「派生世界……ですか？」

「そう。元となる世界が存在していて、次元に關わる出来事で派生する。例えば、2011年3・11ナイトメアデイも、もしかしたら他の世界では大震災が起きていた日かもしれない」

その直哉の仮説に、真面目に聞き入っている明石。

「まあそういう訳で、大垣 守の世界だけでも見に行こうかね？」

最後はきつちりフォローしている直哉と、突然目がキラキラ始めた明石に、夕張とアルティメットいなづまちゃんは頭を抱えた。その隣にいる島風は、我関せずな雰囲気である。

「そう言うのを待っていました！では早速参りましょう！」

そう言いながら、クロスゲートシステムを起動させ始める。

ウィーン……と起動した瞬間、円形の構造物の内側から大きな渦が現れて、空間が歪み始めている。

「何が起きたんですか!？」

「また失敗なのDEATHか!？」

夕張とアルティメットいなづまちゃんが怒鳴ると、明石は冷静に笑みを浮かべている。

「いいえ。これは、おそらく別の世界の私がゲートシステムを起動させたのでしよう。それに連動して、その世界に向かってゲートが開いたのだと思います。さすがは私、どの世界の私も天才天災で……」

会ったこともない平行世界の同一人物に、自画自賛している明石に直哉達が突っ込む。

「いや、早く止めるよ!？」

「止まらないのですか!？」

「早く止めるぴよん!!嫌な予感が増し増しだぴよん」

「もう手遅れだと思います」

「だね」

ゲートの渦はどんどん大きくなって行き、辺りのものをどんどん吸い寄せて行く。

夕張はアルティメットいなづまちゃんのおかげで、明石はワイヤーアンカーで壁に固定して、島風は素早く動いてその難を逃れるが、直

哉達がどんどんゲートへ吸い寄せられて行く。

そして、一気にゲートに吸い込まれる。

『うわああああああああ!!!』

そのまま、直哉達『宮戸島の提督と艦娘達だけ』がゲートに飛び込んで消えてしまった……

直哉達が居なくなった硫黄島科学要塞研究所。

直哉達を吸い込んで、機能を停止したゲートは姿を消していた……

その頃岩沼沖では、岩沼鎮守府の妙高四姉妹が哨戒に出掛けている。

すると突然、海からニョキッと円形の構造物に円錐が四本横に開いている物体を発見した。

「何なの、これ……?」

足柄が近付こうとした途端、中からワラワラと深海棲艦が現れた。

この深海棲艦は知性を持たず、敵意を向けている。

近付こうとした足柄に、ル級の砲弾が頬を掠めた。

「な……!?!」

一気に、バックステップで皆のところまで戻る。

「深海棲艦が攻撃した!」

那智は、驚愕の表情を隠し切れずに居た。

「あのゲート、もしかしたら異世界に繋がってたり……」

羽黒が、いやーな予想を立てる。

そして、ハッと全員が気づいた。

『また明石か?!?!』

その叫びは、砲撃の始まっている岩沼沖に木霊した。

「せ、戦闘態勢！散開陣形で対処しましょう！ 数が多過ぎるから救

援要請も！」

妙高が冷や汗を流しながら、どんどんと現れて来る深海棲艦に対処すべく、指示を出す。

「了解だ！」

那智は前に出ると、前線の駆逐級から沈めて行く。

「はいっ！」

羽黒も、那智と共にオフエンスを担当する。

「私が連絡を取るわ」

退がった足柄が、腰に帯びている無線機を取り出して、

「岩沼艦隊より岩沼本部へ。謎のゲートらしきものから、異世界の深海棲艦多数出現、交戦に入ります。明石案件です、救援を要請します。どうぞ?。」

と、岩沼鎮守府の羽佐間眞一郎准将に通信を送った。

『了解、すぐに扶桑と山城を差し向ける。どうぞ?。』

と、すぐに眞一郎から連絡が入ると共に、桐山からも通信が入る。

『こちら女川本部、宮戸島警備中の女川艦隊を向かわせる。どうぞ?。』
戦闘態勢を取る妙高四姉妹に、深海棲艦の群れは容赦なく砲雷撃の雨霰を叩き込んで来る。

それを必死に避けながら、深海棲艦達の群れに攻撃を加える。

次々と爆沈していく下位深海棲艦の群れを見ながら、増援にやって来た扶桑・山城も絶句していた。

「こんなに沢山?!」

「ああ、不幸だわ」

そして、女川艦隊の神通・金剛四姉妹・陸奥が到着した頃には、混戦模様となっていた。

『あまり無理はせず、現状を死守せよ』

眞一郎の指令で、この宮戸島ゲート事件の火蓋が切って落とされた。

そして南三陸の艦娘達や気仙沼の艦娘達も逐次投入され、どんどん戦線が拡大して行った……

その頃。

「う……ううん……ここは……?。」

直哉が意識を取り戻したのは、見たこともない建物の、医務室のベッドだった。

隣には、駆逐艦響が腰掛けている。

「浦の星鎮守府だよ」

その言葉に、直哉は直感的に平行世界に来てしまった、と実感していた。

浦の星と言う鎮守府は、聞いたことがない。

そんな直哉の心を見透かしたように、響は続ける。

「ここは、提督とは違う平行世界だと思うよ？」

そんな、まっすぐにじーっと見た響を、見つめ返す

直哉は、その瞳の奥に底知れぬものを感じると、無意識に目を逸らした。

「私は、宮戸島鎮守府の高菜直哉。階級は准将補だよ」

「知ってると思うけど、駆逐艦響だよ」

自己紹介の後、再び黙り込む二人。辺りが沈黙に支配される。

「皆を呼ぶね？」

「ああ。頼むよ」

ぽつりと響がそう言うと、電話を取り出して意識が戻った旨を、誰かに伝えていた。

電話が終わると、「そこで待っていて」と言い、響はそれ以上何も言わなかった。

医務室で待っていると、海軍の服を着た提督の少女と電と艦娘達がやって来た。

「君がここの鎮守府の提督かい？私は高菜直哉、宮戸島鎮守府で提督をやっている者だ。君は？」

その問いに、少女は極度に緊張をして自己紹介を始める。

「ピギヤ!?く、く、黒澤ル、ルビィとい、言います。ここ、う、浦の星鎮守府で、て、提督をしてい、いましゅ、よ、よろしくお願いましゅ！」

「噛んだわね。」

「あれは噛んだわ。」

「噛んだね。」

「噛みましたね。」

「噛んだのです。」

医務室にいた艦娘全員から総攻撃を受け、ルビイは恥ずかしさのあまり物陰に隠れてしまった。

「うう…男の人はやつぱり緊張するよお。」

そんなルビイの下にやって来た電は、笑顔を浮かべる。

「直哉は怖くないのですよ。だから出て来るのです。」

電に諭されて、ルビイは物陰から顔だけ出した。

「電ちゃん…本当に？」

「なのです」と言いながら、電が手招きをする。ルビイはそれに導かれるように物陰から出て来て、再び直哉の前に立った。

「さ、さつきはすぐに逃げちゃってごめんなさい。改めて、よ、よろしくお願いします！」

知っている少女提督とは違い弱気そうなルビイに、直哉は優しい笑みを浮かべながら、

「うん、こちらこそよろしくね。まだ小さいのに提督頑張ってるね。」

そう褒めると続いて、

「きちんと言えたのです。よしよし、なのです。」

と、電に頭を撫でられて、ルビイは「エへへ」と嬉しそうに暫く撫でられていた。その様子を直哉は微笑ましく眺めており、浦の星鎮守府の艦娘達は、

「あら、あんなに照れちゃって。かわいいわね」と足柄。

「あんなに嬉しそうな顔、嫌いじゃない。」と響。

「ですね。頭を撫でられて、嬉しくない人はいません。」と潮。

「いやいや、艦娘に撫でられる提督ってどうなのよ？」

そう言ってから、ぼそつと顔を赤らめて、

「私も今度撫でてみようかしら？」

と呟く霞と、思い思いの感想を持っていた。するとそこに、明石と入渠を終えた宮戸島鎮守府所属の三人の艦娘が入って来た。

「えーと、これはどういう状況ですかね？提督、取り敢えず三人の入渠が終わりましたよ？」

「あ、ありがとうございます。明石さん。その三人の子達が卯月ちゃんと薄雲ちゃ

んと子曰ちゃんかな？さつき電ちゃんから聞いたよ。よろしくね！」
『よろしく(びよん)(お願いします)！』

三人が、それぞれの言葉で挨拶をしていた。

「それとですね、テレポート後行方不明になったテレポーターですが、場所が判明しました。」

その言葉に、皆明るい表情になるが、対照的に明石の表情は、少し曇ったように感じられた。

「場所はどこなんだい？できるだけ、そちらに迷惑を掛けることはしたくないのだが……。」

「高菜提督、残念ながらそう簡単には帰れそうになさそうですよ？テレポーターがある場所は、迷宮要塞です。」

『え？』

明石の言葉を聞いて、浦の星所属の艦娘達の顔色が変わった。その様子を見て、直哉は何かありそうだと口を開いた。

「どうやら、厄介な場所にあるようだね？敵が強いだけならば何とかなるのだが。他に、何か問題があるのかい？」

その問いに、霞が答えた。

「迷宮要塞は、敵の強さもあるけど、それ以上に内部構造が複雑になっているのよ。」

霞の話聞いて、直哉は「それは厄介だ」と言い、腕を組んで黙っていたが、静かに目を開けると視線をルビィに向けた。

「こちらとしては、本当はしたくないのだが、浦の星鎮守府にも協力を要請したい。」

これは、ルビィ達の信頼度も考えてのことだったが、その直後の、「もちろん協力しますよ。高菜提督のためにがんばら…：精一杯サポートします。」

そう言うルビィの姿には、さつきのおどおどした様子はなく覚悟を決めている提督らしさが垣間見える。そんな提督を見て、些か嬉しそうな秘書艦、霞が話し始めた。

直哉は、そんな彼女を少し見直して、信頼できる提督だと思われる。と、評価を改めた。

「早速、作戦会議……にしようと思ったけど、暫くここにいるなら、この鎮守府のことを知っていた方がいいわよね？取り敢えず、鎮守府の案内をしようと思うのだけど。いいわよね、ルビィ？」

「うん、じゃあ行くかうか!？」

その会話の様子を、直哉は微笑ましそうに眺めていた。

演習

迷宮要塞攻略に向けて、直哉達は浦の星鎮守府と共闘することになった。

そこで、長期滞在がほぼ決まっている為、日常生活に支障が出ないように施設の案内を受けていた。

最後に、霞が執務室を案内した。

「——で、最後にここが執務室ね。私とルビイは大抵ここにいるわ」
一同は執務室に集まっていた。

案内を受けている間、一番うしろの電と直哉は、

「うちより豪華だね、流石海軍」

「なのです」

等と、ぼそつとした声で会話を交わしている。

何せ、宮戸島鎮守府はコンテナハウスなのだ。

「何か質問がありますか？」

と言うルビイの言葉に、直哉が手を上げ、

「寝る場所などは宿舍棟で事足りると思うのだが、私はどこでお昼……」

と、言い終わる前に電に足を踏まれた。

直哉は悪戯っぽい顔をして電を見下ろすと、再びルビイの顔を向いた。

「……いや、作戦立案を行えば良いのだろうか？」

「え、えつとそれは……どうしよう霞ちゃん？」

その問いに、困ったような顔をするルビイに、霞は溜め息を吐いて、「それぐらい考えておきなさいな！そうねえ……この執務室に、机があと一、二卓は入りそうなので、あの技術オタク明石に頼んですぐに作らせるわ。他には……なさそうね？なら、早速要塞攻略に向けて動き出すわよ？」

一同は頷き、ルビイも意気揚々と、

「うゆーがんばるルビイ！」

と声を上げていた。

そんな中、霞は明石に電話を掛け、執務机を30分以内に用意するよう手配を掛けていた。

30分後、執務室には高菜提督と電の机が用意されて、迷宮要塞攻略に向けての作戦を立て始める…筈だったのだが、

直哉は演習を提案したのだ。

「え、演習ですか…?」

目を丸くしているルビイに、直哉は内心溜め息を吐いていたが、隣の霞はある程度納得していた顔だったので、そこは救いだと考えていた。

「それは当然のことじゃない。お互いの戦闘力も知らないでの共闘は、リスクが高過ぎるもの」

その言葉に直哉も頷いた。

「霞の言うように、まずは一度お互いの事をよく知ることが大切だからね。今日の午後にもどうだろうか?」

ルビイは頷くも、一個気掛かりな点があるように口を開いた。

「今日は、ルビイ達は特に出撃任務は無いので大丈夫です。それよりも、ルビイ達の方には足柄さんもいますけど、どうしますか? 駆逐艦だけにしますか?」

そのルビイの言葉を聞いて、ふと直哉は意地の悪いことを思いついていた。

ルビイの提督に対しての姿勢を疑問視していた彼には、丁度いいと思っていたのだ。

「いや、その必要はないよ。寧ろ戦艦が居てもいいぐらいだ」

心の中で、戦艦がいても負けない算段は付いているけどね? と、言葉を付け加える。

電は、直哉が何を企んでいるか想像が付いていたので、大きな溜め息を吐いた。

「直哉、泣かせちゃだめなのですよっ!」

その笑顔に、直哉は肩を竦めた。

「ところで直哉、作戦はどうしましょう?」

演習前の作戦会議に一室を割り当てられ、薄雲が口を開くと直哉は暫し考える。

「うーん、作戦なんか要らないんじゃないかなあ?」

と言う直哉に、電は諫めるように、

「相手を過小評価するのは戦術の愚、と説明してくれたのは、直哉の持論じゃなかったのですか?」

と口を挟むが、直哉は困ったような笑みを浮かべて、

「まあそうなんだけどね。やっぱり、愛ちゃんとは違うよ」

直哉は、バツサリとそう断じた。

「愛ちゃんとは違う。なのですか?」

「そう。愛ちゃんには、元々才能があるかは未知数だった。本人もそれを自覚していて、周囲に頼ったり、戦術書を抱えて演習を繰り返しては参観日に臨んだ」

その言葉に、卯月はポツリと呟いた。

「愛ちゃん、元気にしてるぴよん……?」

「さあ、どうだろうね?」

直哉は肩を竦めると、真面目な表情に戻った。

「では作戦だけど、薄雲。アンカーを下ろして、アイキヤン80cm三連装砲砲で減薬弾で狙撃できるかい?」

「狙撃は慣れています。ですが、アンカーの引き揚げまで無防備になりますか、よろしいですか?」

薄雲の言葉に卯月と子曰が、

「そこはうーちゃんがフォローするぴよん」

「だから安心しててね」

そう笑顔を向ける。

「問題は霞だ、練度も高そうだしね?潮と響は電に頼むよ。魚雷でいいかな?まあ、任せるよ。指揮官の練習だ、私は何も指示をしないよ」

「了解なのです。格の違い、と言うのを見せ付けてやるのです」

全員、特級艦娘検定保持者の自信に満ち溢れていた。

演習の結果は、酷いものだった。

威嚇と突出阻止の為に撃ち込んだ、アイキャンフライ砲一発目と艦隊の前進だけで、ルビイ艦隊は潰走したのだ。

ルビイは、前進でも後退でもなく潰走を選んだのだ。

直哉は内心舌打ちをしながら、腕を組んだまま厳しい顔をして戦況を見守っている。

電は、若干の失望を感じながら薄雲に狙撃を命じる。

「薄雲！第二弾目、単発発射なのです！狙いは足柄」

「了解、狙い撃ちます」

ズガアンツ！

模擬弾の二発目のアイキャンフライ砲は、正確に足柄を捉え、数十m吹き飛ばしていた。

「きゃああっ!!!」

『足柄さん!!』

悲鳴のようなルビイ艦隊の声を聞くと、電は口の端をにいつと歪める。

「電の本気を見るのです！うーちゃん、薄雲の護衛は子日に任せて、大きく迂回して相手の後ろ側に付くのです」

「了解だぴょん」

と叫びながら、一気に単独突出していた。対応して向かってくる響と潮に、ありつたけの模擬魚雷を叩き込んだ。

急いでアンカーを巻き上げている薄雲を、護衛する為に残っている子日。

卯月は大きく迂回して、電との挟撃戦を企てていた。

ありつたけの模擬魚雷を食らった潮と響も、撃破判定で吹き飛ばされる。

「終わったのです」

その瞬間だった。相手旗艦の霞が、電を無視して突出したのだ。

そう。電がフリーハンドで動く為に、薄雲を旗艦に据えていたの

が、裏目に出たのだ。

旗艦をやられたら、その時点で演習終了なのだ。

ゲームセット

「しまった!!」

「引き返すぴよん!」

卯月が、ざざつと急転回して霞を追い掛ける。

「こっちは通さないよ!」

突進して来た霞と、子日の一騎打ちになった。

獅子奮迅の動きをする霞に、子日が軽い損傷を受ける。

「あうっ!」

「動けない薄雲さんに当てれば……っ!」

「拙い、まだアンカーを巻き上げてます……速度が……っ」

霞の主砲にロックオンされた薄雲は、子日の体当たりで直撃は免れたものの、アンカー解除が間に合わず至近弾を受けてしまい、軽い損傷を受けた。

そして子日はそのまま転倒、立ち上がった直後薄雲は、アイキャンフライ砲の三発目を何もない方向に発射する。

「急速後退! アイキャンフライ砲発射!」

ズガアンツ!

「えっ!?!」

爆煙と共に、反動で遙か後方まで下がった薄雲を、霞が追い掛けようとした瞬間だった。

彼女の水中電探が、危険を知らせていた。

振り向いた時にはもう遅かった。視線のその先に、卯月が笑って立っていた……

そして足元を見ると、吸い込まれて行くように殺到する酸素魚雷模擬弾……

「しまった!!」

模擬魚雷は軽い爆発を起こし、艀装が撃沈判定を知らせる。

「はい、全員撤収なのです」

足柄達を救助して戻って来た電は、港に戻るように指示を出す。

直哉は、隣の埠頭で呆然としているルビイを見遣りながら、電に通
信を送る。

「55点」

『やっぱりなのですか』

「勝因のない戦い。何で勝てたか?と言うと、相手司令部の作戦指揮
が拙かったのさ」

『返す言葉が見つからないのです。申し訳ないのです』

電の返答を聞いてからヘッドセットを外すと、ルビイと共に艦娘達
の所に向かう。

「皆!」

と、駆け寄ろうとするルビイを手で制すると、直哉は笑みを向けて、
「お疲れ様。反省会とかは後にして、一先ず入渠をして来てくれるか
い?いくら模擬弾とはいえ、軽い損傷を受けてるだろうしね?」

その言葉に薄雲が、

「さあ、行きましょう」

そう言つて、皆で工廠の入渠所に向かつて行つた。電以外。

「入渠をして来て欲しい、と言うのは、損傷を受けてない娘もなだけ
どなあ……電?」

その直哉の言葉に電は、

「直哉のことなのです。今から、ルビイ提督にお話説教をするのですよね
?直哉の言葉がきつくなり過ぎない為のストップパーなのです」

と、側に控える電の頭を優しく撫でると直哉は、

「そうかそうか……泣かせないように努力するよ」

と、少し離れた場所で夕焼けに染まる海を見つめるルビイの方へ歩
いて行つた。

「ルビイちゃん」

直哉が声を掛けると、驚いた様子もなく振り向いた。きっと声を掛
けられる、と分かつていたようだ。

「何ででしょうか?高菜提督」

その言葉に、直哉は今までにない険しい表情で問うた。

「今回の敗因は、何だか分かるかい？」

ルビイは暫く考えると、

「ルビイ達の鎮守府の練度不足ですか？」

と答えた。

直哉は首を振ると、歩きながら口を開いた。

「確かに今回、浦の星鎮守府の所属艦娘達の練度不足はあったかもしれない。でもそうだとしても、もう少し時間を稼ぐことは出来た筈だ、と思う」

そこまで言うのを止め、ルビイの顔を見た。

「要するに、今回の惨敗の一番の原因は、ルビイちゃん。君の指揮なんだよ」

はつきりと言い放った。

「っ!!」

ルビイの顔が一気に暗くなった。それでも構わず、直哉は続けた。「ルビイちゃん。君の指揮は、艦娘を大切にしようとするあまり、それが逆に艦娘を危険に晒しているんだ。例えば私が艦隊を前進させた時、ルビイちゃんは後退を選んだ。何もその指示が間違っている訳ではないんだよ。後退と言うのは、戦術としてあることだからね。でも問題は、後退のさせ方だ。威嚇射撃をするでもなく、ただ只管に逃げることに専念させた。だから薄雲は、何の障害もなくスナイプすることに専念出来た」

ルビイの目に涙が溜まっているのが見えて、電が「止めた方がいい」という目線を送ったが、直哉は話をやめない。

「もし、今回のようなことが戦場で起これば、最悪の場合ルビイちゃんの艦隊は壊滅する。もつと艦娘達を信用してあげることが大切だよ。もしかして、ルビイちゃんは艦娘のことが嫌い？」

その言葉を聞いて、ルビイの顔に怒りの色が出て来たように見えた。

「そんなことないもん」

その言葉に、直哉は意地悪く聞き返した。

「何て言ったか、良く聞こえないなあ？」

「そんなことないもん!!ルビィ、皆のこと大好きだもん!!」

今までに聞いたことが無いようなハツキリとした声で、目からは滝のように涙を流しながら、ルビィが叫んだ。

その言葉を聞いて、直哉は過日の室戸鎮守府での参観日を思い出していた。

悔しそうに泣いた、愛の姿とダブって見えたのだ。

そんなルビィを見て、直哉はフツと笑みを零した。

「何がおかしいんですか?」

不機嫌そうに訊くルビィの頭を優しく撫でると、

「いや、その気持ちが聞けて良かったと思ってるね。その気持ちがあるならルビィちゃん、君は良い提督になれるよ?」

それだけ言うと、ポケットに手をつ突っ込んで執務室へと向かって歩き出す。

「やれやれ。大貫さんは、この世界でも私に『導き手』をやれと言うのか……?この世界でどこにいるのかわからないが、全く、面倒事を押し付ける」

ぼそつとそう呟きながら。

「憎まれ役、ご苦労様なのです」

追い掛けてきた電に、直哉は肩を竦める。

「いやあ。二人を足して二で割れば、完璧な司令官んだけどなあ、と思ってるね?」

「ん?どういうことなのですか?」

「愛ちゃんは、本質的には『勇敢』とか『猪突』タイプなんだ。逆に、ルビィちゃんは『慎重』とか『臆病』タイプだからね。足して二で割ったら、知勇の均衡の取れた完璧な司令官になるなあ、と思っただけさ」

直哉の話に、電はふふつと笑う。

「ルビィちゃんにも、愛ちゃんにも、良いところも悪いところもあるのです。それが人間、と言うものなのですよ」

「そうだね。それこそ、成長した愛ちゃんが司令官で、ルビィちゃんが参謀で立ち向かわれたら……私は勝てる自信がないね。末恐ろしい限りの天才肌だよ、二人共。或いは夏海ちゃんもいるね、あの子は万

能型だからね」

直哉はルビイのポテンシャルを見抜いたからこそ、あそこまでの苦言を呈したのだった。

「直哉。これはきつと、大貫さんからのプレゼントだ、と思うのです」「結局『導き手』と言う仕事をやれと言うことだね？電、最高の司令官と言うのは、三つの才能を必要とする。まずは、決断する勇敢さ、判断する冷静さ、そして全体の構想力。私や愛ちゃんは、少なくとも二つは兼ね備えていると思う。夏海ちゃんは三つ全て、ルビイちゃんは少なくとも一つは持っている筈だよ」

「司令官としての決断力、判断力、全体を見渡す能力、なのですわ？」
「そう言うことさ。愛ちゃんは、少なくとも決断力と判断力は持っている。ルビイちゃんは、決断力と構想力は持っている筈なんだ。ただ、武藤さんと一緒さ。愛情が深過ぎる故に、決断を鈍らせる。だから、武藤さんは前線に出ないのさ」

武藤提督から聞いた言葉を思い出す。

彼は、「行ってらっしゃい」と「お帰りなさい」を言う役回りに徹している。

彼曰く『私は、自分の指揮では艦娘を大事にし過ぎて、却って危険に晒す程の無能者だ』と言うのだ。

直哉は、彼のその姿勢は『自分を知る』才能の持ち主だ、と高く評価している。

それ故に、長門は戦術を身に着け、南三陸鎮守府の指揮統率を担っている。

「なるほどなのです」

「だから、そこを自覚してどうするか……と言うことになるね？」

その言葉を語っている頃には、鎮守府の庁舎に着いていた。

比較的損傷の軽い潮が、出迎えに来ていた。

「あのお……高菜提督、全員入渠終わりました。今食堂に集合しています。……ルビイちゃんは一緒じゃなかったんですか？」

訝しげに訊く潮に笑みを向けると、

「ルビイちゃんは、ちよつと考え事してるからそつとしておいてあ

げよう。それより、食堂に行こうか?」

「はいっ」

「なのです」

二人を従えて食堂にやって来ると、霞が「敬礼!」と号令を発して、皆立ち上がろうとするのを制する。

「いや、そのまま、そのままだね」

その言葉に、霞はお叱りを覚悟しながら腰掛ける。

電は直哉の脇に控え、潮は空いている椅子に座る。

「さて、皆お疲れ様。よく頑張ったね。特に、霞はよく頑張ったと思う」

「えっ? お叱りではないんですか?」

霞の問いに、直哉は肩を竦める。

「どっちかと言うと、お叱りをしたのは宮戸島の方だねえ。連携がまだまだなっていない。私の指示がなくても、有機的な戦術を構成してもらいたいものだね。55点」

「直哉は厳しいぴょん……」

「直哉の言うとおりで。相手をナメ過ぎていました。申し訳ありません」

卯月がぼやくと、薄雲が冷静に語る。

「これは、電の驕りなのです。ダイナミックな包囲挟撃戦をやったかっただけ、なのです」

「子日は頑張ったよ! 薄雲ちゃんを守り切れなかったけど」

電が苦い笑いを浮かべると、子日は努力を主張する。

「はいはい、子日は頑張ったね。……と言う訳で、残念会をやるうか?」

『残念会?』

「ほら、皆でワイワイバーベキューでもやろうか、と思つてね?」

「グリルですね、わかり……オウフ」

その言葉に、ガタツと立ち上がる明石を霞が座らせて、

「提督、グリルがありませんし、鎮守府内での焚き火は規定に違反しま

す。大きいホットプレートでは駄目ですか?」

そう問う霞に、直哉は笑みを浮かべる。

「いいよ。さて……あつちの世界のお金を使うと、偽札になるな……」

「提督、食費なら鎮守府の予算から出せます」

「いやあ、済まないねえ。ゲートが落ち着いたら、あつちの明石が金の延べ棒で払うから、立て替えておいてくれないか?」

「分かりました」

徹頭徹尾真面目な霞に、直哉が笑みを浮かべると、食堂の厨房から間宮さんも出て来る。

「それじゃあ、買い物組は電に従って来るのです!」

『はーい!』

電が、お財布係の間宮を含めた艦娘達を連れて行くと、食堂には直哉と霞、それに明石だけが残った。

「ルビィに何か言ったんですか?」

「よく解ったね?」

肩を竦めて、直哉が空いている椅子に腰を下ろすと、霞は内容を聞かずに頭を下げる。

「秘書艦ですから。高菜提督、ありがとうございます」

「いや良いさ。ところで、大貫 悟と言う人間にあったことはあるかい?」

「大貫 悟、ですか?私はお会いしたことはありませんが、軍のデータベースを調べますか?」

首を傾げる霞に、直哉は苦笑いを浮かべる。

「いいや。もしかしたら、この世界にはいないかもしれないし、そんな事はいいよ。ただ——大貫 悟に出会ったら『全く、余計なことをしてくれたものだ』と、高菜が言っていた、と伝えてくれないか?」

「分かりました、必ずお伝えします」

「大貫 悟さんですね?分かりました」

霞と明石は頷いた。

「明石、君にも忠告しておくけど、過去から現在・未来を変えるのは不可能だよ。外部からの異物が侵入した時点で、世界は平行世界化する

る、と私は考える。オムニバース論<sup>多
元
宇
宙</sup>だけどね。うちの親父が、そういう事に詳しいんだ」

「やつぱりですか。あつちの私も、同じことを考えていたんですね?」

明石は、苦笑いを浮かべながら答える。

「やつぱり、この世界はリセットもやり直しも出来ない世界なんだ。残酷だけどね」

『……………』

沈黙する二人に、直哉は笑いながら、

「まあ、全ては大貫 悟…………いや、大垣 守と言うやつ^{のせいさ}。やつが、デイメンシヨントラベルなんてしなかったら、私は呑気に副社長でもやって気楽に暮らせたのになあ。この世界にはジレーネはいるのかな…?それとも、深海棲艦そのものがジレーネなのか?」

「…………はい?」

ぼやく直哉に、霞が首を傾げると「こつちの話さ」と言つて、話を打ち切つた。

「さて。私達は、ホットプレートの準備をしようか?」

『はい』

直哉の言葉に、二人も立ち上がった。

ルビイが食堂にやって来た時には、買い物部隊も戻つて来て、ワイワイと準備を始めていた。

それに気づいた潮が、ルビイに声を掛ける。

「ルビイちゃん、今までどこにいたんですか?今は高菜提督の提案で、皆で焼き肉をやろう、と言うことになりました、今皆で準備しているところなんです」

そこに、厨房から出て来た直哉もやって来た。

「お、ルビイちゃんやつと来たね?本当は、外でバーベキュー!と思つただけど、グリルがないつてことで断念したんだが、ホットプレートがあつたから焼き肉にしたんだけど…勝手にこんなやつて、ダメだったかな?」

その問い掛けに、ルビイは首を振つて、

「そんなことないですよ。寧ろありがたいです」

と答えるのを、笑みを浮かべて、

「ルビィちゃんなら、そう言ってくれると思つたよ。いきなりで悪いんだけど、間宮さんがお肉切ってるから、手伝いに行つてくれないかな?」

「もちろん」と言いながら、厨房へ入つて行つたルビィを見送る直哉。

「それでは皆さん。手を合わせてください」

ルビィの号令に、全員が手を合わせて、

『いただきます!』

総勢12人と云う、普段の倍ほどの人数での食事に、食堂はいつも以上の活気で溢れていた。

「霞ちゃん、そのお肉取つてくださいなのです」

「はいはい、ちよつと待つて」

秘書艦同士、早速意気投合している。お互いの肉を取り合つて話が弾んでいる。

その隣では、足柄と薄雲がお酒を片手に語り合っている。

「え?あの距離からのスナイプは余裕なの!」

「はい、余裕です。ブイ」

無表情で、Vサインをしながら語る薄雲。

DSタイラントレグレクス戦の話をする、浦の星鎮守府の面々は目を白黒させる。

もつと遠距離でも狙撃できると語ると、足柄は更に愕然となる。

潮が、卯月のコップにジュースを注いでいる。

「卯月ちゃん、ジューズ要りますか?」

「欲しいびよん!ありがと、潮」

そして、響に話しかける子日に、マイペースな響。

「響ちゃんはジューズ飲まない?」

「うん、私はいいかな。ありがと、子日」

皆、今日初めて会つたとは思えないほど仲良くなつていた。そんな中、直哉の目に外へ出て行くルビィが映つたので、気になつて外へと

出てみると、ルビイが星空を見上げていた。

「ルビイちゃん」

直哉が声を掛けると、驚いた様子で、

「ピギッ！」

と声を出して振り向いた。まだ男性は苦手な様子である。

「高菜提督、どうしたんですか？」

「いや、ルビイちゃんが外へ出ていくのが見えたから気になってね。よく見ているのかい？ 星空」

直哉も星を見上げながら問い掛けると、再び星を見上げるルビイ。

「いや、よくって訳ではないですけど、たまに気持ちを整理したい時とかは、見に来ますよ？」

その言葉を聞いて、直哉は少し苦笑いを浮かべた。

「さつきは、少し言い過ぎてしまったかな？」

その直哉の気遣いに、ルビイは首を横に振った。

「高菜提督に言われて、ルビイのいけないところが判ったから良いんです。提督として、ルビイにはまだまだ解らないことだらけで、それでも霞ちゃん達、皆が無事に帰って来れるように頑張って行きたいですから」

直哉は優しい顔つきになって、

「ある女の子の話をしよう。女の子の名前は、笹野 愛と言う子なんだけどね。中学生で提督になったんだ。その子も艦娘のことを大事に思っ、もっといい作戦がないかと、学校がある日でも夜遅くまで考えているんだよ。愛ちゃんとルビイちゃん、提督としてタイプは全く違うけれど「艦娘の為に」と言う考え方は、同じなのかもしれないね？」

直哉は、やはり成長したこの二人の少女が、提督と参謀として手を組んだら勝てないだろうな、と思いつながら語ると、

「笹野 愛ちゃんか…一度でいいから会ってみたいなあ」

そう呟いた。

それに直哉は思い出したように、

「因みに言っ、てなかつたけど、愛ちゃんには子供がいるからね？」

と余計な発言をすると、ルビイの顔は啞然となっていた。

「え……、子供って……え？中学生……ですよ？」

「うん、そうだよ。詳しく話すと長くなるんだけどねえ。聞きたい？」
何ともいえない空気が流れていると、その空気をぶち壊すように霞がやって来た。

「あ、ルビイ！こんなところにいたのね？今、潮がジュースと間違えてお酒を飲んじゃって暴走中なのよ。ほら、止めに行くわよ？」

「え、待って！愛ちゃんのこと、高菜提督から詳しく聞きたかった！」

ルビイが、霞に引き摺られるように食堂に戻って行くと、直哉だけが残された。

「愛ちゃん、元気にしてるかな？」

満天の星空を見上げながら、そう呟いた。

ルビイと入れ替わるように、電がやって来た。

片手にはブランデーの瓶、もう片手にはグラスを二つ持っている。

「こんな所にいたんですか？ブランデーを持って来たのですよ」

「ああ、ありがとう」

埠頭に腰掛けると、電がそつと横に腰掛ける。

「あつちは、賑やかになって来たのですよ」

「らしいね、潮が暴走してるって？」

「なのです」

電が、グラスにブランデーを注いで、そつと渡す。

直哉が受け取ると、自分の分もブランデーを注いでから、乾杯をする。

「直哉、一つ提案があるのです」

「何だい？」

「子日を、ルビイ艦隊に預けてみたいのです」

「ふむ……」

ブランデーに口を付けながら電に問うと、

「子日にも、そろそろ戦術眼を付けて欲しい、と思っていたのです」
「だね」

「直哉は、電がこの提案を持って来ることは予想の範囲内だった、と言うことですか？」

「そうだね。電なら、きつとこの提案をすと思っていたよ。80点」「残り20点は？」

「そうだねえ？演習の時に言ってもらえれば、あんな酷い演習にならなかったかな？ルビイちゃんも、あそこまで嫌な思いにはならなかっただろうし」

「直哉は手厳しいのです」

直哉の言葉に、困ったように笑いながらブランデーを飲む電に、直哉は肩を竦めた。

「いやあ、これでも皆に優しくしているつもりなだけどなあ？」

「そうですね。直哉は、いつも皆の為を思っているのです。ルビイちゃんにも、何かいい助言はできたのですか？」

「そうだね、愛ちゃんのことを話したよ。もう一人の天才の話は、流石にやめておいたよ。きつとルビイちゃんは、自信をなくすだろうからね？」

その言葉にふふつと笑う電。

「なるほどなのです。夏海ちゃんは、紛れもない常勝の天才なのです」「そういうことだね」

二人は、事態の收拾ができずに卯月が呼びに来るまで、星空を見上げながら静かにブランデーを飲んでいた。

「直哉、電、潮の暴走が止まらないぴよん！子日まで暴走し始めたぴよん！」

やつて来た卯月に、二人顔を見合わせる。

「やれやれ、戻ろうか？電」

「なのです」

「早く来るぴよん！」

卯月に引き摺られるように、食堂に戻って行く二人だった。

その頃、直哉達の世界の岩沼沖では……

徹底した絨毯爆撃で、漸く深海棲艦の湧いて出るゲートを破壊して

いた。

「何だったんだ、これは……？」

「判りませんな……」

「どうせ、明石の作ったブツでしょう」

指揮艦に乗船している眞一郎と桐山一佐、それに奈々海が破壊し尽くしたゲートの残骸を調査していた。

「ああああっ!!!」

その時、遠くから絶叫が聞こえた。

明石と夕張が、硫黄島からやって来たのだ。

「こ、壊しちゃったんですか!?!」

明石が、真っ青な顔をしている。

「また貴官か。今度は何をやらかしたんだね?」

眞一郎が憤慨して問い詰めようとした時、明石が真っ青な顔のまま言った。

「別世界に通じるゲートで……吸い込まれた高菜准将補達が戻って来れなくなってしまう……」

『えっ?』

宮城艦隊の面々は、取り返しの付かないことをしてしまった、と絶句していた。

「と、取り敢えず、高菜准将補の行方不明は内密に……」

青い顔の明石同様、顔面蒼白の三提督と艦娘達はコクリと頷いた。

出撃

翌日、会議室に艦娘の一同が招集されていた。

「……と言う訳で、艦隊を二分して出撃させることにした」

直哉は、海図を出しながら説明を始める。

艦娘達は、着席して説明を聞いている。

迷宮要塞は、その名の示す通り海域が迷路になっていて、一艦隊だけでは攻略が不可能とされている。

そこで、難易度の高い海域を直哉達宮戸島艦隊が担当し、

比較的難易度の低い海域を、浦の星艦隊が担当するところまでは決定した。

「……子曰」

「なあに？」

「子曰には、浦の星艦隊に同行してもらいたい」

その直哉の言葉に、子曰が首を傾げる。

「何で？」

その問いに、電が子曰に笑顔を向ける。

「子曰も、そろそろ戦術を覚えてほしいのです。ルビイちゃんの指揮を見ながら、自分で戦況を見極める、と言うことも覚えて欲しいのですよ」

「うん、わかったよお」

電の説明に子曰は笑顔で頷くと、霞の隣に座る。

「皆、よろしくねえ」

「よろしくお願いね、子曰」

霞も笑顔を返す。

ルビイは、直哉の脇に控えている。

「ルビイの艦隊は、西から攻略します」

ルビイが海図を示すと、子曰を含めた艦隊の艦娘が頷く。

直哉がその言葉に頷くと、海図を示す。

「電の敵情偵察の結果、東側の防御が厚いと推測される。その際、宮戸島艦隊は陽動作戦を行って、敵の攻撃を惹き付ける。その間に、ル

ビイ艦隊が西側から攻略する作戦を取ろうと思う」

その直哉の言葉に、コクリと電達が頷いた。

「霞達は、ルビイの作戦指示を受けながらその場で判断し、迷宮要塞を攻略してもらいたい」

「はいっー」

霞が起立して敬礼すると、足柄と潮と響と子曰も立ち上がり敬礼する。

「皆！無事に帰って来てね！」

ルビイが元気に手を振って見送る中、直哉はモーターボートのエンジンを開始する。

直哉が電に視線を向けると、電は頷いてザザーッと水上を走り始める。

それに付き従うように薄雲、子曰が出港して行く。

直哉も、モーターボートでその後を追い掛けて、東側から回り込んで出撃して行く。

電達は、東側から回り込むと、迷宮要塞の付近までやって来ていた。

直哉はある程度近づいたところで、モーターボートを停める。

迷宮から、深海棲艦がワラワラ出て来る。

「それじゃあ、各自派手にやろうか？」

『はいっ!!』

直哉はそう言うのと、ヘッドセットを取り付けて、腕を組んで戦場を見据える。

多数の深海棲艦がやって来て、襲い掛かる。

「行くのですー！」

電の号令で、卯月と薄雲がザザッと前進する。

敵深海棲艦の砲火が、雨霰のごとく降り注ぐ中、素早く躲しながら

砲撃で反撃する。

電も前に出ると、砲撃を加えながら陣形を指示している。

「とにかく大暴れするのです！」

『おー！』

電はそう言うと、不敵な笑みを浮かべて一気に前に踊り出る。

敵ル級の群れは、電に主砲を向ける。

主砲を発射すると、電の周りに水柱が次々と上がるが、電はその俊敏さを生かして躲し続ける。

「まだまだ甘いのです」

電が戦場を掻き回している間に、薄雲と卯月は魚雷を発射する。

丁度、水柱で二人の姿が見え難くなっている間に発射した為、ル級は魚雷の存在に気づいていなかった。

「!!!」

ズガアン！

ル級の足元から立つ水柱と同時に、ル級の何体かが沈んで行く。

それでも、ル級はワラワラとやって来る。

それと同時に、ヲ級が戦場に到着して、次々と艦載機を発艦させて行く。

「電の本気を見るのです！」

電は、改三艦装に変化させると、連装ダブルガトリングガンで次々と敵航空機を撃墜して行く。

「ソコダ」

そんな声が聞こえた途端、砲撃音と共に電の身体が爆発して、電はバックステップを取ってザザーツと退がって行く。

奥から出て来たのは、戦艦水鬼だった。

「……オマエタチハココデシズムノダ」

「くっ……強いのです」

電は、中破程度のダメージを受けていたが、それよりも問題は、対空攻撃が止んでしまったことである。

電の迎撃をすり抜けた艦爆が急降下して、卯月と薄雲に襲い掛かる。

「くっ!!こつちに来たびよん!」

「対空迎撃です、急いでください」

卯月達が対空迎撃するも、撃ち漏らした爆雷や魚雷が、卯月達に襲い掛かる。

必死に躲そうとするも、至近弾を食らって、二人共中破状態になってしまう。

「うっ……!」

「まずいびよん!このままじゃ……」

その状況を、直哉は冷静に見ていた。

「薄雲、三式弾装填。80センチ砲一門発射、目標、上空」

『了解です』

アンカーを下ろす暇が無いので、卯月が後ろから抱き付いて、仰角一杯でアイキヤン80センチ連装砲フライ砲を発射する。

二人の体が腰まで沈み込んで、水柱を上げながら砲弾はぐんぐんと上空に向かい、炸裂した。

上空にいた全ての航空機が、その広範に飛び散った破片に直撃され、海に叩き落とされて行った。

「電、一旦後退」

『了解なのです』

電も、牽制射撃をしながら一気に後ろに退る。

戦艦水鬼も、アイキヤンフライ砲を警戒して追撃を加えようとしな
い。

十分な距離を取ったところで、直哉は電達に携帯用高速修復材を使
って、小破まで修復して行く。

「助かったのです」

「ありがとうございます」

「助かりました」

三人がそれぞれ頭を下げると、直哉はニヤリと笑った。
「いいさ、私達の作戦目的は突破ではないからね」

その言葉に、陽動だということを思い出している三人。
見ると、西側からも深海棲艦が補充されている。

「私達が暴れば暴れるほど、敵はこちらに集中する、と言うことだが……」

直哉は、この分厚い陣容に、如何に敵を惹き付けながら轟沈艦を出さないか、考えていた。

「仕方がない、これを使うか……」

直哉は、軍服のポケットに入っていたケースを取り出すと、中に入っていたカプセルを10個、海へと投入する。

カプセルは、海水を吸い込んでムクムクと大きくなり、電の形になると動き始める。

「こ、これは……?」

引き攣った笑いを浮かべている電に、直哉はしれっと答える。

「量産試作型いなづまちゃん改二、だそうだ」

「おー、皆電とそっくりだぴよん」

「そうですね」

卯月と薄雲は、いなづまちゃん達をペタペタ触りながら感想を言っている。

『おさわりは駄目なのDEATH』

二人を注意しているいなづまちゃん改二を見る電は、頭が痛くなる思いだった。

「何で電をモチーフにするのです?」

「さあ、明石に聞けば良いんじゃないかな?」

二人は肩を竦めて、お互い顔を見合わせる。

こうして、第二ラウンドが始まった。

いなづまちゃんずが対空を担当している間、三人の艦娘はダンスを踊るように、綺麗に水上で敵の砲弾を躲しつつ、

敵陣まで肉薄して行く。

とにかく集中的に空母を狙い、対空部隊のいなづまちゃんずが、次々に前線に投入されて行く。

戦艦部隊の攻撃を躲しながら、ちよつとずつ後退して行く。

じわりじわりと後ろに退がって行く……

追撃を加える戦艦水鬼は、それに釣られるようにじわりじわりと前進して行った。

その間に警戒陣に組み直した電達は、ゆっくりと後退して行く。戦艦水鬼達が追撃を緩める度に、魚雷発射で攻撃を加える為、深海棲艦達も追撃を緩めることができなくなった。

戦闘は膠着状態のまま一時間、二時間と経過して行き、朝から昼間、そして昼間から夕方に移ろうとしていた。

それが直哉の狙いだった。

「夜戦突入！」

夜目を持っている電といなづまちゃんずは、一気に攻勢に出る。

「電の本気を」

「見るのDEATH！」

一気に前に躍り出ると、魚雷を乱射し始める。

次々と倒されて行く、戦艦や空母達。

そして、同じく夜目を持っている戦艦水鬼が前に躍り出て来た。

「勝負なのです」

「イイダロウ」

電と戦艦水鬼の戦いが始まった。

決戦

真夜中に、電と戦艦水鬼の戦いが始まっていた。

「キサマ、ナカナカヤルヨウダ。ダガカルイナ」

戦艦水鬼の主砲の連射を、超高速で回避しつつ小口径主砲を撃ち返す。

それと同時に、30mmバルカン砲の弾幕で狙いを逸らせている。

戦艦水鬼は、回避すらずに防御して、小口径の主砲を弾き返している。

「くっ、硬いのです」

「キサマゴトキノホウゲキナド」

風格さえ思わせるその声に、電も恐怖を覚える。

戦艦水鬼は、再び大きく構えて主砲を放つ。

それをなんとか回避しながら、牽制攻撃で狙いを絞らせない。

「電、それでいい。そのまま戦艦水鬼を惹き付けろ」

「わかったのです！」

直哉が通信を送ると、電は戦艦水鬼を睨み付けたまま答える。

戦艦水鬼は獰猛な笑みを浮かべると、副砲を連射し始める。

電は再び急加速すると、次々と海水に着弾して立つ水柱を背に、円周を描くように回避して行く。

回避しながら、電も狙いを絞らせない為に連射で弾幕を張って、ちよつとずつ近づいて行く。

夜戦の為、対水上戦闘に切り替えた薄雲と卯月、それに量産型いなづまちゃん達が砲撃戦を始める。

元々、夜戦が得意の宮戸島艦隊と量産型いなづまちゃんずは、有利に戦闘を始めて行く。

次々と、空母ヲ級が沈められて行く。

そつちに救援に向かおうとする戦艦水鬼だったが、魚雷の射程距離にまで近づいた電に気づいた。

「シマッター！」

このまま背を向けると、魚雷でただでは済まない。

不敵な笑みを浮かべた電を見ると、戦艦水鬼は不愉快な表情に変わって行く。

何とか、この小癩な駆逐艦を沈めねば、と主砲を向ける。

電は、再び主砲の雨霰を掻い潜って避け続ける。

夜だろうが、目のいい彼女には容易いことなのである。

その間に、いなづまちゃんずの奮闘により、どんどん大型艦が沈められて行く。

いなづまちゃんずも損傷を負っているが、中破を超えたいいなづまちゃんずは後退している。

量産型といえど、直哉は使い捨てにする気はない。

後方で休息を取りながら、微弱な自己修復機能で回復したいいなづまちゃんずは、逐次戦線へと戻って行く。

相手も、無限に近い戦力を投入して来ているが、こちらも思った以上の戦力で対抗しているのだ。

そんな中、電と戦艦水鬼の一騎打ちは続いている。

近距離になった分、当てにくくなった戦艦水鬼は主砲から副砲に変える。

副砲を連射して電を捉えようとするも、電の足を捕らえきれない。

逆に電は、近距離になって主砲をどんどん当てて行く。

深海棲艦の自己修復機能でも、微弱なダメージを蓄積させて、小破状態まで持ち込むことに成功していた。

戦艦水鬼は苛立っていた。

戦線を分断されて、友軍は不利。自身も駆逐艦一隻に翻弄されている。

このままでは、離島棲姫に何を言われるかわからない。

そんなことを思いながらも、長い長い戦いで、夜中から夜明け。

空が白んで来た時に、戦艦水鬼はニヤツと笑みを浮かべた。

「カツタナ クウボカンタイ……」

そこには、空に飛ばすべき空母はいなかった。

全て、薄雲達が片付けていたのだった。

「空母なぞ、いませんよ」

「うーちゃん達がやっちゃったんだから」

『なのDEATH』

「キサマアアアアアアア!!」

怒りの咆哮を上げた戦艦水鬼は、全方位に主砲を乱射した。

戦艦水鬼・狂となった彼女の破壊力で、いなづまちゃんずは四方八方に吹き飛ばされて行く。

大破状態に留まっているものの、怖くて戦艦水鬼・狂の主砲射程圏内に近づいて行けない。

卯月と薄雲も後退しつつ主砲を躲すも、卯月も至近弾を一発貫い、大破状態になる。

電だけは必死に避けているが、捉えられるのも時間の問題である。

「くっ、当たったら海の底なのです」

「シネエエエ!!!チビメ!!!」

半狂乱になりながら、主砲副砲の弾幕を全方位に打ち込み続けている戦艦水鬼・狂に、

攻撃すらできず、後退もできない距離に踏み込んだ電は、死を覚悟していた。

その頃、薄雲はアンカーを下ろしていた。

卯月が背中から抱き付いて、それをいなづまちゃんずが取り囲むと言った形である。

「狙撃点固定……徹甲弾装填完了まで、後1分」

新たに取り付けられたスコープは、半狂乱の戦艦水鬼・狂に向けて狙っていた。

その直後だった。

疲労により、電が集中砲火を浴びてしまったのは……

「あうううっ!!!」

一気に大破に持ち込まれ、息も絶え絶えの電。

ニタアツと笑いながら、トドメの主砲を向ける戦艦水鬼・狂。

「ごめんなさい……直哉……」

ぎゅつと目を瞑った、その直後だった。

遠くから、戦艦水鬼に向かって海面スレスレに飛んで来た謎の飛翔体が戦艦水鬼・狂に飛び込み、爆発した。

「グワツ!!」

防御態勢に入ったものの、戦艦水鬼・狂の動きは停まってしまっていた。

薄雲は、今だと、再び狙いを修正する。

「装填完了。バレル伸長」

三連装アイキャンフライ砲の真ん中の砲身が、ニユツと伸びた。

前に倒れそうになるのを、共にアンカーを下ろした卯月が必死に抱き付いて押さえる。

それを、いなづまちゃんずが必死に支える。

「80 cm スナイパー・ロングバレルキャノン、発射」

ズガアアン!

80 cm マグナム砲弾は、一発の発射とは言え薄雲と卯月を後ろに数m吹き飛ばし、海面に叩き付けられた二人は、仲良く気を失っていた。

その砲弾はぐんぐん加速を付けて行き、戦艦水鬼・狂に直撃した。

「グワアアアアアツ!!」

その徹甲弾は、戦艦水鬼・狂の身体を貫いていた。

「こちらの勝ちなのです! 沈めえ!!」

胸にぽっかり大きな穴の空いた戦艦水鬼・狂に、電はありつただけの砲弾・雷撃を叩き込んだ。

自身の砲弾に誘爆しながら、爆発と共に海に沈んで行く戦艦水鬼・狂は、ニタアツと笑いながら言った。

「ワタシノヤルベキコトハタツセイシタ。イマゴロチンジユフハ、ハイダロウ」

「えっ………?」

電はその言葉に絶句し、直哉は自身の失策に気づいた。

「しまった！狙いは鎮守府か!?ルビイちゃんが危ない！」

しかし、全員ボロボロな宮戸島艦隊には、追い掛ける余力は残っていない。

直哉は、すぐに無線バンドを鎮守府に合わせて、交信を始めた。

「ルビイちゃん!!敵艦隊がそっちに向かっている！逃げるんだ！」

その直後、無線がロストする。

「拙い！急いで引き返そう！」

『了解！』

それでも、ボロボロの艦隊を立て直すと、直哉は鎮守府への帰路を急いだ。

「……………トマホーク着弾確認」

海面に、ぷかりと浮かんだ小柄な艦娘は、その様子をレーダーで確認していた。

「私にできるのはここまでです。後は頑張ってください……………もうひとりの電」

ふっと、笑みを浮かべたこの世界の高梨 湊……………突然変異攻撃型原子力潜水艦娘海渡は、再び海の中に潜り消えて行った……………

水中で、何者かに通信を送りながら……………

「大貫さん、こちら……………」

その頃だった。

土佐沖に出現していたゲートの調査に、ビスマルクとレ級と翼、それに愛と真愛が訪れていた。

「何なのかしら……………」

ビスマルクが、腰に手を当てながら眺めている。

指揮艦に乗っている愛と翼。

水上に浮かんでいるレ級に、抱っこされている真愛。

「どうせ、明石が作った物体なんじゃないか？はい、解散」

調査する気が一切ないレ級に真愛が、

「ちゃんと調べないと、漁師の人達が心配しちゃうでしょ」

と、頬を膨らませてレ級を見ると、レ級は真愛の頭を優しく撫でる。

「愛ちゃん、とにかく調査しないといけないよね?」

「そうですね……」

その瞬間だった。

ゲートが起動して、真っ先にビスマルクが吸い込まれた。

「きゃああああああ!!!」

『ビスマルク!!』

その次は、レ級と真愛だった。

「吸い込まれる……っ!!」

「ママああ!!!」

二人共吸い込まれて行く。

更に、愛と翼も吸い込まれて行った。

そして、そのゲートは消えて行った……

気づいたら、愛達は浦の星鎮守府の埠頭に落下していた。

「いたっ……」

「ピギイ!」

腰を擦りながら立ち上がると、ルビイが腰を抜かしていた。

「あの……あなたは……? 私は、笹野 愛特任一等陸佐と言います」

腰を抜かしているルビイに声を掛けると、ルビイは笑顔に変わる。

「えっ、あの中学生提督の愛ちゃん!? それで、そっちの子は、愛ちゃんのお子さんですか!」

自身を知っている見知らぬ少女に、愛は不思議そうな顔をしている。

「あの、何で知ってるんですか?」

「高菜提督から教えてもらって……あつ、黒沢ルビイで……ピギイ!」

ふと目に止まったレ級に、再び悲鳴を上げる。

「ふっふっふ、ぼくは悪いレ級じゃないよ」

ジリジリと近付こうとする、レ級のフードをグイツと引っ張るビス

マルク。

「はいはい、悪いレ級じゃないわね。私はビスマルク」

「わたしは笹野真愛。よろしくねっ!」

ビスマルクと真愛も、そう自己紹介をする。

「いやはや、ゲートの先にも鎮守府とはね。あたしは大垣 翼」

「よ、よろしくお願ひします」

立ち上がりながら声を返すルビィに、一同は笑みを浮かべる。

その直後だった。レ級の眼が鋭くなる。

「愛、電探に感あり。深海棲艦艦隊が襲来、航空隊も飛んで来てるよ」

『えっ!?!』

愛とルビィが海の前を見た直後に、直哉から通信が入って来た。

『ルビィちゃん!!敵艦隊がそっちに向かってる!逃げ……ザザッ』

その直後、ジャミングでザザーッと通信が封鎖されてしまった。

その通信を受けたルビィと愛は、互いに目を見合わせた。

「ルビィちゃん!戦おう!」

「うんっ」

二人の少女提督は、襲来して来た敵艦隊をキッと睨みつけた。

防衛戦

迷宮要塞近海。

「急いで戻るのです！」

電が焦りの顔を見せ、直哉も何時になく焦った顔で頷いている。

「そうだね、急いで戻ろう」

「お待ち下さい。電、直哉」

そんな二人を、薄雲が冷静に諫める。

「どうせ急いでも、結果は一緒です。それより、敵艦隊が迫っています」

「敵艦隊だぴょん！」

索敵に専念していた卯月も、

遠くから駆逐艦隊が迫っているのを指差す。

「仕方がない、敵を引き連れて戻るのも拙い。量産型いなづまちゃんず、前へ」

『了解なのDEATH』

砲撃戦が始まった。

大破状態の電達は、直哉のボートを囲みながら守っている。

そんな中、量産試作型いなづまちゃんずは砲撃戦を開始する。

「ルビイちゃん、無事でいてくれ……」

直哉は、苦々しい顔をしながら戦術指示を出し続ける。

浦の星鎮守府。

一方その頃、浦の星鎮守府では敵の最後の反抗とも言える、奇襲部隊との決戦を迎えようとしていた。

愛は、上空をキツと睨み付けながら声を掛ける。

「敵機が見えて来たね……ルビイちゃん、やるよー」

「うゆ、愛ちゃんががんばるビーー」

「が、がんば……？」

ルビイの言葉に困惑の表情を浮かべながらも、愛が再び意識を海上

へ向けると、戦艦群を主力とした敵の水上打撃部隊が接近していた。
「よし…全艦戦闘体制！」

『了解！』

ルビイの指示に、全員元気良く答える。

「ねえねえ、あいつ等全部殺っちゃっていいの？」

レ級が、敵艦隊を見つめながらワクワクを抑え切れずに尻尾を振っている。それを横目に、ビスマルクが呆れながら返答する。

「第一目標はこの鎮守府の防衛なんだけど？」

「でも、全て倒してしまっても構わんのだろう？」

「はあ…もういいわ。好きにして」

頭を抱えるビスマルクを見ながら、ルビイが苦笑いを浮かべていると、工廠から明石が何やら物騒な物を抱えてやって来た。

「提督！敵艦隊がこの鎮守府に來ていると言うことで、奴等を実験だーゲフンゲフン奴等を倒す為にロケット弾を持って來ましたよ！これがあれば敵を粉碎！…ってあれ？この方々は？」

「この子は笹野 愛ちゃんだよ。他の人の紹介もしたところだけど…敵さんが來ちやったね？」

ルビイがそう答えると、愛は無線機に手を当てる。

『愛、別世界でもサーカス開演の時間よ』

無線越しのビスマルクの言葉に、思わず笑みを零す。

「さあ、やろうか！」

「あ、あの愛ちゃん？ルビイは何をすれば？」

「ルビイちゃんは、敵の増援の有無の確認と出撃した艦隊との通信を試みて！」

「うゆ、わかった！」

ルビイの返事を聞いて、愛は一瞬笑みを浮かべたが、直ぐに意識を戦闘へと切り替えた。

「艦隊、戦闘開始！」

「敵機は任せろ〜バリバリ〜！」

と、レ級が言うとタコヤキ型艦載機を繰り出し、やって來た敵艦載機と絡み合つて、上空はたちまち大乱戦となる。

それと同時に、妖精化した翼が余っている艦戦に飛び乗って独断で出撃して行った。

「ヒヤッハー！久々の空戦だあ!!」

翼率いる零式艦戦隊も、ドッグファイトを始めている。

「真愛もがんばる!!」

「え!?真愛ちゃんも艦載機を?!」

驚くルビイをそのままに、真愛が繰り出した艦載機は、ルビイと愛を守るように上空旋回を始めた。

ルビイが啞然とする中、水上でも戦闘が開始されようとしていた。

「最近海賊として攻める側だったから、こう攻められる側の立場に立つのも面白いわね」

海上からやって来る敵艦を目の前にして、ビスマルクが独り言のようにつぶやく。

「じゃあ、ビスマルク行くよ!」

敵の水上打撃部隊は、戦艦を主力とした「主砲こそパワー、大艦巨砲主義バンザイ!」な編成をしていた。

「真面にやり合っても何隻かは鎮守府に通しちゃうし、取り敢えずは釣り出そう。ビスマルク!敵の先頭艦に火力を集中させて、その後直ぐに離脱。敵を鎮守府直進ルートから逸らすよ!」

『了解!』

愛からの指示を受け取ったビスマルクは、直ぐ様行動を開始した。

「まさか、別世界に来て戦闘することになるとはね。主砲、ファイエル!」

ビスマルクの放った砲弾は、艦隊の先頭に行く戦艦ル級を正確に撃ち抜き、水柱が収まった時には、ル級の姿はなかった。

「で、ここからは敵の進路を逸らすのよね……で、やっぱり敵は撃つて来るわよね!」

愛の作戦通り、敵艦隊はビスマルクに引っ張られるようにして、進路が浦の星鎮守府から逸れようとしていた。

「ビスマルクは回避優先!撃てるなら副砲だけでも撃つて、敵の砲撃

を少しでも妨害して！……で、あとは」

とそこまで言った愛が、明石の方を振り向いた。振り向かれた明石は一瞬「え、何？」みたいな顔をしたが、直ぐに意図に気づいた。

「敵の皆さーん、私の実験台になってくださーい！明石特製ロケット弾、発射あ!!」

明石の撃ったロケット弾は、砲撃を続ける敵艦隊のど真ん中に着弾、見事に大爆発を起こした。

「汚え花火だー！」と歓声をあげる明石の後方では、爆風によってキレイに飛ばされた若き提督二人が、地べたに這い蹲りながら会話をしていた。

「愛ちゃん……これは予想できた?」

「まさかこれほどの爆発だとは……あ、ビスマルク!?」

愛の気にしたビスマルクはー

「こんな爆発、聞いてないわよ……」

艦装が半壊状態になり、苦笑いしながら海上に寝転がっていた。

「でも、これで全員やつつけたかな?あれ?そういえば翼さんは?」

「あの人は……多分、空を飛び回ってるかな?」

その言葉どおり、翼は天山に乗り換えて爆撃を始めている。

残った敵深海棲艦は、次々と沈んでいる。

「もし、残ってたとしても大丈夫。多分レ級がー」

と、愛がそこまで言いながら海上を見ると、

「艦載機は殺っちゃったから、残った敵をデストロイー!一人残らずデストロイー!」

レ級が壊滅状態の敵艦隊にトドメを刺していた。

敵艦隊は、明石のロケット弾&レ級の追撃によって殲滅することができた。

「無事殲滅完了かな？」

「私は決して無事ではないのだけど……まあいいわ」

「ビスマルクさんは入渠してきた方がいいよね？明石さん、案内お願い」

ビスマルクは、明石に入渠所へと連れられて行った。その様子を見ながら、愛がルビィに話し掛ける。

「これで、あとは艦隊を待つだけかな？」

「そうだね。戦闘中に通信できるか試してみたけど、やっぱりジャミングのせいで長距離通信はできなかったみたい。無事に帰って来てくれるといいけど……」

ルビィが心配そうに海を見つめていると、後方から何やら声が聞こえて来た。

「ルビィ！ルビィ〜！」

「ルビィちゃん、何か声が聞こえない？」

「うん。で、多分この声は……」

ルビィがそう言った直後、ルビィは後ろから何者かに抱き付かれた。

「ルビィ〜！無事で良かったですわあ〜！」

「やっぱりお姉ちゃんだった！お姉ちゃん〜！」

姉妹、感動の再会の場面を、目を白黒させながら見ていた愛が、漸く口を開いたのはそれから5分後のことである。

「え、え〜と、この人がルビィちゃんのお姉ちゃん……？」

困惑しながら愛が喋ったことよって、我に返ったルビィが顔を赤くしながら、姉である黒澤ダイヤの紹介を始めた。

「こ、この人が、私のお姉ちゃんの黒澤ダイヤです……撫子鎮守府で提督をしています……」

「姉妹で提督をしてるんだね……そして、お姉ちゃんが大好きなんだね？」

「うう……」

笑みを浮かべて声を掛ける愛に、顔を真赤にしながら声を漏らすルビィ。

「ルビィお姉ちゃん、お顔が赤いよ？だいじょうぶ？」

「は、恥ずかしいよお!!」

それまで、ずっと明石の不良発明品を漁って遊んでいた真愛のトドメの一撃によって、ルビィのメンタルは轟沈、膝から崩れ落ちるように蹲ってしまった。

「愛ちゃんに見られた真愛ちゃんに見られたレ級さんにも見られた…」

「なーなー愛々これ、どうすんだ？」

「うーん？艦隊が帰ってくるのを待とうか？」

こうしてルビィは、30分後に両艦隊が帰還して霞に喝を入れられるまで、ずっとこの状態でいるのだった。

再戦—Side:N—

「いやあ、一時はどうなるかと思ったよ」

直哉は、苦笑いをしながら声を掛ける。

てくてく歩いてくる直哉に、愛とルビイは二人で頷き合った。

「高菜先生」

「高菜提督」

二人の少女は心に決めていた。

目の前の相手に一矢報いると。

『演習、しまししょう』

数時間後、入渠を終えて響の推進装置を再取り付けしたあと、
沖合で向かい合う、二つの艦隊。

一つは薄雲を旗艦とした、電、卯月、子日の宮戸島鎮守府艦隊。
指揮を執るのは、もちろん高菜直哉准将補。

もう一つは、霞を旗艦とした足柄、響、潮、それに本人の熱烈な希望により参戦した真愛の、浦の星・土佐連合艦隊。

指揮を執るのは笹野 愛で、参謀長を務めるのは黒澤ルビイ。

『ねえねえ、ママー！』

無線機から、オープン回線チャンネルで真愛の声が元気良く聞こえて来た。

直哉は、その無線を聞いて苦笑いを浮かべていた。

その直後に聞こえたのは、直哉も信じられない言葉だった。

『真愛、本気出しているよね？』

その直後だった。真愛から、禍々しいオーラが発せられて姿が変わったのは……

見た目中学生くらいくちくしんせいの少女で、真紅の瞳……そして尖った角、言うなれば駆逐新棲鬼くちくしんせい。

『それじゃあ、位置に付いて。用意、はじめ！』

審判役のビスマルクの号令で、真愛は3機の真紅のたこ焼き艦戦を繰り出して来る。

それと同時に、真愛は瞬時に加速して突っ込んで行く。

「電、前に出ろ！」

『分かっているのです！』

牽制射撃を加えながら、電は一気に前へと躍り出る。

たこ焼き艦載機 R レッドカスターム C のオールレンジ攻撃と、真愛自身の小口径主

砲の連射を躲しながらも、二人は距離を詰める。

バチイン！

二人は、艦娘にあるまじき体当たりを加える。

その高速度での衝撃は二人を吹き飛ばし、二人共後方に水面を跳ねるように転がって立ち上がる。

『このクソガキ！叩きのめしてやるのです』

電は、完全に頭に血が昇っていた。

生まれたばかりの子供に吹き飛ばされたことが、『最強の駆逐艦』としての自信に傷を付けていた。

電は、一気に距離を詰めると魚雷をばら撒いて行く。

だが、空中のたこ焼き型艦載機 RC が邪魔で、思うように攻撃ができません。

『子曰が援護していい!』

「だめだ！先手を取られた！この挑発戦法は愛ちゃんの策だな!?!いや、ルビイちゃんに電の短気さを見抜かれていたのかもしれない」

子曰が独断で援護しに行こうとするのを、怒鳴りながら止める直哉。

「ちっ……チートにはチート電をぶつけるのか……こうなったら、電と真愛は脱落扱いで放っておくしかない」

直哉は、前回とは違う意味で舌打ちをしていた。

その直後だった。卯月が異変を感じていた。

『子曰、拙いびよん！対空電探に反応！ロケット弾だびよん！』

『わかった！子曰が撃ち落とすよお！』

そう。技術オタクの明石謹製の、重巡搭載可能の艦対艦ロケットランチャー WG 42 改が、足柄から発射されたのだ。

上空から襲い掛かるミサイルの群れを、子曰が自分の判断で撃ち落

ともしに掛かる。

その時点で、直哉は高速艦艇の手駒を一隻失ったのだ。

「薄雲、アイキヤン^{cm}三連装砲^砲をパージしろ！」

『分かっています。霞と潮と響を、卯月と共に相手します。クラスチェンジ、デストロイヤー』

薄雲は、アイキヤンフライ砲をパージすると、腰に身に着けていた装備カードをチェンジャーに挿し込んだ。

ホログラフと共に駆逐艦装備に変更すると、接近する霞達に向かって前進する薄雲と卯月。

「百戦錬磨の宮戸島艦隊を」

「舐めないでもらいたいものです」

薄雲と卯月は頷き合うと、ターゲットを潮に絞っていた。

『ふえっ!?!』

右に位置していた潮に、ピンポイント雷撃を叩き込むと、オープン回線で響き渡る悲鳴と共に、潮は撃沈扱いで陸地に戻されていた。

「これで……」

『私達を舐めないで……!』

霞の通信で、薄雲は自らの失策を悟った。

『拙い！下がれ！潮は囷だ!!』

直哉が、必死に通信を送って来る。

そう。薄雲達も直哉も、慢心が残っていた。

クロスファイアポイントに誘い込まれたのは、薄雲達の方だった。

「薄雲は下がるぴょん！」

薄雲を必死に押し退けると、自らクロスファイアポイントに踏み込む卯月。

砲撃と雷撃の集中砲火を浴び、撃沈扱いで陸地に戻されて行く。

残るは、ロケット弾を処理し終えた対空の達人・子曰と、冷静な薄雲の二人である。

「これは……やられたのです」

戦場から逸脱した電は、初めて相手の真愛の電との相打ち戦法を悟った。

お互い最大火力をぶつけ合いながらも、高速度で躲し合って行く。真愛は、電の砲雷撃を自慢のスピードで振り切って、牽制攻撃を加えて行く。

電は、真愛のたこ焼き型艦載機RCの機関砲を躲しつつ、真愛の進行方向に魚雷を放って行く。

それでも、島風を超える速度の真愛には追いつかない。

「まだ足りないのですか……」

両者共、最初の体当たりで中破状態になっている。当然真愛の甲板は損傷しており、着艦不可能だ。

暫く戦っていると、たこ焼き型艦載機は燃料切れで失速して行く。

漸く自身の枷が外れたと思い、一気に距離を詰める電。

それに気づいた真愛は、にいつと笑った。

「えっ……っ？」

「電おねえちゃん、っーかまえた」

そう。たこ焼き型艦載機RCが、一直線に電に向かって突っ込んで来たのだ。

所謂カミカゼアタックである。

ドカンドカンと電に体当たりして、次々と陸地で目を回しているたこ焼き型艦載機RCトリオ。

たんこぶを作っている、たこ焼き型艦載機RCトリオを潮が介抱しているのを電が目にした直後、自らの足が止まっていることに気づいた。

「あたらっくー！」

真愛まで体当たりをして来たのだ。

「うわあああああっ!!!」

どっかーん！

ものすごい衝撃音と共に、二人共お目々ぐるぐるで陸地に戻されていた。

真愛も、霊子を使い切って子供モードに戻っている。

「やっぱり、そうだったか……………」

直哉は苦々しい顔をしながら、戦況を冷静に分析していた。相手は足柄に霞、それに響である。

緻密に後退をしながら、何とか響をクロスファイアポイントに誘い込んで撃沈扱いにしたものの、状況の不利は拭えなかった。

何より、薄雲には一発逆転の切り札・アイキャンフライ砲がない。その膠着状態のまま、日が暮れようとしていた。

直哉は日が暮れたところで、頭をポリポリと搔いて大きな溜め息を吐いた。

そして、愛とルビイに通信を送った。

「参ったよ。完全に私の慢心だ。両方とも合格点だよ」

『やったあ!!』

二人の少女の喜ぶ声を聞きながら、直哉はふふっと笑みを浮かべていた。

「それじゃあ、作戦の成功と!」

「ルビイ達の演習の勝利に!」

愛とルビイが手を取りながらグラスを掲げると

「「「「かんぱーい!」」」」」

ワイワイと賑やかにすき焼きパーティが始まる中、直哉は皆に気付かれないようにささつと外に出ていた。

それに気づいたダイヤも一緒に……

庁舎の外の埠頭では、口髭を蓄え、軍服に大将の階級章を着けた男が佇んでいた。

その隣には小柄な女性が控えていた。彼女も軍服に准将の階級章を着けていた。

「やはりあなたでしたか。大貫 悟大将閣下」

直哉が声を掛けると、振り向いた大貫。悟は笑みを浮かべた。ダイヤも、直感で謎の電話の主の声がこの男だと悟っていた。

「高菜君か。久しぶり……いや。初めまして、と言っておこうか」
「あの電話はあなたでしたのね？」

ダイヤも、大貫の言葉に確信したように口を開いた。

「君の世界の大貫。悟がどうなったかは判らないが、この世界にも大貫。悟や高梨。湊も存在している。紹介しよう、支援砲撃は助かっただろう？ 攻撃型潜水艦『海渡』。こと高梨。湊准将だ」

大貫の言葉に、小柄な女性はふふつと微笑んで笑って見せた。

「あのトマホークは君の仕業だったのか……助かったよ」

「はい、お役に立てて光栄です」

直哉の言葉に、湊は柔らかな笑みを見せた。

「ちよつと待ってくださいませ。私^{わたくし}達の軍には『大貫。悟』なる人物がいるなんて情報は……」

ダイヤも、直哉の依頼で大本営に問い合わせていたのだ。

大本営からは『大貫。悟』なる人物は軍のデータベースにない、との回答を得ていたのだ。

「うむ、我々は裏の提督だからな。深海棲艦との戦争を影で『見守る』立場だ」

大貫の言葉にダイヤは首を傾げるだけだったが、直哉は分かっていた。

「ジレーネ……の危険性ですか？」

「うむ。この世界にもジレーネが存在する確証はないが、あらゆる世界での私の願いは、人類の平穏だ」

「……私の願いも同じです」

大貫に続いて、湊も口を開いた。

「ダイヤさん、私達は知らなかったふりをするほうが良さそうだ」

「そのようすわ。今宵の会見はなかったことに」

ダイヤをちらりと見てから言った直哉の言葉に、ダイヤも直哉をちらりと見て二人の方を見た。

その一瞬の裡に、ピューツと風が吹き、大貫と湊の姿は掻き消えて

いた。

「……逃げ足だけは疾いお方だ」

「ですわね」

直哉は苦笑いを浮かべながら、月夜を見上げていた。

「それでは私は宴席に戻りますわ」

そう言つて庁舎に戻つて行くダイヤと入れ替わりにやつて来た電が、月を見上げている直哉に声を掛けた。

「導き手の仕事も一段落なのです」

「そうだね」

傍にやつて来た電の頭を撫でると、電はくすぐつたそうにする。

「あとは圭一達の進路だ。彼等を導いたら、私は……」

「退役したいのですか？」

電は不安そうに問いかけるが、直哉は首を振つた。

「いいや。漸く肩の荷が下りた。抑々私は自衛官になりたくてなった訳だし、足立さんも七原さんも、定年まであと1年と少しだ。私は――」

そう言つると直哉は一呼吸置いて、

「結局は大貫 悟の策略だったのさ。兄が財界を、姉達が政界を握つた。私は軍事の、少なくとも大本営幕僚総監を託された。そう思つていたのさ」

「大本営幕僚総監……」

「そう。そして、大貫 悟の正体は……私は、知らなくていいことだ、と思つている」

「……………」

「結局の所、このレポート事件も何かの導きだった、と思つているよ」

「まだまだ『不敗の魔術師』も修行不足なのです」

電がふふつと笑つと、直哉も笑みを浮かべた。

帰還く未完の大貫悟伝く

翌早朝、直哉は食堂で目を覚ました。

昨夜の祝勝会は深夜にまで及び、全員が食堂でダウン、と言う形でお開きになった。

……とは言え、直哉は一番遅くまで起きており、眠っている皆に布団や毛布を掛けてから眠ることになったが。

「やれやれ、死屍累々とはこのことか」

隣で一升瓶を抱っこしながら眠っている電を見ながら、直哉は大きな溜め息を吐いていた。

電の荒れようは酷かった。

レ級から「最強の駆逐艦（笑）」と指差して煽りに煽られ、

「レーちゃん、そういうのはだめ！真愛はたまたま勝てたんだから！」

と言う謙虚な真愛に、更に煽られる形で飲酒を進めて行ったのだ。

「全く。やれやれだな」

「そうだねえ」

大きな溜め息を吐いていると、レ級が起き上がっていた。

「何だ、レ級は起きていたのか？」

「僕は、あれくらの酒量じゃ二日酔いする訳ないさ。起きてもすることがないから、横になってただけだよ」

電の横には、卯月と子日と薄雲がくっついて寝ている。

「そうそう、ルビイは埠頭に出掛けて行ったよ」

「ん。一番の早起きは、いや、二番目の早起きはルビイちゃんと言う訳か」

「まあ、そういうことだね。提督は迎え酒でもやる？」

「いいや、やめておこう。ところで、昨日の演習で思うところがあったんじゃないのかい？」

直哉がそう言うと、レ級は真面目な表情になった。

「いやあ、トシには勝てないね。万全の提督なら、あんな策見抜いているだろうからね？」

「それは買い被り過ぎだよ。私とて万能じゃない」

それを否定する直哉に、レ級は頭に手を組んでニヤニヤ笑う。
そんなレ級に、直哉は意地悪く問い掛けてみた。

「レ級、君ならどうしてた？」

「そうさなあ。僕なら、対空迎撃は薄雲のアイキャンフライ砲80mm三連装砲三式弾
でこなして、大爆煙の中を奇襲させたかな？ただ……」

「ただ？」

「愛は、逆にそれを誘っていたように思うんだ。アイキャンフライ砲
のパージは二の次でね」

「なるほど。やはり、ルビイちゃんと愛ちゃんが組んだら、私では敵わ
ない、と言うことだな？」

苦笑いを浮かべる直哉は立ち上がる。

「愛とルビイ、それになっちゃんはやっぱりスペシャルなんだよ。提
督も外に行つて来るのかい？」

「そうだねえ、そうしようか？じゃあ行つてくるよ」

「はいはい。僕は、もう少し横になっているよ」

ももそと布団の中に戻るレ級を尻目に、直哉は外へと向かつて歩
いていた。

埠頭では、ルビイが外を眺めていた。

「ルビイちゃんは早起きなんだね？」

その声を掛けると、ルビイが振り返り答える。

「今日はいつもより早く目が覚めたので。高菜提督も早いですね？」

直哉はボサボサの髪を掻きながら、

「自分も目が覚めちゃってね。テレポーターの方は順調かい？」

そう問い掛けると、ルビイは少し寂しそうに、

「さっき、明石さんからあと少しで調整が完了する、って連絡がありま
したよ。皆が起きる頃には終わつてると思います……今日帰つちや
うんですか？」

「そうだね。こっちの世界でのんびり暮らすのも悪くないかもしれないな
いけれど、あっちの世界でやり残したことがまだあるからね」

そう。直哉には、まだ導き手という役割が残っている。

「そうですね…愛ちゃんともっとお話したかったなあ」

折角会えた同世代の提督。昨晚も様々なことで話を交わしたが、それだけでは全く時間が足りなかった。

そんな会話を、直哉はブランデーを飲みながら優しく見守っていたのだ。

「ルビイちゃんと愛は、すっかり打ち解けられたようで良かったよ…ああ、日の出の時間だね」

二人の見つめる先では、水平線から太陽がゆつくりと姿を現し始め、新しい一日が始まろうとしていた。

『いただきます！』

「あ、頭が痛いのです…霞ちゃん、水を取ってくださいなのです」

「それは、昨日あんなに飲むからよ…はい、水よ。それにしても、こんなに大人数での食事も今日で最後だ、と思うと少し寂しいわね」

電は、如何にも頭が痛そうな顔をして水を取ってもらう。そんな電に溜め息を吐きながら水を渡す霞。

ルビイ達が朝日を眺めてから三時間程過ぎた頃、鎮守府では最後の晚餐ならぬ最後の朝食が摂られていた。

「間宮さん、おかわり！」

「足柄さん、昨日あんだだけ飲んでまだ食べれるんですか!？」

「甘いわね潮。お酒なんて、一回寝ればリセットされるのよ」

「す、すごい…って、響ちゃん寝ないで！髪がお味噌汁に入っちゃおうよ〜！」

艦娘達が和気藹々と朝食を摂っている様子を、ルビイ等提督達が微笑ましく眺めていると、完徹によって逆にスッキリとした顔をした明石が近づいて来た。

「提督の皆さん！漸くテレポーターの調整が終わりましたので、ご報告しておきますね！」

「ありがとうございます。徹夜させちゃってごめんね？」

「いえいえ！抑々、今回の騒動の原因は私にある訳ですし。またテレポーターが誤作動しちゃうといけないので、お早めにお願ひしますね？では、自分は工廠で待ってますので」
「うん、ありがとうね」

こうしてルビィと直哉、それに愛との物語もいよいよ終わりを迎えるようとしていた。

「では、テレポーターを起動するので離れてくださーい！」

明石がそう叫ぶと、テレポーターが唸りを上げながら起動した。六本の筒からなるテレポーターの中心が光り輝く。

「テレポーターの持続時間は1分ですので、早く中心地点に集まってくださいー！」

その言葉で電達宮戸島艦隊、そしてレ級やビスマルクは中心地点へと歩みを進める。最後に残ったのは愛と、直哉だった。

「ルビィちゃん！また会おうね!!約束だよ!!」

短くそう言うと、愛はテレポーターへと駆けて行った。

「愛ちゃん、泣くところを見られたくなかったみたいだよ。：ルビィちゃん、君はいい提督になれる。また会えたら一戦交えようか？」

直哉はそう言ってルビィの頭をくしゃくしゃつと撫でると、テレポーターへとゆっくり歩いて行った。

「では、テレポート行きまーす！3、2、1ー！」

明石のカウントダウンが0になった時、工廠全体が光に包まれた。

直哉は、硫黄島要塞に飛ばされていた。

愛達土佐鎮守府組は、土佐鎮守府の埠頭にテレポ^ッート^ッした、と愛からメールが届いていた。

同じように、電達も宮戸島鎮守府に飛ばされていた。

「ああ、やっぱりこれは、仕組まれたことだったんだね？」

明石と夕張、それにその隣の男の姿を見ると、直哉は大きな溜め息を吐いていた。

「ノックスの十戒その1 犯人は、最初から物語に登場していなくてはない」

「確かに、私の物語に最初から登場していたのは貴方だった」

その隣の男は、満足そうに笑みを浮かべた。

「ある時は、大貫 悟、ある時は夏向伊知玄楼……その実態は」

「高菜源一郎、あんたが蜘蛛だったんだな？」

「そのとおり。私は、あらゆる世界の大貫 悟と意志を疎通する能力を持っていてね。彼の頼みで飛ばしたに過ぎないのさ。どうだったね？」

「私にとってはいい経験だったよ」

「なら良かった」

源一郎は満足そうな笑みを浮かべると、

「兄が財界を、姉達が政界を握った。弟には軍事を掌握してもらいたい、と思ってるね。大貫くん、いや、大垣 守と足立総監の後継者はお前になるだろう」

「きつと既定路線なんでしょうね？」

「そうだな。足立さんも後一年と少しで定年だ。そうなった時……」

「宮戸島での物語も終わりを告げる、か」

溜め息を吐くように話す直哉に、明石が口を挟む。

「いいえ。今年の4月付で、高菜准将補は准将に昇進し、大本営幕僚総監補という役職に内定しています。電達は、新設される有明鎮守府に配属されます。後任の人事ですが、土佐鎮守府の面々の一部を充てる、とのことですよ」

「なるほどね。愛ちゃんなら、充分託せるからね。まあ、私は大貫 悟の正体は聞かなかつたことにするよ。知らなくていいことだからね」

「直哉がそれでいいなら、私も大貫 悟伝は世に出さないでおこう」
似たもの親子とは、このことである。

悪い笑みを浮かべながらそう言うと、

「さて、帰る——」

直哉の姿が、硫黄島要塞から掻き消えていた。

直哉が気がつくつと、宮戸島鎮守府の埠頭にいた。

「直哉、おかえりなさいなのです」

「ああ、ただいま」

残りあと僅かな、宮戸島での生活が再び始まるのだった。

圭一たちの受験勉強

「ふむふむ……伸び悩みの時期が来ましたね」

「そうだね」

「そうですね」

「懐かしいわね……」

「まあ、壁と言うものはあるものさ」

圭一の新春小テスト結果を見遣りながら、五人の講師陣が武藤レストランの六人掛けテーブル席で会議を開いていた。

結局、直哉達の行方不明事件と深海棲艦大出現事件の責任は明石に押し付けられ、減給期間が更に伸びる結果となった。

本人としては、判つててやったことなので不満そうな顔をしていなかったが……

その裏で行われた、圭一の五科目小テスト。

圭一は大晦日と元旦以外、冬休み返上で勉強を続けている。

史絵も一緒に母の許可を得て、圭一の家でお泊りでの勉強が続いている。

努力は、すればするほど結果に現れるとは限らない。

そのテストの結果は、安全圏内手前で頭打ちになっていた。

その講師陣の筆頭格であり、圭一の一つ先輩で、学年首席の奨学生である大村夏海が、テストの結果を眺めている。

隣では、防大卒業生である大村奈々海がビールを片手に同意する。

その対面には倉田めぐみ医師と笹野麻衣医師が座り、その隣に直哉が座っている。

夏海以外は、それぞれ大学や大学校卒業の優秀なブレインである。

「どうじゃね？圭一くんの試験は上手くいきそうかね？」

コック服に身を包んだ武藤提督がキッチンから出て来ると、五人の視線が集まる。

直哉の対面に座ると、自慢のヒゲを弄る。

武藤提督は、經理一筋の現場叩き上げの曹候補士出身である。

勉強はあまり得意ではない、と講師陣には名を連ねなかつたが、時折二人を招いては美味しい料理を振る舞って、得意分野の数学を指南してくれている。

「そうですね。予想通り頭打ちになっています。一気に勉強を進めた弊害が出てしまった形ですね」

夏海が、溜め息を吐きながらテスト結果を渡す。

「ふむふむ……これでもいい成績じゃが……」

テスト結果に目を通した武藤提督は、ヒゲを弄りながらテストの答案に目を通し始める。

「それがですね、調べたところ今年……²⁰²⁰来年度から制度が変わったんです。クラス平均点を超えないと編入を認めない、と言う方針になったんです」

めぐみが、取り寄せた資料を武藤提督に渡す。

「ふむ……在校生と編入候補生の、文字通りの戦争たたかいと言う事になったんじゃない？」

「はい、そうなんです」

夏海が、大きな溜め息を吐きながら応える。

そう。東京晴嵐男子学校中等部の、編入要項が変わったのだ。

それまでも声は上がっていたのだが、下位の学生が無条件で一般コースに脱落するのは可哀そうだ、と言う保護者の声から、

今年の保護者総代が音頭を取って、要項改正が行われたのだ。

姉妹校である、東北百合根女子学園でも同様の要項改正が行われた為、危機感を感じた夏海が、教師経由で資料を取り寄せたのだった。

結果、ハードルが上がった圭一は、更なる勉強を強いられることになった。

講師陣が焦りを覚え、一気に内容を進めた結果、圭一の成績が頭打ちになってしまう、と言う事態に陥っていた。

しかも、編入試験は一月後半に行われる。

圭一は、今もきつと史絵と勉強を続けていることだろう。

講師陣が教育方針に頭を悩ましている中、パジャマ姿の圭一と史絵は、圭一の家で勉強を続けている。

圭一の部屋のこたつで向かい合って、黙々とそれぞれの課題を熟している。

優等生の史絵は、年始の小テストで安全圏内を確保しているものの、圭一はまだまだ安全圏内に入り込めていないのだ。

「あー！ー！判んねえ!!!」

圭一が、頭を掻きながら叫ぶ。

「圭一、ここはね……………こうして、こうやって……………」

史絵が隣に座り直すと、判らない点を判るまで教えている。

講師陣の予習に、史絵の判るまで何度も教える復習で、着実にステップアップしている……………

だが、講師陣は焦って小さな一歩を見逃しているだけなのだ。

「ちよつと煮詰まって来たから、今日はこの辺にしましょう?」

「でもよお……………」

「もう二時回ってるし、続きはまた明日。皆焦り過ぎです」

「時間がないんだぜ。俺なんか馬鹿だから、もっとやらねえと!」

「圭一」

史絵は、静かに圭一の言葉をピシヤリと遮った。

「考えてください。試験まで、あと20日あります」

「お、おう」

「と言うことは、480時間あります」

「そうだな」

「半分を、食事その他に費やすとしても、まだ240時間もありません。寝て体力を回復するのも、立派な受験勉強です」

そう言うと、史絵は立ち上がり、圭一のベッドに腰掛けてから圭一の方を見る。

「圭一、寝ましよう?」

「お、おう……………」

まだ女の子と一緒にベッドに寝るのに慣れてない圭一は、顔を赤らめながらベッドへと向かう。

「おいおい、このテスト結果はだめだろ？」

それと時を同じくして、慎達の住まう一軒家のリビングで、講師陣の出した小テスト結果に目を通した慎は、大きな溜め息を吐いた。

奈緒子と櫻子はともかく、望が危険領域だった。

望は、本当にこの三年間、勉強なんかやって来てなかったのだった。「だよーねー」

悪びれずに応える望を、慎はプラバットで頭を叩く。

「アホか？滑り止めの私立が二月頭に、本命の公立が三月にあるんだぞ？」

「圭一よりはまだ時間あるじゃん？」

「ねえよ。圭一の方がスタートラインはずつと先だ。そんなこと言っていると、望だけ別部屋で寝ることになるな？」

しれっという慎に、望はぶんぶん頭を振る。

「それは困るー！」

「だったら、もつと勉強しろよ？」

「だって、判んないんだもん……」

しよぼくれる望に、三人は顔を覗き込む。

「何が判んねえんだよ？」

「それな」

「うん」

「判んないところが判んないんだって」

『……………』

こっちはこっちで、前途多難だった。

「それじゃあ、今日の授業を始めるわね」

今日は笹野医師の授業日である。授業は宮戸島鎮守府のテーブルで行われている。

それぞれ夏海以外の講師陣が、輪番で授業を行って行く。

圭一と史絵、それにギャルズ達はそれぞれ領域が異なることから、

専ら問題集を解いたりしている。

医師等は理系が多い為、時折やつて来る高菜源一郎や歴史が得意な直哉が、文系の講師担当となっている。

とは言え、一番勉強が遅れている望に付きっきりの為、秘書艦や直哉が圭一の勉強を見て、

残り三人は、ほぼ自習状態である。

判んないところが判んない、と言うことが判明した望について、講師陣は大幅な方向転換をした。

各講師陣が「試験に出そうな分野」をピックアップして授業を行う、と言う方針に転換したのだ。

判んないところが判らないなら、判る分野をどんどん作って行けばいい。

笹野医師発案のこの方針で、望は少しずつ判る喜びを感じるようになっていた。

「あつ、だんだん判って来た感じ！」

「そう。その判らないことが判ったことが、勉強のモチベーションになるのよ」

嬉しそうに喜ぶ望に、笹野医師が優しく頭を撫でた。

こうして一月は、各自勉強が続いていた。

受験戦争

この時期、番長と愉快な仲間達は多忙を極めていた。

三学期が始まった圭一は、担任の鈴木先生に呼び出されていた。

「原くん」

「うつつ」

鈴木先生は30代半ばの穏やかな人で、今は席を外している隣の教師の椅子に座らせると口を開いた。

「校長先生と教頭先生と相談して決めたことなんだがね」

「は、はい」

「君、今日から校長室で勉強しなさい」

「え……ええええっ!？」

驚きである。校長室学習とは、主に問題児の懲罰目的で行われることが多い。

「田中校長は教育学博士号を持っていらっしやるし、君の良い講師になると思うんだが。この時期、通常の授業内容なんて疾うに通り越してるんだらう?」

「なるほど……」

「いやあ、校長先生も晴嵐男子学校に編入生を送り出すんだ、と張り切っていてね。私も君の男気を見たいものだ」

「……わっ……かりました。ありがとうございますッス」

圭一はぱつと立ち上がって、深々と頭を下げた。

そして、教室に戻って勉強道具を持って校長室に入って行く圭一を見送った後、鈴木先生は受話器を取り上げて、どこかへ電話を始める。「もしもし。ああ、高菜さん、鈴木です。皆さんの提案通りになりましたよ。……ええ、学校ではお任せください。我々教育の専門家が、責任を持って学力アップに努めます」

そう。この校長室登校計画は、直哉等講師陣が導き出した作戦だったのである。

夏海を除く、四人の講師陣が学校に赴いて、鈴木先生と田中校長に

直談判したのだ。

今頃、校長室の静かな部屋の中、少し緊張しながら勉強を教わる圭一と、教師のコネでテストの傾向を事前調査した田中校長とのマンツーマンでの勉強をしているだろうと。

鈴木先生は笑みを零しながら、マグカップのコーヒーを啜って空き時間を堪能していた。

一方ギャルズ達は、受験対策授業が始まった授業を、真面目に受けるようになっていた。

後方に固まった席で、いつもケータイを弄ったり化粧をしたり、やりたい放題だった彼女達も、

人が変わったかのように勉強をし始めて、教師陣を始め史絵以外のクラスメイトを唾然とさせたのだ。

本人達にとっては「今から本気出すだけ」と嘯いているが、望はとにかく勉強漬けだった。休み時間も遅れていた分を取り戻し、お昼休みも食事をぱぱと済ませると勉強に戻る。

判らないところをリストアップしてもらい、昼休みに担任の女性教諭・成原先生に提出した。

「横澤。これは、ほぼ全部の領域判らないってこと?」
「うん」

その答えに蟀谷を押さえながら、苦々しい顔をした成原先生は、

「はー、しょうがないなあ。この成原が、判り易く要点だけ教科書にマーカーを引いてあげよう」

「わあい、成原先生大好き!」

「はいはい、これは齊藤からも頼まれてたことだからね。良い彼氏をお持ちになつて。はー、あほらし」

「先生、荒れてるの?」

「はいはい。どーせ成原は、アラサーで彼氏もないモテナイ女だよ。はー、くっそ」

半分不貞腐れた態度を取りながら、望の教科書をひったくると、消

せるマーカーペンでラインを引き始める。

成原先生はぶつきらぼうで、一人称が『成原』と言う変わり者を自認しているが、面倒見が良く、生徒の人気は高い先生である。

「先生つてさあ」

「何だい？」

「ヴァーリン処女なの？」

そのど直球の質問に「はー」と態とらしく溜め息を吐いて、

「大学の時は、今の横澤みたいに遊んでたからね。それなりに経験はしてるよ」

「い、今は遊んでないよ！慎くんじゃないとダメになったし！」

「はー、アホくさ。惚気はいいからさ、もつとこの成原に有益な話をしてくれないのかい？」

「有益な話ねえ……あ、彼女探してるパイセンいるんだけどさあ？」

そう言つて、隣の椅子に逆さ向きでどっかり座り込む望の顔を見ないで、教科書にせっせとラインを引いている成原先生は、

「へえー、で、いくつ？」

「19かな？大学生」

「はー、10も違うじゃないか。聞いて損した、はいはい解散解散」
「会っただけ会つてみない？」

興味が失せたように切つて捨てる成原先生に、望はニヤニヤしながら続ける。

そんな望に、少しだけ考える成原は手を休めずに、

「会つて、お茶でもしばいて、遊ぶだけなら考えてみようかなあ？」

「そうそう。意気投合して、ホテルにでも行つてさあ」

「はー、悲しいなあ。10以上年下の小娘に恋の指南を受けるなんて」
ぶつきらぼうな態度ながらも、口元に笑みを浮かべながら要点をラインで引いて、コメントをフリクションペンで書き加えて行く。

「そうだ、確認なんだけど、横澤は本命はあの二人と一緒にの公立高校で良い訳？」

「そうそう、滑り止めで私立の女子高受けるけど」

「田中から聞いた。二人も同じ併願で横澤が落ちたら一緒に女子高通

うってき。はー、良い友情だねえ」

「だってアタシ等、三人で一人みたいなものだし？」

「はー、若いねえ」

成原先生は、クルクルフリクションペンを手元で回転させながら、態とらしく大きな溜め息を吐く。

「先生はどんな子が好みなの？」

「そうさね、日本人で日本語通じるヤツかな？」

「どゆこと？」

「最近の若いヤツ——つっても成原も20代のペーパーだけど、人の話を聞かないヤツっているじゃん？横澤みたいに」

「うんうん」

「うんうんじゃないが」

「あはっ」

ツッコむと笑う望を見ながら、成原先生は大きな溜め息を吐いた。

「はー。この成原は、進路担当だから三年生全員の進路と約1名の進路を考えてやらないといけない立場だ。皆、笑って無事卒業できるようにね。一番の頭痛の種の横澤がこれだから困ってる、と言うことを文脈から読み取ってはくれないのかい？」

「あはっ、ごめんなさーい」

「はー、この貸しは本命合格で返してもらおうかね？まずは来月の滑り止め、そして三月の本命の一般入試、時間がないことだけは解ってくれると嬉しいなあ」

「そ、それは解ってるよ」

心外な！と憤る望の顔を見ずに、ふっと笑みを浮かべる成原先生。

「数学はこれでいいか？これから数日間、この成原の貴重な休み時間を潰してあげるんだから、精々足掻いて頑張ることだね」

「はーい！それじゃあ、デートのセッティング位はして置くね。今週末でいい？」

教科書を受け取ると、望がスマホを取り出しながら楽しそうに操作し始める。

「はー、成原は女子バスケット部の顧問だからね。夕方なら、空けられなく

「はないよ?」

「夕方ね。解った、連絡して置く」

「期待しないで置くよ」

この時、それが成原先生にとって運命の出会いになろうとは、今の二人には予想し得ないことだった。

「で、どうだった?」

その翌週の放課後、教室で補習を受けながら、望は土日の件を訊いてみた。

「童貞の遊び慣れてない子を寄越すなんて、どうかしてるよ。成原がリードして、無事童貞卒業させてあげたよ」

「で?で?」

「付き合うことになったよ。はー、ありがとう」

「良いパイセンでしょ?」

「今まで、お手付きされてなかったのが奇跡だよ。彼も不幸だね、こんな悪いお姉さんに捕まるなんて」

そう言つて、二人目を合わせてふふつと笑うと、成原先生は、

「さあ、雑談はここまでだ。今まで遊んでいた分、苦労はしてもらおうからね?」

「はーいー」

各々受験勉強をしながら日時が過ぎ、鎮守府教室も圭一と史絵にとつては、後一回になっていた。

圭一と史絵は明日から東京に向かい、土日を挟んで圭一の編入試験、そしてその週末、史絵の都立高推薦入学試験がある。

圭一は史絵の傍にいる為、試験終了後も一週間、学校を休んで滞在する予定らしい。

これは、成原先生の提案に乗った形である。

今日は、講師陣五人全員揃ったの授業となり、

圭一と望を集中的に教えて行った。

「これで、圭一と史絵ちゃんも鎮守府教室終了だね」

「二人共、一生懸命頑張ったのです」

「がんばったぴよん！」

「お疲れ様です」

「試験も頑張ってたね！」

直哉の宣言に、アシスタント役だった電達も労いの言葉を掛ける。

「圭一くん、史絵先輩、後はやるだけです」

「やるだけやってみな」

夏海と奈々海母娘の激励に、頷く二人。

「受験には魔物が潜んでいるから、十分注意しなさいな？」

「私達も合格を祈ってます」

笹野診療所の医師コンビがそれに続く。

「おうっ！やって来るぜ！」

「頑張ります！」

当日、仙台駅には見送りがいっぱい来ていた。

そんな中、三島達のチームも応援に駆け付けて来た為、奇妙な集団となっていた。

「三島さん」

「おうっ？」

そんな中、スーツ姿の圭一は三島に声を掛けて、

「一発気合を入れてください」

「おうっ！」

そう言うと、背中をバシーンと叩いた。

「ぐうっ」

「圭一!？」

「へへっ……三島さんの気合が入れば、勝ったも同然だ」

その後も家族達や皆の声援を背に、二人は仲良くホームへ向かって

行った。

土日を高菜家の高菜図書館で勉強して過ごした後、圭一は一人で受験会場である、晴嵐男子学校中等部に向かった。

通り掛かった、青いブレザーの男子生徒から向けられたのは、明確な敵意だった。

絶対に平均点を越させないぞ、と言う敵意だった……

他の生徒からもそんな敵意を向けられて、圭一は少し怖気がする思おぞけいだった。

試験は、一日掛けて別室で行われ、数人が試験を受けていた。

他の受験生は富裕層っぽく、服も良いものを身に着けている。

(負けてたまるか……!)

圭一の負けん気の強さが、怖気と緊張を解き解して、試験はスムーズに終わって行った。

そして、次は史絵とギャルズの入試である。

東京と東松島で試験が行われた。

その翌週、圭一は合格通知を受け取っていた。

だが、圭一の心持ちは重かった。後二年間、敵意を向けられながらやっけて行くのか?と思うと、自然気が重くなる。

そんな中、進路担当の成原先生に呼ばれた。

「成原先生、何の用つすか?」

「合格おめでとう。原」

「ありがとうございますツス」

「ところで、君は特進コースを、選んでも選ばなくてもいい」

成原先生は、晴嵐男子学校の編入要項の裏隅をコンコンと指差した。

そこには、特進コース編入合格者は一般コースに編入することもで

きる。と書かれていた。

「先生、それはどう言う……」

「成原は百合根女学園の出身だからね、特進編入組がプレッシャーに耐えきれなくて辞めて行くのを、何人か知っているんだよ。一般コースなら、成績の振れ幅も広いからね。元々草加の為の試験なんだろう？」

「そつすね、一般コースにするつす」

「賢明な判断だね。では、一般コースを選択するよう、先方に連絡を入れて置こう」

「お願いしますツス」

「ところで、草加も平岩も田中も合格したんだが……問題は……」

「ん？どうしたつすか？」

「いや、成原の独り言だ。原は教室に戻るといい」
「うつす」

「落ちてたのか」

「落ちてたのですか」

「落ちちやったぴよん？」

「やばいじゃん、滑り止めだよ？」

「皆さん。望さんにとどめを刺さないであげてください」

「えうー……」

不合格通知を隠して、まだ同居している面々には伝えていない望。

望は、真つ先に学校をサボって鎮守府にやって来た。

今にも泣きそうな望に、直哉は大きな溜め息を吐いた。

「まあ、兄さんも晴嵐の特進を滑り止めに、都立特進を選んで晴嵐落ちてるから、大丈夫だよ」

「あんな天才と一緒にしないで！もうだめだあ、おしまいだあ！」

わんわん泣き出す望に、やって来たのは慎だった。

「だろうと思っただよ」

「慎くん……」

「泣いてる暇があったら、学校に来て授業を受けろ。成原先生からの

伝言だ」

「えうう………」

「奈緒子と櫻子も史絵先輩も、もう知ってるから一緒に勉強するからおいで、って言ってるよ?」

「……うん、学校行く………」

望が立ち上がると薄雲が、

「学校まで送って行きましょう」

と、車の鍵を持って外に出て行く。

鎮守府学校の講師が二人増えた。推薦合格している史絵と、晴嵐男子学校の一般コースに編入を決めた圭一である。

圭一と史絵のカップルが二人で教えている間に、講師陣は残り二人の本命の、県立高校受験へ向けての対策を教える形になった。

こうして季節は、冬本番の二月になっていた。

番外編：明石の真面目な研究

硫黄島要塞。

そこは、〃マッドサイエンティスト〃明石の研究施設と化していた。

東京から遠いのをいいことに、明石と夕張は自由気儘に研究をしている。

いつしか、硫黄島科学要塞研究所と言う名称に変わっていた。

「明石さん、お昼なのDEATH」

上の階から明石の研究室ラボに降りたアルティメットいなづまちゃんは、

明石が真面目に研究している光景に首を傾げていた。

「……………」

明石は、ラットにアルティメットいなづまちゃん細胞を投与する実験の最中だった。

自己再生、自己増殖、そして自己進化の『三大理論の夢の細胞』。

ラットは、がん細胞のように膨れ上がって、即死した。

「ダメですか……………」

大きな溜め息を吐いた明石に、アルティメットいなづまちゃんが再び声を掛ける。

「明石さん、今度はなんの実験なのDEATHか？」

「ああ、郷里二佐に投与した『限定アルティメットいなづまちゃん細胞』を実用化出来ないものか?と思いましたがね」

「郷里二佐はどうなったのDEATHか？」

「土佐での定期検診の結果、通常の細胞に置き換わってしまったそうです。強靱な細胞にはなったようですが、自己再生力は殆ど失われて……………これでは失敗ですね」

「それで、このラットは？」

「ああ、これはもうちよつと浸透力を強めた細胞を投与したんですが、自己増殖の結果がん細胞化して死んでしまいました」

「何でそんなに、これに拘ってるのDEATHか？」

「そうですね」

明石はそう言うと、大きな溜め息を吐いた。

「再生医療、と言う分野に進出する為です」

「再生医療なのDEATHか？」

「そう、再生医療。再生できない細胞を再生する為の夢の細胞」

「……………」

そう語りながら、明石は昔のことを思い出していた。

明石が、東京の自衛隊大本営工廠部で働いていた頃の話だった。

ある雨の日、小さな少女が大本営工廠部の前で倒れているのを、明石が発見したのだ。

怪我をして倒れていたのだった。

「ちよつと！大丈夫ですか!？」

「うう……寒い……」

この少女は、美里と名乗った。

医療技術も持ち合わせている明石は、直ぐに工廠部の医務室に運び込み、応急手当を施した。

この身元不明の少女は、一旦工廠部で預かることになった。

数日間医務室で寝込んだ彼女は、ぽつりぽつりと話し始めた。

自分が虐待を受けて育って来たことと、そこから逃げ出して来たこと。

その告白を受けた明石は、自分が預かることにした。

「明石さん！おはようございます」

明石の散らかっていた官舎は、数日間で綺麗になり、更に美里は料理もこなして、毎朝明石を揺り起こす。

「う……ううん……おはようございます」

「朝ごはんできてますよっ！」

「ああ、ありがとうございます」

明石は部屋を出て行く美里を見送りながら起き上がると、制服に着替えリビングに向かう。

「いただきます！」

「はい、いただきます！」

二人で過ごす楽しい朝食。

最初はこの生活に戸惑いはしたものの、数日も経てば楽しい朝食になっっていた。

明石は、可愛い妹が出来たな、と彼女への好意を強めて行った。

そんな矢先、彼女は突然この世を去った。

交通事故だった。

横断歩道を渡つての買い物帰りに、信号無視の車にはねられて、即死だった。

悲報を受けた明石が駆け付けた病院の霊安室。

冷たくなつた彼女が横たわっていた。

「みーちゃん……どうして……」

「……………」

声を掛けても、美里は何も答えない。

明石は涙を流しながら、すっかり冷たくなつた美里の遺体を抱き締め続けていた。

事故を起こした運転手はその場で逮捕された、と聞かされても、明石にとつては何の慰めにもならなかった。

物言わぬ彼女を抱き締めながら、明石はとある決意を胸に秘めていた。

——美里を蘇らせる。

明石は直ぐに冷凍保存カプセルを作り上げ、工廠部の地下に美里の遺体を安置した。

周囲には、『火葬した』と偽って……………」

それから明石は、深海棲艦の研究を始めるようになった。

深海棲艦の再生能力に着目した。

鹵獲した深海棲艦を徹底的に解剖して、一つの結論に至った。

人間に、深海棲艦の細胞を移植することは可能ではないか……………」

最初の被験者は大垣 守……………」つまりは大貫 悟空将。

「美里ちゃんの為に、被験体になってください！」

明石のその言葉に、大貫はコクリと頷いた。

「私で良ければ力になろう。君のことだ、まずは安全な領域から始めるんだらう?」

「はい、守さん」

移植手術は成功に終わった。深海棲艦の青い血に置き換わった大貫 悟は、生涯病気に煩わされること無く健康に暮らしていた。

……暗殺されるまで。

明石は、その実験データを取りながら少しずつ、再生能力を持った細胞の研究に傾注して行った。

世間に公表されれば大問題になる実験を隠す為、明石は巫山戯た研究をして、周囲の目を逸らして行った。

そして一つの研究の完成形として、アルティメットいなづまちゃんが建造したのだった。

だが、その研究も頭打ちになっていた。

『通常生物への移植』と言う、大きな問題に直面していた。

限定的に能力をセーブして郷里二佐に投与した細胞は、郷里の細胞に負けてしまい、消えてなくなってしまった。

「明石さん?」

「ああ、すみません。昔のことを思い出していました」

「お昼が冷めるのDEATH」

アルティメットいなづまちゃんが小首を傾げながら呼ぶと、明石も立ち上がり、ラットを焼却炉に放り込んで、ラボを後にした。

硫黄島科学要塞研究所の地下。

明石だけが入れるパスワードロックの掛かった部屋で、彼女は佇んでいた。

部屋には、美里の遺体が安置された冷凍保存カプセル。
「みーちゃん、待っててね。いつかきつと生き返らせてあげるから」
明石の瞳には、強い意志が籠まっていた。

INSANE 〱 反逆の硫黄島要塞①

—— 東京、防衛省大本営。

明石、それに夕張、そして島風、アルティメットいなづまちゃん改めいなづまちゃんやんが大本営の出頭命令を受けてやって来ていた。

大本営の建物に入ると、明石はピリツとした空気を感じていた。

「総監がお待ちです、どうぞ」

副官の七原秋奈三佐が敬礼すると、四人も敬礼を返す。

秋奈の案内で総監執務室にやって来ると扉が開く。

そこには、足立幕僚総監が執務机に、応接ソファに四国警務隊長足立秋也一佐と、警務本部長兼関東警務隊長の七原陸将補が着席している。

四人が揃って執務机の前に立って敬礼すると、秋奈は足立総監の脇に控える。

「四人に来てもらったのは、他でもない」

足立総監が、渋い顔をしながら口を開いた。

秋也も七原将補も、厳しい顔をしている。

「足立一佐から告発が上がっている。アルティメットいなづまちゃん細胞を人体に使用し、あまつさえ、それを発展させようとしている。相違ないか？」

秋也の厳しい表情が、更に厳しいものになった。

「……はい、間違いありません」

明石は数刻逡巡した後、答えた。

「ばっか、お前何を考えてんだ。神にでもなったつもりか!？」

秋也が立ち上がり、指を指して糾弾する。

「……………」

明石は何も答えなかった。答えられなかった。

七原将補は、腕を組んだまま何も言葉を発しない。

ゴクリと夕張の喉が鳴る。

「では処分を言い渡す。工作艦明石。貴艦を東京工廠本部に異動とする。兼任していた開発部長の任を解く」

「……………」
事実上の解体処分だった。

明石から、兵器開発権限を取り上げたも同然だった。

「夕張と島風は、四月より新設される有明鎮守府に異動とする。アルティメットいなづまちゃんとやらも同様とする」

「……………はい」

「了解なのDEATH」

連帯責任、そう言っているいい処分内容だった。

島風はともかく、夕張からも開発権限を取り上げる、と言う厳しい処分であった。

「硫黄島科学要塞研究所は閉鎖とする。これより爆破解体作業を……………」

「待ってください！あそこには美里ちゃんが!!」

はっとして叫んだ時には、もう遅かった。

いなづまちゃんを除く全員が、苦々しい表情に変わる。

「明石、やはりそれが答えか?」

秋也が怒りを滲ませながら近づき、そして明石の胸倉を掴んだ。

「死んだ人間を生き返らせようってことか!?!ばっか、てめえ何考えてやがる!?!」

拳を叩き付けようとするも、夕張が割って入る。

「待ってください、暴力はだめです!」

「……………」

「止めんじゃねえ、夕張。こいつは、やってはいけないことをやったんだ。郷里のオッサンからは、アルティメットいなづまちゃん細胞の成分は消えたが、死なない細胞はがん細胞だ。郷里のオッサンに何かあったら、お前責任取れるのか!?!」

「……………彼には、安全を保証した程度の細胞しか投与していません」

「それが、人間が手を出したら許されない領域なんだよ!それを理解しろ!」

「……………理不尽に死んだ美里ちゃんを蘇生したい、そのどこがい

けないんですか!？」

明石の狂気染みた叫びに、秋也は一瞬怯んだが、それでも彼は歩も引かなかった

「いけねえよ! ジレーネ戦役では、たくさん人間が死んだ、艦娘もだ。いいか、耳をかつぽじつてよく聞け。遺体すら見つからなかった戦死者だっているんだよ! 坂本さんだって、大葉だって、それに岩崎や笠原だって死んだ! 今お前は、そんな人間達を愚弄した!」

「……………」

「まだ分からねえのか?」

「……解りたく、ありません」

「……………そうかそうか。工作艦明石、貴艦を営倉に収監する。頭を冷やしている!」

秋也の言葉と共に入って来る警務隊員に、艦娘用手錠を掛けられて連行されて行く明石。

「さて、叢雲達の砲撃が始まった頃か……………」

その直後だった。

『大本営! 聞こえる!? 硫黄島要塞攻撃部隊旗艦叢雲よ!!』

「どうした!？」

叢雲の緊急通信に、足立総監が答える。

『硫黄島要塞が暴走したわ、通信も繋がらないし、緊急用遠隔遮断装置も効かないわ』

「つ…………一度撤退だ!」

『もうとつくに撤退してるわよ! こっちは全員、要塞主砲で大破してるわ』

「何ということだ……………」

頭を抱える足立総監を尻目に、秋也は腰の九ミリ拳銃を抜いて、いなづまちゃんに向けて撃った。

胸のバッジに命中して、カラン…………と転がった。

「あうっ!」

「足立一佐、何してるんですか!？」

秋也は、咎めるような夕張の言葉を無視して、バッジを拾い上げる

と解体した。

盗聴器だった。

「そう言うことだ。何者かがすり替えておいたんだろう。そして硫黄島の主は……」

「ザザツ……」

総監端末に通信が入った。

テレビ電話の画面の先には、幼さを残した少女が座っていた。

真っ白い肌に赤い瞳……

「美里ちゃん……」

夕張は、信じられないといった表情で呟いた。

『私は蘇りました。そして、硫黄島科学要塞研究所は私が乗っ取りました。明石さんは微量のアルティメットいなづまちゃん細胞を投与してくれました。それはゆっくり私に浸透して、意識を取り戻しました。量産型いなづまちゃんの一人に意識を落とし込んで、ゆっくり準備をして来ました。いつか、こうなった日の為に』

「『……』」

その『正気の欠片もない笑顔』に、全員が押し黙った。

『いなづまちゃん、こっちに来ませんか?』

「嫌DEATH」

『ならば、無理矢理にでも……』

「うぐぐ……」

いなづまちゃんの瞳が赤く染まり……艤装を展開させる。

「やばい! 操られるぞ!!」

「いなづまちゃん!!」

いなづまちゃんは奥歯をぐつと噛み砕くと、苦しげな笑みを浮かべた。

「そうはさせません。夕張、今度こそさようならなのDEATH」

「えっ?」

絶句する夕張の目の前で、いなづまちゃんはサラサラと砂のようになつて消えて行った。

「いなづまちゃん!! いなづまちゃんやああああん!!」

『自沈しましたか……無駄なことを』

崩れ落ちながら泣き叫ぶ夕張の声を嘲るような美里の言葉に、夕張は崩れ落ちたまま。

「あ……あああ……」

残された形見であるお揃いの指輪を手に、泣き崩れている夕張に駆け寄って背中を擦る秋奈。

「てめえ、もう美里ちゃんじゃねえな。深海棲艦そのものだ!」

『あは、美里ちゃんの自我なんてもうとつくにありませんよ。……つ!!』

その直後、美里が一瞬苦悶の表情を浮かべた後真面目な表情に変わる。

『そんな事ありません!!皆さん、私の自我が少しでも残ってるうちに、私を殺してください!』

そして再び正気を失った笑みに戻って、画像がザザツと消えた。

「……硫黄島要塞の攻略作戦を実施する。高菜准将補と笹野一佐の艦隊を至急東京に呼んでくれ」

足立総監が苦々しく言うと、全員が頷いた。

「……と言う訳なんだ。美里の攻撃には明石も同意した」

集まった宮戸島・土佐鎮守府の面々に、秋也が会議室で説明をする。

「全く。明石も、何て馬鹿なことをしてくれただろうね? 気持ちちは、分からなくもないけどね」

「そうですね。でも、死んだ人間を蘇らせるなんて、私は認めたくありません」

直哉に続いて、愛も厳しい口調で続ける。

「本物は電だけなのです、なんて言ってる場合じゃないのです。いなづまちゃんの仇は電がとるのです」

「また要塞攻略だびよん」

「仕方ありません。暴走した硫黄島要塞のコアを止めるしかありませんね」

「美里ちゃんを殺さなきゃいけないの……?」

宮戸島の面々も、口々に言葉にする。

「仕方がないわ」

「そうね、避けられないBATTLEネ!」

「悲しいですけど……」

「仕方がない」

「そうだね、大井っち」

「そうですね」

ビスマルクを始め、アイオワ、鳳翔、伊勢、それに北上に大井もその言葉に頷く。

「ま、仕方がないわ」

「敵はコロスだけさね」

ジェニファアールとレ級は割り切ってしまったている。

他のル級達もコクリと頷いている。

「さあ、急いで出撃しましょう」

「ああ。その前に、私は寄るところがあるから、編成は愛ちゃんに任せるよ」

「はいっ!」

暗い地下営倉に座り込んでいる明石。

既に涙は枯れ果てた。

そこに、直哉がやって来た。

「何て……」

「馬鹿なことをしたんだ、ですよね?」

「そうだね。差し当たって、君の左遷は私が弁護して何とかしてあげよう」

そう言うと、ポケットから鍵を取り出して独房の鍵を開ける。

「さあ、出るんだ。そして美里ちゃんを説得するんだ。それができるのは、明石、君だけだよ」

「……わかりました!」

その瞳には、強い意志が戻っていた。

お台場鎮守府で補給を受けた宮戸島・土佐連合艦隊が出撃準備を進めている中、直哉と明石もヘリコプターでやって来た。

「先生、準備は整いましたっ！」

「では私達も乗り込むとしよう」

「……はい」

師弟で一緒に出撃する最後の戦いが今、始まろうとしていた。

INSANE へ 反逆の硫黄島要塞②

編成を終えた連合艦隊は、ビスマルクを旗艦にお台場鎮守府を出撃していた。

指揮艦に搭乗するのは直哉に愛、それに明石の三人。

艦隊陣形は第二警戒航行序列で、慎重に進んで行く。

最後の補給地である青ヶ島補給基地で補給を行った後、一同は硫黄島へと艦隊を進めて行った。

北硫黄島に差し掛かった時、偵察を行っていた伊勢から通信が入った。

『高菜提督、敵艦見ゆ、クラーリン艦隊を発見』

「く……クラーリンだ?!」

一瞬絶句した直哉の言葉に、愛は苦々しい顔をする。健太を連れて来なくてよかった、と。

「おそらくは、鹵獲したクラーリン級深海棲艦を アルティメット U いなづまちゃん細胞で複製したんでしよう」

「その可能性は大だな。あの『無敵艦隊』クラーリンを強化した存在だ、と言うのはかなり骨が折れるな」

直哉の言葉に、愛もコクリと頷いた。

「クラーリンなのですか」

伊勢から入って来た報告を受けながら、電は思案の後、

「突破するしかないのです」

『わかっている。全艦、対水上戦闘用意！』

直哉の号令で、全員構える。

まずは伊勢、鳳翔、レ級の航空攻撃が行われる。

艦爆・艦攻中心の編成で、クラーリンに接近して行く。

その時、異変が起こった。

ヴイイイイイイイイイン!!!

クラーリンの腕からニョキツと現れた30mm対空機関砲の弾幕で、

次々と艦載機が撃破されて行く。

「拙い、CIWSですか!!」

「くっ」

「へえ〜」

伊勢の叫びに、鳳翔が愛機が撃墜されて行くのに目を背ける。

レ級だけは、ニヤツと笑って前進する。

何とか残った数機が爆雷撃を行い、クラーリンを傷つけるも、すぐに再生能力で回復して行く。

「面白いじゃん」

好戦的なレ級が舌舐めずりをすると、北上と大井が前進する。

「次は、雷撃よー」

「大量の雷撃で」

「シネー」

北上と大井、それにレ級の先制雷撃で、クラーリンの一隻を集中して狙う。

「グアアアアアアア!!」

クラーリンは叫びと共に、木っ端微塵に碎け散った。

……………筈だった。

碎け散った残骸が、元に戻って行く。

そして、再びクラーリンの姿に戻っていた。

「え、マジ!?!」

「冗談でしょう!?!」

驚愕する北上と大井に、レ級は態とらしく大きな溜め息を吐いた。

「再生機能とか、はー、くっこそ」

次に砲雷撃戦が始まる。

アイオワとビスマルクが中心となって、鶴翼陣で半包围してクラーリンの一隻に集中砲火を浴びせ、粉微塵に碎く。

「グアアアアアアア!!」

クラーリンは、叫びと共に木っ端微塵に碎け散った。

そして、碎け散った残骸が元に戻って行く。

「電、雷撃よ！」

「完全に粉々にするのです！」

ビスマルクと電を中心にして、粉々になった戻りかけたクラーリンに雷撃を直撃させる。

クラーリンは爆炎と共に燃え上がり……………

「やったの!？」

「ダメだったのです」

そして、再びクラーリンの姿へと戻って行った。

「……………ダメなの!？」

ビスマルクが、ぐつと拳を握りしめた時だった。

『薄雲さん、アイキャン⁸⁰フライ砲^{cm}三連装^{三連装}に搭載されてる#3弾を装填してください!』

明石から、叫ぶような通信が入って来る。

「それは、#3弾薬庫……………テルミット・アドバンス弾を使用せよ、と言うことですか？」

『はい。細胞を残さず焼き払えば、消滅できる筈です!』

「使用は構わないのですが、海面が蒸発して水蒸気爆発が起こりますが、よろしいですか？」

『はい!責任は全て私が……………』

そう言い終わる前に、直哉の言葉が変わる。

『私達が取ろう、テルミット・アドバンス弾装填』

『各艦緊急後退、宮戸島艦隊はフォーメーションF!』

直哉の装填指示と同時に、愛が艦隊全艦の緊急後退と、アイキャンフライ砲による四隻での緊急後退フォーメーションを指示すると、薄雲は真ん中の砲身^{バレル}を伸長させて、スコープを覗き込む。

「目標、敵陣中心……………」

薄雲が迫るクラーリン艦隊に照準を向けている間に、ビスマルクが、

「全艦急速後退!尤もらしく逃げるわよ!」

『了解!』

『わー!!!にげろー!!!』

土佐鎮守府艦隊が急速反転し、尤もらしく慌てて逃げるふりをしながら、後退して行く。

クラリーンは、そちらに気を取られて、薄雲への注意を逸らしてしまふ。

「テルミット・アドバンス弾、発射」

ズドオン！

ズザザアアっ!!

「くっ!!」

「反動が……」

「すごいぴょん!!」

「皆、無事ですか!？」

その反動で、四隻の宮戸島艦隊の面々は、薄雲に必死に抱き付きながら、高速で下がって行く。

浦の星の技術オタク
あつちの明石が改良したアイキャンフライ砲の反動は、かなりのものだった。

チュガッ

そしてテルミット・アドバンス弾は、テルミット反応を起こして周囲を高熱の地獄と変えて行く。

ズドオン！

と言う爆発音と共に巨大な水煙が立ち上り、周辺に潮の雨を降らせた。

テルミット反応により6,000度の熱で焼き払う。まさに、最終兵器だった。

「ふう……………」

しかし水煙が晴れた時、連合艦隊が目にしたものは、信じられない光景だった。

クラリーン艦隊は健在だったのだ。

焼き払っても再生する、悪魔の細胞と化していた。

『嘘……………まさか、自己進化……………?テルミット・アドバンス弾のデータも取り込んで……………』

明石の絶望的な声に、レ級が通信を入れる。何時になく真面目な表

情だった。

「あー、こちらレ級。一つ作戦案があるんだけど、よろしいかな?」

『何だ!?!』

直哉の怒鳴るような返事に、肩を竦めながら通信を返す。

「クラールン級は撃破不能と判断。土佐艦隊は、ここでクラールンと遊釘付けにすんでるから、アイキャンフライ砲で宮戸島艦隊と明石で敵陣を強行突破して、要塞に接近して説得するなり殺すなりすればいいんじゃないかな?」

『なるほど、それしかなさそうだな。薄雲、デリバリーを頼めるかな?』

「了解しました」

指揮艦から明石が水上に降りると、子日の後ろに抱き付いた。

再び三連装モードに戻すと、薄雲は何もない後方に向き直り、アイキャンフライ砲を向け、トリガーを引いた。

ズガアン!

ズガアン!

ズガアン!

爆音に近い発射音と共に、一気に五隻は加速すると、クラールンの単横陣を突破して、硫黄島要塞に急いで航行して行った。

「急ぐのです!」

「はい!」

「わかったぴよん!」

「了解です」

「わかったよお!」

硫黄島要塞に辿り着いた電達を待ち受けていたのは、要塞そのものが深海棲艦化した姿だった。

まさに、『デビル硫黄島要塞』。

「(っ)……………これは」

「禍々しい姿だぴよん」

「倒すのに、骨が要りそうですね」

「勝てる気がしないよお……」

「外壁にはアルティメット……いいえ、デビル細胞が使用されていて、突入するにも……」

『諦めるのはまだ早いよ！』

その通信と共に輸送ヘリコプターが飛んで来て、空から何か舞い降りて来た。

『いやっほう!! 応援を一人デリバリーしたよ！』

ヘリコプターの操縦の主は、大垣 翼だった。

そして、双眼鏡で薄雲が空を覗くと、舞い降りて来たのは真愛だった。

そして、パラシュートが開き、ゆっくり舞い降りて行く。

「へくんしんっ！」

真愛は、その可愛い掛け声と共に、駆逐新棲鬼に変貌して行く。

こうして、電達は六隻が揃い、最初で最後の正規一個艦隊として、要塞に挑むことになった。

中学生くらいの姿になった真愛本気モード駆逐新棲鬼は、一気に要塞主砲の射程距離に迫って行く。

「いやっほう！」

駆逐新棲鬼は、その砲撃を島風を超える快速で避け始める。

次々と発艦して来る艦戦に対しては、腰から大きな銃をクルリと回して、トリガーを何度も引く。

トリガーが引かれる度に、たこ焼き艦戦レッドカスタムR Cが出現して、ドッグファイトに加わる。

上空のヘリコプターはUターンすると、西の空に去って行った。

「真愛ちゃんに負けてられないのです！」

「テルミット・アドバンス弾で穴を開けます。電と明石さんは要塞内へ！」

「うーちゃんと！」

「子日で支えるから！」

二人で支えるのはかなり厳しいことを承知で、薄雲はアンカーを下

ろし砲撃態勢に入る。

「テルミット・アドバンス……発射!!」

ズガアンっ!!

「「うわあぁっ!!」」

そのまま、薄雲と子日と卯月は後方に吹き飛ばされ、テルミット・アドバンス弾は外壁で炸裂して大きな穴を開けた。

じわじわと修復されて行く。

薄雲達は海面に叩きつけられ、気を失って浮かんでいる。

「皆!!」

吹き飛ばされた三人に注意が向いてしまい、足が止まってしまいう駆逐新棲鬼に、容赦なく砲弾の雨が降り注ぐ。

「あうっ!!」

吹き飛ばされた駆逐新棲鬼は力を失い、真愛の姿に戻ってしまう。

「お姉ちゃん達! 真愛は薄雲お姉ちゃん達を助けに行く! だから!」

「わかってるのです。明石」

「はい!」

今にも沈みそうな薄雲達を、中破の状態ながらも救助に向かう真愛を見送りながら、電と明石は要塞内に飛び込んだ。

要塞最深部では、美里が指揮席に腰を下ろしていた。

「美里ちゃん!」

「明石……ここまで来たんですか……」

「美里ちゃんはもう死んだんです、だから!」

その言葉に、美里が激昂した

「その美里を蘇らせようとしたのは、どこの誰だ!」

「私です。ですから、私と一緒に死んでもらいます」

「なっ……?」

「電さん、脱出してください!」

「ふふっ、もう無理なのです。直哉、さよならなのです」

「待て! 明石、お前は唯一の工作艦……!」

焦ったようなデビル化した美里に、明石はばつと艀装を展開した。体中にテルミット・アドバンスを巻き付けた状態で……………

「やめろ!! やめろおおお!!」

「美里ちゃん! ごめんなさい……………!!」

カツ……………

6,000度の炎に包まれて行く中、美里は穏やかな表情になった。

「ありがとう……………明石お姉ちゃん……………だから、死なないで……………」

硫黄島要塞は、その炎と共に消滅した。

電が目を覚ますと、焼け野原になった硫黄島に倒れていた。

隣では、明石が気を失っているようだった。

「ここは……………う?」

全てが消滅した硫黄島に、卯月達がやって来る。

「電ちゃん、明石さん、無事だったぴょん!」

「まさに奇跡です……………硫黄島要塞は消滅したのに……………」

「美里ちゃんは!」

「おねえちゃん、だいじょうぶ!」

電達は起き上がれずにいた。

そして、卯月、薄雲、子曰、真愛に囲まれて再び意識を失った……………

クラーリンと戦っていた直哉達は、瀕死の状態だった。

全艦大破、愛と直哉も指揮艦に魚雷が直撃して重傷だった。

「もうだめなの……………」

「Why! 何で勝てないの!」

「高菜提督! 愛ちゃん!!」

「もう、艦載機がない……………」

「大井っち……………」

「北上さん……………」

「ヤキが回ったようね」

「まあ、仕方なからうよ。潔く沈もうか」

「愛ちゃん……大丈夫か……?」

「先生こそ……大丈夫ですか……?」

その直後、硫黄島の方で大爆発が起こったと思った直後に、クラールンは溶けて消えた……

『皆、大丈夫!』

「終わった……ようだね」

「はい……」

叢雲率いる量産型いなづまちゃん艦隊が救援にやって来るのを見ながら、直哉と愛も意識を手放した。

直哉と愛は、揃って東京の病院に入院、明石と電は艀装が完全破壊されて、海に浮けなくなった。

全員大破で、お台場鎮守府で待機していた夕張は、朝まで入渠作業を行っていた。

唯一中破の真愛は、皆のナビゲートをしてお台場に帰った後、気を失うように眠りに就いた。

こうして、硫黄島事変は終わりを告げた。

足立総監が協力を依頼した、浜松警備保障の面々が硫黄島の調査を行ったが、全てが消えてなくなっていた。

純粋な自己再生能力しかない、量産型いなづまちゃん5体だけが残って、全て灰燼に帰したのだ。

結局、明石の私的な研究成果は、限定的なものになった。

「やれやれ、なのです」

海に浮けなくなった電は、苦笑しながら同じ病院に入院している直哉のお見舞いをしていた。

「海に浮けなくなつて、電はどうするつもりなんだい?」

「三佐の階級で、新設される有明鎮守府の司令官を拝命したのです」

「そうか、電はそれでよかったのか?」

「わたしは直哉と一緒にいればそれで……後悔はしていません」

電は、少し大人びた雰囲気になっていた。そんな彼女を、直哉は優しく抱き締めた。

望の最終決戦！

二月中旬の学校の放課後、望が成原先生の補習を受けていた。まずは、持ち帰ったテスト問題の改めての自己採点から始まった。「うーん。成原としては、合格圏内だと思っていただけだな。はー、悲しいなあ」

「だよね」

「まあ、入試と言うのは相対的なものだからな。滑り止めで多数の女子が受験する以上、こう言う事態は致し方ないし、予想していたことだ……しかし、後がなくなったなあ」

「せんせえ、あんま追い詰めないでよお」

望は、机に突っ伏すと泣きそうな声になる。

「ほらほら、顔を上げろ。時間がないぞ。成原は今夜、予定が入っているんだ」

「もしかして、直人先輩とお約束？」

成原先生の言葉に、ぼつと顔を上げて笑顔になる望。

「こそ。だから、早く顔を上げて課題を熟すんだよ」

「はあい」

一生懸命勉強をしている望を見ながら、成原先生はこれからのデートに思いを馳せていた。

今日は花の金曜日、お泊りデートの予定なのだ。

「そう言えば、初デートはどんな感じだったの？」

「初デート………ああ、付き合ってから初めてのデートのことか。成原はダーツが好きで、ダーツバーに行ったよ。直人にもちゃんとダーツを買ってあげてね、直人も誕生日で二十歳になったってことで、大手を振って飲酒ができるようになったからね。はー、楽しかったよ」
「ほうほう、ダーツバーっておしゃれだね。望達はネットカフェのダーツしか行ったことないから」

「そりやそうだろう。横澤達は未成年だからね」

望の言葉にふつと笑うと、望は課題を熟しながら、

「その後はっ…」

「ん？言わなくてもご想像のとおりだよ。成原は朝帰りで、シャワーを浴びに帰って出勤だよ」

「だよー」

「はー、成原は横沢にお礼をしたいと思っっているんだ。だからこうやって毎日補習をしている訳だから、横澤もソレに応えて公立高校入試をパスしてもらいたいね」

「はあい」

元気よく応える望に、再び笑みを零しながら、その様子を見守っている成原先生だった。

直哉達が退院して帰って来る頃には、望の学力も向上していた。

「ふむふむ、70点なのです」

艦娘として引退した電は、当面は「宮戸島鎮守府司令官副官・三等陸佐」と言うことで、緑色の制服を支給された。

電の希望により、陸上自衛隊を選択したのだった。

二人お揃いの陸自制服を身に纏った、直哉と電。

電が採点すると、直哉もそれを受け取り見ている。

余談だが、熊崎提督の妻・不知火とは同じ沈みかけた元艦娘同士、連絡を取り合っているようだ。

「ふむ、これなら合格圏内だね」

「でしょでしょ！頑張ったっしょー！」

直哉の言葉に嬉しそうな顔をしている望に、秘書艦の薄雲が冷静に、

「油断は禁物です。試験とは相対的なもので、公立高校は定員を超えています」

と言うと、前回の女子校——かなりの高倍率で皆滑り止め受験をした結果だが——の敗北を思い出して、望はしよんぼりする。

「それが心配なんだよね……」

「まあ、やるだけやって後悔のないようにね」

「なのです」

ぼんと電が頭を撫でると、望は笑顔になる。

「おーっす！」

「こんにちは」

真つ先に、圭一と史絵がやって来る。

「望センパイ、ちゃんと勉強やってつか？」

「成原先生にも教わってるから大丈夫でしょう」

「あの成原センセな。変わりもんだけど、頭いいんだろ？」

続いてやって来るのは、寛太と優花である。

「こんにちはー！」

「こんにちはあく？」

そして、慎と奈緒子と櫻子もやって来る。

「うっす」

「のんちゃん勉強してる？」

「だね」

一気に賑やかになる、宮戸島鎮守府。

「こんな大勢でワイワイやるのも、後一月と少しだねえ。私達と圭一くと史絵ちゃんは東京に行って、代わりに愛ちゃんと健太君達が戻って来る訳だ。そろそろ引越しの準備もしないとねえ」

感慨深そうに直哉が言うと、皆も頷いた。

三月に入って、望の受験当日である。

受験するのは、ギャルズの三人である。

「三人で受かろうね！」

「それな」

「うん！」

皆でお揃いのお守りを手に、三人で頷く。

慎や圭一、史絵、それに寛太と優花もお見送りに集まっている。

もちろん講師陣を代表して、直哉と倉田・笹野両医師も集まっている。

「よっしやー！センパイ達頑張ってるんだぜ！」

「応援してます！」

圭一と史絵が、真っ先にエールを送る。

「ありがとう！」

「頑張るね！」

「うん、頑張ってる」

三人も笑顔でそれに応える。望だけは緊張しているが……

「のんちゃん先輩、りらーつくす」

「そうだよ、リラックスして！」

優花が背後に回って望の肩を揉むと、寛太も笑顔でエールを送る。

「ひゃー！リラックス……してみるよお」

そんな望の様子に、笑いながら直哉が続く。

「いい言葉を教えてあげよう。『我も人なり、彼も人なり』条件は一緒だ。回答マスだけは全部埋めるんだよ？」

「はあい」

元気良く応える望の頭を、優しく撫でる直哉。

「私達にできることはしました。後は試験のことだけ考えてください」

「そうね、当たって砕けるつもりで気楽にやんなさい」

倉田先生と笹野先生も駆け付けてエールを送る。

「はあい！ありがとうございます」

望が笑顔を浮かべて応えると、二人の医師は満足そうに頷いた。

「それじゃあ、悔いのないようによってこいよ？」

慎が最後に望、奈緒子、櫻子を抱擁するとギョツと抱き返す。

こうして三人は、試験会場へと向かって行った。

そして、三人仲良く合格を勝ち取った。

「それじゃあ、受験組の全員合格を祝って……」

『カンパニー！』

試験合格通知を受け取った夜、皆で祝勝会という名の夕食会が開催

された。

そこには、成原先生も招待した。

「はー、成原は心配してたんだよ。でもこれで、全員笑って春を迎えられることが決まって良かったよ」

進路担当の重荷を降ろした成原先生は、望に注がれたビールを飲みながらそう言うと、

「あたし史上一番頑張ったよー！」

と、胸を張る。

「でも、受験合格はスタートラインだからね。頑張りなさい」

との成原先生の言葉に、強く頷いた。

「先生、私達も褒めて褒めて」

「うん」

残りのギャルズ達も主張して来るので、成原先生は割と雑に、

「二人も頑張ったと成原は思ってるよ、偉い偉い」

と、褒めてくれる。

史絵と圭一も、慎達に囲まれてジュースを飲んで上機嫌である。

史絵の小説が、更に重版が決まり、プロ作家として結果を出す、と言うことも果たしたという知らせも、二人を上機嫌にさせた。

夏向先生の一弟子、だと言う触れ込みも付いて、二作目の連載も人気のベストセラーとなっている。

そんな様子を見ながら直哉と電、それに嫁艦達はこうやってワイワイやるのも、最後だなと実感していた。

家の片付けは大体終わり、そこには愛達が入居することが決まっていた。

笹野家では愛に健太に燿子、リーヴェに真愛、陽ひなたにリヴァは収容しきれない、と言うことで、

直哉がそのまま名義変更の手續を取ってくれたのだ。

敷金はそのまま良いよ、と言って。

あとは、引越し業者が荷物を東京に持って行けば、片付けは完了である。

「ところで、俺達は高菜先生の家に下宿するんですけど、司令官達はどうか

するんすか?」

ふと圭一が、直哉達に訊くと直哉は肩を竦めた。

「それこそ、コネクションさ。有明の三友地所のレジデンスを借りることにしたよ。格安で」

「へえ、そうなんですね……」

「直哉は毎日、防衛省まで電車通勤なのですよ」

「三高ワンダーランドも近いし、良いところだったぴよん」

「部屋も広くて使い易かったです」

「そうだね!」

序でに、と言うことで、嫁艦達は既に下見を済ませており、電と嫁艦の総意でここに引越すことを決めたのだ。

「おそらく、あつちの皆も引越しの準備を進めているだろうね。圭一達の引越しに合わせて、私達も宮戸島を離れるよ。長い間いたからね、名残惜しいよ」

「そうなのです」

「寂しくなるぴよん……」

「春は別れの季節と言いますが、出会いの季節でもあります」

「そうだね」

直哉達が宮戸島を離れるまで、後もう少しだった。

おしまい

三月半ばになって、皆慌しくなっていた。

まずは、宮戸島鎮守府の改築工事が入った。

司令官執務室に、航空隊長執務室や応接室等、鎮守府に必要な施設を設置している。

コンテナハウスの組み合わせなので、数日中には工事が終わるだろう。

基地航空隊が正式に認可されたので、工廠の横に航空隊基地が建設されていて、

艦娘・女子寮も正式に建設されていた。

コンテナハウスを組み合わせた二階建ての施設で、艦娘達と翼が入居する予定である。

その間、執務は埠頭に設置された四畳半の仮執務室コンテナハウスの中で行われて……いなかった。

直哉曰く、

「後任は優秀な子だからね、多少貯めてても問題ないよ」

そう言いながら、ブランデーを呑んでいる。

電も、困った笑顔を浮かべながらその隣に座っている。

お揃いの制服はお気に入りらしく、直哉が見ている映画をノートパソコンで見ている。

「ところで、執務室のテレビやステレオはどうするつもりだい？」

「愛ちゃんにあげるのです」

「うん、いいね」

そんな言葉を聞きながら、四月から有明鎮守府秘書艦になる薄雲は、秘書艦業務だけはせつせと片付けてしまっている。

引き継ぎマニュアルから何やら、全てを熟している。

着任するビスマルクが困らないように、との配慮である。

同じ頃、高菜借家家では引越し業者と卯月と子日が、引越し荷物の運び出しを行っている。

「こっちの箱は割れ物だぴょん！」

「これは子日の私物だから、あとでいいよ！」

お掃除をしながら、運び出されて行く荷物を見送るエプロン姿の二人。

「しっかし……」

「うーちゃん、どうしたの？」

「ここもおさらばとなると、ちよつと寂しくなるぴよん……」

「でも、東京だよ！楽しいものがいっぱいあるよ！」

寂しそうにしている卯月を、子日は元氣付けようと励ましている。

こうして高菜家は引き払われ、子日と卯月は一旦東京に向かい、直哉達は民宿に宿泊することになる。

春休みに合わせてやって来る愛ちゃん達に合わせる形で、早めに引き払ったのだ。

それと同じくして、原家でも引越しの準備が行われていた。

「おーい、これは持っていくのか？」

「圭一くん、衣類はダンボール詰め終わったよ」

手伝いに来た慎と寛太が、持って行く物と置いてく物の選別を行っている。

東京では、空き部屋にしていた直哉と優衣の部屋を使う手筈が着いている。

「ああ、そいつは持って行って、後は置いてく感じだな。漫画は全部持って行くぜ」

「はいはい、りょーかい」

圭一がギリギリまでやらない性格の為、こうやって早めに放課後にやって来ては、一緒に荷物の梱包をやって行くのだ。

こちらは単身なので、早めに終わりそうである。

「それよか、愛達が来るのはいっただっけ？」

「愛ちゃん達はあつちで終業式を終えてからこつちに来るよ。それで、歓送迎会を行って、直哉師匠さん達が東京に向かう手筈になってるらしいよ」

「うん、圭一に合わせて東京に行くつて。だから、それまでに荷物は発

送して欲しいってさ、言ってたよ」

「ああ、そうだったな」

圭一は、ギヤルズ望・奈緒子・櫻子と優花も史絵の引越の手伝いをしているだろう、と考えていた。

史絵の方は締切がある為、殆どギヤルズ達にお任せだった。

「ねー、ふみえもん」

「何ですか？」

執筆用のMacBookで、次回の『小さな提督シリーズ』の原稿を書きながら応える史絵に、

「勝負下着みつけちゃった！」

「!？」

ぱつと振り返ると、こっそりネットで購入したセクシーランジェリーを両手にした望がいた。

「は、早くしまってください!!」

「あはは、顔真っ赤だよ」

「それな」

「だね」

「だねえ〜」

顔を真っ赤にして抗議する史絵を、笑いながら誂うギヤルズに優花。

「もう……」

「あつちでも元気だね。あ、子供出来たら連絡するんだよ」

「学生の間は予定はないです。結婚したら、ですよ」

そこは弁えてる、心外な。と言わんばかりに、セクシー下着を取り上げてダンボール箱に仕舞い込むと、再び机に向かう。

史絵はこうやって多忙な日々を、引越しの準備を手伝ってもらいながら過ごすのだ。

卒業式を迎えた日、愛達がやって来た。

「久々に故郷に帰って来たね、健太」

「うん」

「ここが二人の故郷なのね」

引越し作業は業者とリーヴェ、それに翼に任せると早速、改築が完成した宮戸島鎮守府に向かった。

鍵が掛かって入れない。

そう。直哉は未だに、仮執務室の方で寛いでいる。

埠頭の方に向かうと、直哉と電が執務室から出て来ていた。

「愛ちゃん、いや、笹野一佐。これでバトンタッチだね？」

「はいっ」

二人は、手をパシンと叩いた。

「そこで、執務は四月一日からでいいから、休暇を楽しんでもらいたいけど、幕僚総監補として辞令がある。健太君と燿子ちゃんの全ての職を解く」

「そうですね、その方がいいですね」

その辞令に、愛とその後ろの二人も頷く。

「と言う訳で、再び名誉隊員として頑張つてね！」

くるっと振り向くと、愛が笑顔を向ける。

これから先、この愛弟子である愛に、全てを任せられるだろう、と直哉は安堵し、導き手の役目が終わったことを実感した。

これから先の物語は、彼女達が紡いで行く。もはや自分は、役目を終え新たな役目へと進む時が来たのだ、と笑いながら考えていた。

そして、電もそれに寄り添って笑みを浮かべていた。

宮戸島のお気楽な提督の話はこれでおしまい。

完

2nd Season 2020年編

さいかい

4月の半ば……

笹野 愛の朝は早い。

新調したキングサイズベッドの真ん中で、午前五時0500に目が覚める。

キングサイズベッドの隣のベビーベッドでは、ひなた陽とリヴァアがすやすやと眠っている。

「ふああ……………」

隣では、健太と燿子とリーヴェと真愛が眠っている。

そして、愛が起きると真愛もガバッと起きる。

「おはよう!!ママ!!」

かなりの大音声で、皆目を覚ます。

もちろん、赤ん坊達もびっくりして目を覚ます。

今は慣れたもので、再び眠りに就く。

「おはよう、真愛」

元気いっぱいの真愛の頭を撫でながら、パジャマから中学校の制服に着替えると、

朝の一仕事、と鎮守府に自転車で出掛ける。

その間に健太と燿子は二度寝し、リーヴェは赤ちゃんと共に一階に降りて、朝食の支度をする。

オープンキッチンで赤ちゃんの様子を見易い為、安心して料理を作れる。

そんな赤ちゃん達は、仲良く座ってテレビを見ている。

毎日この時間にやっている、CS放送の『それいけ!ワンパンマン!』を鑑賞しているのだ。

愛が鎮守府にやって来ると、既に執務室には秘書艦兼旗艦のビスマルクが出勤して待っている。

「おはようございます」

「おはよう、愛ちゃん。今日の書類は未決箱に入れてあるわ」

「おつ、ありがとうございます」

司令官執務机に着席すると同時に、ビスマルクがコーヒーを差し出す。

いつも早朝やって来る司令官の為に、コーヒーメーカーでコーヒーを用意している。

コーヒー専門店で購入した豆を、毎日ミルして抽出している美味しいコーヒーである。

「うん、美味しい」

「お褒めに与り光栄よ」

早速、4月15日付の人事異動を確認する。

「へえー、七原陸将補も引退ですか。中岡准将が昇進して警務隊本部長に補職されるんですね」

「そうらしいわ。でもあの爺さん、高菜副総監によると、再任用制度で『第1空挺団の指導員』として、防衛省に残ることになるそうよ」

「そうなんですね。まあ、高菜先生のお師匠さんが早々に楽隠居……とは考えにくいですからね」

「そうなのよ。きつとまた、訓練の鬼が現場に戻って来るから、空挺団は戦々恐々ね」

そんな世間話をしながら、全ての書類に目を通して行く。

午前六時半
0630になると、仕事を中断して家へと戻る。

「ただいまー!」

『おかえりなさいーい』

そこで、皆で食事の時間である。

食事が終わると、皆はお着替えタイムである。

真愛は小学校の制服、耀子と健太は中学校の制服に着替える。

「おつーすー!」

「あー、おやぶん!」

真つ先にやって来るのは、拓くんである。

二件隣の空き家を購入して、ご近所さん同士で仲良く付き合っている。

最近、二人になつてしまつた寂しさか急接近して、拓くんのお迎えが来る度にぎゅーつと抱き付く。

「ちよつと、離れるよ！」

「ちゅーしれー！したら離してあげるー！」

「はいはい、ちゅーな」

ほつぺたにチュツとすると、真愛も離れる。

そんな様子をニマニマと眺めている中学生トリオを無視して、拓は真愛の手を引いて行く。

「行つて来まゝす！」

『行つてらつしやーい』

拓くんと真愛を見送ると、今度は中学生組の優花と慎と寛太、それに高校生のギャルズ達がやつて来る。

「皆あゝ、おはよお」

「ういっす」

「おはよう」

「やほー」

「それな」

「うん」

『おはよー』

新しくやつて来た燿子ともすつかり打ち解け、皆で仲良く自転車で島外の中学校・高校まで自転車通学なのだ。

早速燿子はギャルズ達の洗礼を受けて、エツチな話もするようになっていた。

二年のクラス替えて、奇跡的にも六人全員が同じクラスになり、担任は卒業生を送り出し、前任者が定年退職した為、成原先生が担当することになった。

先生曰く、

「はー、問題児を送り出したと思つたら、提督^愛に、深海棲艦^健に、茶髪娘^子に、天然カップルに番長^慎2号とはね。『また』問題児じゃないか」
とのことである。

学校の授業が終わると、真つ先に鎮守府に向かう組と街で遊んで行

く組に分かれる。

今日は、慎とギャルズ達に燿子を加えて、カラオケに行くそうだ。もちろん逆ナンをしないように、ナンパされないように慎の目が光っている。

鎮守府に帰る愛と健太、それに寛太と優花は、仲良く自転車で鎮守府へと向かう。

鎮守府にやって来ると、愛は艦娘寮のロッカールームで海上自衛隊の作業着に着替えて、執務を始める。

健太と優花と寛太は、大きなテーブルで宿題をこなし始めている。夕方になると、愛の携帯電話が鳴る。

もちろん、高菜陸将補こと高菜直哉である。

「もしもし、先生」

『やあ、司令官の椅子の座り心地はどうかかな?』

「そっちはどうなんですか?」

『いやあ、副総監と言ってもなかなか暇じゃなくてね、視察視察の毎日だよ。まったく、足立総監がトシだから』って、視察の仕事が全部私に回って来てね』

そんな高菜先生の愚痴に苦笑いを浮かべると、

「その、総監はお元気なんですか?」

『そうだね、元気にしているよ。来年には引退だから、それまでは楽できると思ったのになあ。七原の師匠と昼休みに将棋を指していたよ』
「七原将補も楽隠居しないようですよ、もしかしたら足立総監も、再任用制度で大本営に残られるんじゃないですか?」

そんな冗談に、本気で嫌そうな声になる高菜先生。

『冗談でもやめてくれよ。私だって、あの堅苦しい親父さんと一緒に仕事をしたい訳じゃあない』

「うふふ、先生がちゃんと仕事をしているか、電さんが心配していましたよ?」

電は、お台場鎮守府司令官として、提督の道を進んでいる。

秘書艦の薄雲を筆頭に、卯月、子曰、夕張で仲良く鎮守府運営をしている。

『失礼な。私だって仕事くらいしているさ』

「聞いてますよ、宮戸島鎮守府のお仕事ぶりは」

『……電め。まあいいさ……そうだ、この間圭一と飯を食いに行ったよ』

「そうなんですね、史絵さんと圭一君も元気ですか？」

東京に旅立った二人のことを思い浮かべながら、愛の顔も自然と笑顔になる。

長電話になりそうだと察した秘書艦のビスマルクは、秘書艦執務机から立ち上がると、コーヒーを淹れ直して書類の一部を持って行く。

「あ、すみません」

「ちよつと、仕事をもらって行くわね。ごゆつくり」

『仕事のジャマだったかな？』

「まあ、先生もたまには電話できる時間ができたようですし、大丈夫ですよ」

『それで、圭一と史絵ちゃんだったね。圭一は、早速番長になったらしいよ。男子ばかりの高校だからね、一般コースでもわりと優等生がいっぱいだから、勉強の方は史絵ちゃんに助けてもらってるらしいけど。史絵ちゃんは今、親父との共著に取り掛かってるらしいよ。その名も『大貫 悟伝く大垣 守の生き様と死に様』だそうだ』

その言葉に、愛は苦笑いになる。『大貫 悟本人』が、自伝を出すようなものじゃないかと。

もちろん愛は、高菜先生から全ての事情を聞いている。

「まあ、反艦娘派を一掃できると良いんですけどね？」

『そうだね。『深海棲艦と共生する社会の実現』が、第二のジレーネの出現を防ぐベストな方法だからね』

「さて、そろそろ定時でしょう？ 私は執務と宿題があるので失礼しますよ。」

『また今度、中岡新警務隊本部長と仙台に視察に行くから、顔を出すよ』

「はい、お待ちしておりますね」

執務を終わらせると、カラオケ組も合流して皆で宿題を終わらせ

る。

先に終わらせた健太達が、カラオケ組の宿題も手伝っている。

……何故か、先輩のギャルズ達も「手伝われている」のは不思議である。

和気藹々と宿題をしているところに、哨戒に出ていた艦娘達も戻って来る。

宿題が終わると皆解散して、残りの執務をビスマルクとアイオワに任せると、愛と健太と燿子は家へと帰る。

家では、真愛と拓がテレビゲームに熱中している。

「おかえりー。おやぶんも、お夕飯こっちで食べるって！金曜だからお泊りするよ」

「だぞー！」

そんな、仲のいい二人をニコニコしながら見守ってるリーヴェは、忙しそうに夕飯の支度をしている。

赤ん坊達の面倒は、真愛と拓がゲームをしながら見ててくれている。

「おかえりなさい、今日はハンバーグにしましたよ」

「それじゃあ手伝うよ」

愛は、エプロンを身に着けて料理を手伝い、燿子と健太は赤ちゃんの様子を見ながらゲームに加わる。

そして、皆で和気藹々と夕飯を摂ると、真愛と拓が二人でお風呂に入りに行く。

ちよつと拓の顔が赤いのは、気のせいだろうか。

そして、その後順番にお風呂に入って行き、真愛は子供部屋に向かい拓と一緒に寝る。

愛達はリビングでテレビを見て、そろそろ寝る時間になると、四人連れ立って寝室へと消える。

今日は真愛と一緒に寝てないから、三人で健太をじっくり愛する日になるな、と愛は思いながら……

こうして、司令官として戻って来た愛の一日が終わる。

明日もきつと良い日だろう。

浜松警備保障、宮戸島へ

中学校から帰って来た愛に、秘書艦ビスマルクから告げられたのは、予想外のものだった。

「救難信号ですか？」

「ええ、浜松警備保障のパーソナル警備サービスで、東北沖を航行中のトローリングボートが海賊に襲われたらしくて撃退したのだけど、念の為に救難信号を出したらいいわ」

「浜松警備保障ですか……………」

正直なところ、「自衛隊は民間人を守る」と言う建前を心から信じて疑わない愛にとって、浜松警備保障のサービスは自衛隊の領分を侵すものだと思っているが、

同時に直哉から聞かされた、「全てを守ることは不可能である」と言う実情も分かっている。

そんな事を考えていると、艦娘専用無線から通信が入って来る。

『こちら、旗艦アイオワ。周囲に敵影Nothing、Guardしながら戻るネ』

「こちら宮戸島本部、了解しまし……………護衛しながら戻る、ですか？」

『補給とトローリングボートの修繕に、寄港を求めているネ。何とトローリングボートには竹宮辰夫、カンナ親子が乗ってたネ』

「マジで!？」

竹宮辰夫は釣りが趣味の俳優で、娘のカンナはスーパーモデルとして活躍している。

愛は、そんなカンナの大ファンなのである。

『マジもマジ、大マジネ。カンナさんは、愛のことよく知ってて、中學生提督のサインを貰いたいと言ってたネ』

「マジで!?!私も、カンナさんのサイン貰いたいと思ってたんですよ」

雑談に入りそうになったが、艦娘無線だと言うことを思い出し、コホンと咳払いをする。

「りよおくかいです。出迎えの準備をしますので、浜松警備保障の皆さんと民間人の警護をお願いします」

「で、何で秋也さんもいるんですかねえ？」

宮戸島鎮守府の埠頭で出迎えに出ている愛は、然も「当たり前」のようにいる足立秋也に声を掛ける。

「ばっか、有名芸能人が来るからには、『東北管区の責任者』の俺が立ち会うのは当たり前だろう？」

「本音はどうなんですか？」

「ばっか、辰夫のおやつさんのサイン欲しいだけに決まってるだろ!?!」
「……………」

愛は、それ以上追及しないようにした。

もちろん、友人である健太達にも連絡したら、一同総結集である。

「芸能人に会えるなんて楽しみだなあ」

とは、健太の素直な感想である。

「カナナさんにサイン書いて貰えるように、帰りに色紙いっぱい買って来たわよ」

耀子は、もう既に色紙にサインを書いて貰うつもりのようなのだ。

「辰夫さんのヤクザ映画、個人的に好きなんだよなあ」

慎は、圭一から譲り受けた長ランのポケットに手をつ突っ込んでいる。

「カナナさんと言ったら、この間の女子向け雑誌のヌード」

「それな」

「だね」

ギャルズ達は、既にお目々キラキラ状態である。

「あれはセルフプロデュースで、自分で撮影も熟したらしいよお？」

「そうなんだ、へえ〜」

優花と寛太もその記事を見ていたらしく、仲睦まじく会話をしている。

「そうだ」

望が思い出したように、愛の耳元で囁いた。

「私達も撮ってもらおうよ」

「ええっ!?ヌードを!」

隣の健太共々、顔が真っ赤である。

ビスマルクも出撃していない為、誰も止めるヤツがないのである。

ワイキヤイしながら女子達が騒いでる中、慎は辰夫に会えるのを心待ちにしている。

誰もツツコミがない。

宮戸島艦隊のエスコートを受けて、幼体イ級達の護衛するトローリングボートが宮戸島にやって来た。

「皆さん、お疲れ様です。浜松警備保障の方には入渠と補給の準備ができています。トローリングボートの修理に業者を手配しましたので、終わるまでこんなところで恐縮ですが……」

愛が代表し、敬礼して出迎えると、デツキから竹宮カナナが飛び出して来る。

「貴女が笹野 愛ちゃんね!」

カナナは、愛をハグすると一歩下がり、竹宮辰夫も出て来る。

「テレビの中の住人」が、リアルにやって来る。

「娘は中学生提督の大ファンでね」

「そうよ、パパ。こんな小さいのに頑張ってるって聞いてたから、愛ちゃん、サイン頂戴ね」

「サインと言っても、こんなのしかできませんでしたけど……」

白紙の色紙と、自分なりに自らのデフォルメイラストを添えたサインを差し出すと、カナナはすぐにサインをして差し出す。

早速、サインの交換をしているのである。

「竹宮辰夫さん、お初にお目に掛かります。自分は、東北管区警務隊長の足立秋也陸准将補であります」

秋也は、普段のやる気ないオーラを隠して敬礼する。『借りて来た猫』である。

「これは、態々申し訳ない」

辰夫が手を差し出すと、ぐっと握手を交わす。

「あ、すみませんけどサインもらえますか？」

「ああ、いいとも」

借りた猫は、たった今死んだ。

場所を鎮守府に移すと、秋也と健太と慎が、応接間で辰夫を交えてヤクザ映画の話を男同士熱く語り合っている中、鎮守府の大テーブルではカンナを中心に女子会が始まっている。そこに公然という寛太は、気にはしていない。

「カンナさんは新しい彼氏とかいるんですか？」

ギャルズの望が、いきなりキラーパスを飛ばして来る。

「んー、今のところはいないかなあ」

「こらこら、プライベートをほじくり返したらだめじゃない。マスクミじゃないんだから」

ビスマルクがそれを軽く諫めると、ギャルズ達から、

『はあーい』

「よろしい。カンナさん、騒がしい鎮守府でごめんなさいね」

「ははは、いいのいいの。私、賑やかなのが好きだから」

そうあつげらかと笑って見せると、愛も笑顔になる。

愛とカンナはさつそく意気投合し、ラインの交換をすると、

「そうだ、今度私の友達とかも紹介するから」

と、モデル仲間のグループに招待を掛けてくれた。

「あ、ありがとうございます……いいのかなあ」

「いいのいいの、愛ちゃん読モ目指しなよ、可愛いから。ほら、艦娘のビスマルクちゃんだっけ……と一緒に。私がプロデュースしてあげるから」

「あはは、その話は大本営を通してから……」

「パパの知り合いに、広報のお偉いさんいるから、聞いてあげるね」

即断即決で、パパの知り合いとやらの東京地本部長の即決許可で、撮影しよう！と言うことになったのだ。

足立総監は頭を抱えるだろうが、カンナとしては知ったことではな

い。

そして、案件が副総監である直哉のところまで止まり、面白がって即OKサインを出したのも、カンナは知ったことではない。

「えええ……？」

早速海上自衛隊の制服に着替えると、カンナの手によるメイクアップが施され、女子達全員もエキストラで参加しての大撮影会が始まった。

執務机でペンを片手に上目遣いで見上げる姿や、港の埠頭で指揮をしている姿、終いにはちよつと際どいものまでシャッターに収められて行く。

それに、エキストラとして参加した女子勢と艦娘達、カンナ発案で女装させられた寛太の姿も華を添える。

鳳翔と伊勢は和装をしっかりと決めて、アイオワはアメリカン・ガールっぷりを見せ付ける。ビスマルクは凛々しく、

そして大井と北上は、仲良さをアピールする。
愛の友人達も負けてはいない。

優花と寛太は天然っぷりを見せ付け、ギャルズ達は自ら際どい撮影に喜んで飛び込んで行く。

耀子は、控えめに清楚な感じで写真に収まっている。

そして最後に、女子達でヌードを撮ろうというノリになり、男子禁制（寛太は除く）の鎮守府執務室になったのであった。

その間、辰夫等男達は岸壁釣りを始めていた。

「皆、楽しかったよ！ありがとう」

「慎くんと健太くんは、今度映画撮影においでよ」

娘と父親は、修復されたトロリーリングボートに乗って、宮戸島を離れて行く。

思い出の写真の一部……発刊できないものは、女子達（と寛太）のスマホに思い出として収まっています……

その後、笹野 愛ファースト写真集として、艦娘広報の一環として発売されるに至り、知名度が更に上がったのは言うまでもない。

もちろん、印税は皆で山分けである。

愛は、その後1ヶ月半ほど全国の地本に引っ張り回され、サイン会や講演会ツアーをすることになるのだが、

講演会の最後は四国を回ろう、と心に決めていた。

土佐鎮守府来訪く忍さんの迷いと葵たちの軌跡く

あのジレーネ戦役から、一年が経とうとしていた六月初旬。

大葉 葵の母忍は、未だに心乱れていた。

夫に先立たれ、娘をジレーネ戦役で失った彼女は、独りになっていた。

毎晩娘の夢を見て、精神が疲弊していた。

毎日、仏壇の娘の遺影を見ては暮らす日々を送っていた。

義理の妹でもある坂本龍子も、ちよくちよく様子を見に来ている。

精神科の受診も勧めて、この一年病院にも通っている。

そんな中で支えになっていたのは、甥の龍之介だった。

小学五年生になった彼は、毎週伯母の元を訪れて元気付けていた。

それでも、精神的に参ってしまっている忍は、最近では寝て過ごすことが多くなった。

見かねた龍子が、龍之介と一緒に訪れては家事を手伝う有様になっていた。

「龍子さん、私はいつ葵のところに行けるのかしら？」

そんな言葉が、彼女の絶望を物語っていた。

それでも、龍子は忍を励まし続けていた。

最初は「希死念慮」が強く、龍子が付きつきりになっていたが、一年経つと希死念慮から無気力へとなり、

世捨て人のような状態になってしまったのだ。

「そうね、義姉さんがおばあちゃんになったら逝けるかしら？そしたら、あつちで目一杯介護してもらいなさいな」

龍子は、そう励まし続けている。

「そうだよ、おばちゃんは元気でいないと、葵お姉ちゃん悲しむよ」

龍之介も、精一杯励まし続けていた。

「ところで、ジレーネ戦役の慰霊祭と笹野 愛平和祈念講演があるんだけど、貴女はどうする？」

「……………行く」

布団の中で忍は、せめて葵の軌跡を知ろう、と考えるようになって

いた。

足立秋也陸准将補は、「やり残した仕事」として、四国警務隊長に赴任した幸田美紅一佐と連携して、調査を続けていることがあった。坂本将補と葵の「不審な死」について調査を続けていたのだった。もちろん、円城寺や佐伯もその調査プロジェクトに関わっている。新しく作り直された高知駐屯地の執務室で執務をしていた幸田一佐は、足立秋也の訪問を受けていた。

「よっす」

「ああ、足立准将補。慰霊祭の為にしては、お早い高知入りですね？」
「代行を円城寺二佐に任せてあるからな。ちよつともう一人、プロジェクトに加えた人物がいてな」

そう言うのと、執務室の外に向かって声を掛ける。

「つけもん^{高菜}、入っていいぜ」

「お邪魔するよ」

大本営副総監……当初は「総監補」だったが、赴任と同時に副総監となった高菜直哉陸将補が入って来る。

すぐに幸田一佐は立ち上がるが、直哉はそれを手で制する。

「そのまま、そのままで」

「は、はい。それでは、お言葉に甘えて失礼します」

そう言う到着席する。

「坂本将補の暗殺案件ですが、調査の結果他にも「同時期に不審な死を遂げている」人物をピックアップしました」

秋也と直哉が執務室にあるソファに腰掛けると、美紅もソファに場所を移して、テーブルに積み上げた資料を取り上げると読み始める。

「全て、「当時の階級」で報告することを「ご承知置きください。まず九州からは、川内駐屯地司令の大久保一佐とその副官。そして、福岡駐屯地の司令兼第4師団副師団長の西郷隆史陸将補、幕僚長の黒田了一佐。中国地方からは第17普通科連隊長兼山口駐屯地司令である山縣朋樹一佐。それに、山口鎮守府司令官の木戸允孝一佐に副官の

伊藤博士二尉。他にも、尉官佐官合わせて士官数十名。全て「不審な事故死」として処理されています。傾向としては、四国・中国・九州の陸上実動部隊^{実カ}の中心人物が多く死んでいます」

美紅がスラスラと調査報告書を読み上げると、直哉はポツリと呟いた。

「まったく。幕末の維新志士に似た名前のやつが殺られたんだな」

「名前はともかく、全て「大貫派の急先鋒」だった人物です」

美紅の報告に、二人の将官は腕を組んで考え込んでしまう。

「大垣 守は何をしたかつたんだろうか？」

「そこな。大垣 守自身も暗殺されてしまった以上、訊く訳にも行かないしな」

「そこなんです。大貫……大垣前総監は何をしたかつたのか」

その美紅の言葉に、三人共黙り込んでしまう。

頃合いを見計らって、副隊長兼副官の軽巡洋艦球磨が、お茶を持って入って来る。

「宿題は順調クマか？」

「いやあ、暗礁に乗り上げているよ」

直哉が肩を竦め、球磨がお茶とせんべいを三人の前に差し出すと、秋也が口を開く。

「なー、お前等。俺はちよつと考えたんだけどよ。昨年の政変は『国民^{無血}による政府転覆^{ター}』に等しい状態だと思わないか？国民の圧力で解散総選挙が行われ、それを主導した高菜湊子が政権を獲得して、反艦娘派は国会から一掃された。ならば、この今の状況が「次善案」だとしたら、第一案として何を持って来る？」

『……………』

「『武力による』政権転覆……軍事クーデターか！」

直哉は、大垣 守の「真の狙い」に気づいて声を上げた。

「すると、犯人は自ずと見えて来る訳だ。犯人は、武力による政権転覆を良しとしない、大貫派内部の反クーデター派。あるいは、大貫自身が次善策を持ち出す為に、クーデター派を一掃したのかもしれないな。そうになると犯人は二人。「黒幕」はおそらく……………」

「あいつ等か……」

「……………しかし、立件するにも『証拠』がありません」

美紅の言葉に頷く。

「これは、仮説に過ぎない」

「そうだな、つけもんの言うとおりだ」

「……………」

沈黙が執務室を包み込む。

「結局、迷宮入りクマ」

球磨が溜め息を吐くと、三人が頷いた。

「わかったよ、足立総監には『一連の幹部自衛官連続不審死は、ジレーネあるいは旧政権の仕業』と報告しておくよ」

直哉は溜め息を吐いて、そう三人の顔を見回すと、三人も頷いた。

大葉 忍は、ジレーネ戦役での合同慰霊祭出席の為に、土佐鎮守府にやって来ていた。

土佐鎮守府の埠頭には、遺族や関係者が多数やって来ていた。

慰霊祭は滞りなく行われ、愛も祈念講演を緊張しながらも、きちんとこなした。

その中で、坂本や葵の活躍と死にも触れられていて、今まで忍が知らなかった自衛隊での葵の姿を、少し知ることができた。

寡黙だが仕事をきちんとかなし、よく坂本を補佐した優秀な副官だった。

講演が終わり、忍が帰ろうとした矢先だった。

忍は自衛官に呼び止められ、司令官執務室に招かれていた。

「大葉 忍さんですか？ 自分は、土佐鎮守府司令官の大塚 武一佐であります」

「……………はい」

「昨日、このような郵便が届いております、お渡しにお伺いしようと思っております」

『日付指定』の郵便である。宛先住所は土佐鎮守府、宛名が忍の封書である。

忍は封書を受け取ると、封を切り手紙を開く。

中には、こう書いてあった。

お母さんへ

この手紙を読んでいると言うことは、私はこの世にいないでしょう。

私と坂本提督は、ジレーネとの戦いに臨みます。この戦いが終わって日本が変わらなかつたら、私達は

同志達と、艦娘や深海棲艦と共生できる社会を目指し、クーデターを企てています。

ですが、その企ては未然に防がれるでしょう。

おそらくは、私達は政権側、あるいは大貫 悟によって暗殺されるでしょう。

ですが、誰も恨まないでください。

誰も憎まないでください。

そして、どうか私を『追わないで』ください。

お母さんには、お母さんのできることがたくさんある筈です。

私の願いを聞き届けて、年老いてこちらに来たら、精一杯介護してあげますから、それまで待っています。

葵より

「……………」

「『小官は何も見なかった』、そういう事にさせていただきます」

「はい。これは私の胸のうちに仕舞って、墓場に持っていきます」

大塚一佐がそう言うと、忍はポケットからライターを取り出し、その手紙を燃やした。

手紙は灰になって、灰皿へと落ちた。

「葵が決めて覚悟した死なら、私は葵の願いどおり生き抜くだけです」
「……………そうだな」

その翌日から、忍は精力的に動いた。

ジレーネ戦役の遺族達と交流を持って、遺族救済の組織を立ち上

げ、未だに家族を失って苦しむ人々に寄り添って、心を癒やす活動に尽力するようになった。

それから半月後の県議会選挙に出馬して、当選した。

いずれは国政に出て、〃野党として〃高菜政権をチェックする。

それが娘の願いだと信じて……

「あなたは今、何処にいますか？権力の座についているあなた方は、現場がきちんとして見えていますか？」

と言う演説文句と共に、大葉 忍は今日も戦い続けている。

着任！問題児

梅雨が過ぎた7月頃、漸く宮戸島鎮守府に基地航空隊が完成した。それと同時に、宮戸島に彼女がやって来た。

「ふっ、漸く着いたか………って田舎過ぎるじゃん!!何も無いじゃん！」

彼女の愛車である、赤いプリウスを降りた彼女の発した第一声がこれであった。

彼女の名前は大垣 翼。階級は三等空佐。

この度完成した宮戸島鎮守府航空隊長である。

「ばっか、〃住めば都〃って言うだろが」

「あつ、秋也、久しぶり」

「アホたれ、勤務中は足立一佐か隊長と呼べい」

「あいたっ」

当たり前のように鎮守府から出て来た秋也が、デコピンを喰らわせる。

おでこを押さえて蹲る翼。

しかし、直ぐに立ち上がり笑みを浮かべる。

「隊長は今日も宮戸島鎮守府に入り浸ってる感じ？」

「まあなー。大体、佐伯と円城寺がラブラブ過ぎて警務隊オフィスに居場所が無^ねえんだよ」

「そっかー」

そのままブラブラと海岸線を仲睦まじそうに歩いて行く2人。

「それで、2人の様子はどうなん？」

「ん？円城寺と佐伯か。同棲を始めたって聞いたな。近いうちに結婚すんじゃない？知らんけど」

「そっかー」

ふと翼が足を止める。

「ねえ、秋也」

「ん？何だよ」

秋也が振り向くと、翼は殊の外真面目な顔をする。

「……」

「どうした、翼らしく無^ねえな」

秋也が怪訝そうな顔を向けると、翼はにへらつと笑った。

「何でも無い」

「まあいいか。それで、住む場所はとうするんだ?」

「当分の間は艦娘寮でお世話になるかな」

「まあ、女だけの艦娘寮ならビス子の目の届く範囲だし問題無^ねえか」

「問題って?」

首を傾げた翼に、容赦無く秋也のデコピンが襲う。

痛そうに頭を押さえてしやがみ込む。

「だから痛いって!」

立ち上がり抗議をする翼に、秋也は腰に手を当てて、

「だから、お前の『男漁り』の件だ。幸田から苦情来てたぞ」

「えうー………だって、早々と暁とレーちゃんがパートナーシップ認定受けて持て余してる状態だったし」

「だからと言って『始末書の山』は問題だろうに。大塚司令官を困らせるんじゃ無^ねえよ」

真面目な顔で言うと、翼が少しムスツとする。

「女心に鈍感な隊長に言われたくないやい」

「……?」

「まあいいや。こんなド田舎で男漁りしたら噂も広がるしね、自重しようかな?」

「だから住めば都って言うだろ?通販もあるんだからさ」

秋也が諫めるように言うと、翼は軽く笑って、

「それもそっか」

そう頭に手を回して歩き始める。

「あー!翼さんだ!」

「お、翼お姉さん久しぶり」

ランドセルを背負って手を繋いで仲良く下校して来た真愛と拓くんが、二人の方へ駆け出して来る。

「お、真愛に拓坊か、久しぶり」

「おつす、今日も鎮守府で勉強か？」

軽く手を上げる翼と笑いながら2人の頭を撫でる秋也に、二人のちびっ子は、

「うん！ビス子お姉さんが勉強教えてくれるんだよ」

「そうそう」

と答える。

そんな仲良さそうな二人を見て、翼は少し羨まし気な顔をするが、直ぐににへらつと笑みを浮かべる。

「そっかー、それじゃあ行ってらっしゃい。後であたしも鎮守府に顔を出すからね」

「おう、しつかり勉強しろよ」

「はいっ！」

真愛と拓はまた仲良く手を繋ぐと、鎮守府の方に歩いて行く。

それを見送った翼は、良いなあと思いつつも“無い物強請り”は見苦しいか、と思い軽く溜め息を吐いた。

そんな翼の様子を見た秋也は、不思議そうな顔をする。

「どうしたよ、アンニユイな顔をしてよ」

「んー……………」

どう答えようか考え^{あく}倦ねていると、秋也が続ける。

「ま、そろそろ鎮守府に戻るかね？」

「あ、そうだね」

鎮守府に向けて足を進める秋也の背中に、

「この鈍感男」

と、ぼそりと呪詛の言葉を飛ばしてから追い掛ける。

鎮守府に戻ると、宮戸島鎮守府秘書艦のビスマルクが、ホワイトボードで算数を二人に教えて、

それを二人が真面目に勉強していた。

「よつす、ビス子久しぶり！」

「翼、お久しぶりね」

ビス子が入口に視線を向けると、翼はビシッと敬礼する。

「大垣 翼三等空佐、只今着任しました」

「お疲れ様。司令官は学校だから、そろそろ戻ると思うから一緒に勉強見てあげて頂戴」

「へいへい」

「それじゃ俺は仕事に戻るわ」

翼が真愛の隣に腰掛けると、秋也は拓の隣に開きつ放しのノートパソコンでカタカタと仕事を再開する。

暫くすると愛と愉快な仲間達がやって来る。

「ただいまー、ああ翼さんお久しぶりですー！」

「うん、久しぶり」

皆を代表して愛が挨拶すると、翼は軽く手を上げる。

皆が勉強している中、翼はギャルズ達と猥談で盛り上がっている。

曰く「昨日はどんなプレイをした」、等惚気話でもある。

「でねー、ラブラブなわけ」

「それな」

「うん」

三人の話を横で聞きながら秋也も仕事をしていたが、ポケットの業務携帯が鳴ると外に出て行ってしまふ。

そして、それを見送ると望がふと思い出したように訊く。

「翼さんは『好きな人』とかいないわけ？」

「好きな人かあ」

にへらつと笑うと、

「居るけど、気付いて貰え無いかな」

そう答えると望が、

「そうなんだ。これ、明石印の媚薬貰ったんだけど」

「誰に？」

「メルカリで買った」

そう答える望に、翼は一応「年長者」として釘を刺す。

「変なモノをネットで買わないこと」

「はい」

「それな」

「うん」

ギャルズ達がちゃんと聞いてるのか分からない返事をする、

「で、どうだった？」

「うん、朝まで寝かせて貰え無かったよ」

「それな」

「うん」

その言葉に、慎が会話に加わる。

「全く酷い目に遭ったよ。四人で足腰立たなくって、学校休んだからな」

「だって、足腰立たなくしたのは慎じゃん」

ギャルズ達を代表して、望が言い返すと翼はあははっと笑う。

「それで、好きな人って誰なん？」

「それはですね」

その言葉に、執務室で仕事をしていた愛が悪戯っぽい笑みを浮かべて立ち上がり、櫻子の隣に座ると会話に加わる。

「足立一佐のことが好きなんですよ」

「愛ちゃん!?!」

少し照れて慌てる翼に、丁度秋也が戻って来る。

一斉に視線が秋也に向いた。

「何だ？俺の顔に何か付いてるか？」

「ねえねえ、隊長は好きな人いるの?」

代表して望が秋也に問い掛けると、秋也は椅子に腰掛けながら、
「おう」

とだけ答える。

翼は「自分以外だ」と思って、少し残念そうな笑みを浮かべる。
しかし、ギャルズ達は更に踏み込んで来る。

「誰?」

「それは秘密だな」

「何で?」

「ばっか、俺はもう40しじゅうだぜ。そんな『売れ残り物件』誰も欲しがら無ねえって」

「そうかなあ?」

「そうだよ。『お子様』には未だ判ん無ねえって」

ふつと笑みを浮かべる秋也は仕事に戻る。

翼は、はあーつと溜め息を吐いた。

バリフリ！ Barrier free Life

時間を遡ること4月の始め。

熊崎正志陸准将補は、釧路鎮守府の司令官職及び北海道地区統括責任者である。

そんな彼は、自己の職権を利用して脱柵した摩耶や多摩の支援を行って来ていた。

国家承認までのデスペランとの折衝も非公式に担当していたが、今やそれも外務省に移管されてしまった。

艦娘も、天龍・龍田が除隊してしまった為、秘書艦の不知火しか居なくなってしまう。

釧路漁港の近くに在る釧路鎮守府では、熊崎提督による新たな取り組みが行われようとしていた。

南三陸鎮守府が設立した“継続型就労支援作業所”を釧路鎮守府にも持って来ようと言う計画だった。

「とは言え、障害を持った皆さんに何のお仕事をお任せすれば良いものか」

「そうだね。まずは、この鎮守府の機能を確認しておこう」

熊崎提督と秘書艦である不知火は、この釧路鎮守府の現状を再度確認した。

所属艦娘無し、補給基地としてのみ機能している。

それでも釧路鎮守府が廃止にならないのは、足立総監と高菜副総監の配慮でもある。

しかし、そればかりに頼る訳にもいかない。

「鎮守府として〃は機能してないですね」

「そうなんだよね」

「……………申し訳有りません」

申し訳無さそうにしている不知火の頭を優しく撫でる熊崎提督に、少し照れた表情をする不知火

「君が申し訳無さそうな顔をしなくていいさ。それより、今の鎮守府の仕事を洗い出してみよう」

「はい」

「不知火、そつちは君に任せてもいいかな？」

「はい、落ち度無くやります」

不知火は、釧路鎮守府の全業務リストアップを始めた。

それと同時に、熊崎提督は必要なスタッフを洗い出していた。

継続型就労支援作業所に必要な人材として、まずは管理者、サービスマン管理責任者、職業指導員、生活支援員が必要となる。

そのうち、管理者とサービスマン管理責任者は資格が要る。

そのなり手も探さなくてはならない。

困った熊崎提督は、不知火を伴い武藤提督の南三陸鎮守府に向かうことにした。

「……………と言う訳ですが」

「成程のお」

「そういう事ですか」

南三陸鎮守府の応接室で、武藤 廉提督と弟で代表の武藤晋也社長が並んで座っていた。

晋也は腕を組み考え込むと、

「管理者とサービスマンについては、こちらで手配しましょう」

「え、宜しいのですか？」

「はい、北海道にも伝手は有りますので」

「良かったのお」

「ありがとうございます」

熊崎提督が頭を下げると、不知火もぺこりと頭を下げた。

暇を持て余していた釧路鎮守府の、大忙しの日々が始まった。

釧路鎮守府の主な業務は浜松警備保障やデスペラン、近隣の鎮守府の艦娘や深海棲艦の補給や補修である。

障害を持った方々には、簡単な作業をお願いした。

社長には、大本営の許可を得て熊崎提督が就任し、資本は 〃大本営

が出資する”という形になった。

これは、高菜直哉陸将補副総監のや足立陸将総監の尽力でもあった。予算関係で、防衛省に働き掛けてくれたのだ。

管理者の後藤さん、サビ管の藤崎さんと共に艦娘を出迎えたり補修をしたり。

仕事の無い時には、内職の仕事を近隣の製作所から貰って来ては仕事をして貰った。

不知火には、将来の管理者を目指して職業指導員に就任して貰った。

それと同時に、不知火には福祉系の専門学校へ特例入学をして貰い、行く行くは社会福祉主事にもなって貰うのだ。

時は流れて7月。

不知火は、勉強をしながら内職の指導をしている。

最近では利用者さんも増えて来て、30人の大所帯になっていた。それと同時に、指導員として参画するスタッフさんも増えて来ている。

そんな中、見張り番の利用者さんが車椅子を動かしてやって来た。

「不知火さん、浜松警備保障浜警さんが入港します」

「そうですか、一旦作業は止めましょう。皆さん、補修と補給ですよ」
『はいー！』

不知火の号令の下、入港して来る艦娘達を出迎える。

初海率いる浜松警備保障の面々が入港すると、艦装を利用者さん達に預ける。

その間に食堂でお昼を食べる。

この食堂も利用者さん達の運営なのだ。

食堂の片隅で、初海と不知火がコーヒーを飲んでいた。

「今日も皆さん、生き生きと働いてますね。今度、社長が新たな事業展開の参考に顔を出すと言っていました」

「そうなんです、ありがとうございます」

初海は今、北海道支社長に就任していた。

イロハ級の代表として、また“管理職”として経営に参画する立場なのだ。

浜松警備保障も今や全国規模になり、取締役三限・最上・曙トリオも浜松から各支社をコントロールする立場へと移って行ったのだ。

そんな理由わけで、姫鬼の深海棲艦も各支社長として各地に赴任していった。

流石は“海洋警備のトップ企業”に上り詰めただけは有るのだ。

そんな中、初海と不知火は友人になっていた。

よく釧路鎮守府を利用して補給を行っている間柄である。

「そういえばお子さんは？」

「その、もう少し待とうと言うことになりました……………今はお仕事を優先すべきだと」

「そうなんですか……………私はそろそろ産休かな？」

顔を赤らめながら指をツンツンする不知火に、初海は（初々しいな）と思いながら話を聞いている。

そんな彼女の左薬指には、指輪が填められていた。

見た目は子供だが、今年の春に結婚したばかりの新婚さんなのである。

そう言った意味でも新婚さん仲間である。

本名篠井初海として戸籍登録し、子供も既にお腹の中にいる。

五倍の速度で成長する為、少し膨らんだお腹を擦りながら答える。

「そうなんです、可愛い赤ちゃんが生まれると良いですね」

「そうですね」

二人は笑みを零した。

色々トラブルも有るが、その都度南三陸鎮守府の事業所の皆や福祉関係に色々頼っては成長して行く事業所となったのだ。

国防軍への道

艦娘国民会議は、7月に行われた参議院議員選挙で過半数を獲得した。

名実共に、艦娘国民会議が安定政権を樹立したのだ。

それと、大葉 忍が最大野党・民自党から出馬して当選を果たしていた。

三友優衣は法学者と共に毎日改憲案の検討を続けていた。

40歳の幹事長は多忙を極めていたのだ。

夫である龍太郎は、社長業を一旦セーブして育児に家事にと大忙しである。

それは、党首である？菜湊子も一緒だった。

「最近、根を詰め過ぎではないか？」

夫婦の時間も削って法律の勉強をしている湊子を見咎めて直樹が問うも、首を横に振る。

「今が正念場なのです、頑張りませんと」

「……湊子」

直樹は、布団の中でも法律書を読み耽っている湊子の手から本を取り上げると、そのまま抱き寄せた。

「あつ」

「今は『夫婦の時間』だ。ちよつとは休んでも罰は当たらんだろう？」

「直樹……」

夫婦の夜が更けて行った……

8月になって、漸く国民投票が行われた。

憲法九条を改正して、『国防軍設置』が明記されたのだ。

日本国防軍は、『深海棲艦や海の脅威から国を守る機関』として、国民投票で圧倒的多数の賛成を経て認められたのだ。

自衛隊から国防軍へと変わった。

反対勢力のデモも相次いだ。大貫の告白で『目覚めた民衆』が投票に行った結果なのだ。

「これで、一部勢力から難癖イチャモンを付けられることも減るだろう」
「そうですね」

その頃、大本営では？ 菜直哉中将与足立昭彦大将がそんな会話をしていた。

二人共、大本営の「新しい軍服」に身を包んでの執務である。

「まあ、大本営も第4軍になりましたからね」

「うむ」

大本営は、「軍艦組」の海軍から別れた「独立した軍」として定義されたのだ。

それにより、大本営の人間は全員移籍となった。

笹野 愛は、「特例」として大佐の階級が与えられた。

「それで、私が40で中将になれたのも大貫 悟のせい一所為いですね」

「全くだ。まさか、私も大本営幕僚総監になるとは思わなかった」

足立は、肩を竦めると書類仕事を続ける。

直哉は同じく書類を眺めている。

大本営幕僚副総監も暇な仕事ではない。

視察に書類仕事にと大忙しである。

特に、「深海棲艦事案」や「海賊艦娘事案」が無くならない限りは必要とされる為である。

因みに、電は現在絶賛産休中である。

「足立さんは来年引退でしょう？ 大貫……………いや、親父の「政治は娘に、優衣経済界は長兄に、直樹軍事は弟に」と言う野望がいよいよ現実味を帯びて来た訳だ。いやあ、めんどくせ面倒臭い」

「先輩、そしたら副官は私がやりますからね」

副官デスクで仕事をしている七原秋奈少佐がからかい半分で声を掛けると、直哉は苦笑いを浮かべる。

「大本営幕僚総監軍のトップになったら、きちんと仕事をして貰わなければ。宮戸島での仕事振りは、常々電から耳にさせて貰っている」

「電め……………」

お台場鎮守府の司令官代理を薄雲に押し付けて、悠々と家で産休中

のなのです顔の妻の顔を思い浮かべながら、直哉は更に苦い顔になる。

「電め、ではない。私がいなくなったら、どう仕事をするつもりなのだよ？ いや……再任用で居座るのも悪く無いか」

「勘弁して下さいよ、足立さん」

「冗談だよ。君は〃やるべき時は真面目にやる〃事は分かっている」

「先輩は〃必要に迫られない〃と本気を出しませんからね」

「全く、二人して……」

直哉が大きな溜息を態とらしく吐くと、足立親子はふふつと笑った。

薄雲の奮闘記く海賊の脅威く

夏休み真つ只中の8月。

薄雲は、お台場鎮守府の司令官代理を務めていた。

妊娠した電が早々に産休を取ってしまい、家でぬくぬくしている代わりに

粛々と仕事をしている。

三高ワンダーランドの来場客に演習を見せたり、艦娘交流会等もお台場鎮守府の担当である。

そう言った企画立案や三高ワンダーランドとの折衝も行わなければいけない。

……とは言え、電は普段から紅茶を飲んで昼寝ばかりしている為、通常の業務はほぼ全て薄雲がやっている。

国防軍に改組して、少佐の階級を持つ高級士官なのだが、夫に似て〃余り仕事をやりたがらない。

薄雲はそんな日々を過ごしていた。

今日も仕事を片付けると、待っていた僚艦の卯月と子日と共にお台場に在る三友地所のレジデンスに帰宅する。

「ただいま」

「お帰りなさいなのです」

「お帰りなさい、お疲れ様」

お腹の少し大きくなつた電と直哉が出て来る。

「支度は出来てるからね、そろそろ夕飯にしようか?」

エプロン姿の直哉がそう言うと、皆でダイニングに移動する。

ダイニングのテーブルには直哉の手料理が並べられており、どれも美味しそうである。

産休とは言え、直哉が家事も卒無く熟こなす為、電は家でものんびり紅茶を飲んでいる。

夕飯が終わると、薄雲は書斎で直哉と打ち合わせをする。

広報の関係等は、直哉に決裁を貰わなければならない為である。

「うん、薄雲が良いならそれでいいよ」

「分かりました」

薄雲はこくりと頷く。

薄雲は、最近イメージチェンジをして髪を染め、ポニーテールにした。

電達は可愛いと言っているし、それには直哉も同意だった。

そんな毎日だった。

薄雲の艦隊運営は平和そのものだった。

「おいつすー!」

「今日からお世話になるわね」

と言う言葉と共に、レ級と暁が転属して来なければ……………。

これは「深海棲艦との交流もするべきだ」という防衛省上層部からの案件なのだが、

どうも人選が噛み合っていない。

^{そもそも}抑も、軍に入っている深海棲艦の数が極々僅かに限られている上、土佐鎮守府の深海棲艦達は「土佐を離れたくない」と拒否したのだ。

土佐の地には戦艦水鬼が眠っている。

悲しくもあるこの「思い出の地」を離れるのを嫌がったのだ。

しかしレ級は、

「はいはい、東京行く!」

とあっさり承諾して、暁もストップパーとして承諾したのだ。

そして大塚中佐も、「そんな問題児が手を離れるなら」と、喜んで東京行きを認めたのだ。

そんな平和な毎日の中、一通のFaxファックスがお台場鎮守府に飛び込んできた。

曰く、『三高ワンダーランドを爆破する』と言うものだった。

Faxファックスを見た、秘書艦代理の卯月が顔を真っ青にした。

「たたたた大変だぴょん!爆破予告だぴょん!!」

「ふむ、爆破予告ですか……………」

こんな時でも、薄雲は冷静である。

直ぐに三高ワンダーランドに連絡を入れ、臨時休園にして貰った。

この夏の掻き入れ時に迷惑千万なのだが、三高ホールディングスCEOの？菜直樹直々にこの決定を下し、警察や軍の爆発物検査を受け入れたのだった。

それと同時に、薄雲達お台場鎮守府には警務隊本部の副長中井大佐より捜査が命じられた。

「捜査と言っても、手掛かりはこのF a xファックスだけですが……」

お台場鎮守府では、会議が行われていた。

「如何にして犯人を捕らえるか？」と言うものだった。

幸いにも爆発物は発見されたが、魚雷改造爆弾と言う「艦娘由来」の爆弾だった為に、真つ先に疑われたのが「海賊化した艦娘」である。

あの『大貫の告白』………大垣 守の命を賭した演説により、「嘗ての自衛隊の在り方」を見限って脱柵した艦娘達は少なからず存在していた。

多くは、ソマリア沖等で商船を襲う普通の海賊をやっているが、こうして海外からテロリスト紛いの行動をする連中も無くは無かった。

そう言った、国防軍や浜松警備保障乃至は、デスペランに所属しない艦娘・深海棲艦達は、今だに日本の国防や海運を脅かしている。

そんな中、横須賀鎮守府の叢雲から通信が入った。

「こちら、横須賀第十三艦隊旗艦叢雲！た……大変よ！どうぞ!?!」

「何が『大変』なのですか？どうぞ?」

「く、クラーリン級が大量に暴れてる、お台場に向かっているわ!!どうぞ!?!」

「なっ!?!」

まさかデスペランでは?と思っただが、そんな筈は無い。

薄雲は絶句したが、直ぐに冷静さを取り戻した。

「兎も角出撃します。どうぞ?」

「ええ！頼んだわ、どうぞ!?!」

「………と言う訳で、緊急出撃です」

「クラーリン級とか、良い思い出が無いぴよん」

「全くだよ」

「〃無敵モード〃 じゃ無いと良いけどね、まあ〃殺^ヤるだけだけど」
「そうね」

五隻の艦娘達が、そう言いながらお台場の埠頭に降り立った。

そのまま海上にて艦装を展開すると、沖へ向かって走り出した。

お台場沖東京湾内では、第13艦隊の叢雲改二と量産型いなづまちゃん改二5人がクラリーン級深海棲艦と激闘を繰り広げていた。

相手は沈むものの、数が多過ぎて止め切れない。必死に応戦しているが、既に何匹かは突破されてしまっている。

「くっ、数が多過ぎるのDEATH!」

「弾薬が足りないのDEATH!」

「一旦撤収よ!! 艦隊解散、各自のルートで横須賀に撤退するわよ!」

「了解なのDEATH!」

丁度、蜘蛛の子を散らすように撤退した第13艦隊と入れ替わりに戦場にやって来たお台場鎮守府艦隊。

『うわあ』

全員が、同時にこう漏らした。

暁は、先の艦娘大戦を思い出して身震いしていた。

海上は、大量のクラリーンと沈めたクラリーンの残骸が漂うカオスな状況になっていたのだった。

「兎も角、各自クラリーンを各個撃破します、急いで!」

薄雲の指示により、各艦がそれぞれの戦場へと向かって行く。

最近は、一隻一隻が実戦から遠離^{とわぎ}ったとは言え、百戦錬磨の猛者^もである。

薄雲は、直哉とシミュレーションをして5回に1回は勝利できるようになっていた。

直掩に就いた子曰と共に、突破してきたクラリーンを処理する。

当初は優勢だった戦況も、次第に劣勢になって行く。

無限に湧き出ると、今までの決め手だったアイキャン⁸⁰三連^{cm}装^{三連}装^装を
持ち込んでいないのも一因である。

アイキャンフライ砲は、〃威力が高過ぎる〃のと〃高コスト過ぎる

“ という理由で統幕ルートから装備禁止が言い渡されていたのだ
た。

その頃、お台場沖合では真愛と拓がイチヤイチャしていた。

バナナボートに乗って救命胴衣を身に着けた拓と牽引している真
愛は、三高ワンダーランドから沖合に出ていたのだった。

「海綺麗だね！」

「おう、綺麗だな」

「ここまでできたら。パパやママ達の “邪魔” じゃないよね？」

「おう、そうだな」

夏休みに、愛&健太両親が三高ワンダーランドで倶楽部の面々と落ち合って
遊んでいるのを遠慮して、二人で遊んでいるのだ。

「拓、ちゅーしれ」

「おう」

くるりと振り向いてキスをしようとした瞬間、目の前にドボンと
水柱が立った。

「うわあっ!!」

「きやあっ!!」

吹き飛ぶバナナボート。

海に投げ出される拓に悲鳴を上げる真愛。

真愛が振り向いた先には、駆逐艦東雲がいた。

「な、何するんですか!？」

「女の子がこんなところで、確か……………大石真愛。人質にすれば、大
本営から身代金がふんだくれるわね。テロよりは効率的ね」

「海賊……………!?何故こんな所に!それより拓!？」

警戒しつつ後ろを向くと、拓は救命胴衣でプカプカ浮かんでいた。

「俺は大丈夫だ!それより海賊を追い払って!」

「うんっ!」

真愛がキツと睨むと、瘴気が纏わり付いて姿が駆逐新棲鬼に変わっ
て行く。

「くっ、この圧倒的なプレッシャー……………私だって四国で生き抜いたんだから!」

「バナナボートとイチヤイチャタイムを……………返せえっ!!!」

後々何度も戦いを繰り返すことになる、百戦錬磨の海賊・東雲改二と駆逐新棲鬼が初めて激突した瞬間だった。

薄雲は、撤退か交戦継続か悩んでいた。

的確に指示を出しながら、ちよつとずつ後退して行く。

レ級改二F フラッグシップ Sや暁は、日頃から訓練を怠っていない上にビーストハンターでもある為、クラーリン級を千切っては投げしているが、持ち場を離れられずにいた上に、卯月は明らかに日頃の訓練不足が目に見えていた。

「あうっ!!!」

「うーちゃん!今行くよー!」

集中力が切れた卯月は、中破まで追い込まれていた。

その瞬間、子曰が勝手に直掩を離れて卯月を助けに行ってしまった。

「子曰!!」

その直後、飛び出た子曰に直撃弾が飛んで来なことに気付いた。

薄雲は急加速すると、子曰を突き飛ばした。

ズガアン!!

『薄雲!?!』

「……………未だ大丈夫。それより子曰、卯月を頼みます」

「で、でも……………」

「早く行って下さい!!」

「う、うん……………」

子曰は、何度か振り向きながらも卯月の方へ向かって行く。

大破状態の薄雲は何とか立ち上がると、半壊のレーダーで敵の発生源を探っていた。

何体かクラーリンを沈めながら、意識を集中してレーダーの観測結果を辿る。

「……………ここだ」

その直後だった、複数の砲弾が薄雲に向かって来たのは。

「しまっ……………」

「薄雲————っ!!」

「ごめんなさい、直哉」

ズガァン!!

薄雲は、沈んだと思い目を閉じた。

そこには、量産型いなづまちゃんズが立ちはだかっていた。

「間に合ったわね!大丈夫!」

「叢雲さん……………」

第13艦隊が補給を終えて戻って来たのだった。

「しかし、早過ぎます」

「途中で浜警の艦隊に弾薬を分けて貰ったのよ」

「成程……………叢雲さん、クラーリンの湧き出るポイントが見付かり

ました」

「分かったわ、そっちに向かうわね」

第13艦隊を見送ると、再び意識を戦場へと集中した。

数時間後、漸くクラーリンを片付け終わった。

「ふう……………」

「薄雲!」

「大丈夫ぴよん!」

緊張の糸が途切れてふらっと倒れ込む薄雲を、子日と卯月が抱き抱えた。

薄雲は薄目を開けて、

「訓練不足ですね……………」

「ごめんね、子日が遊び呆けてたから」

「卯月もワンダーランド通いがアダとなったぴよん」

「私も、もっと指揮の勉強をしないとイケないですね」

暁とレ級に守られながら、両肩で子日と卯月に縋りつつ帰還すると、直ぐに入渠する事になった。

全員で入渠を終えると、薄雲は眼鏡を掛けて書類仕事に戻った。

「今日も生き残れました」

そう最後に日報に記載して、パタンと閉じる。

顔を上げると直哉と電、それに卯月に子日が待っていた。

「お疲れ様」

「お疲れ様なのです」

「お疲れだぴよん！」

「お疲れー！」

少しびっくりした顔をしてから、ふっと笑みを零すと立ち上がり、「お待たせしました、帰りましょう？」

そう声を掛けて、皆の元に向かう。

そして直哉に抱き付くと、皆で薄雲を抱き返す。

「なんだ……………」

——皆手に入ってたじゃないか……

薄雲は、「欲しい物は全部手に入ってる」と実感していた。

それいけ浜松警備保障！〜三隈の結婚生活〜

時は遡り、5月のことだった。

三隈はこの半年で全てを浜松からこなすことに限界を感じていた。そこで、会議を連日開いて打開策を模索していた。

「さて、どうしようね？恵美ちゃん」

社長室には仏壇が置いてあり、一人の少女の遺影と位牌が飾られている。

裏の警務隊時代に保護して、そして殺されて喪った少女である。

その遺影に語り掛けると、再び書類に目を落とす。

コンコン

「はい、どうぞぞ〜」

扉が開かれるとそこには飯村規、三隈の夫がいた。

「あれ、あなた、お迎え？」

「うん」

「ありがとう、もうちよつと待ってて」

「そう言えば煮詰まってるんだって？」

「なんで？」

「彰くんから話を聞いてね、困ってるって言ってたけどどうしたの？」

「ああ……………なるほど」

彰…………篠井彰は商工会議所の職員で青年会議所にも関わっている。

年齢は32歳。GWの街コンで初海と意気投合して結婚した初海の旦那様だった。

恐らく初海から伝わったんだらうなと思いいい奥様だなと軽く笑う。

「そうなの。どうしようかなって思ってたね」

「全国に支社を作るってのは？」

「支社かあ……………」

三隈は暫し考え込んだ。

確かに、姫や鬼を支社長に各地区に分散させれば全国をカバーできるかもしれない。

そう考えた三隈は早速翌日の重役会議にかけようと思い、重役グループに連絡を送る。

「それより、香奈も歩も待ちわびてるから帰ろうか。もう午後7時だよ」

「うん、そうだね」

香奈とは二人が養子に迎えた中学生の女の子である。年齢は愛と同じ14歳である。

両親は四国の艦娘大戦で死亡しており、親戚のいる浜松にやって来たのだった。

養父から性的暴行を受けていて、妊娠までしていた。

発覚したときには墮胎不可能な所まで妊娠が進んでいたのだ。

養母はそれを見て見ぬ振りをしていたが、香奈が家出をした際に三隈に保護されて、そのまま養子に迎えたのだった。

規が無精子症で子供は諦めていた矢先の出来事だった。

勿論養父母は警察によってお縄になっている。

そして歩は養子に迎えたあと出産した三隈や規にとっては孫となる男の子であり、まだ乳児である。

三隈は浜松警備保障の本社から少し歩いたマンションに住んでいた。曙や最上も同じマンションに住んでいる。

家に帰ると赤ん坊を抱えた制服を着た女の子が出迎える。

「お帰り、三隈ママ、パパ」

「ただいま」

「ただいま」

「ただいま」

飯村家のルールとして家族全員で夕飯は協力して作るというものがある。

そのため、3人で仲良く和気藹々と夕飯の用意をする。

そして、食事が出来る上がる頃に香奈はベビーベッドから歩を抱きかかえると母乳を与える。その姿は幼いながらも母親の慈愛に満ちた

姿で三隈や規もそれを見ると養子に迎えて良かったと思っていた。

『いただきます』

ゲップをさせて赤ちゃんが再び眠ったところで3人も夕飯となる。夕飯を食べながらそれぞれの話をしながら夕飯を食べるのがいつもの事になっている。

「今日の授業はねー……………」

香奈が楽しそうに学校生活を語り始める。

シングルマザーとなつて仕舞つたものの、いじめの対象になる事はなく、むしろ学校に行きだしてからは明るくなっている。

両親を失い、養父に暴行を受けて軟禁状態になっていたあの大战から1年が経過していた。

歩は学校に行っている間は規が面倒を見ているし、臨時のベビーシッターも雇つて指導を受けている。

最初は学校に行かずに香奈が育てると言つたものの、規と三隈は揃つて反対した。

学校生活は送るべきだという二人の思いを知つた香奈は感謝しながら学校生活を謳歌しているのだ。

出合いは寒さの残る2月の事だった。

2月のある日。

病院からの帰りだった。

規は無精子症と診断されて失意の帰宅だった。

「大丈夫よあなた、二人で仲良く暮らせば良いから」

「ごめんね、三隈……………」

規はいつになく落ち込んでいるが必死に三隈が励ましていた。

そんな二人が空気をさしかかったときに一人の少女が体を丸めようなくまっていた。

頭には白い雪が積もっていつとこの場所にいることが分かつた。

「あなた、あの子……………」

「うん、ちよつと声をかけてみようか」

近づいて声をかける。

「ねえ、そのあなた」

「……………だれ？」

「!?」

顔を上げた女の子の姿を見て三隈と規は絶句した。

お腹が明らかに膨らんでいたのだ。

「……………ねえ、幾つ？」

「……………13」

その答えに顔を見合わせた。

「とにかく、うちでご飯でも食べなよ。こんな所にいたら死んじやうよ」

「……………お礼はやっぱり抱かれること？」

「えっ…………」

「叔父さんがいつもしてるから……………」

「そんな……………そんなことはしないよ、絶対に！」

「そうなの？」

「お名前は？」

「西村香奈……………」

「とにかくあなたは私達が保護するから」

三隈が力強く言う少女——香奈の手を引いた。

家に連れて帰るとすぐに警察に通報して香奈をお風呂に入れると身体中に虐待のあとがあった。

三隈は絶句した。

「これは……………」

「叔父さんから縛られたりしてた。住まわせてもらおうお礼だから」

「……………」

三隈は苦々しい顔をしながら香奈の身体を洗ってあげる。

その間香奈は身の上話を始めた。

両親が艦娘大戦の被害にあって死んだこと、親戚の家で色々な暴行を受けていたこと。

途中から涙声になって最後は三隈に抱きつき泣き出した。

その間に規は夕飯の支度を始める。

香奈が眠ったあとにリビングで二人で考え込んでいた。
香奈をどうするかである。

「このままだと養護施設に入ることになるね」

「でも……………」

「三隈の言いたいことは分かる。でもね……………」

「いいえ、香奈はうちで引き取るよ」

「……………本気なんだね」

「うん」

「三隈が言うなら僕も喜んで父親役を買って出るよ」

翌日すぐに浜松市役所の福祉課に赴いて養子縁組の手続きに入った。
結果は否であった。

しかし、それくらいで諦める三隈ではなかった。

すぐに村上有紀に連絡を取ったのだった。

「もしもし、お久しぶりですの」

「ああ、有紀さんお久しぶり」

「それで、どうしましたの？」

「実は……………」

三隈は事のあらましを話したのだった。

「うふふふ……………その強姦野郎は始末しても良いですか？」

「い、いえ警察に任せようよ」

「それもそうですね、わたくし達はもう仕事人ではありませんもの」

「そうそう」

「ともかく湊子様のお耳にもお入れますね」

「お願い、頼むよ」

翌日その判定が覆り、特別に養子の許可が下りたのだった。

あとから聞いた話では、湊子が直々に浜松市役所に掛け合ってくれたのだった。

香奈が楽しそうに学校生活を語ってるのを見ると二人はそれを思

い出しながら

明るくなつたなど二人で顔を見合せて笑うのだった。

子供は出来なくても可愛い子供や孫に囲まれて三隈。

そんな四人を見守るように恵美の遺影が部屋に飾られている。

ああ、幸せだなと三隈は実感していた。